

平安京左京北辺四坊

—第1分冊（公家町形成前）—

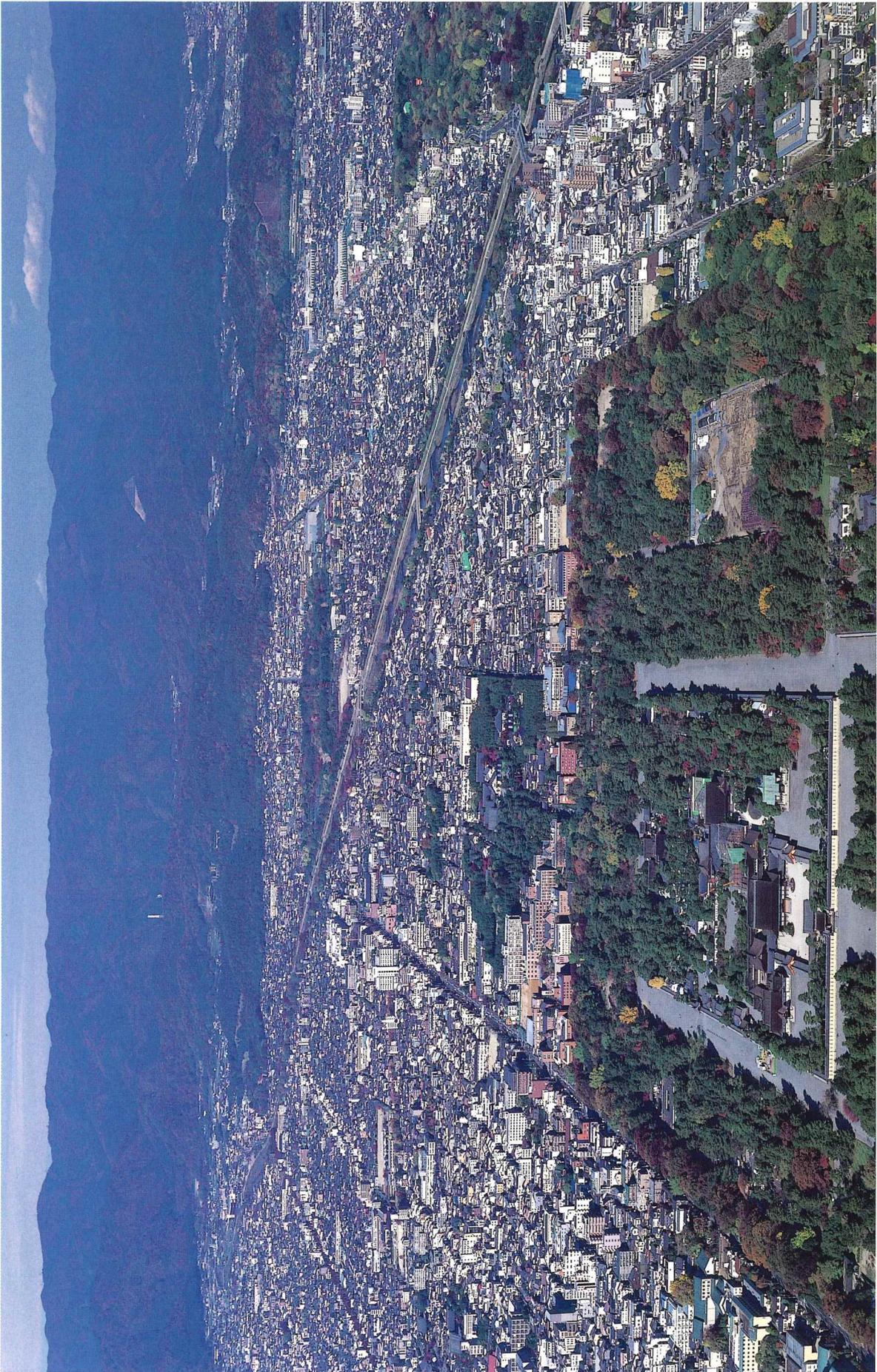
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

2004

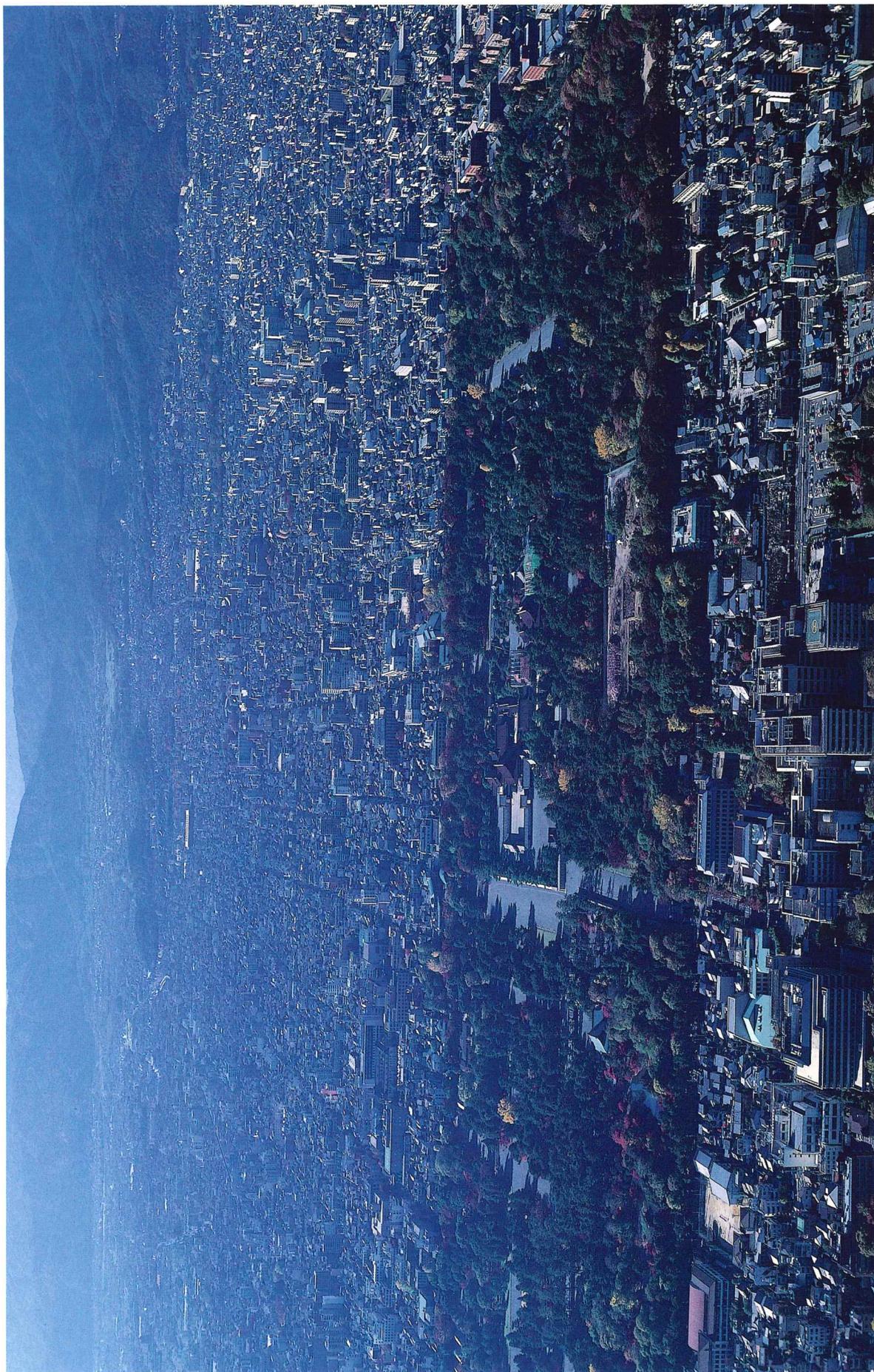
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



調査地と平安京条坊



京都御苑上空より（京都御所の東が発掘調査区、南から、2000年11月29日撮影）



京都御苑と市街地（東から、2000年11月29日撮影）



1 F区・G区調査風景（南東から、2000年6月29日撮影）



2 G区・H区調査風景（東から、2000年11月29日撮影）

平安京左京北辺四坊

—第1分冊（公家町形成前）—

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

2004

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

閣議決定にもとづき総理府（現、内閣府）と建設省（国土交通省）が京都迎賓館の建設を計画し、京都御苑内、京都御所の東に隣る地を建設予定敷地にあてられた。この地は古く平安京の条坊の左京北辺四坊五町から八町、一条四坊十六町に該当し、近世には内裏や院御所の周辺に集住した公卿衆の屋敷町即ち公家町がつくられ幕末まで長く存続したが、明治初年東京遷都に伴い公卿は東京へ移りその屋敷群は撤去されて公園に転じた。

この由緒と歴史をもつ土地であるところから、事前の発掘調査について京都御苑を監理する環境庁（現、環境省）と建設省、そして京都市埋蔵文化財調査センターの間で協議がもたれ、その内容にもとづき財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施した。

本報告書は平成九年から同十四年の六か年にわたり実施された発掘調査の経過ならびに調査遺構と遺物などの成果をまとめたものであり、二分冊からなる。第一分冊は近世初の公家町成立以前の古墳時代から古代そして中世末にいたる時期を扱い、第二分冊は公家町成立後近代までを扱っている。

建設予定地の面積は約10,000m²であり、平成九年の試掘調査に始まり、平成十年から同十三年にかけて本調査そして平成十三、十四年のインフラ整備に伴う調査に大別され、さらに調査区分により七次に分れる。

本報告書第一分冊の内容は本文が六章からなり、調査経過、調査地の位置と環境、基本層序、遺構、遺物および公家町形成前までのまとめについて詳述し、図版は遺構、遺物を図と写真で186ページに収録している。第二分冊は本文六章と四付章からなり、公家町の歴史と宅地割、遺構、遺物、立会調査の成果、まとめおよび発掘調査の成果と課題を論じており、付章では出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎調査および化学分析、出土漆器資料の材質と制作技法に関する調査、動物遺存体の分析を報告する。そして図版は二冊からなり135ページのカラー写真とモノクロ写真そして452ページの図で遺構と遺物を収録している。なお、遺物の図版のうち絵付陶器をカラー写真を組合せて実物をみるに等しい新しい表現手法を摂り容れている。また、別添の付図7点は時代別遺構配置図である。

なお、本報告書は本研究所報告書第22冊として公刊するものである。

多年にわたる調査の実施ならびに成果の作成刊行の諸過程において多くの関係者各位のご指導とご支援をいただいたことに厚く感謝の意を表します。とくに総理府、建設省の関係者各位には終始かわらず多くのご協力をいただいたことに感謝申し上げます。本書の内容に関してご意見あるいはご批判をお寄せ下さいますようお願いいたします。

平成16年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成9年度（1997）から平成13年度（2002）にかけて実施した、京都迎賓館（仮称）建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査地は江戸時代の公家町に該当する。報告書では公家町形成前を第1分冊、形成後を第2分冊として編集した。
- 3 本書で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図（1：2,500）「御所」「相国寺」を調製して使用した。
- 4 図中の方位・座標値は、平面直角座標系VIによる。ただし、単位（m）を省略した。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した。
- 5 調査区の名称は開始順にAからZまで付した。
- 6 遺構番号は調査区ごと通し番号を付し、報告では、種類－調査区－番号、を組み合わせて用いた。例：井戸A309 溝E455
- 7 遺構が調査区にまたがるものについては、最初に検出した調査区での名称を用いた。
例：流路F2550（流路G2925、流路X79）
- 8 遺物番号は実測図の図版ごとに付し、写真・表は実測図の番号を用いた。
- 9 土器編年の型式は、当研究所の『研究紀要』第3号に掲載された「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」での「平安京I期～V期」「京都VI期～XIV期」を、「京都I期～XIII期」に改め、適宜「京都」を省いて用いた。
- 10 土層名について、『新版標準土色帖 2000年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によった。
- 11 ガラス製品については北野信彦氏（くらしき作陽大学）、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・肥塚隆保氏、漆器については北野信彦氏、動物遺存体については岡山理科大学・富岡直人氏に分析していただいた。

目次

第1章	調査経過	
第1節	調査に至る経緯と調査経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の進行	2
3	調査の経過	2
4	調査体制	10
第2節	整理・報告書作成の経緯	10
1	作成方針	10
2	作業経過	11
3	作業体制	15
4	謝辞	16
第2章	調査地の位置と環境	
第1節	自然環境	20
第2節	歴史的環境	22
第3節	周辺の調査	24
第3章	基本層序	31
第4章	遺構	
第1節	A区・M区	37
第2節	B区	38
第3節	C区	41
第4節	D区	45
第5節	E区・L区	47
第6節	F区	50
第7節	G区	54
第8節	H区	62
第9節	J区	65
第10節	K区	66
第11節	P区	67
第12節	O区	68
第13節	R区	70

第14節	S区・T区・U区	71
第15節	V区・W区	73
第16節	X区	73
第5章	遺物	
第1節	土器類	75
1	古墳時代前期～後期、飛鳥時代	75
2	平安時代前期の前半代	76
3	平安時代前期の中頃から中期初め	78
4	平安時代中期の中頃から後半代	85
5	平安時代後期	91
6	鎌倉時代	98
7	室町時代の前半代	105
8	戦国期の前半代	107
9	戦国期の末期	123
第2節	瓦類	128
1	軒丸瓦	128
2	軒平瓦	130
3	緑釉瓦、塙、鷗尾、鬼瓦	133
第3節	その他の遺物	134
1	土製品	134
2	石製品	134
3	鑄造遺物	138
4	銭貨	138
第6章	公家町形成前までのまとめ	
第1節	遺構の変遷	141
1	平安京成立前の地形	141
2	宅地の変遷と利用状況	142
3	井戸の配置と地下水位	152
第2節	出土遺物について	155
1	土器群の変遷について	155
2	白色土器と藤原道長関連の遺跡	161
3	乙訓在地形の土師器皿について	164
4	軒瓦の分布と緑釉軒瓦について	165

図版目次

- 原色図版1 調査地と平安京条坊
- 原色図版2 京都御苑上空より（京都御所の東が発掘調査区、南から、2000年11月29日撮影）
- 原色図版3 京都御苑と市街地（東から、2000年11月29日撮影）
- 原色図版4 1 F区・G区調査風景（南東から、2000年6月29日撮影）
2 G区・H区調査風景（東から、2000年11月29日撮影）
- 図版1 遺構 調査区と図版の紙割図
- 図版2 遺構 A区・M区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版3 遺構 A区・M区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版4 遺構 A区・M区 室町・戦国期平面図
- 図版5 遺構 B区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版6 遺構 B区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版7 遺構 B区 室町・戦国期平面図
- 図版8 遺構 C区・G区北東端 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版9 遺構 C区・G区北東端 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版10 遺構 C区・G区北東端 室町・戦国期平面図
- 図版11 遺構 D区・J区・K区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版12 遺構 D区・J区・K区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版13 遺構 D区・J区・K区 室町・戦国期平面図
- 図版14 遺構 E区・L区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版15 遺構 E区・L区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版16 遺構 E区・L区 室町・戦国期平面図
- 図版17 遺構 F区・X区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版18 遺構 F区・X区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版19 遺構 F区・X区 室町・戦国期平面図
- 図版20 遺構 G区南半・P区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版21 遺構 G区南半・P区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版22 遺構 G区南半・P区 室町・戦国期平面図
- 図版23 遺構 G区北半 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版24 遺構 G区北半 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版25 遺構 G区北半 室町・戦国期平面図
- 図版26 遺構 H区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図
- 図版27 遺構 H区 平安時代後期・鎌倉時代平面図
- 図版28 遺構 H区 室町・戦国期平面図

- 図版29 遺構 井戸 B 1060、井戸 B 1068、井戸 B 1061、井戸 E 765実測図
- 図版30 遺構 井戸 F 2510、井戸 F 2570、井戸 E 743、井戸 A 309実測図
- 図版31 遺構 礎石列 G 3728、礎石列 G 3727、土壙 G 3201、土壙 G 3255、井戸 G 2657実測図
- 図版32 遺構 地業 G 1937実測図
- 図版33 遺構 井戸 G 2530、井戸 G 3110、集石 H 555、溝 F 2360実測図
- 図版34 遺構 井戸 B 916、井戸 B 917、井戸 B 918、井戸 B 963実測図
- 図版35 遺構 井戸 C 1249B、井戸 D 535B、井戸 C 1189、井戸 E 400実測図
- 図版36 遺構 井戸 E 448、井戸 E 665、井戸 F 1709、井戸 F 1777実測図
- 図版37 遺構 井戸 G 2462、井戸 G 2665、井戸 G 2684、井戸 G 1146実測図
- 図版38 遺構 井戸 G 2555、土壙 G 2083、土壙 G 2512実測図
- 図版39 遺構 井戸 H 328、井戸 H 705、地業 H 666実測図
- 図版40 遺構 溝 E 455実測図
- 図版41 遺構 塀 G 3729、塀 G 2933実測図
- 図版42 遺物 古墳・飛鳥時代土器実測図
- 図版43 遺物 土壙 F 2639、井戸 E 765出土土器実測図
- 図版44 遺物 石敷 G 3578、土壙 G 3551、井戸 F 2570、土壙 G 3573、溝 B 1058出土土器実測図
- 図版45 遺物 溝 G 3415、土壙 G 3220、流路 F 2550上層（G区）、流路 F 2550上層（X区）
出土土器実測図
- 図版46 遺物 流路 F 2550上層出土土器実測図 1
- 図版47 遺物 流路 F 2550上層出土土器実測図 2
- 図版48 遺物 溝 E 845出土土器実測図
- 図版49 遺物 溝 E 845、溝 E 827、溝 A 419出土土器実測図
- 図版50 遺物 土壙 F 2631出土土器実測図
- 図版51 遺物 井戸 B 1060、井戸 G 2657、土壙 A 416出土土器実測図
- 図版52 遺物 土壙 B 1013出土土器実測図 1
- 図版53 遺物 土壙 B 1013出土土器実測図 2
- 図版54 遺物 土壙 B 1013出土土器実測図 3
- 図版55 遺物 土壙 S 71、土壙 G 3392、溝 E 881出土土器実測図
- 図版56 遺物 井戸 F 2510掘形出土土器実測図
- 図版57 遺物 井戸 F 2510枠内、井戸 F 2505、土壙 G 2990出土土器実測図
- 図版58 遺物 井戸 G 3068、土壙 H 842、土壙 G 3660、土壙 P 247出土土器実測図
- 図版59 遺物 土壙 G 3290、井戸 B 1061、井戸 B 1068出土土器実測図
- 図版60 遺物 土壙 K 46出土土器実測図
- 図版61 遺物 土壙 G 2407、溝 E 864、溝 G 3360、整地層 G 2500、井戸 G 2462、池 G 2940下層、
土壙 G 2405、溝 E 858、土壙 G 2457、土壙 G 2973出土土器実測図

- 図版62 遺物 土壙 G 2498、土壙 P 242、池 G 2940 (P 区)、池 G 2940 上層出土土器実測図
- 図版63 遺物 溝 C 1226、土壙 P 108、土壙 G 3373 出土土器実測図
- 図版64 遺物 溝 P 124 出土土器実測図 1
- 図版65 遺物 溝 P 124 出土土器実測図 2
- 図版66 遺物 井戸 E 743、井戸 A 309、土壙 E 734 出土土器実測図
- 図版67 遺物 土壙 E 738、土壙 G 3300、井戸 L 31、土壙 G 2477 出土土器実測図
- 図版68 遺物 溝 F 2503、土壙 F 2600 出土土器実測図
- 図版69 遺物 土壙 E 763、土壙 L 28、溝 G 1938、土壙 B 1037 出土土器実測図
- 図版70 遺物 土壙 G 2712、土壙 G 2126、溝 E 785、土壙 G 2073、土壙 G 1897、土壙 G 2125、土壙 G 2207、土壙 H 723 出土土器実測図
- 図版71 遺物 土壙 G 1874、土壙 D 491、土壙 C 917、土壙 C 756 B、井戸 B 918、土壙 B 1043 出土土器実測図
- 図版72 遺物 溝 J 179、土壙 G 3097、土壙 J 92、土壙 G 2234、土壙 J 168、土壙 E 753、井戸 E 400 出土土器実測図
- 図版73 遺物 土壙 A 359、土壙 E 729 出土土器実測図
- 図版74 遺物 土壙 G 2897、土壙 G 2631、土壙 B 992、井戸 B 917 出土土器実測図
- 図版75 遺物 土壙 G 2083、土壙 C 777、土壙 G 2877、井戸 G 2555、土壙 G 2736 出土土器実測図
- 図版76 遺物 溝 F 2410 出土土器実測図
- 図版77 遺物 土壙 B 1035 出土土器実測図
- 図版78 遺物 土壙 G 2318、集石 H 555、地業 H 666、井戸 B 916、土壙 J 175 出土土器実測図
- 図版79 遺物 堀 G 2630 (J 区)、堀 G 2630、井戸 B 1059 出土土器実測図
- 図版80 遺物 溝 E 455 下層出土土器実測図
- 図版81 遺物 溝 E 455 西肩、土壙 G 2214、土壙 G 1363、土壙 G 2821、土壙 J 182、土壙 B 962 出土土器実測図
- 図版82 遺物 井戸 H 328 出土土器実測図
- 図版83 遺物 土壙 E 584、土壙 B 1047 出土土器実測図
- 図版84 遺物 土壙 B 996、土壙 G 3304、池 D 529 B、土壙 F 2588 出土土器実測図
- 図版85 遺物 土壙 G 3226、土壙 B 1036、堀 G 965、土壙 G 2649 出土土器実測図
- 図版86 遺物 井戸 F 1901、井戸 F 1777、井戸 F 1709 出土土器実測図
- 図版87 遺物 土壙 G 1984、土壙 D 512、土壙 G 2413、土壙 J 142、土壙 J 151、井戸 E 665、土壙 G 2270、土壙 C 1298、平安時代遺物 (各遺構) 出土土器実測図
- 図版88 遺物 土壙 B 1000 出土土器実測図 1
- 図版89 遺物 土壙 B 1000 出土土器実測図 2
- 図版90 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 1

- 図版91 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 2
- 図版92 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 3
- 図版93 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 4
- 図版94 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 5
- 図版95 遺物 軒平瓦拓影・実測図 1
- 図版96 遺物 軒平瓦拓影・実測図 2
- 図版97 遺物 軒平瓦拓影・実測図 3
- 図版98 遺物 軒平瓦拓影・実測図 4
- 図版99 遺物 緑釉瓦、埴、鷗尾、鬼瓦拓影・実測図
- 図版100 遺物 土製品・鋳造遺物実測図
- 図版101 遺物 石製品実測図 1
- 図版102 遺物 石製品実測図 2
- 図版103 遺物 石製品実測図 3
- 図版104 遺物 石製品実測図 4
- 図版105 遺物 銭貨拓影 1
- 図版106 遺物 銭貨拓影 2
- 図版107 遺物 銭貨拓影 3
- 図版108 遺構 空中写真（E区・F区・G区・H区・J区、室町時代）
- 図版109 遺構
- 1 A区・B区調査前（北から）
 - 2 A区・B区調査前（北から）
 - 3 C区・D区調査前（北西から）
 - 4 C区・D区調査前（北から）
 - 5 G区調査前（南東から）
 - 6 G区調査前（南から）
 - 7 O区調査前（北東から）
 - 8 U区・W区調査前（東から）
- 図版110 遺構
- 1 試掘1区 重機掘削（北西から）
 - 2 試掘5区 断面図作成（北東から）
 - 3 仮囲い設置に伴う立会 東面の調査風景（北東から）
 - 4 97移植立会 C2・C3の根回し（西から）
 - 5 A区 小学生の見学風景（南西から）
 - 6 B区 重機掘削（南から）
 - 7 B区 土壌B674の調査（北西から）
 - 8 C区 遺構実測（北から）
- 図版111 遺構
- 1 D区 遺構実測と検出（南から）

- 2 D区 遺構掘下げ（南東から）
 - 3 E区 重機掘削（北西から）
 - 4 E区 クレーン車による写真撮影（東から）
 - 5 F区 集石F1616の実測（北西から）
 - 6 F区 やぐらによる写真撮影（南西から）
 - 7 99移植立会 作業風景（南西から）
 - 8 99移植立会 堀G1940断面（北から）
- 図版112 遺構
- 1 G区 重機掘削・検出中（南東から）
 - 2 G区 池G470検出中（北西から）
 - 3 G区 蔵G694掘下げ（北東から）
 - 4 G区 井戸G2455写真測量（西から）
 - 5 G区 現地説明会（北西から）
 - 6 G区 土壌G1716掘下げ（南から）
 - 7 H区 遺構検出と盛土移動（北東から）
 - 8 H区 堀G1940を小型バックホーで掘削（北東から）
- 図版113 遺構
- 1 I区 遺構実測（南西から）
 - 2 J区 重機掘削（南から）
 - 3 M区 調査風景（北東から）
 - 4 N区 土壌N18の掘下げ（北西から）
 - 5 O区 重機掘削（北西から）
 - 6 P区 掘下げ（南西から）
 - 7 Q区 礎石建物検出中（南から）
 - 8 R区 中学生による体験発掘（南西から）
- 図版114 遺構
- 1 S区 作業風景（南東から）
 - 2 T区 重機掘削（西から）
 - 3 V区 作業風景（西から）
 - 4 W区 御所水道銘採拓風景（北から）
 - 5 インフラ工事に伴う立会 調査風景（北西から）
 - 6 インフラ工事に伴う立会 植付穴（南東から）
 - 7 Z区 重機掘削・検出中（南から）
 - 8 Z区 遺構実測準備（北から）
- 図版115 遺構
- 1 試掘1区全景（東から）
 - 2 試掘2区全景（東から）
 - 3 試掘3区全景（北から）
 - 4 試掘4区全景（北から）

- 5 試掘5区全景（西から）
- 6 試掘6区全景（東から）
- 図版116 遺構
 - 1 A区室町時代全景（北東から）
 - 2 B区室町時代全景（中央～南半部、北東から）
- 図版117 遺構
 - 1 A区井戸A309（北から）
 - 2 A区 同 石組（北東から）
 - 3 A区土壌A416断面（南から）
 - 4 B区井戸B963（左）と井戸B916（右、西から）
- 図版118 遺構
 - 1 B区井戸B918（東から）
 - 2 B区溝B1054断面（南から）
 - 3 B区溝B1055断面（南から）
 - 4 B区井戸B1068（左上）と井戸B1061（中央、北西から）
- 図版119 遺構
 - 1 B区井戸B1060の木枠（北から）
 - 2 B区井戸B1068木枠と石組の内部（北から）
 - 3 C区平安～室町時代全景（北から）
- 図版120 遺構
 - 1 D区平安～室町時代全景（北から）
 - 2 C区井戸C1249B（西から）
 - 3 D区井戸D535B（東から）
 - 4 D区堀D540（西から）
- 図版121 遺構 E区室町時代全景（北東から）
- 図版122 遺構
 - 1 E区溝E455（北から）
 - 2 E区溝E455の東肩石垣（北西から）
 - 3 E区溝E455の東肩石垣（北から）
 - 4 E区溝E455の東肩石垣（南から）
- 図版123 遺構
 - 1 E区井戸E665（南東から）
 - 2 E区井戸E448（北から）
 - 3 E区井戸E743（北から）
 - 4 E区溝E845（左）と溝E858（右、東から）
 - 5 E区溝E922A（北から）
- 図版124 遺構
 - 1 E区南半部全景（高まりは富小路路面、北から）
 - 2 E区井戸E765（西から）
- 図版125 遺構 F区室町時代全景（北東から）
- 図版126 遺構
 - 1 F区富小路路面と溝E455（溝F2180、北から）
 - 2・3・4 F区溝E455（溝F2180）東肩の石垣（西から）
 - 5 F区石敷F1695（溝F2410上面、北から）

- 図版127 遺構 1 F区溝F2410と上部の石敷（北から）
 2 F区溝F2410上部の石敷（北から）
 3 F区井戸F1709（北から）
 4 F区井戸F1777（南から）
- 図版128 遺構 1 F区井戸F2570（北から）
 2 F区井戸F2505完掘状態（南から）
 3 F区井戸F2510木枠内の土器出土状況（北から）
 4 F区流路E900B底部の工具痕跡（南西から）
- 図版129 遺構 1 F区流路F2550（北東から）
 2 F区流路E900A（中央）と流路E900B（その左、北東から）
- 図版130 遺構 1 G区鎌倉～室町時代全景（北から）
 2 G区井戸G2665（東から）
 3 G区土壌G2083（北から）
 4 G区土壌G2512（南から）
- 図版131 遺構 1 G区井戸G2684（西から）
 2 G区井戸G2462セクション東壁（西から）
 3 G区井戸G2555（北西から）
 4 G区堀G2630・堀G2933（北から）
- 図版132 遺構 1 G区路面G1865と堀G965（西から）
 2 G区地業G1937（北から）
- 図版133 遺構 1 G区井戸G3110（西から）
 2 G区土壌G3373（東から）
 3 G区井戸G2530（北東から）
 4 G区平安時代全景（北から）
- 図版134 遺構 1 G区池G2940全景（西から）
 2 G区池G2940近景（北から）
 3 G区池G2940近景（北から）
- 図版135 遺構 1 G区礎石列G3727（右）とG3728（左、北から）
 2 G区土壌G3201（北から）
 3 G区土壌G3255（北から）
 4 G区井戸G2657（東から）
- 図版136 遺構 1 G区流路F2550（西から）
 2 G区石敷G3578（東から）
 3 G区流路G3579（北東から）
 4 G区土壌G1755土器出土状況（南東から）

- 図版137 遺構 H区室町時代全景（北から）
- 図版138 遺構 1 H区地業H666（北から）
2 H区井戸H328（北西から）
3 H区集石H555（西から）
4 H区井戸H705内部の石（東から）
5 H区土壙H842土器出土状況（北から）
- 図版139 遺構 1 H区流路E900（北東から）
2 L区全景（東から）
3 L区室町時代全景（東から）
- 図版140 遺構 1 J区室町時代全景（北から）
2 K区平安時代後期～鎌倉時代全景（北から）
- 図版141 遺構 1 P区溝P124（北から）
2 P区溝P124セクション断面（西から）
3 P区土壙P108（西から）
4 P区土壙P243（西から）
5 P区池G2940（北から）
- 図版142 遺物 古墳・飛鳥時代土器1
- 図版143 遺物 古墳・飛鳥時代土器2
- 図版144 遺物 井戸E765、土壙G3220出土土器
- 図版145 遺物 流路F2550上層出土土器
- 図版146 遺物 溝E845、流路F2550上層出土土器
- 図版147 遺物 土壙F2631出土土器
- 図版148 遺物 土壙B1013出土土器1
- 図版149 遺物 土壙B1013出土土器2
- 図版150 遺物 土壙B1013出土土器3
- 図版151 遺物 井戸F2510出土土器
- 図版152 遺物 土壙K46出土土器
- 図版153 遺物 池G2940（P区）出土土器
- 図版154 遺物 溝P124出土土器1
- 図版155 遺物 溝P124出土土器2
- 図版156 遺物 井戸E743、土壙G3373出土土器
- 図版157 遺物 土壙B1037出土土器
- 図版158 遺物 土壙B1043、井戸G2555出土土器
- 図版159 遺物 土壙A359出土土器
- 図版160 遺物 土壙G2083、土壙G2736出土土器

- 図版161 遺物 溝F 2410出土土器
 図版162 遺物 堀G 2630出土土器
 図版163 遺物 溝E 455下層、溝F 2410、井戸H 328出土土器
 図版164 遺物 井戸H 328出土土器
 図版165 遺物 土壙B 996出土土器
 図版166 遺物 1 土壙G 3551、土壙G 2498、土壙G 1874、井戸E 400、井戸E 665出土土器
 2 須恵器（墨書）、緑釉陶器（陰刻花文）
 図版167 遺物 軒丸瓦 1
 図版168 遺物 軒丸瓦 2
 図版169 遺物 軒丸瓦 3
 図版170 遺物 軒丸瓦 4
 図版171 遺物 軒丸瓦 5
 図版172 遺物 軒丸瓦 6・軒平瓦 1
 図版173 遺物 軒平瓦 2
 図版174 遺物 軒平瓦 3
 図版175 遺物 軒平瓦 4
 図版176 遺物 軒平瓦 5、埴、鷓尾、鬼瓦
 図版177 遺物 緑釉瓦
 図版178 遺物 土製品（土錘、土馬、硯）
 図版179 遺物 石製品（砥石）
 図版180 遺物 1 石製品（硯）
 2 石製品（碁石、石帯、紡錘車、石錘、他）
 図版181 遺物 1 石製品（滑石製温石）
 2 石製品（滑石製石釜）
 図版182 遺物 1 鑄造遺物（吹子羽口）
 2 鑄造遺物（スラグ、鉄滓、融解物）
 図版183 遺物 鑄造遺物（窯壁・壁土）
 図版184 遺物 錢貨 1
 図版185 遺物 錢貨 2
 図版186 遺物 錢貨 3

挿 図 目 次

図 1	調査位置図	1
図 2	調査区の名称（新・旧）と調査面積	3
図 3	調査地周辺の等高縮図	21
図 4	調査地周辺図	23
図 5	周辺調査地点位置図	25
図 6	断面模式地点図	32
図 7	断面模式図 1	34
図 8	断面模式図 2	36
図 9	土壌 A 416断面図	37
図10	溝 B 1058断面図	39
図11	溝 B 1054・溝 B 1055断面図	40
図12	土壌 B 1043断面図	41
図13	流路 E 900断面図	47
図14	溝 E 827・溝 E 864断面図	48
図15	溝 E 845・溝 E 858断面図	48
図16	流路 E 900A・流路 E 900B 断面図	51
図17	富小路路面断面図	52
図18	流路 F 2550断面図	55
図19	流路 F 2550・石敷 G 3578断面図	56
図20	堀 G 965断面図	60
図21	堀 G 2630断面図	60
図22	流路 E 900断面図	63
図23	土壌 H 842土器出土状態	63
図24	堀 G 2630（J 区）断面図	65
図25	溝 P 124断面図	67
図26	O 区平面図	69
図27	R 区中世以前確認部分平面図	70
図28	R 区中世以前確認部分断面図	71
図29	S 区中世以前確認部分平面図・断面図	72
図30	S 区・T 区・U 区平面図	72
図31	流路 E 900（流路 H 820）出土土師器実測図	76
図32	土壌 G 3220出土土器実測図	79
図33	溝 B 1054出土土器実測図	91

図34	溝 F 2410底部出土土器実測図	112
図35	土壙 B 1047出土土器実測図	120
図36	土壙 E 584出土土器実測図	125
図37	土壙 M28出土土器実測図	127
図38	土壙 B 1015出土土器実測図	127
図39	土壙 E 531出土土器実測図	127
図40	土壙 C 1191出土土器実測図	127
図41	井戸 G 1146出土土器実測図	128
図42	溝 R 1119出土土器実測図	128
図43	滑石製石釜の調整痕	136
図44	錢貨の比率グラフ	139
図45	邸宅・寺院の変遷	143
図46	遺構の変遷模式図	145
図47	井戸の分布	153
図48	井戸断面の比較	154
図49	土師器皿実測図	164
図50	軒瓦、緑釉軒瓦・丸瓦・熨斗瓦出土地点	166
図51	緑釉瓦拓影・実測図	167

表目次

表 1	調査進行表	4
表 2	整理・報告書作成工程	12
表 3	調査一覧表	26
表 4	遺構年代表	147

観察表目次

観察表 1	軒瓦一覧表	172
観察表 2	緑釉瓦・埴・鴟尾・鬼瓦一覧表	185
観察表 3	土製品一覧表	186
観察表 4	硯（陶製）一覧表	186
観察表 5	砥石一覧表	186
観察表 6	硯（石製）一覧表	188
観察表 7	温石一覧表	188

観察表 8	滑石製石釜一覧表	188
観察表 9	石製品一覧表	189
観察表10	吹子羽口一覧表	189
観察表11	スラグ・鉄滓・融解物一覧表	190
観察表12	窯壁・壁土一覧表	190
観察表13	銭貨一覧表	191

写真目次

写真 1	整理作業風景 1	13
写真 2	整理作業風景 2	14
写真 3	X区全景	73

付図目次

付図 1	古墳・飛鳥時代、平安時代前・中期遺構配置図 (1:500)
付図 2	平安時代後期・鎌倉時代遺構配置図 (1:500)
付図 3	室町・戦国期遺構配置図 (1:500)
付図 4	桃山時代遺構配置図 (1:500)
付図 5	江戸時代前期遺構配置図 (1:500)
付図 6	江戸時代中期遺構配置図 (1:500)
付図 7	江戸時代後期遺構配置図 (1:500)

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯と調査経過

1 調査に至る経緯

総理府（現、内閣府）及び建設省（現、国土交通省）は閣議決定を受け、京都迎賓館（仮称）を京都御苑内の饗宴場跡地に建設する計画を立て、文化財保護法第57条の3の通知を京都市埋蔵文化財調査センター（以下、調査センター）へ提出した。計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵

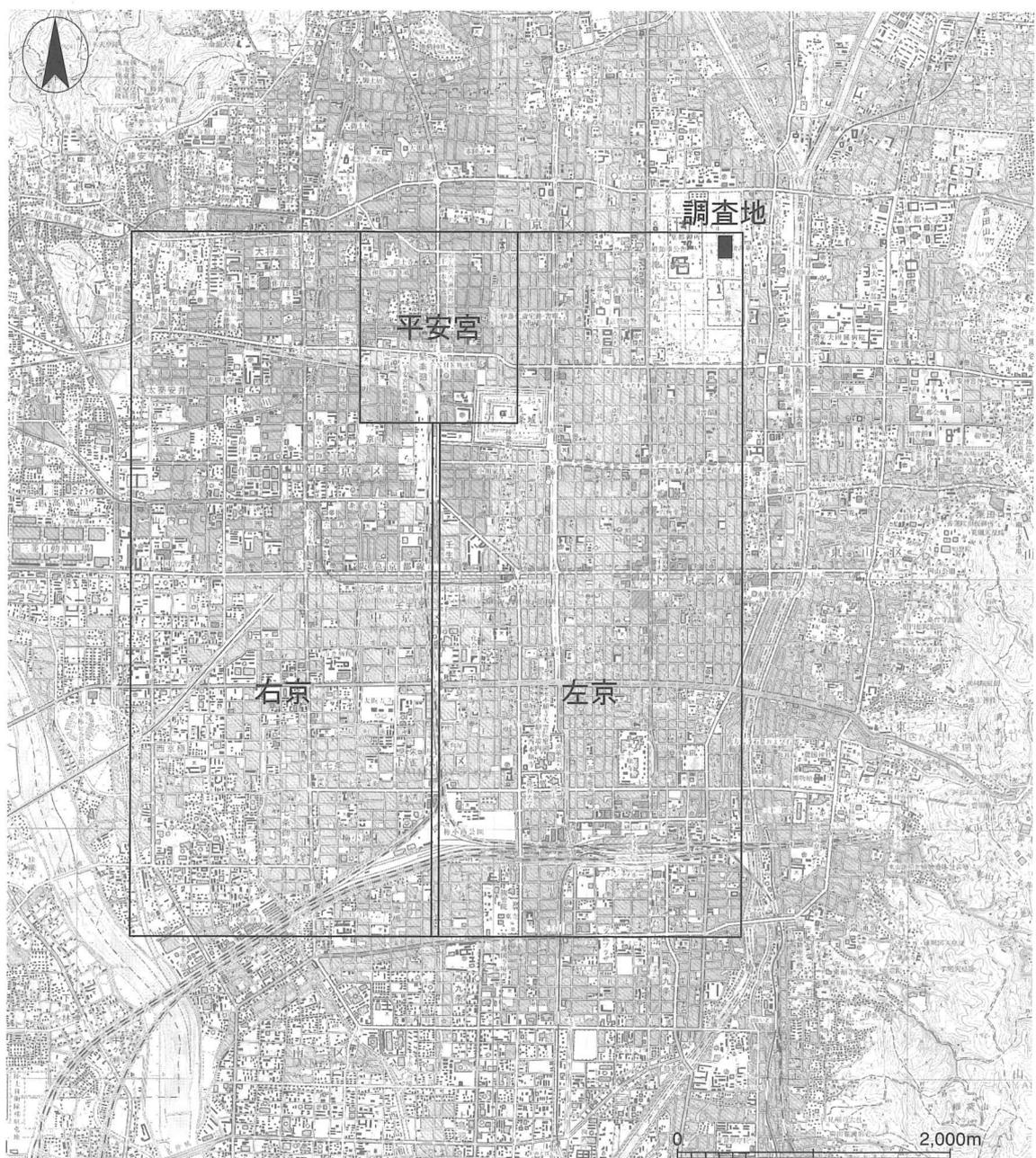


図1 調査位置図（1：50,000）

地（平安京跡）内にあたることから、調査センターは、建設工事着手前に埋蔵文化財を対象とした調査が必要と判断した。これを受けて、総理府・建設省は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に埋蔵文化財の発掘調査業務を委託した。

当初の建設計画によると建設工事の対象面積が約10,000㎡あり、これについて、総理府・建設省・調査センターとで協議を行ない、その結果、発掘調査に先立って試掘調査を実施して遺構の残存状況などの確認を行なった上で、調査対象範囲の確定あるいは調査期間、費用などを含めた全体の調査計画を策定することになった。ただし、工事対象範囲の南半分をしめていたグラウンド部分については、御苑利用者などとの関係から試掘調査は行なえなかった。

京都御苑は、国民公園として多くの市民などが利用していることから、京都御苑を管理する環境庁（現、環境省）、建設省などとの協議を受け、発掘調査は、対象地を大きく3分割して順次実施することや調査地周囲を安全柵で囲む、あるいは調査中の残土を外部に持ち出さないなど、御苑利用者への影響を最小限に留めるよう留意した。また、対象地内には大小の樹木があり、環境庁がこれら樹木に対する移植の方針を出したことから、調査センターの指導により、移植木については立会調査を行なうことになった。なお、発掘調査中に京都迎賓館（仮称）に関連するインフラ部分の基本計画ができあがったことに伴ない、その設置箇所についても追加して発掘調査を行なった。以下に、調査の進行を記す。

2 調査の進行（図2、表1）

調査期間は1997年から2002年までの6年間にわたる。調査の区分としては、1997年に実施した試掘調査、1998年～2001年にかけて実施した本体部分の調査、2001年と2002年に実施したインフラ整備に伴う調査の3回に大別できるが、以下の7次に区分した（表1参照）。

調査区の名称については、調査期間が長期にわたったこと、調査対象地が広範囲でかつ契約が数次にわたることなどから、「GS」（御所の略称）の前に西暦年の下2桁をつけ、以下調査区順に通し番号を付した（例：98GS3-1区、99GS4-3区など）。しかし本報告書においては、表1に示したように、A～Zまでのアルファベットを進行順に付し、新たな調査区名とした（図2の対照表を参照）。

以下、A区からZ区へと調査区順に経過を解説する。

3 調査の経過（図版109～115）

（1）97試掘調査（図版110-1・2、115）

先の1次に該当する。基本的な層序の確認、遺構の残存状態の確認、遺物出土量の算定基礎を得ることなど、本調査を開始する前提資料を得ることを目的とした試掘調査である。期間は5月・6月の約3週間とし、調査対象地内に6つの調査区を設定した。調査区は、幅1.5mで長さ7mを基本とし、対象地の周辺部に設けた。2調査区を同時に重機掘削、遺構精査、重機で埋戻しという方法を使った。第1週には第1・2調査区、第2週には第3・4調査区、第3週には第5・6調査区を調査した。

北西部において「富小路」の検出を目的として第1・2調査区を設定した。1997年5月中頃

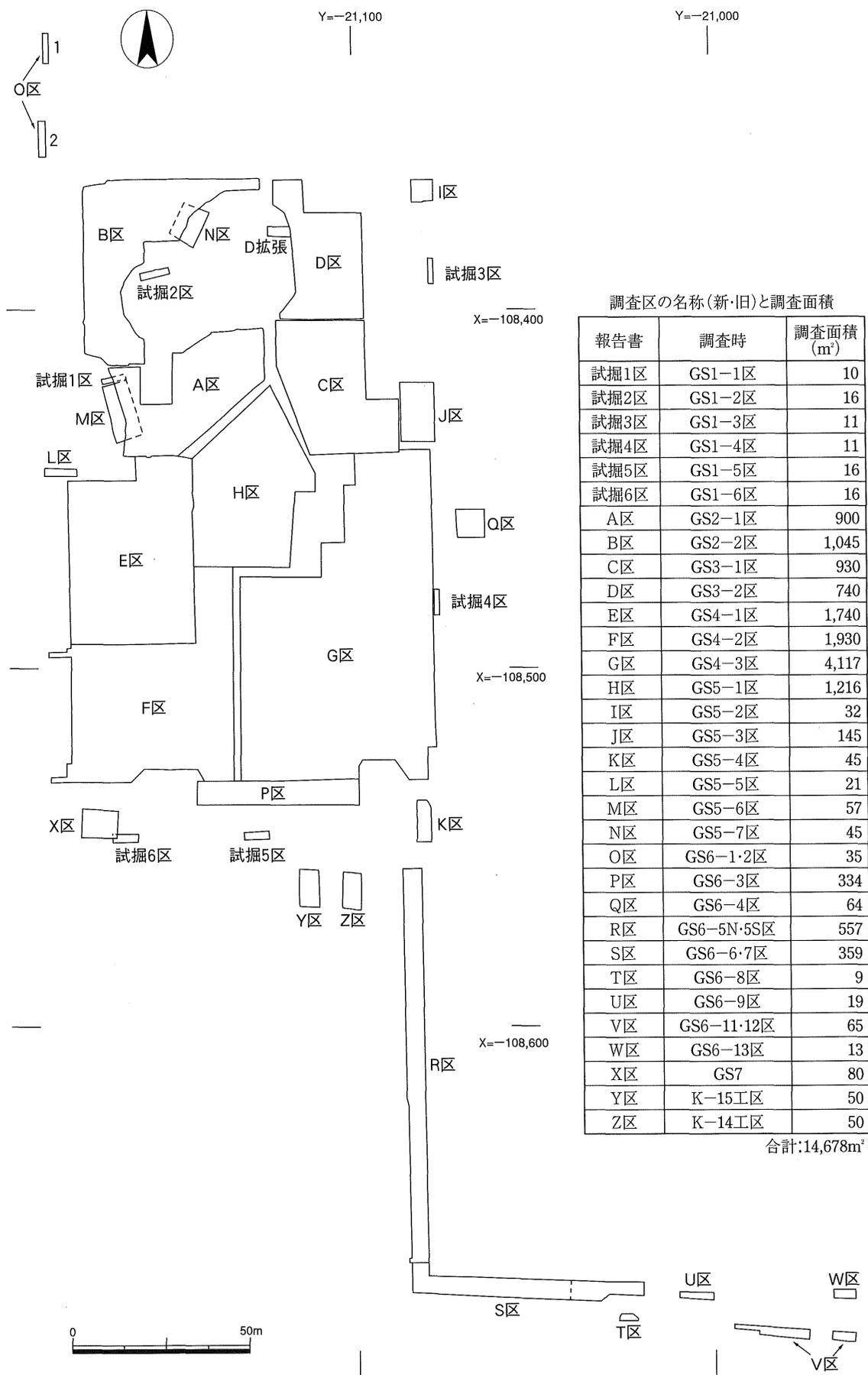


図2 調査区の名称(新・旧)と調査面積

第1節 調査に至る経緯と調査経過

表1 調査進行表 ↑空1～13:空中写真測量 ▼現説1～5:現地説明会

調査年	1997年(平成9)	1998年(平成10)	1999年(平成11)	2000年(平成12)	2001年(平成13)	2002年(平成14)
1次 試掘	5□6					
2次	12	4 ▽現説1				
		3□8				
3次		8□1				
		▽現説2	4			
4次		8	3			
		▽現説3	7			
5次			4			
			12			
			12			
			▽現説4			
			12			
			▽現説5			
			2□3			
			3□			
			3□			
6次						
7次						

より重機掘削を開始したが、遺構は検出できなかった（図版110-1、115-1・2）。第2週にはゲートボール場の東辺に第3・第4調査区を設定した。第4調査区では正親町小路の路面と南側溝を想定位置で検出した（図版115-3・4）。第3週にはグラウンド南方で第5・第6調査区を設定した。ともに江戸時代以降の遺構を検出した（図版110-2、115-5・6）。6月前半に埋戻し、機材を撤去した。

（2）本体調査

京都迎賓館（仮称）の本体部分を対象とする調査で、2次・3次・4次・5次と6次の一部からなる。1997年12月から1998年4月まで樹木移植に伴う立会調査（「97移植立会」）を実施し、1998年3月から2001年3月まで発掘調査を実施した。発掘は北西部のA区・B区から始め、北東部でC区・D区、南西部でE区・F区、南東部でG区、中央部でH区を調査した。また発掘途中の2000年2・3月には樹木移植に伴う立会調査（「99移植立会」）も実施した。

97移植立会（図版110-3・4） 緑地帯部分で実施した樹木移植に伴う立会調査である。最初に西辺・北辺の生垣撤去に伴ない立会調査を実施した。掘削深は-0.4mと浅く、江戸時代の盛土の範囲内であった。樹木移植に伴う調査では、根回しと吊り出し時に立会調査を実施した。主に江戸時代の遺物が出土した。吊り出された樹木は御苑内の各所に植え付けられ、その際も立会調査を実施した。植付穴の掘削深は-1.5m程度で、江戸時代の遺物が出土した。

A区（図版110-5） 北西部に設定した最初の発掘調査区である。大径木が現地に保存されたことで調査区の形状は変則的となった。3月末日より重機掘削を開始し、G.L-0.5mで黄色系の整地層を検出し、この上面で建物礎石を認めた。手掘りにより建物礎石、焼瓦を含む土壌、石組井戸、土管を入れた溝、石垣で護岸した溝、礫敷の通路面などの江戸時代前期と判断される遺構群を検出した。5月後半に全景写真を撮影した。6月前半に記者発表と現地説明会を開催した。礎石建物では礎石を取り外し、集石遺構・井戸・通路なども調査した。調査区南西部、礎石建物下には巨大な土取穴を検出した。地山面（砂礫層）で室町時代後期の柱穴を検出した。平安時代の遺構は少数であった。土層図を作成し、8月前半に終了した。

B区（図版110-6・7） 8月前半から開始した。各所に江戸時代の巨大なごみ穴を検出し、10月前半には江戸時代後期で写真撮影した。ごみ穴、石組井戸、石垣をもつ溝などを検出し、11月前半には江戸時代前期で写真撮影した。北東部で検出した礎石建物はA区ほど良好ではなかった。北東部には土取穴が連続し（土壌B1000）、室町時代の遺構は削平されていた。南半部で室町時代の遺構を調査し、12月中頃に全景写真を撮影した。北半部で平安時代の遺構を調査し、南半の東壁沿いで平安時代の井戸3基を検出した。1月中頃より重機で埋戻し、後半に完了した。

C区（図版110-8） 1998年8月後半に重機掘削を開始。G.L-0.3mで江戸時代後半期の二階町通の路面・側溝を検出した。遺構の状態が良好なため、10月後半に記者発表と現地説明会を開催した。江戸時代後期の遺構調査、全景写真の撮影などを行ない、11月初めから第2面の調査に移り、遺構掘下げ、写真撮影、D区予定地での地中レーダー探査などを実施した。1999

第1節 調査に至る経緯と調査経過

年1月中頃に全景写真を撮影し、1月下旬から江戸時代中期の遺構を調査し、2月中頃以後は江戸時代前期、3月からは室町・平安時代へと進めた。3月下旬に最後の全景写真を撮影した後、東側へは二階町通西側溝を確認するため、西側へはA区間の様相を把握する目的で拡張を行なった。重機で埋戻し、3月末に終了した。

D区(図版111-1・2) C区に引き続き3月末より開始した。二階町通路面・側溝を検出し、4月下旬に全景写真を撮影した。江戸時代中期の遺構を調査し、5月中頃に全景写真、のち江戸時代前期の遺構を調査した。6月中頃に全景写真を撮り、後半に桃山時代の池の写真撮影、7月前半に室町時代と平安時代の全景写真を撮り、7月末に終了した。

E区(図版111-3・4) 東西35m、南北46mの範囲を中心とし北東に拡張部を付加した。1999年4月中頃から重機掘削を開始し、南西側で昭和御大典時に建てられた饗宴殿のコンクリート基礎を検出した。江戸時代後期の遺構として南東部で漆喰底の池(池E25)や能舞台の遺構を検出した。6月初めに1回目の全景写真と空中からの写真測量を実施した。柳原家の遺構と判明し、7月中頃に記者発表と現地説明会を開催した。江戸時代中期から前期の遺構を調査した。火災処理土壌(土壌E268)から「明和八稔」銘の棟端瓦や賢瓶が出土した。9月前半に2回目の全景写真と写真測量を実施した。室町時代の遺構は部分的に残存し、10月末に3回目の全景写真と写真測量を実施した。平安時代の遺構はさらに残存状態が悪く、富小路の路面・側溝などを調査し、11月末に全景写真を撮影した。土層図作成を行ない、12月前半に埋め戻し終了した。

F区(図版111-5・6) 4次として開始し、5次で終了した。東西45m、南北39mの範囲を中心に北東に拡張部を付加した。南端は樹木裾の制約を受けた。1999年12月前半から開始した。饗宴殿のコンクリート基礎列は南東隅を確認した。2000年1月から江戸時代後期の遺構を調査した。池E25に連続する池F1200や、柳原家、櫛笥家を分ける施設を検出した。中筋通を確認する目的で北西端・南西隅に長さ6m、幅1.5mの拡張区を設けた。両拡張区とも中筋通の路面と東側溝を検出した。2月中頃に1回目の全景写真と写真測量を実施した。江戸時代前期では宅地境の施設と礎石建物を検出した。建物は櫛笥家とみられ、中筋通に面して長屋門が置かれた状況が明確となった。4月中旬に2回目の全景写真と写真測量を実施し、5月後半に記者発表と現地説明会を開催した。6月下旬には南壁の一部を拡張し、南西拡張区西壁の中筋通路面の断面剥ぎ取りを実施した。室町時代の遺構として、富小路路面、石垣をもつ溝、柱穴、井戸、土取穴などを検出した。8月末に室町時代の全景と写真測量を実施した。平安時代の遺構として、富小路、井戸、土壌を検出し、9月下旬に写真を撮影した。下層遺構として斜め方向の流路を3条検出した。流路F2550は規模が大きく、小型バックホーで掘削した。10月初めに調査を終了した。

G区(図版112-1~6) 4次として開始し、5次で終了した。1999年12月中頃から重機掘削を開始した。G.L-0.3mで幕末期の石組溝を検出、1月末に写真撮影を実施した。江戸時代後期の遺構を調査した。3月初めに東側と北側に拡張した。二階町通路面、石組側溝、井戸、

集石遺構などを調査し、全面を平均的に掘下げた。4月中頃に全景写真と写真測量を実施した。江戸時代中期の遺構を調査し、6月後半に全景写真と写真測量を実施した。江戸時代前期の遺構は、二階町通の路面と西側溝、宅地境や内部施設を検出し、9月後半に全景写真と写真測量を実施した。池や半地下式井戸についても写真測量を行なった。室町時代では正親町小路路面、溝、大規模な堀（堀G1940）、井戸や土壇、柱穴多数、鎌倉時代では建物地業跡、井戸、土壇、柱穴多数を検出した。建物地業については写真測量を実施した。12月中頃に室町・鎌倉時代の全景写真と写真測量を実施し、12月後半に調査成果と現地説明会を開催した。2001年1月から平安時代の遺構を調査し、正親町小路路面、北側溝、土壇、礎石群、池状遺構、柱穴多数を検出、1月末に全景写真と写真測量を実施した。下層流路を調査し、西側と北側を拡張、E区間、H区間の畦畔も調査した。

99移植立会（図版111-7・8） G区東側で黒松を移植する作業に伴ない立会調査を実施した。2000年2月後半から開始し、33箇所を調査した。平安時代の土壇、室町時代の土壇や溝、江戸時代の道路、漆喰槽、井戸などを検出し、3月初めに終了した。中央部で桃山時代の大規模な堀（堀G1940）断面を東西両肩にわたり検出した。

Y区 K-15工区としたもので、樹木移植に先立つ調査である。2000年3月中に実施し、二階町通の東側溝にあたる石組溝を検出した。

Z区（図版114-7・8） K-14工区としたもので、同じく樹木移植に先立つ調査である。Y区と平行して実施し、二階町通の西側溝が想定されたが、遺構は検出できなかった。

H区（図版112-7・8） 中央部に設定した調査区。2000年10月初めから開始した。江戸時代後期では井戸、土蔵、石室、石組、溝、竈、埋甕、土壇などを検出し、11月末に全景写真と写真測量を実施した。江戸時代前期では、南北の柱列と溝を検出し、1月中頃に全景写真と写真測量を実施した。2月後半には室町時代の全景写真と写真測量を実施した。平安時代では小規模な土壇を数基検出した。下層遺構として斜め方向の流路H820（＝流路E900）を検出した。3月初めに写真撮影し、埋戻しに際しては北西、北東、南西の3方向を拡張した。3月後半に終了した。

I区（図版113-1） 北東隅に樹木が移植されることになり、事前調査として2000年11月前半より開始した。江戸時代後期の溝、土壇、柱穴など検出し、12月中頃に全景写真を撮り、測量はG区の写真測量と同時に実施した。12月後半に中期の全景写真を撮影した。二階町通の道路路面と西側溝を検出し、2001年1月中頃に前期の全景写真を撮影した。桃山時代の堀（堀I32）を掘り、1月後半に全景写真を撮影し、西側を拡張しG区で検出した堀G2630の北延長を調査した。2月初めに埋戻し終了した。

J区（図版113-2） C区の東端に設定した調査区で、2000年10月後半から開始した。石組、柱穴、土壇などを検出し、12月初めに江戸時代後期の全景写真、12月中頃に江戸時代中期の全景写真と写真測量を実施した。次いで二階町通の道路路面と西側溝を検出し、2001年1月中頃に江戸時代前期の全景写真を撮影した。室町時代の堀や土壇を調査し、1月末に全景写真と写真

第1節 調査に至る経緯と調査経過

測量を実施した。下層で古墳時代の溝を検出し、2月中頃に最終面の全景を撮影し、終了した。

K区 南東隅において2001年2月前半より開始した。柱穴、土壙を調査し、江戸時代後期の全景写真を撮影した。二階町通の道路面を検出し、西側溝を掘下げ、2月後半に江戸時代前期の全景写真を撮影した。室町時代の土壙や整地層を掘下げ、3月初めに全景写真を撮影した。平安時代後期では池状遺構があり、3月中頃に全景写真を撮影した。3月後半に終了した。

L区 中筋通路面と東側溝の関係を知る目的で2001年1月中頃から実施した。饗宴殿の基礎による攪乱が多く、中筋通に関する知見は得られなかった。室町時代の柱穴などを検出し、2月後半に終了した。

M区 (図版113-3) 大径木の裾のため調査できなかった箇所への再調査である。A区西壁には巨大な土取穴・土器廃棄土壙を検出しており、土壙年代と西端を確認する目的で実施した。想定した土壙の西端を確認し、3月初めに終了した。

N区 (図版113-4) B区南東壁で検出した江戸時代前期の土器廃棄土壙(土壙B725)の東端を確認する目的で実施した。土壙東端を確認するとともに、屋敷を分ける石列や石敷を検出し、2月初めに終了した。

P区 (図版113-6) G区南端に設定した調査区で、6次として実施した。2001年1月前半から開始し、江戸時代中・後期の二階町通路面と東・西の石組溝、井戸、石組、前期の背割溝と柵、室町時代後期の堀、鎌倉時代の溝、平安時代後期の池跡などを検出した。3月末に終了した。

Q区 (図版113-7) 調査対象地の最も東端に位置し、6次で実施した。2001年1月末から開始し、江戸時代前期の礎石建物2棟以上を良好な状態で検出した。3月前半に終了した。

(3) インフラ調査

6次に該当し、一部は7次にわたる。調査対象地の北東隅から今出川通まで北行するルートで試掘調査(「インフラ試掘」)を5箇所と発掘調査を1箇所(O区)、南東隅から仙洞御所の北面築地まで南行し東折して寺町通に至るルートで発掘調査を6箇所(R区・S区・T区・U区・V区・W区)、及び樹木移植に伴う立会調査(「インフラ立会」)を14箇所実施した。南東側は埋設管深(-1.5m)より下の調査を控えたため、室町・平安時代の遺構は部分的な調査に留めた。

インフラ試掘 平安京外の北隣接地であるが、中筋通に関連した遺構の検出が予測されたため、2000年10月から11月にかけて実施した。北端を1区、南端を6区とした(5区は欠番)。掘削深の関係で室町時代以前の調査は行っていない。試掘調査で中筋通東側溝を確認したため、工事はそれを避けて実施されることになった。

試掘1区 江戸時代の宅地内の整地層を確認した。

試掘2区 江戸時代のごみ穴の堆積を確認した。

試掘3区 江戸時代の中筋通路面を3面検出した。

試掘4区 江戸時代の中筋通路面を4面検出し、路面下で桃山時代の遺物包含層を確認した。

試掘6区 江戸時代の中筋通路面及び東石組側溝を新旧2条検出した。

O区(図版113-5) 2001年1月前半から2月初めにかけて実施した。一条大路の北築地想定位置に1区、南築地想定位置に2区を設定し、平行して調査を進めた。1区では江戸時代の中筋通路面や土壌、室町時代の堀や溝、平安時代の一条大路路面などを、2区では江戸時代の土壌、室町時代の土壌、柱穴、溝などを検出した。2区の柱穴群は一条大路南辺に関わる遺構の可能性はある。

R区(図版113-8) 北半を5N区、南半を5S区とした。5N区は2001年3月後半から開始し、江戸時代中・後期の公家屋敷の遺構群、江戸時代前期の二階町通路面と西側溝を検出し、6月末に終了した。5S区は5月後半に開始し、江戸時代中・後期の公家屋敷の遺構、江戸時代前期の二階町通路面と西側溝、東側溝、調査区南端で前期の清和院通と二階町通の交差部分を検出した。また室町時代後期の堀、平安時代の土御門大路路面なども検出し、7月後半に終了した。

S区(図版114-1) 西半を6区、東端を7区とした。6区は4月後半から開始し、明治時代の御所水道、江戸時代中・後期の新道通の北側溝、路面、前期の九条家邸の一部と清和院通の路面、南側溝を検出し、6月末に終了した。7区は3月中頃より開始し、明治時代の御所水道、江戸時代中・後期の清和院通の路面と北側溝、中期頃の清和院御門のものと思われる礎石、前期の九条家邸宅の一部と清和院通路面、南側溝、平安京の東京極大路の路面を検出し、4月前半に終了した。

T区(図版114-2) 2月前半から後半にかけて実施し、江戸時代中・後期の清和院通路面、前期の九条家邸宅の一部、平安京の東京極大路の路面を検出した。

U区 2月末から3月後半にかけて実施し、明治時代の御所水道、江戸時代中・後期の清和院通の路面、前期の九条家邸宅の一部、平安京の東京極大路の路面を検出した。

V区(図版114-3) 西半を11区、東半を12区とした。11区は2月初めから末にかけて実施し、江戸時代中・後期の清和院通の路面、九条家邸東限の溝を検出した。12区は2月後半から3月中頃にかけて実施し、江戸時代中・後期の清和院通の路面を検出した。

W区(図版114-4) 2001年10月中頃から11月初めにかけて実施し、明治時代の御所水道、江戸時代前～後期の清和院通の路面を確認した。

インフラ立会調査(図版114-5・6) 6次で開始し7次にかかる。6次では南東ルート沿いの14箇所で行会調査を実施した。7次では石薬師御門の北西側(A地区)で33箇所、京都迎賓館(仮称)建設予定地の東側(B地区)で95箇所、南側(C地区)で36箇所、清和御門をはさむ東西(D地区)で28箇所の立会調査を実施した。A地区では江戸時代の土壌や八条院町通の路面、平安時代の整地層などを、B地区では平安時代に埋没した流路や江戸時代の土壌、石組、整地層を、C地区では江戸時代の中筋通の路面や清和院通の路面などを、D地区では平安時代の池跡や江戸時代の清和院通の路面と側溝、寺町通の路面、九条家邸東限の溝などを検出した。

X区 樹木移植用地となり、2002年2月から3月にかけて面的な調査を実施した。江戸時代

第2節 整理・報告書作成の経緯

の宅地境の施設、室町時代の整地層、平安時代に埋没した流路（流路F 2550の南西延長）を検出した。

4 調査体制

1997年度から2001年度まで調査を担当した職員は以下の通りである。

年度	所長	調査課長	担当係長	担当職員
1997年度	川上 貢	鈴木久男	平方幸雄	丸川義広・能芝 勉
1998年度	川上 貢	鈴木久男	磯部 勝 菅田 薫	丸川義広・能芝 勉 辻 裕司・木下保明・藤村雅美 小檜山一良・平田 泰
1999年度	川上 貢	鈴木久男	磯部 勝 菅田 薫	丸川義広・能芝 勉・木下保明 藤村雅美・小檜山一良・平田 泰 小松武彦・長戸満男・加納敬二
2000年度	川上 貢	鈴木久男	磯部 勝 菅田 薫	丸川義広・能芝 勉・木下保明 藤村雅美・小檜山一良・小松武彦 長戸満男・加納敬二・内田好昭 布川豊治・大槻明義
2001年度	川上 貢	鈴木久男	磯部 勝	内田好昭・布川豊治・大槻明義
基準点設置	辻 純一・宮原健吾			
写真撮影	村井伸也・幸明綾子			（作業風景並びに遺構の一部は調査担当者が撮影）

発掘調査に関連する業者としては以下がある。

(株)リンク、明輝建設、(株)かんこう、全京都建設協同組合、(株)大高建設

第2節 整理・報告書作成の経緯

調査は1997年5月から2002年3月にわたって実施した。その結果、古墳時代の流路、平安時代から鎌倉時代の道路や園池、室町時代の堀が検出された。そして、当地は安土桃山時代以降、公家町が形成された地域で、関連した道路、建物、池も検出された。遺物も古墳時代から江戸時代、特に江戸時代の遺物が多量に出土した。これらの成果をもとに報告書を作成した。

1 作成方針

報告書作成の方針は、1. 調査で明らかになった平安京北東域の古墳時代から江戸時代の土地利用・遺構の変遷を報告する。2. 平安時代から室町時代の当地域と周辺遺跡との関連や変遷を考える上で重要な遺物を報告する。3. 公家町から出土した遺物は京都の近世土器研究にとって貴重な資料であることから基準資料となるような遺物を主に報告するなどとした。

なお、報告書は公家町成立以前の古墳時代から室町・戦国期までを第1分冊とし、公家町が成立する安土桃山時代から江戸時代を第2分冊として作成することとした。

2 作業経過

整理作業は原則として調査が終了後、継続して行なった。ただし、2次・3次調査は調査中に、一部を併行して行ない、4次以降については平成12年度の後半から継続して整理作業を行なった（表2参照）。

遺物の整理作業は、まず出土した遺物をすべて洗浄し、その後、遺物の収納単位（箱・袋）で分類・点検し、遺構の時期の確定と整理台帳を作成する分類1の作業を行なった。さらに、主要遺構や遺物がまとまって出土した一括性の高い遺構を抽出し、遺物の組成や破片数の集計を行なう分類2の作業を行なった。次に、分類2を行なった遺構の遺物を接合し復元する復元1の作業は、遺物の収納単位を崩して遺構全体の遺物で行なうため、接合前に遺構名、出土日を注記するマーキング作業を実施した後に行なった。また、その他の遺構から出土した重要な遺物は、個々に抽出して整理作業を行なった。金属製品については、大半は錆が付着していたので分類・整理作業の前に錆の除去を行なった。

復元1の作業後、実測可能なものは実測並びに拓本作業を行ない、その中から図版に掲載するものを選択し、第1分冊では石膏復元（復元2）、色付け、写真撮影を行なった。第2分冊は陶磁器類で紋様のあるものは実測図にデジタル写真を組み込み、トレースも兼ねることとした。

自然遺体（貝、魚、動物）は、整理・分析作業を富岡直人氏（岡山理科大学）に依頼した。ガラス製品は、整理・分析作業を独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所及び北野信彦氏（くらしき作陽大学）に依頼した。近世陶磁器類は、西田宏子氏（根津美術館）、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁資料館）に御教示を受けた。石製品の鑑定は、橋本清一氏（京都府立山城郷土資料館）に依頼した。

また、整理作業の期間短縮のため、遺物洗浄とマーキング作業の一部は遺物洗浄補助機械の導入や外部委託とした。

図面整理は遺物整理と並行して作業を進めた。現場で作成した図面の座標値や標高値の点検、平面図と断面図の整合の点検・調整を行ない、時代ごとの全体図（第2原図）を縮尺を統一して作成した。また、航空測量図と手書きの実測図が混在しているため、手書きの全体図はデジタル化して図面の統一性を図った。個別遺構図も点検・調整し、縮尺を統一して第2原図を作成した。

遺物図版作成にあたっては、遺物の一括性や時代の重複などを検討・調整して、図版を作成した。

遺構図版についても、遺構の時代や相互の関係などを検討・調整して作成した。なお、図版・挿図についてはすべてデジタルトレースとした。

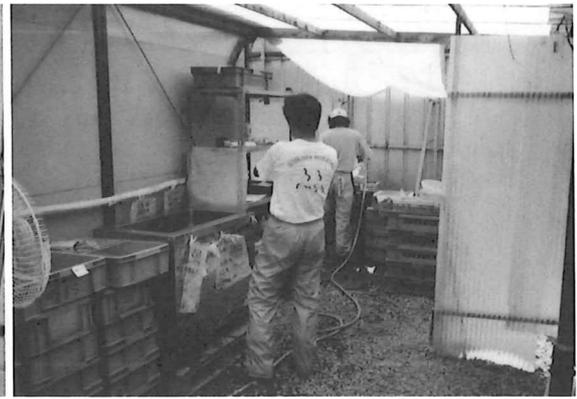
第2節 整理・報告書作成の経緯

表2 整理・報告書作成工程

	遺物 洗浄	遺物 分類 1・2 処理	遺物 復元 1・2 写真	図面 調整 トレース	遺物 実測 トレース	ランク別 分類		遺物 分類 1・2 処理	遺物 復元 1・2 写真	図面 調整 トレース	遺物 実測 トレース	図版 挿図	原稿 作成	ランク別 分類
1997年 6月							9月							
7月							10月							
1998年 12月							11月							
1999年 1月							12月							
2月							2002年 1月							
3月							2月							
1999年 5月							3月							
6月							4月							
7月							5月							
8月							6月							
9月							7月							
10月							8月							
2001年 2月							9月							
3月							10月							
4月							11月							
5月							12月							
6月							2003年 1月							
7月							2月							
8月							3月							



1 遺物洗浄作業



2 遺物洗浄補助機での遺物洗浄作業



3 外部委託の遺物洗浄作業



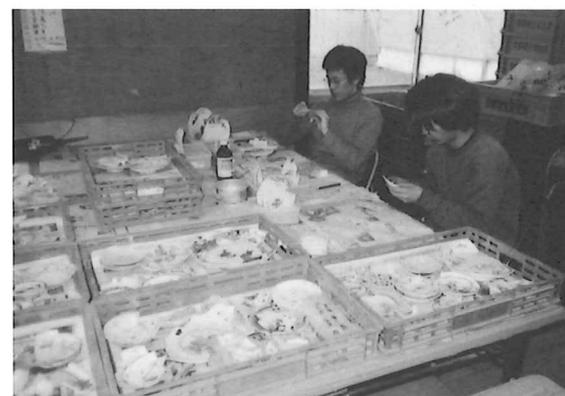
4 金属製品の錆落とし作業



5 遺物分類作業と台帳作成作業



6 マーキングされた遺物



7 遺物の復元1作業(接合)



8 台帳類の入力作業

写真1 整理作業風景1

第2節 整理・報告書作成の経緯



9 遺物の実測作業



10 遺物の復元2作業（石膏復元）



11 図面の調整作業



12 図版・挿図の作成作業



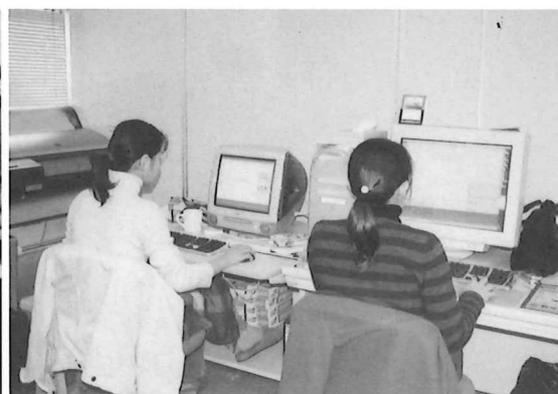
13 デジタルカメラによる遺物撮影作業



14 遺物実測図の入力作業



15 遺物実測図とデジタル写真との合成作業



16 図版・挿図の入力作業

写真2 整理作業風景2

3 作業体制

報告書作成にたずさわった職員は以下のとおりである。

所 長 川上 貢
 調査課長 鈴木久男
 調査係長 菅田 薫・磯部 勝・吉村正親・前田義明・辻 裕司・中村 敦
 整理担当者 木下保明・丸川義広・能芝 勉・藤村雅美・大立目道代・小檜山一良
 小松武彦・平田 泰・加納敬二・長戸満男・内田好昭・大槻明義・布川豊治
 西大條 哲・西村洋子・宮下則子・桜井みどり・児玉光世・モンペティ恭代
 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
 写真撮影 村井伸也・幸明綾子
 保存処理 竜子正彦・卜田健司

原稿執筆・編集作業 原稿の執筆は以下の分担で行なった（・印は編集担当者）。

第1分冊

平方幸雄 第1章－第1節1
 ・丸川義広 第1章－第1節1～4、第4章－第1・2・5・6・8節、
 第5章－第1・3節、第6章－第1節1～3・第2節1・2
 小松武彦 第1章－第2節1～4
 小檜山一良 第2章－第1節
 加納敬二 第2章－第2節、第4章－第3・4・7・9～11節、第5章－第2節、
 第6章－第1節2・第2節3・4
 布川豊治 第2章－第3節
 内田好昭 第3章、第4章－第12～16節
 木下保明 第4章－第1・2・5・6・8節
 大立目道代 第5章－第1・3節

第2分冊

・能芝 勉 第7章－第1節、第8章－第1・2・5・6・8節、第9章－第1節1・2・
 3(1)・(2)・(5)・(6)・(8)・(11)・第4節1、第11章－第4節
 ・内田好昭 第7章－第2節、第8章－第12・15～21節、第9章－第2・3節、第10章、
 第11章－第1節2・第6・7節
 ・小檜山一良 第8章－第3・7・9～11・22節、第9章－第1節2・3(3)・(7)・(9)、
 第11章－第1節1・第5節
 小松武彦 第8章－第4・7・13・14節、第9章－第1節3(4)・(7)・(10)、
 第11章－第3節
 卜田健司 第9章－第4節2
 丸川義広 第11章－第2節

菅田 薫 第12章

北野信彦（くらしき作陽大学） 付章1、付章3

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・肥塚隆保 付章2

岡山理科大学・富岡直人 付章4

英文要旨はモンペティ恭代が作成した。

整理作業に関連する業者としては以下がある。

(株) リンク、明輝建設、(株) かんこう、(株) 文化財サービス

4 謝辞

発掘調査並びに報告書作成に際して、下記の方々の指導と協力を頂いた。記して感謝する次第である（五十音順、敬称略）。

安芸毬子（東京大学埋蔵文化財調査室）、厚 秀雄（千代田区四番町歴史民俗資料館）、天谷賢一（福井市教育委員会）、荒川正明（出光美術館）、石神由貴（三田市教育委員会）、稲田和彦（龍谷大学）、宇野日出生（京都市歴史資料館）、植田直見（財団法人元興寺文化財研究所保存科学センター）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、岡 泰正（神戸市立博物館）、岡佳子（大手前大学）、小川 望（小平市教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、川口宏海（大手前大学）、日下正剛（徳島県埋蔵文化財センター）、國下多美樹（財団法人向日市埋蔵文化財センター）、木立雅朗（立命館大学）、北野隆亮（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）、高妻洋成（奈良文化財研究所）、佐藤 隆（大阪歴史博物館）、佐藤洋一郎（静岡大学）、清水みき（向日市教育委員会）、下村節子（財団法人枚方市文化財研究調査会）、鈴木裕子（株式会社四門）、角谷江津子（同志社女子大学）、積山 洋（財団法人大阪市文化財協会）、園 楽山、高畠 豊（大分市教育委員会）、高木博志（京都大学）、高山 優（港区教育委員会）、千葉 豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、長佐古真也（財団法人東京都生涯学習文化財団）、成瀬晃司（東京大学埋蔵文化財調査室）、西田宏子（根津美術館）、西山良平（京都大学）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、畑中英二（財団法人滋賀県文化財保護協会）、林 順一（土岐市埋蔵文化財センター）、原 秀樹（財団法人長岡市埋蔵文化財センター）、東中川忠美（佐賀県教育庁）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）、坊城俊周（社団法人霞会館）、松井 章（奈良文化財研究所）、松浦邦男、馬淵久夫（くらしき作陽大学）、水野和雄（福井県立朝倉氏遺跡資料館）、村上 隆（奈良文化財研究所）、村上伸之（有田町歴史民俗資料館）、村田 弘（財団法人和歌山県文化財センター）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、両角まり（町田市立博物館）、柳原承光（堂上会）、柳原従光、吉田 寛（大分県教育庁）、リチャード・L・ウィルソン（国際基督教大学）、和田浩爾（三重大学）

本報告以前に公表された出版物や講演会などの資料を以下に掲げる（※印を付したものは平成15年3月以後の刊行であるが、資料を補足するため編集段階で加えた）。

『現地説明会資料』

1. 『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料』1998年6月13日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
2. 『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料2』1998年10月24日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
付属資料：「平安京左京北辺四坊・京都御所東方公家屋敷街跡－第1回調査地、第2調査区の概要－」1998年10月24日 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
3. 『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料3』1999年7月10日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
付属資料：「平安京左京北辺四坊・京都御所東方公家屋敷群跡－第2次発掘調査の概要－」
4. 『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料4』2000年5月27日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
付属資料：「平安京左京北辺四坊・京都御所東方公家屋敷群跡－第4次調査地、第3調査区の概要－」2000年5月27日 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
5. 『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料5』2000年12月24日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
付属資料：「平安京左京北辺四坊・京都御所東方公家屋敷群跡－第5次調査地、第1調査区（GS5-1）の概要－」2000年12月24日 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

『京都市埋蔵文化財調査概要』

1. 「平安京左京北辺四坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年（試掘区を報告）
2. 「平安京左京北辺四坊」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年（A区・B区を報告）
3. 「平安京左京北辺四坊」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年（C区・D区を報告）

『京都市内遺跡立会調査概報』

1. 「平安京左京北辺四坊七町、一条四坊十六町（00HL228）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度 京都市文化市民局 2001年（インフラ試掘を報告）

『京都市考古資料館文化財講座資料』

1. 「京都御所東方公家屋敷群跡の発掘調査－西半分の公家屋敷遺構を中心に－」『第125回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館 2000年3月25日（丸川）
2. 「平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査の概要－東半分の公家屋敷遺構を中心に－」『第141回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館 2002年1月26日（小檜山）
3. 「京都御所東方公家屋敷群の調査」『第149回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館 2002年10月26日（内田）

『リーフレット京都』

1. 「発掘成果をふりかえって1999」『リーフレット京都』NO.134 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2000年2月

第2節 整理・報告書作成の経緯

2. 「発掘成果をふりかえって 2000」『リーフレット京都』NO.146 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2001年2月
3. 「賢瓶を探る」『リーフレット京都』NO.152 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2001年8月(卜田)
4. 「陶磁器から見える公家の生活」『リーフレット京都』NO.159 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2002年4月(小檜山)
- ※ 5. 「公家町の京焼」『リーフレット京都』NO.160 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2002年4月(能芝)
- ※ 6. 「公家町の遊び」『リーフレット京都』NO.164 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2002年8月(原山充志)
- ※ 7. 「『この世をば…』道長と白色土器」『リーフレット京都』NO.171 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年4月(丸川)
- ※ 8. 「公家町三条邸の家紋瓦」『リーフレット京都』NO.172 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年4月(内田)
9. 「法成寺の緑釉瓦」『リーフレット京都』NO.173 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年6月(加納)
10. 「乙訓の土師器皿」『リーフレット京都』NO.174 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年6月(加納)

京都市考古資料館における特別展、速報展パンフレット

1. 「公家の賢瓶」京都市考古資料館 速報展 平成12年6～8月
2. 「公家町を掘るー京都御所公家町跡の調査からー」京都市考古資料館平成13年度特別展
3. 「Front Stage 異国の風 ヨーロッパの品々」速報展(平成14年7月より配布)

『上京区公報』

1. 「上京の埋蔵文化財 迎賓館建設予定地の発掘調査」『上京・史蹟と文化』第20号 上京区文化振興会・上京区役所 2001年3月(丸川)
2. 「上京の埋蔵文化財 迎賓館建設予定地の発掘調査」『上京・史蹟と文化』第21号 上京区文化振興会・上京区役所 2001年8月(能芝)
3. 「上京散策 区内の発掘現場から 10.迎賓館建設予定地の発掘調査」『市民しんぶん上京区版』第63号 上京区役所 2001年3月

『京都御苑ニュース』

1. 「御苑内の発掘調査情報 その1」『京都御苑ニュース』第65号 財団法人国民公園保存協会 京都御苑保存会 2000年(平成12)4月
2. 「御苑内の発掘調査情報 その2」『京都御苑ニュース』第66号 財団法人国民公園保存協会 京都御苑保存会 2000年(平成12)6月

講演会や研究会などでの発表報告

1. 「京都御所周辺部の調査」「京都御苑内の発掘調査」実践・考古学～京都を掘る」朝日カルチャーセンター・京都 1999年5月(小檜山)
2. 「平安京左京四坊ー京都御所東方公家屋敷群跡ー発掘調査の概要」立命館大学 歴史考古学講座 2001年1月(小檜山)

3. 「京都市内の近世遺跡－近年の発掘調査から－」『江戸遺跡研究会 特別例会発表要旨』江戸遺跡研究会 2000年6月（能芝）
4. 「京都市内出土の近世陶磁」『近世の実年代資料』関西近世考古学研究会 2001年12月（能芝）
5. 「平安京北辺四坊出土の乙訓在地形土師器について」『第10回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集－住まいと移動の歴史』京都府埋蔵文化財研究会 2002年9月（加納・丸川）

その他

1. 園 楽山「『園家屋敷跡』の発掘」『らくざん』109 青山御流楽山会 2001年4月
2. 園 楽山「園家屋敷跡発掘調査－その2－」『らくざん』110 青山御流楽山会 2001年7月
3. 「京都御所東方公家町跡」『発掘された日本列島2001』新発見考古速報 朝日新聞社 2001年
4. 『異国の風－江戸時代京都が見たヨーロッパ』京都新聞社 2000年3月
5. 『こころの交流 朝鮮通信使』京都府京都文化博物館 2001年4月

第2章 調査地の位置と環境

第1節 自然環境

調査地の位置する京都御苑は京都盆地の北東寄りにあり、高野川と賀茂川の合流地点から南西約1km付近に当たる。付近一帯の地質は砂礫層からなり、高野川と賀茂川によって形成された複合扇状地である。高野川は北東から南西に流れ、比叡山から東山の東麓斜面を浸食し、土砂を下流に運搬・堆積する。賀茂川は北西から南東に流れ、北山の山間部斜面を浸食し、土砂を下流に運搬・堆積してきた。両河川は調査地の北東約1km付近で合流し、鴨川となって南流するが、その流域に扇状地堆積物である砂礫を大量に埋積させた結果、現在の地形が形づくられたのである。かつては調査地付近では東山を構成する花崗岩質の砂礫が含まれることで、高野川の古水流が京都の市街地方面まで入り込んでいたと考え、市街を南下する堀川などの古水流が賀茂川の元の流れであったこと、平安京遷都に際しては賀茂川の古水流を南東方向に付け替え、現在の流路となったとする「賀茂川付け替え説」が有力であったが、地層の年代判定が進んだ結果、現在では否定されつつある¹⁾。

調査地の無遺物層（以下、「地山」とする）は、黄色系の泥土が堆積する部分と褐色系の砂礫層が堆積する部分がみられた。さらに、泥土層が砂礫層の上部に堆積することも判明している（第3章を参照）。これらは、扇状地形成に起源をもつ砂礫が堆積した後、凹んだ箇所が湿地などとなり、そこに泥土層が堆積してできた地層であることを示している。その泥土層の供給元であるが、地質図などを見ると調査地の北西側、西賀茂から鷹峯にかけての範囲に「中位段丘」「低位段丘」、また対岸の上賀茂にも「低位段丘」が発達しているため、これら台地の泥土層が雨水による侵食・運搬作用を受け、ここに堆積するに至った可能性が高いと思われる。このように、調査地付近の黄色系泥土層を賀茂川起源の堆積物と考えるなら、調査地付近の堆積物は京都盆地で人類が活動を始める頃には既に高野川系の古水流が及んでいなかったことになり、京都盆地の古地形を復元する上でも重要な視点となりうる。

次に京都御苑一帯の起伏を示す等高線図（図3）をもとに地形の状態を検討しておこう。一帯は北から南に下がる傾斜地上に位置している。標高は北端の今出川付近が55m、南端の丸太町付近が45mであり、南北間の距離約1.3キロに対し高低差10mは大きな値といえる。これは京都御苑一帯が扇状地の扇頂から扇央付近にあたることを示している。また図3を見ると、北から南に一様に傾斜する一方で、現在の京都御所が舌状に張り出している様子が読み取れる。おおまかにみると、京都盆地の地形は北東側が高く、南西側に低いため、地形細部の特徴として指摘できる。京都御所の東方に位置する調査地付近においても、雨水は南東側に流れ出る状態であったが、これらも地形細部の特徴に起因するものである。図3によると、同じような舌状の張り出しは仙洞御所の南半においても認められる。こうした地形のわずかな高まりが自然要

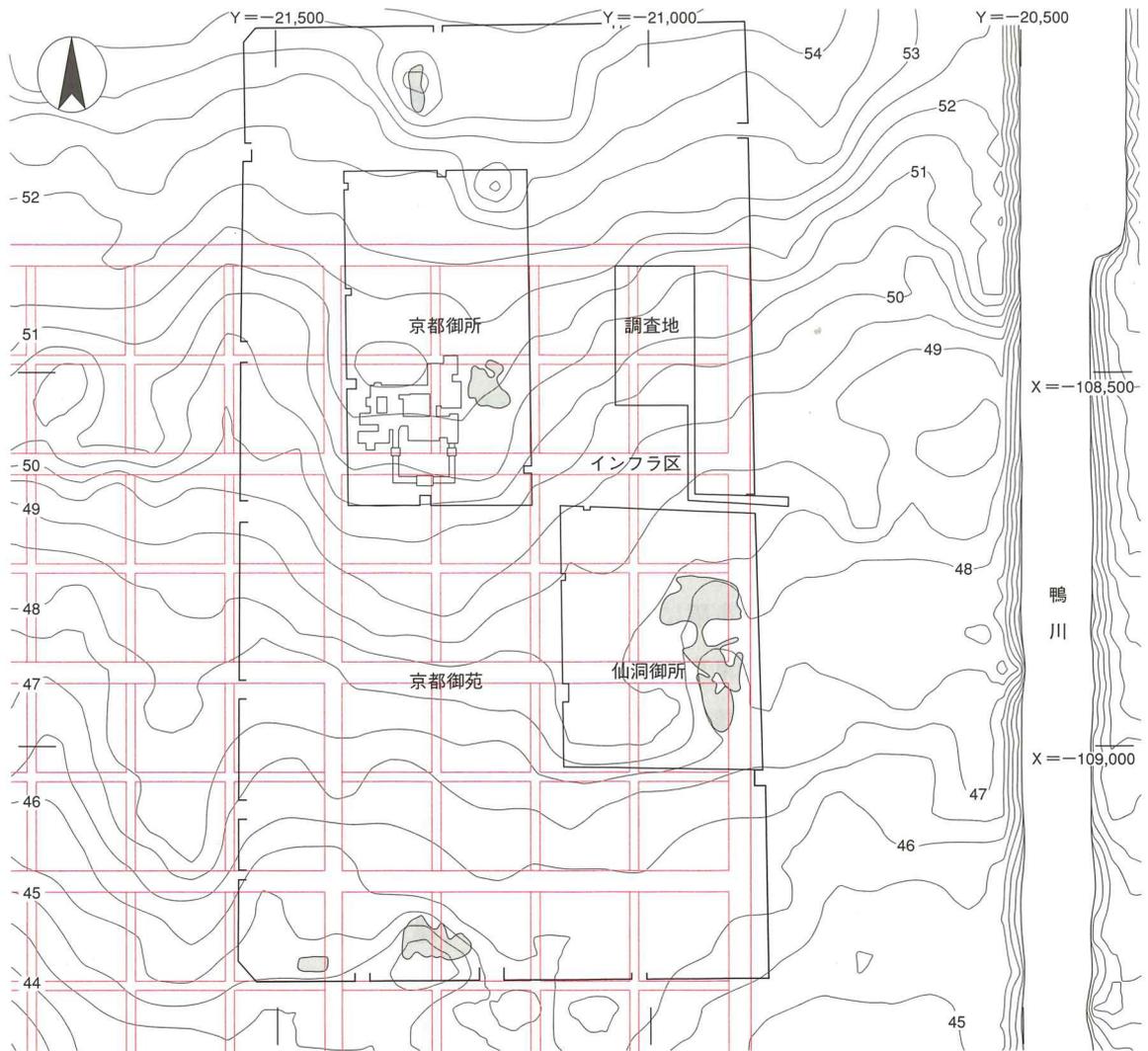


図3 調査地周辺の等高縮図（1：10,000、網は園池）

因の中で形成されたとは考えがたい。おそらく数度にわたる御所の焼失・再建に際しては、整地工事が繰り返されたであろうから、人為的な整地の結果として地形の高まりが形成されるに至ったのであろう。発掘調査では古墳時代の流路が数条検出されている。流路の方向はいずれも北東から南西に流出しており、現在の地表面の傾斜とは異なっている。しかし京都盆地本来の傾斜に沿うものであることは、先述したとおりであり、これら平安京以前の遺構の存在からも地形細部の特徴が人為的な営力で形成されたことがうかがわれる。また江戸時代においても鴨川が幾度となく氾濫したことは資料に詳しいが、発掘調査においても洪水によるとみられる粗砂の堆積箇所を数箇所を確認している。鴨川起源の洪水層が検出されることから、調査地付近が依然として洪水の危険にさらされる場所であったことがわかる。

今回の調査で多数の井戸を検出している。それらの資料から時代による地下水位の状況を検討することができた（第6章を参照）。平安時代から室町時代には井戸底の深さは46～47mの間に納まっている。江戸時代になっても45m台に達する例は少なく、この場所では近世までは地下水位の変化はさほどなかったといえる。しかし、現在では、開発に伴う様々な要因によって地表下18～20mの深度まで掘り下げないと良好な地下水が湧きでない状態になっている。

註

- 1) 横山卓雄『平安遷都と「鴨川つけかえ」－歴史と自然史の接点－』法政出版、1988年。

第2節 歴史的環境

現在の京都御苑は、四周を石垣で囲まれ市街地とは隔絶された空間が形成されている。この景観は明治2年（1869）の東京遷都により、御所周辺にあった公家町の解体過程を経て、明治10年（1877）から約6年かけて石垣・芝生・植林が行なわれ整備されたことによる。調査地は京都御苑内の西北部に位置し、仙洞・大宮御所の北にあたる芝生地・ゲートボール場・饗宴場跡グラウンド、そして梨木神社南の東西道路、清和院御門から西方の道路などである。

以下、調査地付近の歴史的状況について、文献史料により概観する。

調査地は平安京の条坊では、北東隅にあたる左京北辺四坊の五町～八町、そして一条四坊十六町に該当する。また南北方向の東京極大路・富小路、東西方向の一条大路・正親町小路・土御門大路の推定地にもあたる。当該地は平安京北東隅にあたるが、藤原氏を中心に多くの公家邸宅が営まれた。五町は藤原公親や小野延貞の邸宅（いずれも平安時代後期）が、六・七町では藤原良房の邸宅「染殿」、清和上皇の後院「清和院」、八町は藤原褒子の邸宅「京極院」（いずれも平安時代前期）が、一条四坊十五・十六町には藤原道長の「土御門殿」が存在した。また、「土御門殿」の東向かい、東京極大路外に藤原道長によって建立された法成寺の存在が、多くの史料に推定されている。それらの邸宅、寺院について概説する。

染殿は『三代実録』貞観3年（861）2月18日条の記事に初見がみられ、四坊の六・七町を占める大邸宅で、庭園内の大池の存在が知られる。藤原良房の死後は、六町を具平親王の「土御門第」として譲渡し、また七町の南半部を清和院に提供し、結局七町の北半部を占めるのみとなったらしい。

清和院は、『三代実録』元慶元年（877）3月24日条の記事が初見である。清和上皇の崩御以降は源重信・経信から源道時へと伝領され、そして白河法皇の皇女・官子内親王の御所となり、その後は寺院として存続し、江戸時代初めには移転している。江戸時代の内裏九門の一つであった現在の清和院御門は、この清和院に由来している。

京極殿は、平安時代前期、宇多天皇の妃であった藤原褒子の邸宅であった。また八町の東南部の四分の一町には右大臣藤原顕忠の邸宅があったとされている。

土御門殿は一条四坊十六町にあった藤原道長の邸宅で、長徳2～3年（996～997）に十五町を加え拡大している。長和5年（1016）、長元4年（1031）、長久元年（1040）、天喜2年（1054）の四度にわたり焼失している。その間、後朱雀天皇、後冷泉天皇などの里内裏として使用された。土御門殿の旧地は、現在の仙洞御所の北半に該当している。

法成寺は寛仁3年（1019）、藤原道長によって阿弥陀堂の造営から開始され当初、無量寿院と称していたが、治安3年（1023）以来、本格的な寺院として各堂舎の建立、寺域も拡大され、

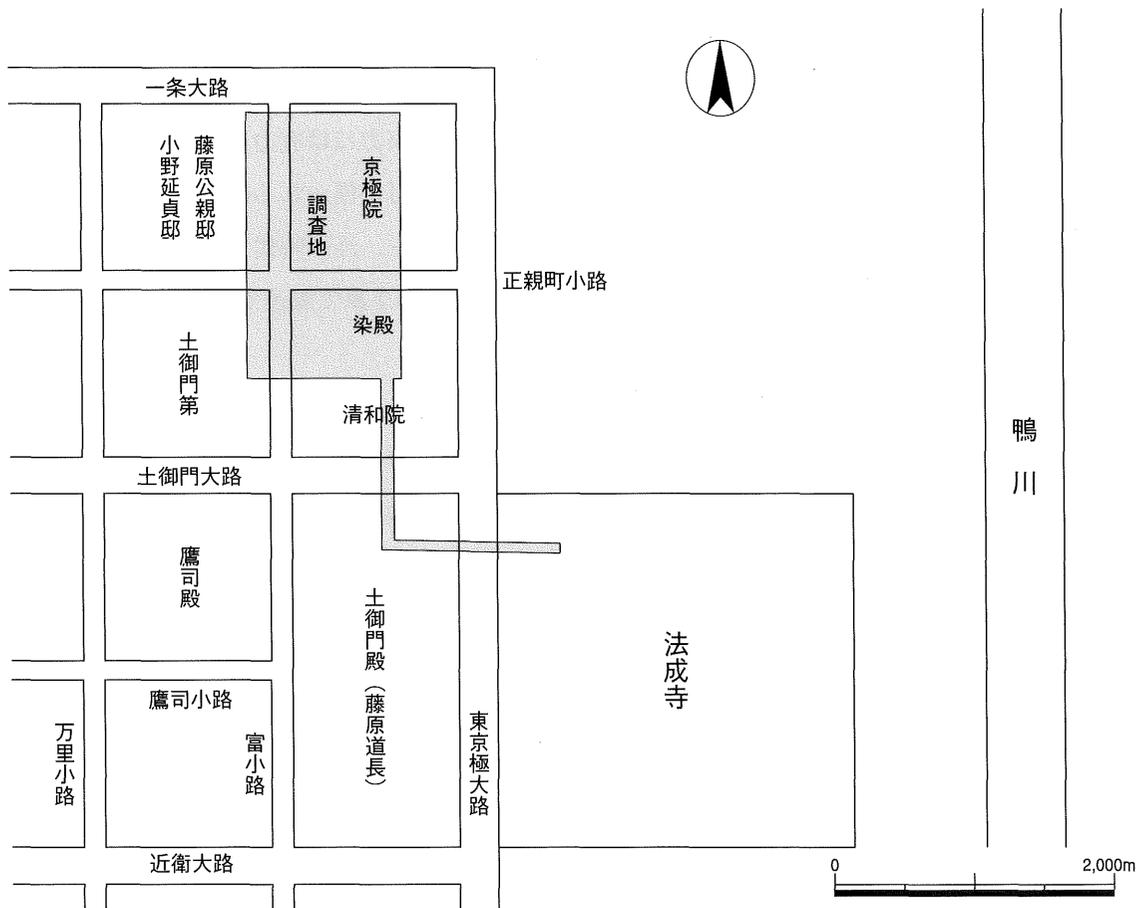


図4 調査地周辺図

法成寺として整備されていく。寺域は東西二町、南北三町の六町規模であったとされ、土御門大路末、東京極大路の外側に位置した。天喜5年（1057）には伽藍も完成していたが、翌年の康平元年（1058）、堂塔伽藍が焼亡した。同2年には藤原頼通が以前よりも整備した状態で再建している。その後、鎌倉時代末の元弘3年（1333）に焼亡し、以後は藤原氏の衰退も伴ない廃絶した。

鎌倉時代の調査地周辺は、藤原邦綱邸の後身・土御門東洞院殿を中心に公家・武家の邸宅地として推移していく。一方、平安宮の内裏は安貞元年（1227）に類焼し、以後再建されず荒廃し、「内野」と呼ばれるようになる。鎌倉時代中期には、里内裏が内裏そのものとなっていく。元弘元年（1331）光厳天皇即位以後は、土御門東洞院殿が北朝方の内裏として、機能するようになり、明德3年（1392）、南朝（後龜山天皇）より三種の神器が土御門殿に渡され、南北両朝が統一されたことにより、内裏として固定された。これが現在の京都御所のもとになる。

室町時代中期にあたる応永32年（1425）の「酒屋交名」（北野天満宮史料）には、一条京極西南に次郎入道という「酒屋」の居住が知られ、この時期には調査地一帯は、町家化していたとみられる。また応仁の乱から室町時代末期にかけては、たびたび朝廷は幕府に命じて、禁裏（御所）周辺に濠を掘らせ、整備させている。

桃山時代の永禄13年（1570）からは、入京を果たした織田信長が御所の修造を実施した。これが「永禄度の内裏造営」である。さらに天正17年（1589）には、豊臣秀吉によって「天正度

第3節 周辺の調査

の内裏造営」が行なわれ、御所の周辺に公家衆を集住させた。当地域に公家町が出現するのは、これ以後である。なお、室町時代後期（戦国期）には御所周辺には多くの公家邸・武家邸が集中する所であった。これらは主に御所西方に集中しており、東方には有力な公家・武将の邸宅は知られていない。このことはやがて豊臣秀吉によって公家町が開かれる際、公家衆を集住させる原因となったものと思われる。公家町成立の歴史的経過や、江戸時代全般の公家町の変遷と、京都御苑に至る明治以後の整備については、第2分冊の第7章で概述する。

歴史的状況については、以下の文献を参考にした。

『京都市の地名』日本歴史地名大系 第27巻 平凡社 1979年

『平安時代史事典』財団法人古代学協会・古代学研究所編 角川書店 1994年

『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所編 角川書店 1994年

太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1992年

杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年

福山敏男『寺院建築の研究 下』中央公論美術出版 1983年

第3節 周辺の調査

前述のように、今回の調査地が位置する国民公園「京都御苑」は、特別な景観として保存されているため、都市開発は行なわれていない。したがって発掘調査もあまりされていない。そのためかなり広い範囲の既往調査例を取り上げた（図5、表3を参照）。

京都御苑内の発掘調査は少ない。それらの発掘調査例をあげていく。まず左京北辺四坊の一条大路推定地（1、2）での平安博物館による調査では、一条大路の路面や溝、平安・鎌倉～江戸時代の遺構面・5面を検出している。間之町口（3）の調査では、近世の池跡が、出水口（5）の調査では、近世の石列と石組溝が、京都御所内（21）の調査では、近世の内裏関連の遺構と遺物、平安時代の遺物が出土している。京都御所外の西（44・北辺四坊二町）の調査では、弥生時代後期の遺構、中世の町家遺構、近世の東洞院大路跡などを検出している。京都御所外の南東（45）の調査では、江戸時代前期の公家屋敷跡が、仙洞御所外の北（46）の調査では、江戸時代初期のL字状溝、江戸時代前期の鷹司殿邸宅の遺構を検出している。

その他に現状変更に伴う立会調査が数多く行なわれている。調査成果は「点」にならざるを得ないが、主なものをあげていく。平安時代の包含層は、北辺四坊（42、43-3）、北辺・一条三坊（70）、一条四坊（4-2、27、28）、一条三坊（18-2）、二条四坊（14-1、20-2）などの調査で検出している。中世の遺構は、一条四坊十二町（26）の調査では、中世の路面4層以上が、二条四坊十六町（17）の調査では、東京極大路西側溝などを検出している。中世の包含層は、北辺四坊七町（43-6）、一条三坊十三町（12-1）、二条三坊十六町（40）、二条四坊十六町（18-1）などの調査で検出している。近世の遺構や包含層、焼土層は、京都御苑内

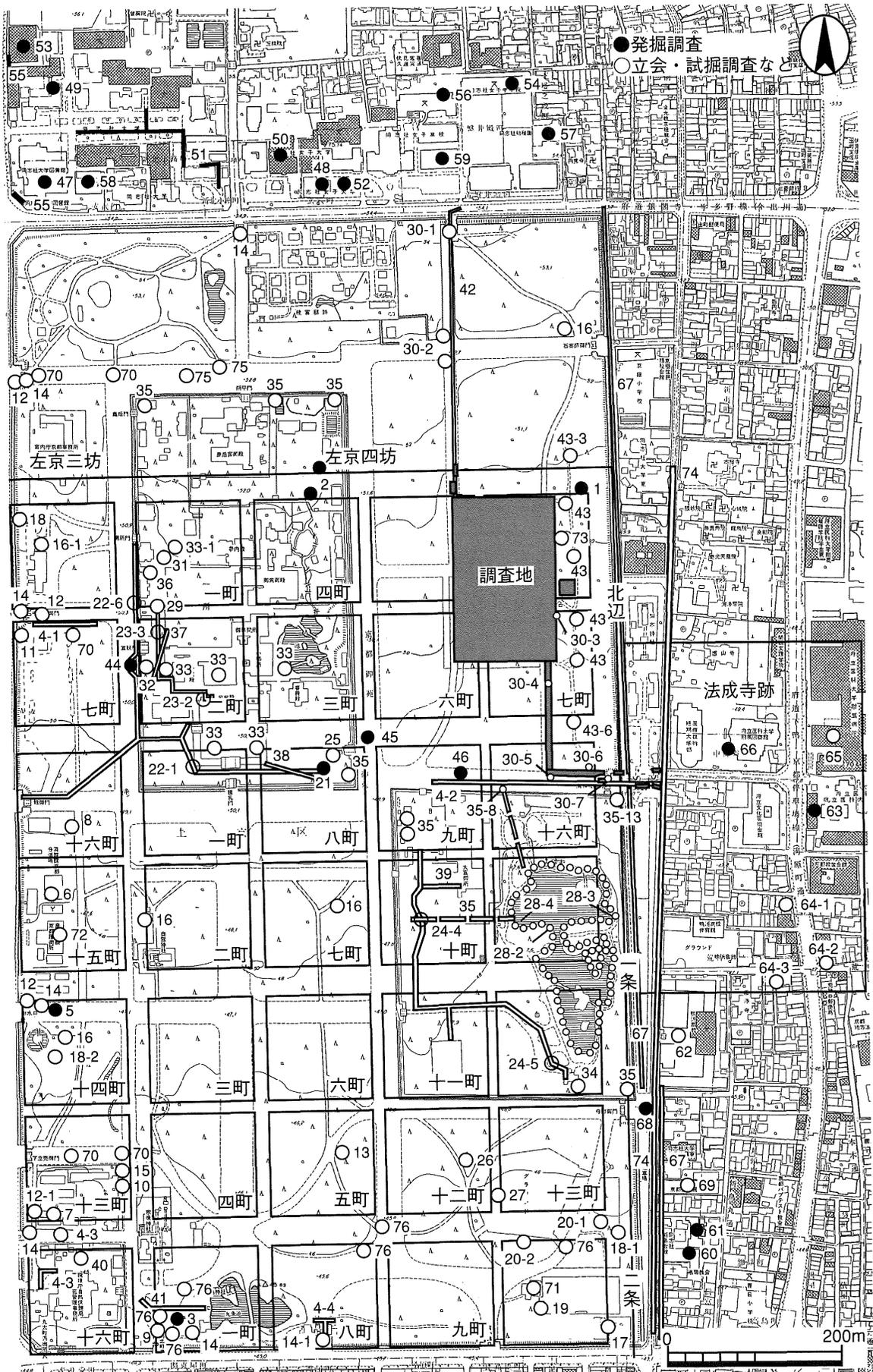


図5 周辺調査地点位置図

第3節 周辺の調査

表3 調査一覧表

番号	左京条坊・遺跡	方法	調査期間	調査概要	文献
1	平安京東北隅	発掘	1975.1.27～3.7	深さ0.8mで平安時代の一条大路路面と溝。	1
2	北辺四坊四町・一条大路	発掘	1975.11.11～12.20	平安時代後期～江戸時代後半の遺構面（5面）と平安時代の路面や溝。	2
3	二条四坊一町	発掘	1983.1.19～1.20	近世の池状遺構。	3
4	一条四坊九町・十六町ほか	立会	1983.10.1～12.26	4-1.近世層と石垣状遺構。 4-2.近世の焼土層と洪水層、平安時代の包含層。 4-3.近世の川原石護岸の南北溝。4-4.攪乱。	4
5	一条三坊十四町	発掘	1983.11.15～11.22	近世の石列と石組溝。	5
6	一条三坊十五町	立会	1987.2.4	攪乱のみ	6
7	一条三坊十三町	試掘	1988.2.24	深さ0.25mで庭石、0.7m以下時期不明の濠。	7
8	一条三坊十六町	立会	1988.12.16	深さ0.15mで江戸時代の包含層。	7
9	二条四坊一町	立会	1989.12.20	深さ0.43mで時期不明の石組。	8
10	一条三坊十三町	立会	1990.11.16	深さ0.8m以下、包含層。	9
11	北辺三坊七町	立会	1991.2.15	深さ1.65mで時期不明の包含層。	10
12	一条三坊十三町	立会	1991.8.20～9.9	12-1.深さ0.95m以下、鎌倉時代・時期不明包含層。	10
13	一条四坊五町	立会	1991.12.18	深さ0.77mで江戸時代の路面。	10
14	二条四坊八町	立会	1991.8.20～1992.2.4	14-1.深さ0.88m以下、平安時代後期の包含層、時期不明の路面。	11
15	一条三坊十三町	立会	1992.11.16	深さ0.6m以下、流れ堆積。	11
16	北辺三坊八町	立会	1993.5.6～20	16-1.深さ0.4m以下、包含層、柱穴・根石。	12
17	二条四坊十六町	立会	1995.2.9～2.10	深さ0.85m～東京極大路路面、1.77mで鎌倉時代の南北溝、東京極大路西側溝。	13
18	一条三坊十四町 二条四坊十六町	立会	1996.5.17、6.3・4・6	18-1.室町・桃山時代の包含層。 18-2.近世の土壌、平安～室町時代の包含層。	14
19	二条四坊十六町	立会	1997.6.23	深さ0.55mで江戸時代の包含層。	15
20	一条四坊十三町 二条四坊十六町	立会	1998.1.16～3.2	20-1.江戸時代の陶磁器多数とヨーロッパ陶器。 20-2.平安時代の包含層。	16
21	一条四坊八町	発掘	1999.3.1～3.26	近世内裏関連の遺構、遺物と平安時代の遺物。	17
22	北辺四坊一町 一条四坊一町	立会	1999.1.26～29、 2.26～3.5	22-1.京都御所宝永期造営段階の石敷。 22-6.江戸時代の東洞院通の路面。	18
23	北辺四坊二町	立会	1999.2.22・26,3.1～3.10	23-2.嘉永大火の層。23-3.近世の石組東西溝。	18
24	一条四坊十町・十四町	立会	1999.7.15～8.24	24-4.近世の東西溝。24-5.近世の石組南北溝。	18
25	一条四坊八町	立会	1999.9.27、10.18	嘉永の大火の焼土を含む整地層。	19
26	一条四坊十二町	立会	1999.1.25～3.26	花崗岩の石列。中世の路面。	19
27	一条四坊十三町	立会	1999.8.15～11.9	平安時代の包含層。江戸時代の石組溝、円形石室。 ヨーロッパ陶器。	19
28	一条四坊十四町	立会	2000.1.25～3.7	深さ0.3mで近世の包含層、0.5mで平安～鎌倉時代の包含層。 地表面で石組溝。	20
29	北辺四坊一町	立会	2000.3.7	深さ0.35mで江戸時代の包含層。	20
30	北辺四坊七町 一条四坊十六町 ほか	立会	2000.10.31～11.13	30-1.江戸時代のゴミ穴。30-2.平安末期～鎌倉時代の整地層。 30-4.0.88mで平安時代後期の遺物包含層と深さ0.7mで江戸時代の二階町通り西側溝石組。30-5.深さ0.3mで江戸時代焼土層。 30-6.池状堆積と江戸時代の石組溝。	21
31	北辺四坊一町	立会	2000.10.25～2001.1.22	江戸時代末期の包含層。	22
32	北辺四坊二町	立会	2001.1.26	花崗岩の建物基壇。	22
33	一条四坊一町	立会	2001.1.22	33-1.江戸時代末期の焼土層と包含層。	22
34	一条四坊十四町	立会	2001.1.16	深さ0.35mまで現代盛土。	22
35	一条四坊十六町	立会	2001.3.6～4.10	35-8.江戸時代末期、中期の焼土層、江戸時代前期の流れ堆積。 35-13.築地塀基礎下で石組。	22
36	北辺四坊一町	立会	2001.10.23	深さ0.4mまで現代盛土。	22
37	北辺四坊二町	立会	2001.9.4～9.6・11	深さ1mで時期不明の包含層。	22
38	一条四坊八町	立会	2001.9.21・25	深さ1.15mで焼土を含むにぶい黄褐色泥砂層。	22
39	一条四坊十町	立会	2001.9.17・20・25	深さ0.2mで焼土を含む整地層。	22
40	二条三坊十六町	立会	2001.11.27～29	深さ0.6mで室町時代後期の包含層。	22
41	二条四坊一町	立会	2001.6.11、7.5	深さ0.44mで江戸時代後期の包含層。	22

42	北辺四坊五町	立会	2001.8.23~10.3	東西街路の路面と側溝。中筋通の路面と東側溝の石組。 平安・室町時代の包含層。	22
43	北辺四坊七町・ 八町隣接地	立会	2001.5.25~6.1	43-3.平安時代の包含層。 43-6.鎌倉後期と室町時代前期の包含層。	22
44	北辺四坊二町・ 東洞院大路	発掘	2000.11.20~12.22	弥生時代後期の遺構、中世の町屋遺構、近世の道路跡。	24
45	一条四坊八町・ 九町・土御門大路	発掘	2001.9.17~10.19	江戸時代前期の公家屋敷跡。	23
46	一条四坊九町	発掘	2002.7.25~9.1	江戸時代初期のL字状溝、前期の鷹司殿邸宅の遺構。	23
47	旧大徳寺家跡	発掘	1972.9.15~10.2	江戸時代後期の公家屋敷跡と近世の遺物（陶磁器など）。	25
48	旧伏見宮家跡	発掘	1974.12.16~1975.1.31	室町時代後半~江戸時代の遺構と遺物。	26
49	相国寺旧境内	発掘	1975.6.14~7.15	近世の遺構面。江戸時代末の薩摩藩屋敷。	27
50	旧伏見宮家跡	発掘	1975.9.11~10.24	近世の甕棺墓群。古墳（須恵器）~江戸時代の遺物。	28
51	相国寺旧境内、 旧町屋跡	発掘	1976.2.13~3.13	近世の井戸などの遺構と中世~近世の遺物。	29
52	相国寺旧境内、 旧伏見宮家跡	発掘	1976.3.15~6.30	中世~近世の土壙墓群、近世の公家屋敷跡。 縄文~近世遺物、特に近世陶磁器が多数。	29
53	相国寺旧境内	発掘	1976.6.10~9.29	相国寺旧境内西辺の溝、近世の町屋跡、幕末薩摩藩邸の遺構。 多数の近世遺物。	30
54	常盤井殿遺跡、 旧二条家跡	発掘	1997.9.26~11.26	平安末~室町前期と桃山~江戸時代の遺構群。 それに伴う遺物、特に近世陶磁器一括遺物（多数）。	32
55	相国寺旧境内、 旧竹内家跡など	発掘	1979年度	南口・中世の遺構と近世の公家屋敷跡遺構と一括遺物。 北口・立会調査で中世の遺構。	34
56	常盤井殿遺跡、 旧二条家跡	発掘	1979.2.25~4.4	近世の遺構と遺物（公家二条家跡と多数の陶磁器一括遺物）、 中世末~近世初頭の墓地など。	38
57	京外北、 旧中井家跡	発掘	1979.8月~11月	近世の公家屋敷跡（二条家）の居住区遺構と遺物。 多数の一括遺物、陶磁器など。中世の墓地跡。	39
58	相国寺旧境内、 旧藤谷家跡	発掘	1981年度	江戸時代の地割り石組溝、公家屋敷の遺構。 桃山時代の鋳造関係遺構群。	40
59	常盤井殿遺跡、 旧二条家跡	発掘	1991.6.13~10.31	江戸時代の御国母様下屋敷の遺構と公家・二条家に関連する遺構 （二条家のごみ穴など）と遺物（多数の陶磁器など）。	42
60	京外東、 旧中井家跡	発掘	1984年	18C後半の武家屋敷中井家の遺構群。寺跡の遺構と一括遺物 （17世紀後半から18世紀初頭の陶磁器など）。 平安時代後期の土壙と遺物。	40
61	京外東、 旧中井家跡	発掘	1991.11.11~1992.1.31	宝永大火後の中井家移転後の遺構群と遺物。 それ以前の信行寺の遺構群と江戸時代の陶磁器の一括遺物。	42
62	法成寺跡隣接地	採集	1934	平安時代中期~後期の瓦を多数採集。	37
63	法成寺跡	発掘	1976.9.21~10.7	江戸後期の層、以下は深さ約4.5mまで砂礫層。一部立会。	31
64	法成寺跡	立会	1979.6.20、11.24、12.20	遺構、遺物ともになし。	43
65	法成寺跡	立会	1981.7.31~10.14	表土下1mまで盛土、4mまで鴨川の洪水砂礫層。江戸時代の瓦と 平安時代の須恵器、瓦が出土した。	35
66	法成寺跡	発掘	1-1982.3.2~3.31 2-1982.11.5~12.9 3-1983.3.10~19	66-1.墓壇群と主に江戸時代後期以降の遺物。 66-2.近世の遺構、石組井戸、柱列など。 66-3.東西溝。全ての調査区で法成寺関連の遺構はなかった。	36
67	法成寺跡隣接地	立会	1988.1.25~3.30	鴨沂高校より南側で平安時代末期~鎌倉時代の池状堆積層。	41
68	京外東隣接地	発掘	1978.12.1~25	中世~近世の土壙、溝（推定「中川」）。	45
69	京外東隣接地	試掘	1979.7.26~8.21	江戸時代中期以降の遺構群。中世の遺構。洪水層。	33
70	北辺・一条三坊	立会	1980.6.25~7.21	近世層と平安時代後期の層。	44
71	二条四坊十六町	立会	1980.11.28	江戸時代、鎌倉時代の層。	44
72	一条三坊十五町	立会	1975.2.3~2.6	未報告	45
73	北辺四坊八町	立会	1978.12.19	未報告	45
74	京外東隣接地	立会	1979.2.27	未報告	45
75	北辺四坊隣接地	立会	1980.6.25~7.21	未報告	45
76	二条四坊	立会	1981.6.25、7.1~21	未報告	45

第3節 周辺の調査

で数多く検出している。その中でも京都御所内の調査（2、21、22、23など）や、仙洞御所内の調査（24、35など）では、各年代の造営に関連する遺構群を検出しており、御所の変遷を知る上で有効な資料である。また調査地近くでは、二階町通りの石組溝（30-4）、石組溝と池状堆積（30-6）、中筋通の路面と東側溝（42）などの遺構を検出している。以上のことから、京都御苑内は、近世遺構が良好な状態で残っていることが伺える。

法成寺跡は、現鴨沂高校正門（西門）内の校舎玄関前での砂利採取時に地表下約2mから、平安時代中期～後期の瓦が多数、採集された（62）。初めてのまとまった出土遺物であることから、古文獻上のみの存在が実在のものとなった。しかし推定地（『京都市遺跡地図台帳』1996年版による）の発掘調査、立会調査では、平安時代の遺構は検出されていない。法成寺跡を含む京外東隣接地の調査では、法成寺跡推定地外の南側隣接地（60、67）で、平安時代末～鎌倉時代の遺構を検出している。中世の遺構は、寺町御門（68）の調査や、京都市歴史資料館建設時の調査（69）で検出している。近世の遺構は、洪水層とともに各所の調査で検出している。特に新島会館建設時の調査（60、61）では、武家屋敷（中井家跡）の遺構と一括遺物が出土している。

同志社今出川校地内の調査では、中世から近世にかかる遺構としては、相国寺旧境内と墓地関連の遺構を検出している。江戸時代の遺構は、二条家跡などの公卿屋敷（56、57他）の遺構を検出している。それらに伴って出土した一括遺物、特に多数の陶磁器類は、武家屋敷（中井家跡）の遺構に伴って出土した一括遺物とともに、京・信楽焼系陶器や肥前系磁器の生産と消費を知る上で有効な編年資料になっている。

なお個々の調査については調査一覧表を参照されたい。

表3の文献（京都御苑内）

1. 近藤喬一・松井忠春「平安京東北隅一条大路・東京極大路の調査」『古代文化』第27巻6号 古代学協会 1975年
2. 松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』第28巻9号 古代学協会 1976年
3. 久世康博「左京二条四坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
4. 百瀬正恒「左京一条三・四坊・二条三・四坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
5. 磯部勝「左京一条三坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
6. 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
7. 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
8. 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年

9. 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
10. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
11. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
12. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
13. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
14. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
15. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
16. 能芝勉・丸川義広「平安京左京一条四坊・二条四坊」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
17. 長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
18. 吉本健吾・竜子正彦「平安京左京北辺四坊二町、一条三坊十六町、四坊一・九・十・十一・十四町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
19. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
20. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
21. 内田好昭・大槻明義・布川豊治「平安京左京北辺四坊七町、一条四坊十六町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
22. 『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
23. 『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
24. 上村和直「平安京左京北辺三坊」『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年

(京都御苑周辺)

25. 『同志社大学今出川校地発掘調査概報』同志社大学校地学術調査委員会 1972年
26. 『同志社女子大学校地発掘調査概報』同志社女子大学 1975年
27. 『同志社中学校々地内発掘調査概要』同志社中学校 1975年
28. 『同志社大学旧有隣館跡地発掘調査概要』同志社大学 1975年
29. 『今出川校地電話配線替に伴う発掘調査概要・岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要・同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査概要・同志社香里中・高等学校礼拝堂建設に伴う立合調査概要』同志社大学校地学術調査委員会 1976年
30. 『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』同志社大学校地学術調査委員会 1977年
31. 平良泰久「法成寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1977』京都府教育委員会 1977年
32. 『常盤井殿町遺跡発掘調査概報—同志社女子大学心和館増築地点の調査—』同志社女子大学・同志社大学校地学術調査委員会 1978年
33. 『平安京東限跡—京都市歴史資料館（仮称）建設に伴う試掘調査概要報告 昭和54年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年
34. 『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1981年
35. 小泉信吾「法成寺跡立会調査概要」『京都府遺跡調査概報』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財

第3節 周辺の調査

調査研究センター 1982年

36. 小池寛・長谷川達・神林豊・坂本守「法成寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第8冊
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
37. 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」福山敏男『寺院建築の研究（下）』中央公論美術出版
1983年
38. 『公家屋敷二条家北辺地点の調査—同志社女子中・高 黎明館増築に伴う発掘調査—』同志社女子
中学・高等学校、同志社大学校地学術調査委員会 1983年
39. 『公家屋敷二条家東辺地点の調査—同志社同窓会館・幼稚園新築に伴う調査—』同志社大学校地
学術調査委員会 1988年
40. 『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1990年
41. 家崎孝治「法成寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研
究所 1991年
42. 『京の公家屋敷と武家屋敷—同志社女子中・高校清和館地点、校友会新島会館別館地点の発掘調
査—』学校法人同志社 1994年

(その他)

43. 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告 昭和54年度』京都市
文化観光局文化財保護課 1980年
44. 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京
都市埋蔵文化財研究所 1981年
45. 『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』財団法人京都市埋蔵文化財
研究所 1982年

第3章 基本層序

調査時に記録した地層断面図は長大であるため、調査区外周の地層断面データを20mおきに柱状に模式化し、東西方向と南北方向に順次配列した断面模式図を作成した(図6～8)。これに基づいて、今回調査区の基本層序を概説する。

現地表と地山の高低差 調査区の現地表の標高はB区北西隅部で最も高く、51.8～51.9mある。また、最も標高が低い地点はV区、X区付近で48.8～48.9mである。調査範囲内で約3mの高低差が存在する。この高低差は、北から南へ下がる傾斜地形と西から東へと下がる傾斜地形が複合されたものの現れで、どちらの傾斜も緩やかで見ただけでは認識できない程度のものである。遺跡の基盤いわゆる「地山」を形成するのは、水成砂礫層と黄褐色系のシルト層(いわゆる「聚楽土」)である。地山の年代を知り得る材料がないが、おそらく表層は沖積層上部層に相当する地層と思われる。これが扇状地を形成する沖積層下部層もしくは低位段丘層に相当する地層に漸移するものと思われる。地山が最も高く検出される地点は、現地表と同じくB区北西隅部である。断12や断15など遺構による削平が少ない地点での地山の標高は50.3～50.4mである。また、地山が最も低く検出される地点も、やはりV区、W区付近である。この地点の調査では発掘深の制限により地山を検出できなかったが、周囲の立会調査データを援用すれば、地山の標高は47.0～47.1mである。ただし、V区、W区付近は鴨川の氾濫原内に位置する可能性があるため、この地点で確認している水成砂礫層は極めて新しい時代の堆積物であるかもしれない。

以上から、現地表に現れた高低差は、調査地において人間の営みが始まる以前の自然地形を反映するものであることが明らかである。北から南へ下がる傾斜は、断14～断7、断19～断26、断27～断30の連続断面に表現される。この傾斜は京都盆地全体の地形を反映するものである。西から東へ下がる傾斜は、断6～断1、断15～断18、断31～断36の連続断面に表現される。この傾斜は鴨川右岸の小扇状地群の高まりから鴨川氾濫原に向かって下る傾斜である。このような自然地形上に遺跡を形成する文化層の累積がみられるのである。

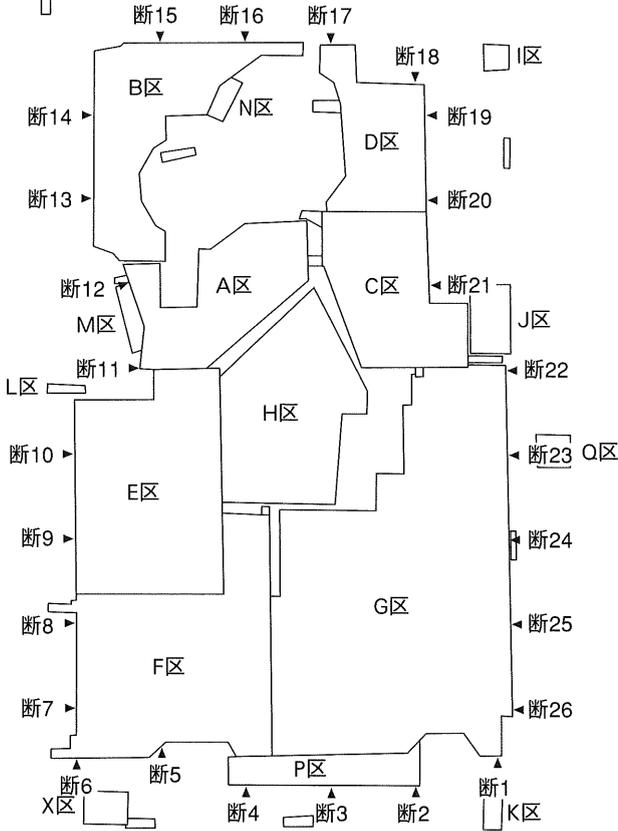
文化層の堆積 文化層の堆積は、自然地形の高低差を縮める方向性で進行している。現地表と地山の標高が高い断12、断13、断15付近では、地山から幕末期までの文化層の堆積は0.7～1.0mである。他方、現地表と地山の標高が低い断35、断36付近では、地山から幕末期の文化層の堆積が1.5～2.0mに及ぶ。微高地である調査区北西部より、微低地である調査区南東部のほうにより活発な堆積作用の進行がみられる。累積する文化層の大半は人為的に積み上げられた整地層で、これに洪水起源と思われるいくつかの水成砂礫～シルト層が挟在する。調査では、古墳時代前期以降の遺物が出土しており、調査地点付近で古くから人間の活動があったことがわかる。ところが、文化層の堆積は平安時代以降に開始され、それ以前にはみられない。自然地形上に文化層を堆積させたのは、平安京造営以後の都市生活の展開によるものであることが明

Y=-21,200

Y=-21,100

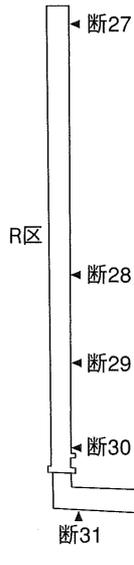
Y=-21,000

X=-108,300

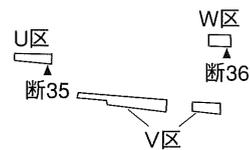


X=-108,400

X=-108,500



X=-108,600



X=-108,700

图6 断面模式地点图 (1:2,000)

らかである。

平安時代から室町時代の地層 平安時代から室町時代の文化層は、無数に穿たれた江戸時代の大型土壌や近代以降の攪乱などによって、大半が破壊されている。したがって、平安時代以降の通時的な文化層の堆積状況はよくわからない。しかし、整合的な整地層の累積が残る断10や断12などから断片的な情報は得ることができる。断10では、平安時代の整地層は無く、鎌倉～室町時代の整地層は約0.1m、江戸時代の整地層は約0.6m堆積する。断12では、平安時代の整地層は無く、鎌倉～室町時代の整地層は約0.2m、江戸時代の整地層は約0.6m堆積する。地山が比較的高位に残る断4、断20、断21、断22では、平安時代から室町時代に至る整地層が無く、江戸時代の整地層は0.2～0.6m堆積する。平安時代の整地層は断1、断2に0.4m程度の厚さで見られるが、これは平安時代の園池内の堆積である。この部分では、鎌倉～室町時代の整地層も約0.4mある。断5でも0.5m以上に及ぶ室町時代の整地層を認めるが、これは自然流路の流路F2550の右岸の低地を整地したものである。断15では室町時代の整地層が約0.4mあるが、これは富小路の路面整地層である。また、断34と断35では、0.6m以上に及ぶ室町時代後半の地層があるが、マンガン粒や鉄分の沈殿が顕著で耕作土と思われる。室町時代後半の東京極大路付近は、耕地化されていたものとする。

以上から、平面的に広がる平安時代の整地層は、ほとんど確認できないこと、鎌倉時代から室町時代の整地層も特殊な部分を除くと0.2m程度に留まること、などが指摘できる。これに対して、江戸時代の整地層は断1～断26の本体工事部分では、0.6m程度でほぼ一定している。古い時代の地層は新しい時代の地層によって削平されていく傾向に有るとはいえ、江戸時代における整地層の積み重ねが前代に比べて顕著であることは明らかである。

なお、室町時代の整地層はおおむね黒褐色～暗褐色の砂泥、平安時代から鎌倉時代の整地層はおおむねにぶい黄褐色の砂泥である。

江戸時代の堆積 上述のように調査地北半の本体工事部分では江戸時代の地層の厚さは0.6m程度で一定するが、南半の埋設管設置部分の調査区ではさらに厚い。埋設管設置部分は調査掘削深に制限が設けられたため、大半の地点で室町時代以前の地層を検出できなかったが、断27～断36部分では、江戸時代の堆積は明らかに1.2mを越えている。断27から断29に連続してみられる細かな地層は、江戸時代前期の二階町通の路面整地層である。この二階町通は、17世紀前半の公家町成立期から18世紀前半の宝永大火に伴う区画整理で移動されるまで約100年間使用された道路であるが、この期間に路面整地層の積み重ねが頻繁になされ堆積の厚さは約1.0mに及ぶ。断31から断35の上部に連続する細かな地層は、宝永大火以降の清和院通路面の重なりであるが、ここでも路面の堆積は約0.5mある。断36では江戸時代前期から後期まで一貫して清和院通の路面の重なりが観察できるが、ここでも1.0～1.1mの厚さで夥しい路面の累積がある。文化層の堆積が自然地形の高低差を縮める方向性で進行していることは既に述べたが、この作用の大半は江戸時代になされているのである。

江戸時代の焼土層と洪水層 江戸時代の地層は、細かな整地層の重なりからなる。また、整

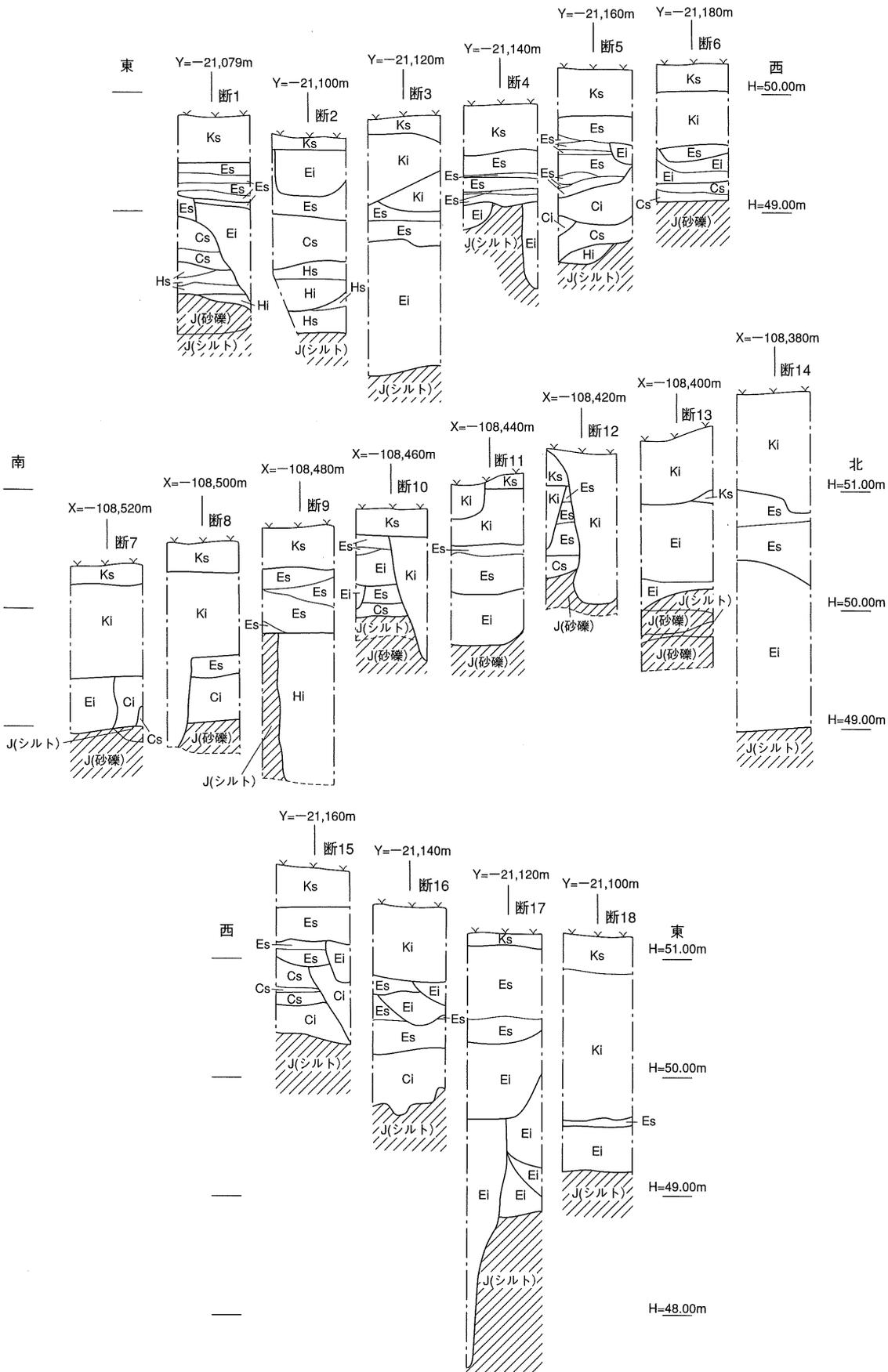


図7 断面模式図1 (Ks…近現代整地層、Ki…近現代遺構埋土、Es…江戸時代整地層、Ei…江戸時代遺構埋土、Cs…鎌倉～室町時代整地層、Ci…鎌倉～室町時代遺構埋土、Hs…平安時代整地層、Hi…平安時代遺構埋土、J…地山)

地は各宅地で個別に行なわれるため、宅地ごとに様相が異なる。また、ひとつの宅地内でも機能空間ごとに異なった整地がなされる。このようにして江戸時代の整地層はモザイク状に広がり、これがさらに、多くの土壌や攪乱によって分断されているため離れている整地層の先後関係を見極めることは困難である。しかし、各宅地の整地層は複数の火災時の壁土や屋根土起源の焼土層と洪水起源の水成砂礫層を挟みこんでいる。これらは、宅地境を越えて広がる堆積層である。焼土層と洪水層もまた、削平を受けて部分的にしか残存しない上に多くの遺構や攪乱によって分断されている。しかし、地層の先後関係と出土遺物に留意することで鍵層として評価することができる。とりわけ焼土層は、寛文元年の公家町火災（1661年）、寛文11年の公家町火災（1671年）、宝永大火（1708年）、天明大火（1788年）などに比定することが可能であり、調査に有効な地層情報となった。ここでは主に、江戸時代の整合的な堆積が厚く観察できる南半部の断面情報に基づいて、焼土層（Ⅰ～Ⅳ）と洪水層（Ⅰ～Ⅳ）を上位から順に記載しておく。これらは断32から断36の連続断面にも部分的に示されている。

焼土層Ⅰは北半の本体工事部分で局地的に残存する。層厚は厚いところで0.1m程度である。18世紀後半の遺物が出土し、天明大火起源の火災層と考える。焼土層Ⅱは調査地全域で局所的に残存する。層厚は厚いところで0.15m程度である。17世紀後半～18世紀前半の遺物が出土し、宝永大火起源の火災層と考える。焼土層Ⅲは、調査地南半部で検出される。層厚0.05～0.1mである。17世紀中頃～後半の遺物が出土する。寛文期の公家町火災に対応するものと思われるが、不明である。T区では、焼土層Ⅲと同じ層準に2つの火災層が確認できるが、他の調査区で確認できないので、焼土層Ⅲa、焼土層Ⅲbと呼称した。焼土層Ⅳも南半で確認できる。明確な焼土層を欠くが、後述する洪水層Ⅳの下面に検出される赤変した焼け面である。

洪水層は明確な遺物を含まない場合が多いが、上記の焼土層との関係によって年代を類推することができる。洪水層ⅠはW区、X区などで確認されている水成砂礫層で、層厚0.05～0.1mある。焼土層Ⅰとの関係は明確ではないが、焼土層Ⅱより上位にある。18世紀中頃～後半の洪水層である。洪水層Ⅱは調査地南半のT区、W区などで確認されている水成砂礫層で、層厚0.1m以下である。焼土層Ⅱと焼土層Ⅲの間にある。17世紀後半～18世紀前半の洪水層である。洪水層Ⅲは調査地南半のS区でのみ確認されている水成砂礫層で、層厚0.2m以下である。焼土層Ⅲより下にあり、以下に述べる洪水層Ⅳより上位にある別の水成層である。17世紀中頃の洪水層である。洪水層ⅣはS区、T区、U区、W区で確認できる水成砂礫層で、層厚は0.6m以上に及ぶ部分がある。17世紀前半の洪水層であろう。

なお、洪水層の分布が調査区南半に集中するのは、この地域が地層の残存状況が良好であることに加え、北半に比べ鴨川氾濫原に近い低地にあり、水害による被害を受けやすかったことによるであろう。また、いずれの洪水層も砂礫からなることは、山地の土砂崩れによる比重の高い泥流による被害であったことを伺わせる。

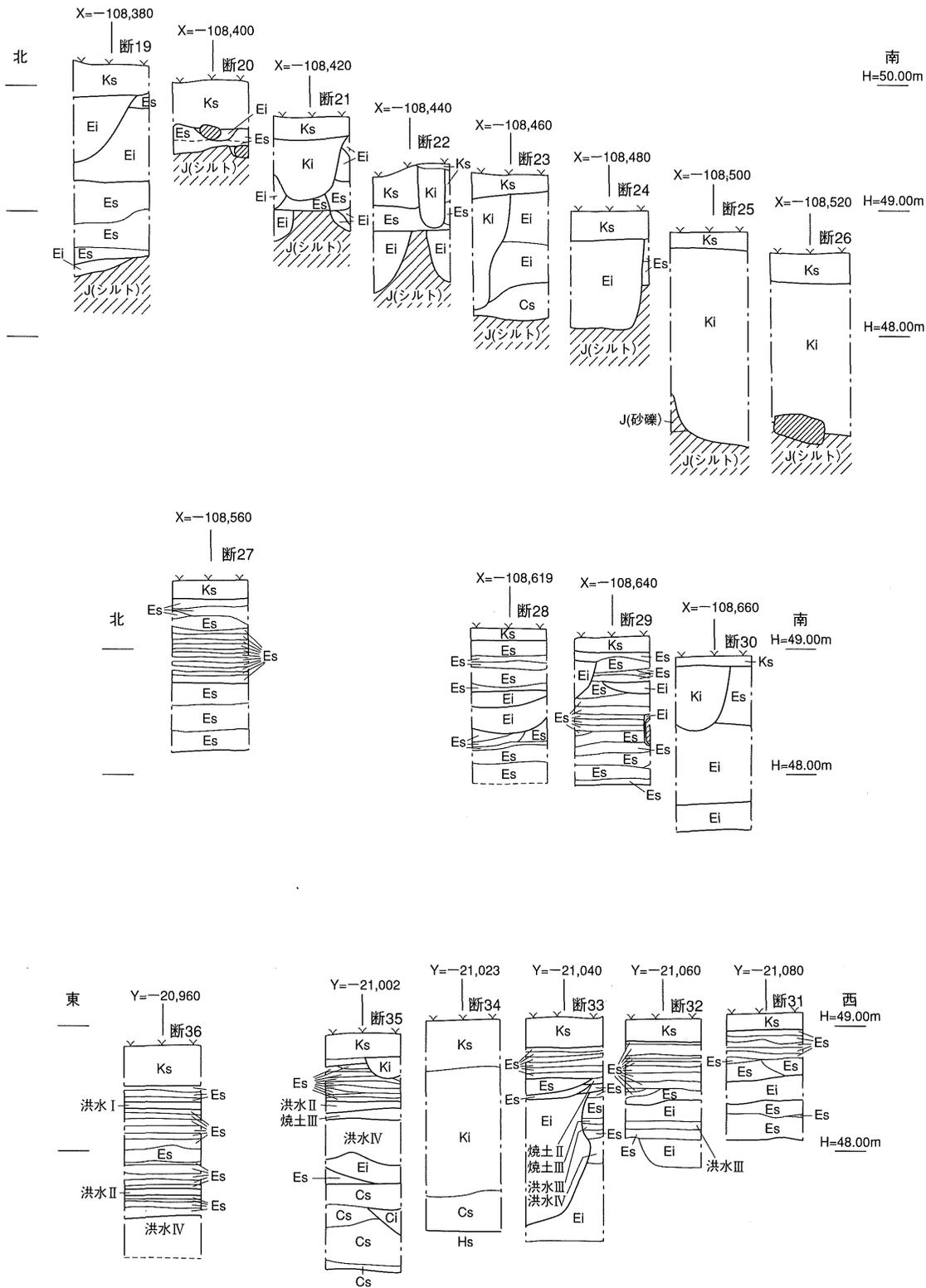


図8 断面模式図2 (Ks…近現代整地層、Ki…近現代遺構埋土、Es…江戸時代整地層、Ei…江戸時代遺構埋土、Cs…鎌倉～室町時代整地層、Ci…鎌倉～室町時代遺構埋土、Hs…平安時代整地層、Hi…平安時代遺構埋土、J…地山)

第4章 遺構

図版2～28に提示した各調査区の遺構平面図は、遺構を時期ごと色分けして示した。色分けの基準については図版扉に凡例を示している。以下、遺構の解説を行なうが、遺構からの出土遺物が図版に掲載されたものについては、所属時期と図版番号をカッコ内に示した。

第1節 A区（図版2～4・116・117）・M区（図版2～4）

A区は1997年度に最初に設定した調査区である。北側、西側、南東側には大径木があり、それを避けたため不整形な調査区となった。M区は、A区が終了し大径木の根の処理が終了した後で実施した。A区の遺構面では、砂礫層以外は土取穴が掘られており、桃山時代以前の遺構は残りが良くない。井戸、溝、柱穴、土壙などを検出した。西半は富小路、中央から東半は北辺四坊八町に該当する。

（1）平安時代前期・中期

溝A419 富小路の東築地の外側4.5mにある南北溝で、長さ1.5mほど検出した。幅0.8～1.1m、深さ0.3～0.4mある。北側8mには南北溝A493があるが、同一の溝かは判定できない。平安時代中期の遺物が出土した（図版49）。

土壙A416（図版117、図9） 富小路の路面のほぼ中央に掘られた楕円形の土壙である。南北4.9m、東西2.6m、深さ0.6mある。平安時代中期の遺物が出土した（図版51）。

溝A459 南北に長い溝状の遺構で富小路の路面中央に位置する。検出面で長さ6m、幅2m、深さ0.15～0.35mある。前述の土壙A416、並びに後述する溝B1058などとは同じ南北線上に位置するが、同一遺構ではない。

土壙A531 A区の東端で検出した長さ1m前後の小規模な土壙である。

（2）平安時代後期・鎌倉時代

井戸A309（図版30・117） 一辺2.5mの方形の掘形をもつ。内部の石組は方形に積まれるが積み方は乱雑である。石組は下が狭く1.0m、上方ほど開いて1.2mある。検出面から-2mまで掘下げたが底に達せず、重機によって検出面より-3.5mで掘形底となることを確認した。室町時代以後の石組井戸は円形に石を積むため、それらと異なる点は注目できる。鎌倉時代の遺物が出土した（図版66）。

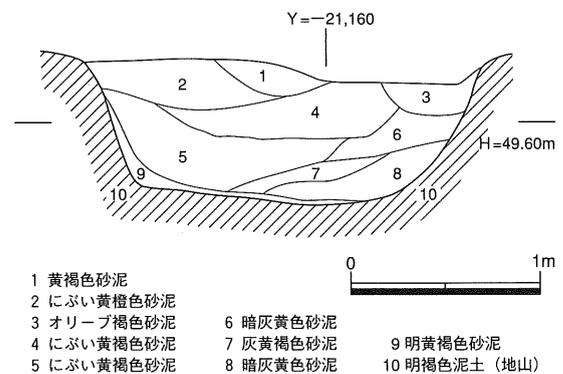


図9 土壙A416断面図（X=-108.422.9、南から）

第2節 B区

土壌M28 江戸時代の土取穴の下層で検出した不整形の土壌である。東と西を後世の土壌に切られる。底部は南北に二分されたため、北側をA、南側をBとした。深さは、Aが検出面から0.9m、Bが1.1mである。鎌倉時代の遺物が中心であるが、平安時代の遺物も混入して出土している（図37）。

（3）室町・戦国期

土壌A359 土師器が大量に廃棄された土壌である。長さ4m、幅1.5m、深さ0.8mあり、東西を江戸時代の土壌で削平されていた。戦国期の遺物が出土した（図版73）。

このA区では主に砂礫層の範囲において柱穴を多数検出している。柱穴の規模は直径0.3m前後、深さ0.5mほどで、内部に礎石を据える例もある。これらの柱穴は、掘立柱建物、あるいは柵の一部とみられるが、全体を復元するには至らなかった。一応、柱筋が通るものを「柱列」、直角に折れる2辺をもつものを「建物」として、以下に整理した。

建物A1105 東南部で検出した。建物の西面・南面とみられ、南北5間、東西4間程度とみられる。柱間は1m前後あるが、ばらつきが大きい。

建物A1106 中央付近で検出した。東西2間、南北2間以上あり、北面・西面・東面に該当するとして建物を想定した。東西柱間は1.75mとやや広い。南北方向は不規則である。

建物A1109 南西隅で検出した建物の南西隅部分。西面は2間以上で柱間は1.35m、南面は2間以上で柱間は2.2mである。富小路の路面内に位置する。

柱列A1104 東南部で検出した東西方向の柱列。7間以上とみられ、東端は調査区外に延長する。柱間は1m前後である。

柱列A1107 中央付近で検出した東西方向の柱列。5間以上あり、柱間は1m前後で、底にはすべて礎石として扁平な河原石が据えられる。

柱列A1108 中央付近で検出した東西方向の柱列。2間以上あり、柱間は2mとやや広い。すべての柱穴底には礎石が据えられる。

柱列A1110 北西部で検出した南北方向の柱列。3間以上あり、柱間は1m前後である。富小路路面内に位置する。

柱列A1111 柱列A1110の西1.5mで検出した南北方向の柱列。4間以上あり、柱間は1m前後である。この柱列も富小路路面内に位置する。

第2節 B区（図版5～7・116～119）

A区の北側に設定した調査区。東辺は大径木の裾を避け湾曲する形状となった。江戸時代以後のゴミ処理土壌が全域にあり、該当期の遺構は残りが良くない。北半に掘られた大規模な土取穴「土壌B1000」は、公家町形成以前に掘られたものであるが、古墳時代から平安時代、室町時代の遺物も多く出土している（図版88・89）。中央部には富小路があり、西は北辺四坊五町、東は北辺四坊八町に該当する。

(1) 古墳・飛鳥時代

土壙B727、土壙B869、整地層B888、土壙B1000、土壙B1030、土壙B1066などから遺物が出土しているが、量は少量であり、すべて後世の遺構に混入したものである(図版42)。

(2) 平安時代前期・中期

井戸B1060(図版29・119) 中央部で東壁にかかり検出した。掘形は南北3.5mあり、やや南寄りの位置に木枠を組む。木枠は多重の複雑な構造をもつ。外側は一辺1.25mある方形横板組みで、底はさらに0.9mまで狭くし、一段深くして底部を形成している。底部の中央には縦板が円形にめぐり、直径0.8mの井筒となっている。横板の裏側にはさらに縦板が当てられている。これは横板を補強するためのものであるであろう。検出面からの深さは2.1mである。平安時代中期の遺物が出土した(図版51)。

溝B1058(図10) 富小路の路面中央で検出した南北溝。土取穴で途切れながらも南北16mほど残存する。セクション位置で幅1.2m、深さ0.35mある。平安時代前期の遺物が出土した(図版44)。

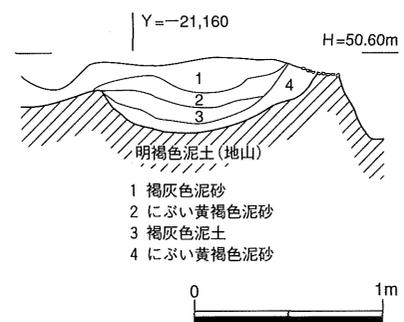


図10 溝B1058断面図
(X=-108,365、南から)

土壙B1013 中央部は江戸時代の土壙によって壊されている。南側を土壙B1013、西側を土壙B1053として調査したが、同一の遺構と判断できたので、土壙B1013で統一した。一辺4.3mの隅丸方形で、深さは0.5mある。土器を廃棄した土壙で、平安時代中期の遺物が大量に出土した(図版52~54)。土器類の保存状態は良好であり、器種・器形も豊富であるため、良好な土器資料となりうる。

(3) 平安時代後期・鎌倉時代

井戸B1061(図版29・118) 東壁に一部がかかる。南に井戸B1068があり、これを掘込む。掘形は隅丸方形で南北2.4mある。内部に方形の木枠を持つ。木枠は方形縦板組で内法1.0mある。縦板は痕跡のみである。検出面から深さ2.0mで底に達する。平安時代後期の遺物が出土した(図版59)。

井戸B1068(図版29・118・119) 東壁に半分かかり、北半も井戸B1060に壊される。掘形は円形であるが規模は不明。井筒は上半が円形の石組、底部のみ方形の木枠組である。石組は河原石を用い、深さ1.2mまで残存する。底部の木枠組は内法0.85m、深さ0.25mあり、中央を掘り窪め水溜めとする。平安時代後期の遺物が出土した(図版59)。

溝B1054(図版118、図11) 富小路の東築地想定位置の内側0.5mで検出した南北溝。北壁付近で長さ3mほど残存していた。北壁では西側に室町時代の遺構が切り込む。セクション箇所幅0.9m、深さ0.55mある。平安時代後期の遺物が出土した(図33)。

溝B1055(図版118、図11) 富小路の東築地位置の外側2mにある南北溝。北壁で長さ3mほど残存する。セクション箇所幅1.15m、深さ0.4mある。平安時代後期の遺物が出土した。

土壌B1037 中央付近で検出した。東西両側を江戸時代の土壌で削平される。南北5m余り、深さは0.4mある。鎌倉時代の遺物が出土した(図版69)。

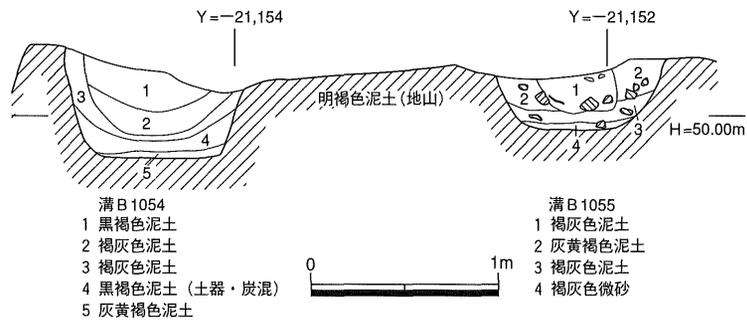


図11 溝B1054・溝B1055断面図(X=-108,365.4、南から)

(4) 室町・戦国期

井戸B916(図版34・117) 南西部で検出した。掘形は径2.2mの楕円形。石組は内径1.25mあり、円形に河原石を組み上げるが、北側の一部は崩れかかっている。検出面から深さ1.9mで底に達する。底が浅いのは砂礫層で地下水位が高かったためとみられる。同じような石組井戸B963を掘込む。戦国期の遺物が出土した(図版78)。

井戸B917(図版34) 南端で検出した。掘形は楕円形で東西径2.4m、西側に余裕を残す。石組は内径1.4mあり、掘形同様の不整形円形に河原石を組み上げる。検出面から深さ1.9mで底に達し、井戸B916と同じく井戸としては浅い。戦国期の遺物が出土した(図版74)。

井戸B918(図版34・118) 北西寄りで検出した。西側は江戸時代の大規模なゴミ処理土壌に壊され、東は室町時代の土壌B1035が掘込む。掘形は円形で径2.2m、石組は内径1.35mある。検出面から2.1mまで掘下げたが、底は未確認である。井戸周囲の地山は聚楽土であるため、湧水帯は深かったと思われる。掘形からの遺物は少ない。石組内から室町時代の遺物が出土した(図版71)。

井戸B963(図版34・117) 南に井戸B916が接し、それに壊される。掘形は円形で径2.6m、石組の内径は上半で1.1m、下半はややふくらんで1.3mある。石材としてやや大きめの河原石を用いる。検出面から2.2mで底に達する。近接して掘られた井戸B916、井戸B917とは、底が浅いことや形状の上で共通点が多い。

井戸B1059 北壁にかかり検出した。掘形は円形で径1.9mある。石組は内径1.0mほどである。深さ1.4mまで掘下げたが、底は未確認である。掘形には裏込めとして石が多く入れられていた。戦国期の遺物が出土した(図版79)。

土壌B962 東壁にかかり検出した。不整形な土壌で、幅4mほど、深さは0.35mある。底部付近をA・Bに区分し遺物を取り上げた。戦国期の遺物が出土した(図版81)。

土壌B992 北西部で検出した。南へ蛇行する溝状を呈するが、実際は聚楽土を採取した後の土取穴が連続したものである。長さ7m、幅2mあり、南側に掘られた土壌B1035も一連の土取穴遺構とみられる。戦国期の遺物が出土した(図版74)。

土壌B996 南半部で検出した。東西方向の土壌をB996、南北方向の土壌をB997として調査したが、遺物接合の段階で同一遺構と判断し、土壌B996で統一した。全体で長さ4.5mほどあるが、後世の攪乱で各部が寸断されている。戦国期の遺物が出土した(図版84)。

土壌B1035 中央の北寄り、土壌B992の南に位置する。長さ5.5m、幅4mほどあり、聚楽土採取のために掘られた土取穴である。戦国期の遺物が出土した(図版77)。

土壌B1036 西壁にかかり検出した。東西2mほどの楕円形で、深さは0.4mある。戦国期の遺物が出土した(図版85)。

土壌B1043(図12) 北端で検出した路面状の遺構(図12の1・2)の下に掘られた土壌である。路面の下限時期を示す点で重要と考え掲載した。幅3m以上で南北5m、深さ0.65mほどの規模があり、西側の土壌B992にも類似し、土取穴と思われる。戦国期の遺物が出土した(図版71)。

土壌B1047 東壁にかかり検出した。形状は不定形で土取穴の遺構とみられる。戦国期の遺物が出土した(図版83)。

建物B1112 南端で検出したもので、東西2間、南北3間の掘立柱建物に復元できる。柱間は1m前後であるが、建物内部に別の柱穴があり、重複する可能性もある。

なお、上記の遺構以外にもこの時期に属する遺構が多数ある。

土壌B1000は北東部全域を占める広範囲な土取穴で、桃山時代の掘削と考える。土壌内からは平安時代、鎌倉時代、室町・戦国期の土器多量と、桃山時代の土器が少量出土した。聚楽土が採取され、埋め戻す際に周辺の遺構埋土が入れられたためと想定できる。北壁にかかり検出した土壌B1015は、聚楽土の境界から土壌B1000と区別したが、一連の土取穴である。

井戸B841は北東部で検出したもので、上半に集石遺構があり、下部は素掘りの井戸であった。深さ1mまで掘下げたが、底は未確認である。

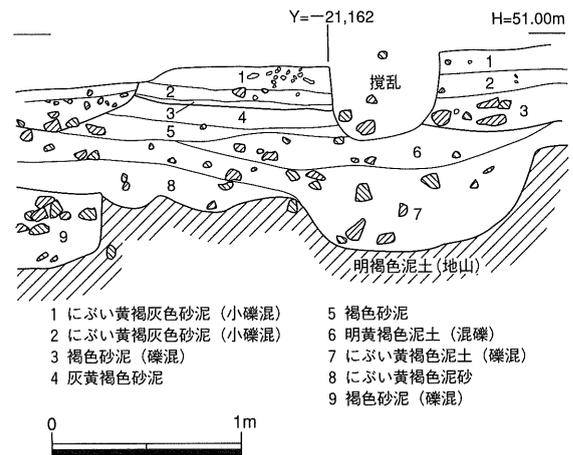


図12 土壌B1043断面図(B区北壁)

第3節 C区(図版8~10・119・120)

調査区は、北辺四坊八町のほぼ中央に位置し、D区に南接している。また南半は東にJ区、南にG区が接している。検出した遺構は古墳時代前期から室町・戦国期までの土壌、井戸、溝、池、流路などである。以下、時代順に概述していく。

(1) 古墳・飛鳥時代

流路C1222 南半部で検出した。北東から南西にかけて蛇行する流路である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。ほとんどが削平されているが、残存規模は幅約1m、深さ0.5mである。

土壌C948 ほぼ中央部で検出した。平面形は南北2.7m、東西2.4mの不定形で、深さは0.4mある。埋土は炭・焼土混じりのにぶい黄褐色砂泥である。土壌内から古墳時代前期の土器が出土した。

第3節 C区

土壙C1288 西北部で検出した。南北0.5m、東西0.4mの不整形な平面形で、深さは0.5mある。埋土は炭混じりの黒褐色砂泥で、土壙内には古墳時代前期の土器が4個体以上出土した(図版42)。

(2) 平安時代前期・中期

土壙C1303 北半部で検出した。東側と西側が大きく攪乱されているが、平面の形状は方形であったと推定される。規模は南北0.7m、東西1.0m、深さ0.3mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

(3) 平安時代後期・鎌倉時代

柱列C1408(柱穴C935・1198・1285・1286・1287) 北半部の西側で検出した。溝C1226の東側にあり、柱穴5基が南北に並ぶ。柱穴の規模は径0.45~0.7mで、深さは0.3~0.4mある。埋土は黄褐色砂泥であり、柱穴C1286・C1287は礎石をもつ。柱間は1.2~1.3mのほぼ等間であり、南北4間以上の柵、あるいは建物の一部と想定される。この他、北東側で検出した柱穴C1324も一連の遺構と考えられる。

柱穴C1335 北半部の西で検出した。規模は径0.2m、深さ0.13mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

柱穴C1346 柱穴C1335に西接して検出した。規模は径0.3m、深さ0.06mである。埋土は暗褐色砂泥である。

溝C1226 北西隅で検出した。北東から南西方向に蛇行して流れる溝状の遺構である。幅は1.0~3.5m、深さは0.2~0.5mあり、埋土は暗褐色砂泥である。北側と南側は大きく削平を受けており、南側への延長は不明であるが、北側のD区ではその延長部分を検出している。平安時代後期の遺物が出土した(図版63)。

土壙C1233 北西隅で検出した。西側は大きく攪乱を受けている。残存規模は南北約3m、東西約2m、深さ0.3mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土壙内から平安時代中期の軒平瓦が出土した(図版96-1)。

(4) 室町・戦国期

井戸C1189(図版35) 南東部で検出した石組井戸である。掘形は直径約2.5mの円形で、深さは検出面から2.3mである。基底には40~50cmの大型の河原石が4石残存する。石組の内径は0.7mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

井戸C1249B(図版35・120) 南半部の西で検出した石組井戸である。掘形は直径約2.5mの円形で、深さは検出面から2.5mある。30~40cmの河原石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に円形に積み上げる。石組の内径は1.0mである。埋土は暗褐色砂泥である。

溝C670 南端部で検出した南北溝である。溝幅0.7m、深さ0.52mあり、南北5.8mにわたり検出した。北側は大きく削平を受けていたが、南は調査区外に延びる様相を呈していた。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

塀C1112 中央やや北寄り検出した東西方向の溝状遺構で、溝内に柱穴、礎石をもつため、

堀の遺構と考えた。布掘柱列とよばれる遺構である。溝の規模は幅0.5m、深さ0.4mで、東西20mにわたり検出した。東半の溝内には30cmの河原石、並びに径0.3~0.4mの小穴が、約1mの間隔で認められた。西・東端ともに大きく削平を受けていたが、両方向とも調査区外へ延びる様相であった。埋土は黄褐色砂泥である。

堀C1113 堀C1112に南接して検出した東西方向の堀である。堀C1112と同じ布掘柱列で、溝幅0.5m、深さ0.4mあり、東西7mにわたり検出した。東半においては20~30cmの河原石が約0.5mの間隔で据えられていた。この遺構は、堀C1112の作り替えの可能性がある。東側は調査区外に延びる様相であった。埋土は黄褐色砂泥である。

溝C1159 北半部で検出した東西溝である。堀C1112の北約5.5mにあり、それと平行する。溝は幅0.5m、深さ0.4mあり、断続しながらも約7mにわたり検出した。溝内には柱を据えたともみられる河原石や、小穴の痕跡はなかったものの、布掘柱列の可能性が高い。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙C679 南端部の西寄りで検出した。南北1.2m、東西1.0m、深さ0.37mあり、平面形は楕円形を呈する。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C716 北端部の東寄りで検出した。西側は削平を受けており、平面形は半円形を呈する。規模は径約1.4m、深さ0.27mある。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C756B 北半部の東寄りで検出した。平面形は不定形で、西側は削平を受けている。残存規模は南北3.2m、東西3.1m、深さ3.4mある。土壙内からは室町時代の遺物が出土した(図版71)。また鎌倉時代の軒丸瓦も出土している(図版93-18)。

土壙C777 中央の南東寄りで検出した。西側は大きく削られており、平面形は不定形である。残存規模は南北2.3m、東西1.2m、深さ0.45mある。埋土は黄褐色砂泥である。土壙内からは戦国期の土師器皿、瓦器鍋などがまとまって出土した(図版75)。

土壙C846 北端部の西寄りで検出した。西側は削平を受けており、残存部の規模は南北1.0m、東西0.9m、深さ0.22mあり、不定形である。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C853 南半部の東で検出した。規模は径1.0mの円形で、深さは0.66mある。埋土は炭をやや多く含む灰黄褐色泥砂である。

土壙C872 南東部で検出した。南側は削平を受けている。残存部の規模は南北2.0m、東西2.9m以上、深さ0.36mあり、不定形である。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。

土壙C879 ほぼ中央部で検出した。西側はほとんど削平を受けており、残存部の規模は南北3m以上、東西1.6m、深さ0.31mあり、不定形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙C910 西端部で検出した。規模は南北1.5m、東西0.5m、深さ0.09mあり、不定形を呈する。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C917 西端部で検出した。平面形は方形を呈する。規模は南北1.3m、東西1.6m、深さ0.8mあり、埋土は黄褐色砂泥である。土壙内から室町時代の土師器、瓦器、焼締陶器などが出土した(図版71)。

第3節 C区

土壙C976 中央部の東寄りで検出した。規模は南北0.8m、東西1.7m、深さ0.44mあり、不定形を呈する。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C985 南端部で検出した。西側は攪乱を受けており、残存部の規模は南北1.1m、東西1.2m以上、深さ0.35mあり、不定形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙C1024 北東隅で検出した。規模は南北1.0m、東西1.6m、深さ0.24mあり、不定形である。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C1030 中央部の南東寄りで検出した。東側を土壙C853に削平されている。残存部は南北1.5m、東西1.0m、深さ0.08mの楕円形である。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C1045 南壁にかかり検出した。北側は削平され、南側は調査区外である。残存部は南北0.4m以上、東西1.3mの不定形である。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C1046 南半部の東寄りで検出した。西側は土壙C1141に壊され、北・南側も大きく削平を受けている。残存部は南北1.5m以上、東西3.0mの不定形である。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C1075 南半部の東寄りで検出した。南側は柱穴C1368に壊されている。残存部は南北0.7m以上、東西0.5m以上、深さ0.12mの不定形である。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C1091 南半部のほぼ中央で検出した。東側は削平されている。残存部は南北0.8m、東西0.7m以上、深さ0.4mの不定形である。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C1116 南半部の東寄りで検出した。規模は南北1.8m、東西1.5m以上、深さ0.3mあり、不定形である。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙C1191 南東隅で検出した。北側の一部を除き周囲は削平を受けており、平面形は不定形である。残存規模は南北1.6m、東西1.5m、深さ0.4mある。埋土は暗褐色砂泥である。土壙内からは土師器、瓦器火舎（図40）、焼締陶器とともに、銭貨（政和通寶）が出土した。

土壙C1223 北東隅付近で検出した。北側の一部が削平を受けている。規模は南北0.9m以上、東西1.2m、深さ0.13mあり、不定形である。埋土は褐色砂泥である。

土壙C1253 北西隅で検出した。規模は南北0.8m、東西1.1m、深さ0.33mあり、楕円形を呈する。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C1292 北西隅で検出した。北西部は大きく削平されており、残存部は南北0.7m以上、東西0.5m以上、深さ0.15mの不定形である。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙C1298 北西隅部で検出した。東側は大きく攪乱を受け、僅かな痕跡のみが認められた。西側残存部の規模は南北3.8m、東西2.9m、深さ0.6mである。埋土は黄褐色砂泥であり、土壙内からは戦国期の土師器皿、瓦器火舎などが出土した（図版87）。

土壙C1321 北東隅で検出した。規模は南北1.4m、東西1.1m、深さ0.5mあり、長方形を呈する。埋土は黄褐色砂泥である。

この他、中央南東寄りに柱穴が集中する箇所がある。柱穴C1186・柱穴C1248・柱穴C1368などであり、建物か柵の一部とみられるが、復元できない。また北西隅では、柱穴C1235・柱穴C1238が南北1m間隔に並ぶ。これも建物か柵の一部とみられる。

第4節 D区（図版11～13・120）

調査区は、北辺四坊八町の北寄りに位置し、C区に北接している。検出した遺構は平安時代から室町・戦国期までの土壙、井戸、溝、池、流路などである。以下、時代順に概述していく。

（1）平安時代前期・中期

土壙D579 南東隅で検出した。攪乱を受け著しく削平されているが、残存規模は南北0.5m、東西0.8m、深さ0.12mあり、楕円形を呈する。埋土は炭・焼土を多量に含むにぶい黄褐色砂泥である。

（2）平安時代後期・鎌倉時代

溝C1226 C区で検出した溝C1226の北延長部である。中央北寄りで検出した。南北13m、最大幅5.5m、深さ0.5mある。北端並びに南半は攪乱が著しく、C区とのつながりは不明である。

土壙D597 北西部で検出した。南側を大きく削平されている。南北1.4m以上、東西1.0m、深さ0.49mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙D608 北西部で検出した。南側を土壙D597に壊され、それ以外も削平を受けている。残存規模は南北0.5m、東西0.4m、深さ0.15mである。埋土は灰黄色砂泥である。

土壙D615 北西端で検出した。周囲は著しく削平されている。規模は南北0.5m、東西0.4m、深さ0.1mあり、不定形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

（3）室町・戦国期

柱穴D522 南東端で堀D540を掘込んだ状態で検出した。径0.5m、深さ0.12mの円形である。埋土は黄褐色砂泥である。

井戸D535B（図版35・120） 北東隅で検出した。掘形は南北2.4m、東西2.8mの楕円形で、深さは約3.9mである。井戸枠は残存しないが、埋土の状況から木組みの井戸と推定した。埋土は2層に大別でき、第1層は炭を少量含む黒褐色砂泥、第2層は灰黄褐色砂泥であった。

池D529B 北半部で検出した。南北約16m、東西約9mの不定形である。深さは0.6mである。埋土は微砂が混入した黄褐色砂泥であり、池内から戦国期の遺物（図版84）とともに平安時代後期の軒丸瓦（図版92-8・93-5・6）・軒平瓦（図版96-13・97-12）が出土した。

堀D540（図版120） 南端で検出した。東西方向の溝状遺構であるが、底に礎石、柱穴があるため堀の遺構と考えた。西側は大きく削平され、東側は調査区外に延びる。溝幅0.3m、深さ0.23mある。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙D427 中央部の南西寄りで検出した。東側は削平されている。南北1.2m、東西1.5m以上、深さ0.18mの不定形である。埋土は灰黄褐色砂泥であり、土壙内から平安時代後期の軒丸瓦が出土した（図版93-8）。

土壙D488 北西部で西壁にかかり検出した。著しく攪乱を受けており、南辺部が僅かに残

第4節 D区

っている。残存規模は南北1.5m以上、東西2.0m以上、深さ0.34mあり、不定形である。埋土は黒褐色砂泥である。

土壙D491 南西端で検出した。南北0.9m、東西0.9m以上、深さ0.7mあり、楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥であり、土壙内から室町時代の土師器皿がまとまって出土した(図版71)。

土壙D492 南西部で西壁にかかり検出した。南北1.0m、東西2.0m以上、深さ0.18mの不定形である。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙D509 南東隅で検出した。北西側は削平を受けている。規模は南北0.7m、東西1.4m、深さ0.34mあり、楕円形を呈する。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙D512 南半部のほぼ中央で検出した。著しく削平されており、残存規模は南北1.0m以上、東西0.6m以上、深さ0.1mである。埋土は炭・焼土と、5~20cm大の礫を多量に含む暗褐色砂泥である。土壙内から戦国期の土師器が出土した(図版87)。

土壙D513 南端部で検出した。著しく削平を受けており、残存規模は南北0.5m以上、東西1.2m以上、深さ0.25mあり、不定形である。埋土は黒褐色砂泥である。

土壙D514 南端部で検出した。北側は土壙D513に接しており、輪郭は不明確であった。残存規模は南北1.0m以上、東西0.4m以上、深さ0.26mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙D519 南東隅付近で検出した。北側を大きく削平されている。規模は径1.7~1.9m、深さ0.17mあり、ほぼ円形を呈する。埋土は黄褐色砂泥である。

土壙D524 北壁にかかり検出した。北側は調査区外に延び、西側も大きく削平されている。残存規模は南北1.0m以上、東西1.2m以上、深さ0.34mである。埋土は暗褐色砂泥である。規模、埋土の堆積状況から井戸の可能性がある。

土壙D532 南半部で検出した。著しく削平を受けており、残存規模は南北0.7m以上、東西1.0m以上、深さ0.06mあり、楕円形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

土壙D544 南東隅部で検出した。東西0.3m、南北0.7m、深さ0.18mあり、不定形である。埋土は灰黄褐色砂泥である。

土壙D549 ほぼ中央部で検出した。北側は土壙D625に壊されている。残存規模は南北1.5m、東西3m以上、深さ0.56mである。埋土は灰黄褐色砂泥と褐灰色砂泥である。

土壙D564 北東隅付近で検出した。規模は南北0.7m、東西2.0m、深さ0.19mあり、長方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥と褐色砂泥である。

土壙D595 北西端で検出した。西側は大きく削平されている。残存規模は南北2.0m、東西2.2m以上、深さ0.1mあり、方形を呈する。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙D596 北西部で西壁にかかり検出した。西側は調査区外に延びる。残存規模は南北2.0m、東西1.1m以上、深さ0.26mあり、方形を呈する。埋土は炭・焼土を含む黒褐色砂泥とにぶい黄褐色砂泥である。

土壙D602 北壁にかかり検出した。さらに調査区外に延びる。東側は大きく削平されている。残存規模は南北4.4m、東西は2.5m以上、深さ0.15mあり、不定形である。埋土は黒褐色砂

泥である。

土壙 D 625 はほぼ中央部で検出した。南側は大きく削平されている。残存規模は南北1.9m以上、東西も1.9m以上、深さは0.24mあり、半円形である。埋土は炭を少量含むにぶい黄褐色砂泥と灰黄褐色砂泥である。

第5節 E区（図版14～16、121～124）・L区（図版139）

饗宴場跡グラウンドを対象とした4次調査で最初に設定した調査区である。南北46m、東西35mの範囲を中心に、北東に拡張部を付加した。中央の南寄り富小路と正親町小路の交差点が想定される位置にあたる。

（1）古墳・飛鳥時代

流路 E 900（図13） 南端で検出した斜め方向の流路である。

このE区では遺物は出土していないが、F区、H区では古墳時代後期の遺物が出土している（図版42）。なお、古墳時代後期の遺物は土壙 E 734でも出土している。

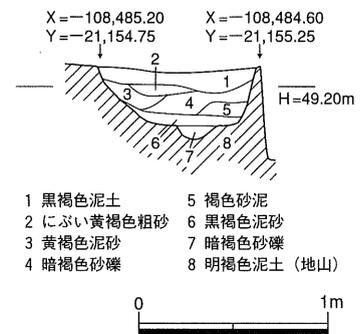


図13 流路 E 900断面図
（北東から）

（2）平安時代前期・中期

井戸 E 765（図版29・124） 西壁に接して検出した。掘形は方形で東西3.3m、南北2.9mある。内部の木枠は腐朽しており構造は不明であるが、一辺1.4m程度の方形の落込み部分があり、この部分が木枠組の痕跡と推定できる。検出面から深さ3.3mで底に達した。木枠組とみられる部分を中心に平安時代前期の遺物が出土した（図版43）。

溝 E 827（図14） 富小路の西側溝に該当する位置で検出した南北方向の溝である。交差点の南西隅で長さ2.3mほど残存していた。幅1m、深さ0.25mある。北端は土壙などで壊されている。平安時代中期の遺物が出土した（図版49）。

溝 E 845（図版123、図15） 正親町小路の南側溝に該当する位置にあり、交差点の西側のみで検出した。長さ4m以上で、幅0.9m、深さ0.35mある。溝 E 827とはL形に連続していた可能性がある。平安時代中期の遺物が出土した（図版48・49）。

溝 E 881 富小路の東築地の外側1m付近に位置する南北方向の溝で、戦国期の溝 E 455と重複する。平安時代中期の土師器皿が数枚重なって出土した（図版55）。

（3）平安時代後期・鎌倉時代

井戸 E 743（図版30・123） 西壁にかかり検出した石組井戸である。掘形は南北3.6mあり、石組は内径1.4mで方形状に積み上げる。現地表から2.4m、検出面から1.4mまで掘下げたが、底は確認できなかった。重機を用いて掘削し、検出面から4mで底を確認した。鎌倉時代の遺物が出土した（図版66）。

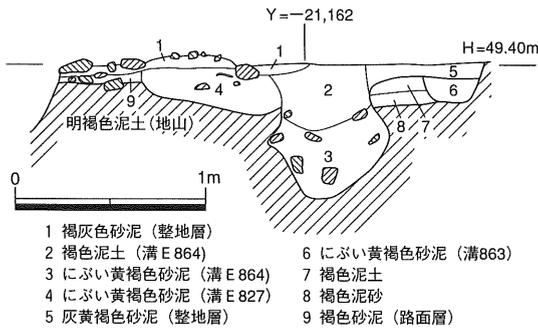


図14 溝E827・溝E864断面図
(X=-108,488、北から)

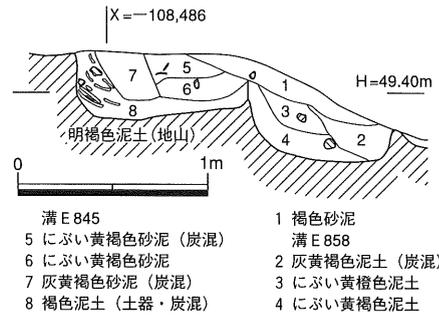


図15 溝E845・溝E858断面図
(Y=21,165.7、東から)

井戸E783 北半を先述した井戸E743で壊され、掘形の南半部が残存する。石組の痕跡は未確認であるが、壁面が垂直であることから井戸と推定した。

溝E858 (図版123、図15) 正親町小路の南側溝に該当する位置にあり、交差点の西側のみで検出した。先述した溝E845とは肩部で接し、この方が道路側に掘られている。長さ4.5m残存し、幅0.8m、深さ0.4mある。平安時代後期の遺物が出土した (図版61)。

溝E864 (図14) 富小路の西側溝に該当する位置で検出した南北方向の溝である。溝E827の西に接し、より築地側に掘られている。長さ1.5mほど残存し、幅0.7m、深さ0.7mあるが、断面図の作成箇所は他より深い。東西方向の溝E858とはL形に連続していた可能性がある。平安時代後期の遺物が出土した (図版61)。

溝E922A (図版123) 富小路の西側溝該当位置で検出した南北溝である。東西3m余りの土壇E922の底部で検出した。この溝は、南へは交差点部分に達しないため、西側溝の可能性は高いと考えられる。

土壇E734 南西隅で検出した小規模な土壇で、鎌倉時代の遺物が出土した (図版66)。

土壇E738 先述の土壇E734の北側で検出した土壇である。同じく鎌倉時代の遺物が出土した (図版67)。

土壇E742 井戸E743の東側で検出した。長さ2.5m、幅1mの規模をもつ。平安時代後期の遺物が出土した。

土壇E763 富小路・正親町小路の交差点西寄りで検出した。長さ約3m、幅約1.5mあり、平安時代後期の土壇E847を掘込む。鎌倉時代の遺物が出土した (図版69)。

以上の他、この時期の遺構として小規模な土壇や柱穴が多数あるが、詳細は記さない。また正親町小路については、西端で検出した井戸E783・E743の存在から、富小路以西は道路が機能していなかった可能性が高い。となると、南側溝と考えた溝E858の性格など、検討すべき課題が多い。

(4) 室町・戦国期

富小路 (図版122・124) 南北道路の遺構でE区の中央に位置する。路面は小礫を敷いた面をもつが、中央部は後世の攪乱で破壊され、北半と南半に二分される。礫敷きは南半では聚楽

土上に敷かれ、平安時代まで遡る可能性がある。北半は砂礫層の上にあるため、礫の区別は不明瞭である。側溝については、後述する溝E785が室町時代、溝E451、溝E455が戦国期の東側溝に該当するとみられるが、溝E451、溝E455は想定される築地のさらに外側に位置するため、路面は東に広がったことがわかる。西側溝に該当する遺構はなく、礫敷面も西端が明確でないため、道路の西端の状況は不明である。

井戸E400（図版35） 南西部の土取穴底で検出した。上半部は土取穴で壊され、このため検出面から1.5mで底となる。掘形は円形で径2.1mある。石組は内径1.4mあり、小規模な石材を積み上げる。掘形と石組の隙間が狭いのは、井戸底に近いためである。戦国期の遺物が出土した（図版72）。

井戸E448（図版36・123） 北壁にかかり検出した。掘形は不整円形で径2.6mある。石組は内径1.4mで、河原石を小口積みするが、面は揃わず乱雑な印象を受ける。石材も大小様々な石を取り混ぜる。検出面から2.2mまで掘下げたが、底は未確認である。瓦器の火舎が出土した。

井戸E665（図版36・123） 中央の西寄りで検出した。掘形は円形で径1.6mある。石組は内径0.9mで、小さめの河原石を小口積みしている。石組の底部には炭化物が堆積し、信楽陶器壺が完形で出土した。検出面から2.2mで底に達した。戦国期の遺物が出土した（図版87）。

溝E455（図版40・122） 富小路の東築地の外側で検出した南北方向の溝である。溝の西肩は礫敷面と接し、室町・戦国期における富小路の東側溝に該当する。攪乱を挟んで、南半を溝E455、北半を溝E451としたが、同一遺構と考えてよい。溝E455は幅2.5m、深さは最大で1.4mあり、兩岸を石で護岸する。西肩の石垣は正親町小路との交差点付近（ $X=-108,480$ ）で南北4mにわたり、4石ほど残存する（図版122-1）。この部分での溝幅は0.8mと狭く、また西肩の石垣は改修後の設置である。東肩の石垣は1・2段が残存する。石材の長軸は立てるように据えられ、石材背後の掘形も奥行きがない（図版122-3・4）。溝底には粗砂の入った凹み各所にみられ、激しい水流でこれらが形成されたことがうかがわれた。また溝の西肩は西方に入り込み、礫敷面と重複する複雑な堆積状況がみられた。このため、遺物の取り上げに際しては「西肩延長」「下層溝」「粗砂」などの層名を付した。この溝E455からは戦国期の遺物が出土した（図版80・81）。北半の溝E451は形状が不定形で掘込みも浅い。幅2.6mあり、底部は2段に掘られ、西側が浅い。検出面から深さは0.4m、東側が深くて0.6mある。東肩の護岸の石は残存せず、抜き取りとみられる穴が並ぶ。溝埋土は路面から埋まったような層序を示し、こぶし大の礫が乱雑に投げ込まれた状態がみられた。この溝E451の北延長は、A区・B区では明確な遺構がない。

溝E749 富小路の中央に位置する南北方向の溝で、南壁から7m分検出した。交差点部分に掘られた土壙E753につきあたる。幅0.8m、深さ0.6mある。

溝E756 交差点の南寄りに位置する東西方向の溝。幅1m、深さ0.5mある。土壙E753と溝E455間に掘られており、両者を接続していた可能性がある。このように、交差点部分においては土壙E753を介して南に溝E749、東に溝E756が一連の暗渠水路として路面下で機能していた

第6節 F区

可能性が指摘できる。

溝 E 785 北半で検出した南北方向の溝で、室町時代の富小路東側溝に該当すると考えられる。室町時代の遺物が出土した（図版70）。

土壌 E 500 中央の東寄りにある。溝 E 455に壊される。東西4.5mほどで深さは0.4mあり、埋土は黄灰色砂泥である。

土壌 E 531 土壌 E 500と東壁との間で検出した。埋土は土壌 E 500と類似する。外面にスタンプ文様をもつ瓦器の香炉が出土した（図39）。

土壌 E 584 交差点の西側、正親町小路上で検出した不定形な土壌。戦国期の遺物が出土した（図版83）。

土壌 E 729 富小路の中央部で南壁にかかり検出した。南側のF区で溝 F 2410としたものの延長である。戦国期の遺物が出土した（図版73）。

土壌 E 753 交差点の南西部分に掘られた不定形の土壌。東西7m、深さ0.3mあり、土壌としては規模は大きい。南には溝 E 749、東には溝 E 756が取付く。戦国期の遺物が出土した（図版72）。

この他に井戸や土壌、柱穴などの遺構を多数検出したが、性格が不明のものも多く、内容については記述しない。

（5）L区、平安時代後期・鎌倉時代

L区は江戸時代の中筋通の遺構を検出する目的で設定した調査区で、鎌倉時代から室町・戦国期の遺構を検出している。

井戸 L 31 南壁にかかり検出したもので、壁面が垂直であることから井戸と考えた。鎌倉時代の遺物が出土した（図版67）。

土壌 L 28 先述の井戸 L 31の中央部で検出した土壌で、井戸の木枠部分の凹みに該当すると考えられる。鎌倉時代の遺物が出土した（図版69）。

第6節 F区（図版17～19、125～129）

饗宴場跡グラウンドを対象とした4次調査の中では、E区が終了した後に設定した調査区である。東西45m、南北39mの範囲を主体とし北東部が突出する形となった。中央に富小路があり、西半は北辺四坊六町、東半は北辺四坊七町に該当する。

（1）古墳・飛鳥時代

流路 F 2550下層（図版129） 北東から南西方向へ流れていた自然流路。下層は砂や泥土の互層で、古墳時代から飛鳥時代の遺物を包含する。その上部は平安時代前期の遺物を包含し、平安時代になって整地されたことがわかる。F区南端では、幅6.2m、深さ1m前後あるが、底は判然としない。遺構の規模が大きい掘削には小型バックホーを用いた。北東方向ではG区、南西方向ではX区でそれぞれ延長部を検出している。出土遺物の一部は図版42に掲載した。

流路 E 900 A (溝 F 2565、図版129、図16)・流路 E 900 B (溝 F 2566、図版128・129、図16) 同じく北東から南西方向への流路で、北端から約6mの地点で2つに分岐する。北西側を流路 E 900 A、南東側を流路 E 900 B とした。E 区の流路 E 900、H 区の流路 E 900 (流路 H 820) は連続する同一の遺構である。F 区での規模は、流路 E 900 A が幅0.8m、深さ0.3m前後あり、埋土は2層に分かれ、両層とも小礫を多く含む。古墳時代前期から後期の遺物が出土した (図版42)。流路 E 900 B は幅0.7m、深さ0.15m前後あり、埋土は2層に分かれる。底にはU字形の鋤先で掘削したような痕跡が連続して残されていた。

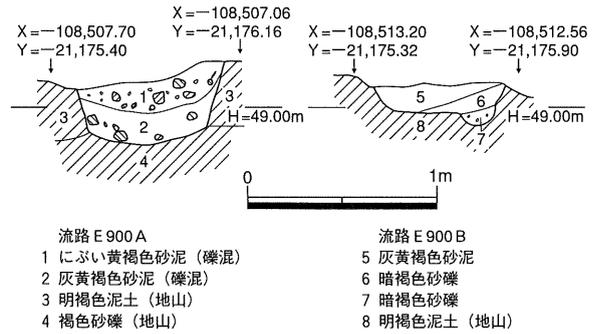


図16 流路 E 900 A・流路 E 900 B 断面図 (F 区、いずれも北東から)

この他、平安時代とそれ以後の遺構である溝 F 2500、土壌 F 1109、土壌 F 1433、土壌 F 1610、土壌 F 2018、土壌 F 2204、土壌 F 2323、土壌 F 2370からもこの時期に属する遺物が出土している。土壌 F 2018、溝 F 2500の出土遺物は図版42に掲載したが、他は掲載していない。

(2) 平安時代前期・中期

井戸 F 2505 (図版128) 南東寄りで検出した木枠組井戸である。北半に江戸時代の石組井戸が掘られたため、木枠の大半は破壊されていたが、わずかに南西隅部でその存在が確認できた。木枠は空洞化しており、枠材の規模や組合方法は不明である。掘形は東西3m、南北3.5mの方形で、検出面から井戸底まで深さ2.1mある。平安時代中期の遺物が出土した (図版57)。

井戸 F 2510 (図版30・128) 南壁に一部がかかるかたちで検出した。掘形の南寄りに木枠組の痕跡が残存し、木枠材も部分的に残存していたが、組合方法などは不明である。縦板を横棧で固定した形態とみられる。掘形は東西3.2m、南北3.5mあり、検出面から井戸底まで深さ3.5mある。木枠内とともに、掘形埋土から多量の遺物が出土した点が特記できる。遺物は平安時代中期に属し、木枠内・掘形埋土を分けて図示した (図版56・57)。

井戸 F 2570 (図版30・128) 中央のやや西寄りで検出した木枠組井戸である。木枠は残存せず、一辺1.2mの方形の痕跡となり、中央では径0.6mの円形に凹む部分がみられた。板材は一部が残存していたが、元位置を保つものではなかった。掘形幅2.6m前後、検出面から井戸底まで深さ2.5mある。平安時代前期の遺物が出土した (図版44)。

溝 F 2500 富小路の西築地想定位置で検出した南北溝で、幅1.4m、深さ0.2~0.4mある。埋土は2層に分かれる。この溝は前述した井戸 F 2570の上部に掘られており、井戸廃棄後に溝が掘削されたことは明らかである。富小路の利用状況を示す具体的な遺構である。

土壌 F 2612 南西部で検出した浅い土壌。東西1.6m、南北1m、深さ0.1mある。西端は溝 F 2500で壊される。埋土中に焼土が入る。

土壌 F 2631 北東端で検出した。東西4.5mの範囲に平安時代中期に属する土器が廃棄され

た状態で出土した（図版50）。

土壌 F 2639 南端の中央部にあり、斜方向の流路 F 2550を整地した上に掘られる。平安時代前期の遺物が出土した（図版43）。

（3）平安時代後期・鎌倉時代

溝 F 2503 富小路の中央やや西に掘られた南北方向の溝。南北両側では検出できたが、中央部では浅くなり途切れる。幅1m、深さ0.3mほどある。鎌倉時代の遺物が出土した（図版68）。

溝 F 2520 中央の南東寄りで検出した。南北方向の溝状遺構で長さ6mほど検出したが、延長部は不明である。幅0.7m、深さ0.1mほどある。

土壌 F 1238 東端で検出した円形の土壌で、径2m、深さ0.1mある。流路 F 2550の上部に位置する。

土壌 F 2506 その北側で検出した東西に長い土壌。東西3.5m、幅1.0m、深さ0.25mあり、流路 F 2550の上部に位置する。

土壌 F 2547 南端の中央部で検出した。南北方向に細長い土壌で、長さ3.5m、幅0.5mある。

土壌 F 2580 中央部の北東寄りで検出した土壌。南北2m、東西1.5m、深さ0.75mほどあり、人頭大の河原石が東肩部と底部に据えられていた。

土壌 F 2600 北壁付近で検出した南北方向に長い土壌。長さ3m以上、深さ0.8mある。底面には凹凸がある。鎌倉時代の遺物が出土した（図版68）。

（4）室町・戦国期

富小路（図版126、図17） E区に連続してF区でも中央を南北に貫くかたちで富小路の遺構を検出した。小礫を敷いた路面は想定位置の東半分のみで検出したが、これは路面中央に溝 F 2410が掘られたため、路面が東側に寄せられたものと思われる。東側溝に該当する溝として、E区南半と同じく溝 E 455（F区では溝 F 2180とした）の延長部を検出した。溝の西肩は富小路東築地想定線上に位置する。路面が東側に寄せられたため、溝も東に移されたのであろう。南

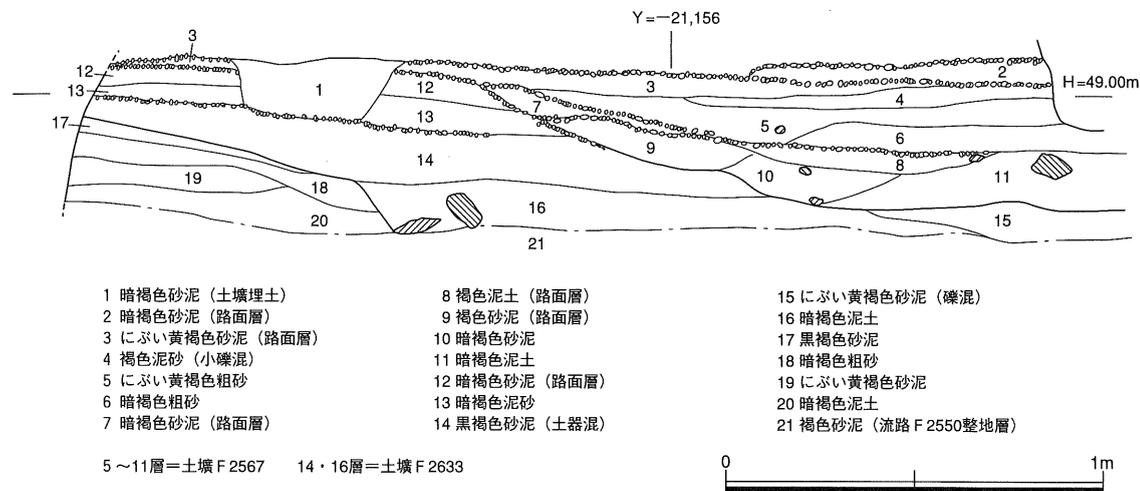


図17 富小路路面断面図（F区南壁）

壁付近では路面と溝F2410の重複する状況が観察できた(図17)。図中で「土壌F2567」「土壌F2633」としたものは、溝F2140上部の堆積層であるが、特に土壌F2567では路面形成層が数枚重なってみられた。これは溝F2410の範囲が沈下し続けたため、繰り返し路面を小礫で整地した際の形跡である。ただし北側では地山上に小礫を敷く箇所もみられ、こうした場合は室町時代に限定できるかは判断できなかった。

井戸F1709(図版36・127) 北西部で検出した石組井戸。掘形は円形で径1.4mと小型である。石組は内径0.9mで底から1.2mほど残存する。石材には大きめの河原石も用いられている。検出面から井戸底まで深さ2.2mあり、掘形下部は膨らんだ形態をもつ。底部には一辺0.45mの掘込みがある。横板で方形に囲い、水を溜める箇所とみられるが、木材は腐朽し痕跡のみが残る。この井戸は底が浅い点が特色である。戦国期の遺物が出土した(図版86)。

井戸F1777(図版36・127) 南東隅で検出した石組井戸。掘形は円形で径2.6mあり、石組は内径1.4m前後あり、石組井戸の中では規模が大きい。石材の規模も大きい、各所に崩れた形跡があるため、組み方は乱雑であったと思われる。検出面から2.1mまで掘下げたが、底は未確認である。戦国期の遺物が出土した(図版86)。

井戸F1800 東壁にかかり、西半分を検出した石組井戸。掘形は円形で径2.6mあり、石組は内径1.2mと推定される。検出面から深さ1mまで掘下げるに留まった。

井戸F1901 北東寄りで検出した。石組井戸とみられるが、石材は抜かれている。掘形は不整形円形で、径1.4mある。深さ1.5mあり、比較的浅い位置で底に達する。戦国期の遺物が出土した(図版86)。

溝F2107 南西部で検出した。東西の溝状の遺構であるが、土壌の連続する可能性もある。東西12m以上あり、最大幅2m、深さ0.5mある。西側は江戸時代初期の井戸に壊される。

溝E455(溝F2180、図版40・126) 東肩に石垣をもつ溝で、E区の溝E455の南延長部にあたる。F区調査時は溝F2180とした。溝幅は2.5m前後で、深さは検出面から1.2mまでである。底部に凹凸がみられ、水が激しく流れた様子が読みとれる。石垣の掘形はE区に比べると広くとられている。西肩は、肩の上がり不明瞭な箇所が多くみられた。西肩には石垣を構築した形跡はない。東肩の石垣は3段目まで残存し、最下段に大きいものが用いられる。

溝F2360(図版33) 富小路の中央西寄りにある南北方向の溝。溝F2410の西に接する。溝は途切れながらF区の両端に達するが、E区との境界付近は不明瞭である。南端に近いX=108,525付近でいったん立ち上がる。さらにその南には礎石状の石材が平坦面を上にして据えられている。この石は踏台として利用するためここに据えられたものと思われる。立ち上がりからこの石まで2.5mあり、この間が東西に往来する箇所であったと思われる。

溝F2410(図版126・127) 富小路の中央に掘られた南北方向の溝であるが、北側のE区では検出しておらず、接続の仕方は不明である。底部には不規則な凹みが連続してみられた(図版19で溝内にA・B・C・D・E・F・G・H・I、と表記した箇所)。戦国期の遺物が出土した(図版76)。

第7節 G区

なお、この溝の上部に築かれた石敷F1695は、溝上面を整地した際に入れられた礫の堆積である。路面敷のような箇所もみられたため、当初は富小路の路面構築のための整地跡かと考えたが、溝を埋没させる際に入れられた礫と判断できた。

土壌F2567(図17) 富小路路面下にある土壌であり、南壁付近で検出した。路面形成層も含めて土壌として掘下げた。路面形成層を数層含むが、これは富小路路面が西に沈下したため、それを補修し続けた形跡といえる。戦国期の遺物が出土した。

土壌F2588 北端で検出した土壌。長さ2.5m、幅0.8m、深さ0.3mほどあり、溝E455によって東側は壊される。戦国期の遺物が出土した(図版84)。

土壌F2633(図17) 富小路路面下にある土壌で南壁付近で検出した。先述の土壌F2567の下部に位置する。全体からみれば大きな凹みを整地した際の東肩部に該当する。

F区では上記以外にも多数の遺構を検出している。このうち西半で検出した土壌F2143、土壌F2255、土壌F2323、土壌F2358、土壌F2370などは、形状が不定形で掘込みも浅いため、土取穴とみられる。埋土からは戦国期の遺物が出土している。このような土取穴遺構は富小路の東側にはみられない。東側で土取穴が掘られるのは、桃山時代から江戸時代初め以後のことである。

第7節 G区(図版8～10・20～25・130～136)

調査区の中央北寄りには正親町小路が位置し、北半は北辺四坊八町、南半は北辺四坊七町に該当する。調査で検出した遺構は土壌、溝、井戸、柱列、柵、池、流路などである。遺構の時期は、古墳時代から平安、鎌倉、室町・戦国期までである。以下に概述する。

(1) 古墳・飛鳥時代

流路F2550(流路G2925、図版136、図18) G区の中央部に位置し北東から南西にかけて斜め方向に流れる自然流路である。規模は幅5.0～6.5m、深さ2.5～3.0mで、G区では総延長約73mにわたり検出している。埋土は11層に分かれるが、下層にあたる9層以下は礫を多量に含む泥砂層が厚く堆積しており、水が流れていた状況を示している。また古墳時代の遺物(図版42)は北肩部に堆積する1・5・6層から多く出土しており、流路北から投棄された可能性が高い。

流路G3579(図版136) 北端部で検出した北東から南西方向の流路である。同一の溝はJ区でも検出しており、合わせると長さ23m分を確認している。規模は幅0.8m、深さ0.4mあり、埋土は黒褐色砂泥である。

土壌G1755(図版136) 流路G3579の南肩部で検出した。攪乱を大きく受けていたが、残存規模は径0.65m以上、深さ0.4mあり、円形とみられる。古墳時代前期の土師器甕(図版42-3)が据えてあり、土器棺墓の可能性もある。埋土は黄褐色砂泥である。

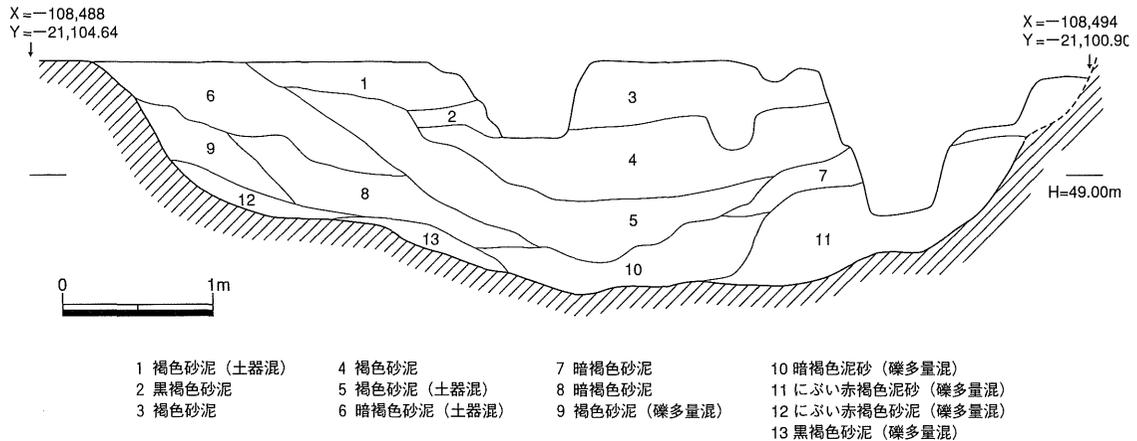


図18 流路 F 2550断面図 (流路 G 2925、南西から)

(2) 平安時代前期・中期

井戸 G 2657 (図版31・135) 中央部の南西寄りで検出した。掘形は南北2.7m、東西3.1mの楕円形で、深さは約1.8mある。南西隅に木枠の一部が残存しており、一辺1.5m前後の木枠をもつ井戸である。井戸内から平安時代中期の遺物が出土した (図版51)。

溝 G 3415 北半部で東壁にかかり検出した。部分的には削平を受けていたが、調査区の東西両端まで残存する。東端は流路 F 2550上部を掘込む。幅1mほど、深さ0.2mある。埋土は黄褐色砂泥である。正親町小路北側溝の推定位置にあたるため、同側溝の可能性が高い。溝内から平安時代前期後半～中期の遺物が出土した (図版45)。

土壌 G 3220 北半の東壁付近で検出した。流路 F 2550上部に掘込まれている。北側は削平を受けており、規模は南北0.8m以上、東西4.3m、深さ0.7mあり、長方形を呈する。埋土は暗褐色砂泥であり、土壌内から平安時代中期の遺物がまとまって出土した (図版45)。

土壌 G 3392 南半部のやや東寄りで検出した。南北1.8m、東西1.9m、深さ0.5mの隅丸方形である。埋土は黄褐色砂泥と灰黄褐色砂泥であり、土壌内から平安時代中期の遺物が出土した (図版55)。

土壌 G 3551 北半部の東壁付近で検出した。東側は調査区外に延びる。規模は南北1.2m、東西2.4m以上、深さ1m以上あり、土壌内の下層の黒褐色砂泥からは古墳時代後期の杯蓋 (図版42-21、23) が、上層の暗褐色砂泥からは平安時代前期の土師器、須恵器などが出土した (図版44)。

土壌 G 3573 北半部で東壁にかかり検出した。東側は調査区外に延びる。土壌 G 3551に重複し、その上部に位置する。残存規模は南北1.5m、東西2.4m、深さ0.5mあり、長方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥であり、土壌内から平安時代前期後半～中期の遺物が出土した (図版44)。また、平安時代前期の軒丸瓦も出土している (図版90-3)。

石敷 G 3578 (図版136、図19) 中央部の北東寄りで検出した石敷遺構。流路 F 2550の上面に設置されており、北東から南西にかけての斜め方向の水路状施設とみられる。規模は残存良

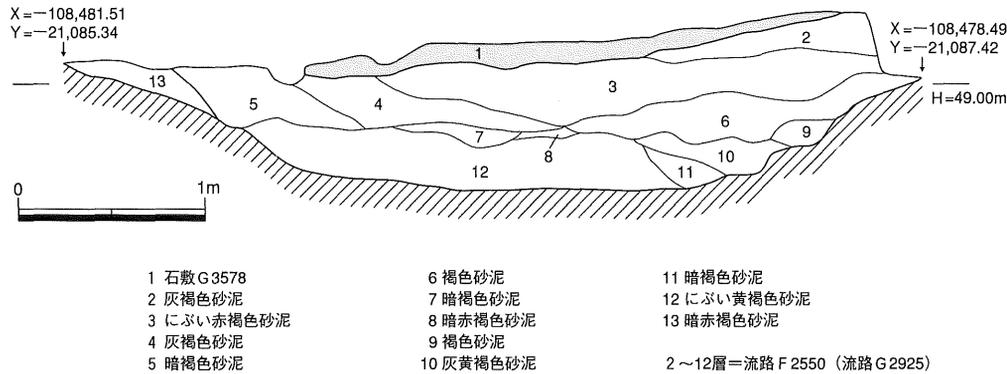


図19 流路F2550、石敷G3578断面図（北東から）

好なところで、幅3.5m、深さ0.5mあり、断続的ではあるが総延長22mにわたり検出した。径10～50cmの小礫が敷き詰められた状態であった。土壌内から古墳時代後期の須恵器甕（図版42-38）、平安時代前期の須恵器杯・甕が出土した（図版44）。

（3）平安時代後期・鎌倉時代

地業G1937（図版32・132） 南半部で東壁にかかり検出した石積地業である。規模は南北16m、東西5m以上ある。深さ0.2mほど掘込み、底部に20～50cmの河原石を乱雑に0.4mまで積み上げている。礎石や柱穴は不明で、上部の構造は復元できないが建物基礎の地業とみられる。瓦の出土量は少ないが、鎌倉時代の軒丸瓦が出土している（図版94-7）。

礎石列G3727（図版31・135） 南半部の東壁付近で検出した南北方向の礎石列である。検出した据付穴は6基で、うち4基は礎石をもつ。検出長は約9mある。礎石据付穴は直径0.4～0.7m、深さ0.1～0.2mあり、礎石は20～40cmの平坦な石が用いられる。礎石の間隔は1.65～2.0mまでばらつきがある。

礎石列G3728（図版31・135） 南半部で東壁にかかり検出した南北方向の礎石列である。検出した礎石据付穴は9基あり、長さ11mある。礎石据付穴は直径0.5～0.9m、深さ0.3～0.5mあり、15～30cmの平坦な石を据え付けている。礎石の間隔は0.8～1.35mまであり、ばらつきが大きい。

路面G1865 正親町小路の路面想定位置において、小礫を敷いた面を検出した。中央部では攪乱を受けていたが、東半と西半では部分的に残存し、特に東半部では東西7m、南北5mの範囲に残存していた。またここでは、路面を補修した痕跡も認められた。北端は溝G3065まで達するが、南端は明確ではない。

井戸G2462（図版37・131） 南半部東寄りの攪乱底部で検出した石組井戸である。石組の下半部のみが残存する。掘形は径2.1mの円形で、深さ1.0m以上ある。15～20cmの河原石を小口面を内側に向けて積み上げる。埋土は灰黄褐色砂泥で、埋土から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

井戸G2530（図版33・133） 中央部の西壁付近で検出した石組井戸である。掘形は南北

2.7m、東西2.6mの楕円形で、深さは1.5mある。石組は一辺が約1.1mの隅丸方形で、30～40cmの河原石を小口面を内側に向けて積み上げている。底部中央には曲物を据えたと推定できる掘込みがある。埋土は炭・焼土を多量に含む黄褐色砂泥である。井戸内からは平安時代後期の土器とともに中期の軒平瓦が出土した（図版95-15）。

井戸G2665（図版37・130） 中央部で西壁にかかり検出した石組井戸である。掘形は直径2.7mの円形で、深さは約3.4mある。石組は下段の部分が1.3mほど残存していた。石組の内径は約1mであり、30～60cmの河原石を小口面を内側に向けて積み上げている。埋土は炭・焼土を含む暗褐色砂泥で、吹子羽口が多く出土しており注目される（図版100）。

井戸G2684（図版37・131） 中央部で東壁にかかり検出した石組井戸である。掘形は一辺2.5mほどの隅丸方形で、深さ2.6mある。石組は数段が残存し、規模は一辺約1mである。20～30cmの河原石の小口面を内側に向けて、方形に積み上げる。埋土は黄褐色砂泥である。

井戸G3068 南半部のほぼ中央で検出した。掘形は一辺3.5mの隅丸方形で、深さは約2mある。井戸枠は残存しないが、形状・埋土の状況から一辺2mほどの方形木枠組みであったと考えられる。埋土は暗褐色砂泥であり、井戸内から平安時代後期の土器（図版58）と中期の軒平瓦（図版91-13）が出土した。

井戸G3110（図版33・133） 中央部の東寄りで検出した。掘形は南北2.6m、東西2.3mの方形で、深さは1.25mある。30～40cmの河原石が8石残存しており、方形の石組井戸であったと推定できる。石組の内法は一辺約1.7mである。埋土は暗褐色泥砂である。

池G2940（図版134） 東壁沿いにおいて南北約45m、東西約25mにわたり検出した。深さは0.1～0.4mあり、池の肩口から幅2～9mには小石を敷き詰め、粘土が貼られた州浜が残存する。州浜の傾斜は緩やかで、池内と肩口の比高差は0.3mである。池は調査区の東外に広がる。池の埋土は上層と下層に分かれる。上層は黄褐色砂泥、下層は暗褐色砂泥である。上層、下層からは平安時代後期の遺物が出土した（図版61・62・92-3）。

溝G1938 北西部で検出した東西方向の溝であるが、東西両側とも著しく削平されており、長さ2mほどのみ残存する。幅0.5m、深さ0.04mある。溝内から鎌倉時代の遺物が出土した（図版69）。

溝G3065 先述の溝G3415と同じ位置で検出した東西溝である。同じく正親町小路北側溝に該当するものと思われる。

溝G3360 中央部の東寄りで検出した南北方向の溝である。規模は幅0.3～1.0m、深さ0.1～0.2mあり、南北約12mにわたり検出した。埋土は炭・焼土を含む暗褐色砂泥で、溝内から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

土壇G2405 中央部の東寄りで検出した。北側は攪乱を受けている。残存規模は南北1.2m、東西2.5mの楕円形で、深さ0.1mある。埋土は炭・焼土を含む暗褐色砂泥で、土壇内から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

土壇G2407 中央部の東寄りで検出した。東西両側は削平を受けている。残存規模は南北

第7節 G区

2.2m、東西2.7m、深さ0.4mあり、不定形である。埋土は炭・焼土を多量に含む黄褐色砂泥で、土壙内から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

土壙G2457 中央部の南東寄りで検出した。他の遺構に著しく削平されており、残存規模は南北5.2m、東西4.5m、深さ0.1mあり、不定形である。埋土は炭・焼土を含む褐色砂泥で、土壙内から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

土壙G2477 南東隅で検出した。東側は著しく削平を受けており、残存規模は南北2.1m、東西1.2mで、深さは0.3mある。埋土は炭・焼土を含む黄褐色砂泥で、土壙内から鎌倉時代の遺物が出土した（図版67）。

土壙G2498 中央部の東寄りで検出した。南北1.7m、東西1.4m、深さ0.2mある。埋土は炭・焼土を含む黄褐色砂泥で、土壙内から平安時代後期の遺物が出土した（図版62）。

土壙G2712 中央部の北東寄りで検出した。著しく削平されており、南側のみ残存する。残存規模は南北2.3m、東西3.5m、深さ0.75mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から室町時代前半の遺物が出土した（図版70）。

土壙G2973 南東隅で東壁にかかり検出した。南側は他の遺構に著しく削平されており、東側は調査区外に延びる。残存規模は南北2.2m、東西1.5m、深さ0.1mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から平安時代後期の遺物が出土した（図版61）。

土壙G2990 中央部の南西寄りで検出した。規模は南北1.2m、東西1.1mの楕円形で、深さ0.2mある。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から平安時代後期の遺物が出土した（図版57）。

土壙G3201（図版31・135） 北半の中央部で検出した。南西側は削平を受けており、残存規模は南北0.85m、東西1.0mあり、楕円形である。深さは0.4mあり、底部には10～20cmの河原石を粗く敷いている。埋土は暗褐色砂泥である。

土壙G3255（図版31・135） 北半の中央部で検出した。直径0.85mの円形であり、深さは0.2mあり、底部には10～20cmの河原石を粗く敷いている。埋土は黒褐色砂泥である。前述した土壙G3201とはほぼ東西に並び、心々間で2.1mある。

土壙G3290 南東隅で南壁にかかり検出した。池の肩部とみられる南への下がり、検出した規模は、南北約1.5m、東西約4m、深さ0.3mである。埋土は黒褐色砂泥で、埋土から平安時代後期の遺物が出土した（図版59）。

土壙G3300 P区で検出した溝P124の北肩部にあたる。東西約12mにわたり検出した。深さは0.6～0.7mあり、埋土は炭・焼土を多量に含む黄褐色砂泥である。鎌倉時代の遺物がまとまって出土した（図版67）。

土壙G3660 中央部のやや東寄りで検出した。北西側は削平を受け、南側の一部も他の遺構に削平されている。残存規模は南北1.5m、東西1.9m、深さ0.25mある。埋土は暗褐色砂泥で、平安時代後期の遺物が出土した（図版58）。

土壙G3373（図版133） 中央部の東寄りで検出した。南北1.0m、東西0.9mの楕円形で、深さは0.45mある。10～50cmの河原石を粗く敷く。河原石間には平瓦片も含まれる。埋土は黄褐

色砂泥で、土壌内から鎌倉時代の遺物が出土した（図版63・93-4）。

整地層 G2500 中央部のやや南に堆積する炭・焼土を含む暗褐色砂泥をさす。層内から平安時代後期の遺物が多量に出土した（図版61）。

建物 G3730 中央部の東寄り、池 G2940の西州浜下で検出した。柱穴が10基ほどあり、東西3間以上、南北2間以上の建物に復元できる。建物はさらに西に延びる可能性があり、州浜上の柱穴は削平されたものと思われる。柱間は東西、南北ともに0.8~1.2mでばらつきがある。州浜上に形成された建物か、あるいは州浜以前の建物かは確認できていない。

柱列 G3731 先述の建物 G3730の南にある。L型に折れるコーナー部で、建物の北東隅の可能性もある。柱間は東西2m、南北2.2mである。

柱列 G3732 柱穴3基が南北方向に並ぶもので、前二者の東側で検出した。柱間は、北1間が約4mと広いと、中間に1間あったと推定される。南の柱間は1.5mである。柱間は北側に延長する可能性がある。柱穴の直径が0.7mとやや大きいことが特色である。

柱列 G3733 さらにその東で検出したもので、同じく柱穴3基が南北方向に並ぶ。柱間は2.5mの等間である。

（4）室町・戦国期

堀 G2933（図版41・131） 北半部で検出した南北方向の堀の遺構である。溝の底部柱穴があり、底には礎石が入れられる布掘柱列とよばれる遺構である。溝幅0.3m、深さ0.5mあり、長さ約30mにわたり検出した。柱の間隔は0.7~0.8mと一定であるが、南側では不揃いな箇所もみられる。堀 G2630の西肩1mに平行して掘られており、南端も堀 G2630の立ち上りと一致する。

堀 G3729（図版41） C区との境界付近で検出した堀の遺構である。柱穴9基からなり柱穴底にはすべて平らな河原石が礎石として入れられる。柱間は0.6~0.7mでほぼ等間である。東西方向に平らな石が並ぶ柵列である。西側の6基は約0.7mの等間隔であるが、東側の3基は不揃いな間隔で並ぶ。検出状況から布掘柱列であったとみられるが、溝は削平を受け、溝内の柱穴と礎石のみが残存した。堀 G2933などと一連の遺構と考えられる。

柱列 G3734 北端部で検出した柱穴群である。柱穴が4基あり、建物の北東隅にあたると思われる。柱間は、ほぼ1mの等間である。柱穴の規模は径0.3~0.4mである。

柱列 G3735 柱穴5基が東西1間、南北2間で並ぶ。柱間は、南北が北から1.5mと1.8m、東西が1.5mである。各柱穴の規模は径0.3~0.4mである。

柱列 G3736 柱穴6基からなる南北方向の柱列である。柱間は、北から1.6m、1.5m、1.0mと不揃いであるが、柱筋はほぼ通る。各柱穴の規模は径0.3~0.5mである。

柱列 G3737 柱穴6基からなる南北方向の柱列である。柱列 G3736の西にあり、2m間隔で平行する。柱間は1m前後である。柱穴の規模は径0.3~0.4mである。

なお、以上4箇所の柱列群は全体で1棟の掘立柱建物であった可能性も考えられる。平安京右京六条一坊の調査例¹⁾などを参照すると、東側は総柱で西に庇状の柱列が付加された複室構造の建物が復元できる。

井戸G1146（図版37） 北端で検出した石組井戸である。掘形は直径2.05mの円形で、深さは2.6m以上ある。石組の内径は約1mで、20～30cmの河原石を、小口面を内側に向け、円形に積み上げているが、一部崩れかかった箇所もみられる。埋土は暗褐色砂泥で、井戸内から戦国期の瓦器（図41）などとともに平安時代前期の軒平瓦（図版95-6）が出土した。

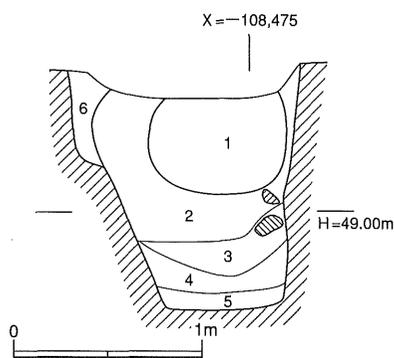
井戸G2555（図版38・131）北東隅で検出した石組井戸である。掘形は直径1.9mの円形である。壁面が不安定なため、掘下げは深さ1.2mに留めた。他の井戸の例から、深さは2m程度と推定される。石組の内径は約1mで、20～40cmの河原石を小口面に内側に向けて、乱雑に円形に積み上げる。埋土は暗褐色砂泥で、井戸内からは戦国期の遺物が出土した（図版75）。

堀G965（図版132、図20） 北半部で検出した東西方向の堀である。規模は幅0.9m、深さ1.0～1.2mあり、東西29mにわたり検出した。東西両端は立ち上り、消滅する。断面の形状はU字形を呈する。埋土は大きく3層に分かれる。上層部は江戸時代の整地土壌であり、さらにその上には江戸時代の溝G1635が重複する。中・下層が戦国期の堀埋土である。中・下層から戦国期の遺物が出土した（図版85）。

堀G2630（図版131、図21） 北端部で検出した南北方向の堀である。規模は幅1.8～2.75m、深さ1.85mであり、北壁から南に39.5m分検出した。北側はさらにJ区に達する（堀J87）。堀の断面形はV字形であり、上層部には堀J110が重複する。堀内から戦国期の遺物（図版79）とともに、平安時代中期の軒平瓦（図版96-4）が出土した。

土壌G1363 北端部で検出した。北側は削平されている。残存規模は南北2.6m、東西2.3m、深さ0.9mである。埋土は炭・焼土と小礫が混入する黄褐色砂泥で、土壌内から戦国期の遺物が出土した（図版81）。

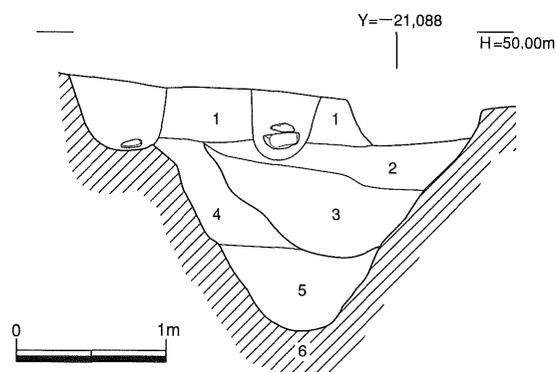
土壌G1874 中央部で検出した。著しく削平されており残存規模は南北1.0m、東西2.6m、深さ0.6mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壌内から室町時代の遺物が出土した（図版71）。



- 1 暗褐色砂泥（炭、焼土多量混、溝G1635）
- 2 暗褐色砂泥（炭、焼土多量混）
- 3 暗褐色泥土（炭、焼土多量混）
- 4 黒褐色泥土（炭、焼土多量混）
- 5 暗褐色泥土（礫多量混）
- 6 オリーブ褐色砂泥

2～5層=堀G965

図20 堀G965断面図
（Y=-21.102、東から）



- 1 褐色砂泥
- 2 褐色砂泥
- 3 にぶい黄褐色砂泥
- 4 にぶい黄褐色砂泥
- 5 にぶい黄褐色砂泥
- 6 褐色泥砂（礫多量混、地山）

2・3層=堀J110 4・5層=堀G2630

図21 堀G2630断面図（X=-108.460、北から）

土壙G1897 中央部のやや北寄りで検出した。南側は削平を受けている。残存規模は南北0.6m、東西0.9m、深さ0.1mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から室町時代の遺物が出土した(図版70)。

土壙G1984 中央部のやや南西寄りで検出した。西・東側ともに部分的に削平されており、残存規模は南北2.2m、東西2.7m、深さ0.7mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した(図版87)。

土壙G2073 北西隅付近で検出した。土壙G2126と重複する。残存規模は南北2m、東西2m、深さ0.65mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から室町時代の遺物が出土した(図版70)。

土壙G2083(図版38・130) 北端部で検出した。南側は削平を受けている。直径約1.3mの円形で、深さは0.8mある。埋土は炭・焼土・小礫を含む黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の土師器皿が多量に投棄された状態で出土した(図版75)。

土壙G2125 北西部の西壁際で検出した。南北2.0m、東西2.2mの不定形で、深さは0.7mある。埋土は褐色砂泥・黄褐色砂泥灰・灰黄褐色砂泥であり、土壙内から室町時代の遺物が出土した(図版70)。

土壙G2126 北西隅付近で検出した。土壙G2073と重なる。残存規模は南北1.5m、東西3.3m、深さ0.65mである。埋土は暗褐色砂泥と黄褐色砂泥であり、土壙内から室町時代の遺物が出土した(図版70)。

土壙G2207 中央部の西壁際で検出した。西側は著しく削平されており、残存規模は南北2.4m、東西1.3m、深さ0.7mである。埋土は黒灰色砂泥で、土壙内から室町時代の遺物が出土した(図版70)。

土壙G2214 北端部付近で検出した。堀G2630と重複しており、その西肩を掘込む。西側は他の遺構の削平を受けている。残存規模は南北0.8m、東西1.5m、深さ0.05mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した(図版81)。

土壙G2234 北半部のほぼ中央で検出した。南側は土壙G2318による削平を受けている。残存規模は南北0.8m、東西1m、深さ0.2mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した(図版72)。

土壙G2270 北東部で検出した。西側は削平されており、残存規模は南北1.8m、東西1.2m、深さ0.3mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物(図版87)とともに、平安時代中期の緑釉軒平瓦(図51-4)も混入して出土した。

土壙G2318 北半部のほぼ中央で検出した。東側は削平を受けている。北側の土壙G2234を掘込む。残存規模は南北1.8m、東西1m、深さ0.2mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した(図版78)。

土壙G2413 中央部のやや西寄りで検出した。東側は削平を受けており、残存規模は南北2m、東西1.2m、深さ0.4mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した(図版87)。

第7節 G区

土壙G2512（図版38・130） 南東隅で検出した。北側は大きく削平を受けている。残存規模は南北2.5m、東西2.9mの方形で、深さは0.4mである。底部には南北1.9m、東西1.6mの範囲に厚さ0.1mほど炭化層が堆積していた。土師器小片とともに銅製品の破片が出土した。鑄造に関連する遺構と考えられる。

土壙G2631 中央部の北寄りで検出した。規模は南北1.4m、東西1.1m、深さ0.25mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版74）。

土壙G2649 北端部で検出した。堀G2933を掘込む。規模は南北1.5m、東西1m、深さ0.5mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版85）。

土壙G2736 北半部の東壁際で検出した。西側は土壙G2821などの削平を受ける。残存規模は南北5.9m、東西2m、深さ0.9mあり、不定形である。埋土は炭・焼土を含む黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物（図版75）とともに、平安時代後期の軒平瓦（図版96-14）が混入して出土した。

土壙G2821 北半部の東壁際で検出した。土壙G2736を掘込むが、西側は削平されている。残存規模は南北4.3m、東西1mと細長く、深さは1.3mである。埋土は炭・焼土と、小礫が混入する褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版81）。

土壙G2877 北半部の東で検出した。幅0.5m、長さ6m以上の南北方向に細長い溝状を呈し、深さは0.6mある。埋土は褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版75）。

土壙G2897 北壁にかかり検出した。北側は調査区外に延びる。規模は南北0.6m以上、東西1.3m、深さ0.65mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版74）。

土壙G3097 北半部の西壁際で検出した。東側は削平を受けている。南北1.3m、東西1.2mの楕円形を呈し、深さは0.6mある。埋土は暗褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版72）。

土壙G3226 北半部のほぼ中央で検出した。東側は南北方向の堀G2630に壊されており、残存規模は南北2m、東西0.9m、深さ0.3mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版85）。

土壙G3304 北半部のほぼ中央で検出した。東側は堀G2630に壊されており、残存規模は南北6.1m、東西1.4m、深さ0.8mである。埋土は黄褐色砂泥で、土壙内から戦国期の遺物が出土した（図版84）。

第8節 H区（図版26～28・137～139）

調査地の中央部に設定した調査区である。建設計画では中庭部分に該当し、東端は池の汀線にあたるため、調査区東辺は出入りする形状となった。周囲をA区・C区・G区・E区などに囲まれる。北辺四坊八町の南西部に該当する。

(1) 古墳・飛鳥時代

流路 E 900 (流路 H 820、図版139、図22) 北東から南西方向への流路で、この H 区から E 区、F 区、X 区へと連続する。報告では E 区の遺構名を代表させた。H 区では幅1.5~1.8m、深さ0.4m前後あり、埋土は上層が黒褐色砂泥、下層が灰黄褐色砂泥で、両層とも小礫を多く含む。北東部では、遺構の輪郭は広がりをもち、不明確であった。図22に断面を示した箇所では、幅1.4m、深さ0.4mある。古墳時代前期から後期、飛鳥時代までの遺物が出土した(図版42、図31)。

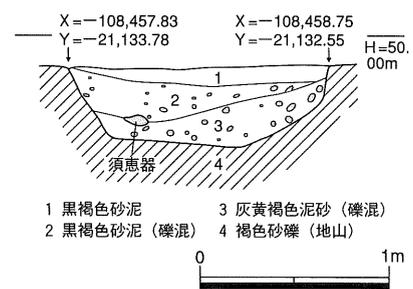


図22 流路 E 900断面図
(H区、南西から)

(2) 平安時代後期・鎌倉時代

土壙 H 833 後述する戦国期の地業 H 666の北端に位置する浅い土壙である。南側は地業 H 666に壊される。平安時代後期の土師器が出土した。

土壙 H 841 同じく地業 H 666に壊された浅い土壙で、平安時代後期の土師器が出土した。土壙 H 833の南にあり、同一遺構の可能性はある。

土壙 H 842 (図版138、図23) 地業 H 666の南半部と重複して検出した。形状や規模は不明であるが、深さ0.15mと浅く、平安時代後期の土師器皿がまとまって出土した(図版58)。

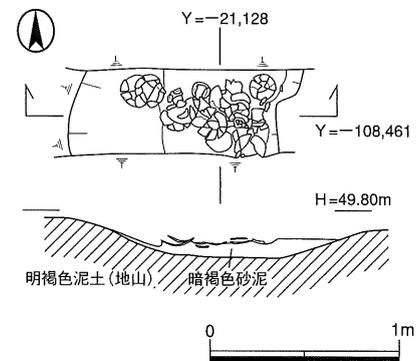


図23 土壙 H 842土器出土状態

以上の他に、この時期に属する柱穴や小規模な土壙を多数検出したが、柱穴は建物・柱列にはまとめられなかった。

(3) 室町・戦国期

地業 H 666 (図版39・138) 中央部のやや南寄りで検出した。南北方向の布掘り溝とそれに直交し西に延びる10条の短い布掘り溝からなる。東辺をなす南北方向の布掘り溝は、長さ9.4m、幅0.45m、深さ0.4~0.8mあり、壁の掘込みは垂直で底部も平坦である。東西方向の布掘り溝は、北から7条目と8条目のものが井戸 H 328によって壊されるが、10条目まではほぼ1m間隔に並び、長さは3.15~3.5mで、幅・深さとも東辺の布掘り溝と同じ規模である。東辺の布掘り溝では、東西布掘り溝との交差部の底に人頭大の河原石が据えられる。東西布掘り溝も、大部分は西端に河原石が据えられる。河原石の東西距離は約3mである。河原石は柱をうける礎石とみられるため、この地業は建物基礎の一種と考えた。布掘り溝から戦国期の遺物が出土した(図版78)。

建物 H 918 北西部で検出した。L形に折れる柱列で、建物の南面と東面を想定した。東面は1.2m幅で2筋の柱列があり、建物東面の庇と考えた。母屋部分は東西3間以上、南北3間以上で、柱間は東西が2mの等間、南北は2m前後で不揃いである。南面の柱穴には礎石が据え

られる。

塀H815 南壁際で検出した南北方向の塀の遺構である。長さ2.6m、幅0.9m、深さ0.4mある溝状遺構の底に礎石が3基並ぶ。礎石間の距離は、北1間が0.8m、南1間が0.9mである。G区への延長は不明である。

柱列H919 北端で検出した。東西方向の溝内に柱穴が5基並ぶ。柱間は0.95mの等間で、底に礎石を据えるものがある。溝底に柱穴を掘込む「布掘柱列」であるが、A区・C区には延長しない。ただしA区で検出した建物A1105の南側柱筋にほぼ一致する点は注意を要する。

柱列H920 中央部で検出した。東西方向の柱列で、13間以上ある。柱間は0.8～1.45mまでばらつきがある。地業H666によって壊されるため、地業H666以前の柵とみるのが妥当である。

柱列H921 南西部で検出した。南北方向の柱列で3間以上ある。柱間は1.2mの等間である。

柱列H922 南西端で検出した。南北方向の柱列で6間以上ある。底部に礎石を入れるものが多く、柱間は1.6～1.8mとやや広い。

柱列H923 南北方向の柱列で地業H666西端の北延長にある。また東西の柱列H920と直交するが、柱穴は共有しない。3間以上あり、柱間は0.8mである。柱穴は一辺0.5mの方形で、他の柱穴より大きい。うち2基の底には礎石が据えられていた。なお、地業H666南西端から南2.9mの地点でも柱穴を1基検出しており、柱底に礎石が据えられる。

井戸H328（図版39・138） 地業H666の南西部を壊すかたちで造られた石組井戸である。掘形は不整形円で東西2.4mあり、石組は内径1mで小型の石材が乱雑に積まれる。検出面から1.25mまで掘下げたが、底は未確認である。戦国期の遺物が出土した（図版82）。

井戸H705（図版39・138） 南東部で検出した。石組井戸とみられるが、石組は西半の1・2段が残存するのみであった。石組に相当する範囲には石材が多数落ち込んでいた。検出面から2.3mで底部に達したが、特別の施設はみられなかった。

石組H695 南東部の東壁付近で検出した。石材が円形にめぐる遺構で、内径0.6mあり、中央部が深さ0.8mまで掘込まれる。上半が削平された石組井戸の可能性はある。

集石H555（図版33・138） 北端で検出した。東西3.6m、南北1.2mの範囲が0.3mほど掘込まれ、壙内に10cm前後の河原石が入れられる。戦国期の遺物が出土した（図版78）。

土壇H723 北半部で検出した小規模な土壇で、土師器を中心に室町時代の遺物が出土した（図版70）。

第9節 J区 (図版11～13・140)

調査区は、北辺四坊八町の中央やや東に該当し、C区の東、G区の北東部に位置する。検出した遺構は土壇、溝、堀などであり、時期は古墳・飛鳥時代と室町・戦国期に属する。以下、時代順に概述する。

(1) 古墳・飛鳥時代

流路G 3579 (流路J 191) 南西部で検出した。北東から南西方向の流路である。幅0.8m、深さ0.4mで、長さ約2m残存していた。G区で検出した古墳時代の流路G 3579とは同一遺構である。埋土は暗褐色砂泥と黄褐色砂泥である。

(2) 室町・戦国期

堀G 2630 (堀J 87、図24) 西端部で検出した南北方向の堀の遺構である。西肩部には堀J 110が掘込まれている。J区での規模は幅1.5m、深さ1.7mあり、長さ15mにわたり検出した。断面形状はV字形で埋土は10層に分かれ、いずれも炭・焼土を少量含む。堀内から戦国期の遺物が出土した (図版79)。なお、堀J 110も堀G 2630とほぼ同時期である。

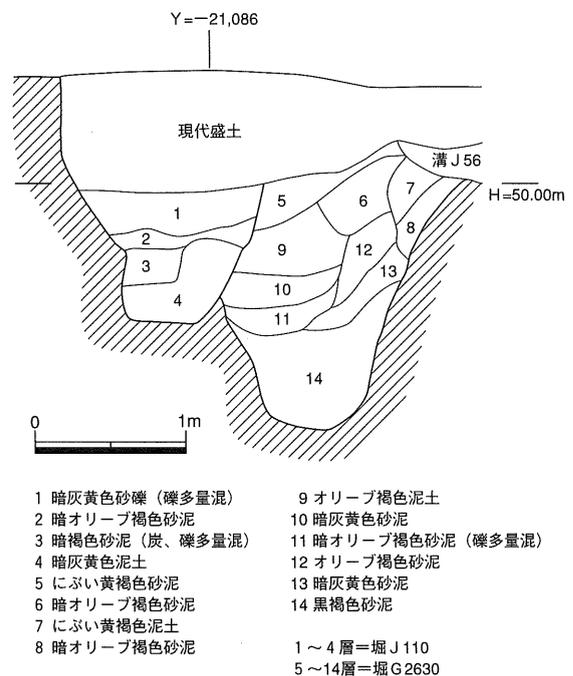


図24 堀G 2630 (J区北壁) 断面図 (J区北壁)

溝J 179 南半部で検出した東西溝である。幅0.9～1.1m、深さが1.2mあり、長さ3.8m分検出した。断面形状はV字形で、埋土は黄褐色砂泥と暗褐色砂泥である。溝内から戦国期の遺物が出土した (図版72)。

土壇J 92 東壁にかかり検出した。前述した東西溝J 179の北肩を掘込む。南北0.9m、東西0.6m、深さ0.1mある。埋土は灰黄褐色砂泥で、土壇内から戦国期の遺物が出土した (図版72)。

土壇J 142 南半部で検出した。東・西側を江戸時代の溝で壊されており、残存規模は南北1.6m、東西0.4m、深さ0.35mである。埋土は暗褐色砂泥で、土壇内から戦国期の遺物が出土した (図版87)。

土壇J 151 南半部で検出した。西側は江戸時代の溝で壊されている。先述の土壇J 142と同一遺構と考えられる。残存規模は南北1.5m、東西0.4m、深さ0.2mある。埋土は暗褐色砂泥で、土壇内から戦国期の遺物が出土した (図版87)。

土壇J 168 南半部で検出した。北側は削平されるが、残存状況から径0.6mの円形と推定できる。埋土は炭・焼土と小礫を少量含む暗褐色砂泥で、土壇内から戦国期の遺物が出土した

(図版72)。

土壌 J 175 南半部で検出した。西・東側は削平を受けており、残存規模は南北1.3m、東西2.3m、深さ0.2mである。埋土は褐色砂泥で、土壌内から戦国期の遺物が出土した(図版78)。

土壌 J 182 南半部で検出した。北側は削平を受けており、残存規模は南北1.3m、東西1.4mの楕円形で、深さは0.25mある。埋土は黒褐色砂泥で、土壌内から戦国期の遺物が出土した(図版81)。

第10節 K区 (図版11～13・140)

調査区は、北辺四坊七町のほぼ中央部に該当する。G区の南東に位置し、インフラ調査の一環として実施した。検出した遺構は平安時代から室町・戦国期までの柱穴、土壌、池などである。以下、概述する。

(1) 平安時代後期・鎌倉時代

土壌 K 46 北端で検出した北東側へ下がる遺構の肩口である。下がり肩口の長さは約4mで、範囲は南北3m、東西2m、深さは0.36mある。この下がり肩口はG区で検出した土壌 G 3290と遺構の埋土が類似する点で、同一遺構とみられる。両方の埋土は、炭・焼土を多量に含む暗褐色砂泥である。埋土からは多量の平安時代後期の土師器(図版60)と、軒丸瓦(図版91-10)が出土した。

土壌 K 50 南半で検出した。径0.45mほどの楕円形で、深さは0.08mある。埋土は褐色砂泥である。

土壌 K 52 南端部で検出した南側へ下がりである。範囲は南北2m、東西2mあり、深さは0.3mある。埋土は暗褐色砂泥である。この下がり肩口は土壌 G 3290・土壌 K 46と一連のものと思われ、それらの肩部を池の汀線と推定した。この池は調査区外の東南方向に広がっていたものと思われる。

土壌 K 79 南半で検出した。径0.5mほどの楕円形で、深さは0.28mある。埋土は暗褐色砂泥で、土壌内から瓦片が多量に出土した。また平安時代後期の軒丸瓦も出土している(図版92-7)。

土壌 K 81 中央部で検出した。径0.5mほどの楕円形で、深さは0.28mある。埋土は黄褐色砂泥である。

整地層 K 85 土壌 K 46と土壌 K 52の間の南北約10m、東西約4mの範囲に、厚さ0.5mにわたり炭・焼土を含む黄褐色砂泥が分布する。層内から平安時代後期の軒瓦が出土した(図版92-6・9・19、図版97-1～3・15)。

(2) 室町・戦国期

柱穴や土壌を検出しているが、特別な遺構がないため、詳述しない。

第11節 P区 (図版20～22・141)

調査区は、北辺四坊七町の中央から西寄りに該当する。F区・G区の南端を南へ約7m拡張して設定した調査区である。検出した遺構は土壇、溝、池などで、遺構の時期は平安時代～室町・戦国期である。以下、時代順に概述する。

(1) 平安時代後期・鎌倉時代

池G2940 (池P195、図版141) 東端部で検出した池の汀線とみられる緩やかな東への下がりである。G区で検出した池G2940と同一の池である。検出した範囲は東西に約8.5m分で、深さは最深で0.3mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層が炭・焼土を少量含む暗褐色砂泥、下層が黒褐色砂泥である。池内からは平安時代後期の土器 (図版62) と、平安時代前期～後期の軒瓦 (図版92-2・97-10、図51-2) が出土した。

溝P124 (図版141、図25) G区との境界で検出した東西方向の溝である。土壇G3300は当溝の北肩部にあたる。幅2m、深さ0.75mあり、東西約17.5mにわたり検出した。西側は桃山時代の南北方向の堀に削平されており、東側は調査区外に延びる。溝の埋土は上から、炭・焼土を含む黒褐色砂泥、暗褐色砂泥、黒褐色砂泥の3層である。溝内から鎌倉時代に属する所謂「乙訓在地形」土師器皿がまとめて出土した (図版64・65)。

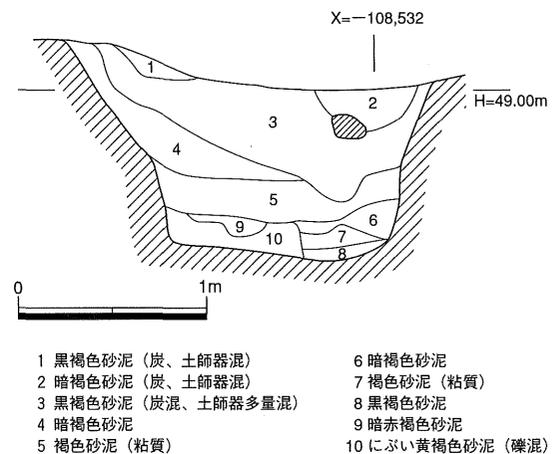


図25 溝P124断面図 (Y=-21.111、西から)

土壇P108 (図版141) 東壁にかかり検出した。南北1.5m、深さ0.25mある。底部には10～30cmの石が乱雑に敷かれていた。埋土は黒褐色砂泥で、土壇内から鎌倉時代の遺物が出土した (図版63)。

土壇P242 東端で検出した。東側は削平されており、残存規模は南北約4m、東西約3m、深さ1mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、土壇内から平安時代後期の遺物が出土した (図版62)。

土壇P243 (図版141) 東壁際で検出した。長径1mほどの楕円形で、深さ0.5mある。土壇内には15cm前後の河原石が敷かれる。

土壇P247 東端で検出した。南北1.3m、東西1.6mの不定形で、深さ0.4mある。埋土は灰黄褐色砂泥で、土壇内から平安時代後期の遺物が出土した (図版58)。

(2) 室町・戦国期

井戸P162 南壁沿いで検出した石組井戸である。掘形は円形で直径2.6m、深さは検出面から2.4mある。石組の内径は上部で1.2m、下部で1.0mあり、人頭大の河原石を乱雑に積み上げる。石組内を約2m掘下げたが、底は未確認である。埋土は炭・焼土を若干含む暗褐色砂泥である。

第12節 O区 (図26)

本体調査区北側の御苑苑路上に設けた埋設管設置部分の調査区である。推定一条大路上にあたり、一条大路の路面、側溝、築地などの検出が予測された。工事車両の通路確保のため、北と南の二つの調査区に分けて調査した。現地表から0.5～0.6mまで江戸時代の地層で、それ以下より室町時代以前の堆積となる。戦国期の遺構は北の調査区で堀O17と溝O18を検出している。いずれも、東西方向の堀・溝で戦国期に一条大路北端に掘削された防御用の堀であろう。南の調査区では室町時代から戦国期にかけての土壙群や柱穴群などを検出している。この遺構群は、平安京条坊の一条大路南半部に分布しており、巷所化が進行していた様子がうかがえる。平安時代の遺構は、10～11世紀の一条大路路面を検出している。また、溝O19は10世紀の遺物が出土した東西溝で、一条大路北側溝の可能性もある。南の調査区では、一条大路に関連する路面や側溝を検出しておらず、また、それ以外に平安時代にさかのぼる明確な遺構はない。

(1) 平安時代後期・鎌倉時代

溝O19 北肩部を検出できなかったが、断面観察から幅0.8m、深さ0.4mの東西溝である。断面はU字形を呈する。埋土から10世紀代の遺物が出土している。平安時代の一条大路北側溝の可能性もあるが、南肩口からすぐに路面の小礫敷が始まること、推定一条大路北端ラインより約4m南によることなど不自然な点もあるため、断じ難い。

(2) 室町・戦国期

溝O18 幅1.3m、深さ0.8mある東西溝である。断面はU字形を呈する。溝底から人為的な埋土で一気に埋められる。埋土から11世紀代の遺物が出土しているが、溝の形状からは戦国期の防御用の堀の可能性もある。

堀O17 幅5m、深さ1m以上ある。調査区が狭く安全な法面を確保できないため、溝底まで掘削できなかった。両肩とも45度程度の傾斜を有する。断面V字形の堀と考える。埋土は、確認できた部分についてはすべて人為的に一気に埋め戻されたものである。埋土から16世紀代の遺物が出土している。戦国期の防御用の堀と考える。推定一条大路北端ライン上に穿たれている。

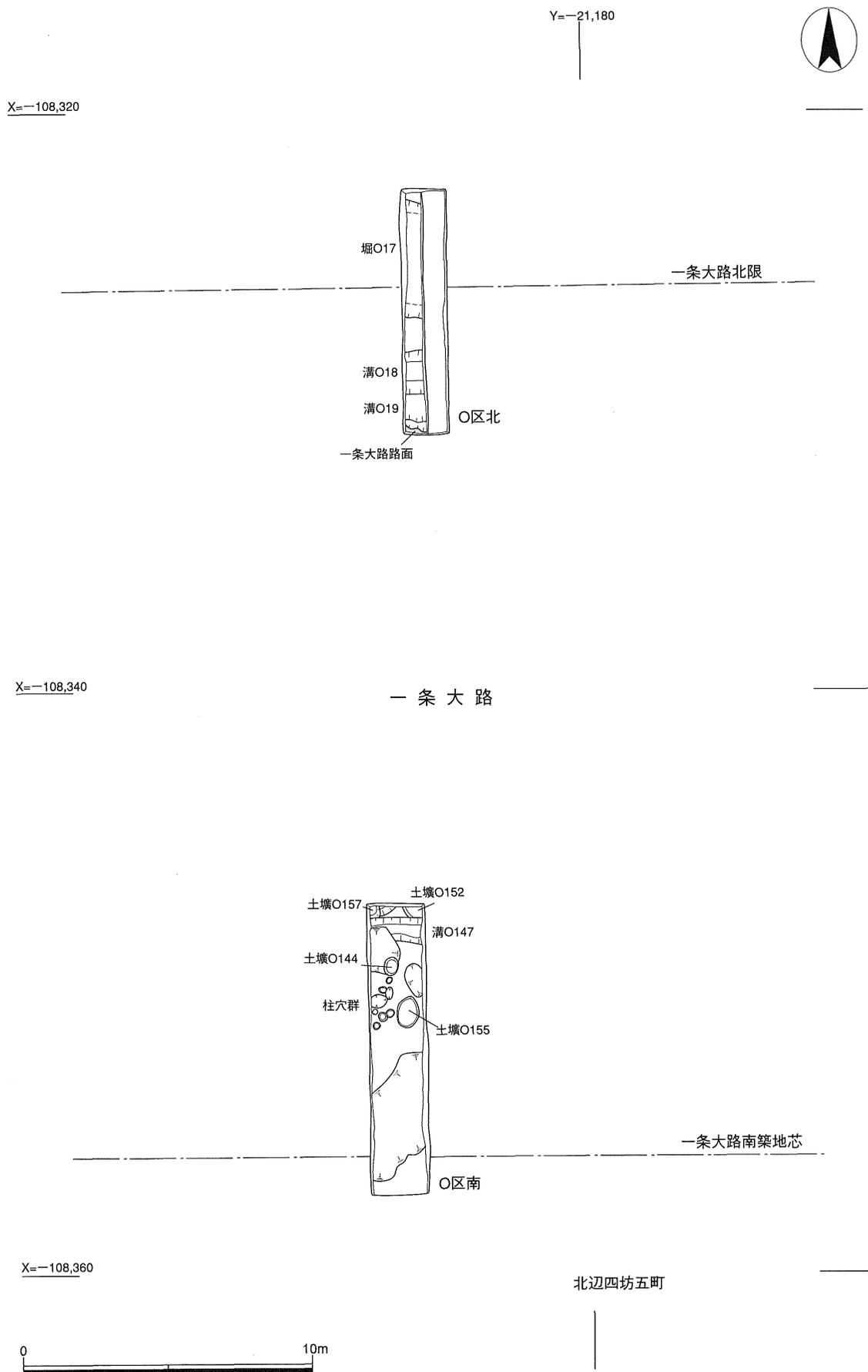


图26 O区平面图

第13節 R区 (図27・28)

本体調査区南側苑路上に設けた埋設管設置部分の調査区である。管の埋設予定レベルより下へは掘削できなかったため、室町時代以前の調査は部分的なものに留まった。R区のほぼ中央を、東西方向に土御門大路が横断することが推定できた。そのため、土御門大路の南限を確認する目的で、東西約10m、南北0.8~1.4mの小調査区を江戸時代遺構面に設定し、調査した。その結果、11世紀代と思われる土御門大路の路面の小礫敷と、室町時代のものとする溝などを検出した。溝R1125は、時期は限定できないが、中世期の土御門大路南側溝の可能性はある。小調査区南端で小柱穴、土壇、溝（柱穴R1120~溝R1124）などを検出したが、明確な平安時代の土御門大路南側溝や南築地跡などは検出できなかった。

(1) 室町・戦国期

溝R1119 幅2.4m、深さ0.6m以上ある東西溝である。溝底まで掘削していない。両肩口は垂直気味に落ちる。断面U字形の溝と考える。人為的に埋められた後、幅2mほどの溝がしばらくの間機能した後、再度完全に埋め戻された状況が断面により観察できた(図28)。埋土から11世紀代の土器類が出土しているが、溝の形状から、室町時代後期の防御用の堀と考える。出土遺物は図42で掲載した。

溝R1125 幅1.7m、深さ0.4mある東西溝である。埋土は人為的な埋め土である。埋土から遺物は出土していない。平面的な位置から土御門大路の南側溝と考えるが、断面観察では、11世紀代と考えた土御門大路路面より上位から掘込まれている。中世頃の側溝と考える。

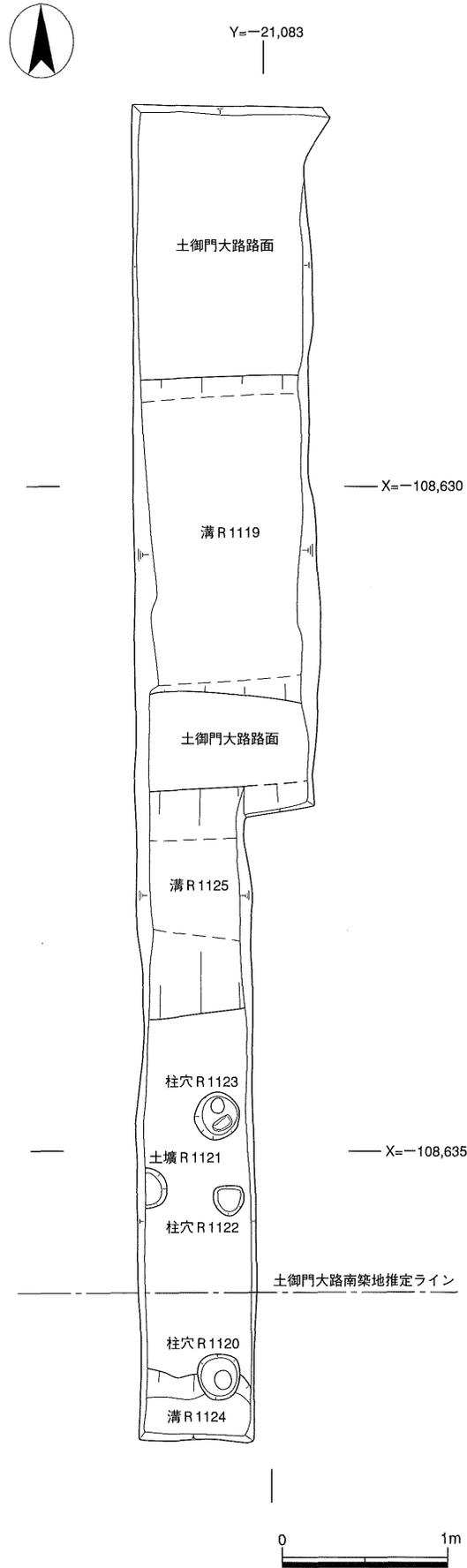


図27 R区中世以前確認部分平面図

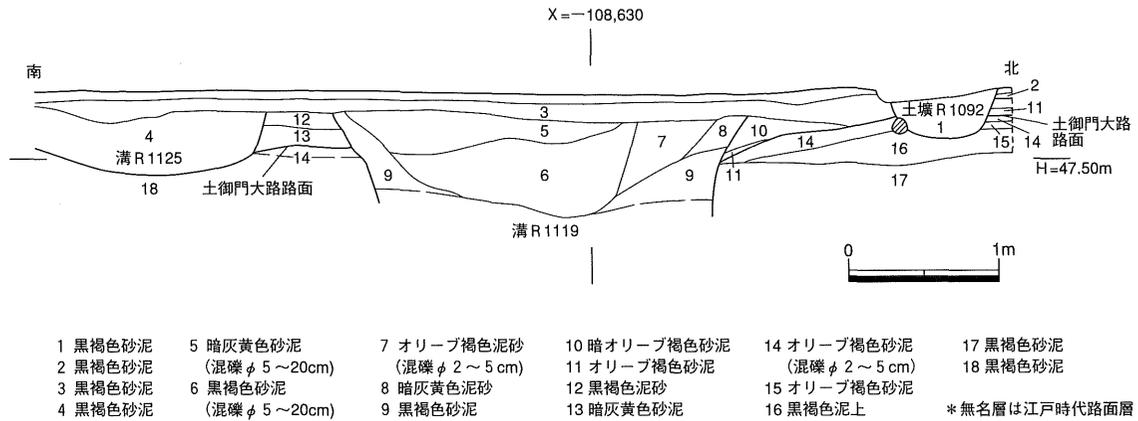


図28 R区中世以前確認部分断面図（西壁）

第14節 S区・T区・U区（図29・30）

いずれも仙洞御所北側苑路上から清和院御門付近に設定した調査区である。管の埋設予定レベルより下へは掘削できなかったため、室町時代以前の調査は部分的なものに留まった。S区のはほぼ全域は、一条四坊十六町にあたる。ここには、10世紀末から11世紀にかけて藤原道長の邸宅「土御門殿」が存在した²⁾。S区の東端には東京極大路が想定される。T区は調査区全体が東京極大路上にあたる。U区は調査区の中央に東京極大路の東端が想定される。従って、部分的なものに留まらざるを得なかった室町時代以前の調査は、土御門殿の遺構の存在を確認すること、東京極大路の路面、側溝、築地などを検出することに目的を置いた。しかしながら、S区の東半に想定される東京極大路西築地付近は、既存埋設管が多数存在したため、十分な調査はできなかった。S区中央部の北壁沿いに設けた小調査区（図29）では、池状遺構の西肩部と土壇、柱穴などを検出している。また、S区、T区、U区で、東京極大路路面の小礫敷を検出している（図30）。

（1）平安時代後期・鎌倉時代

池状遺構 S70 礫を含む泥土を埋土とするもので、11世紀前半の土器類が出土している。池状堆積の広がり、立会162、立会164、立会165、立会166、立会167でも確認しており、この調査区から東へ20m以上の広がりを持つことは明らかである。遺物が示す年代から、土御門殿存続期の遺構と考えるが、洲浜や景石など庭園を構成する施設は検出していない（付図2参照）。

土壇 S71 池状遺構 S70の西肩部部分に掘込まれた土器溜である。東西0.75m、南北0.8m以上、深さ0.5mある。埋土中に11世紀前半の土師器片が多量に含まれる（図版55）。

柱穴 S72 明確な柱痕を有する柱穴である。掘形の直径は0.5~0.6mある。柱痕は直径0.16mの円形である。池状遺構が埋没した後に掘込まれる。明確な出土遺物が無いため帰属時期は不明である。

土壇 U35 推定東京極大路東端より東で検出した。東西2m以上、深さ0.1mある。東京極大路東側溝の可能性を考えて調査したが、確証は得られなかった。平安時代の瓦片が出土したが、

第14節 S区・T区・U区

確実な帰属時期は不明である。

東京極大路路面 東京極大路路面が検出された標高は、S区で47.25~47.3m、T区で47.25m、U区で47.25~47.3mで、全く一致している。また、U区で検出した路面は、推定東京極大路東端を越えて広がっており、『延喜式』「京程」の記載よりある時期広がっていた可能性がある。

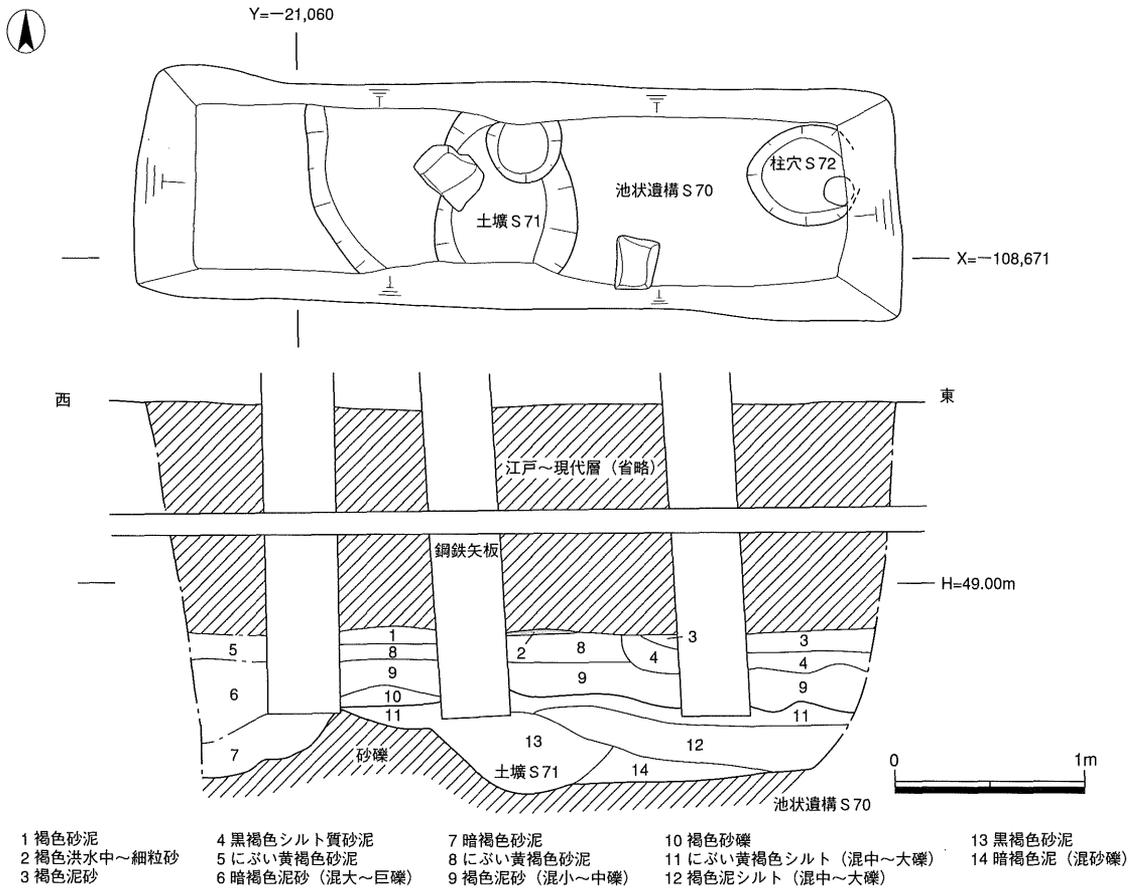


図29 S区中世以前確認部分平面図・断面図

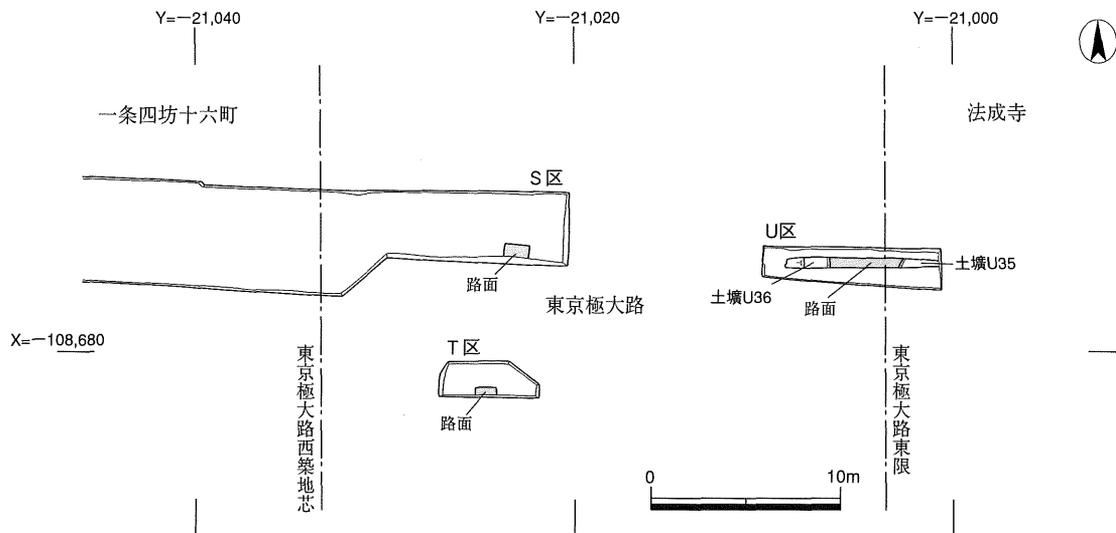


図30 S区・T区・U区平面図

いずれの地点でも路面の年代を示す遺物を得ていないが、T区の路面を直接覆う地層から13～15世紀の土師器片が出土している。また、U区で路面を切り込む土壌U36は15世紀の遺構である。以上から、検出した東京極大路路面は平安時代から室町時代前半までのある時期に使用された路面と見ることができる。なお、戦国期以降の路面が検出されないこと、S区東端とU区ではこの時期の耕作土が確認されることから、戦国期には、この地点の東京極大路は街路として機能せず、耕地化していたものと考えられる。

第15節 V区・W区

埋設管設置部分の調査で清和院御門と寺町通の間の部分である。管の埋設予定レベルより下は掘削できなかつたため、室町時代以前の調査は部分的なものに留まった。この地域は、東京極大路の東側で平安京外であるが、11世紀前半に藤原道長によって造営された法成寺の推定地である³⁾。V区では、標高47.3mで地山と思われる黄褐色シルト層、47.5mで平安～鎌倉時代と思われる遺構面（暗灰黄色砂泥層上面）を検出したが、調査面積が狭いこともあり、明確な遺構を検出することができなかつた。またW区では、標高47.1mまで掘削したが、江戸時代層下に水成砂礫層が堆積するのみであり、室町時代以前の地層は不明であった。

第16節 X区（図版17～19）

平安時代以前から存続する北東から南西方向の流路F2550を調査区全域で検出した。この流路の下層は古墳時代後期から飛鳥時代の遺物を含む水成砂礫層で、地山の砂礫層との境界は不明である。流路の上部は平安時代前期から後期の遺物を包含する埋土で埋められている。さらに、平安時代後期から鎌倉時代にかけてわずかに残った旧流路上の凹みが埋められるが、これが層X76、層X77である。柱穴X61、柱穴X62は鎌倉時代から室町時代の遺物が出土した小柱穴で、柱穴底に礎石を有する。層X75は層X76、層X77と同様の性格の遺構であるが、埋土から16世紀代の遺物が出土した。

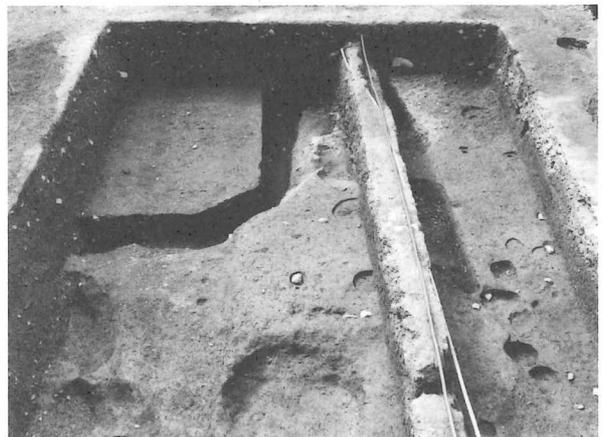


写真3 X区全景（室町時代、東から）

註

- 1) 「3節 建物遺構」(『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1992年、P31) に示された「御建物61型」「建物62型」に該当する。
- 2) 山田邦和「左京全町の概要」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店1994年。
- 3) 関口力・平田泰「平安京の寺院」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店1994年。

第5章 遺物

この章では調査で出土した遺物を、土器類、瓦類、その他の遺物、の順に記述する。土器類については、古墳時代から桃山時代の直前までのものについて、器種、器形の順に解説する。ただし今回の整理作業では、破片数の集計、並びに統計的な分析は実施しておらず、また個体観察表も作成していないため、本節で個体個々の特徴を記述し、土器群としての特徴や編年の位置づけに関しては、第6章第2節で解説する¹⁾。また、軒瓦を中心とした瓦類については第2節で、その他遺物については第3節で解説するが、これらは巻末に観察表を掲載したため、本節では概要を記す程度とする。

第1節 土器類

1 古墳時代前期～後期、飛鳥時代（図版42・142・143）

各調査区から古墳・飛鳥時代の遺物が出土している。図版42で示した遺物の出土地点は、地区別にいうと、土壙B727（42-8）、土壙B869（42-2、5、9）、整地層B888（42-42）、土壙C1288（42-11、13、15～18）、土壙E734（42-24）、流路E900（F区出土=42-1、14、28、30、H区出土=42-4、22、26、29、32、40、43）、土壙F2018（42-36）、溝F2500（42-27、31、44）、流路F2550下層（42-6、7、12、19、20、35、G区出土=25、34、37、39、41、X区出土=33）、土壙G1755（42-3）、土壙G3551（42-21、23）、石敷G3578（42-38）、土壙O8（42-10）、である。このうち、土器の年代が遺構と一致するものは、土壙C1288、流路E900、流路F2550下層、土壙G1755で、それ以外は平安時代～江戸時代の遺構に混入して出土したものである。またこれら以外では、土壙B1000、土壙B1030、土壙B1066、土壙C948、土壙F1109、土壙F1433、土壙F1610、土壙F2204、土壙F2323、土壙F2370、土壙F2505でも当該期の土器が出土しているが、図示していない。

古墳時代前期の土師器には、壺（42-1、2）、甕（42-3、4、12～15）、高杯（42-5～10）、鉢（42-11）がある。1は細頸壺、2は長頸壺の口縁部である。3、4は受口状を呈する甕の口縁部である。12～15は甕底部の破片で、14はタタキ目、15はハケメを施す。高杯5～10はいずれも脚部で、6、10には円形の透かし孔がある。鉢11は底部が突出し、壺の下半部と同じ形態をもつ。この他、土師器甕（42-16～20）は口縁部が外反する形態をもち、18は外面にタタキ目、19、20は外面に粗いハケメがみられる。

須恵器は古墳時代後期から飛鳥時代にかけてのものである。杯蓋（42-21～24）、杯身（42-25～32）、短頸壺（42-33、34）、台付長頸壺（42-35～37）、甕（42-38、39、44）、提瓶（42-40）、甗（42-41）、高杯（42-42、43）がある。杯蓋のうち、21は口径9.6cm、高さ

第1節 土器類

2.1cmの小型製品であり、23、24とともに天井部をヘラケズリ調整する。杯身25、26は杯蓋を逆さにした形態をもつ。27～32は短い立ち上がりをもつ形態で、30のみ底部をヘラケズリ調整する。短頸壺33、34は底部をヘラケズリ調整する。台付長頸壺では、36は脚台に透かし孔をもち、体部外面はクシ目で刺突文を施す。37は外反する脚台をもつ。35は肩が張る体部をもち、脚台も高台状となる。甕39、44は口縁部に波状文と凹線文が施される。甕は口頸部が大きいのが、文様はない。なお、図31で示した土師器鉢は、流路E900（H区）から出土したもので、大型品であるため単独に示した。古墳時代前期に属する。

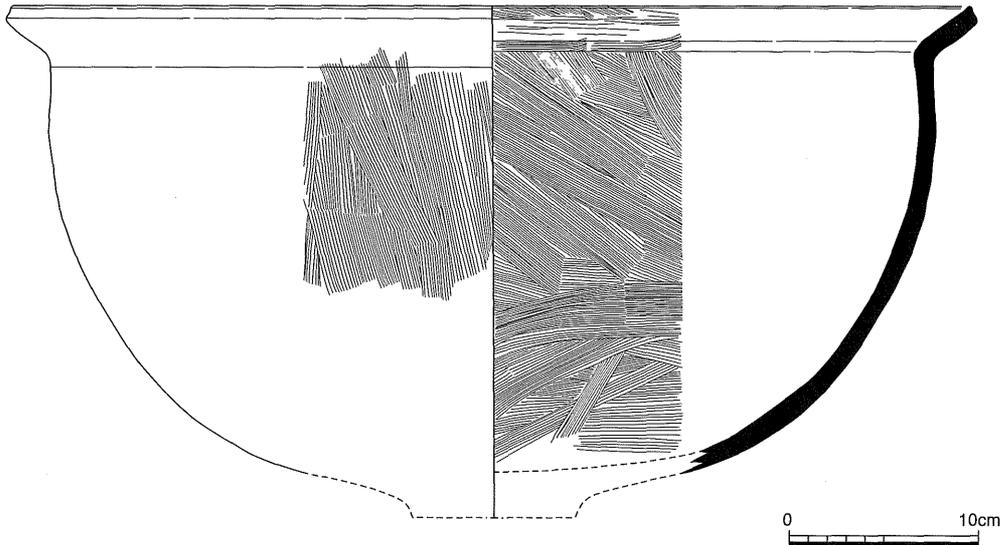


図31 流路E900（流路H820）出土土師器実測図

2 平安時代前期の前半代

土壌F2639（図版43） 遺物袋で2袋出土している。土師器、須恵器がある。京都I期新～II期古に属する。

土師器には椀、蓋、甕がある。椀（43-1～4）は口径11.4～15.0cm、深さ3cm前後あり、いずれも外面をヘラケズリ調整する。4は口径13.4cm、深さ2.5cmあり、皿とするには口径が小さいため、椀とした。蓋（43-5）は、天井部をヘラミガキし、頂部につまみを付ける。甕（43-6～8）はいずれも口縁部が外反する形態をもつ。6は口径25.3cm、7、8は口径13～15cmである。

須恵器には杯、皿、壺がある。杯（43-9、10）は高台が付かない器形で、9は口径12.0cmで深さ3.6cmある。11は浅い器形で、高杯の可能性もあるが、ここでは皿と考えた。端部は面をもつ。12は壺（瓶子）の口縁部で、口径9.0cmある。

井戸E765（図版43・144） 遺物用コンテナ4箱と遺物袋4袋出土している（以下、「4箱と4袋出土している」とする）。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、埴がある。京都II期古に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、甕がある。椀（43-13～20）は口径11.4～14.3cm、高さ3cm

前後で、外面をヘラケズリ調整するものが多い。13の内面のヘラミガキは回転させて施す。19は口縁部が外反気味で、ヘラケズリは施されない。16、18は井戸掘形から出土した。皿（43-21、22）は口径15.0～16.0cm、高さ1.5cm前後の浅い器形で、口縁部は外反気味に収める。杯（43-23～25）は口径16.0～19.0cm、高さ3cm前後で、口縁部は横ナデ調整し、外面は未調整のままである。25は外面の横ナデは幅が広い。高杯（43-29～33）は全形のわかるものではなく、脚部を中心とした個体のみである。脚部は下方から上方にヘラケズリし、断面が7角形（29、31、33）ないし8角形（32）を呈する。30は裾部の破片で、横ナデ調整する。33の杯部はヘラケズリ調整する。甕（43-28）は外反する口縁部をもち、内外面をハケメ調整する。ロクロ成形による土師器椀（43-26、27）は口径12.8～13.0cm、高さ3.5cmあり、底部は糸切り痕跡を留める。

黒色土器甕（43-34）は口径18.8cmあり、口縁部は外反し、ハケメ調整する。

須恵器には杯蓋、杯、鉢、壺がある。杯蓋（43-35～39）はいずれも口縁部の破片で、口径は15～21cmまでである。天井部を欠くため、つまみの有無は不明である。杯（43-40）は口縁部の破片で、口径12.2cmある。鉢（43-41～43）は、41、42が口縁部、43が底部の破片で、口径は41が15cm、42が20cmある。41は井戸掘形からの出土である。壺（43-44、45）は、44が口頸部、45が胴部である。両方とも瓶子と呼ばれる器形で、44の方がやや大きい。

灰釉陶器皿（43-47）は底部の破片で、下半をヘラケズリ調整した後、高台を貼付ける。底部径8.0cmある。東海地方産。

緑釉陶器皿（43-46）は外面をヘラケズリ、内面をヘラミガキで調整し、底部はケズリ出して平高台とする。口径14.8cm、器高2.5cmあり、軟質で浅黄色を呈する。山城産。

石敷G3578（図版44） 9袋出土している。土師器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、瓦がある。京都I期中に属する。

土師器は小片のみで図示し得ない。須恵器には杯と甕がある。杯（44-1）は底部に高台を貼付けた器形である。高台径10.0cmあり、底面に焼台の痕跡と高台に沿って爪痕が残る。甕（44-2）は口縁部の破片で、口径17.6cmある。外面はタタキ成形の上をカキメで調整し、内面には同心円状にタタキ当て具の痕跡が残る。

土壙G3551（図版44・166） 2袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦類、壁土がある。京都I期新～II期古に属する。

土師器には皿、椀、高杯がある。皿（44-3）は口径13.2cm、高さ1.3cmあり、外面はオサエ調整、口縁部は外反し端部はつまみ上げて収める。椀（44-4～6）は口径14.0～14.8cm、高さ2.5cm前後あり、4のみ3.1cmとやや深い。口縁部の内外面を横ナデ調整し、外面はオサエ調整のみである。外面にはヘラケズリ調整がみられず、井戸E765より後出と考えられる。高杯（44-7、8）は脚部を中心とした個体で、ヘラケズリで面取りする。7は断面7角形、8は断面8角形を呈する。

灰釉陶器椀（44-9）は口縁部の先端を欠くが、推定で口径15cm、器高5.5cmある。

第1節 土器類

白色土器碗（44-10）は底部付近の破片である。底部はケズリ出しにより低い輪高台を作る。内外面は丁寧なヘラミガキを施す。底部の断面は厚い。白色土器皿（44-11）は口径15.0cm、高さ2.5cmあり、底部はケズリ出しの平高台としている。内外面は横ナデ調整であるが、丁寧な作りは10と共通する。2点の白色土器は、今回の出土遺物では最も古い白色土器といえる。

井戸F2570（図版44） 7袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦、ミニチュア竈、土馬がある。京都Ⅱ期中に属する。

土師器には碗、皿、杯、甕がある。碗、皿、杯は区別が明確で、口縁部の外反も少ない。碗（44-12）は口径11.6cm、高さ2.2cmある。皿（44-13）は口径15.8cm、高さ1.45cmある。口縁端部は肥厚して収め、この時期としては古相を呈する。杯（44-14~16）は口径16.0~17.6cm、高さ3cm前後で、口縁部内外面は横ナデ調整する。高杯（44-17、18）は17が脚部、18が裾部で、脚部はヘラケズリで断面7角形に面取りされる。18は新相を呈する。甕（44-19、20）は口縁部の破片で、端部は外反し上方に収める。19は口径12cm、20は口径21.8cmある。

黒色土器碗（44-21）は内面のみを黒色化したA類である。口径16.8cm、高さ5.1cm、底部径6.6cmある。外面にはヘラミガキはみられないが、内面は丁寧にヘラミガキ調整する。

須恵器には杯蓋、杯、碗、鉢、壺、甕、ミニチュア双耳壺がある。杯蓋（44-22）は口縁端部の破片で口径13.6cmある。杯（44-23、24）は高台がつく杯Bに分類されるものである。23は口径14.8cmで高さ5.3cm、24はやや大型で底部径12.3cmある。碗（44-25~27）はケズリ出しによる平らな底部をもち、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで調整する。緑釉陶器碗と共通点の多い器形である。鉢（44-28）は口縁部が外反する器形で口径18.4cmある。壺（44-29）は「瓶子」の胴部である。甕（44-31）は外反する口縁部の破片で、口径22.4cmある。ミニチュア双耳壺（44-30）は胴部の破片で、耳は縦方向に2箇所あったとみられる。

緑釉陶器皿（44-32）は口径13.4cm、高さ2.0cmある。釉はオリーブ灰色を呈し、胎土は白色、焼成は軟質である。山城産。

白色土器皿（44-33）は底部の破片で、ケズリ出しによる蛇の目高台をもつ。

3 平安時代前期の中頃から中期初め

土壙G3573（図版44） 2箱出土している。土師器、須恵器、白色土器、瓦、軒丸瓦がある。京都Ⅱ期中~新に属する。

土師器には碗、皿、杯、高杯がある。土師器碗（44-34）は口径12.0cm、高さ2.6cmあり、口縁部の内外面を横ナデ調整する。内面にハケメを留める。皿（44-35）は口径16.4cm、高さ2.1cmある。杯（44-36）は口径17.0cm、高さ3.9cmあり、底部に高台を貼付ける。高杯（44-37、38）の脚部はともにヘラケズリで7角形に面取りする。

須恵器鉢（44-39）は大きく外反する体部をもつ。口縁端部は面をもって収める。底部はヘラキリのままで調整しない。この時期としては古相を呈する。

溝B1058（図版44） 5袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦がある。京都Ⅱ期中~新に属する。3点を図示する。

須恵器杯（44-40）は口径11.9cm、高さ3.2cmある。

白色土器皿（44-41）は底部の破片で、ケズリ出して輪高台を作る。高杯（44-42）は杯部と脚部の接合部を粘土で厚く巻き付ける。

溝G3415（図版45） 1箱出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、古墳時代の土師器などがある。土師器、須恵器を図示する。京都Ⅱ期中～新に属する。

土師器には皿、杯、甕がある。土師器皿（45-1）は口径14.9cm、高さ2.1cmあり、口縁部は外反し端部を上方に収める。杯（45-2）は口径22.2cm、高さ5.2cmあり、底部には退化した高台を貼付けるが不安定である。内面底にはハケメが残る。甕（45-3）は口縁部が厚手で外反する。体部外面は縦方向のハケメの上を横方向のハケメで調整する。内面下半にはタタキの当て具の痕跡があり、上半は横方向に板などの面をあてて調整する。

須恵器杯（45-4）は口径13.5cm、高さ2.5cmあり、口縁部は屈曲して立ち上がる。類例の乏しい器形である。底部は糸切りである。

土壙G3220（図版45・144、図32） 2箱出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦などがある。京都Ⅱ期新に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、甕がある。椀、皿、杯の区分はまだ明確である。

土師器皿（45-5）は口径14.0cm、高さ1.5cmあり、口縁部は外反し端部は上方に収める。椀（45-6~8）は口径14.0~14.9cm、高さ2.5~3.0cmで、口縁部をやや外反させて収める。杯（45-9、10）は口径17.2cm、高さ3.2cm前後で、底部には退化した高台を貼付ける。甕（45-11）は外反する口縁部をもつ。口径22.6cmで、体部外面はヘラで横方向にナデて、表面を平滑にしている。高杯（45-12、13）は脚部と裾部の個体で、脚部の断面は13が7角形、12は9角形を呈する。

黒色土器椀（45-14）は内面を黒色化したA類で口径17.0cm、高さ4.9cmあり、内面は丁寧なヘラミガキする。鉢（45-15）もA類に属し、内湾する体部をもつ。口径24.8cmあり、内外面はヘラミガキする。

須恵器杯（45-16）は口径13.6cm、高さ3.2cmで、底部はヘラキリのままである。須恵器皿（45-17）は緑釉陶器の形を模した器形である。体部の上半を欠く。底部はヘラキリのままで高台を貼付ける。底部に「一」のヘラ記号がある。口丹波篠産か？

灰釉陶器椀（45-18）は口径10.7cm、高さ3.45cmあり、口縁端部は外反気味に収める。底部は貼付高台で、外面中央に「一」のヘラ記号がある。尾張産。

緑釉陶器椀（45-19、20）はともに焼成が軟質である。19は口径20.1cm、20は口径13.6cm、高さ4.25cmあり、底部はケズリ出して蛇の目高台とする。底部には5本線のヘラ記号がある。19の釉はオリーブ黄色を呈する。20は釉がほとんど失われている。山城産。

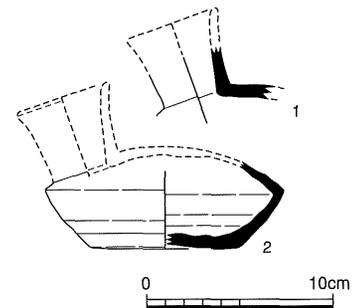


図32 土壙G3220出土土器実測図

第1節 土器類

図32に掲載したものは小型の須恵器平瓶である。2個体あり、1は口頸部、2は体部で、2の底部はヘラキリのままである。平安京からの小型平瓶の出土は比較的希である。

流路F 2550上層（G区、図版45） 23袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、土錘、古墳時代の土師器がある。土師器と須恵器を図示した。京都Ⅱ期新に属する。G区では流路G 2925とした。

土師器には皿、高杯、甕がある。皿（45-21、22）は口径17.0～17.8cm、高さ2cm前後で、外面はヘラケズリされる。京都Ⅰ期新に属する個体である。甕（45-23）は小型で、口径13.2cmある。内外面をハケメ調整する。甕（45-24）は口径24.4cmあり、体部外面はハケメ調整で上方に折れる薄い耳を貼付ける。耳を貼付けた甕の平安京での出土は希である。高杯（45-25）は水平に広がる杯部をもつ個体で、杯部内外面はヘラミガキ調整、脚部はヘラケズリされ、断面正六角形を呈する。杯部内外面と脚部外面には赤色顔料が塗られる。特別に製作された儀式用の高杯とみられる。

須恵器杯蓋（45-26）はつまみをもつもので、口径17cmある。須恵器壺（45-27、28）のうち、27は口頸部の破片で、口径8.6cmあり、28は「壺G」と呼ばれるものの体部である。胴部の広がりから新相にみえ、徳利形に復元できる。

流路F 2550上層（X区、図版45） 2箱と8袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土馬、古墳時代の土師器、須恵器がある。京都Ⅱ期新に属する。X区では流路X 79とした。

土師器には皿、甕がある。皿（45-29、30）は先の21、22と同じく外面にヘラケズリを施す。甕（45-31）は口径15.8cmあり、口縁部は立ち上がり気味に収める。

須恵器杯蓋（45-32）は口径16.8cm、高さ2.4cmあり、天井のつまみを欠く。杯（45-33）は高台がつく杯Bで、口径15.4cm、高さ4.3cmある。壺（45-34）は肩の張る胴部をもつ。鉢（45-35）は短く立ち上がる口縁部をもち、口径23.0cmある。

流路F 2550上層（図版46・47・145・146） 3箱と27袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、スラグ、壁土、古墳時代の土師器、須恵器がある。埋没時期は京都Ⅱ期新に属するが、それ以前のものも多く含む。

土師器には椀、皿、杯、高杯、甕、製塩土器、三足盤がある。椀（46-1～4）は口径11.2～15.2cm、高さ3cm前後あり、外面はヘラケズリで成形する。京都Ⅰ期新に属する。杯（46-5）は口径17.2cm、高さ4.5cm以上あり、深い器形である。京都Ⅰ期古まで遡る。杯（46-6）は口径17.0cm、高さ5.1cmあり、安定した高台が付く。京都Ⅱ期古に属する。皿（46-7）は口径12.4cm、高さ1.6cmあり、口縁部は外反気味に収める。京都Ⅱ期中に属する。杯（46-8～16）は口径13.8～16.5cm、高さ3cm前後で、口縁部は外反させ上方に収める。内面にハケメを留めるものが多い。京都Ⅱ期中に属する。杯（46-17～19）は、17、18が口径16.8～18.2cm、高さ3.5cm前後、19が口径20.7cm、高さ4.7cmあり、ともに不安定な高台が付く。京都Ⅱ期新に属する。皿（46-20～28）は口径12.6～14.9cm、高さ1.5cm前後で、口縁部は外反し端部を上方に肥

厚させて収める。23の内面底にはススが付着する。京都Ⅱ期新に属する。甕(46-29~32)では、29、30は口径15~19cmあり、口縁端部は上方が凹む。南河内産とみられる。31、32は口縁端部が上方に肥厚するもので、粗いハケメで調整される。高杯(46-33~37)は、33と34が杯部、35~37が脚部から裾部の破片である。33は口径28.6cm、34は口径30.4cmあり、33の外表面はヘラケズリで成形する。35と37はヘラケズリで面取りされ、35は断面7角形、37は断面10角形を呈する。37はヘラケズリが上方に移り、面取りも不完全となる。製塩土器(46-38~42)は、口径10cm前後の口頸部が直立する器形で、外表面はオサエ調整のみ、内表面は39で細かな布目が観察できる。他の個体も内表面は平滑に仕上げられている。43は三足盤の脚部である。焼成不良のため器壁は黒色を呈する。

黒色土器には椀、鉢、甕がある。椀(47-1、2)は内表面のみを黒色化したA類である。2は口径13.1cm、内外表面を丁寧にヘラミガキ調整し、外表面中位には緩い突帯がめぐる。2は底部の破片である。鉢(47-3)は口径14.0cmあり、内湾する体部をもつ。内外表面をヘラミガキ調整する。土壌G3220出土例(45-15)の小型化したものである。甕(47-4)は外反する口縁部をもつ。口径21.3cmあり、外表面はオサエ調整、内表面はヘラミガキで調整する。

須恵器には杯、杯蓋、椀、壺、平瓶、鉢、甕がある。杯(47-5)は口縁部の破片で、口径12.2cmある。杯(47-6、7)は底部で、6はヘラキリのまま、7はヘラケズリする。高台が付く杯(47-9、10)は、9が口径12.9cm、10が16.2cmある。杯蓋(47-8)は高台をもつ杯と組み合うもので、口径15.6cmある。椀(47-11~13)のうち、11、13は緑釉陶器椀の器形を模す。壺(47-14~22)は、14、15が口縁部、16、17が底部である。18は無頸の壺とみられる。20~22は長頸壺で、壺Gと呼ばれるものである。21は口頸部の外反が少ない。22の内表面には斜め方向のしぼり目が観察できる。20は胴部下半に文字か記号のようなものがヘラで線刻される。7字分あるが、4字でそれが崩れた可能性もある。最初の字は「国」のように読める。以下、草かんむりをもつ字、その下は「□」「□」「△」「△」、下端は「久」のような字に読める。線刻は上から下へ進行している。上の字が大きく、下ほど小さい点からも、当初は文字を刻むことを意図して始められたように思われる。静岡県伊豆長岡町花坂古窯跡の製品とみられる²⁾。19は平瓶の把手で、ヘラケズリで面取される。鉢(47-23~30)は23、24が口縁部の屈曲する器形、27、28は外上方へ延びる口縁部をもつ器形である。25の底部はヘラケズリ、26の底部は糸切りである。29、30は小型の器形で鉢に分類したが、出土例は乏しい。甕(47-31~33)は口縁部の破片で、31のみ口径25.8cmに復元できた。外表面には鉄泥が塗付され、東海地方産であろう。

灰釉陶器には皿、椀、双耳壺、甕がある。皿(47-34)は口径16.6cm、高さ2.5cmあり、外表面をヘラケズリする。椀(47-35、36)は底部の破片である。双耳壺(47-37)は肩部に耳を2個貼付ける。耳はヘラケズリで面取り成形する。甕(47-38、39)のうち、39は口縁端部を肥厚させ、頸部外表面には凹線を4本以上施す。すべて東海地方産。

緑釉陶器には皿、椀、把手付瓶がある。すべて焼成は軟質である。皿(47-40)は口径13.5cm、高さ2.3cmあり、底部をケズリ出しで平高台とする。椀(47-41~43)では、41は深

第1節 土器類

い器形の椀、42、43は底部である。すべて山城産である。把手付瓶（47-44）は高さ23cm、胴部は下ふくれで最大径18.5cm、底部径13.8cmある。外面はヘラケズリで成形した後ヘラミガキ調整し、内面は横ナデ調整のみである。釉薬が部分的に内面壁に垂れている。肩部に粘土紐を湾曲させたものを貼付け、把手とする。尾張産であろう。把手付瓶は『平安京跡発掘資料選(二)』に掲載された平安京左京七条二坊出土例³⁾に類似する。

白色土器には皿、蓋、三足盤がある。皿（47-45）は平高台をもつ浅い器形で、口径14.3cmある。内面はヘラミガキするが外面は横ナデ調整のみである。蓋（47-46）は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。天井につまみが付されたかは不明である。三足盤（47-47）は足の小片である。

輸入陶磁器には白磁と青磁がある。白磁椀（47-48）は口縁端部の破片で外方へ肥厚する。華南産である。越州窯青磁椀（47-49）は外上方へ延びる口縁部の破片で、口径14.5cmある。

溝E 845（図版48・49・146） 3箱と3袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、吹子羽口がある。京都Ⅱ期新～Ⅲ期古に属する。

土師器には皿、椀、杯、高杯、甕、盤がある。皿（48-1～4）は口径12.3～14.7cm、高さ1.8cm前後で、口縁部は外反して端部は上方に収める。椀（48-5～9）は口径12.2～13.4cm、高さ2.5cm前後で、口縁部は外反させて収める。杯（48-10～14）のうち、10、11は中型で口径14.6～15.2cm、高さ2.5cm前後あり、12～14は大型で口径18.4～21.0cm、高さ3.5cm前後ある。高台が付く杯（48-15～17）は口径16.2～19.7cm、高さ3.5cm前後で、先述した流路F 2550出土例に比べると高台の退化が著しい。甕（48-18、19）は口径25.5cm前後あり、体部外面はタタキで平坦に成形する。内面も当て具により平坦となる。高杯（48-20、21）は口径25～26cm、器高21cm前後あり、ほぼ全形が復元できる。20の脚部は断面八角形であるが、21は面取りが浅く断面円形に近い。盤（48-22）は球形の体部をもつ。体部外面はオサエ調整であるが、粘土紐の痕跡が目立つ。底部径12.2cmで、貼付高台をもつ。

黒色土器は椀、甕、鉢、風字硯がある。風字硯のみ内外面を黒色化したB類、他はA類である。椀（48-23、24）は口径14cm前後、外面はナデ調整、内面は横にヘラミガキする。23の内面には簡略化された暗文がみられる。甕（48-26～28）は外上方に延びる口縁部をもつ。26は口径14.3cm、27、28は口径16.5cm前後ある。27、28は部分的にヘラミガキを施す。鉢（48-29）は口径22.4cmあり、口頸部は直立し端部はやや外反する。風字硯（48-25）はミニチュア製品で、裏面に足を貼付ける。

須恵器には杯蓋、鉢、円面硯、壺がある。杯蓋（48-30）は口径13.5cmで、京都Ⅰ期新以前の遺物と考える。鉢（48-31）は口径23.0cmあり、口縁部が内湾する点に特色がある。端部は肥厚しており、口丹波篠産とみられる。円面硯（48-32）は脚部の破片で、3角形の透かし孔が穿たれる。壺（48-33、34）では34が底部径12.2cmあり、切り離しは糸切りである。33は肩部に2条の突帯を貼付けた長胴の壺である。内外面とも横ナデ調整する。播磨産とみられる。

灰釉陶器椀（49-1、2）は底部の破片で、底部径8cm前後ある。1の底部外面には墨書がある。2の底部外面には墨痕がある。転用硯であろう。ともに東海産。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀（49-3~6）のうち、3の体部は内湾気味、4、5は外上方に延び、6は中位に緩やかな段をもつ。6は口縁部をつまんで輪花とする。それぞれ内外面はヘラミガキ調整し、底部は4、6がケズリ出し高台、3、5が貼付高台である。皿（49-7、8）のうち、8は口径14.6cmあり、口縁部には稜をもつ。3と8の内面には陰刻花文が施される。3、8は尾張産、4、6、7は山城産、5は東海産とみられる。

白色土器には椀、皿、三足盤がある。椀（49-9~13）のうち、9、10は中型で口径13.5cm前後、高さ4.1cm前後あり、11は大型で口径20.1cm、高さ6.45cmある。底部はすべてケズリ出して成形し、9、11、12は輪高台となる。10、13は平高台で、底は糸切りである。9の底部内面には爪先の痕跡が一周する。皿（49-14）は口径15.8cm、高さ3.0cmある。三足盤（49-15）は口径16.8cmあるが、足を欠く。口縁部は先端が外反する。

溝E827（図版49） 2箱と1袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅱ期新~Ⅲ期古に属する。

土師器には皿、椀、杯、高杯、甕がある。皿（49-16~21）は口径12.8~15.2cm、高さ1.5cm前後で、口縁部は外反して端部は上方に収める。椀（49-22~24）は口径13.0~13.9cm、高さ2.5cm前後で、口縁部の処理は皿と同じように外反させて上方で収める。杯（49-25~28）のうち、25~27は中型で口径15.3~16.6cm、高さ2.5cm前後あり、27のみ退化した高台を貼付ける。28は大型で口径19.6cm、高さ3.5cmあり、内面にハケメを留める。高杯（49-30、31）は脚部の破片で、31は断面8角形、30は断面10角形以上で、円形化しつつある。甕（49-29）は口径11.1cmあり、短く外反する口縁部をもつ。内面はヘラで横にナデる。

黒色土器椀（49-32）は口径13.8cm、高さ4.1cmあり、内面のみを黒色化したA類に属する。

須恵器鉢（49-33）は口径22.6cmあり、端部は外方に肥厚して収める。

灰釉陶器椀（49-34）は口径16.2cm、高さ5cmあるが、高台を欠く。ハケ塗りである。東海産。

緑釉陶器椀（49-35~37）は、35が口径17.7cmあり、口縁部を輪花とする。内面にはヘラミガキが施され、古い特徴をもつ椀である。36、37は底部の破片で、径10cm前後、底部はヘラケズリした上に輪高台を貼付ける。美濃の製品であろう。

白色土器には椀、盤がある。椀（49-38~41）は口径10.5~12cm、高さ3.3~4.1cmあり、口縁部は直線的に外上方に延びる。40は底部の破片であるが、外面に墨書がある。墨書は向かって右から左に横方向に記す。2文字以上あるが判読できない。41は口径16.0cmある。この41と40は内外面をヘラミガキ調整する。盤（49-42）は底部径13.7cmあり、底部はヘラケズリで成形し、高台を貼付ける。白色土器に分類されるが、器壁は黒色を呈する。

溝A419（図版49） 1箱出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、白色土器がある。京都Ⅲ期に属する。

第1節 土器類

土師器甕（49-43）は口径28.0cmあり、口縁部は外反し、端部を上方に収める。口縁部内面、体部外面は粗いハケメで調整する。

黒色土器火舎（49-44）は鉢形の体部に脚が付く器形で、火鉢などの用途が考えられる。口径30.4cm、高さ13.1cm。脚は太く安定感があり、面取りしている。三脚として図示した。

土壙 F 2631（図版50・147） 2箱と3袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅱ期新に属する。

土師器には皿、椀、杯、高杯、甕がある。皿（50-1~9）は口径12.6~14.4cm、高さ2cm前後で、口縁部は強く外反して端部は上方に収める。内面にハケメを留める個体が多い。椀（50-10~20）は口径12.4~14.2cm、高さ2.5cm前後で、口縁部の処理は皿と同じであるが、外反はやや緩い。1、2、4、8、10は内面にハケメを留める。杯（50-21~32）では、21~29が中型で口径14.4~17cm、高さ2.5cm前後、31、32が大型で口径21~22cm、高さ4.8cm前後ある。椀との区別がつきにくく、口径14cm以上のものを杯とした。30は高台が確認できた唯一の例である。高杯（50-33~36）のうち、33は杯部で口径28.0cmあり、内外面を横ナデ調整する。先述してきた高杯に比べ器壁は薄い。34、35の脚部はヘラで面取りするが、断面は円形化しつつある。36の裾部は径15.8cmあり、端部は下方に丸く収める。破片内にはヘラケズりはみられない。甕（50-37、38）はともに口径15cm前後であるが、体部は38の方が大きい。ともに外面にススが付着する。

黒色土器椀（50-39）はA類で、口径17.4cm、高さ5.5cmある。内面はヘラミガキで調整し、その上に暗文を施す。

須恵器には鉢、甕がある。鉢（50-40、41）は口径18~20cmあり、ともに口縁部が玉縁状を呈する。口丹波篠産であろう。甕（50-42）は口径21cmあり、体部外面には平行のタタキメ、内面には同心円の当て具の痕跡が残る。タタキは時計回りに施したようにみえる。

灰釉陶器には皿、椀がある。皿（50-43）は口径14.2cm、高さ3.2cmある。椀（50-44）は底部径8.8cmある。ともに貼付高台をもつ。東海地方産。

緑釉陶器椀（50-45~48）は、45、46が口縁部で、45は口径12.2cm、46は口径16.6cmある。46は口縁部に輪花をもち、体部は内側に折れる。47、48は底部で、径6.7cm前後あり、ともにヘラケズりで成形する。47はケズり出し高台、48は貼付高台である。すべて東海地方産であろう。

白色土器には皿、椀がある。皿（50-49~51、53、55）では、49のみ全形がわかり、口径16.4cm、高さ3.4cmある。椀（50-52、54）では、54が口径15.2cm、高さ4.5cmあり、内外面を丁寧なヘラミガキ調整する。52の底部は糸切りで、体部も横ナデ調整のみである。

輸入陶磁器には青磁壺、青磁蓋がある。青磁壺（50-56）は底部径8.4cmあり、底部の内外面には焼成時についた貝殻粉などの目跡が残る。青磁蓋（50-57）は口径5.8cm、高さ2.9cmある。天井の形状は不明であるが、透かしはなく、壺あるいは香合の蓋であろう。両者とも越州窯系の製品である。

井戸B1060（図版51） 1箱と11袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅱ期新～Ⅲ期古に属する。

土師器には皿、椀、杯、羽釜がある。皿（51-1～3）は口径14.9～16.3cm、高さ2cm前後あり、口縁部は外反して端部は上方に収める。椀（51-4）は口径13.7cm、高さ2.5cmあり、口径が他より小さいため椀とした。杯（51-5～10）のうち、5～9は中型で、口径14.8～16.2cm、高さ2.5cm前後ある。9は内面にハケメを留める。10は大型で口径21.1cm、高さ3.4cmある。羽釜（51-11、12）は2点あり、ともに口径21.3cm前後で、形態や作りは共通する。外面は粗いたテハケ、内面にはタタキ当て具痕跡が残る。ともに外面にはススが付着する。鏝を貼付けた後、口縁部を横ナデ調整する。これら羽釜は摂津地方の製品とみられる。

須恵器には杯蓋、杯、鉢、壺、甕がある。杯蓋（51-13）は口径21.4cmの大型の製品である。杯（51-15、16）では、15が口径9.1cm、16は底部径7.2cmと、ともに小型品である。鉢（51-17、18）は、17が口縁部で口径25.2cmある。18は底部径9.3cmあり、底部はヘラキリのままである。玉縁状の口縁部をもつ鉢とみられる。壺（51-14）は瓶子と呼ばれる小型壺の口縁部である。甕（51-19）は口縁端部の上方が窪む。口径19cmある。

灰釉陶器には皿、椀がある。皿（51-20）は口径15.6cmあり、端部は外反し下方に折れる。21、22は底部で、椀とみられる。底部径7cm前後である。東海地方産。

緑釉陶器には皿、椀がある。椀（51-23～28）では25のみ全形がわかり、口径17.2cm、高さ5.5cmある。27は口径20.5cmあり、最大である。底部はいずれもヘラケズリで成形し、25、28は蛇の目高台、23は平高台、24は内側に段がつく輪高台である。皿（51-29～31）では、29、30が口縁部の破片で口径14cm前後あり、端部内面に段がつく。31は底部で、椀と同じくヘラケズリで成形する。緑釉陶器では硬質、軟質、その中間的なものがあるが、軟質は1点（51-25）のみである。すべて山城産であろう。

白色土器皿（51-32）は底部径7.1cmあり、底部はヘラケズリで成形し、内面はヘラミガキで調整している。

土壌G2657（図版51） 4袋出土している。土師器、緑釉陶器がある。京都Ⅲ期古に属する。

土師器には皿、杯がある。皿（51-33）は口径13.0cm、高さ1.9cm、杯（51-34）は口径15.8cm、高さ2.7cmあり、ともに内面にハケメを留める。

緑釉陶器椀（51-35）はケズリ出しによる蛇の目高台をもち、内面はヘラミガキ調整している。山城産である。

4 平安時代中期の中頃から後半代

土壌A416（図版51） 1箱と3袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅲ期新に属する。

土師器には皿、椀がある。皿についてはこの段階以後、皿A、皿Nの名称で記述する。皿Aは口縁部が外反し端部を丸く上方に収めるもので、京都Ⅱ期以後の土師器皿が小型化したものである。皿Nは京都Ⅲ期新以後に出現するもので、以後の土師器皿では主流となる器形である。

第1節 土器類

皿A (51-36、37) は口径10.2~10.7cm、高さ1.3cm前後ある。皿N (51-39) は口径16.4cm、高さ2.7cmあり、口縁部は緩く外反し、端部は尖り気味に収める。38として図示したものは、京都Ⅱ期中の椀が混入したものである。

黒色土器椀 (51-40~43) は、40~42が内外面を黒色化したB類である。口径15cm前後あり、内外面は丁寧にヘラミガキされる。口縁端部は内側に段がつく。43はA類の底部で、径7.6cmある。

須恵器には椀、壺がある。椀 (51-44) は底部径7.4cmあり、貼付高台をもつ。壺 (51-45) は底部径14.0cmあり、ケズリ出しで高台を成形する。

灰釉陶器椀 (51-46、47) は、46が口径14.6cm、高さ6.1cmあり、内湾する体部に大きく外に張り出す貼付高台をもつ。47は底部径10.8cmあり、椀としては大型である。

白色土器椀 (51-48、49) では、48は口径14.0cm、高さ4.8cm、49は底部径7.6cmあり、底部はヘラケズリで成形する。

土壙B 1013 (図版52~54・148~150) 22箱出土している。出土量の多さ、並びに器種・器形の豊富さは特記すべき良好な遺物群である。図版3枚に構成を示したが、掲載できなかった個体も多い。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、石錘、銭貨がある。京都Ⅲ期新~Ⅳ期古に属する。

土師器には皿、盤、高杯、甕、羽釜がある。皿A (52-1~38) では小型皿、中型皿、大型皿の3種がみられる。1~13までは小型皿で、口径10.3~11.0cm、高さ1.5cm前後ある。器壁は1、2がやや厚いが、それ以外は薄手で、仕上げは丁寧である。14~20は中型皿で、口径12.7~14.6cm、高さ2cm前後ある。16以外は薄手であり、16のように内面にハケメを留める個体もある。21~38は大型皿で、口径16~20cmまである。高さ2.5cm前後のものが多い。内面にハケメを留める個体が目立つ。皿N (52-39~60) はこの段階から出現する器形であるが、本遺構では圧倒的に少なく、皿の総破片数の4.8%である。中型皿と大形皿に区別したが、明確な境界はない。39~46は中型皿で、口径14.4~15.8cm、高さ3cm前後ある。口縁部は外上方に延び、端部はやや反り気味に収める。後に盛行する、いわゆる「二段ナデ」はまだ顕著ではない。47~60までを大型皿とした。口径16.2~20.4cm、高さ3.5cm前後のものが多い。個々で個体差が大きく、口縁部が外反せずそのまま収めるもの (52-48、60)、先端が外反するだけのもの (52-52、57)、椀のような深い形態をもつもの (52-48、50、52) などがある。内面にハケメを留めるものがあるが、少数である。盤 (53-3) は底部径14.2cmある大型の製品で、底部はオサエ調整のみで、貼付高台をもつ。内面はユビナデである。甕 (53-4~10) は形態差が大きい。4、5は小型の甕で、横ナデだけの粗雑な作りである。7、8は外面を平坦なタタキ風の工具で調整し、口縁端部を上方に収めるという、従来の系譜上にある甕である。10はそれらと共通する大型品で、井戸F 2510枠内出土品 (57-23) に類例がある。6、9は陶器的な成形に特色がある。6は白色土器に類似する胎土と焼成をもち、薄手で硬い焼き上がりをもつ。外面は縦方向に粗いハケメを施し、内面も板状の工具で反時計回りに旋回させて器壁を調整する。9は外面

を平行タタキで成形し、内面にはこれに対応した同心円の当て具痕跡がある。口縁部は横ナデ調整し、端部の作りなども須恵器の成形に共通する。焼成が瓦質に近いため、土師器に分類しておく。高杯（53-11~13）では、11は杯部で口径23.4cmあり、丸みのある体部をもち、口縁端部も上方に丸く収める。脚部はヘラケズリで面取りし、断面11角形を呈する。羽釜（53-14）は口径24cmあり、外面にススが付着する。罈は貼付けた後、横ナデ調整する。

ロクロ成形による土師器皿（53-1、2）では、1は小型皿で口径7.6cm、高さ1.3cm、2は大型皿で口径16.2cm、高さ3.5cmあり、ともに底部はヘラキリのまま、内外面は横ナデ調整である。

黒色土器には椀、三足盤、蓋、鉢、甕がある。椀（53-15~20）はほとんどが内外面を黒色化させたB類で、A類は少数である。15、16はA類椀で、口径14cm前後、高さは16が5.3cmある。外面はオサエ調整のみ、内面のヘラミガキも雑である。17~20はB類椀で、口径15~16cm、高さ5cm前後ある。外面は手持ちのヘラミガキ、内面は壁面に沿って工具を回転させたヘラミガキを施す。ヘラミガキは両面とも丁寧である。三足盤（53-21）はA類で、底部に外方に張り出す足をもつ。足は三足として復元した。外面はオサエ調整のみ、内面はハケメの上を横ナデ調整する。体部は鉢に近い。蓋（53-22）はA類で、口径9.4cm、つまみまでの高さ2.8cmある。内外面は横ナデ調整で、天井部のみ一方向にヘラケズリする。鉢（53-23）はB類で、口径14.0cmある椀状の器形である。内外面は丁寧にヘラミガキする。甕（53-24、25）はすべてA類で、25は口径23.3cmある。外面下半はヘラミガキ、上半はユビナデする。内面はナデかハケで平滑にしている。

須恵器には杯、鉢がある。杯（53-26、27）では26が口径11.2cm、深さ2.5cmあり、口縁部は屈曲して立ち上がる。形態は溝G3415出土例（45-4）に類似し、東海地方産とみられる。27は口径13cm、高さ3.7cmある。ともに9世紀代に属するとみられる。鉢（53-28、29）は外上方に延びる体部をもつ。28は口径23.0cm、高さ9.1cm、29は口径19.4cm、高さ6.5cmあり、ともに端部は肥厚して収める。底部は糸切りのままである。口丹波篠産であろう。

灰釉陶器には皿、椀、耳皿、鉢、香炉、壺がある。皿（54-1、2）では、1は口径8.6cm、高さ1.9cmある。2は口径10.3cmあり、体部は内湾し内側に段がつく。椀（54-3~5）では、3は口径13.4cm、高さ4.0cmあり、緩やかに外反する体部をもつ。耳皿（54-6）は長側面の破片で、端部は指ではさんで波状に作る。鉢（54-7、8）は大型の製品で同一個体の可能性がある。7は口径31.5cm、8は底部径17.4cmあり、体部下半に灰釉がかかる。香炉（54-9）は口縁部の破片で、口径8.2cmある。壺（54-10）は口径12.0cmあり、内湾する体部の上に肥厚させた口縁部がつく。肩部には灰釉がかかる。すべて東海地方産である。

緑釉陶器には皿、耳皿、椀、香炉がある。皿（54-11）は口径11.6cm、高さ2.9cmある。耳皿（54-12）は全体の4分の1が残存する。口縁部を指で波状に変形させる。高さ3.0cmあり、底部は糸切りのままの平底で、径3.0cmある。椀（54-13~18）は、13が口径10.7cm、高さ4.0cm、16が口径13cm、高さ5.2cm、14、15、17、18が口径15~16.4cm、高さ6cm前後である。

第1節 土器類

体部の形状は類似する。底部は糸切りで高台を貼付けるが、高台の形状は個体ごとに異なる。香炉（54-19）は口径14.4cmあり、体部と脚部が残存する。緑釉陶器の焼成は、11～13、18、19が硬質、14～17が軟質である。11、12、19は美濃産、13は近江産とみられるが、三河産の可能性もある。14～17は近江産、18は防長産とみられる。出土した中では近江産が主体をなす。

白色土器には皿、三足盤、椀、高杯、蓋がある。皿（54-20～25）は扁平な体部にケズリ出しによる輪高台がつく。口径13cm前後、高さ2.2cm前後、底部径6cm前後で、体部下半をヘラケズリし、口縁部と内面は横ナデ調整する。三足盤（54-26～29）は先述の皿の体部に短い三足を貼付けた器形で、白色土器特有の器形である。口径13.5cm前後で、足を含めた高さ3cm前後ある。底部はヘラケズリで成形する。椀（54-30～35）のうち、32～35は外上方に延びる体部をもち、灰釉陶器椀や緑釉陶器椀と同じ形態を有する。口径15cm前後、高さ5cm前後あり、皿と同じく体部下半と底部をヘラケズリし、高台をケズリ出す。30、31はこれらより小型の椀で、底部は糸切りによる平底である。高杯（54-36～38）は全形が復元できず、36の杯部、37、38の脚部を図示する。脚部の破片は8本分ある。36の杯部は口径19.6cmあり、器壁が厚い。端部の形状は外方に延びただけで収める。脚部は丁寧に面取りする。土師器高杯と異なる点は、脚部と杯部の境を粘土で瘤状に膨らませて接合することである。37はその部分が残存する。蓋（54-39）は天井部の破片で、天井部をヘラケズリで成形し、中心に小さなつまみを貼付ける。内面は横ナデ調整であり、三足盤を逆さにして中央につまみを貼付けた器形でもある。なお、白色土器にはヘラケズリ成形が多用されており、ケズリ痕跡からロクロの回転方向が推定できる。それによると、土器を正立させた状態でいうなら、回転方向は反時計回りである。

輸入陶磁器（54-40、41）には白磁椀がある。40は口縁部が玉縁状を呈する白磁椀で、口径11.8cm、高さ4.4cmある。この器形としては小型に属する。41は口径17.4cmあり、口縁を輪花とする。輪花は9葉に復元できる。両者とも華南産であるが、41は青白磁とも称せられるもので、景德鎮窯産の可能性もある。

土壙S71（図版55） 1箱と6袋出土している。土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦がある。京都IV期古に属する。

土師器には皿、高杯がある。皿が圧倒的に多い。皿には新たに皿Ac（55-40）が出現する。40は口径10.9cm、高さ0.8cmあり、皿Aに比べ扁平な体部で、口縁端部は上につまみ上げるが、ほとんどつぶれた状態となる。成形や調整は皿Aと同じである。皿A（55-1～39）は、1～37までが口径8.3～11.5cm、高さ1.5cm前後である。38は口径12.4cmでやや大きく、39は口径15.4cmでかつての中型皿の大きさをもつ。器壁は薄い。皿N（55-41～60）は小型皿、中型皿、大型皿に区別したが、中型と大型の境界は明確でない。41、42は小型皿で、口径10.0～10.4cm、高さ1.6cm前後ある。43～59までは中型皿で、口径12.0～15.3cmまで、高さ2.5cm前後ある。60は大型皿で口径18.0cm、高さ2.6cmある。先述の土壙B1013出土の皿Nに比べると、口縁部の外反が進行し、横ナデの二段化も完成されつつある。高杯（55-61）は口縁部の破片で、内外面はオサエ調整、口縁部のみ横ナデ調整する。9世紀代の遺物の混入であろう。

緑釉陶器（55-62）は、椀あるいは皿の底部で、径6.5cmある。硬質を呈する。9世紀末～10世紀前葉頃の遺物の混入とみる。

土壌G3392（図版55） 7袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒平瓦がある。京都IV期古に属する。

土師器には皿がある。皿A（55-63）は口径11.4cm、高さ1.9cmあり、体部は丸みをもつ。皿Ac（55-64）は口径13.2cm、高さ1.1cmあり、皿Acとしては大きい方に属する。皿N（55-65）は口径16.0cm、高さ2.5cmある。

灰釉陶器椀（55-66～68）では、66は口径16cm、高さ5.2cmあり、外上方へ延びる体部をもつ。68は66に類似する椀の底部で、底部径8.0cmある。内面底部は平滑化され、赤色顔料が付着するため、硯として利用されている。

輸入陶磁器には白磁椀（55-69）がある。口径16.8cmあり口縁部を玉縁状に収める。華南産。

溝E881（図版55） 2袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、瓦がある。京都IV期中に属する。

土師器には皿がある。皿（55-70～72）は3点あり、いずれも皿Nである。70、71は口径16cm前後、高さ2.8cmで、口縁部はやや外反気味に収める。72は口径17.1cm、高さ5.1cmある深い器形で、口縁端部もそのまま収める。

須恵器椀（55-73）は先述した土壌G3392出土の灰釉陶器椀に形態が類似する。口径15.2cm、高さ5.7cmある。

井戸F2510掘形（図版56・151） 井戸F2510では枠内、並びに掘形の両方から良好な土器群が出土している。ここでは両者を分けて報告する。

掘形からは2箱と4袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、緑釉瓦、硯（陶製）がある。京都IV期中に属する。

土師器には皿、ミニチュア甕、盤、甕、羽釜がある。皿には皿A、皿Nがある。皿A（56-1～5）は口径11.0～12.0cm、高さ1.5cm前後あり、器壁はやや厚い。5は口縁部が倒れ、浅い皿状を呈する。製作技術の稚拙さの現われとみる。皿N（56-6～18）は、小型皿、中型皿、大型皿に区分したが、中型皿と大型皿の境界は明確でない。6～8は小型皿で、口径9.6～11.0cm、高さ1.5cm前後ある。9～11は中型皿で、口径13.0～14.4cm、高さ2.5cm前後ある。12～18は大型皿で、口径15.6～19.6cm、高さ3cm前後のものが多い。口縁部の二段ナデは完成されつつあるが、17のような深い器形も残存する。ミニチュア甕（56-19）は口径6.4cmある。盤（56-20）は底部径7.6cmあり、貼付高台をもつ。甕（56-21、22）では、21は直立する体部をもち、甕としては特異な器形である。外面のススもなく、鉢として使用された可能性もある。22は口径15.6cmあり、熱により赤色化している。羽釜（56-23）は口径23.6cmあり、先端に鏝を貼付ける。外面にススが付着する。

黒色土器椀（56-24～29）はすべてB類で、口径15～16cm、高さ5cm前後のものが多い。内外面は丁寧にヘラミガキ調整する。

第1節 土器類

須恵器には椀、鉢、甕がある。椀（56-30）は口径16.2cm、高さ5.0cmあり、底部は糸切りのままである。鉢（56-31、32）は、ともに口縁端部が肥厚するもので、31は口径20.2cmある。甕（56-33）は外反する口縁部の破片である。

灰釉陶器には皿、椀、鉢、甕がある。皿（56-34）は口径19.0cmあり、口縁部は二段に折れる。椀（56-35~38）は口径14.0~15.2cm、高さ5~6cmある。体部下半はヘラケズリし、高めの高台を貼付ける。鉢（56-39）は内湾気味の体部をもつ。底部の形状は不明である。壺（56-40）は長く延びた口頸部をもつ。口径23cmあり、端部は外側に平坦面をもつ。

緑釉陶器には皿、椀がある。皿（56-41、42）は底部径7cm前後で、貼付高台をもつ。椀（56-43）は口縁部の破片である。これら緑釉陶器は時期の古いものの混入品である。

白色土器には椀、高杯がある。椀（56-44）は底部の破片で、径4.6cmある。高杯（56-45、46）では、45は脚部で、杯部との接合箇所は瘤状のふくらみをもつ。46は底部で、径15.6cmある。

輸入陶磁器には青磁椀（56-47）がある。47は口径12.2cm、高さ3.8cmあり、外面に輪花をつける。輪花は7箇所に戻元できる。底部内面には草花文を細いヘラで彫り込む。越州窯産である。

井戸F2510枠内（図版57・151・166） 3箱と1袋出土している。土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器がある。京都IV期中~新に属する。

土師器には皿、甕がある。皿には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（57-1~12）は口径9.2~11.8cm、高さ1.5cm前後のものが多い。器壁は厚くなり、口縁部の屈曲も緩くなる。皿Ac（57-11、12）は口径11.5cm、高さ1cm前後である。皿N（57-13~22）は、小型皿、中型皿、大型皿に区分したが、境界は明確でない。13は小型皿で、口径11.2cm、高さ2cmある。14~17は中型皿で、口径12.6~14.2cm、高さ2.5cm前後ある。18~22は大型皿で、口径15.2~17.8cm、高さ3cm前後のものが多い。口縁端部は外反し、横ナデも二段ナデとなる。甕（57-23、24）は口縁部が外反し端部を上方に収めるもので、従来の系譜をもつ甕である。23は口径27cmあり、外面を平坦な板でタタキ成形する。内面には当て具の痕跡がつく。24は口径13.4cmで、同じく外面をタタキ成形する。

黒色土器椀（57-25）はB類で口径16.4cmある。内外面をヘラミガキ調整する。

瓦器椀（57-26）は新たに出現する器種で、口径16.2cmある。底部を欠く。黒色土器椀（25）と同じ大きさ、手法によるが、焼成良好で灰色を呈する。

須恵器には椀、鉢、甕、壺がある。椀（57-27~29）は外上方に延びる体部をもつ。29は糸切りで成形された底部で、内面に墨痕が付着し、硯として使用されたことがわかる。外面にはりんごのような絵画あるいは記号が墨書される。落書の一種とみられる。鉢（57-30、31）では、30は口径18.8cmあり、端部は内側に折れる。31は口縁端部が玉縁状を呈する破片で、前時期の混入品である。甕（57-32）は口径21.8cmほどあり、端部は上方に収める。先述した灰釉陶器壺（56-40）に類似する。壺（57-33）は糸切りで成形された底部で、径9.0cmある。

灰釉陶器碗（57-34~36）は、34が口縁部で口径13.6cm、35、36は底部で、径8cm前後ある。36は前時期の混入品とみられる。

白色土器には皿、碗、高杯がある。皿（57-37~40）は底部の破片で、37が糸切りによる平高台、38~40は貼付高台をもつ。39、40は高台が高い。碗（57-41）は底部の破片で、径10.0cmある。高杯（57-42）は脚部から裾部に至る破片で、脚部はヘラケズリで面取りする。断面13角形を呈する。高杯は脚部の破片が他に5片ある。

輸入陶磁器では白磁碗（57-43、44）がある。43は口径13.8cm、高さ3.4cmあり、体部は折れて段がつく。44は口径16.2cmあり、体部にはタテに筋を入れて輪花とする。ともに華南産である。

井戸F 2505（図版57） 4袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。京都IV期中に属する。

土師器皿には皿A、皿Nがある。皿A（57-45~47）は口径8.2~8.8cm、高さ1.5cm前後あり、口縁部の巻き込みが緩くなる。皿N（57-48）は中型皿に該当し、口径14.6cm、高さ2.5cmある。口縁部は二段ナデで処理する。

瓦器碗（57-49）は口径17.6cmある。ヘラミガキは、外面は粗く内面は丁寧である。口縁部下に沈線をめぐらせる。

輸入陶磁器では華南産白磁碗（57-50）がある。口径14.5cmで、口縁端部は外側に肥厚する。

5 平安時代後期

土壙G 2990（図版57） 1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都IV期新に属する。

土師器皿には皿A、皿Nがある。皿A（57-51）は口径9.6cm、高さ0.9cmあり、浅い器形である。皿N（57-52~56）は、小型皿、中型皿、大型皿がある。52は小型皿で、口径10.8cm、高さ1.4cmある。53、54は中型皿で、口径12.2~13cm、高さ2.1cmある。55、56は大型皿で、口径15.6cm、高さ2cm前後ある。いずれも口縁端部が外方に延びて収める。

瓦器碗（57-57）は口径17.8cmある。ヘラミガキは内外面ともにやや雑となる。

溝B 1054（図33） 6袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都IV期新に属するが、小片のため図示できない。図33に

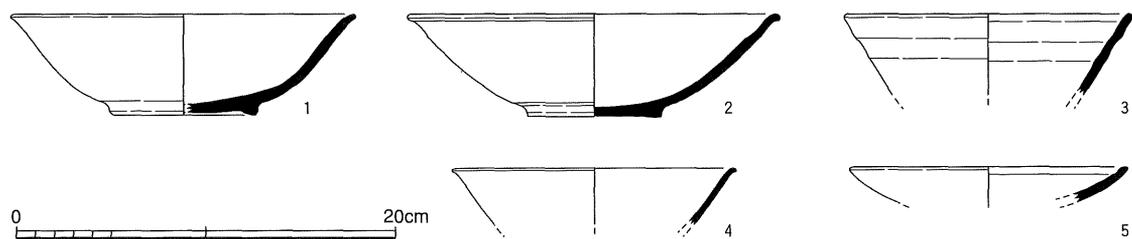


図33 溝B 1054出土土器実測図

第1節 土器類

京都Ⅱ期に属する個体を示す。

須恵器椀（1～3）のうち、1、2は大きく開く体部をもち、内外面をヘラミガキ調整するなど、緑釉陶器の特徴をもつが、無釉であることから須恵器としておく。口径19cm前後、高さ5cm前後で、1の底部はケズリ出しの輪高台、2は平高台である。3は口径15.2cmあり、外上方に延びる体部をもつ。

灰釉陶器椀（4）は口縁部の破片で、口径15.0cmある。

緑釉陶器皿（5）は口縁部の破片で、口径14.6cmある。内側に段をもつ。

井戸G3068（図版58） 2箱と6袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都Ⅳ期新に属する。

土師器皿には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（58-1～3）は口径10.0～10.8cm、高さ1.5cm前後ある。皿Ac（58-4）は口径10.8cm、高さ1.4cmある。口縁端部の巻き込みは緩い。皿N（58-5～12）は小型皿と大型皿の区分はできるが、中型皿は抽出できない。5、6は小型皿で、口径10.2cm、高さ1.7cm前後ある。7～12は大型皿で、口径は13.8cmから16.6cmまである。高さは3cm前後である。口縁端部は外方に延びるものが多いが、7、8のように直線的に延びるものもある。

輸入陶磁器には白磁椀（58-13）がある。口径10.0cm、高さ3.3cmあり、外上方に直線的に延びる体部をもつ。体部下半はヘラケズリ成形で、釉はかからない。華南産である。

土壇H842（図版58） 2箱出土している。土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅳ期新～Ⅴ期古に属する。

土師器には皿、甕がある。皿には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（58-14～20）は口径9.8～10.7cm、高さ1.5cm前後あり、器壁は厚くなり、口縁端部の巻き込みも緩くなる。皿Ac（58-21～23）は口径11.0～13.2cm、高さ1.3cm前後あり、口縁端部は21、22は緩く巻き込む。23は端部を薄く収める。皿N（58-24～44）は、小型皿と大型皿に区分できるが、中型皿は抽出できない。24～32は小型皿で、口径10.1～12.5cm、高さ2cm前後ある。33～44は大型皿で、口径14.6～16cm、高さ3cm前後ある。口縁部の二段ナデは完成段階にいたる。甕（58-45）は口径20.7cmあり、短い口頸部が付く。口縁部は横ナデ調整し、体部はオサエ調整のようにみられる。細部に特色のない甕である。

須恵器壺（58-46、47）のうち、46は内湾する体部に短い口縁部を付ける。肩部には把手の剥離痕跡が付く。把手は横方向に付く。47は壺の体部上半とみられ、一条の突帯をもつ。

白色土器椀（58-48）は底部の破片で、径5.3cmある。糸切り成形による平高台をもつ。

輸入陶磁器には華南産の白磁皿、白磁椀がある。白磁皿（58-49、50）は口径14～15cmあり、口縁端部は強く外反する。白磁椀（58-51）は口径15.9cmあり、体部は内湾し口縁端部は小さく肥厚する。

土壇G3660（図版58） 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器、

瓦がある。京都V期古に属する。

土師器には皿A、皿Nがある。皿A（58-52~54）は口径9.5~10.0cm、高さ1.8cm前後あり、口縁端部の巻き込みは緩い。皿N（58-55）は小型皿で、口径10.3cm、高さ2.0cmある。

土壙P247（図版58） 1箱出土している。土師器、瓦、滑石、壁土がある。京都IV期新~V期古に属する。

土師器には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（58-56）は口径10.0cm、高さ1.45cmある。皿Ac（58-57~59）は口径8.8~10.6cm、高さ1cm前後ある。口径の大きい59は口縁端部の巻き込みが強い。底に墨書がある。墨痕は鮮やかであるが、判読できない。皿N（58-60~63）には小型皿と大型皿がある。60、61は小型皿で、口径9.6~11.2cm、高さ2cmある。61は口縁端部が外上方に延びる。62、63は大型皿で、口径15.6~16.8cmある。63は高さ3.9cmある深い器形である。

土壙G3290（図版59） 6箱と2袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、炭、壁土、焼締陶器がある。京都IV期新~V期中に属する。

土師器には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（59-1~4）は口径9.8~10.0cm、高さ1.5cm前後ある。口縁部の巻き込みは緩い。皿Ac（59-5、6）は口径10.6~12.2cm、高さ1.3cm前後ある。体部は平坦になり、底部との境界はなくなる。皿N（59-7~17）は小型皿、大型皿に区分できる。7~9は小型皿で、口径10.6~12.6cm、高さ2cm前後ある。口縁部が強く外反する7は、古い時期に属する。10~17は大型皿で、口径14.2~15.6cm、高さは2.5~3.6cmまでである。特に14、17は深い。口縁端部は内湾しつつ丸く収めるが、10、11は上方に立ち上がる。

井戸B1061（図版59） 2箱と6袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。京都V期古~中に属する。

土師器には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（59-18、19）は口径10.6~11.3cm、高さ1.3cm前後ある。18は口縁端部の巻き込みが緩い。皿Ac（59-20、21）は口径11.0~11.2cm、高さ1.1cm前後ある。口縁端部は、20は内側に折れて収めるが、21は先端が薄い丁寧な収め方をする。皿N（59-22~25）は小型皿、大型皿に区分できる。22、23は小型皿で、口径10.5~11.2cm、高さ1.7cm前後ある。22は口縁部が強く外反する。24、25は大型皿で、口径15.3~17.6cm、高さ2.5cm前後ある。24の口縁部は内湾気味に立ち上がる。21、22は時期の古い個体の混入と考えられる。

須恵器には杯蓋、椀、鉢、壺、甕がある。杯蓋（59-27）は口径16.3cmある。椀（59-28、29）は底部径6.6~7.7cmある。鉢（59-30、31）は底部で、ともに径10cm前後ある。30は糸切りの後、高台を貼付ける。31も糸切りで、播鉢として使用されたため内面が平滑となる。壺（59-32、33）は底部で、ともに平底である。32はヘラキリのまま、33はオサエ調整である。31、33は東播系とみられる。甕（59-34、35）は外反する口縁部の破片であるが、口径は復元できない。

緑釉陶器椀（59-36~38）は底部の破片で、すべて古い個体の混入である。内面はヘラミガ

第1節 土器類

キされている。

白色土器碗（59-26）は底部の破片で、径6.0cmある。底部はヘラキリのままである。

輸入陶磁器には白磁碗、褐釉壺がある。白磁碗（59-39~44）は、口縁部と底部の破片を図示した。39、40は口縁部で、ともに口径10.5cmある。41は口縁端部が外側に肥厚する碗で、口径15.0cmある。42は先端が折れるもので、口径22.8cmある。43、44は底部で、うち44は41のような体部が復元できる。褐釉壺（59-45）は内側にすぼまる口縁部をもち、端部は外側に肥厚する。すべて華南産である。

井戸B1068（図版59） 3袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都V期古に属する。

土師器には皿A、皿Nがある。皿A（59-46~50）は口径9.9~11.0cm、高さ1.5cm前後ある。口縁端部は巻き込むというより肥厚するとした方が適切な形状となる。皿N（59-51~60）は小型皿、大型皿に区分できる。51~53は小型皿で、口径10cm前後、高さ1.5cm前後ある。54は中型皿に位置するが、復元上の問題点もあるため、注意を要する。55~60は大型皿で、口径13.4~16.0cm、高さ2.7cm前後ある。口縁部は内湾し、そのまま立ち上がる。調整の二段ナデも顕著である。

須恵器甕（59-61）は口径29.8cmある。外面に波状文を描く。

輸入陶磁器には白磁碗（59-62、63）がある。62は口縁部で、口径15.2cmある。63も口縁部で、口径19.4cmある。形態は先述した白磁碗（59-42）に類似する。ともに華南産。

土壌K46（図版60・152） 26箱出土している。土師器、須恵器、白色土器、瓦がある。京都IV期新~V期中に属する。

土師器が圧倒的に多い。皿、高杯がある。皿には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（60-1~7）は口径9.4~10.8cm、高さ1.5cm前後のものが多い。1、4、6のような深い器形もみられる。3、5のように口縁端部の巻き込みが肥厚化するものもある。皿Ac（60-8~23）も多く出土している。口径9.4~11.4cm、高さ1.3cm前後のものが多い。総じて、口径の大きなものは端部が薄手で、巻き込みも強い。皿N（60-24~67）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。中型皿との境界は明確でない。24~38は小型皿で、口径9.4~12cm、高さ1.8cm前後のものが多い。39~43は中型皿で、口径12.2~12.8cm、高さ2.5cm前後ある。44~67は大型皿で、口径13cm以上、高さ3cm前後ある。口縁端部は外反気味のものが少なくなる。また47~50、61、63、66のような深い器形も含まれる。

白色土器高杯（60-68）は接合部から脚部が残存する。接合部は瘤状にふくらみをもつ。脚部はヘラケズリで面取りされるが、断面は10角形以上となる。裾部径13cmある。

土壌G2407（図版61） 2袋出土している。土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦がある。京都V期古に属する。

土師器皿A（61-1、2）は口径9.7~10.0cm、高さ1.6cm前後ある。1は器壁が厚く、端部も肥厚するだけである。輸入陶磁器には華南産の白磁皿（61-3）がある。口径10.8cm、高さ

2.4cmあり、内面に毛彫り文様をもつ。

溝E 864 (図版61) 2袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都IV期新～V期古に属する。

土師器皿N (61-4、5) はいずれも小型皿で、口径9.2～11.0cm、高さ1.5cm前後ある。5は口縁端部を外反気味に収める。

溝G 3360 (図版61) 6袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、埴埴、壁土がある。京都V期古～中に属する。

土師器には皿Ac、皿Nがある。皿Ac (61-6) は口径10.0cm、高さ1.5cmあり、端部は内上方に延びて収める。皿N (61-7～9) には小型皿、大型皿がある。7は小型皿で、口径10.7cm、高さ1.5cmある。8、9は大型皿で、口径14.6～14.8cm、高さ2.5cm前後ある。皿Nは口縁部が内湾し、二段ナデも退化しつつある。

整地層G 2500 (図版61) 2箱と18袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。京都V期古～中に属する。

土師器には皿A、皿Nがある。皿A (61-10～13) は口径9.2～9.4cm、高さ1.5cm前後ある。13は口縁部の巻き込みがほとんどみられない。皿N (61-14～21) は小型皿、大型皿に区分できる。14～20は小型皿で、口径9.8～10.6cm、高さ1.8cm前後ある。端部は外上方に延びたまま収める。21は大型皿で、口径14.9cm、高さ2.7cmあり、口縁部は内湾気味に収める。

井戸G 2462 (図版61) 1箱と15袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。京都V期古～中に属する。

土師器皿N (61-22～27) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。22～24は小型皿で、口径9.0～10.8cm、高さ2.0cmある。25、26は中型皿で、口径12.5cm前後、高さ2.3cm前後ある。27は大型皿で、口径14.4cm、高さ2.2cmある。輸入陶磁器には華南産の白磁椀 (61-28) がある。底部の破片で、内面にはクシガキ文様をもつ。

池G 2940下層 (図版61) 31袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、緑釉瓦、石製品がある。京都IV期新～V期古に属する。

土師器には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A (61-29) は口径11.0cm、高さ1.8cmある。皿Ac (61-30) は口径9.0cm、高さ1.4cmあり、端部は内側に折れて収める。皿N (61-31～36) は小型皿、大型皿に区分できる。31～34は小型皿で、口径9.6～11.0cm、高さ1.8cm前後ある。35、36は大型皿で、口径15.8～16.0cm、高さ3cm前後ある。白色土器椀 (61-37) は口径9.4cm、高さ2.9cmあり、底部は糸切りである。輸入陶磁器では華南産の白磁椀 (61-38) がある。底部径7.5cmある。

土壙G 2405 (図版61) 3袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、緑釉瓦がある。京都V期古～中に属する。

土師器皿は皿Nのみである。皿N (61-39～47) は小型皿、大型皿に区分できる。39～43は小型皿で、口径9.4～10.4cm、高さ1.8cm前後ある。44～47は大型皿で、口径15.0～17.4cm、高さ

第1節 土器類

2.5cm前後ある。47は端部を内側に巻き込んだ状態で収める。緑釉陶器皿（61-48）は底部の破片で、径6.0cmある。時期の古い遺物の混入である。白色土器高杯（61-49）は口径15.4cmあり、杯部は直線的に外方に延びて収める。輸入陶磁器には白磁皿（61-50）、白磁椀（61-51、52）がある。3点とも華南産の底部である。

溝E 858（図版61） 3袋出土している。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都V期中に属する。

土師器皿N（61-53~55）には小型皿、中型皿がある。53、54は小型皿、55は中型皿である。輸入陶磁器には華南産の白磁椀（61-56）がある。口径15.8cm、高さ5.8cmあり、体部は内湾し、端部は外側に肥厚する。

土壙G 2457（図版61） 2袋出土している。土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦がある。京都V期に属する。

土師器には皿N、台付き皿がある。皿N（61-57、58）には小型皿、大型皿がある。台付き皿（61-59）は底部径9.6cmある。貼付高台をもち、内面にはススが付着する。

土壙G 2973（図版61） 2袋出土している。土師器、輸入陶磁器、瓦がある。京都V期中~新に属する。

土師器皿N（61-60~62）は、60、61が小型皿、62が大型皿である。62は体部が内湾し、口縁部の二段ナデも退化している。

土壙G 2498（図版62・166） 1袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、軒丸瓦がある。京都V期古に属する。

土師器皿には皿A、皿Nがある。皿A（62-1）は口径9.4cm、高さ1.6cmあり、前段階より小型化している。皿N（62-2~5）には小型皿、大型皿がある。2、3は小型皿、4、5は大型皿である。4は口径15.0cm、高さ3.2cmあり、深いことが特徴である。5は口縁部の二段ナデが省略され、一段ナデとなる。

灰釉陶器椀（62-6）は底部の破片である。白色土器椀（62-7）は完形品で、口径12.8cm、高さ3.7cmあり、体部は直線的に外方に延びる。底部は糸切りのままである。

土壙P 242（図版62） 2箱と1袋出土している。土師器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒平瓦、緑釉瓦、滑石、瓦器がある。京都V期中に属する。

土師器皿には皿Ac、皿Nがある。皿Ac（62-8）は口径10.2cm、高さ1.1cmある。皿N（62-9、10）には小型皿、大型皿がある。9は小型皿、10は大型皿である。

須恵器甕（62-11）は口径19.4cmあり、口縁部は横ナデ調整する。体部外面は斜格子状にタキを施し、内面には当て具の痕跡が残る。

白色土器には皿と椀がある。皿（62-12、13）では、12は口径8.5cmあり、内湾する体部をもつ。底部はヘラキリのままで、類例の乏しい器形である。13は口径11.2cm、高さ2.1cmあり、底部は糸切りである。椀（62-14）は口径7.8cmあり、同じく糸切り底である。

池G 2940（P区）（図版62・153） 8箱と38袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、緑釉

陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、砥石、凝灰岩、焼締陶器がある。京都Ⅴ期～Ⅵ期古に属する。

土師器には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（62-15、16）は口径9.6～10.0cm、高さ1.3cm前後ある。口縁部は肥厚する。皿Ac（62-17～24）は口径9.0～11.2cm、高さ1.1cm前後あり、個体差が大きい。17～21は底部が平坦で、口縁部は内側に折れて収める。23、24は口径が大きく、口縁部の作りも丁寧で古い形態を留める。皿N（62-25～40）には小型皿、大型皿がある。25～34は小型皿で、口径8.9～10.9cm、高さ2cm前後ある。35～40は大型皿で、口径14.0～15.8cm、高さ3cm前後のものが多い。口縁部のナデは、32、33、38のように二段ナデもあるが、一段ナデが多くなる。36は乙訓在地形で、溝P124からの混入品であろう。

瓦器盤（62-41）は新たに出現した器形で、口径42.3cm、高さ1.6cmあり、口縁端部は肥厚し、上方に面をもつ。外面はヘラ状の工具でナデ調整し、内面は粗くヘラミガキする。口縁部は横ナデ調整である。底部に短い足を3箇所貼付ける。

緑釉陶器皿（62-42）は底部径8.3cmある。山城産で9世紀後半代の混入品である。

白色土器には皿、高杯がある。皿（62-43～46）は口径11cm前後、高さ2.3cm前後で、糸切り底をもつ。高杯（62-47）は脚部の破片で、外面は面取りする。

輸入陶磁器には褐釉壺、白磁碗がある。褐釉壺（62-48）は体部上半の破片で口径9.4cmあり、井戸B1061出土例（59-45）に類似する。白磁碗（62-49）は底部径7.5cmあり、外面に蓮弁の彫り込みがある。ともに華南産である。

池G2940上層（図版62） 31袋出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、緑釉瓦、石製品がある。京都Ⅴ期に属する。

土師器皿には皿A、皿Ac、皿Nがある。皿A（62-50、51）は口径9.2～10.0cm、高さ1.7cm前後ある。皿Ac（62-52、53）は口径10.0～11.0cm、高さ1.2cm前後ある。皿N（62-54～59）は、54～56が小型皿、57～59が大型皿である。

溝C1226（図版63） 6箱と12袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、滑石製石釜がある。京都Ⅴ期中～新に属する。

土師器皿には皿Ac、皿Nがある。皿Ac（63-1～5）は口径9.6～10.2cm、高さ1.2cm前後ある。底部は平坦で口縁部も内側に折り返すだけとなる。皿N（63-6～34）には小型皿、大型皿がある。6～19は小型皿で、口径9.0～11.0cm、高さ2cm前後のものが多い。20～34は大型皿で、口径13.7～15.6cm、高さ3cm前後のものが多い。口縁部の横ナデは、小型皿では17～19、大型皿では25、26などが一段ナデとなる。

瓦器碗（63-35）は口径14.6cm、高さ4.8cmあり、内外面はヘラミガキで調整し、内面底にはらせん形の暗文を施す。

須恵器碗（63-36、37）はともに東海系のいわゆる山茶碗で、底部は糸切りのままである。36は口径8.8cm、高さ2.4cmあり、高台を欠く。内面は平滑化されている。37は高台径7.6cmあり、高台先端を平らに研磨している。

白色土器高杯（63-38）では接合部の瘤は退化し目立たない。脚部は面取りがなくなり、断面円形となる。

輸入陶磁器には華南産の白磁皿、白磁椀、白磁壺がある。白磁皿（63-39）は口径10.4cm、高さ2.3cmあり、内湾する体部をもつ。白磁椀（63-40、41）は底部で、40は径8.2cm、41は径5.4cmある。40は底部外面に墨書がある。2文字あり、「林□〔通カ〕」と読める。「林通」とするなら、僧侶などの人名を表したのであろうか？ 白磁壺（63-42）は外反する口縁部で、口径10.4cmある。四耳壺と思われる。

6 鎌倉時代

土壌 P 108（図版63） 1箱出土している。土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 VI期中～新に属する。

土師器皿 S（63-43、44）は白色の胎土をもつ椀状の器形で、この段階から出現する。43は口径11.4cm、高さ2.8cm、44は口径13.0cm、高さ3.5cmあり、口縁部は横ナデ調整する。ナデの幅は広い。体部はオサエ調整である。

土壌 G 3373（図版63・156） 1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、滑石がある。京都 VI期に属する。

土師器羽釜（63-45）は口径29.1cm、高さ27.3cmある大型品で、丸い体部が特色である。外面は縦にハケをかけた後、底部付近のみ2次的に斜めにハケをかける。内面は横ハケで調整する。口縁部は長く内傾し、鐺は水平に張り出す。口縁と鐺は横ナデで調整する。外面には使用時のスガが付着する。摂津系の煮炊具であろう。

溝 P 124（図版64・65・154・155） 33箱と19袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、砥石、滑石製石釜、壁土がある。京都 VI期中～新に属する。

土師器皿は大半が「仮称乙訓在地形の土師器皿」（以下、「乙訓在地形」とする）が占める。これに対し、従来から述べてきた京域主流の土師器皿は数が少なく、図版64では、15～20の白色系の皿Ac、85～90の皿Nの小型皿、91～95の白色系の皿Sのみであった。

乙訓在地形の土師器皿は京域主流の皿Ac、皿Nを真似たもので構成される。

乙訓在地形の皿Ac（64-1～14）は口径7.2～8.5cm、高さ1cm前後のものが多く、底部は平坦で口縁端部の巻き込みは緩い。特に、1、4は上方へ肥厚するだけ、2は上方へ立ち上がるだけ、その他も内側に傾斜して収めるが、丁寧さが欠ける。白色系を呈する皿Ac（64-15～20）は京域主流に属するが、形態上乙訓在地形との明確な差はみられない。

乙訓在地形の皿N（64-21～84）は、小型皿と大型皿が明確に区分できる。21～45は小型皿で、口径7.9～9.3cm、高さ1.5cm前後のものが多い。口縁端部の処理は単純化されており、平坦な底から斜め上方に立ち上がるもの（64-24、30、33～35）、口縁端部が内湾するもの（64-22、39）、体部との境に段差をつけようとするもの（64-38）、端部に面をつけるもの（64-44）などの特色がみられる。口縁部の横ナデは一段ナデであるが、二段ナデを意識したもの（64-36）

もある。胎土にきめ細かさがなく、調整不十分であるため粘土板の継ぎ目も容易に観察できる。46～84は大型皿で、口径11.1～16.6cm、高さ3cm前後のものが多いが、こちらは個体差がさらに大きい。口縁部の形態でいうなら、直線的に延びるもの(64-49、57、62、65)、外反するもの(64-53、66、68、72、74)、内湾するもの(64-64、67)、歪みが大きいもの(64-55)などの特色が指摘できるが、概していうなら平坦な底部に外反する口縁部を付したものが一般的といえる。この他、浅いためより皿状となった個体(64-75～79)の存在も注目される。77～79は端部に面をもち、京域主流の皿Nを意識したようにみえるが、口縁部が倒れた分浅くなっている。椀状を呈する深い個体(64-80～82)は、後述する皿Sを意識して作られた個体とも思われる。なお、83、84は乙訓在地形に属する中で、最も京域主流に似せて作られた個体である。これら大型皿の口縁部は、ほとんどが一段ナデで調整される。

京域主流の土師器皿N(64-85～90)は、小型皿のみ確認している。口径8.3～9.3cm、高さ1.5cm前後で、体部は内湾し、端部は面をもち上方に収める。口縁部の横ナデ調整は一段である。白色系を呈する皿S(64-91～95)は、小型でやや浅いものと本来の椀状の2種類がある。91、92は浅い器形で、形態上皿Nに類似する。白色系の皿S、皿Acは、京都市内で通有に出土するため、京域主流に含めて考えるべき製品である。

瓦器には椀、皿、鍋、盤がある。椀(65-1～13)には2種ある。1～11は口径11cm前後、高さ3.5cm前後あり、内湾する体部をもち、高台がつかない。焼成は良好、丁寧に作られた製品である。内面底に暗文があり、体部はタテに切り込みを入れて輪花とする(65-9～11)。体部外面はオサエのみ、口縁部は横ナデ調整する。内面は工具を回転させたヘラミガキを施す。内面底の暗文は、1～4がジグザグ文、5～8、11が斜格子文、9、10が花文である。12、13は通有に出土する椀である。13は口径13.2cm、高さ4.3cmあり、断面三角形に退化した高台を貼付ける。内面底にはらせん形の暗文をもつ。皿(65-14、15)では、14が土師器皿Acに類似する器形をもち、口径6.2cmで非常に浅い。15は通有の瓦器皿で、口径9.6cm、高さ2cmある。内面底にジグザグの暗文を施す。鍋(65-16)は口径24.5cm、高さ11cmある。くの字形に屈曲する受け部は横ナデ調整する。体部外面はオサエのみで、粘土紐の痕跡やユビオサエの痕跡が残る。内面は丁寧にハケメ調整し、平滑に仕上げる。外面にススをうける。盤(65-17)は口径41.8cmあり、端部は肥厚する。池G2940(P区)出土例(62-41)に比べると、器壁が薄く、体部が浅くなるなどの退化傾向がみられる。

須恵器鉢(65-18)は口径32.2cmあり、体部は外上方に延び、口縁端部はそのまま収める。体部下半はヘラケズリ、上半と内面は横ナデ調整である。

白色土器には皿、高杯がある。皿(65-19～21)では、19、20が糸切り底をもち、口径8.0cm、高さ2cm前後で、池G2940(P区)出土例(62-43～46)に比べると著しく小型化している。21はケズリ出しの輪高台をもつ。高杯(65-22～27)のうち、22、23は杯部で、口径11cmあり、皿をやや大きめにした形態をもつ。24～27は脚部で、接合部の瘤状のふくらみを留め、ヘラで浅く面取りする。

第1節 土器類

輸入陶磁器には白磁合子蓋、白磁皿、青磁皿、青磁椀がある。白磁合子蓋（65-28）は口径6.6cm、高さ1.5cmあり、上面と側面を浅く彫り、花卉状とする。白磁皿（65-29）は、底部の破片で、径6.5cmある。すべて華南産。青磁皿（65-30、31）は口径10cm前後、高さ2.1cmあり、外反する短い体部をもつ。内面底にクシで文様を彫る同安窯系。青磁椀（65-32、33）は、32は口径12.2cmあり、外面に蓮弁を浮き出させ、タテに線を刻む。内面にも文様がある。33は底部で径4.8cmあり、線彫りで蓮弁を表現する。龍泉窯。

この土器群は、土師器では乙訓在地形が圧倒的であること、瓦器には暗文を施す小型椀が多いことなど、通常の構成と異なるため、第6章第2節で改めて検討する。

井戸E743（図版66・156） 2箱と2袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などがある。京都VI期中～新に属する。

土師器皿には皿Ac、皿N、皿Sがある。皿Ac（66-1～3）は口径9.0～9.7cm、高さ1.5cm前後あり、口縁部は短く内傾し収める。2、3は皿Sと同じく白色系に属する。皿N（66-4～31）には小型皿、大型皿がある。4～20は小型皿で、口径8.6～10.0cm、高さ1.5cm前後ある。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はそのまま収める。口縁部の横ナデは一段である。21～31は大型皿で、口径13.0～15.0cm、高さ3cm前後ある。平坦な底部から外上方に体部が伸び、口縁端部は外側に面をもち収めるものが増加する。皿S（66-32）は1点のみある。口径13.0cm、高さ2.9cmあるが、先に掲載した例（63-44、64-94）に比べるとやや浅い。

瓦器には椀、盤がある。椀（66-33、34）は、34が通有の椀で、口径14.4cm、高さ5.1cmある。内外面をヘラミガキし、内面底にはジグザグの暗文を施す。33は小型椀で、口径8.4cm、高さ2.8cmあり、内面にのみヘラミガキを施す。盤（66-35）は口縁部の破片で、端部は上方に面をもつ。内外面を横ナデ調整する。

須恵器には鉢、甕がある。鉢（66-36、37）は口縁部のみで、ともに端部は肥厚し、3角形化している。36は口径27.4cmある。甕（66-38）は小片のため口径は復元できない。口縁端部は外側に巻き込み、後に玉縁口縁として一般化する前の形態として注目される。備前産とみられる。

白色土器高杯（66-39）は接合部の破片で、瘤状のふくらみをもち、杯部中央は凹む。

輸入陶磁器には白磁皿、白磁椀、青磁皿がある。白磁皿（66-40、44）では、40は内湾する体部をもち、内面には細かいヘラで文様を彫り込む。44は口径10.2cmあり、体部は外反する。白磁椀（66-43、45）では、43は底部径6.2cm、45は口径16cmある。いずれも華南産である。青磁皿（66-41、42）は口径11cm前後、高さ2.3cm前後あり、溝P124出土例（65-30、31）と同じく同安窯系の製品である。内面底にはクシで文様を彫り込む。

井戸A309（図版66） 8袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、滑石、壁土がある。京都VI期新に属する。

土師器には皿、鉢がある。皿には皿N、皿Sがある。皿N（66-46～48）は、46が小型皿で、口径9.5cm、高さ1.5cmある。47は大型皿で、口径15.2cm、高さ2.6cmある。48はさらに大型の

皿（以下、「特大皿」とする）で、口径21.7cm、高さ3.7cmある。後述する井戸L31（67-43～46）、土壙L28（69-10～12）でも同じ製品が出土しており、この時期に限られた製品といえる。口縁部は外側に肥厚し、ふくらみの直下には製作時についたとみられる器具の痕跡が残る。まず下半を成形し器具で固定した後、口縁部を調整したため、このような痕跡がついたと考えられる。皿S（66-49）は口径13.0cm、高さ3.2cmある。鉢（66-50）は口径22.8cm、高さ12.3cmあり、大きく開く体部をもつ。内面はハケ調整、外面はオサエのみで、粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭に残る。

焼締陶器甕（66-51）は口径26.6cmあり、緩く外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は未発達で、先端を窪ませ凹線がめぐるようにみせる。常滑の製品であるが、出土例は乏しい。

輸入陶磁器では華南産の白磁椀（66-52）がある。底部径6.3cmあり、内面底には重ね焼きの痕跡がみられる。

土壙E734（図版66） 2袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都VI期新に属する。

土師器皿N（66-53～60）には小型皿、大型皿がある。53～56は小型皿で、口径8.8～9.4cm、高さ1.5cm前後ある。57～60は大型皿で、59、60は口径14cm前後あるが、57、58は口径12cm台まで小型化している。57は外反する体部が椀状を呈し、京域主流の土師器皿と異なる。53、55の小型皿も、調整や細部の形態は京域主流の土師器皿と異なり、他地方からもたらされた可能性がある。皿Nの口縁部の横ナデはすべて一段ナデである。

土壙E738（図版67） 1箱と1袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦がある。京都VI期新に属する。

土師器皿には皿Ac、皿N、皿Sがある。皿Ac（67-1）は白色系で、口径8.0cm、高さ1.3cmある。皿N（67-2～10）には小型皿、大型皿がある。2～4は小型皿で、口径8.5～8.8cm、高さ1.7cm前後ある。5～10は大型皿で、口径11.9～13.6cm、高さ2.5cm前後ある。体部は外反気味で、端部は上方に収める。5は皿Sに類似した深い器形である。皿S（67-11）は口径12.6cm、高さ3.3cmあり、体部は内湾気味に収める。

瓦器椀（67-12）は口径14.0cmある。体部は厚手で、口縁部はそのまま丸く収める。内面には粗いヘラミガキを施す。和泉形の瓦器椀である。

土壙G3300（図版67） 4箱と3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都VI期新に属する。図版64・65で掲載した溝P124と同一と考えてよい遺構で、遺物内容も共通する。

土師器皿は大半が乙訓在地形の土師器皿である。京域主流の土師器皿は少数である。乙訓在地形は皿Nのみである。皿N（67-13～27）には小型皿、大型皿がある。13～17は小型皿で、口径8.6～10.4cm、高さ1.5cm前後ある。18～27は大型皿で、口径12.4～14.0cm、高さ2.5cm前後ある。22は椀形を呈する深い器形で、内面にハケメを留める。京域主流の土師器皿（67-28～32）には皿N、白色系の皿Sがある。皿Nのうち、28～30は小型皿、31は大型皿である。32は

第1節 土器類

皿Sである。

白色土器皿（67-33）は口径8.0cm、高さ1.7cmあり、底部は糸切りで成形する。中央には焼成後の穿孔がある。

井戸L31（図版67） 2箱出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器、瓦がある。京都VI期新～VII期古に属する。

土師器皿には皿N、白色系の皿Sがある。皿N（67-34～46）には小型皿、大型皿、特大皿がある。34～38は小型皿で、口径7.8～8.7cm、高さ1.5cm前後ある。39～42は大型皿で、口径11.4～12.4cm、高さ2.5cm前後ある。43～46は特大皿で、口径18.6～19.7cm、高さ2.5cm前後ある。特大皿は個体ごとに差が大きい。底部は平坦なもの以外に、44、45のような上り底のものがある。口縁部は、45、46はそのまま丸く収めるが、43、44は口縁下に段ができる。44は特に口縁が肥厚し、体部との境には下半を成形した際の器具の痕跡が残る。皿S（67-47～49）は、口径11.4～12.6cm、高さ3cm前後あり、体部は内湾気味に収める。

瓦器には椀、鉢、羽釜、盤がある。椀（67-50）は口径12.0cmあり、内外面には粗いヘラミガキを施す。楠葉産である。鉢（67-51）は口径19.6cm、高さ6.0cmあり、内湾する体部をもつ。口縁部はそのまま収め、上方に面をもつ。外面はオサエのみ、内面は丁寧に横ナデする。羽釜（67-52）は小型の器形で、口径14.5cmある。盤（67-53）は口径55.2cm、高さ11.2cmあり、外面はオサエのみ、内面は横ナデ調整する。底部に糊跡が付着する。底には三足が付くと思われる。

須恵器椀（67-54）は口径14.0cm、高さ4.3cmあり、底部は糸切りで成形される。焼成不良のため、焼き上りは瓦質に近い。重ね焼により、体部は灰色、口縁部は黒灰色を呈する。京都市内では類例の少ない器形である。

白色土器皿（67-55）は口縁部の破片で、口径9.2cmある。

土壙G2477（図版67） 2箱と1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都VII期古に属する。

土師器には皿N、白色系の皿Sがある。皿N（67-56～60）は、56～59が小型皿で、口径8.0～8.4cm、高さ1.4cm前後ある。60は大型皿で、口径12cm、高さ2.1cmある。口縁部はそのまま収める。皿S（67-61）は口径12.6cm、高さ3.2cmあり、器壁が薄くなる。

輸入陶磁器では華南産の白磁椀（67-62、63）がある。62は口縁端部が外側に肥厚する椀で、古い時期の混入品である。63はそれと同じ椀の底部である。

溝F2503（図版68） 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、緑釉瓦、砥石がある。京都VI期中～新に属する。

土師器皿は皿Nのみである。皿N（68-1～12）は中間的な大きさもあるが、小型皿、大型皿に区分する。1～7は小型皿で、口径8.8～12cm、高さ1.5～2cm前後ある。8～12は大型皿で、口径13.4～14.2cm、高さ2.2cm前後のものが多い。9は椀形を呈し、皿Sに類似するが、胎土・焼成は白色系ではない。

須恵器椀（68-13）は口縁部の破片で、口径10.6cmある。

輸入陶磁器には華南産の白磁皿、白磁椀がある。白磁皿（68-14）は口径10.5cmあり、端部は外方に突出する。白磁椀（68-15）は底部で、径6.3cmある。ヘラケズリで輪高台を削り出す。ともに混入遺物である。

土壌 F 2600（図版68） 1箱出土している。土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、瓦、砥石、滑石製石釜がある。京都Ⅶ期古に属する。

土師器には皿、台付皿、甕がある。土師器皿には皿Ac、皿N、皿Sがある。皿Ac（68-16～19）では、16、17は口径7.0～8.0cm、高さ1cmあるが、白色系の18、19は口径5.5cm前後、高さ1cmで、口径はより小さい。皿N（68-20～33）には小型皿、大型皿がある。20～27は小型皿で、口径7.8～9.0cm、高さ1.5cm前後ある。28～33は大型皿で、口径10.9～13.0cm、高さ2cmある。皿Nは小型化が進行している。皿S（68-34～39）は口径11.8～13.8cm、高さ3cm前後ある。36は前段階の形態を留めるが、それ以外は底部が狭く、器壁も薄くなりつつある。台付皿（68-40）は糸切りで成形し、高台を貼付ける。底部径7.0cmあり、底部中央には焼成前に孔をあける。甕（68-43、44）は前時期の混入品とみられる。43は中型で口径17.0cm、44は大型で口径21.3cmあり、ともに外面はタタキ成形、内面には当て具の痕跡がある。

瓦器には盤、鍋、羽釜がある。盤（68-46、47）は体部の破片で、46は口径34.6cmある。口縁部は内側に肥厚し、内外面を横ナデ調整する。47の口径は復元できない。鍋（68-48、49）はともに口径25cm前後あり、受部はくの字形を呈する。体部外面はオサエ調整時の指痕跡がつく。内面は丁寧ハケで調整する。羽釜（68-50）は口径18.7cm、鏝を含む最大径21.8cmある。体部外面はオサエ調整、鏝から口縁部までは横ナデ調整、体部内面はハケメ調整である。

須恵器鉢（68-51～53）は3点ある。51は口径30cmあり、端部は外側にやや肥厚気味に収める。52はそれらの底部で、糸切りで成形する。ともに東播系である。53は高台を貼付けたもので、山茶碗などと同じく東海系の製品とみられる。

輸入陶磁器では褐釉壺（68-54）がある。底部径7.0cmあり、内外面に淡い褐釉がかかる。器壁は赤褐色を呈する。華南産。

黒色土器椀（68-45）はA類で、11世紀代の混入品である。

白色土器高杯（68-41、42）は脚部の破片で、これも12～13世紀の混入品である。

土壌 E 763（図版69） 1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、瓦がある。京都Ⅶ期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（69-1、2）は小型皿のみで、口径7.6～8.2cm、高さ1.5cm前後ある。皿S（69-3）は口径12.3cm、高さ3.1cmあり、体部は薄手になりつつある。

瓦器には鍋、羽釜がある。鍋（69-4）は大型に属し、口径26.6cmある。体部外面はオサエのみ、口縁部と体部内面は横ナデ調整である。羽釜（69-5）は扁平な球形を呈し、口径19.8cm、高さ10cm前後と推定される。口縁部は内傾化が著しい。外面にススが厚く付着する。

土壌 L 28（図版69） 2袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、

第1節 土器類

軒丸瓦、滑石製石釜がある。京都VI期中～新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（69-6～12）には小型皿、大型皿、特大皿がある。6、7は小型皿で、口径8cm前後、高さ1.3cm前後ある。8、9は大型皿で、口径13cm前後、高さ2cmある。10～12は特大皿で、口径18.8～19.6cm、高さ2cm前後ある。特大皿の特徴は、井戸L31出土例（67-43～46）に共通する。10は口縁部が2段に折れ、成形が観察しやすい。皿S（69-13）は口径11.0cm、高さ2.6cmあり、皿Sとしては小型である。

瓦器羽釜（69-14）は口径9.4cm、体部高6.8cmあり、体部に長い足を3本付ける。体部の形態は先述した羽釜（69-5）に類似する。

溝G1938（図版69） 1箱出土している。土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、砥石、滑石製石釜がある。京都VII期古～中に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（69-15、16）は大型皿で、口径11.8cm、高さ2cm前後ある。底部は、15は平坦、16はふくらみをもつ。皿S（69-17～21）には小型皿、大型皿がある。17～19は皿Sの小型皿で、口径7.2～7.6cm、高さ2cm前後あり、この段階で出現する。20、21は大型皿で、口径12cm前後、高さ3cmある。従来からの皿Sに比べると、薄手であること、底部が平坦となり、体部は直線的に外上方に延びるなど、新しい様相がみられる。

瓦器鍋（69-22）は口径20.2cmあり、受部は内湾するようになる。

土壙B1037（図版69・157） 2箱出土している。土師器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。京都VII期中～新に属する。

土師器には皿、鉢がある。土師器皿には皿N、白色系の皿Acと皿Sがある。皿N（69-23～26、28～35）には小型皿、大型皿があるが、この中には乙訓在地形も少数含まれる。23～26は小型皿で、口径7.8～8.8cm、高さ1.5cm前後ある。24は乙訓在地形で、全体の作りや端部の処理は雑に作られる。28～35は大型皿で、口径10.8～13.6cm、高さ2cm前後ある。28、29は乙訓在地形で、口径が小さく、体部も浅い。乙訓在地形は、溝P124出土例（図版64）に比べると、わずかに小型化しており、型式的な推移があったことがわかる。白色系の皿Ac（69-27）は、口径9.6cm、高さ0.9cm、皿S（69-36～38）は口径11.0～12.2cm、高さ3cm前後あり、先述した溝G1938出土例（69-17～21）より厚手で深い。鉢（69-39）は大きく開く体部をもつ。井戸A309出土例（66-50）より小型化しており、器壁も薄い。

白色土器高杯（69-40）は接合部と脚部の破片で、接合部の瘤状のふくらみは退化して目立たない。脚部の断面も円形化している。

瓦器には羽釜、鍋、小椀、ミニチュア羽釜がある。羽釜（69-42、43）は、42は口径18.2cm、43は口径22.2cmある。42は口縁部が内傾し、より古い形態をもつ。鍋（69-44）は口径26.8cmあり、受部は内湾気味に収める。外面下半にはユビナデの際の爪痕が残る。小椀（69-41）は口径5.8cm、高さ1.9cmあり、外面はオサエ、口縁部と内面は横ナデ調整する。ミニチュア羽釜（69-45）は口径4.4cm、高さ4.7cmあり、三足がつく。肩部には花卉の暗文が3方に描かれる。

須恵器椀（69-46）は口径9.2cm、高さ2.8cmある。山茶碗とすべきもので、12世紀の混入品

である。

焼締陶器には常滑甕（69-47）がある。口径29cmあり、端部は上方に立ち上がり、そのまま収める。12世紀末～13世紀前半の製品で混入品である。

輸入陶磁器には華南産の白磁皿、白磁椀がある。白磁皿（69-48）は口径9.3cm、高さ2.5cmあり、体部は内湾し内側に段がつく。白磁椀（69-49）は口径16.8cmあり、内湾する体部をもつ。49は前時期の混入であろう。

土壙G2712（図版70） 1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。京都Ⅶ期中～新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（70-1～4）には小型皿、大型皿がある。1、2は小型皿で、口径7.5～8.2cm、高さは1が1.5cm、2が1cmある。3、4は大型皿で、口径11.5cm前後、高さ2cm前後ある。皿S（70-5～8）には小型皿、大型皿がある。5～7は小型皿で、口径6.8～7.2cm、高さ2cm前後ある。8は大型皿で、口径11.3cm、高さ2.8cmある。器壁は薄い。

7 室町時代の前半代

土壙G2126（図版70） 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、壁土がある。京都Ⅶ期新～Ⅷ期古に属する。

土師器には皿、羽釜がある。皿には皿N、皿Shがある。皿N（70-9～11）は小型皿、大型皿に区分できる。9は小型皿で、口径8.6cm、高さ1.6cmあり、底部と体部の境に凹線がめぐるといふ新しい要素がみられる。10、11は大型皿で、口径12cm前後、高さ2.7cm前後あり、体部は外反する。皿Sh（70-12～15）は「ヘソ皿」と通称される器形で、ここでの初現である。底部が盛り上がるのが特徴であるが、12～14の盛り上がりは緩やかである。口径6.4～6.8cm、高さ1.7cm前後ある。羽釜（70-16）は小型の器形で、調整が丁寧である。口径14.2cmあり、鐙と口縁は短い。

瓦器には鍋（70-17、18）がある。17は深い椀状の器形をもち、口縁を片口に成形する。把手部分は出土していないが、土壙H723（70-51）、土壙B1035（77-28）出土例などから、片口で把手が付くと考えた。18は口径26.6cmあり、受部は短くなりつつある。外面にユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

須恵器鉢（70-19）は口径23.8cmあり、口縁端部は肥厚し、内湾気味に収める。東播系である。

輸入陶磁器には三彩盤、褐釉壺がある。三彩盤（70-20）は口縁部のみで、玉縁状の端部をもつ。内外面には緑釉がかかる。褐釉壺（70-21）は口径9.8cmあり、内傾する短い口縁部がのる。肩部に把手がつく。両者とも華南産であろう。

溝E785（図版70） 4袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅶ期新～Ⅷ期古に属する。

前の時期の遺物を多く含み、該当する時期の遺物は土師器皿Sh、須恵器鉢のみである。土師

第1節 土器類

器皿Sh (70-22) は口径6.8cm、高さ2.7cmある。須恵器鉢 (70-23、24) は、いずれも口縁部のみで、端部は上下に肥厚し、面をもつ。

混入品とすべきものには、土師器皿Ac (70-25)、皿N (70-26~28)、須恵器鉢 (70-29)、華南産の白磁碗 (70-30、31) などがある。これらは12~13世紀の遺物である。

土壙G2073 (図版70) 2袋出土している。土師器、瓦器、陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都Ⅶ期新~Ⅷ期古に属する。

土師器皿Sh (70-32) は口径7.4cm、高さ2.15cmある。

陶器小碗 (70-33) は口径8.6cm、高さ2.45cmあり、口縁を片口もしくは輪花に成形する。内面に朱が付着しており、硯に転用されている。

土壙G1897 (図版70) 1袋出土している。土師器、瓦器がある。京都Ⅶ期新~Ⅷ期古に属する。土師器皿S (70-34、35) には小型皿、大型皿がある。34は小型皿で、口径6.9cm、高さ1.75cm、35は大型皿で、口径11.4cm、高さ2.4cmある。

土壙G2125 (図版70) 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品がある。京都Ⅶ期新~Ⅷ期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N (70-36) は小型皿で、口径7.5cm、高さ1.4cmある。皿Sh (70-37) は口径6.8cm、高さ2.3cmある。口縁端部は上方につまみあげて収める。皿S (70-38) は口径12.0cm、高さ3.1cmある。

施釉陶器には瀬戸灰釉の花瓶 (70-39) がある。平坦な底部をもち、底部は糸切りで成形する。

土壙G2207 (図版70) 3袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石、吹子羽口がある。京都Ⅶ期新~Ⅷ期古に属する。

施釉陶器には瀬戸灰釉の花瓶 (70-40) がある。39に類似するがやや大きい。底部は糸切り底で、径4.9cmある。

土壙H723 (図版70) 1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器、瓦がある。京都Ⅷ期古~中に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N (70-41~46) には小型皿、大型皿がある。41、42は小型皿で、口径7.4~7.6cm、高さ1.5cm前後ある。43~46は大型皿で、口径11~11.6cm、高さ2.5cm前後ある。体部は外反気味のものが多い。皿Sh (70-47) は口径6.5cm、高さ1.9cmある。皿S (70-48~50) は口径11.3~11.6cm、高さ3cm前後ある。

瓦器鍋 (70-51) は口径20.1cmあり、一方の口縁部に把手を貼付ける。17と同じ器形とみられるが、片口部分は含まれていない。

須恵器鉢 (70-52~54) のうち、52は口径13.4cm、高さ5.2cmある小型鉢で、底は糸切りで成形される。東海産とみられる。53、54は東播系の鉢で、溝E785出土例 (70-23、24) より口縁端部が幅広くなっている。

土壙G1874 (図版71・166) 11袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉

陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅶ期新～Ⅷ期古に属する。

瓦器壺(71-1)は口径5.3cm、高さ7.4cmある。完形品であるが、二次的な焼成を受け、灰白色を呈する。

土壙D491(図版71) 1箱出土している。土師器がある。京都Ⅷ期中～新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N(71-2～5)には小型皿、大型皿がある。2、3は小型皿で、口径7.2～7.6cm、高さ1.5cmある。内面は底部と体部の間に凹線がめぐる。2は乙訓在地形の可能性がある。4、5は大型皿で、口径10.5cm前後、高さ2.5cm前後ある。4の内面にも同様の凹線がめぐる。皿Sh(71-6)は口径7.4cm、高さ1.9cmある。皿S(71-7、8)では、7は小型皿で口径8.4cm、8は大型皿で口径11.4cmある。

土壙C917(図版71) 2袋出土している。土師器がある。京都Ⅶ期新～Ⅷ期古に属する。土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N(71-9、10)では、9は小型皿で口径7.8cm、10は大型皿で口径10.2cmある。10は乙訓在地形の可能性がある。皿S(71-11)は大型皿である。

土壙C756B(図版71) 1箱と2袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。京都Ⅷ期中～新に属する。

瓦器には火舎、蓋がある。火舎(71-12)はこの段階で出現する器形で、内湾する体部をもち、外面には菊花文が押圧される。口径30.4cmある。蓋(71-13)はつまみ部分の破片で、外面には蓮弁が型起こしで成形される。

井戸B918(図版71) 1箱と2袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨がある。京都Ⅷ期中～新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N(71-14～17)は14、15が小型皿、16、17が大型皿である。皿S(71-18～21)は、18が小型皿、19～21が大型皿である。

瓦器には鍋、羽釜、火舎がある。鍋(71-22、23)は口縁部の破片で、受部は短く内湾する。羽釜(71-24、25)は口縁部が内傾する器形で、時期的には古い遺物である。火舎(71-26、27)では、26は円筒形の体部をもち、短い足が3本つく。外面には縦方向に窪みを入れる。内側はふくらみとなる。外面器表は剥離が著しい。内面は粗くヘラミガキ調整する。27は口径36.4cmあり、内湾する体部をもつ。内外面は丁寧にヘラミガキ調整し、外面には2個1組の菊花文が押圧される。底部は三足と推定される。両者とも大和産である。

須恵器鉢(71-28)は口径23.6cmあり、口縁端部は肥厚する。東播系である。壺(71-29)は底部のみで、径14.4cmある。体部外面、底部外面に自然釉がかかる。混入品であろう。

8 戦国期の前半代

土壙B1043(図版71・158) 2箱と1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都Ⅸ期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N(71-30～32)は小型皿のみで、口径8.6～9.2cm、高さ1.8cm前後あり、歪みが目立つようになる。皿Sh(71-34～37)は口径6.9～7.3cm、高さ1.8cm前後で、底部の盛り上がりが顕著になる。皿S(71-33、38、39)には小型皿、大

第1節 土器類

型皿がある。33は小型皿で、口径8.6cm、高さ1.95cmある。38、39は新たに出現した土師器皿で、従来の白色系の皿Sとは胎土・色調は共通するが、口縁部は外反し端部は上に収めるなど異なる点も多い。以後、この器形が土師器皿の主流を占める。38は口径12.6cm、高さ3.3cm、39は口径15.0cm、高さ3.5cmある。

瓦器には鍋、羽釜がある。鍋（71-40）は口径20.4cmあり、受部は水平近くまで開く。羽釜（71-41、42）では、41は中型で、口径17.6cm、高さ10.0cmある。42は大型で、口径24.1cmある。41は内面をハケメ調整するが、42はナデ調整のみである。

施釉陶器には灰釉椀、天目椀がある。灰釉椀（71-43）は口径16.2cmある。天目椀（71-44）は口径7.8cm、高さ3.65cmある。両者とも美濃・瀬戸産である。

輸入陶磁器には華南産の白磁皿（71-45、48）、白磁椀（71-46、47）、龍泉窯系の青磁椀（71-49）がある。これらは古い時期の混入品とみられる。

溝J 179（図版72） 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都IX期中～新に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（72-1）は口径7.0cm、高さ1.7cmある。皿S（72-2～8）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。2～4は小型皿で、口径7.0～9.3cm、5は中型皿で口径10.4cm、6～8は大型皿で口径14.0～14.8cmある。

土壙G 3097（図版72） 3袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。京都IX期中～新に属する。土師器皿S（72-9～12）は中型皿、大型皿に区分できる。9～11は中型皿で、口径10.2～10.6cm、12は大型皿で、口径12.0cmある。

土壙J 92（図版72） 1袋出土している。土師器、施釉陶器がある。京都IX期新に属する。土師器皿S（72-14～16）には小型皿、大型皿がある。14、15は小型皿で、口径10.2～11.4cm、16は大型皿で、口径17.2cmある。

土壙G 2234（図版72） 1袋出土している。土師器、瓦器、瓦がある。京都IX期新に属する。土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（72-17）は口径7.0cm、高さ1.7cmある。皿S（72-18、19）には中型皿、大型皿がある。18は中型皿で、口径11.0cm、19は大型皿で、口径14.2cmあるが、高さ2.1cmで浅くなりつつある。

土壙J 168（図版72） 1袋出土している。土師器などがあり、京都IX期中～新に属する。土師器皿S（72-13）は大型皿で、口径15.3cm、高さ3.1cmある。京域主流とは細部が異なるため、乙訓在地形の可能性がある。

土壙E 753（図版72） 2箱と2袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒平瓦がある。京都IX期新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿S、その他がある。皿N（72-20～25）には小型皿、大型皿がある。20～23は小型皿で、口径8.2～8.8cm、高さ2cm前後あり、内面の底部には凹線がめぐる。24、25は大型皿で、口径11cm前後、高さ2cm前後あり、小型皿同様に凹線がめぐる。皿Sh（72-27、28）は口径6.9～7.2cm、高さ1.7cmあり、口縁が外方に開き、体部は浅くなりつつあ

る。皿S（72-29~34）には中型皿、大型皿がある。29~31は中型皿で、口径10.2~12.0cm、高さ2.5cm前後ある。32~34は大型皿で、口径15.9~16.4cm、高さ2.5cm前後ある。前段階のものに比べ浅くなりつつある。26は口径11.4cm、高さ2.3cmある浅い皿で、京都市内では出土が希である。他地方から京都にもたらされたものであろう。

瓦器には鍋、羽釜がある。鍋（72-35）は口径21.8cmあり、受部は内側に折り返すように収める。羽釜（72-36~38）は中型と大型がある。36、37は中型で、口径20~23cmある。内面は、36がハケメ調整、37がナデ調整である。36は底部と体部の境界に段がつく。この段は成形時の境目を示すものであろう。38は大型で、口径32cmある。口縁部の調整は中型と同じである。

須恵器鉢（72-39）は口径24.8cmあり、端部は肥厚する。14~15世紀の混入品であらう。天目椀（72-40）は口径12.8cmある。美濃・瀬戸の製品である。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀、華南産の白磁皿がある。青磁椀（72-41）は口径15.3cmある。白磁皿（72-42）は底部のみで、底部はケズリ出し高台である。

井戸E400（図版72・166） 2袋出土している。土師器、瓦器、陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅸ期新~Ⅹ期古に属する。

土師器皿S（72-43、44）は、43は小型皿で、口径9.2cm、44は大型皿で、口径12.6cmある。

瓦器には羽釜、火舎がある。羽釜（72-45）は口径24.2cmあり、口縁部はやや内傾する。火舎（72-46、47）は内湾する口縁部をもち、外面はヘラミガキ、内面は横ナデ調整する。47は外面に二条の突帯とその間に斜格子文様をめぐらせる。陶器皿（72-48）は口径6.0cm、高さ1.7cmの小型品で、底部は糸切り成形する。古い時期の遺物であらう。龍泉窯系の青磁椀（72-49）は口縁部の破片である。

土壇A359（図版73・159） 8箱と2袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器がある。京都Ⅸ期新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（73-1、2）は小型皿で、口径8.3~8.4cm、高さ2cm前後ある。皿Sh（73-3~10）は口径6.6~7.7cm、高さ1.9cm前後ある。皿S（73-11~33）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。11~25は小型皿で、口径7.7~8.7cm、高さ2cm前後あり、総じて深いものが多い。26~29は中型皿で、口径10.0~11.0cm、高さ2.5cm前後ある。30~33は大型皿で、口径12.2~15.9cm、高さ3cm前後ある。

瓦器には把手付小皿、鍋、羽釜がある。把手付小皿（73-34）は、口径7.7cm、高さ2.3cmの小皿の一方に把手を貼付け、把手左側の口縁を片口にしたものである。内外面とも横ナデ調整する。鍋（73-35）は口径30.9cmある。体部は浅く、受部も本来の形態から変化し粘土塊状となる。羽釜（73-36、37）は中型と大型がある。36は中型で口径10.5cmある。37は大型で口径43cmある。37は口縁部が直立し、鐺は長く外に延びる。

施釉陶器には灰釉香炉（73-38）、灰釉椀（73-39、40）がある。38は体部が立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。内面は露胎である。39、40は底部をヘラケズリで成形する。体部には黄褐色の釉がかかる。美濃・瀬戸の製品である。

第1節 土器類

土壙 E 729 (図版73) 4袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 IX 期新～X 期古に属する。

瓦器のみ実測できた。羽釜、茶釜がある。羽釜 (73-41~43) は3点あり、41は口径17.4cm、42、43は口径20~21cmで、高さ11cm前後ある。3点とも外面はオサエのみで成形し、内面は横ハケで調整する。罎の貼付けは丁寧でない。茶釜 (73-44) は口径14.9cm、罎を含む最大径27.8cm、高さ15.7cmある。体部中位に罎を貼付け、肩部には縦方向に把手を貼付ける。把手は2個1対あり、把手の中央には穿孔がある。肩部より上はヘラミガキを施し、その他はナデ、オサエ調整で、下半の一部はヘラケズリする。内面は粗いハケ調整である。

土壙 G 2897 (図版74) 1箱と1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 IX 期新に属する。

土師器皿には皿 N、皿 Sh、皿 S がある。皿 N (74-1) は皿 S と区別がつきにくい。1は小型皿で、口径7.6cm、高さ2cmある。皿 Sh (74-2、3) は口径7cm前後、高さ1.7cm前後ある。皿 S (74-4~15) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できるが、境界は明確でない。4~7は小型皿で、口径8.5cm前後、高さ2cm前後ある。8~11は中型皿で、口径9.0~11.0cm、高さ2cm前後ある。12~15は大型皿で、口径12.0~15.2cm、高さ2.5cm前後ある。大型皿の底部内面には圏線がめぐる。

瓦器鍋 (74-16) は口径31.6cmある。体部は外傾するため浅くなり、受部も外に延び、上面を窪ませて収める。端部の処理は土壙 A 359 出土例 (73-35) に類似する。

輸入陶磁器の青磁椀 (74-17) は底部の破片で、径5.6cmある。

土壙 G 2631 (図版74) 3袋出土している。土師器、瓦器、瓦、銭貨がある。京都 IX 期新に属する。

土師器では皿 S (74-18~23) のみ図示できた。皿 S には小型皿、大型皿がある。18は小型皿で、口径7.8cm、高さ1.9cmある。19~23は大型皿で、口径14.2~17.2cm、高さ2.5cm前後ある。

土壙 B 992 (図版74) 2箱と2袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、銭貨がある。京都 IX 期新に属するが、他に京都 VI 期古、京都 VI 期新～VII 期古に属する遺物も出土している。

土師器皿には皿 N、皿 S、その他がある。皿 N (74-24~28) は小型皿で、口径7.3~10.2cm、高さ1.8cm前後ある。24は歪みが大きい。皿 S (74-29、30) は大型皿で、口径14.2~16.0cm、高さ2.5cm前後ある。31は器壁が厚く、端部を薄く収めるもので、口径19.8cm、高さ2.6cmある。京都市内では類例が乏しく、他地方から持ち込まれた製品であろう。

瓦器鍋 (74-32) は口径26.4cmあり、受部は内傾する。13~14世紀のものである。

焼締陶器甕 (74-33) は口径38.2cmあり、体部最大径は上半で径56cmある。肩部に格子タキを押印する。常滑産とみてしまうが、13世紀の常滑写しの信楽産とみられる。伝世使用か、あるいは混入品とみられる。

輸入陶磁器の青磁椀 (74-34~36) のうち、34は当該時期の龍泉窯系青磁椀とみられるが、

蓮弁を配置した龍泉窯系の椀35、クシで縦線を入れた同安窯系の椀36は、13～14世紀に属する。

井戸B917（図版74） 1箱と1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都IX期新に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（74-37）は口径6.3cm、高さ1.9cmある。皿S（74-38～40）は38が中型皿で口径10.4cm、39、40が大型皿で口径14.0cmある。

焼締陶器壺（74-41）は底部で、径7.4cmある。底部はヘラケズリで成形し、内面には粘土紐の継ぎ目が観察できる。

土壙G2083（図版75・160） 4箱と10袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒平瓦、石製品がある。京都IX期新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（75-1）は大型皿で、口径11.2cm、高さ1.9cmある。皿Sh（75-2～5）は口径7.2～7.6cm、高さ1.7cm前後ある。皿S（75-6～16）には小型皿、大型皿がある。6～10は小型皿で、口径8.0～8.8cm、高さ2cm前後ある。11～16は大型皿で、口径11.0～15.2cm、高さ2.5～3.0cmまでである。11～13は底部内面に圈線がめぐる。

土壙C777（図版75） 1箱と2袋出土している。土師器、瓦器がある。京都IX期新に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（75-17）は口径7.4cm、高さ1.5cmある。皿S（75-18～21）には小型皿、大型皿がある。18は小型皿で口径8.6cm、19～21は大型皿で、口径12.8～16cm、高さ2.5cm前後ある。21は底部内面に圈線がめぐる。

瓦器羽釜（75-22、23）では、22は中型で口径25.2cm、23は大型で口径30.2cmある。底部と体部の境に段がつく。外面はユビオサエの痕跡が残り、内面はハケメで平滑に調整する。外面にはススが付着する。

土壙G2877（図版75） 1袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。京都IX期新～X期古に属する。

瓦器羽釜（75-24）は口径26.3cm、高さ12.5cmある。前述の22、23より器壁が厚く、ススの量も少ない。外面はユビオサエの痕跡が明瞭であるが、内面は板状の工具でヨコ方向に強くナデる。

井戸G2555（図版75・158） 3袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦がある。京都IX期新～X期古に属する。

土師器は皿S（75-25、26）のみである。中型皿、大型皿がある。25は中型皿で、口径10.0cm、高さ2.1cmある。26は大型皿で、口径14.8cmある。

瓦器羽釜（75-27、28）は2点ある。ともに口径18.5cm、高さ11cm前後で、同じ製作手法による。

土壙G2736（図版75・160） 6袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都IX期新～X期古に属する。

瓦器羽釜（75-29、30）では、29は小型で、口径18cm、高さ10.3cm、30は中型で、口径

24.3cm、高さ14.6cmある。外面はユビオサエの痕跡が残り、内面は29がハケメ調整、30も目の細かな板状の工具で平滑に調整する。

溝F 2410 (図版76・161・163、図34) 8箱と30袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、硯(石製)、砥石、滑石製石釜、壁土、馬の歯がある。京都IX期新に属する。

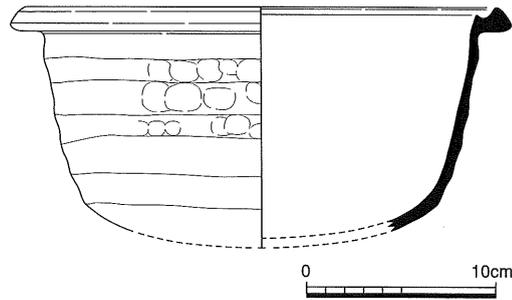


図34 溝F 2410底部出土土器実測図

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N(76-1~4)は小型皿のみで、口径6.9~8.5cm、高さ2cm前後ある。皿Sh(76-5~7)は口径6.8~7.2cm、高さ1.7cm前後ある。皿S(76-8~14)には小型皿、中型皿、大型皿がある。8、9は小型皿で、口径8.5cm前後、高さ2.3cm前後ある。10は中型皿で、口径10.1cm、高さ2.3cmある。11~14は大型皿で、口径13.8~15.8cm、高さ3cm前後ある。大型皿の底部内面には圈線がめぐる。

瓦器にはミニチュア羽釜、鍋、羽釜、火舎がある。ミニチュア羽釜(76-15)は口径7.2cmあり、三足がつく。土壙B 1037出土例(69-45)と比べると、口径がやや大きく、鏝も上に付く。鍋(76-16、17)は、16が口径26cm、17が口径29.8cm、高さ9.5cm前後ある。17は体部が浅い。受部は、17は外方に延びて収めるが、16は本来のかたちを喪失している。羽釜(76-18~20)には中型と大型がある。18、19は中型で、口径18.5cm前後、20は大型で、口径25cmある。この他、図示していない個体には口径29.8cmのものがある。火舎(76-21~24)のうち、21~23は体部が内湾し、24は体部がまっすぐ延びる。体部が内湾する21、23は上方に二条の突帯をめぐらせ、その間に斜格子文、木の葉文を配置する。22は文様帯をもたない。23の体部には円孔が穿たれる。4点とも内面は横ナデ調整、外面は丁寧なヘラミガキを施す。

焼締陶器には鉢(76-25)、播鉢(76-26)がある。ともに口縁部の破片で、口径は復元できない。25は端部をそのまま収める。26は上方に拡張し、内面には摺目を入れる。25は産地の特定ができない。26は備前である。

施釉陶器には皿、椀、壺がある。皿(76-27、28)では、27は口径6.7cm、高さ2cmあり、小型皿に分類したが、椀形を呈する。28は口径11.0cm、高さ2.8cmあり、口縁部の内外面のみ鉄釉をかける。ともに底は糸切りである。椀(76-29、30)では、29は口径16.8cm、高さ6.5cmある。底部には釉がかからない。ヘラケズリで蛇の目高台を成形する。30は口縁部で、口径16.8cmある。壺(76-31、32)では31はヘラケズリで高台を成形する。径10.4cmある。内外面に釉がかかる。32は口縁が内傾する無頸の壺で、全面に釉がかかる。口径21.6cmある。すべて美濃・瀬戸産である。

輸入陶磁器には青磁椀、天目椀がある。青磁椀(76-33)は底部で、径5.2cmあり、青白色の釉をかける龍泉窯系である。天目椀(76-34)は口径11.4cmあり、底部を欠く。釉下に鉄泥を塗布する。

なお図34に掲載した瓦器鍋は、溝の底部からまとまって出土したものである。遺物の所属時期は15世紀前半頃とみられるため、下層遺構の可能性も考えられるが、溝F2410の遺物として取り上げたため、ここで紹介する。

土壙B1035(図版77) 6箱と3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、滑石製温石がある。京都Ⅸ期新～Ⅹ期古に属するが、京都Ⅶ期新～Ⅷ期古が大量に含まれるため、時期の異なる2遺構を同時に調査した可能性が高い。遺物内容を知る例として、図上半に本来の遺構の遺物を、下半に混入と考えた遺物を示した。

京都Ⅸ期新～Ⅹ期古に属する土師器には、皿N、皿Sがある。皿N(77-1~9)は小型皿、大型皿に区分できる。1~6は小型皿で、口径7.3~9.1cm、高さ1.6cm前後ある。7~9は大型皿で、口径11.2~12.6cm、高さ2.6cm前後ある。成形は雑で歪みが大きい。皿S(77-10~23)は中型皿、大型皿に区分できるが、境界は明確でない。10~13は中型皿で、口径11.3~11.8cm、高さ2.3cm前後ある。14~23は大型皿で、口径12.2~17.6cm、高さ2.5cm前後ある。皿Sはほとんどが、底部内面に圈線をめぐらせる。

瓦器には鍋、壺、羽釜がある。鍋(77-24、28)のうち、24は受部をもたない浅い器形で、口径15.4cm、高さ3.4cmある。体部は外反気味で浅く、外面はオサエ、内面はハケメ調整する。28は口径17.4cmあり、口縁の一方に把手を付け、一方を片口としている。土壙G2126(70-17)、土壙H723(70-51)に出土例があるが、それらより体部は浅い。壺(77-25~27)では、25、26は丸い体部に短い口縁部をつけたほぼ同じ器形で、口径10.5cmある。27は短く外方に肥厚した口縁部を有するもので、口縁下に雷文を押圧する。内面はヘラミガキ調整され、丁寧な作りが特徴である。羽釜(77-29、30)は口径21cm前後で、ほぼ同じ製作手法による。また図示していないものには、口径17cm台、25cm台のものがある。

施釉陶器には灰釉椀、鉢がある。椀(77-31、32)のうち、31は口径9.5cm、高さ3.5cmある小型椀で、底は糸切りによる平高台である。灰オリーブ色の釉がかかる。32は体部がやや内湾する椀で、口径16.8cm、高さ6.9cmある。内面と体部上半に黄緑色の釉がかかる。鉢(77-33、34)のうち、33は口径16.8cmあり、外反する口縁部をもつ。内外面に釉がかかる。外面はヘラでナデて調整する。34は大きく外上方に延びる体部をもつ。口径26.9cmあり、内面と外面上半に灰白色の釉がかかる。いずれも美濃・瀬戸産である。

京都Ⅶ期新～Ⅷ期古に属する土師器には、皿Sh、皿S、鉢がある。皿Sh(77-35~40)は口径6.3~7.0cm、高さ2cm前後ある。皿S(77-41~45)は大型皿で、口径11.5~13.8cm、高さ2.5cm前後ある。器壁は薄いものが多く、また45は口径に比べ浅い。鉢(77-46)は体部が大きく外上方に延びる器形で、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。類例は井戸A309(66-50)、土壙B1037(69-39)にあるが、時期的に近い後者とする。

瓦器には椀、鍋、羽釜がある。椀(77-47、48)は口径13cm前後で、薄手の体部をもつ。内面に粗いヘラミガキを施す。鍋(77-49)は口径23.7cmあり、受部は元来の形状を留める。羽

第1節 土器類

釜（77-50、51）のうち、50は中型で口径17.0cm、51は大型で口径25.2cmある。

須恵器鉢（77-52、53）はともに体部から口縁部の破片で、端部は52は内湾気味、53は上下に肥厚し収める。

土壙G2318（図版78） 2袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都Ⅸ期新に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（78-1）は口径7.6cm、高さ1.75cmある。皿S（78-2~4）には小型皿、中型皿がある。1~3は小型皿で、口径8.2~8.6cm、高さ2.2cm前後ある。4は中型皿で、口径9.6cm、高さ2.5cmある。

集石H555（図版78） 1箱と3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅸ期新~Ⅹ期古に属する。

土師器には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（78-5~7）は口径7.0~7.5cm、高さ1.6cm前後ある。皿S（78-8~24）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。8は小型皿で、口径8.5cm、高さ2.0cmある。9~18は中型皿で、口径9.6~12.0cm、高さ2.5cm前後ある。19~24は大型皿で、口径14.2~18.2cm、高さ2.8cm前後ある。中型皿、大型皿のほとんどは、底部内面に圏線がめぐる。

瓦器には鍋、火舎がある。鍋（78-25）は受部をもたない椀状の器形で、口径16.8cmあり、外面はユビオサエ、内面はハケメ調整する。土壙B1035出土例（77-24）より深い。火舎（78-26）は口径41cmある大型の製品で、内外面をヘラミガキ調整する。

地業H666（図版78） 14袋出土している。土師器、瓦器、陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、砥石、銭貨がある。京都Ⅸ期新~Ⅹ期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（78-27）は小型皿で、口径7.4cm、高さ1.7cmある。皿S（78-28、29）は、28は小型皿で口径8.6cm、29は大型皿で口径13.4cmある。28の口縁にはススが付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。

瓦器羽釜（78-30）は口縁部で、口径23.2cmある。陶器小椀（78-31）は口径6.8cm、高さ3.0cmあり、糸切りで平高台を成形する。無釉の陶器で、美濃・瀬戸系とみられる。

井戸B916（図版78） 1箱出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、銭貨がある。京都Ⅹ期古に属する。

土師器には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（78-32、33）は小型皿で、口径7.2~7.8cm、高さ1.5cm前後あり、皿Nとしては最も退化した形態である。皿Sh（78-34）は口径7.4cm、高さ1.6cmで、本来の形態より浅い。退化形態といえる。皿S（78-35~39）は中型皿、大型皿に区分できる。35~37は中型皿で、口径10.2~11.0cm、高さ2.2cmある。38、39は大型皿で、口径14cm前後、高さ2.4cm前後ある。

瓦器火舎（78-40~42）では、40は口径33cmあり、垂直に立ち上がる体部をもつ。外面には二条の突帯があり、その間には流水様の文様が彫り込まれる。外面はヘラミガキ、内面は横ナデ調整である。41は同様に垂直に立ち上がる体部、42は箱形の体部をもつ。

焼締陶器には備前播鉢、備前甕がある。備前播鉢（78-43）は口径25.8cmあり、口縁部を幅

広く肥厚させる。内面の摺目は一単位が7本以上である。小片のため口径はさらに大きい可能性がある。備前甕（78-44）は口径41cmあり、端部を玉縁状に折り込んで収める。断面には粘土の折込みが観察できる。

土壌J175（図版78） 4袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、砥石、金属、壁土がある。京都Ⅸ期新～Ⅹ期古に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh（78-45）は口径7.3cm、高さ1.5cmある。皿S（78-46～48）は、46が小型皿で口径8.2cm、高さ1.9cm、47が中型皿で口径12.0cm、高さ2.1cm、48が大型皿で口径16.5cm、高さ2.8cmある。

堀G2630（J区、図版79） 8袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅸ期新に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（79-1、2）は小型皿で、口径7.6～8.0cm、高さ1.7cm前後ある。皿Sh（79-3～6）は口径6.6～7.8cm、高さ1.6cm前後ある。皿S（79-7～13）には小型皿、大型皿がある。7～10は小型皿で、口径8.5cm前後、高さ2cm前後ある。11～13は大型皿で、口径14.0～16.0cm、高さ3cm前後ある。大型皿の底部内面には圏線がめぐる。

焼締陶器には備前播鉢（79-14）がある。片口を含む口縁部で、内面の摺目は一単位7本以上である。

施釉陶器には古瀬戸おろし目皿（79-15）がある。口径17.0cm、高さ3.4cmある。底は糸切りで成形し、内面底にはヘラでおろし目を刻む。口縁の一箇所を切って片口とする。

輸入陶磁器の青磁椀（79-16、17）は、16は口径15.0cm、高さ6.6cmあり、内面に草花の文様を彫り込む。17は底部径5.2cmあり、同様の文様を彫り込む。ともに高台内は無釉である。龍泉窯系。

堀G2630（図版79・162） 7箱と67袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、砥石がある。京都Ⅸ期新～Ⅹ期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（79-18～21）は小型皿で、口径7.3～8.8cm、高さ2cm前後ある。皿Sh（79-22～25）は口径6.4～7.0cm、高さ1.8cm前後ある。24、25は浅い。皿S（79-26～36）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。26～29は小型皿で、口径8.2～9.6cm、高さ2cm前後ある。30～33は中型皿で、口径11.8～12.0cm、高さ2.2cm前後ある。34～36は大型皿で、口径14.5cm前後、高さ2.5cm前後ある。33の外面には墨書があるが、判読できない。底部の中心には焼成後の穿孔がある。

瓦器には羽釜、火舎がある。羽釜（79-37）は口径26.8cm、高さ12.7cmあり、外面はユビオサエで調整し、内面は板状の工具で横方向にナデる。底部は平坦に作られる。口縁部や鐙の成形は雑である。火舎（79-38）は箱形を呈する体部と四隅に脚部を取付けたもので、本例が初出である。全体は復元できないが、長方形と推定した。短辺側は口径38.6cm、脚部を含めた高さは16cm前後と推定される。外面はヘラでナデて平滑に仕上げ、内面は横ナデ調整、底部もナデ調整である。口縁部は内側に水平に折れる。外面上端には二条の突帯がめぐり、その間をス

第1節 土器類

タンブ文で埋める。この装飾手法は体部の形態を超えて共通する。脚は獣足形を呈し、ヘラで面取りする。内面に配した模式図は、残存具合を示したものである。

焼締陶器には備前播鉢（79-39）がある。口径28.0cm、高さ10.9cmあり、口縁部は上方に拡張する。内面の摺目は一単位5本である。

施釉陶器には灰釉椀（79-40）がある。口径10.4cm、高さ3.65cmあり、外上方に延びる体部をもつ。全面に暗オリーブ色の釉がかかる。底部のみ無釉である。底部外面を浅くケズリ込み、低い高台を作り出す。美濃・瀬戸産。

井戸B1059（図版79） 2袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都X期古に属する。

土師器皿S（79-41、42）は小型皿で、口径9.0~10.0cm、高さ2cm前後ある。瓦器羽釜（79-43）は口径28cmあり、口縁部から鏝の部分が残存する。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀、青磁花瓶がある。青磁椀（79-44）は底部で、径5.5cmある。外面は蓮弁を彫り込み、内面には「福堂」と読める文字が彫り込まれる。青磁花瓶（79-45）は口縁部の破片で、口径6.0cmある。

溝E455下層（図版80・163） 全体で5箱と56袋出土している。このうち、西肩としたものは3箱と15袋ある。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、硯（石製）、砥石、五輪塔部材、壁土、銭貨、牛ないし馬の歯がある。京都X期古に属する。

溝E455下層の土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（80-1~4）は小型皿で、口径6.5~8.1cm、高さ1.5cm前後ある。皿Sh（80-5~8）は口径6.6~7.5cm、高さ1.7cm前後ある。皿S（80-9~33）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できるが、小型皿と中型皿の境界は明確でない。9~16は小型皿で、口径7.8~9.4cm、高さ2cm前後ある。17~20は中型皿で、口径10~11.4cm、高さ2.2cm前後ある。21~33は大型皿で、口径12.0~18.2cmまで、高さ2.5cm前後ある。大型皿は特に浅くなる。中型皿と大型皿の底部内面には圏線がめぐる。

瓦器にはミニチュア羽釜、鍋、羽釜、火舎がある。ミニチュア羽釜（80-34）は口径8.3cm、高さ4.6cm前後ある。三足が付く器形であるが、足や鏝の成形は溝F2410出土例（76-15）より雑になる。鍋（80-35）は口径30.6cmあり、体部は外傾し浅くなる。受部は上方を窪ませ、当初の名残りを留める。羽釜（80-36~40）は5点図示した。口径は、36が19.4cm、37が23cm、38が25.8cm、39が26.3cm、40が32cmあり、個体ごとに差がみられる。外面のユビオサエは浅く目立たない。内面の調整は、36はハケメ、38、39はナデのみ、37、40はハケの上をさらにナデる。火舎（80-41、42）では、41は口縁部の破片で、内外面を丁寧にヘラミガキする。集石H555出土例（78-26）に類似する。42は底部に三脚を付けた球形の火舎である。脚部の形状は先の堀G2630出土例（79-38）に共通する。

焼締陶器には常滑産とみられる甕（80-43）がある。外反する口縁部は小片のため口径は復元できない。混入遺物であろう。

施釉陶器には美濃・瀬戸灰釉の鉢、花瓶がある。鉢（80-44）は大きく広がる口縁部をもつ。

口径27.6cmあり、内外面に釉がかかる。花瓶（80-45）は肩が張る体部をもつ。肩部に沈線がめぐる。土壙G2125（70-39）、土壙G2207（70-40）出土例に類似する。

輸入陶磁器には青磁皿、青磁椀がある。青磁皿（80-46）は口縁部の破片である。青磁椀（80-47~49）では、47は口径11cmとやや小型で、外面の上半には雷文、下半にはヘラ先で蓮弁を彫り込む。48は口径13.3cmあり、外面には鏝のない蓮弁を彫り込む。49は口径15.6cmあり、47と同様の雷文・蓮弁を彫り込む。いずれも龍泉窯系である。

溝E455西肩（図版81） 層位的には溝E455下層の上位にあたる。京都X期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（81-1、2）は小型皿で、口径7cm前後、高さ1.5cm前後ある。皿Sh（81-3、4）は口径6.5cm前後、高さ1.6cm前後ある。皿S（81-5~8）は5が小型皿で、口径9.0cm、高さ1.9cmあり、6~8が大型皿で、口径12cm前後、高さ2cm前後ある。7、8は底部が平坦で体部が直線的に伸び、新しい様相を示す。

瓦器には羽釜、火舎がある。羽釜（81-9）は口縁部の破片で、口径21.8cmある。火舎（81-10、11）のうち、10は内湾する体部をもつもので、口径32cmある。口縁部の上面にはヘラで線が刻まれる。11は、堀G2630出土例（79-38）などと同じ箱形の体部をもつ火舎であるが、隅部の破片2個から復元したものである。

焼締陶器には備前播鉢（81-12）がある。口径27.2cmあり、口縁端部は上方に肥厚する。内面の摺目は一単位7本である。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀、青磁盤がある。青磁椀（81-13、14）は底部径5.4~6.4cmあり、13の内面には吉祥句らしき文字が彫り込まれる。14の内面にはイッチン技法で追線と花文が描かれる。青磁盤（81-15）は口径25.8cmあり、内湾する口縁部をもつ。

土壙G2214（図版81） 1袋出土している。土師器、瓦器がある。京都X期古に属する。

土師器皿Sh（81-16）は口径7.2cm、高さ2.3cmある。中央の孔は摩滅によって生じたものである。

瓦器火舎（81-17）は長方形の体部をもち、短辺側が残存するとみて復元した。短辺側で口径38.6cmある。高さ11.2cmあるが、四隅につく脚部は含んでいない。形態、成形上の特徴は堀G2630出土例（79-38）とほとんど同じで、わずかに外面のスタンプ文様が異なる程度である。

土壙G1363（図版81） 2袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。京都X期古に属する。

施釉陶器の美濃・瀬戸灰釉皿（81-18）1点のみを図示する。口径8.4cm、高さ1.85cmある。高台内を除く全面にオリブ黄色の釉がかかる。

土壙G2821（図版81） 5袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器、砥石がある。京都X期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N（81-19）は小型皿で、口径7.6cm、高さ1.3cmある。皿Sh（81-20、21）は口径6.9~7.6cm、高さ1.7cmある。皿S（81-22、23）では、22は小型皿で口径8.0cm、23は大型皿で口径13.8cmある。23の底部内面には圏線がめぐる。

第1節 土器類

土壙J182（図版81） 2袋出土している。土師器、焼締陶器、瓦がある。京都X期古に属する。

土師器皿S（81-24~27）には中型皿、大型皿がある。24は中型皿で、口径10.0cm、高さ2.1cmある。25~27は大型皿で、口径12.0~16.2cm、高さ2.4cm前後ある。25~27の底部内面には圏線がめぐる。

土壙B962（図版81） 2箱と3袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦がある。京都X期古~中に属する。

土師器皿S（81-28~33）には小型皿、中型皿、大型皿があるが、境界は明確でない。28は小型皿で、口径8.5cm、高さ1.85cmある。29、30は中型皿で、口径11.0cm、高さ2.2cmある。31~33は大型皿で、口径13.2~16.0cm、高さ2.3cm前後ある。

焼締陶器には信楽播鉢、備前播鉢がある。信楽播鉢（81-34）は口径29.3cmあり、口縁部は拡張せずにそのまま収める。内面の摺目は一単位5本である。備前播鉢（81-35）は口径30.0cmあり、口縁部は上方に拡張する。内面の摺目は一単位4本以上である。

施釉陶器碗には瀬戸・美濃系の灰釉碗（81-36）がある。口径12.4cmあり、外面上方には蓮弁の名残りがあがる。龍泉窯系の蓮弁文青磁碗を写した製品である。

井戸H328（図版82・163・164） 3箱と7袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、硯（石製）、石製品がある。京都X期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（82-1~12）は小型皿で、口径6.8~7.4cm、高さ1.5cm前後ある。9~12は掘形出土で、口径がやや大きい。皿S（82-13~45）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できるが、中型皿と大型皿の境界は明確でない。13~21は小型皿で、口径8.0~9.1cm、高さ2cm前後ある。22~32は中型皿で、口径10.0~12.1cm、高さ2.2cm前後ある。33~45は大型皿で、口径13.7~16.6cm、高さ2.5cm前後ある。中型皿、大型皿はすべて底部内面に圏線がめぐり、また横ナデ調整の終了する点も明瞭である。

瓦器には鍋、羽釜、火舎がある。鍋（82-46~48）は、46が受部をもたない鍋で、口径19.8cmある。体部は外傾する。土壙B1035（77-24）、集石H555（78-25）出土例より浅く、内面もハケメ調整しない点が異なる。47、48は受部をもつ一般的な鍋であるが、口径は復元できない。受部の形状は、47より48に退化傾向がみられる。羽釜（82-49、50）は、49が口径20cm、高さ11cm、50が口径26cm、高さ14.7cmある。両方とも作りは粗雑で、鏝は短く、断面3角形を呈する。鏝の貼付けナデが不十分なため、粘土継ぎ目が見える。火舎（82-51）は内湾する体部をもつもので、口径42.7cm、高さ12.9cmある。外面はヘラミガキ調整であるが、ヘラの単位が観察できるほど雑なミガキとなる。上半に二条の突線とスタンプ文を配置する。内面は横ナデ調整であるが、中位に指の強い押圧痕がある。この押圧痕は、粘土を外側に押しつけた際についたものとみられ、型起こしで製作されたことを想起させる。

焼締陶器には信楽壺、信楽播鉢、備前播鉢、備前甕、皿がある。信楽壺（82-52）は口縁部の破片で口径11.2cmある。信楽播鉢（82-53）は口径28cmある。片口部は残存するが、内面の

摺目はみられない。備前播鉢（82-54）、備前甕（82-55）は口縁部の破片である。皿（82-56）は口径9.4cm、高さ2.5cmあり、底は糸切りによる平高台である。外面には縦線が3本、横線が2本刻まれる。窯印であろう。備前産とみられるが、検討が必要である。

輸入陶磁器には白磁皿、白磁椀、青磁椀がある。白磁皿（82-57、58）のうち、58は口径14.8cmあり、器壁は薄い。内面には不鮮明ながら陽花が認められる。白磁椀（82-59）は口径10.9cmある。3点とも華南産である。龍泉窯系の青磁椀（82-60~62）のうち、60、61は口径13.5cm前後あり、60の外面には雷文が施される。

土壌E584（図版83） 3箱と4袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石、滑石製温石、滑石製石釜、壁土がある。京都X期古に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N（83-1、2）は小型皿で、口径6.5~7.3cm、高さ1.8cmある。小型化した、皿Nの最終形態である。皿S（83-3~8）は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。3、4は小型皿で、口径8.2~8.6cm、高さ1.6cm前後ある。5、6は中型皿で、口径10.1~11.2cm、高さ2cm前後ある。7、8は大型皿で、口径13.1~14.0cm、高さ2.2cm前後ある。大型皿の底部内面には圏線がめぐる。

瓦器には壺、羽釜、鉢、風炉、火舎がある。壺（83-9）は球形の体部をもつ。外面はナデとオサエ、内面は板状の工具を壁面に沿ってならず。羽釜（83-10~13）は4点図示した。10~12は口径17~19cmでほぼ同じ大きさをもつ。13はそれより大きく、口径25cmある。いずれも調整は粗雑で、鐳の貼付けも不十分である。12は鐳が剥落している。鉢（83-14）は筒状の体部をもち、外面は丁寧にヘラミガキする。底には短い足を貼付ける。足は三方とみられる。風炉（83-15）は内湾する体部をもつ。口縁下に二条の突線をめぐらせ、突線間には菱形の文様を彫り込む。体部には大きな円窓が穿たれる。火舎（83-16）は底部径25.8cmあり、三方に脚を配置する。溝E455下層出土例（80-42）より小型化している。

焼締陶器には備前播鉢（83-17）がある。口径25cmあり、端部は上方に拡張する。内面の摺目は不明である。施釉陶器には美濃・瀬戸灰釉壺（83-18）がある。頸部には把手と輪を組み合わせた装飾が付く。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀、青磁盤がある。青磁椀（83-19）は底部径4.8cmある。青磁盤（83-20）は口径24.6cmあり、口縁部は内湾し、内面には凹線を連続させた花卉文がめぐる。溝E455西肩出土例（81-15）より凹線の間隔が狭い。

なお、この遺構からは古い時期の遺物も多く出土している。瓦器には椀、盤、鍋がある。椀（83-21）は口径13.2cm、高さ4.6cmあり、13世紀に属する。盤（83-22）、鍋（83-23）は小片のため口径は復元できない。24は受部が内湾する鍋で、口径23.4cmある。14世紀に属する。須恵器鉢（83-25、26）は端部が3角化したもので、13~14世紀に属する。常滑甕（83-27）は口縁が上下に拡張する。14世紀に属する。天目椀（83-28）は口径11.4cm、高さ6cmある。高台はケズリ出しで成形される。瀬戸・美濃産である。

土壌B1047（図版83、図35） 2箱と1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶

第1節 土器類

器、輸入陶磁器がある。京都 X 期古に属する。

土師器皿 Sh (83-29) は口径 6.6cm、高さ 2.0cm あり、やや古い形態をもつ。

瓦器鍋 (83-30) は口径 27cm ある大型の器形で、下半は不明であるが、鍋としておく。内外面は横ナデで調整される。

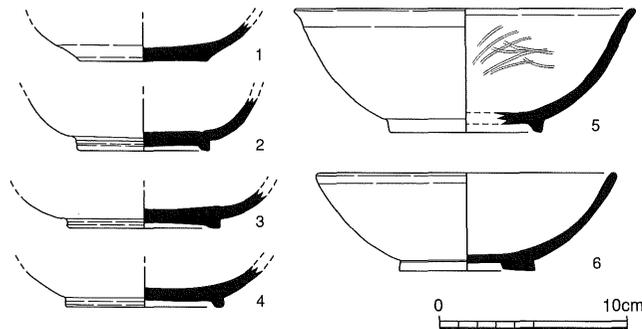


図35 土壙 B1047 出土土器実測図

焼締陶器には備前播鉢、信楽播鉢がある。備前播鉢 (83-31) は口径 26cm あり、口縁部は大きく上方に拡張する。信楽播鉢 (83-32) は口径 30cm あり。両方とも口縁部のみで、内面の摺目などは不明である。

この遺構も平安時代の遺物が混入状態で出土しており、良好な個体を図35で掲載した。ロク口成形による土師器碗 (1)、灰釉陶器碗 (2~4)、緑釉陶器碗 (5)、白磁碗 (6) がある。2、3、5 は山城産、4 は東海産、6 は華北産とみられる。

土壙 B996 (図版84・165) 4箱と3袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦がある。京都 X 期古に属する。

土師器のみ図示する。土師器皿には皿 N、皿 Sh、皿 S がある。皿 N (84-1~4) は 1 がやや小さく、口径 6.8cm、高さ 1.6cm、2~4 は口径 8.7~9.4cm、高さ 2cm 前後ある。皿 Sh (84-5~12) は口径 7.0~7.5cm、高さ 1.7cm 前後ある。皿 S (84-13~41) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できるが、中型皿と大型皿の境界は明確でない。13~20 は小型皿で、口径 8.4~9.0cm、高さ 2cm 前後ある。21~29 は中型皿で、口径 10.0~12.0cm、高さ 2.3cm 前後ある。30~41 は大型皿で、口径 13.8~16.4cm、高さ 2.5cm 前後ある。中型皿、大型皿の底部内面には圈線がめぐる。以上の土師器皿は保存状態が良好で、調整手法もよく観察できる。

土壙 G3304 (図版84) 7袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都 X 期古に属する。

土師器皿には皿 N、皿 Sh、皿 S がある。皿 N (84-42、43) は小型皿で、口径 7.4~9.5cm、高さ 2cm 前後ある。43 は京都市内では出土するのが希な皿である。皿 Sh (84-44、45) は口径 6.8~7.0cm、高さ 1.5cm 前後ある。45 は特に浅い。皿 S (84-46~53) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。46、47 は小型皿で、口径 9.0cm、高さ 1.8cm 前後ある。48、49 は中型皿で、口径 10.0cm、高さ 2cm 前後ある。50~53 は大型皿で、口径 13.6~18.0cm まで、高さ 2.5cm 前後ある。52、53 は口径が大きい割りに体部が浅い。中型皿以上の底部内面には圈線がめぐる。

焼締陶器には信楽播鉢 (84-54) がある。口径 31.4cm あり、口縁端部はやや外反する。内面の摺目は一単位 4 本以上ある。

池 D529B (図版84) 6箱と33袋出土している。土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。京

都 X 期古に属する。

土師器皿には皿 N、皿 S がある。皿 N (84-55) は小型皿で、口径 8.4cm、高さ 2 cm である。皿 S (84-56、57) では、56 は小型皿で、口径 8.6cm、高さ 1.8cm である。57 は大型皿で、口径 14.8cm、高さ 2.5cm である。

瓦器火舎 (84-58) は口径 35cm あり、内湾する体部をもつ。外面は下半を縦に、上半を横にヘラミガキ調整し、2 個 1 組の菊花文を押印する。内面は横ナデ調整である。

輸入陶磁器の青磁椀 (84-59、60) では、59 は蓮弁を配する椀で、口径 13.6cm、高さ 7.0cm である。60 は端部が外反し、外面をヘラケズリで成形する。口径 15.6cm、高さ 6.5cm である。ともに龍泉窯系。

土壌 F 2588 (図版 84) 3 袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 X 期古に属する。

土師器皿 S (84-61~64) では、61、62 は小型皿で、口径 9.0cm、高さ 1.8cm 前後である。63、64 は大型皿で、口径 15.4~16.0cm、高さ 2.5cm 前後である。64 の底部内面には圈線がめぐる。

焼締陶器では信楽播鉢 (84-65) がある。口径 32cm あり、内面の摺目は 1 本ずつ引かれる。

土壌 G 3226 (図版 85) 2 袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 X 期古に属する。

土師器皿には皿 Sh、皿 S がある。皿 Sh (85-1、2) は口径 7.0cm、高さ 1.6cm 前後である。皿 S (85-3~17) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できるが、中型皿と大型皿の区別は明確でない。3~6 は小型皿で、口径 8.6~9.0cm、高さ 2 cm 前後である。7、8 は中型皿で、口径 12.0cm、高さ 2.4cm 前後である。9~17 は大型皿で、口径 13.0~19.0cm まで、高さ 2.5~3.0cm までである。中型皿以上の底部内面には圈線がめぐる。

焼締陶器では備前播鉢 (85-18) がある。口径 39cm あり、口縁部をやや内側に拡張する。内面の摺目は一単位 10 本である。

土壌 B 1036 (図版 85) 1 箱出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 X 期古に属する。

土師器皿 S (85-19~26) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。19~21 は小型皿で口径 8.4~9.5cm、22 は中型皿で口径 10.4cm、23~26 は大型皿で口径 12.1~15.8cm までである。

瓦器火舎 (85-27) は口径 49cm である。体部は外上方に延びるが、装飾はもたない。外面はヘラミガキ調整、内面は横ナデ調整である。底に短い足が 3 本付くとみられる。集石 H 555 (78-26)、溝 E 455 下層 (80-41) に出土例がある。

施釉陶器には美濃・瀬戸灰釉椀 (85-28) がある。口径 16.6cm あり、内面と外面上半には灰オリーブ色の釉がかかる。

輸入陶磁器の青磁椀 (85-29) は口径 15.0cm、高さ 7.2cm あり高い高台をもつ。内外面に厚く釉がかかるが、文様はない。龍泉窯系。

堀 G 965 (図版 85) 3 箱と 27 袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶

第1節 土器類

器、輸入陶磁器、瓦、砥石がある。京都 X期古～中に属する。

土師器皿には皿Sh、皿Sがある。皿Sh (85-30~34) は口径6.8~7.2cm、高さ1.4cm前後ある。皿S (85-35~39) は小型皿のみで、口径8.4~9.0cm、高さ1.8cm前後ある。

瓦器火舎 (85-40) は箱形を呈する体部の四隅に脚を付けたもので、堀 G2630 (79-38)、土壙 G2214 (81-17) に出土例がある。短辺側の口径は38.6cmで復元した。体部の高さ10.9cm、脚部を含む高さ15.4cmある。内外面の調整や装飾は先の2例と共通する。

土壙 G2649 (図版85) 1箱と1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都 X期古～中に属する。

土師器皿S (85-41~48) は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。41~43は小型皿で、口径8.6~9.0cm、高さ2cm前後ある。44、45は中型皿で、口径10.0~11.8cm、高さ2.3cmある。46~48は大型皿で、口径14.4~16.8cm、高さ2.2cm前後ある。中型皿以上の底部内面には圏線がめぐる。

井戸 F1901 (図版86) 3箱と1袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。京都 X期古に属する。

土師器皿S (86-1) は中型皿で、口径11.6cm、高さ2.3cmある。底部内面に圏線がめぐる。

瓦器には壺、鍋、羽釜、火舎がある。壺 (86-2) は口径9.8cmあり、扁平な体部をもつ。二次焼成で炭素が抜け、白色土器のような器表を呈する。外面はナデとオサエ、内面には指の押圧痕がある。鍋 (86-3、4) では、3は外傾する体部をもち、受部は折り曲げただけの形状となる。4は受部が外方に延びるもので、3よりも受部の形態を留める。羽釜 (86-5、6) は口縁部の破片である。火舎 (86-7~12) は口縁部が4点、底部が2点ある。7~9は内湾する体部をもち、8、9では二条の突帯間に雷文や菱形文を配置する。10は箱形を呈する火舎の口縁付近であるが、二条の突帯間に文様はみられない。11は小型で箱形を呈し、四隅に足がつく。鐙がめぐることから、蓋がのせられていたか、あるいは置台などの可能性がある。12は体部が球形を呈するものの底部で、底部径26cm前後ある。溝 E455下層 (80-42)、土壙 E584 (83-16) に出土例がある。

焼締陶器には信楽播鉢、信楽甕がある。信楽播鉢 (86-13) は口径26.2cmある。信楽甕 (86-14) は常滑甕の口縁部を模倣した形態をもつ。

施釉陶器には美濃・瀬戸の花瓶、把手付鍋がある。花瓶 (86-15) は底部を糸切りで成形し、下ぶくれの体部をもつ。外面には鉄釉がかかる。土壙 G2125 (70-39)、土壙 G2207 (70-40) 出土例より大きい。把手付鍋 (86-16) は把手の部分が中位より欠失する。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀がある。青磁椀 (86-17) は底部径5.2cmあり、外面には蓮弁がめぐる。

井戸 F1777 (図版86) 3箱と1袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒平瓦、埴がある。京都 X期古～中に属する。

土師器皿には皿N、皿Sh、皿Sがある。皿N (86-18) は小型皿で、口径9.3cm、高さ1.5cm

ある。皿Sh (86-19、24) は口径7.0~7.7cm、高さ1.7cm前後ある。皿S (86-20~23、25) には小型皿、大型皿がある。20、21は小型皿で、口径8.6~8.8cmある。22、23、25は大型皿で、口径13.2~15.8cmある。24、25は掘形からの出土である。

瓦器には鍋、羽釜、火舎がある。鍋 (86-26) は受部の破片であるが、本来の形状を失っている。羽釜 (86-27) は鏝から口縁にかけての破片である。火舎 (86-28、29) では、29は内湾する体部をもつが、外面に装飾はない。28は口縁部の破片で、外面には突線と木葉文が配される。

焼締陶器には備前播鉢 (86-30) がある。口縁部の破片で、内面に一単位6本の摺目がある。

施釉陶器には美濃・瀬戸の天目椀、灰釉盤がある。天目椀 (86-31) は内外面に天目釉がかかる。外面はヘラケズリで成形し、高台はケズリ出す。灰釉盤 (86-32) は底部径11.6cmあり、内外面には灰白色の釉がかかる。底部内面には高台が目跡として残る。

輸入陶磁器の青磁椀 (86-33) は底部内面に文様を彫り込む。龍泉窯系。

井戸F1709 (図版86) 1箱と4袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、緑釉瓦、壁土がある。京都X期古~中に属する。

土師器皿には皿N、皿Sがある。皿N (86-34) は小型皿で、口径10.6cm、高さ1.8cmある。皿S (86-35~37) は大型皿で、口径12.2~14.6cm、高さ2.3cm前後ある。

瓦器には花瓶、羽釜がある。花瓶 (86-38) は大きく開く口縁部をもつ。内外面はヘラミガキで丁寧に調整し、外面には雷文が押印される。類例が乏しく、体部の形状は不明である。羽釜 (86-39) は口径19.8cm、高さ10.5cmあり、調整不十分のため、粘土紐やユビオサエの痕跡が明瞭に見える。

焼締陶器には信楽播鉢、備前播鉢がある。信楽播鉢 (86-40) は口径30.6cmあり、片口の部分も含まれる。内面は擦り込まれて平滑になっている。摺目はみられない。備前播鉢 (86-41) は口縁部の破片である。

輸入陶磁器の青磁盤 (86-42) は、内面に凹線を放射状にめぐらす。底部はケズリ込んで高台を浮き立たせる。上部は溝E455西肩 (81-15)、土壙E584 (83-20) 出土例のような口縁部がつくとみられる。龍泉窯系。

9 戦国期の末期

土壙G1984 (図版87) 5袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都X期中に属する。

土師器皿3点を図示する。皿S (87-1~3) は大型皿で、口径12.2~14.4cm、高さ2cm前後ある。2、3の底部内面には圏線がめぐる。

土壙D512 (図版87) 1箱と1袋出土している。土師器がある。京都X期中に属する。

土師器皿3点を図示する。皿S (87-4~6) は中型皿で、口径9.0~10.0cm、高さ2cm前後ある。6の底部内面には圏線がめぐる。

土壙G2413 (図版87) 3袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器がある。京都X期中

第1節 土器類

に属する。

土師器皿3点を図示する。皿S(87-7~9)には小型皿、大型皿がある。7は小型皿で、口径8.4cm、高さ1.5cm、8、9は大型皿で、口径11.6~15.0cm、高さ2cm前後ある。9の底部内面には圏線がめぐる。

土壌J142(図版87) 1袋出土している。土師器がある。京都X期中に属する。

土師器皿2点を図示する。皿S(87-10、11)は大型皿で、口径14.4~14.8cm、高さ2.1cm前後ある。ともに底部内面には圏線がめぐる。

土壌J151(図版87) 1袋出土している。土師器、瓦器、施釉陶器がある。京都X期中に属する。

土師器皿S(87-12、13)には小型皿、大型皿がある。12は小型皿で、口径8.5cm、高さ2cm、13は大型皿で、口径13.2cm、高さ2.3cmある。13の底部内面には圏線がめぐる。

瓦器火舎(87-14)は内湾する体部をもつが、口径21.2cmと小型である。脚は三方に付くが、大型品の脚を貼付けるため、体部に比べ脚部が特に大きくみえる。内外面は横ナデ調整である。

井戸E665(図版87・166) 3袋出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都X期中に属する。

土師器皿S(87-15)は中型皿で、口径10.7cm、高さ1.5cmある。

焼締陶器の信楽壺(87-16)は完形で井戸底から出土した。口径13.0cm、高さ20.8cmあり、内外面は横ナデ調整を主とし、一部ヘラケズリする。底部には板の圧痕が付着する。肩部に自然釉がかかる。

輸入陶磁器の青磁椀(87-17)は口径14.0cmあり、外面に雷文と蓮弁の崩れた文様を配置する。龍泉窯系。

土壌G2270(図版87) 3袋出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、石製品がある。京都X期中に属する。

土師器皿3点を図示する。皿S(87-18~20)には小型皿、大型皿がある。18は小型皿で、口径8.8cm、高さ1.8cmある。19、20は大型皿で、口径14.5cm、高さ2.5cm前後ある。

土壌C1298(図版87) 2箱と2袋出土している。土師器、瓦器がある。京都X期新に属する。

土師器皿S(87-22、23)は、中型皿で、口径9.0~9.6cm、高さ1.9cm前後ある。

瓦器火舎(87-24)は内湾する体部をもつ。口縁部の一部は板の押圧によって歪み、格子目の文様が転写される。器壁は薄く、色調も明るい。底部には短い足が3箇所配置される。口径31.6cm、足を含めた高さは11.8cmある。21の土師器皿は江戸時代の混入品である。

平安時代遺物(各遺構出土)(図版87・166) 後世の遺構から出土した平安時代の遺物の中で、特に残存状態の良いものを以下に示す。

須恵器鉢(87-25、図版166、図36) 口径20.0cmある。体部から口縁部にかけての破片で、口縁端部は肥厚気味に収める。外面に墨書がある。墨書は縦に2列あり、向かって右列は「天徳□〔三か〕」、左列「御精□〔進か〕」と読める⁴⁾。天徳3年は西暦959年にあたる。「御精進」は

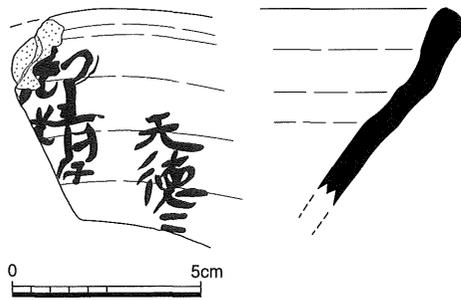


図36 土壙E584出土土器実測図

精進潔斎することで、儀式などの場面に望む際に身を浄めることである。儀式用の容器として使用されたものか、あるいはそうした場面に用いられるための内容を墨書したものと思われる。土壙E584は京都X期古、16世紀前半に属する(図版83)。遺物中には平安時代の遺物も散見されたが、年代の合致する遺物を抽出するのは困難であった。なお、同様の須恵器鉢は、土壙B1013(53-29)、井戸F2510掘形(56-31)などから出土している。口丹波篠産。

緑釉陶器椀(87-26、図版166) 口径17.7cm、高さ5.5cm、底部径7.5cmある。ケズリ出し高台。内面の全面に陰刻花文が絵画風に描かれる。底の花弁を中心に、体部には樹木や草本、口縁には鳥が配置される。鳥は、蝶あるいはトンボのように描かれる。内面全面を文様で埋めつくす個体は希なため図示した。山城産。F区北壁瓦溜り出土。

緑釉陶器椀(87-27) 口径13.8cm、高さ4.2cm、底部径6.3cmある。ケズリ出し高台。全面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。山城産。土壙F2315出土。遺構からは13世紀と15世紀の遺物が出土している。

緑釉陶器椀(87-28) 口径20.0cm、高さ7.0cm、底部径9.6cmある。貼付高台。全面を横ナデ調整する。美濃産であろう。土壙F1603出土。遺構は江戸時代初期に属する。

緑釉陶器皿(87-29) 底部径8.2cmある。貼付高台。底部内面に陰刻花文を施す。山城産。土壙F2148出土。遺構は桃山時代に属する。

緑釉陶器皿(87-30、図版166) 口径21.0cmある。いわゆる「段皿」で、上段部に陰刻花文を施す。猿投産。土壙F2624(図版50に掲載した土壙F2631と同遺構)出土。

緑釉陶器火舎(87-31) 口径21.6cmある。筒形の体部から口縁部は屈曲し立ち上がる。内外面は横ナデ調整、釉は肩から下に濃くかかる。体部に長方形の透かしを穿つ。透かしの上部に沈線がめぐる。山城産とみられる。土壙B1035出土。遺構は戦国期前半代に属する(図版77)。

白色土器椀(87-32) 口径14.7cm、高さ4.8cm、底部径6.8cmある。ケズリ出し高台。内外面は丁寧にヘラミガキ調整される。土壙F1238出土。遺物は9~10世紀と16世紀のものが混在する。

白色土器皿(87-33) 口径17.5cm、高さ5.1cm、底部径8.6cmある。貼付高台は高さ2cmある。内外面は横ナデ調整。土壙F2236出土。この遺構は井戸F2510(図版56・57で掲載)の木枠の上部に位置する。

土壙B1000(図版88・89) 29箱と81袋出土している。土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、硯(陶製)、砥石、硯(石製)、石帯、吹子羽口、壁土、銭貨がある。桃山時代に属するため、遺構・遺物の概要は第2分冊で報告しているが、平安時代から室町時代の遺物も大量に

第1節 土器類

含むため、図版88では土師器、瓦器を、図版89では須恵器を主とした陶磁器類を紹介する。

土師器には皿、椀、甕、羽釜、鍋とロクロ成形による土師器がある。土師器皿（88-1~25）では、1、2は皿N、3は皿Aで、京都IV期に属する。4、5は皿Nで、京都V期に属する。6、7は特大皿としたもので、井戸A309（66-48）や井戸L31（67-43~46）、土壙L28（69-10~12）に出土例があり、京都VI期に属する。8、9は皿N、10は皿Ac、11~13は皿Nの小型皿で、京都VI期~VII期に属する。14~19は皿N、20~24は白色系の皿Sで、京都VII期~VIII期に属する。25は皿Sで、京都X期に属する。26はロクロ土師器の椀である。9~10世紀に属する。27は斜めに立ち上がる口縁部で、15世紀に属する。甕（88-28）は外面を板で成形し、口縁端部は上方に収めるもので、10世紀に属する。羽釜（88-29）は口縁部が内傾し、体部に鐺をもつ。13~14世紀の大和産とみられる。鍋（88-30）は浅い体部をもち、皿状を呈する。16世紀に属する。

瓦器には椀、鉢、壺、鍋、小型羽釜、羽釜、火舎がある。椀（88-31）は内面にヘラミガキを施す。壺（88-32）は口径6.3cmあり、肩部にラセンの暗文がめぐる。溝E584（83-9）出土例より頸がすぼまる。鍋（88-33~35）では、33は椀状を呈するもので、土壙B1035（77-24）、集石H555（78-25）でも出土している。34、35は口径25cm前後あり、受け部は外方に延びる。15世紀に属する。ミニチュア羽釜（88-36）は口径7.3cmあり、鐺は口縁のすぐ下につく。体部に足がつくかは不明。溝E455下層出土例（80-34）に類似する。羽釜（88-37）は口径21.8cmあり、外面はユビオサエ、内面はハケメで調整する。火舎（88-38、39）のうち、38は口径42cm、高さ13cmあり、内湾する体部をもち、外面に2個1組の菊花文を配置する。井戸B918（71-27）、池D529B（84-58）出土例に類似する。39はそれより大型で、口径55cmある。口縁は水平に延び、上面には二条の突帯とその間に花卉の文様が押印される。

須恵器には杯、皿、鉢、壺、甕がある。杯（89-1）は高台がつく杯で、口径12.2cm、高さ4.2cmある。皿（89-2）は口径15.4cm、高さ2.4cmあり、緑釉陶器皿の器形を呈する。椀（89-3、4）は口径16cm前後あり、底部は糸切りのままである。鉢（89-5）は口径18.2cmあり、口径25cm前後ある鉢の小型品である。口丹波篠産。壺（89-6）は短い口縁がつく。口縁は口径2.2~2.6cmで楕円形を呈する。完形品。甕（89-7~9）のうち、7は短い口縁部をもつ。口径15.6cmあり、石敷G3578出土例（44-2）に類似する。8は口径22.2cm、体部最大径35.5cm、高さ49.1cmあり、全形が復元できた。内外面はタタキで成形する。工具の痕跡もよく観察できる。内面は底部付近に平行タタキ、上半には同心円の当て具痕跡がみられる。最初に底部をタタキで成形した後、上半を積み上げたことがわかる。9は甕体部の破片で、外面には木葉文がタタキ板に彫られている。1、2、5~9は9世紀、3、4は10世紀に属する。

須恵器甕（89-10、11）は須恵器系統の窯の製品である。10は口径22cm、11は口径25cmあり、形態や成形は類似する。外面は平行タタキで成形するが、内面には当て具の痕跡は浮き出ない。

灰釉陶器椀（89-12）は口径18.9cm、高さ5.9cmある。貼付高台。10世紀に属する。東海産。

緑釉陶器皿（89-13）は口径14.8cm、高さ2.5cmある。9世紀に属し、2の須恵器皿と同じ器形である。山城産。

施釉陶器には美濃・瀬戸灰釉鉢（89-14）がある。口径20.0cmあり、口縁部が大きく開く。土壙B1035（77-34）、溝E455下層（80-44）に出土例がある。15~16世紀のものである。

輸入陶磁器には白磁椀、白磁皿、青磁盤、青磁椀、褐釉壺がある。白磁椀（89-15）は口径16.0cm、高さ5.9cmあり、12世紀のものと思われる。白磁皿（89-16）は口径10.2cm、高さ2.8cmあり、内面底にトチンがある。青磁盤（89-17）は底部径7.7cmある。青磁椀（89-18~20）では、18は外面に雷文と蓮弁を配置する。同じものは溝E455下層（80-47、49）、井戸H328（82-60）などでも出土している。19は口径15.4cm、20は口径15.4cm、高さ7.4cmあり、文様はない。これらは15~16世紀に属する。褐釉壺（89-21）は口径10.3cmある口縁部で、端部は外側に肥厚する。褐釉壺は井戸B1061（59-45）、池G2940（P区）（62-48）、土壙G2126（70-21）で出土しており、12~14世紀に属する。白磁、褐釉は華南産、青磁は龍泉窯系である。

以下に掲載する遺物は、単独で出土したもの、混入品でありながら保存が良好なもの、大きさの関係で図版に組み込めなかったもの、などである

土壙M28（図37） 須恵器鉢が1点ある。口径25.3cm、高さ12.8cmあり、保存は良好である。類似する製品としては、流路F2550（45-35、47-23）出土例があり、9世紀後葉とみられる。口丹波篠産。ただし土壙M28からは13世紀の遺物も出土している。

土壙B1015（図38） 白磁合子蓋が1点ある。口径9.8cmあり、天井部には草花の陽刻文様が描かれる。土壙B1015の出土遺物は15世紀に属する。

土壙E531（図39） 体部が直立する瓦器の香炉で、口径10.0cmある。外面には二条の沈線がめぐり、その間に渦巻き文様が押印される。16世紀に属する。2次的な焼成をうけ、赤変している。

土壙C1191（図40） 瓦器火舎が1個ある。口径29.6cmあり、直立する短い口縁部は上面を平坦にして収める。口縁部外面には花卉文様が押印される。体部は球形を呈し、底部には、溝E455下層（80-42）、土壙E584

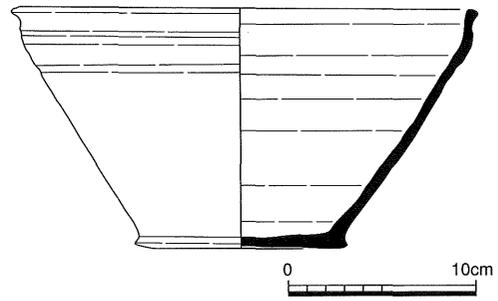


図37 土壙M28出土土器実測図

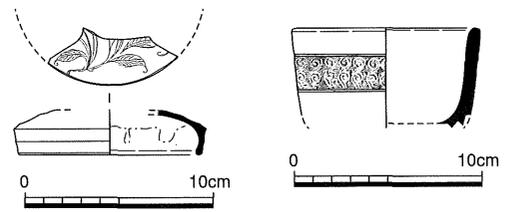


図38 土壙B1015出土土器実測図

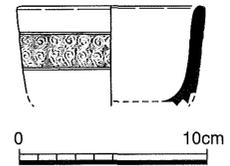


図39 土壙E531出土土器実測図

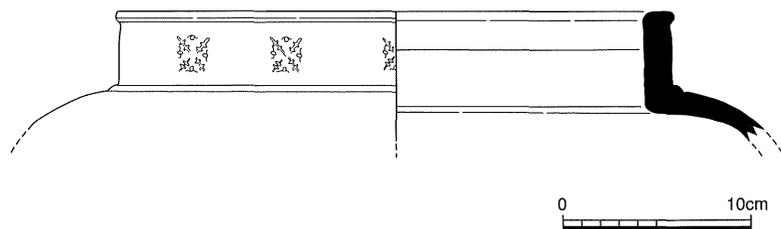


図40 土壙C1191出土土器実測図

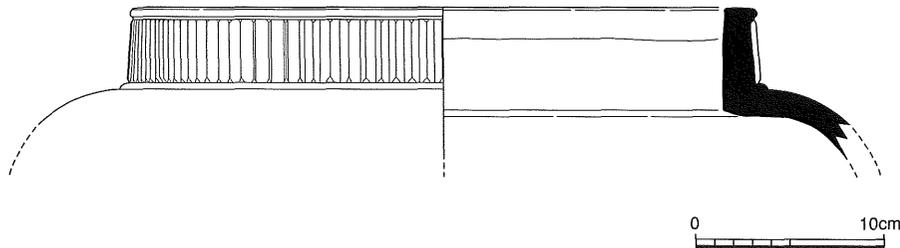


図41 井戸G1146出土土器実測図

(83-16)、土壙J151(87-14)出土例のような頑丈な脚が3本つく。15~16世紀に属する。

井戸G1146(図41) 土壙C1191出土例と同じ器形の瓦器火舎である。口径33.3cmある。口縁部外面に蓮子の押型文が配置され、山形が浮き出した状態となる。体部外面はヘラミガキで平滑に仕上げる。

溝R1119(図42) 瓦器火舎(1)は口径21.4cmあり、体部は直立する。外面はヘラミガキ調整、内面は横ナデ調整である。信楽陶器播鉢(2)は底部で、3本以上の摺目がみえる。以上2点は16世紀に属し、遺構の埋没時期を示す。下層から11世紀に属する土師器皿A(3)、皿N(4)、須恵器甕の口縁(5)が出土している。これらは京都IV期中に属する。土師器高杯(6)はこれらより古い京都II期新

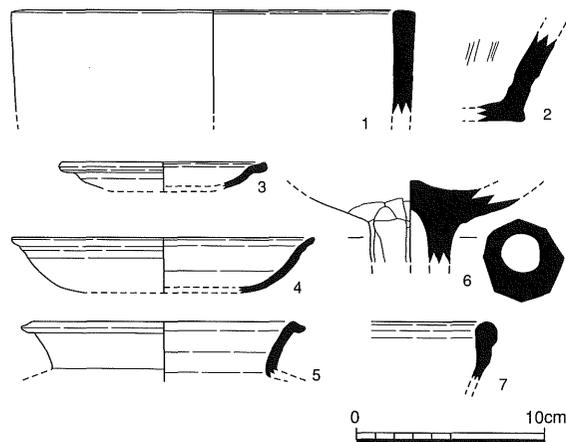


図42 溝R1119出土土器実測図

~III期に属する。須恵器鉢(7)は口丹波篠産である。溝R1119は土御門大路の南側溝に該当する遺構である。

第2節 瓦類

A地区からZ地区まで含めて、出土した平安時代以前から室町時代の軒瓦の総数は304点である。内訳は軒丸瓦が136点、軒平瓦が168点である。時期別にみると平安時代以前2点、平安時代242点、鎌倉時代17点、室町時代30点、時期不明が13点である。軒瓦以外では緑釉熨斗瓦14点、緑釉丸瓦57点がある。また博5点と鴟尾2点、鬼瓦1点が出土している。なお、緑釉軒瓦を含む軒瓦については別掲の観察表1を、その他については観察表2を参照されたい。

1 軒丸瓦(観察表1)

(1) 平安時代前期(図版90・167)

全地区から出土した平安時代前期の軒丸瓦は11点であった。

1は難波宮式の重圈文軒丸瓦で、やや小振りの特徴をもつ6011A型式とみられる再利用され

た軒瓦である。文様は中央が剥離しているが、三重の圏線をもつ。2は栗栖野瓦窯産の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。3・4は芝本瓦窯産の単弁十五葉蓮華文軒丸瓦である。3は4に比べ蓮子がやや小粒である。5は西賀茂瓦窯産の単弁十六葉蓮華文軒瓦である。外区中央上に「近」銘を配す。6は西賀茂瓦窯産の単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。7は緑釉複弁蓮華文軒丸瓦である。8は東寺境内瓦窯産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房に「大伴」銘を配す。9は単弁十五葉蓮華文軒丸瓦である。

(2) 平安時代中期 (図版91・167・168)

全地区から出土した平安時代中期の軒丸瓦は30点であった。

1・2は大宮北山ノ前瓦窯産の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。周縁部に唐草文が左方向にめぐる特徴をもつ。中房内の蓮子は、1は小粒であるが、2はやや大粒である。3は森ヶ東瓦窯産の複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。4は森ヶ東瓦窯産の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。5は瓦当部成形が一本造り技法による単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部は横型の成形台上に粘土魂を積み上げて丸瓦部と一体成形し、横から范型を打ち込んで文様面を作る。瓦当裏面には丸瓦部から連続する布目が残っており、丸瓦部と瓦当裏面の境界や丸瓦部側面から瓦当裏面下端にかけては、ヘラケズリで整える。6～14もこの一本造り技法による軒丸瓦である。6・8は栗栖野瓦窯産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。6はやや盛り上がった中房に「栗」銘を配す。9は山城産の特異な表現で示された単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。10は瓦当面が楕円形を呈する小型の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。11・13・14は小型の複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。11と13は文様がほぼ類似するが、12は5弁であり文様の状態から范がすり減っていたと思われる。14は複弁の境界が明確である。9～14はいずれも栗栖野瓦窯の製品とみられる。

(3) 平安時代後期 (図版92・168～170)

全地区から出土した平安時代後期の軒丸瓦は61点であった。

1～9は栗栖野瓦窯産の軒丸瓦である。1・2・7・8は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。3・5・6は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。3は同時期の池G2940から出土した。6もK区の同時期の整地層K85から出土している。4は複弁五葉蓮華文軒丸瓦で、同時期の井戸B1061から出土している。9は単弁八葉軒丸瓦で、K区の整地層K85から出土した。10・11は大和産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。

12は播磨産の単弁十五葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面に灰白色の自然釉が被る。13～18は栗栖野瓦窯産の軒丸瓦である。14・15・17は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。14と15は弁間に珠文を配し、圏線が二重にめぐる同文の軒丸瓦である。15は同時期の池G2940(P区)から出土している。16は幅広い花卉の中央に、細い稜線が入る複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。17はいわゆる「のぞき花卉」状で、蓮弁は互いに接している。18は単弁十三葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面は楕円形である。19は讃岐産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房周囲に雄蕊帯がめぐり、弁は短く幅が広い。K区の整地層K85から出土している。20は播磨産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房周囲に雄蕊帯がめぐり、21は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。単弁の子葉は凹線で、外

区に二重の圈線がめぐる。

(4) 平安時代後期～鎌倉時代 (図版93・170・171)

1～15は平安時代後期の軒丸瓦である。産地が明確なものは1の河内産の複弁六葉蓮華文軒丸瓦で、中房に右巻き三巴文を配する特徴をもつ。近似した文様が河内向山瓦窯跡で見られる。4・10・12・14・15は栗栖野瓦窯産の軒丸瓦である。4は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で鎌倉時代前半の土壙G3373から出土した。10・14は右巻きの三巴文である。10は外区に菱形の珠文を、14はやや大粒の珠文を密に配する。12は左巻き、15は右巻きの三巴文で、15は珠文帯をもち、やや大粒の珠文を配する。5は播磨産の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。6は丹波産の単弁蓮華文軒丸瓦である。間弁が三角形で、外縁の周囲に珠文を配す特徴をもつ。11は讃岐産とみられる左巻きの三巴文軒丸瓦である。7～9は文様が簡略化された蓮華文軒丸瓦である。

鎌倉時代の軒丸瓦は全調査区で8点出土した。

13・20・21は三巴文軒丸瓦である。13・20は大和産とみられる右巻きの三巴文である。全体の瓦当部成形はヘラケズリにより行なわれている。21は右巻きの三巴文である。16～19・22は小型の軒丸瓦である。16・17は播磨産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。いずれも中房は突出する。17の中房には「×」を配す。18・19は複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。いずれも中房は突出し、18は「ㄣ」、19は「ㄣ」を配す。22は栗栖野瓦窯産の複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房は突出しているが蓮子はない。

(5) 鎌倉時代～室町・戦国期 (図版94・171・172)

1～14はいずれも巴文軒丸瓦である。1～3は鎌倉時代とみられる栗栖野瓦窯産の三巴文軒丸瓦である。巴文は右巻きで、頭・尾部は互いに接しない。瓦当部裏面はいずれもオサエとナデで調整している。3の瓦当部の中央近くには、縦に範傷がみられる。7は大和産とみられる右巻きの三巴文軒丸瓦である。鎌倉時代の地業G1937から出土した。4～6・8～14は室町時代の巴文軒丸瓦である。4は左巻きの三巴文軒丸瓦である。全体の瓦当部成形はヘラによって行なわれるが、瓦当部裏面・丸瓦部凹面には布目が残る。5～14はいずれも右巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦当部の成形はヘラにより行なわれ、瓦当部の裏面・丸瓦凹面はオサエとナデにより調整している。ただし9は丸瓦部凹面に布目痕が残る。また12の丸瓦部凹面は斜め方向のケズリで、調整している。出土遺構をみると、13は室町時代中頃の土壙B925から出土している。4・5・8・9・11・12は戦国期の遺構から出土している。なお15は道具瓦で、右巻きの三巴文獅子口である。瓦の裏側にも粘土を充填している。また中央部近くに穴を穿っている。戦国期の土壙E500から出土している。文様上の比較をみるため、ここに掲載した。

2 軒平瓦 (観察表1)

(1) 平安時代前期～中期 (図版95・172・173)

平安時代前期の軒平瓦は全調査区で16点出土した。

1・3～7・11はいずれも均整唐草文軒平瓦である。2は難波宮式の重圈文軒平瓦で、旧都搬入瓦とみられる。圈内に弧線を配する難波宮6574C型式と考えられる。1・3・4は芝本瓦

窯産の軒平瓦である。1・3は中心に「小」字形を配し、唐草文は両側に3反転する。5は「井」字形を左側第1主葉中に置く。他の出土例では中心飾りの中に「寺」を、右側第1主葉中に「大」を置き「大井寺」を示す。6は岸部瓦窯産の軒平瓦である。7は西賀茂瓦窯産の軒平瓦。11は上庄田瓦窯産の軒平瓦である。

平安時代中期の軒平瓦は全調査区で38点出土した。

8～10・12～20は均整唐草文軒平瓦である。9・10は栗栖野瓦窯産の軒平瓦である。同一文様で中心飾りは対向C字形、10は中央に「栗」銘を配す。13・15～18・20は池田瓦窯産の軒平瓦である。14は修理式瓦屋の製品である。中心に「修」の裏文字を配し、それを囲む変形の中心飾りがみられる軒平瓦である。

(2) 平安時代中期～後期 (図版96・173・174)

1～3・6～8は平安時代中期の丹波・王子瓦窯産の軒平瓦である。1～3は半截宝相華文の軒平瓦である。半截の宝相華を上下・左右に配し、中央に4個の蓮子を配す。圏線外側には珠文を3個ずつ配す。3は緑釉瓦であり、花卉の間、並びに顎の部分に釉が残存している。他に同文で緑釉瓦が5点出土している(第6章第2節の4)。また無釉の同文瓦の出土例は、土御門烏丸内裏跡・左京一条三坊九町・東寺境内などがある。なお1は平安時代後期の土壙C1233から出土している。3は1・2に比べ華文がやや小さい。6～8は均整唐草文の軒平瓦である。いずれも中心飾は背向C字形で、唐草文は両側に展開する。また瓦当部裏面に横方向の縄目タタキを施している。4は大和産の左から右へ偏行する宝相華唐草文である。出土例は興福寺、平等院などにみられ、外区に珠文を配するものもみられる。5は大和産の華唐草文軒平瓦である。中心に華文を配し、左右に細長い唐草が展開する。瓦当部凹面から平瓦部凹面にかけて朱痕がみられる。薬師寺に出土例がある。9は河上瓦窯産の均整唐草文軒平瓦である。10・18は森ヶ東瓦窯産の均整唐草文軒平瓦である。10は中央近くから右側縁部が残存するが、珠文は欠損している。18は中心から左右に三巴文状に文様が展開する。12・14・16は河上瓦窯産の軒平瓦である。複線状の唐草文が両側に展開する。

平安時代後期の軒平瓦は全調査区で86点出土している。

11は両側から唐草文が中心に向かって反転する、半折曲げ技法による軒平瓦である。13は大和産の均整唐草文軒平瓦である。中心飾は三葉を配する。両側に複線の唐草文が展開する。出土例は奈良市の薬師寺にみられる。15・17は小野瓦窯産の軒平瓦である。唐草文は両側から中心に展開する。中心の上下には紡錘形の小葉を配する。15の平瓦部凹面に「+」のヘラ記号がある。

(3) 平安時代後期 (図版97・174・175)

1～3は栗栖野瓦窯産の軒平瓦である。左から右に偏行する唐草文で、瓦当部成形は半折曲げ技法による。3の平瓦凸面には「V」のヘラ記号が印刻されている。いずれもK区の平安時代後期の整地層K85から出土している。4は河内・向山瓦窯産の軒平瓦である。醍醐寺の大智院出土のものと類似している。5・6・8は播磨産の均整唐草文軒平瓦である。いずれも瓦当

第2節 瓦類

部成形は包込み技法である。7は均整唐草文軒平瓦である。唐草は波状の単線で表現され、圏線は二重である。平瓦部凸面には格子目のタタキをナデで消した痕跡が残る。9はやや小型の均整唐草文軒平瓦である。瓦当部成形は半折曲げ技法である。10・12は栗栖野瓦窯産の均整唐草文軒平瓦である。いずれも半折曲げ技法による軒平瓦である。10は平安時代後期の池G2940(P区)から出土している。11・13~16は讃岐産の軒平瓦である。11は偏行唐草文軒平瓦である。瓦当部成形は平瓦部凸面に粘土を付加する。顎部から平瓦部凸面にかけて縄目タタキが施されている。13は中心に四葉からなる華文を配し、左右に二条の突帯で重廓文を表している。瓦当部・平瓦部の凹面は斜め方向の粗い縄目タタキを施す。平安後期の土壙G2788から出土している。14は三巴文を6個配する型式の軒平瓦である。巴文は右巻きが3個確認できる。平瓦部凸面は縦方向の縄目タタキを施す。

15・16は複線の唐草文が右から左へ展開する偏行唐草文である。唐草の分岐するあたりには線鋸齒文が配される。平瓦部凸面には粗い縄目タタキが施される。15はK区の整地層K85から出土した。

(4) 平安時代後期~室町時代(図版98・175・176)

1~8は平安時代後期の軒平瓦である。1~5は栗栖野産の剣頭文軒平瓦である。瓦当部成形は4が折曲げ技法によるが、他は半折曲げ技法による。5の平瓦部凹面には縦方向の縄目タタキを施す。6は播磨産の蓮弁文軒平瓦である。瓦当部成形は包込技法による。7・8は瓦当部成形が半折曲げ技法による軒平瓦である。いずれも山城産と思われる。

鎌倉時代の軒平瓦は全調査区で9点出土している。

9は大和産の「戒壇院凡天福元年五□□」銘の軒平瓦である。瓦当部を含む全体の成形はヘラケズリによる。天福元年は1233年で、鎌倉時代前期にあたる。10は大和産の「□仁寺」銘の軒平瓦である。おそらく「建仁寺」と考えられる。建仁寺の創建は建仁元年(1201)である。瓦当部を含む全体の成形はヘラケズリによる。11は大和産の「興□□」銘の軒平瓦である。寺名は「興聖寺」と考えられるが詳細は不明である。瓦当部成形は9・10と同様である。12は大和産の均整唐草文軒平瓦である。中心に紡錘状の文様を配し、唐草文は両側に展開する。瓦当部成形は9~11と同様である。東大寺再建に使用されたいわゆる「東大寺式瓦」で、東福寺の創建軒瓦とみられる。13は均整唐草文軒平瓦である。瓦当部成形は9~12と同様である。

室町時代の軒平瓦は全調査区で12点出土している。

14~18は均整唐草文軒平瓦である。14は山城産の均整唐草文軒平瓦である。中心飾は半截華文で、唐草文は両側に3転する。瓦当部の成形は半折曲げ技法による。全体はヘラケズリにより調整している。15は中心飾は簡易な花卉で、両側に唐草文が反転する。全体はナデ調整を行なっている。16・17は中心飾が五葉形で唐草文は両側に2転する。16は瓦当部を含む全体の成形はヘラケズリによる。室町時代後期の土壙F2476から出土した。17はケズリ後にミガキを施している。18は中心飾は三葉形で唐草文は両側に3転する。室町時代後期の土壙O118から出土

した。

3 緑釉瓦、塼、鴟尾、鬼瓦（図版99・176・177、観察表2）

（1）緑釉瓦

全調査区から出土した緑釉瓦は74点である。内訳は丸瓦57点、熨斗瓦14点、面戸瓦とみられるもの1点で、それ以外に塼とみられるもの2点を含む。丸瓦は玉縁を有する。釉は凸面の全面並びに側面の一部と先端部かけられる。丸瓦凸面の成形は、縄目タタキを施すものが多くみられるが（99-5、9-13、16-18）、ナデ調整のみのももある。2は粗い斜格子目タタキを施す唯一の例である。玉縁部は釉がかかるものとかからないものがある。また釉の下地に白い化粧土が塗られた玉縁部の破片が2点ある。熨斗瓦は、平瓦を割って使用したものか、熨斗瓦として製作されたかは判断できない。釉は側面を中心に凸面側と凹面側に及ぶが、凸面側は幅3～5cm、凹面側は幅1～2cmで、施釉幅には明確な差がある（99-19、20）。4は施釉幅が6.8cmあり、確認できる最大幅である。熨斗瓦凸面の成形は、大半が縄目タタキであるが（99-3、4、6-8、14、15）、ナデのみの個体もある（99-19、20）。面戸瓦とみられるもの（99-1）は、平瓦の先端部を幅9.5cmで割ったのち、凹面側全面に釉をかけて製作したものである。釉は側面、先端面、割れ面、及び凸面側に及ぶ。丸・平瓦の隙間を塞ぐ面戸瓦として使用されたと推定した。塼とみられる個体は2点ある。ともに厚さ2.8cm、長さ5cm前後の小片であるが、表裏面はきわめて平坦に仕上げられている。

緑釉瓦では丸瓦が全体の4分の3を占めるが、これは丸瓦の方が施釉範囲が広がったことによるものであろう。ただし熨斗瓦の出土はF区、G区が中心であり（14点中12点）、それ以外では南半域で2点が出土しているに過ぎない。塼とみられる2点もF区から出土しているため、熨斗瓦の出土傾向には廃棄時の状況が反映されているのであろうが、詳細は不明である。

（2）塼

5点出土した。厚さは3.3～4.1cmあり、確認できる最大長は19cmである。全形のわかる個体はないが、一片20数cmに及ぶ正方形の個体が推定できる。21は長さ19cm、幅13cm、厚さ3.7cmある最も大きな破片である。表面はヘラで丁寧にナデで平坦面を形成している。裏面はナデ・オサエ調整されるが、調整は表面より雑である。側面もヘラケズリやナデで平坦に調整されている。残りの4点も、調整や個体の特徴は21と共通する。なお、この塼もF区で4点、H区で1点出土しており、先の緑釉熨斗瓦の出土傾向と共通する点は注目できる。

（3）鴟尾

2点出土した。23は長さ12.5cm、幅7.5cm、厚さ5.5cmあり、鴟尾の胴部側面、縦帯部とみられる残片である。全体の成形は粘土紐積み上げで、外面はナデ調整、内面は同心円文のタタキを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は固く須恵質である。22は長さ19cm、幅14.5cm、厚さ7cm以上あり、頭部、基底部とみられる残片である。上面と側面はケズリ、ナデなどで仕上げられ、胎土は砂流を含み、浅黄色を呈するが、中央部は焼成不良のため灰色を呈し、軟質である。

（4）鬼瓦

24は鬼瓦の下部にあたる鼻と口の部分で、鼻は横に広く、上歯がみとめられる。全体の成形は笥型よるが、調整はナデで行なっている。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈し軟質である。

第3節 その他の遺物

1 土製品（図版100・178、観察表3・4）

土錘、土馬、ミニチュア竈と陶製の硯がある。

土錘（100-1～5） 5点ある。いずれも長さ5cm、径3.5cm、重量50g前後で、胎土は砂粒を含み、多孔質である。焼成不良品が多く、1、2には黒斑がつく。孔の内面は平滑となっており、心棒の周囲に粘土を巻き付け成形している。1は17世紀の遺構より出土しているが、2～4は9～10世紀の遺物を含む流路F2550のG区部分から、5は12世紀の土壙から出土した。

ミニチュア竈（100-6） 1点ある。正面からみて左側の体部と庇の部分、円周上では4分の1程度が残存する。下半を粘土帯で成形した上に口縁の粘土帯を巻き付け、前面に口を開けた後、庇をめぐらせている。井戸F2570は9世紀中葉に埋没した井戸で、土馬（100-8）も出土している。両方とも井戸を埋める際に入れられた祭祀遺物であろう。

土馬（100-7、8） 3点あり、2点を図示した。8は完形品で、1つの粘土塊を引き出して頭部、脚部、尻尾を製作する。顔面には別の粘土を付加し、竹管を刺して両眼を表わす。7は頭部と左半分を欠くが、個体としては最も大きく、粘土を2つ折りにして、頭部、尻尾と4本の脚を引き出す。脚の先端には黒斑がつく。他の1点は頭部と左前脚が残存し、8と同じ成形による。7は流路F2550のX区部分、8は先述した井戸F2570から出土した。

硯（100-9～12） 4点ある。須恵器と同じ焼成によるものが3点、須恵器甕を硯に転用したものが1点ある。9は須恵器甕の底部付近を硯に転用したものである。外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕跡が残る。内面は硯に利用され平滑となる。側面も研磨されている。10は風字硯の形状をもつ。擦面には同心円文が押印されが、文様が重複しないことから、意図的に施されたことがわかる。裏面、側面ともヘラ状の工具でナデで調整する。平坦な個体で、海、陸の差異、周囲の縁もない。擦面に同心円文を押印するのは、須恵器体部を転用してきたことの影響と思われる。11は風字硯の一部で、中央に仕切があり、左右を区分している。周囲の縁は剥離しているが、仕切りや縁部はヘラ状で成形している。『平安京右京三条三坊』報告の3-312に類似する⁵⁾。12も風字硯で、右手前側が残存する。手前端面と縁の上面はヘラで成形し、裏面には足を貼付ける。裏面や足もヘラで成形する。擦面にはヘラ先で細かな線を刻む。線は円弧を呈し、これも同心円文を意識したようにみえる。擦面はザラザラした質感が残り、あまり使用されなかったようである。10～12は桃山時代の遺構から出土したが、硯の年代は平安時代に属する。

2 石製品（図版101～104・179～181、観察表5～9）

砥石、硯、滑石製温石、滑石製石釜、碁石、石帯、石錘、紡錘車、笏谷石製の火鉢製品、石

臼、五輪塔、凝灰岩などがある。

砥石（図版101・102-1～12） 63点を対象とし、40点を図示した。各面が面取りされており、使用の痕跡があることなどを砥石の条件とした。石材、種類、形状など様々ある。砥石が出土した遺構は15世紀以後が圧倒的で、16世紀後半のものも多い。桃山時代以後の砥石については、第2分冊の石製品の項目で報告しており、本来はそちらで扱われるべき資料があるが、明確に区分できなかったことを断わっておく。

砥石の形状は、幅3.5cm、長さ6cm、厚さ1cm前後の長方形を呈する一群が最も多い（101-1～18）。これらはすべて15～16世紀の製品である。次いで、幅4cm台で、厚さ1.5cm前後の、前者よりやや大型の一群がある（101-19～28）。これらもすべて15～16世紀の製品である。2者の石材はすべて、「珪質頁岩～珪質粘板岩」である。これは珪質分（深海に堆積した放射虫や海綿などの骨針）を含む岩石のことで、京都市街地の北縁をなす、北山から亀岡盆地の東側山地で産出する⁶⁾。102-1～4では、1、3が「砂質ホルンフェルス」、2が「砂岩」、4が「泥質ホルンフェルス」である。ホルンフェルスとは、熱変成で鉱物が再結晶化し、より硬くなったものである。先の珪質頁岩～珪質粘板岩よりザラザラした質感が強く、より粗い成形段階で使用された砥石とみられる。3のみ13世紀の遺構から出土している。

102-5～11は流紋岩とされる石材を用いた砥石である。流紋岩は凝灰岩に似た質感があり、火成岩であるためガスが抜け多孔質となる。ザラザラしているが、ホルンフェルスより軟質である。5は層理状にみえるが、これは水位の変動による鉄分の凝固跡と思われる。5～7は形状が角柱状を呈する。10、11は扁平で擦面に溝が掘られる。溝は玉砥石として使用されたと思われる。なお、12は角柱形を呈する滑石製品である。柔らかすぎるため砥石とするには不適當であるが、形態が類似するためここに掲載した。

硯（図版102-13～22） 11点あり、10点を図示した。石材はすべて頁岩～粘板岩である。すべて15～16世紀の遺構から出土している。色調は、13、15が赤褐色、他は暗灰色を呈する。20は暗灰色の地にオリーブ色の層理がみられる。16と19は質感が似ている。全形がわかるのは20のみで、長方形を呈し、長さ11.1cm、幅7.8cm、縁までの高さは1.9cmある。15、17～19の4点も20と同形態である。13は海部の右側を隅欠けする。16は幅が前後で異なり、海部が広い。21は風字硯の形を呈する小型品で、14も小型品とみられる。海部を留める個体は、13、15、19～21の5点である。15、18、20の3点は、陸部に墨を擦った際の磨滅がみられる。15、18では右半分、20では左半部が磨滅する。22は部分的に深い凹部が形成され、窪みが連続する箇所破損している。

滑石製温石（図版103-1～6） 8点あり、うち6点を掲載した。いずれも滑石製石釜の旧口縁部を再利用し、製品としたものである。すべて15～16世紀に属する。元材からの取り方には2通りある。旧口縁部を温石の長側面とするもの（103-1、4～6）、短側面とするもの（103-3）の2種である。いずれも場合も、石釜の鏝は削り取り、擦り潰して平坦にする。裏面も角ばった箇所を擦り潰し、身体のカーブに沿うように成形している。外面には石釜成形時

のノミ痕跡や、付着したススが残存しており、それらから転用箇所が推定できた。1の旧口縁部は風化が著しく、白濁化している。石釜としての使用が長かったためであろう。

温石全体の形状がわかるものはない。しかし幅については4点で6～9cmと判明した。長さについては、6の個体が14cmあり、カーブの状態からみてこれが本来の長さと思われる。温石には孔が穿たれている。温石を垂下させることや体に密着させるためのもので、1、2、4、6では1孔、3では2孔が確認できる。

滑石製石釜（図版103-7～17、図43） 39点を対象とし、図版103には口縁部の個体を中心に11点を図示した。また内外面の調整痕跡をみるため、図43で拓影と断面図を示した。滑石製石釜は、底部は平底で体部は外上方に延び、口縁は水平に収める。外面の口縁下には鏝がめぐり、瓦器羽釜と同じ形態を呈する。口径は、17cm台（103-7）、20～22cm台（103-8、9）、30cm台（103-13、15）、36cm台（103-17）があり、規格性があるようにもみられるが、今回の資料では明確にできなかった。

石釜の成形に関しては、外面には鱗状の単位が横方向に連続してみられ、ノミで成形されたことがわかる。8は5段構成で全周する。図43では成形痕跡のわかりやすい3例を拓影で示した。ノミ痕跡は図の右から左へと進行したことが判明する。この点に依拠して製作工程を復元すると、粗造成によって、石釜の原型を製作した後、口縁部を下にして回転台におき、これを回しながらノミを押し当てて外面を成形したと推定できる。右利きの場合、回転台は時計回りとなるため、ノミ痕跡は反時計回りに進行する。外面調整が終了すると口縁部を上に戻し内部を調整する。この場合は、匙形の工具が用いられ、横方向に削るなどして平滑に仕上げられたと思われる。内面に関しては、8の場合、縦方向に削平されるが、拓影では明確にできない。内面は外面以上に丁寧に仕上げられるため、ノミ痕跡は目立たない。ただ底部付近（103-14、16）は調整が不十分なため、ノミの痕跡が残る。大半の石釜外面にはススが付着する。ススは鏝以下に厚く付着し、口縁部の上面まで達するものもみられるが、内面には及ばない。

石釜の出土遺構は12世紀から13、15、16世紀と各時期にわたっており、平安時代末期から鎌倉、室町、桃山時代まで使用されたことは確実である。時代による変遷であるが、体部が内湾する9、17は13世紀、体部が直線的な13、15は15～16世紀の遺構から出土している。同様に、底部付近で体部が内湾する14は12～13世紀、直線的な16は16世紀末に属する。このように、内湾する体部から直線的な体部へと変遷したことは確実で、瓦器羽釜や瓦器鍋が次第に浅い器形

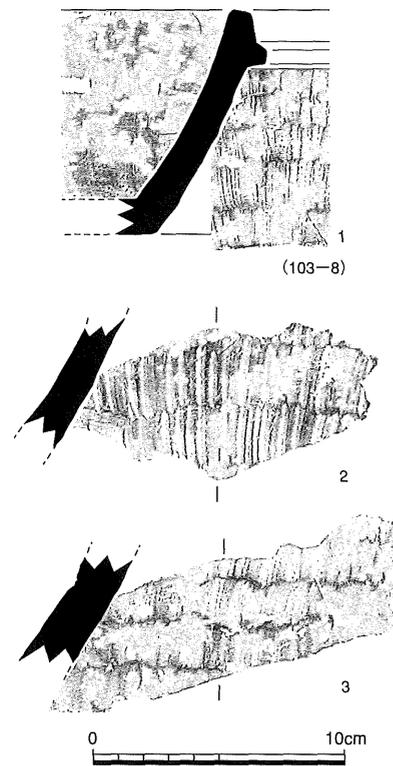


図43 滑石製石釜の調整痕

に変遷したと軌を一にする。また外面のノミ痕跡が目立たない7は13～14世紀に属し、図43で成形をみるために載せた2、3は15～16世紀に属する。時期が新しいほどノミ痕跡が明瞭になる点も指摘できる。なお、10は鏝を縦方向に配置した個体、11は鏝下方の割面を平坦に研磨した個体であり、こちらは温石などに再利用された可能性がある。

碁石（図版104-1、2） 2点ある。ほぼ同じ大きさであるが、材質は異なり、1は玉髓、2は泥質ホルンフェルスである。玉髓とは火山灰が堆積する際に高熱となり溶結してできるもので、日本海側に主に分布する。

石帯（図版104-3～7） 丸柄3点（104-3～5）と巡方2点（104-6、7）の合計5点ある。材質は判断できない。3は灰白色の地に赤灰色の岩脈が走る。各面とも丁寧に研磨され、裏面の潜り穴も3箇所そのまま残存する。4はほぼ完形品であり、黒色を呈し、裏面以外は丁寧に研磨される。裏面は粗造成の擦り痕を留める。潜り穴は3箇所とも完存する。5はガラス質で灰白色を呈し、垂孔を半分留める。側面は丁寧に研磨し光沢をもつが、表面と裏面は磨き込まれていない。潜り穴は2箇所完存する。6は灰白色で白濁感がある。表面上には毛彫りで文様が表現される。文様の主体は欠損し不明であるが、縁に沿って枠を設定し、細線が放射状に配置される。各面の境界は丁寧に面取りされ、研磨も丁寧に厚みのある非常な優品である。潜り穴は2箇所が完存する。7はオリーブ黒色で各面は丁寧に研磨されるが、隅はすり減っている。潜り穴1箇所が残存する。斜めに岩脈が走る。3、4、7は江戸時代の遺構から出土しているが、5、6は土壙B1000からの出土で、ここからは平安時代の遺物も出土している。4～7の石帯は、当研究所の『研究紀要』第7号で紹介されている⁷⁾。

石錘（図版104-8） 1点ある。流紋岩製。多孔質で、ガスの抜け穴が多数みられる。4分の1残存し、復元径6.1cm、孔径1.5～1.0cmある。孔径は上部が太いため、上から穿孔したものとみられる。

紡錘車（図版104-9） 1点ある。蛇紋岩製。半分残存する。低い円錐形で、径5.8cm、孔径1.3～1.0cmあり、上から穿孔したと思われる。表面には圈線がめぐる。圈線は一周以上周回する。裏面は平坦で文様はない。各面ともよく研磨され光沢がある。15世紀の遺構から出土。

火鉢部材（図版104-10、11） 2点ある。材質は凝灰岩で、明オリーブ灰色を呈する。爪先で傷が付くほどの軟質で、通称「^{しやくたにいし}笏谷石」と呼ばれるものである。10は筒状を呈する。11は元来は方形を呈し、中央は柱状で周囲に孔を配置していたとみられる。2孔あり、孔内は熱を受けて変色している。表面はノミで成形し平坦に加工する。火鉢や炊飯用具など耐火製品の部材と考えているが、具体的な内容は不明である。

石臼（図版104-12） 1点を図示する。花崗岩製。中心の孔径が4～2cmまであり、広い方を上面とみて上臼に該当すると考えた。擦面は平坦に成形され、摩擦用の条線が彫られる。

五輪塔部材（図版104-13） 五輪塔の天輪の部分である。花崗岩製。下面には組合わせのためのホゾがある。

凝灰岩 2点ある。図示していない。加工面を留め、二次的な火を受けている。

3 鑄造遺物（図版100・182・183、観察表10～12）

吹子羽口、スラグ、鉄滓、融解物、窯壁・壁土などがある。

吹子羽口（図版100-13～16・182） 13点を対象とし、4点を示した。先端付近の直径は5cm前後で、先端より7cm付近で破損するものが大半である。孔径は2.2cm前後あり、心棒を通し、その周囲に粘土を巻き付けて成形したものとみられる。これは土錘の製作方法と共通する。図版182のGはこれらより大型の吹子羽口であるが、大型品はこれのみである。先端から3cm付近までは、高温にさらされ還元色に変化している。特に100-13は先端部が完存しており、表面の溶解した様子が観察できる。概して外面は還元化による灰色、内面は赤色に変化しており、外面のほうが高温にさらされたことがわかる。胎土は砂粒を含むが、大型品（G）には長石粒が特に多く含まれる。図版182のEは土師器高杯の脚部を吹子羽口に転用したもので、杯との接合部側を炉の方に差し込んでいる。脚部外面はヘラケズリで面取りし、断面は7ないし8角形に復元できる。13世紀とみられる井戸G2665から10点出土した点は注目される。その他では、Eは10世紀の溝、Gは9世紀から16世紀までの遺物を含む土壌、16は13世紀の土壌から出土した。

スラグ（図版182のA、B、C） スラグは鑄造工程で生じる滓のことで、ガスが抜け軽くなっている。3遺構から出土しており、内訳は、A2片、B16片、C1片である。大型のCは陶器（備前播鉢？）が熱で溶解したようにもみられる。AとBは9世紀から11世紀の遺構、Cは16世紀末頃の遺構から出土している。

鉄滓（図版182のD） 1点ある。製鉄や鍛冶工程で生じた滓であり、鉄分を含むため比重が重い。Dは表面に鉄錆が吹き出し、赤褐色を呈する。弱い磁性を帯びる。12世紀から13世紀の遺構から出土している。

融解物（図版182のE） 1点ある。石片が高温のため融解し、凝固したもので、炉や窯の壁面の補修材か、あるいは鑄造時に周囲の石材が熱で融解したものである。出土遺構は桃山時代に属する。

窯壁・壁土（図版183） 35袋分取り上げた。小片が主体である。写真図版1枚分を示した。数字は観察表12によるもので、地区順、遺構番号順に付した。スサ入りのものが大半である。表面を留める破片としては7、12、19、35があり、19には白い化粧土が塗られている。35も化粧土の残存がみられる。これらの大半は、建物や築地の外壁に塗られていた土壁が火災などの熱で固く変質し、遺構中に保存されたものといえる。ただし吹子羽口や鉄滓が出土しているため、炉や竈の壁体、あるいは鑄造品を造る際に出る鑄型の破片の可能性もある。出土遺構は12世紀から16世紀にわたるが、15世紀以降に属するものが多い。

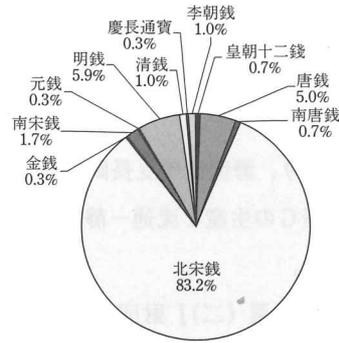
4 銭貨（図版105～107・184～186、図44、観察表13）

この第1分冊では寛永通寶以前の銭貨を扱う。種類としては、日本で平安時代に造られた皇朝十二銭、中国大陸の唐、北宋、南宋、南唐、金、元、明、清の各時代に生産され、日本に渡来した銭貨（「渡来銭」とする）、朝鮮半島の李朝の渡来銭、また日本の慶長期の銭貨であり、

それらを鑄造された年代順に図版3枚に示した。拓本と写真は同じ配列とし、番号は観察表13に付したものと同一である。

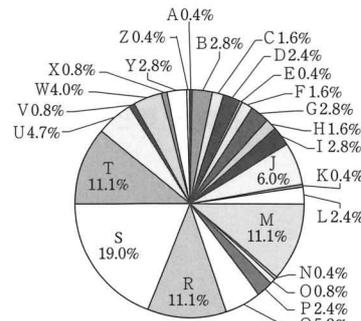
扱った銭貨の総数は303点である。種類別の構成を図44の上段に示した。北宋銭が圧倒的に多く、全体の83.2%を占める。以下、明銭、唐銭となるが、それらも10数点程度であるため、それ以下は極少数といってよい。次に北宋銭自体の内訳を下段に示した。元豊通寶が48点で最大を占め、以下、皇宋通寶、熙寧元寶、元祐通寶が28点で続く。それ以下は、天聖元寶が15点、治平元寶13点、紹聖元寶13点、聖宋元寶10点である。北宋でも1020年代から1100年代に鑄造された銭が最も多くもたらされたことがわかる。

銭貨が出土した遺構について検討する。10世紀の遺構からの出土は3例ある。皇朝十二銭が2枚出土した土壌F 2631は10世紀前葉に属し、銭貨の年代（9世紀中葉から後葉）と矛盾しない。しかし土壌B 1053は10世紀末に属するため、11世紀後葉に中国で鑄造された元豊通寶が入ると矛盾が生じる。銭貨の出土層位が上層であるため、上部から混入したと考えたい。13世紀の遺構は2例のみである。残りの圧倒的多数が15世紀以後である。その15世紀についても、15世紀のみに限定できる遺構は少なく、多くは15～16世紀となっている。16世紀は後葉から末葉が桃山時代に属するため、これらを除くと、室町・戦国期の遺構は30数例に過ぎず、渡来銭の大部分は、桃山時代から江戸時代の遺構より出土していることが明白となる。その比率は、85%強に及ぶ。寛永通寶が流通していた江戸時代においても、なお渡来銭が広範囲に流通していたことは、寛永通寶との関係などを考える上で注目すべきことである。遺構の年代をさらに絞り込んだ上で、第2分冊の成果も交え検討を深める余地がある。さらに渡来銭に関しては、加治木銭や私鑄銭についても検討すべきであったが、今回は十分果たせていない点も付記する。



渡来銭、その他の比率 (303枚中)

皇朝十二銭	2
唐銭	15
南唐銭	2
北宋銭	252
金銭	1
南宋銭	5
元銭	1
明銭	18
清銭	3
慶長通寶	1
李朝銭	3



北宋銭の種類別比率 (252枚中)

A. 宋通元寶	1
B. 太平通寶	7
C. 淳化元寶	4
D. 至道元寶	6
E. 咸平元寶	1
F. 景德元寶	4
G. 祥符元寶	7
H. 祥符通寶	4
I. 天禧通寶	7
J. 天聖元寶	15
K. 明道元寶	1
L. 景祐元寶	6
M. 皇宋通寶	28
N. 至和元寶	1
O. 嘉祐元寶	2
P. 嘉祐通寶	6
Q. 治平元寶	13
R. 熙寧元寶	28
S. 元豊通寶	48
T. 元祐通寶	28
U. 紹聖元豊	13
V. 元符通寶	2
W. 聖宗元豊	10
X. 大觀通寶	2
Y. 政和通寶	7
Z. 宣和通寶	1

図44 銭貨の比率グラフ

註

- 1) 土器類の特徴の抽出、並びに土器群としての編年的な位置づけに関しては、当研究所の小森俊寛が協力した。また墨書土器や線刻文字の判読については、清水みき氏、西山良平氏からご教示いただいた。
- 2) 國下多美樹氏より、静岡県伊豆長岡町花坂古窯跡群の製品であるのご教示を得た。
佐藤達雄他『壺Gの生産と流通－静岡県の場合－（その1）』静岡県考古学研究 NO.28、壺Gを見る会、1996年。
- 3) 『平安京跡発掘資料選（二）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990年。
- 4) この墨書土器の解説にあたっては、西山良平氏から丁寧にご教示をいただいた。
- 5) 「第3章 E 硯」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990年。
- 6) 石材の種類については、橋本清一氏よりご教示いただいた。
- 7) 平尾政幸「平安京の石製鉸具とその生産」『研究紀要』第7号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2001年。

第6章 公家町形成前までのまとめ

第1節 遺構の変遷

1 平安京成立前の地形

平安京が形成される以前の当該地の状況を調査所見から記す。該当する遺構として、流路C1222、流路E900、流路F2550、流路G3579、土壙C948、土壙C1288などがある。このうち、土壙C948、土壙C1288は古墳時代前期の土器が出土した小規模な土壙である。流路としたものは、いずれも北東から南西に流れる自然流路であり、流路G3579はH区では未検出ながら、G区北西隅で検出した流路G3587と同一の可能性があり、後述する流路E900と同じ一連の流路とみられる。流路G3579の南肩で検出した土壙G1755は、土師器甕を据えた遺構で土器棺墓とみられ、当地に墓域が存在した可能性も考えられる。流路E900は古墳時代後期の遺物を包含する小規模な流路で、流路C1222と同一の可能性があり、H区、E区、F区で検出し、F区で2つに分流する。分流した北側を流路E900A、南側を流路E900Bとしたが、流路E900Bの底には工具の痕跡が連続して掘込まれていた(図版128-4)。この点について注目すると、この工具は鋤先と考えられ、流れに直交する方向に掘込まれていた。人為的な掘込みで、流路を開削する際に掘込まれたとみてよい。掘込みのある箇所が、流れが2つに分流する地点の南西側であることも注目される。この地点で流路の向きを南に変えたのか、あるいは元来1つであった流れが2つに分流されたのかまではわからないが、灌漑水路の開削を目的として掘られたことは確かであろう。そうすると、下流には水田が開かれていたことも想定できる。今後周辺では、集落遺跡とそれに伴う生産遺跡(水田跡)などが検出される可能性があるため、注意が必要である。

流路F2550はG区、F区、X区で検出した比較的大規模な自然流路である。幅6m、深さ1.5m以上あるが、底は周辺の砂礫層と類似しており、不明確であった。流路の下層は砂礫や泥土が互層の状態を呈し、かなりの水量があったことをうかがわせた。また流路下層には古墳時代後期から飛鳥時代までの土器を包含していた。

調査地は、賀茂川と高野川の合流点の南西に位置している。古墳時代に現在みるような合流点形成されており、水流が常に南に流れ出る状態であったなら、調査地内でこのような南西方向の流路は存在するはずがない。しかし実際にそうした流路が検出されたことは、高野川水系の流れが、一時的にせよ合流点を乗り越えて市街地側に入り込んでいたことになる。あるいは賀茂川はそのまま現市街地を南に流れ、高野川も市街地側に流れ込んでいたなら、こうした流路が検出されても不自然でないが、この場合でも、流路F2550が古墳時代から飛鳥時代の遺物を包含することは、合流点の形成が平安京遷都の直前となることを意味し、かつての賀茂川付け替え説(平安京遷都に伴って賀茂川の流路を本来の位置から南東方向に付け替える工事

が行なわれたとする説)を復活させることにもなりかねない。平安京の左京では古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が出土する高野川クラスの河川跡は検出されておらず、賀茂川・高野川の合流は平安京遷都以前になされていたと考えるのが一般的であるが、なお自然流路の扱いについては、慎重な検討が必要である。

京都市内の遺跡調査では、古墳時代前期から後期、並びに飛鳥時代の遺物を含む斜め方向の自然流路が検出されることがよくある。平安京造成前に形成されたものであり、いずれの場合も、地形の傾斜に沿って流れ出た自然流路である。京都盆地が扇状地性の地形であることの証しでもある。平安京が造営されるに際しては、まずこれらの自然流路を埋没させ、その上を整地することで生活基盤が形成された。その営みが人と自然との交わりであり、今回の調査地においても同様の経過が観察される。以下、時代ごとに遺構の変遷を解説する。

2 宅地の変遷と利用状況

調査地は平安京左京北辺四坊五町～八町、一条四坊十六町に、さらに東京極大路に接して、京外の東にあたる土御門大路末から近衛大路末の間には法成寺が推定されている。ここでは平安時代前期～中期を中心に、文献史料から推定される宅地の変遷と利用状況の実態について、検出した遺構との関連をみていく。

(1) 文献史料からみた宅地の変遷

平安時代前期 北辺四坊六町から七町には藤原良房の邸宅・染殿があった。文献での初見は『三代実録』貞観3年2月18日条に「皇太后臨御太政大臣東京染殿第、云々」とあり、貞観3年(861)に清和天皇の母である皇太后明子(良房の娘)が、染殿に御幸した記事がみられる。また邸内には大池・釣台・射殿などの建物や、「染殿花亭」と称されていたことから、花見のための望遠亭と称された建物もあったことが、『三代実録』貞観8年閏3月1日条で知られる。このことから良房の染殿第は殿舎関係よりは、むしろ庭園関係に特徴をもつものと思われる。北辺四坊八町は、まさに平安京の東北隅にあたる。この町には宇多天皇の愛妃である藤原褒子(藤原時平の娘)の邸宅・京極院があったとされている。また東南隅の四分の一町に右大臣藤原顕忠の邸宅が推定されている。一条四坊十六町は、道長の妻・倫子の叔父にあたる右大臣源重信の邸宅であった。

平安時代中期 北辺四坊六町は中期になると染殿は譲渡され、村上天皇の第七皇子・具平親王の邸宅・土御門第がおかれる。北辺四坊七町の南半は清和天皇に提供され清和院となる。当初は仏心院と称していた。北半については藤原良房が没した後、染殿は藤原基経→忠平→師輔と伝領され、その後は為平親王に譲渡され源師房、その子師忠に伝領されたが、その後は不明である。北辺四坊八町には、康平元年(1058)の法成寺火災で他の堂舎とともに類焼した西北院が、延久4年(1072)に藤原頼通により当地に再建された。西北院は藤原道長の北ノ方・源倫子の発願により、法成寺内の北西に建立された御堂である。この西北院は御堂を中心に廊、渡廊を配置した寝殿造りの形式であった。

一条四坊九町には源倫子の邸宅・鷹司殿がおかれていた。初見は『小右記』長保元年(999)

12月1日条に「夜に入り鷹司に詣でる」とある。一条四坊十町には近江守藤原惟憲の邸宅・陽明門第があった。陽明門第は長和5年(1016)に焼亡すると『日本紀略』同年7月20日の条にみられる。一条四坊十五・十六町には藤原道長の邸宅・土御門第がおかれた。当初は十六町を右大臣源重信から譲り受けたが、長保元年(999)には南の十五町も加えられた。後一条天皇、後朱雀天皇、後冷泉天皇の里内裏となり、上東門第、あるいは京極殿とも呼ばれた。寛仁2年(1018)10月22日には後一条天皇、東宮敦良親王(後の後朱雀天皇)、太皇太后藤原彰子、皇太后藤原妍子、中宮藤原威子がそろって行幸する。絶頂期の道長が「望月の歌」を詠んだのも、この土御門殿である。

法成寺は寛仁3年(1019)に藤原道長によって造営された。当初は無量寿院と称していたが、治安3年(1023)以降、各堂舎の建立によって法成寺として整備されていく。寺域は当初、方二町の規模であったが、康平元年(1058)の火災以降、再建を契機に西北院・東北院などの子院を、寺域外に設けることにより拡大していく。東北院は藤原彰子の発願により、寺域内の東北に建てられた子院である。長久元年(1040)9月9日に土御門殿が焼亡した際、後朱雀天皇はここに回避している。康平元年(1058)の火災で法成寺の諸堂塔や西北院とともに焼失した。康平4年7月には新たに法成寺外の北に占定が行なわれて再建された。承安元年(1171)7月には再び焼失するが、直ちに再建される。

平安時代後期 北辺四坊五町には12世紀中頃、左近衛小将・藤原公親の邸宅が存在した。また「香集堂(虚空蔵堂)」と称する仏堂があったとされ、これはこの地に住んでいた小野延貞が、邸宅内に建てた御堂といわれている。北



図45 邸宅・寺院の変遷 (□は調査区)

辺四坊六町は村上天皇皇子・具平親王の土御門第であったが、後期になると子孫の村上源氏の本邸として、伝領されることになる。北辺四坊七町の南半部には当初、清和上皇の後院御所として、清和院が建てられたが、上皇が崩御の後は左大臣源重信→大納言経信→道時へと伝領され、その後は白河法皇の皇女・官子内親王の御所となる。

一条四坊十五・十六町にあった土御門殿は道長の死後、長元4年(1031)、長久元年(1040)、天喜2年(1054)と三度の火災に遭っている。

法成寺は藤原道長の死後、康平元年(1058)に焼亡する。以後は藤原頼通により再建され、伽藍が整備される。また西北院・東北院などの子院が移転することにより、規模が拡大していく。承保元年(1074)の藤原頼通死後は、藤原師実が復興・拡大を継承していく。平安時代後期の永久年間(1113～1118)以降は、藤原忠実が堂舎の再建・管理を維持した。

(2) 遺構からみた宅地の変遷

平安時代初期の様相 土器型式でいう京都Ⅰ期中(8世紀末から9世紀初頭)に属する。遺構配置図では青色で示したものに含まれる。該当する遺構はほとんど検出していない。京都Ⅰ期中の土器を出土した遺構として、七町の正親町小路上で石敷G3578を検出したが、これは後述する自然流路F2550の上に位置するため、流路を埋める際の整地とみられる。流路F2550からもこの時期の土器が出土しているが、これも流路を埋める際に周囲から入ったものであろう。遷都直後に遡る遺構が明確でないのは、ここが平安京の北東隅にあたることに加え、七町に流路F2550が存在したため、宅地に不向きな所とみられていたためであろう。

前節で述べたように、平安京以前には鴨川が幾度となく氾濫し、洪水によるとみられる粗砂の堆積や自然流路の流入があったことを確認している。また鴨川起源の洪水層が検出されることから、調査地付近が平安時代においても、依然として洪水の危険にさらされる場所であったことがわかる。治水対策については、9世紀前半に朝廷により防鴨河使が設置されたことが『類聚三代格』などの文献で見知できる。平安京遷都の直後は、当地は鴨川からの自然流路が依然として流れ込んでおり、大路・小路などの条坊施工は、治水工事のために防鴨河使が設置された9世紀前半以降と考えられるのである。

平安時代前期の前半代 京都Ⅱ期古(9世紀中葉)に属するものを中心とする。遺構配置図では同じく青で示した。該当する遺構として、五町で井戸E765、六町の富小路上で井戸F2570を検出している。ともに9世紀中葉に埋没した井戸で、生活に関連した遺構であることは確実であるが、遺構の広がりや井戸以外は不明である。井戸F2570が富小路の西築地想定位置に掘られたことは、富小路が条坊の計画通り施工されなかったことを示しており、宅地利用の実態を考える上で重要である。交差点の以北、五町、八町では、井戸E765以外に前期に遡る遺構がないため、利用の実態はわからない。交差点の南の六町、七町では、先述した流路F2550がほぼ整地されていたと想定できる。流路の埋没は、上層に京都Ⅱ期古、Ⅱ期中の土器類が含まれるため、10世紀前葉に至ったと推定できる。先述の石敷G3578の上部でも土壌G3551を検出しており、くり返し整地が行なわれた様子がうかがわれる。

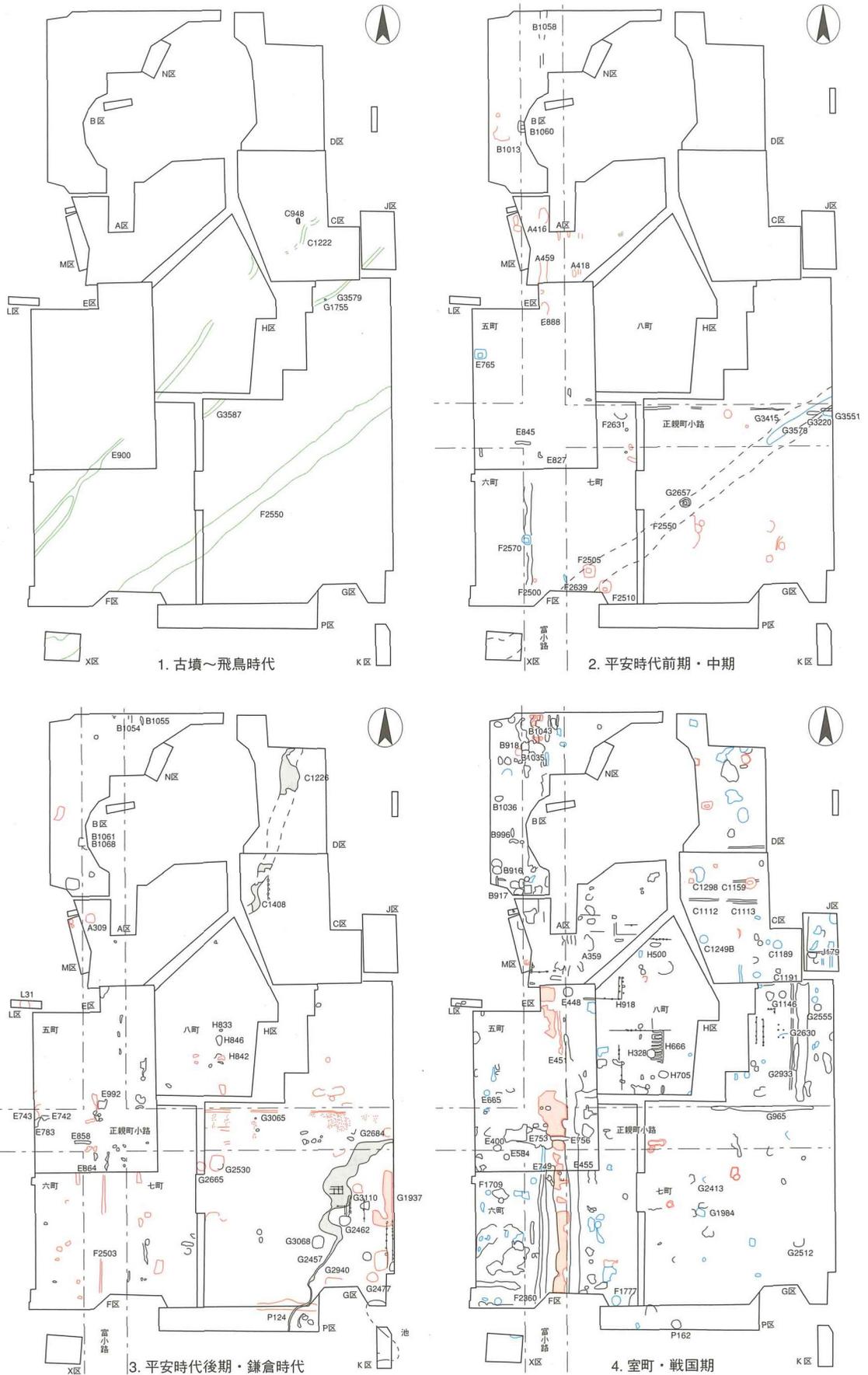


図46 遺構の変遷模式図

平安時代前期の中頃から中期初め 京都Ⅱ期中～Ⅲ期古（9世紀後葉～10世紀中葉）に属するもので、遺構配置図では黒色で示した。この時期の遺構も少数である。六町の富小路西築地想定位置には南北の溝F2500が掘られる。しかし側溝本来の位置ではなく、また路面もみられない。五町・八町境の富小路では路面中央に南北の溝B1058が掘られる。また五町では、西築地位置に井戸B1060が掘られており、先の井戸F2570と同じ配置がみられた。五町と八町、六町と七町はそれぞれで東西の町割りを越えて使用されていたことがうかがわれる。正親町小路については、北側溝想定位置で溝G3415を検出している。しかしこの溝は西には延長せず、交差点付近の様相も不明瞭である。富小路と正親町小路の交差点については、南西隅において東西の溝E845、南北の溝E827があり、これらは連続してL形に折れていた可能性がある。このようにみると、正親町小路は施工されていた可能性があり、南北方向の町割りはある程度完成していたとも考えられる。しかし東西方向については、二町単位の宅地となっていた可能性は引き続き残る。この他、四行八門制に一致する遺構は検出しておらず、当該地の利用状況を推定する資料は乏しい。なお七町では、流路F2550上部に井戸G2657が掘られており、正親町小路上では土壙G3220をはじめ、溝G3415、土壙G3573などを検出している。この段階で流路はほぼ埋めつくされていたであろう。

史料に該当するものとしては、藤原良房の邸宅「染殿」がある。染殿は貞観3年（861）には成立しており、六・七町を占めたとされる。正親町小路に溝G3415が掘られること、富小路の遺構が明確でないことは、史料とは矛盾しない。流路F2550が埋没していたことが井戸G2657の存在から想定できたが、流路出土土器の主体が京都Ⅱ期新（10世紀前葉）まで下るため、染殿形成後も流路は邸内に残り、窪地を埋めるような作業が依然として続けられていた可能性は高い。また調査地が六・七町の北半であるため、染殿に伴う主要遺構はさらに南に存在したと思われる。この点も遺構の少ない理由とみられる。また八町に想定された宇多天皇の愛妃、藤原褒子（藤原時平女）の邸宅、京極殿に関する遺構も確認できていない。

なお、土器類の項でも述べたが、9世紀後葉から10世紀前葉までの遺物は比較的豊富に出土しているのに対し、10世紀中葉から後葉に属する土器はほとんど出土していない。この時期の実年代は930～980年頃と推定され、藤原の氏長者でいうなら、930年代は忠平、960年代は実頼、980年代は頼忠と兼通、990年代は兼家などに該当する。藤原道長が氏長者となる前段階であり、この場所があまり利用されなかったように思われるが、詳しい理由はわからない。

平安時代中期の中頃から後半代 京都Ⅲ期新～Ⅳ期中（10世紀末～11世紀中葉）に属するもので、遺構配置図では赤色で示した。五町・八町境の富小路では路面の中央に土壙A416、溝A459が掘られ、八町の東築地付近においても溝A301、A302、A418、A419、A493などが掘られる。富小路路面中央の土壙は、E区にも掘られており、土壙E888を検出している。これらの遺構から、富小路が依然として計画通りの道路でなかったことがわかる。五町においては、富小路の西側で方形を呈する土壙B1013を検出した。11世紀初め頃に掘られた土器廃棄土壙であり、高級食器である白色土器が大量に含まれていた。白色土器の意義については次節で記述す

表4 遺構年代表

(富)=富小路上、(正)=正親町小路上、(交)=交差点上

時期区分		五 町	六 町	七 町	八 町	
平安時代 前期	I 期	古			石敷G3578(正)	
		中				
		新				
	II 期	古	井戸E765	井戸F2570(富)	土壙F2639(富)	土壙G3551(正)
		中				土壙G3220(正)、土壙F2631(正) 土壙G3573(正)、溝B1058(富) 溝G3415(正)
		新			流路F2550	
平安時代 中期	III 期	古	井戸B1060	溝E845(正) 溝E827(富)	井戸G2657	
		中				溝A419 土壙A416(富)
		新				
	IV 期	古	土壙B1013		土壙G3392	土壙S71(十六町)
		中			井戸F2505、井戸F2510掘形 土壙G2990、井戸G3068 井戸F2510枠内	溝E881 溝B1054(富)
		新				
平安時代 後期	V 期	古	井戸B1068(富)	溝E864(富)	土壙G3660、土壙G2407 土壙G2498、土壙P247 池G2940下層	土壙H842
		中	井戸B1061	溝E858(正)	土壙P242、土壙G3290 土壙K46、池G2940上層 土壙G2457、溝G3360 井戸G2462、土壙G2405 整地層G2500	
		新			土壙G2973	溝C1226
鎌倉時代	VI 期	古			池G2940(P区) 土壙G3373	
		中	井戸A309(富) 井戸E743(正) 土壙L28	土壙E734(正) 土壙E738(正) 溝F2503(富)	土壙G3300、土壙P108 溝P124	
		新				
	VII 期	古	土壙E763(交) 井戸L31		土壙G2477、土壙F2600	
		中			溝G1938(正)	
		新	土壙B1037		土壙G2712	
室町・戦国期	VIII 期	古			土壙G2126(正)、土壙G2073(正) 土壙G1897(正)、土壙G2125 土壙G2207	溝E785(富)
		中			土壙G1874	土壙C917、土壙H723
		新	井戸B918			土壙D491、土壙C756B
	IX 期	古	土壙B1043(富)			
		中				土壙J92、土壙A359 土壙G2897、土壙G2083 土壙C777、堀G2630(J区) 溝J179、土壙G3097 土壙J168、土壙G2234、土壙G2318
		新	土壙B992(富) 井戸B917	土壙E753(交)	土壙G2631(正) 溝F2410(富)	
	X 期	古	井戸B916 井戸B1059 土壙B996 土壙B1036 土壙B1035(富)	土壙E584(正) 井戸E400(正)	溝E455、土壙F2588(富) 井戸F1901、土壙E729(富)	土壙G2214、土壙G1363 土壙G2821、土壙J182 井戸H328、土壙B1047(富) 土壙G3304、池D529B 土壙G3226、土壙G2877 井戸G2555、土壙G2736 集石H555、地業H666 土壙J175、堀G2630
		中	井戸E665 土壙B962(富)	井戸F1709	土壙G2413、井戸F1777 土壙G1984	土壙D512、土壙J142 土壙J151、土壙G2270 堀G965(正)、土壙G2649
		新				土壙C1298

第1節 遺構の変遷

る。五町、六町、八町では遺構が乏しい。しかし、七町ではやや多くの遺構がみられ、井戸F 2505、井戸F 2510、土壙などが掘られる。特に2基の井戸は、流路F 2550の上に掘られるため、流路が埋没していたことがわかる。

史料との関連でみれば、六町は具平親王の邸宅「土御門第」に該当するが、確実な遺構はない。北西の八町も西北院とされるが、遺構はみられない。七町北半は縮小した染殿とされる。検出した井戸や土壙がそれに該当する可能性はあるが、詳細はわからない。

この時期は、藤原道長が氏長者となり政治権力を確立する時期にあたる。土御門大路の南には土御門殿が形成され、東京極の東には法成寺も建てられる。周囲には藤原一門の邸宅が置かれ、具平親王の土御門第が置かれた六町も、藤原一門の家政機関である「御倉町」が置かれたとされる。五町では白色土器が大量に出土した土壙B 1013を検出したことを先述したが、このことも藤原氏一門の集住と関連するものであろう。

平安時代後期 京都IV期新～V期新（11世紀後葉～12世紀後葉）に属するもので、遺構配置図では黒色で示した。五町では富小路西築地想定位置に井戸B 1061、井戸B 1068が掘られる。八町では、東築地想定位置に溝B 1054、その東2mに溝B 1055が掘られる。2つの溝は側溝と内溝の可能性はあるが南に延長しないため、断定できない。ただし、前時期のA区では溝A 418、A 419を検出しているため、これらと連続していたなら、富小路に伴う溝の可能性もある。また、溝A 1054の西側には小礫を敷いた路面状の箇所を検出しており、西築地に井戸が掘られる状況なども勘案すると、中期後半から後期にかけては何らかの施設がここにあったとみてよい。

E区の南半、富小路と正親町小路の交差点については、前の時期と同様の配置がみられた。即ち、富小路西側溝に該当するものとして溝E 864、正親町小路南側溝に該当するものとして溝E 858を検出したが、これを前段階の溝と比較すると、富小路西側溝ではより外側に、正親町小路南側溝ではより内側に溝が掘り直されたことが明らかとなった。このように、条坊の交差点については一定の所見は得られたが、それらの溝が南（F区）、あるいは東（G区）に延長しない点で問題を残している。交差点の北側と西側では、小規模な土壙が点々と掘られていた。正親町小路の上には、土壙E 738、E 742、E 922などが掘られたため、道路として機能していたかは、わからない。

八町では、溝C 1226を検出した。自然流路のような方向と形状をもつが、平安時代後期の遺構であることは確かであり、庭園に伴う遺構とみられる。その東には南北の柱列C 1408があり、これらは西北院に伴う園池と建物の可能性も考えられる。西北院は、康平元年（1058）の法成寺の火災で類焼し、延久4年（1072）に藤原頼通により当地に再建された。その可能性をもつ遺構を確認できた意義は大きいといえる。H区ではこの時期の土器を廃棄した遺構を検出している。図版では土壙H 842を掲載したが、同様の土壙としてH 864、H 833などがあり、ともに土器廃棄土壙である点で、西北院との関わりも考えられる。

七町・八町境の正親町小路では土壙が多量掘られており、五町・六町境と同じ状況がみられた。正親町小路が通じていなかった可能性を示すものである。この七町では、池G 2940の存在

が注目される。調査地の東端から斜め方向に延びる西肩部には州浜があり、小礫が敷かれる。庭園遺構であることは明らかで、史料にみえる清和院の園池である可能性が高い。肩部には土壙、柱列、井戸がみられたが、これらが池とどのような関係にあったかは問題を残した。井戸G2462、井戸G3068は池と同時期である。柱列G3731、建物G3730などは池を望む西側に建てられた建物遺構の可能性はあるが、確実ではない。池内では礎石列G3727、G3728を検出したが、これらは調査区外の東に延びる遺構とみられた。またG区の南半では平安時代後期の整地層が残存しており、南側に建物などを配置するための整地であったとも考えられる。

なお園池の遺構については、一条四坊十六町にあたるS区においても池状の堆積(S70)を確認している。池上部に掘られた土壙S71からは11世紀前半頃の土師器が出土しており、土御門殿に伴なう園池の可能性が高い。このようにみると、平安京北東隅にあたる八町、七町、十六町はいずれも北東側に園池を配置していたことになる。地形の傾斜を利用して北東側から邸内に水を引き入れたため、邸内の北東部に園池が配されることになったのであろう¹⁾。

鎌倉時代 京都VI期古～VII期新(12世紀末～14世紀前葉)に属するもので、遺構配置図では赤色で示した。五町の富小路上には井戸A309が掘られる。南の六町、七町間においても、富小路上には溝や土壙があり、富小路は依然として西半分は機能していなかった可能性が高い。正親町小路の上にも井戸が掘られる。井戸E743と井戸G2684がそれである。ただし路面位置では礫敷面を検出しており、北側溝に該当する位置にも溝G3065があることなども井戸G2684の存在と矛盾する点となっている。

この段階の遺構は概して少数であり、各町では土壙が点在する程度である。七町では池G2940が埋められ、上に地業G1937が造られる。池G2940の上部にあたるため、軟弱地盤を改良する目的で河原石が大量に投入されたのであろう²⁾。この他、七町で注目される遺構として、乙訓在地形の土師器が大量に出土した溝P124(=土壙G3300)がある。東西方向の溝状の遺構であり、東側へ水を流すための施設とみられるが、正親町小路南築地から45m南に掘られるため、四行八門制による宅地内の分割に係わる区画溝と考えられる。溝内から乙訓在地形の土師器皿が大量に出土したことは、これらの土師器皿が乙訓の荘園から納められた物品であり、ここが有力貴族の邸宅であったことを想定させる。地業G1937はその中での中心的な建物遺構として考えることもできよう。

室町時代の前半代 京都VII期新～VIII期新(14世紀中葉～15世紀前葉)に属するもので、遺構配置図では赤色で示した。五町では富小路西築地想定位置に井戸B918があり、富小路は依然として十分な広さの道路として機能していなかった可能性が高い。各町についても該当する遺構は少なく、八町で土壙が散発的にみられる程度である。この時期の遺構が少ない背景には、住人の移動など何らかの理由があったのだろう。

戦国期の前半代 京都IX期古～X期古(15世紀中葉～16世紀前葉)に属するもので、遺構配置図では黒色で示した。一転して遺構数が非常に多くなる。ただし遺構が多いのは京都IX期新～X期古にかけてであり、京都IX期古からIX期中にかけての遺構は極めて少ない。15世紀の

第1節 遺構の変遷

中頃から後半は洛中を焼亡させた応仁・文明期の大乱にあたるため、遺構数の少なさは戦乱期に関連するものと思われる。

富小路については、五町（A区）で富小路内に及ぶ土壌群を検出している。これらは聚楽土に類似した泥土を採集する目的で掘られた土取穴である。一方、A区の南端からB区にかけては、富小路上で掘立柱建物や柵を検出した。この部分は、地山が砂礫層であったため土取りされず、結果として柱穴が残存したものと思われる。A区の南端には建物A1109の柱列があり、それより南のE区、F区では、富小路の路面と東側溝とみてよい溝E455を検出した。このことは、富小路が道路として機能していたのは、ここから南側であったことを示している。正親町小路との交差点の状況であるが、E区では路面敷き並びに溝E455が交差点を越えて南北に延長することから、富小路が交差点の北側に達していたことは確かである。ただし交差点の南西部には15世紀末に属する土壌E584、土壌E753などが掘られたため、全幅が道路として機能していたとはいいがたい。また路面上には溝E756、溝E749などが掘られ、特に溝E756は富小路を横断して溝E455に接続するため、路面下を通る暗渠であった可能性がある。土壌E753は不定形であるが、深さ1mほどあるため、付近の水を集め、それを東と南に流していたように思われる。

溝E455は東肩に石垣をもつ溝で、その構造については、E区、F区で解説した。富小路の東築地位置に西肩を一致させて掘られており、溝の北限は、E区北端で井戸E448を検出したこと、この付近で溝が浅くなることなどから、E区北端であったと思われる。溝E455の西側には小礫敷きの路面が形成されていた。E区では、地山上に礫が貼られていたが、F区南端では15世紀末頃の土壌を覆うかたちで礫が敷かれたていた（図17参照）。この時期の富小路も西側溝に該当する溝はなく、路面の礫敷も東半分しか敷かれない。依然として小路幅の半分程度の道路として機能していたものと思われる。この他、特にF区では道路の中心部に溝F2410が掘られ、溝底には不定形な凹部が連続する状況がみられた。溝F2410は、それが掘られた当初は西側溝として機能した可能性も考えられるが、路面敷きはその溝を埋めた上に形成されており、その際には大量の礫が投入された。路面中央部で礫が盛り上がる状況がみられたのは、このためであった（図版126、127）。なお、B区北壁においても15世紀末葉に属する土壌B1043を覆うかたちで礫敷の路面がみられた（図12）。しかし、この礫敷部は南には延長しない。このように、富小路が礫敷きの道路であることは確認できたが、規模や形成時期については問題を残した。

正親町小路では北築地想定位置に堀G965が掘られる。しかしこの時期の路面は確認されず、南側溝想定位置にも溝はない。堀G965は断面V字形を呈し、道路側溝ではなく堀として掘られたものとみてよい。

八町の北半（D区）では、地山が泥土層の部分では土取穴がみられ、砂礫層の部分では柱穴を多数検出した。G区の北半では、柱列G3734～柱列G3737を復元したが、これらは一連の建物遺構とみられる。八町は、A区東半とH区においても柱穴を多数検出している。建物H918としてまとめたものは、東西方向の建物とみられ、また南北方向の柱列も多数検出した。地業H

666とした建物基礎は、一連の遺構群の中では極立つ存在であったろう。さらに八町では、溝内に柱を据える布掘柱列の遺構（堀C1112、堀C1113、堀G3729、堀G2933）を検出しており、区画や境界のための施設が多い点に注意される。また八町には東西、南北方向の堀G965、堀G2630も掘られる。これらの堀は、断面V字形を呈する防御用の堀であり、堀G965が正親町小路の北築地位置にあることは先述したが、堀G2630はさらに規模が大きく、その西側には堀G2933が平行するなど、より厳重な防御施設となっている。堀G2630と堀G965とは直角方向に接するが、通路として隙間を空けている。ただし、堀G2630の東側にも井戸や土壇が多数掘られるため、溝J179を境界として別の居住区が設定されていた可能性もある。

一方、七町で検出できた主要遺構には、P区の井戸P162、G区東南部の土壇G2512がある。後者は焼けた壁面をもち炭層が堆積する小鍛冶の遺構とみられる。G区の遺構は、東側ほど少数であったが、これは池G2940の存在が影響を与えているのであろう。

このように七町の様相は、堀や柱穴が多数掘られた八町とは好対照をなす。遺跡の主体が北側の八町にあり、七町は堀G965で区画された施設の外側のような印象を受ける。このように考えると、戦国期の調査地は、溝E455、堀G965、堀G2630によって鍵の手状に囲まれた範囲が居住区となっており、そのため内部で井戸、土壇、柱穴など多数の遺構が掘られたと解釈できる。調査地の西側には御所が控えるため、東側の備えとして調査地に堀や柵が配置されていたのであろう。H区で検出した建物地業H666も、櫓的な施設として防衛上の一翼を担っていたものと思われる。実際、文明16年（1484）を皮切りに、天文3年（1534）、天文23年（1554）、永禄4年（1561）、永禄7年（1564）と御所の東方に堀を開削した記載が頻出する。堀に囲まれた遺構群は、こうした史料と照合するものといえよう³⁾。

戦国期の末期 京都X期中～X期新（16世紀中葉～16世紀後葉）に属するもので、遺構配置図では青色で示した。遺構は少ない。これは設定期間が短いこと、並びに京都X期新としたものは桃山時代を含み、それらを第2分冊で扱ったためである。16世紀中葉以後の遺構の少なさは、前段階に属する遺構の多さと比べてもその差は歴然としている。遺構が少ない背景は明示できないが、御所の東側を防衛する必要がなくなり、空き地となっていたとも考えられる。この場所にやがて公家町が形成されることになるが、その直前期の遺構が少ないことは、新たに街区を開く場合の好条件となったであろう。それがこの場所に公家町を取り込む前提条件となったとも考えられる。以上は、公家町がここに開かれたことへの考古学的な回答を示したものと評価できるだろう。

なお、F区の富小路路面上では祭祀とみられる土壇を数基検出した。うち埋納土壇F2390には土師器皿が重ねて埋納されており（第2分冊の図版430）、土師器皿を含まない集石状の土壇も路面上に点在していた。新たに開設された公家町は、従来の条坊配置によらない街区を形成したため、富小路、正親町小路は地上から姿を消すことになったのであるが、これらの埋納遺構には新しく開かれる街区への地鎮の意味が込められていたものと思われる。

3 井戸の配置と地下水位

調査では平安時代から室町戦国期までの井戸を多数検出している。ここではまず井戸の平面的な配置関係を検討し、次いで井戸底のレベルを時代順に配列することで地下水位の変遷について考える。対象とした井戸は、平安時代前期、中期が6基、平安時代後期から鎌倉時代が11基、室町・戦国期が22基の合計39基である。

最初に井戸の平面配置について整理しておく(図47)。平安時代前期・中期の井戸は、遺構自体が少ないため分布は散在的である。全体として南西側に集中する傾向があり、これは敷地の利用状況を反映しているのであろう。富小路の西築地想定位置に2基築かれる点は注目してよい。東西二町がひとつの宅地に利用されていたため、中央部に井戸が掘られたのであろう。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての井戸は、A区からE区に5基が集中し、G区でも6基が集中する傾向がみられる。また依然として道路上に井戸が掘られており、富小路では西築地位置に引き続き2基が、正親町小路でも路面推定位置に2基が掘られていた。正親町小路上に井戸があることは、南北ひとつながりの宅地として利用されていたことを示しており、史料による宅地利用のあり方からはうかがい知れない状況であったことを推測させる。G区の南東部では、北東から南西方向に井戸が4基並ぶが、これは地下水脈の方向に影響を受けたと考えるのが自然であろう。井戸が並ぶ範囲は、池G2940の西肩部にもあたっており、両方とも地下水が得やすかったところに原因があるのだろう。

室町・戦国期の井戸は、各調査区で普遍的に検出され、2基ないし3基が接近して掘られる傾向がみられた。B区では北端・南端の2箇所、E区では南西部、F区では東端部、G区では北東端、H区では南半部などでこうした傾向が認められた。住居に近接する位置で井戸が繰り返し掘られたため、こうした傾向が表われたのであろう。一方、この時期の井戸は道路上に掘られない点が指摘できる。富小路についていえば、石垣をもつ溝E455とその西で礫敷の路面を検出しているため、道路が機能していたことは明らかである。従って、道路が本来の機能を果たしたために、道路上に井戸は掘られなかったのである。次に、井戸が全く検出されない範囲についても検討しておく。A区東半、H区中央、G区北半などの範囲では柱穴を多数検出しており、掘立柱建物や柵があったことは確実であるため、井戸は建物や柵などから離れた位置に掘られていたものとみられる。またE区南半は富小路と正親町小路の交差点部分にあたるが、ここにも井戸は掘られていない。このように井戸の検出されない箇所については、建物遺構や条坊との関係で考える必要があるといえる。

以上、井戸の配置についてまとめると、1つには自然的な要因、2つには宅地内の配置関係、この2点を考慮する必要があることになる。1についていえば、地下水脈との関係が重要であったと思われる。図47では近くに掘られた井戸同士を同じ水脈を利用したと考え、破線で囲むことで推定される水脈を示した。その方向については、G区の4基より北東から南西への水脈が想定できるが、これとは反対に北西から南東へも井戸が連続しており、水脈の存在を読みとることもできる。具体的にいうなら、B区西半→A区西半→H区南半→G区西半という流れで

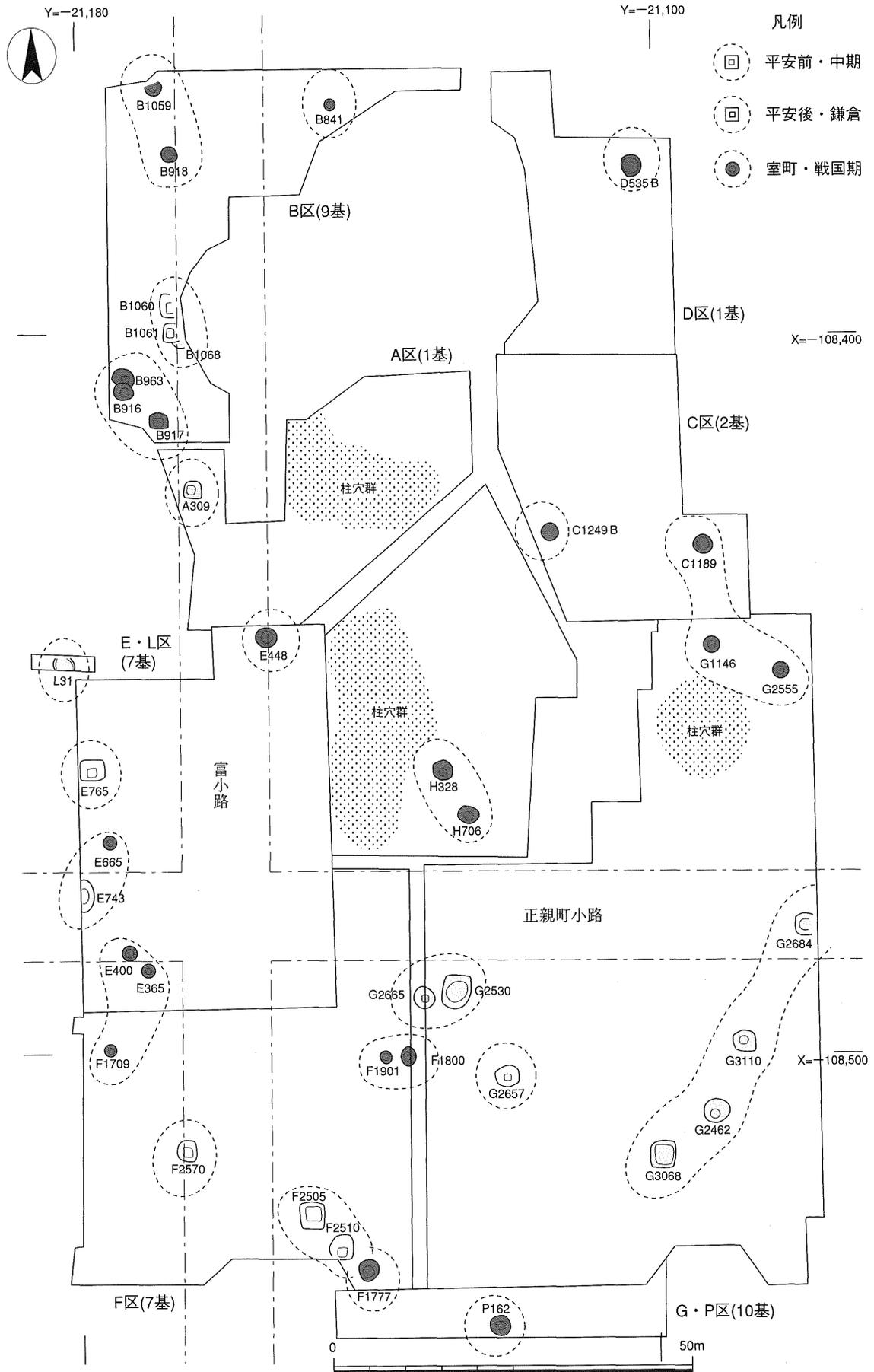


図47 井戸の分布 (破線は推定水脈)

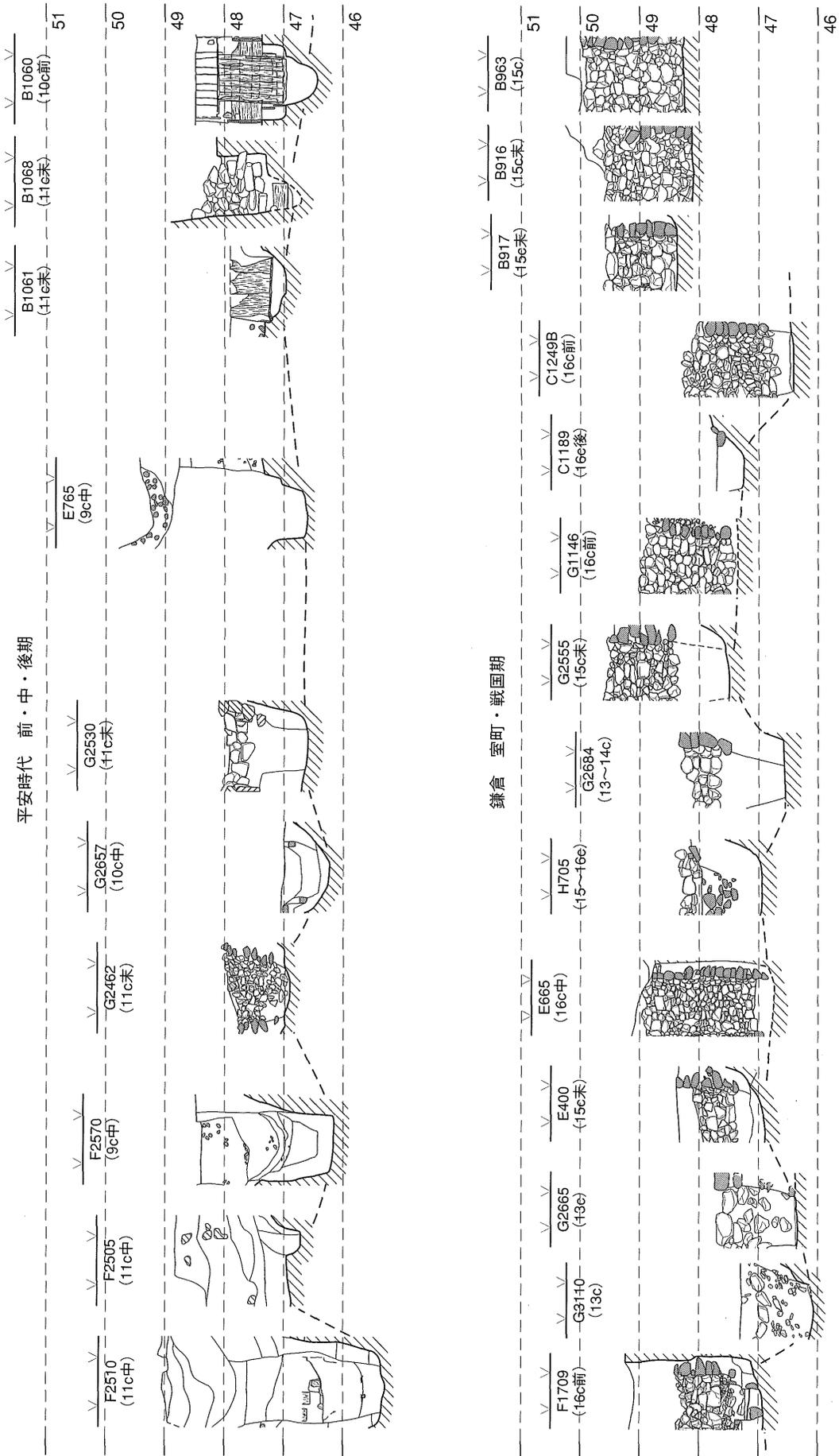


図48 井戸断面の比較

あり、またE区西辺→F区南半→P区という流れである。これに加え、C区南東→G区北東という流れも想定できるであろう。こうした北西から南東への流れは、賀茂川水系の本来の方向であり、地山面の勾配が南東側に低いことも関連性があるのだろう。

次に井戸断面図を並べることで、当時の地下水位について考えてみる。井戸底は当時の地下水位（透水層）の高さを示しており、時代別に並べることで地下水位の変遷を知ることができる。図48は平安時代から室町・戦国期までの井戸断面を並べたものである。平安時代の井戸は10基あり、底が最も深いものは井戸F2510の45.3m、最も高いものは井戸B1061の47.0mである。井戸底の大半は46～47mの間に納まるために、当時の透水層は46～47m付近にあったといえる。図48では現地表の高さも表示しており、地表面からの深さも算出できる。B区の3基が4.5mから5mで井戸底となり、最も深い。浅いものは井戸G2462で、3.2mで底となる。現地表から井戸底までの平均的な深さは4m台といえる。なお調査地は、北が高く南に低い傾斜をもつ。その傾きは距離130mに対し1.45mの高低差をもち、平野部における傾斜角としては大きい方であるが、井戸底の深さはこれに影響を受けていない。

鎌倉時代、室町・戦国期の井戸については14基を示した。平安時代と同様の比較をすると、井戸底が最も深いものは井戸G3110の46.05mであり、この時期の井戸底も46～47m付近に集中する。C1189、G1146、G2555の3基は47.5m付近に底があり、平均的に高いといえる。B区の3基（B963、B916、B917）は底が砂礫層に達しているが、48.1～48.4mと最も高い。この3基は平安時代のどの井戸よりも底が高く、この付近まで湧水があったかは疑問である。むしろ井戸でなく、収蔵用の地下施設と考えるべきかもしれない。このように、鎌倉、室町時代の井戸は平安時代の井戸と比較しても深いものがなく、地下水位に大きな変化はなかったというのが、今回の検討結果である。ちなみに、江戸時代の井戸底は、確認できたものはC区・D区にあり、45.6m、46.2m、46.3mであった。約1mほど深いだけであり、このデータもさほど深いとはいいがたい。ただし、江戸時代の井戸は大半が底に達していないため、底の深い井戸の数値は得られなかった。京都市内の井戸は、時代が新しくなるほど深いとされてきたが、平安時代から室町・戦国期まではさほど変化せず、深くなるのは江戸時代に入ってからのことであったと考えてよいだろう。

第2節 出土遺物について

1 土器群の変遷について

この第1分冊では、平安時代から戦国期終わり頃までの様相を記してきた。その際時代判定の根拠となったのが土器の年代観である。平安京、京都における土器の編年作業については、既に大筋が確立されつつあり⁴⁾、さらには、最も普遍的に出土する土師器皿の詳細な編年案についても、近年改めて提示されている⁵⁾。ここでは、既往の成果に依りつつ、出土土器群の特徴と位置づけについてまとめておきたい。

平安時代前期の前半代 京都Ⅰ期中～京都Ⅱ期古（8世紀末～9世紀中葉）に属する。良好な土器群はない。最古に位置づけられるのは、石敷G3578出土資料であるが、単独の遺構というより流路F2550を埋めた際の一部とみられ、遺物も須恵器2点に留まった。流路F2550にはこの段階のものが含まれる。土師器碗・皿のうち外面をヘラケズリで調整する個体は、F区（46-1～4）、G区（45-21、22）、X区（45-29、30）から出土している。この他では、深い器形の杯（46-5）、耳が付く土師器甕（45-24）、赤色顔料を塗った土師器高杯（45-25）など、長岡京期の製作を引き継ぐ個体が出土している点は注目される。

京都Ⅰ期の土師器碗・皿類は、外面をヘラケズリで調整するものが多く、こうした個体は、土壙F2639（43-1～4）、井戸E765（43-14～17）でも出土している。また外面をヘラミガキで調整する土師器も、この段階を特徴づけるものであり、土壙F2639出土の蓋（43-5）、井戸E765出土の碗（43-13）にみられた。土師器高杯は製作が丁寧である。脚部は7角形にヘラケズリで面取りされる（43-29～33、44-17）。流路F2550出土の彩色された高杯（45-25）は、断面形が唯一正六角形に面取りされる。この段階から白色土器が含まれる。土壙G3551出土の碗（44-10）は厚手で、ヘラミガキも極めて丁寧な個体である。また、皿（44-11）は緑釉陶器皿と全く同じ器形を呈し、出現期の白色土器が緑釉陶器と密接な関係にあったことを示す資料である。

平安時代前期の中頃から中期初め 京都Ⅱ期中～Ⅲ期古（9世紀後葉～10世紀中葉）に属する。

流路F2550はG区、F区、X区にまたがる斜め方向の自然流路で、整地の主体はこの段階にある。またここからは、製塩土器（46-38～42）、脚付きの土師器盤（46-43）、線刻文様をもつ須恵器長頸壺（=壺G、47-20）、緑釉陶器把手付瓶（47-44）、白色土器蓋（47-46）など特徴ある土器が出土している。また、土師器杯の内面にハケメをとどめる個体（46-11、13、15、16など）がみられる。同様のものは土壙G3573出土土師器碗（44-34）にもみられ、調整手法の省略化が指摘できる。

溝E845（図版48、49）出土土師器では、碗と杯の区別がつきにくい。後述の溝E827出土例より口径は小さく、器高は浅い。高台をもつ杯も、高台の退化が著しい。高杯脚部も断面は円形になりつつあり、粗雑化が進行している。白色土器は底部が糸切りの平高台で、内外面のヘラミガキも省略する個体がみられる。

溝E827（図版49）出土土師器では、碗、皿、杯の区別がまだ明瞭である。内容は先述した溝E845に共通するが、こちらの方が古い特徴が残されている。

土壙F2631（図版50）出土土師器では、皿は区別できるが、碗と杯の区別はつきにくい。高台がつく杯も1例のみとなる。高杯は杯部が薄手となり、成形は雑になる。脚部は断面が円形化し、ヘラケズリによる面取り位置も上方から始まる。須恵器鉢では口縁端部が玉縁を呈するものが主流となる。いずれも10世紀以後に普及する要素である。

井戸B1060（図版51）出土土師器では、皿は区別できるが、碗と杯の区別はさらに不明確と

なる。口径の小さな1点(51-4)は椀としたが、他との個体差はみられない。杯には口径21cm台の大型品(51-10)が含まれる。緑釉陶器では硬質と軟質があるが、軟質は1点(51-25)のみであった。以上述べた10世紀前葉までの遺物は比較的豊富にある。しかし10世紀中葉から後葉の遺物は少なく、資料の連続性という点では問題を残した。

平安時代中期の中頃から後半代 京都Ⅲ期新～Ⅳ期中(10世紀末～11世紀中葉)に属する。

土壙A416(図版51)出土土器では、黒色土器椀はB類(51-40～42)が主体となる。

土壙B1013(図版52～54)出土土器は、種類と数量の豊富な一括土器群である。土師器皿では、従来からの椀、皿、杯が統合されたかたちで「皿A」(52-1～38)となり、この皿A土師器皿が主体となる。しかしこの段階の皿Aは、口径が大きいこと、器壁が薄いことなど、10世紀的な様相を留めている。またこの段階から、新たに「皿N」(52-39～60)が出現する。しかし土壙B1013では皿Aに対して圧倒的に少ない(皿Nの比率は4.8%)。皿Nには大型から小型まであり、それぞれ個体差が大きい。口縁端部はそのまま収めるものが多く、後に盛行する「二段ナデ」は確立していない。またコースター形の浅い皿(皿Ac)は出土していない。黒色土器椀はB類(53-17～20)が大半を占めるが、A類も残存する。白色土器が多いことも特徴である。三足盤(54-26～29)は、皿の体部に三足を貼付けた白色土器特有の器形である。白色土器の高杯(54-37、38)は、器壁が厚く、端部もそのまま収める。脚部は丁寧に面取りする。土師器高杯の脚部が面取りしなくなることは、好対照をなす。

土壙S71(図版55)出土土師器には、1点だけ皿Ac(55-40)が含まれる。皿Nは口縁端部の外反が進行し、ナデ調整も二段ナデに近づきつつある。皿Aはまだ薄手であり、10世紀的な様相を留める。

井戸F2510掘形(図版56)出土土師器では、皿Aは厚手と薄手が混在する。黒色土器椀は、すべてB類となり、ヘラミガキ調整もまだ丁寧である。

井戸F2510枠内(図版57)出土土師器では、皿Aは厚手となり、口縁端部の立ち上がりもにぶくなる。皿Nでは口縁端部の外反が強くなり、二段ナデが完成の域に達する。黒色土器のB類椀(57-25)とほぼ同形態の瓦器椀(57-26)が共伴する。白色土器では高台の高い皿(57-39)が出現するが、これは87-33のような器形とみられる。

なお、灰釉陶器、緑釉陶器の下限はⅣ期中までとみられるため、次の段階で出土する個体は混入遺物とみるのがよいであろう。

平安時代後期 京都Ⅳ期新～Ⅴ期新(11世紀後葉～12世紀後葉)に属する。

土壙G2990(図版57)出土の瓦器椀(57-57)は、既に内外面のヘラミガキが雑になりつつある。

井戸G3068(図版58)出土の土師器皿Nは、小型皿(58-5、6)と大型皿(58-7～12)に二分化している。京都市内では、以後この傾向が続く。土壙H842(図版58)出土の土師器皿Nも、小型皿(58-24～32)と大型皿(58-33～44)に二分化している。

土壙G3290(図版59)出土の土師器皿Nでは、体部を内湾気味に処理するもの(59-10、11)

が出現する。この傾向は最初に大型皿でみられ、以後、大型皿、小型皿とも顕著となる。

井戸B1068(図版59)出土の土師器皿A(59-46~50)は、口縁端部が肥厚させただけとなる。また皿Nの大型皿(59-55~60)は体部が内湾し、そのまま立ち上がる形態が定着する。

土壙K46(図版60)出土の土師器皿も、全般的にこうした傾向にある。

溝G3360(図版61)出土の土師器皿Ac(61-6)は、端部を内側に折り返し、そのまま収める。皿Acの端部は、本来は巻き込んで処理していたため、明らかな退化形態である。

土壙G2973(図版61)出土の土師器皿N(61-62)は、体部が内湾し、口縁部の二段ナデも不明瞭である。

池G2940(P区、図版62)出土の土師器皿Nには、口縁部の横ナデが「一段ナデ」となるもの(62-35、37)が出現する。これらは鎌倉時代の土師器皿にみられる特徴である。瓦器では盤(62-41)が出現する。この段階の瓦器盤は、体部が丸みをもち、器形も深い。

溝C1226(図版63)出土の土師器には、皿Aはみられない。皿Nでは、口縁部の調整は、二段ナデのものと同一段ナデのものが混在する。口縁端部は、内側に傾斜して収めるもの(63-21、32、34)や、3角形化するもの(63-26)が現われる。白色土器では、接合部の瘤が退化し、脚部断面も円形化する(63-38)。

鎌倉時代 京都VI期古~VII期新(12世紀末~14世紀前葉)に属する。

土壙P108(図版63)では白色系の土師器皿S(63-43、44)が2点出土している。ともに底部と体部の境界が明瞭で、椀状を呈しており、皿S初期の特徴を有している。

溝P124(図版64・65)出土の土師器皿は、大半が乙訓在地形の土師器である。京域主流のものより製作は稚拙であり、口縁端部の横ナデ調整もほとんどが一段ナデで処理する。瓦器の中には、丁寧に製作された小型の椀(65-1~11)が含まれる。この段階に属するものであるが、今回の調査では当遺構以外の出土はない。瓦器鍋(65-16)が出土している。比較的浅い器形であるが、受部は外方に大きく張り出す。瓦器盤(65-17)は体部が傾斜し、容量は浅くなる。器壁は薄く、内外面もヘラミガキ調整しない点で、池G2940(P区)出土例(62-41)より退化している。須恵器の鉢(65-18)が出土している。端部はそのまま収めており、後のような3角形化はまだみられない。

井戸E743(図版66)出土の土師器皿N(大型皿)は、口径が13cm台まで小型化し、口縁部の横ナデも一段ナデで処理する。口縁端部は外側に面をもつもの(66-25~27、31)が定着する。皿Sには浅いもの(66-32)がみられる。須恵器鉢では、口縁端部が3角形化したもの(66-36、37)が出現する。東播磨系の捏ね鉢と称されるものであるが、まだ端部は肥厚していない。

井戸A309(図版66)出土の土師器には、口径が21cmに及ぶ特大型の皿(66-48)や、体部が大きく開く鉢(66-50)がある。

土壙E734(図版66)出土の土師器皿N(大型皿)は、口径が12cm台まで小型化している。

土壙E738(図版67)出土の土師器皿N(大型皿)も、口径12cm台まで小型化している。体

部は外反し、端部は立ち上がり気味に収める（67-7～10）。白色系の皿S（67-11）はまだ椀型の形態をもつ。瓦器椀（67-12）は作りが雑となる。

井戸L31（図版67）からは特大型の土師器皿（67-43～46）が出土している。同じものは、井戸A309（66-48）、土壙L28（69-10～12）から出土している。製法手法については、底部を型にはめ込み、その上に口縁部を付加させて製作したと考えられることを前述した。瓦器盤（67-53）が出土しているが、体部は浅くなり、ヘラミガキ調整もみられない。

土壙G2477（図版67）出土の土師器皿S（67-61）は、体部が丸くなり、器壁も薄い。

土壙F2600（図版68）出土の土師器皿N（大型皿）には、口径11cm台のもの（68-29、30）が含まれる。皿S（68-34～39）は体部が丸くなり、相対的に底は小さくなる。器壁もさらに薄くなり、14世紀的な様相が顕著となる。瓦器盤（68-46）はさらに体部が浅くなる。須恵器鉢（68-51）は、口縁端部が肥厚し始める。

溝G1938（図版69）出土の土師器皿では、皿Sに小型皿（69-17～19）が出現する。うち17の底は既へ上げ底気味を呈する。皿Sの大型皿（69-20、21）は、薄手で体部が直線的に外上方に延びる。瓦器鍋（69-22）は、受部が丸く内湾するようになる。

土壙B1037（図版69）からは乙訓在地形の土師器皿（69-28、29）が出土している。これらは溝P124出土例（図版64）より小型化しており、同じ特徴をもつ土器群の中での変化を認めることができる。

室町時代の前半代 京都Ⅶ期新～Ⅷ期新（14世紀中葉～15世紀前葉）に属する。

土壙G2126（図版70）出土の土師器皿（小型皿）には、底部が盛り上がる皿Sh＝「ヘソ皿」が含まれる（70-14、15）。ただし、この段階の皿Shは底部の盛り上がりが少ない。須恵器鉢（70-19）は口縁端部が肥厚し、後に盛行する形態を有する。

土壙H723（図版70）出土の須恵器鉢（70-53、54）は、口縁端部の3角形化がさらに進展している。

土壙D491（図版71）出土の土師器皿N（小型皿、71-2、3）は、底部と体部の境界に凹線がめぐる。これは15世紀的な様相である。

土壙C756B（図版71）からは瓦器火舎（71-12）が出土している。体部は内湾し、外面には菊花文を押印する。井戸B918からも同様の瓦器火舎（71-27）が出土している。こちらは内外面を丁寧にヘラミガキで調整する。瓦器火舎は大和産とされる。

この段階は遺構数が乏しく、確認できる遺構の下限も15世紀初めまでである。15世紀前葉から中葉期の遺物はきわめて少ない。これは応仁・文明期の社会的な動乱と関連するためであろう。

戦国期の前半代 京都Ⅸ期古～Ⅹ期古（15世紀中葉～16世紀前葉）に属する。前段階と比較して遺構数が多い。遺跡全体からみても、最も遺構数の多い段階にあたる。

土壙B1043（図版71）出土の土師器皿Nでは、小型皿（71-30～33）は歪みが大きくなる。また皿Sh（71-34～37）も底部の盛り上がりが強くなり、ヘソ皿としての形態が定着する。こ

第2節 出土遺物について

の段階で皿Sの大型皿（71-38、39）が出現する。この皿Sは、鎌倉時代から室町時代前半代にかけて盛行する白色系の皿Sとは別系統の土師器皿とみられるが、通例に従い「皿S」の名称を用いる。桃山時代から江戸時代の全期間を通じて土師器の主流となる器形である。

土壙E753（図版72）出土の土師器皿Sh（72-27、28）は、体部が開き気味になり、高さが減じる。

土壙A359（図版73）出土の土師器皿Sは、小型皿、中型皿、大型皿の3種に区分できる。瓦器鍋（73-35）は体部が傾斜し、さらに浅くなる。受部は肥厚させただけの形状に近づく。この資料に先立つ資料として、土壙E753出土例（72-35）があげられるが、形態差は大きい。土壙E729出土の瓦器羽釜（73-43）では、鐺の貼付けが雑となる。

土壙G2897（図版74）出土の土師器皿S（大型皿）は、底部内面に圏線がめぐる（74-14、15）。これ以後、中型皿と大型皿の底部内面には圏線がめぐるようになる。瓦器鍋（74-16）は受部が肥厚するだけとなり、先の土壙A359出土例（73-35）と同形態となる。

土壙B992（図版74）出土土器には常滑写しの信楽陶器の甕（74-33）が含まれる。瓦器羽釜は形態変化がわかりにくい器形であるが、土壙C777出土例（75-23）は口縁端部が3角形化する点に特色がみられる。同様の特色をもつ瓦器羽釜で本例に先立つものとしては、土壙B1043出土例（71-42）がある。また土壙G2877出土瓦器羽釜（75-24）は、全体が厚手に作られ、成形も雑で鐺の突出は短い。

溝F2410（図版76）出土の瓦器鍋（76-17）は従来品に比べより浅い器形となる。体部が内湾する瓦器火舎では文様をもたないもの（76-22）も出現する。この他、瓦器火舎には体部が直方体のもの（76-24）や、鉢形のもの（78-26）も出現する。

堀G2630（図版79）出土の瓦器羽釜（79-37）は、底部が平坦となり体部との境は明確となる。長方形の箱形を呈し、四隅に大型の脚をつけた瓦器火舎（79-38）が出現する。外面上部の文様帯は、体部が内湾する瓦器火舎と同じである。

溝E455西肩（図版81）出土の土師器皿S（81-7、8）は、体部が直線的に外上方に延び、桃山時代的な形態をもつ。

土壙B962（図版81）出土の土師器皿では、皿N、皿Shはなくなり皿Sのみとなる。これらは京都X期にみられる様相である。本例より信楽産の播鉢（81-34）が含まれる。信楽産播鉢は、16世紀初めを境に備前産播鉢に取って替わるようである。

土壙E584（図版83）出土の土師器皿N（83-1、2）は、皿Nの最終形態である。同様の形態をもつ個体としては、他に土壙B916出土例（78-32、33）、堀G2630出土例（79-18、19）、土壙G2821出土例（81-19）がある。

土壙B996（図版84）出土の土師器皿Sでは、底部内面の圏線は中型皿以上にみられる。

井戸F1901（図版86）出土の瓦器鍋（86-3）は、受部が肥厚する形状となり、本来の形態を失っている。

戦国期の末期 京都X期中～X期新（16世紀中葉～16世紀後葉）に属する。この段階の土師

器皿Sはさらに浅くなる。土壙J151出土の瓦器火舎(87-14)は、小型品であるが脚部は大型品の脚部を付けている。

以上、概述してきた土器類の変遷は、観察者が認識できた範囲内での記述であるため、不十分な点があることは否めない。また土師器皿N、皿Sにおける小型皿、中型皿、大型皿の区別は、註5とは異なる部分があることも付記する。

2 白色土器と藤原道長関連の遺跡

白色土器の特徴 白色土器とされるものは、低火度焼成のため軟質を呈する一方で、白色の胎土と焼き上がりをもった無釉の焼き物のことである⁶⁾。器形には椀、皿、三足盤、高杯が通有にあり、稀に壺や蓋もある。器形の成形はロクロで行なわれ、下半をヘラで切り離すため、底部は平高台、蛇の目高台、輪高台などに分類されるが、いずれもヘラの当て方による差である。器面は丁寧にヘラ磨きされる。このようなロクロ成形とヘラケズリによる底部の成形、ヘラミガキによる器面調整、そして椀、皿を主体とした構成は、緑釉陶器に共通するものである。また時代とともに製品は小型化し、調整手法も雑なものとなる。こうした変化の方向も緑釉陶器と共通する。生産地は山城内に推定される。

緑釉陶器は貴族層が使用する食器であり、平安京内では普遍的に出土する。しかし白色土器は平安京内においても出土が限られる。白色土器が主に出土するのは平安宮内裏、中でも内裏北半の「後宮」と呼ばれた特別の区域である。その他、京の内外に置かれた離宮、並びに皇族、高級貴族の邸宅と推定される場所から出土する。このことから、白色土器は緑釉陶器以上に使用が限定された儀式用の食器であったことが想定されるのである。

調査地での出土例 この調査地でも多くの遺構から白色土器が出土している。しかし内容を検討していくと、出土遺構は多いにもかかわらず、出土点数は少量に限られることがわかる。その中で、これから紹介する土壙B1013出土の白色土器は、質・量とも特出すべき内容を備えている。ここではまず、土壙B1013出土例の資料的位置付けを知るため、調査地全般での白色土器の出土状況を概観しておく。

土壙G3551(京都I期新～II期古)出土例が最古である。椀(44-10)、皿(44-11)がある。椀は器壁が厚く、底部はケズリ出しの平高台で、内外面を丁寧にヘラケズリする重厚な個体である。皿は緑釉陶器皿と全く同じ器形をもつ。井戸F2570からは皿の底部(44-33)が出土している。蛇の目高台をもち、緑釉陶器と同じ形態をもつ。溝B1058からは皿(44-41)と高杯(44-42)が出土している。皿はヘラケズリで成形するが、仕上げは雑である。高杯の接合部には粘土を厚く巻き付ける。これは土師器高杯にはない特徴である。流路F2550上層からは皿(47-45)、蓋(47-46)、三足盤(47-47)が出土している。皿は平高台で内面にはヘラミガキが施されるが、外面は横ナデ調整のみである。蓋は丁寧なヘラミガキが施される。溝E845からは椀(49-9～13)、皿(49-14)、三足盤(49-15)が出土している。椀では大型品が出現するが、ヘラミガキは雑になる。溝E827からは椀(49-38～41)、盤(49-42)が出土している。椀では外面に墨書するものがある。盤は底部をヘラケズリで成形し、高台を貼付ける。土壙F

第2節 出土遺物について

2631からは皿（50-49~51、53、55）、椀（50-52、54）が出土している。50-52は糸切りによる平底部で、体部は横ナデ調整のみである。土壙A416出土の椀（51-48、49）も調整は横ナデのみとする。以上に続いて、当土壙B1013の白色土器（図版54）がある。ここでは皿、三足盤、椀、高杯、蓋が出土しているが、内容については次項で解説する。

以下では、土壙B1013より後出の資料について概観する。井戸F2510掘形からは椀（56-44）、高杯（56-45、46）が出土している。高杯接合部の瘤は退化している。井戸F2510枠内からは皿（57-37~40）、椀（57-41）、高杯（57-42）が出土している。皿では糸切りによる平高台をもつものの他に、高い貼付け高台をもつものが出現する。椀の底部はケズリ出しによる輪高台であるが、高台が短くなる。高杯脚部はヘラケズリで面取りするが、断面は円形に近くなる。井戸B1061からは椀（59-26）が出土している。底部はヘラキリのままである。土壙K46からは高杯（60-68）が出土している。接合部の瘤は退化しているが、脚部には面取りが残り、断面10角形ほどに加工される。池G2940からは椀（61-37）が出土している。小型品で底部は糸切りである。これ以後は小型品のみとなる。

土壙G2405出土の高杯（61-49）は、杯部が小型化し直線的に外上方に延びる。土壙G2498出土の椀（62-7）も、土壙G2405出土例と同様の直線的な体部をもつ。土壙P242からは皿（62-12、13）、椀（62-14）が出土している。62-12は内湾する体部をもち、底部はヘラキリのまま処理する、類例の少ない器形である。62-13、14は糸切りによる平高台をもつが、小型化している。池G2940（P区）からは皿（62-43~46）、高杯（62-47）が出土している。皿は土壙P242出土例（62-13）と同じ形態である。高杯では脚部の面取りが存続している。溝C1226出土の高杯（63-38）は、接合部の瘤は目立たず、脚部の面取りもなくなる。溝P124からは皿（65-19~21）、高杯（65-22~27）が出土している。皿は池G2940（P区）出土例（62-13）よりさらに小型化している。高杯脚部は面取りと瘤状のふくらみを留めるものが多い。数量の多さは注目してよい。井戸E743出土の高杯（66-39）も、瘤状のふくらみを留める。井戸L31出土の皿（67-55）は、さらに小型化している。土壙F2600からは高杯の脚部片（68-41、42）が出土しているが、面取りを留めるため混入品の可能性がある。土壙B1037出土の高杯（69-40）は、脚部がさらに細くなり、最終末の形態を示す。

以上をまとめると、白色土器は京都I期新（9世紀前葉）以後に出現し、京都VII期新（14世紀前半）まで存続した。器形は皿、椀、高杯が主流であったが、盛行期には三足盤や蓋が加わった。製作手法は、出現当初は緑釉陶器と同じ方法が採られたが、次第にヘラミガキ調整は省略され、製品の小型化、粗雑化をまねいた。ケズリ出し高台であった底部も、糸切りによる平高台へと変化した。特に京都IV期新~V期古（11世紀末~12世紀初）以後は、製品の小型化が顕著となる。緑釉陶器が京都IV期中（11世紀中葉）頃に終焉を迎えるのに対し、白色土器では小型化した皿、椀、高杯などが生産され続けたといえる。

土壙B1013出土の白色土器 白色土器が大量に出土した土壙B1013は、B区の中央南寄りにあり、北辺四坊五町の東端、富小路の西築地に近接する。土壙からは遺物収納コンテナ20箱に

及ぶ遺物が出土した。遺物の大半は土器類で、土師器を中心に黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器があり、全器種が揃っていた。個々の保存状態も良好であり、10世紀末から11世紀初めに属する一括性の高い土器群である。

白色土器には皿(54-20~25)、三足盤(54-26~29)、椀(54-30~35)、高杯(54-36~38)、蓋(54-39)がある。前の4者はほぼ同量あるが、蓋は1点のみである。皿は口径13cm前後の扁平な体部をもち、底部にはケズリ出しによる輪高台がつく。全面を横ナデ調整する。三足盤は、皿と同じ体部に三足を付けた白色土器特有の器形である。椀のうち、54-32~35は灰釉陶器や緑釉陶器の椀と同じ形態をもつが、54-30、31はこれらより小型で、底部は糸切りによる平底である。後者の平底椀が、以後中心となる器形である。高杯は器壁が厚く、口縁端部も外反して収める。脚部は丁寧に面取りされ、杯部と脚部との境には粘土を巻き付けて接合する。蓋は天井部をヘラケズリし、つまみを貼付ける。

白色土器の出土点数は、須恵器や緑釉陶器を凌駕している。ちなみに、土師器以外の破片数は、黒色土器68片(土師器を除く全体の12.3%)、須恵器494片(同30.9%)、灰釉陶器68片(同4.3%)、緑釉陶器257片(同16.1%)、白色土器552片(同34.5%)、輸入陶磁器28片(同1.7%)を数える。これによれば、白色土器は全体の最上位に位置し、比率の高さが注目される。土師器に次いで白色土器が多いということは、廃棄された土器群が特別な用途に使用されたことをうかがわせる。既往の資料でこのような構成をもつものに、内裏SK25出土資料がある⁷⁾。こちらは10世紀後葉に属する内裏後宮の西端に掘られた土壌であり、本例よりやや時期は古いが、そこで使用された土器の内容を知る重要な資料となっている。そのような特別の土器群と共通性が高いということは、内裏後宮で実施されるような儀式がこの付近でも実施されたこと、その際の不要品がここに廃棄されたことを想起させるものである。

調査地と白色土器の関連性 調査地は平安京の北東隅に位置し、10世紀末から11世紀初め頃には顕著な遺構がないことは、本章第1節で記述したとおりである。この点からも白色土器が大量出土した土壌B1013の存在は特異である。白色土器の使用が皇族や高級貴族に限定されることを前述したが、そうした視点で周囲の歴史の変遷をみた場合、藤原道長に関連した施設が多いことに気付く。その代表が、土御門大路の南に所在した「土御門殿」(京極殿)、並びに「法成寺」である。ともに藤原道長の邸宅と私寺であり、10世紀末から11世紀初めに形成されている。また道長関係の施設としては、土御門殿の西となり道長の妻倫子の邸宅「鷹司殿」、五町に西接する四町にも道長邸の一つ「一条第」があった。さらに具平親王の邸宅「土御門第」が置かれた六町には、藤原氏の家政機関がおかれ、それに由来して「御倉町」と呼ばれていたことも重要となる⁸⁾。

藤原道長は、長徳元年(995)に内覧宣旨をうけ藤原一門の棟梁(氏長者)になると、次々に娘を入内させ、政治権力を独占するようになった。そして、寛仁2年(1018)頃には天皇、東宮は道長の孫、三后も道長の娘という比類なき権勢の頂点に立つ。その道長にとっては、土御門殿や法成寺が儀式を執り行なう「ハレ」の場であり、正親町小路から一条大路にかけては裏

方、「ケ」に相当したことであろう。そのために、六町には器物を管理するための御倉町がおかれたのである。御倉町には儀式に必要な様々な器財が保管されていたことと思われる。その後ろ側にあたる五町が、不要品の廃棄場に利用された可能性は大いにありえたであろう。平安京北東隅の五町から白色土器を大量に含む良好な土器群が出土した背景には、このような藤原道長に関連した施設の存在を考えて良いであろう。

3 乙訓在地形の土師器皿について

京都盆地の南西部に位置する向日市、長岡京市、大山崎町の2市1町は、旧郡名から乙訓地域と呼ばれる。長岡京廃都後、平安京・京都の西郊に位置する乙訓地域は、京都に在住する貴族の別業や寺院、荘園の経営などを通じて、古代から中世にかけて人的交流が行なわれてきた。しかし、その実態の多くについては、文献史料でしか知られていない。今回の調査では、乙訓地域からの諸遺跡

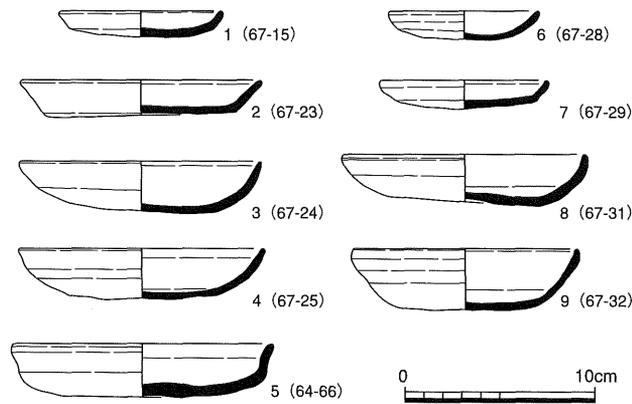


図49 土師器皿実測図
(左は乙訓在地形、右は京域主流、()内は遺物番号)

から主体的に出土する土師器皿（以下「乙訓在地形」仮称とする）が、溝P124（＝土壙G3300）からまとまって出土した。これらは京域で主流をなす土師器皿と比べ特徴が明確である⁹⁾。乙訓在地形土師器皿の出土は、乙訓地域から京都への物資の移動を考える上で、重要な考古資料となった。以下、土師器皿の特色と移動の背景について考える。

G区とP区の境界で検出した鎌倉時代前期の溝P124（北肩部を先に調査したため「土壙G3300とした」）は東西方向の溝であり、東側は戦国期の南北方向の堀G1940に削平されていた。溝の規模は幅2.0m、深さは0.75mあり、長さは東西約25mにわたり残存していた。溝の埋土は焼土・炭を多く含み、土器類が投棄された状態で多量に出土した。土器類は土師器を中心に、瓦器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器があるが、圧倒的多数がここで紹介する乙訓在地形土師器皿である。

乙訓在地形の土師器皿をみていくと、口径8cm前後の小型皿（図49-1）、口径12～14cm台の大型皿（図49-2～5）がある。小型皿と大型皿は、口縁部を内湾気味に立ち上げてそのまま収めるように処理する。まれに内面にハケ目調整を残すものがある。口縁端部を3角形に処理し、京域主流風に仕上げるもの（図版64-83、84）もあるが、処理は不十分で、口縁が倒れて浅い皿状を呈するもの（図版64-77～79）もある。図49-3・4は比較的深い器形であるが、さらに深い器形（図版64-81、82、67-22）もあり、これらは京都市内では出土例がない器形である。

京域主流の土師器皿では、小型皿（図49-6、7）、大型皿（図49-8）、白色系の皿（図

49-9) がともに出土している。これらは京都市内で一般的に出土するものである。以上の比較から乙訓在地形の土師器皿は、京域主流の土師器皿を模倣しているが、在地産土師器の範囲を脱け出せていない点が特徴としてあげられる。

溝P124を検出した地点は、平安京左京北辺四坊七町に該当する。この七町は平安時代前期には藤原良房の邸宅、染殿がおかれたが、平安時代後期から末期にかけては、南半が清和院に分割され、その後は鎌倉時代に至った。鎌倉時代の溝P124は、正親町小路南側溝から45m南に位置しており、条坊に規制された宅地内の区画溝と考えられる。正親町小路とこの溝の間には、井戸、土壙などがみられたが、宅地の様相は不明である。

この溝から出土した土師器皿については、まず乙訓在地形の土師器皿が多数を占めることが注目される。乙訓在地形土師器皿についても、乙訓地域では出土が希なコースター形皿が含まれること、大型皿、小型皿においては丁寧な製品の多い点が注目できる。瓦器においては内面に暗文をもつ椀が出土している。この椀は丁寧な製作による優品であり、平安京外では出土が希なものである。白色土器が多い点も重要である。以上から、溝P124から出土した遺物は一括性が高く、地方から京内の貴族階層に献上された物品の一部とみることができる。乙訓地域で土師器を焼成した窯の存在は、まだ知られていないが、乙訓地域の荘園と京内貴族との関係を考える具体的な資料となるであろう¹⁰⁾。

4 軒瓦の分布と緑釉軒瓦について

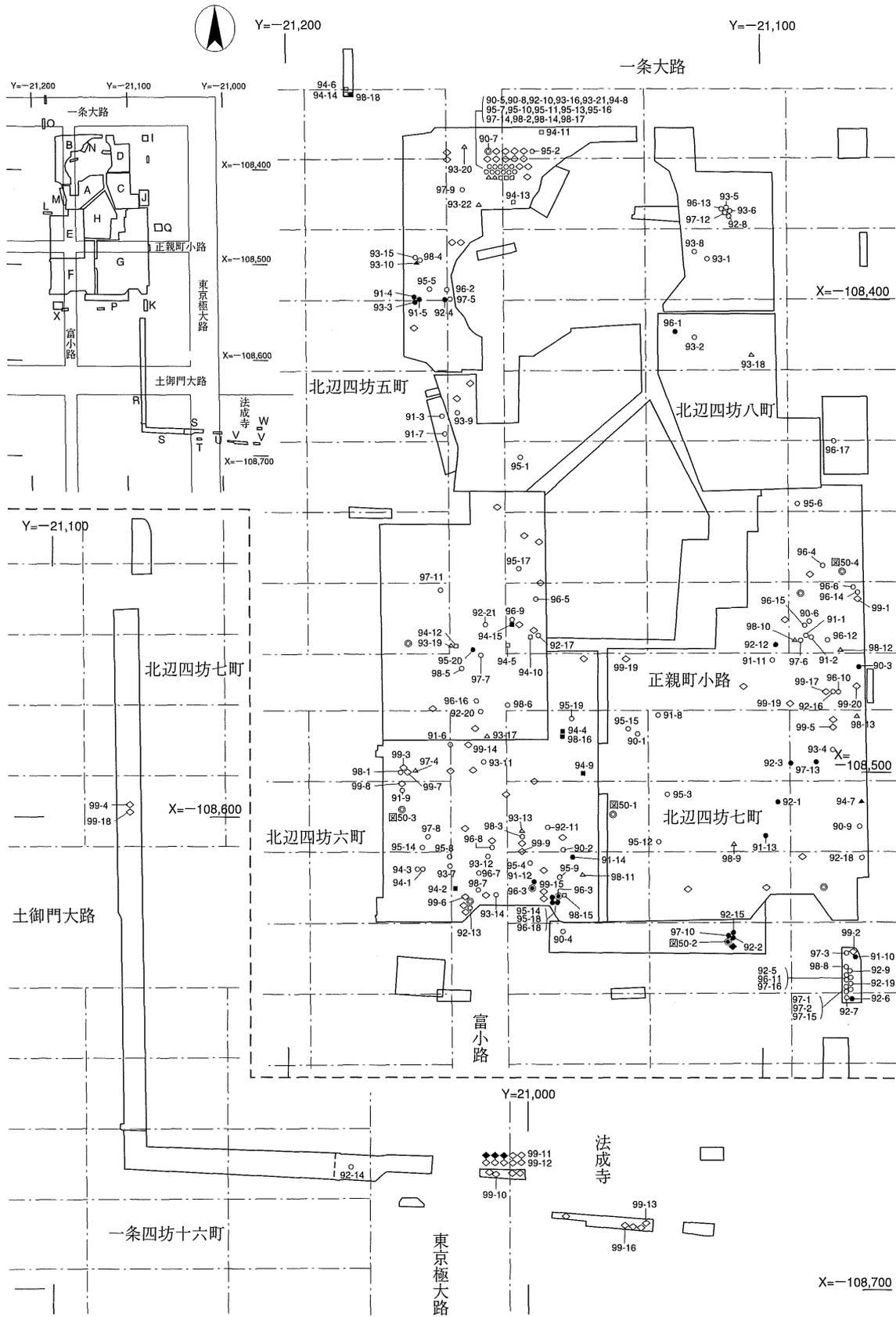
今回の調査で出土した平安時代～室町時代の軒瓦は305点に及ぶ。また平安時代前期から中期に、平安宮あるいは法成寺に葺かれていたと考えられる緑釉軒瓦、緑釉丸瓦・熨斗瓦、鴟尾なども出土している。これらの出土遺構は、遺構の性格、時期などは様々であった。調査地は、近世の公家町形成期の開発を除けば、京都市街地のような中世～近代の土地造成による人為的な遺物の他所からの移動は少ないと思われる。この観点から、平安時代～室町時代の軒瓦出土地点の分布図を作成した(図50)。ここでは分布図を基に平安京左京北東隅の様相、並びに京域外に造成された法成寺について考察する。また法成寺に関連するとみられる緑釉軒瓦についても言及しておきたい。

(1) 軒瓦の分布について

北辺四坊五町 土壙B1013からは平安時代中期～後期の軒丸瓦(図版91-4、5、93-3)が出土している。また井戸B1061からは平安時代後期の軒丸瓦(図版92-4)が出土している。出土地点を含む西四行北三門では、法成寺跡出土と同文の平安時代中期の軒平瓦(図版96-2)と、平安時代後期の軒丸瓦(図版93-15)、軒平瓦(図版97-5、98-4)など、平安時代中期～後期の軒瓦出土の密度が高い。このことから、後世の遺構出土という問題点はあるものの、これらの軒瓦は図45に示した邸宅に関連する可能性もある。

北辺四坊六町 平安時代前期～鎌倉時代の軒瓦が分布する。特に平安時代前期～中期の軒瓦が多く、中期の緑釉軒平瓦・熨斗瓦(図51、図版99-3、7、8)もみられた。また富小路路面が推定される箇所では、平安時代中期～後期の軒瓦と、緑釉丸瓦・熨斗瓦が11点出土してい

第2節 出土遺物について



○●平安時代 ●◎緑釉軒瓦 ◆◇緑釉丸瓦・熨斗瓦 ▲△鎌倉時代 ■□室町時代
 ※中を塗りつぶしたものは、同時代の遺構から出土

図50 軒瓦、緑釉軒瓦・丸瓦・熨斗瓦出土地点 (番号は遺物番号)

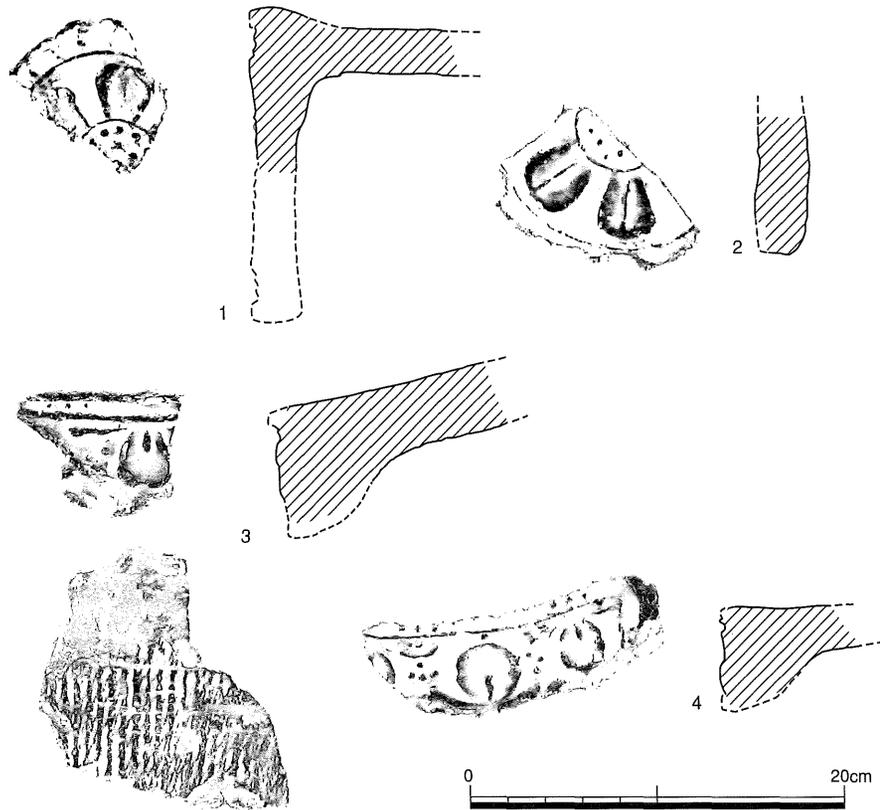


図51 緑釉瓦拓影・実測図

る。染殿内に建てられた殿舎との関係、あるいは富小路路面の敷設時期にかかわることとして、注目される。

北辺四坊七町 七町内では、平安時代の軒瓦が40点、緑釉丸瓦・熨斗瓦も14点出土しており、他の町よりも出土点数は多い。平安時代の遺構から出土したのは、西一行北三門で検出した平安時代中期の井戸、土壇などで、平安時代中期の軒瓦が7点出土している。なかには緑釉軒平瓦（図版96-3）、「修」銘均整唐草文軒平瓦（図版95-14）も出土している。また近世の遺構からではあるが、平安時代前期の軒平瓦（図版95-4）も出土している。七町の北東部に広がる平安時代中期後半～後期の池G2940（P区）からは、中期の緑釉軒丸瓦（図51-2）、緑釉丸瓦と平安時代後期の軒瓦が出土している。この池辺にあたる井戸、土壇などからも、後期の軒瓦が出土している。平安時代中期から後期にかけては、七町北半部に染殿がおかれたが、軒瓦は園池の西にあたる六町にもまたがって出土しており、両町が一体的な宅地利用下にあったことがうかがわれる。

北辺四坊八町 町内の南半部、特にG区の東半部では平安時代中期～鎌倉時代の軒瓦が多く分布する。中期の軒瓦には、緑釉軒平瓦（図51-4）をはじめ、法成寺跡出土と同文の軒平瓦（図版96-4、6、7）などがある¹¹⁾。また緑釉面戸瓦（図版99-1）もここから出土した。鎌倉時代の軒平瓦では、「建仁寺」銘軒平瓦（図版98-10）、東福寺出土と同文の軒平瓦（図版98-12）がみられた。それらの分布状況から、遺構は調査区東外に広がる様相であった。町内の北西端で検出した土壇B1000からは、平安時代前期～室町時代までの各時代の軒瓦と緑釉丸瓦が

第2節 出土遺物について

出土した。平安時代前期の軒瓦には「近」銘軒丸瓦（図版90-5）、「大伴」銘軒丸瓦（図版90-8）があり、中期の軒瓦には「栗」銘軒平瓦（図版95-10）などの文字銘軒瓦がみられた。また土壌の東側では平安時代中期～鎌倉時代の軒瓦が出土した。平安時代の土壌C1233からは平安時代中期の法成寺出土と同文の軒瓦（図版96-1）が出土した。池D529Bからは平安時代後期の軒瓦5点（図版92-8、93-5、6、96-13、97-12）がまとまって出土した。

平安時代中期～後期の軒瓦は、西北院に関わる院舎、御堂の存在を示すものと考えられる。また、地方産の軒瓦も多くみられたが、これは西北院の建立にあたり各受領が関わったことを示すものと思われる。鎌倉時代の軒瓦の存在は、西北院の存続時期が鎌倉時代まで下ることを示すものとして注目できる。

一条四坊十六町 調査範囲が限定されたため、東側のS区で平安時代後期の軒丸瓦が1点出土するに留まった。

法成寺跡 既往の調査としては、昭和9年（1934）に法成寺南大門外の西にあたる、府立鴨沂高校内グラウンドの造成工事の際、平安時代中期～後期の軒瓦が多数出土している（第2章第3節のNO.62）。また、その南にあたる中御門大路末での調査では、平安時代末～鎌倉時代の遺構が確認されており（同NO.60、61）、寺域の拡大を考える上で興味深い。

今回の調査は、東京極大路と法成寺にまたがっており、U区では緑釉丸瓦・熨斗瓦が14点、寺域内のV区では緑釉丸瓦が5点出土した。これらの出土地点は法成寺内の北西部にあたり、創建当初には西北院がおかれたとされる場所である。また再建地である北辺四坊八町においても、緑釉軒瓦と緑釉丸瓦・熨斗瓦の出土量が多い。西北院が再建された際、緑釉瓦が再利用されたことを示すものであろう¹⁰⁾。

（2）緑釉軒瓦について

緑釉軒瓦については、平城京の東院玉殿を瑠璃瓦で葺いたとあるのが最も古い例である。本格的に緑釉瓦が葺かれたのは平安京になってからのことで、当初は平安京の重要建物に限られていた。平安宮内では、朝廷の重要な儀式の場となった大極殿をはじめとする朝堂院の一画、公的な宴会の場となった豊楽院の一画、京内では東寺と西寺及び外国の賓客をもてなす鴻臚館だけであった。その後、平安時代中期に入ると、宇多天皇の仁和寺円堂院と藤原道長の法成寺に緑釉瓦が用いられたが、これは異例のことであった。今回の調査では、平安京左京の北東域と法成寺推定地において、緑釉軒瓦、緑釉丸瓦・熨斗瓦などが出土しており、分布傾向については、先に記述したとおりである。ここではさらに検討を加えて、緑釉瓦に関わる事柄について考えていきたい。

法成寺は寛仁4年（1020）に藤原道長により建立された寺院で、道長の自邸「土御門殿」の東、東京極大路を隔てて、四町の広さをもち鴨川に臨んでいた。寺域は今の上京区河原町通荒神口と寺町通あたりに推定され、北は広小路通、南は京都府立鴨沂高校内の北端近くに及ぶ。法成寺の造営は、『小右記』寛仁3年（1019）7月17日条に「阿弥陀堂の造営を開始す。十一間堂の各一間を受領一人に充つ。」と記されているように、受領の奉仕を競ったものであった。金

堂は、阿弥陀堂に2年遅れて治安2年（1022）7月14日に供養された。『栄花物語』にはこの金堂の落成式の様子が事細かに記されている。「真珠の瓦青く葺き（中略）瓦光て空の影見え」と記されていることから、金堂の屋根には緑釉瓦が葺かれていたことがわかる。『小右記』によると、万寿2年（1025）8月、宮城の豊楽院の鴟尾が鉛で鑄造してあるので、その鉛を法成寺の瓦の料とするため、道長が権勢にまかせてその鴟尾を取りおろさせたという噂があった。翌月の条ではこれを取り消しており、その実否はわからないが、他の堂舎にも緑釉瓦を葺く計画があったことや当時、緑釉の材料となる鉛が不足していたことが知られる。

今回の調査で出土した平安時代の軒瓦は、総数で242点であった。出土した軒瓦は様々であるが、そのなかに平安時代中期の緑釉軒瓦が10点みられた。内訳は軒丸瓦が4点、軒平瓦が6点である。軒丸瓦の瓦当文様は、いずれも単弁六葉蓮華文で、暗緑色の釉を厚く施すもの（図51-1）と、はげ落ちてわずかに残っているもの（図51-2）があった。軒平瓦では半截宝相華文の文様の上に濃緑色の釉が施されているもの（図51-3）と、はげ落ちて下の素地が露出しているもの（図51-4）もある。いずれも丹波産とみられ、亀岡市・篠窯跡群のなかの王子瓦窯の調査で、同文の緑釉軒瓦が出土している¹³⁾。

また今回の調査では、緑釉を施した丸瓦が57点、熨斗瓦が14点、面戸瓦とみられるものが1点、埴とみられるものが2点出土しており、合計74点を数えた。その出土分布は、法成寺内と北辺四坊六町・七町・八町の全域にわたっており、緑釉軒瓦の出土もこの中に含まれる。その分布傾向を法成寺との関連で捉えるなら、八町については法成寺の子院である西北院との関係が想定される。西北院は、当初法成寺内に藤原道長の北ノ方、倫子の発願により建造された御堂で、天喜6年（1058）法成寺が全焼した後、平安時代中期後半の延久4年（1072）に北辺四坊八町に移建された¹⁴⁾。出土した緑釉瓦は、西北院が八町に移建された際、法成寺からもたらされた可能性が高いと思われる。その場合、法成寺内で焼亡した西北院からもたらされたかは、判断できない。六町は具平親王の土御門第、七町北半は染殿邸である。遺構についても平安時代中期の井戸、土壙などが検出されている。法成寺との直接的な関連が文献史料からはみられないが、緑釉瓦が出土していることから、邸宅内に御堂などが存在したことも考えられる。

出土した丹波産の緑釉軒瓦及び緑釉丸瓦・熨斗瓦は、法成寺の創建時に用いられた軒瓦とみられる。法成寺の造営は受領の奉仕（成功）で進められたため、持ち込んだ資材の中に瓦があることは、受領の中に丹波国司がいたことを想定させるものである。特に金堂のような中心建物の屋根に葺く緑釉瓦は、平安時代前期から始まる緑釉陶器生産の施釉技法を、保持していた窯工人を直接に管理・運営していた丹波国司が、道長の命により主体となって持ち込んだと考えられる¹⁵⁾。

また、法成寺創建にさかのぼる半截宝相華文軒平瓦は、11世紀前半に新たに高句麗系の瓦当文様の影響の下、中央官衙系瓦窯が生産を始めた瓦と共通するといわれている¹⁶⁾。このため、丹波・篠町の瓦窯も官窯的な性格が付与されていた可能性がある。そのことは緑釉軒瓦と同文瓦が土御門烏丸内裏¹⁷⁾、東寺¹⁸⁾などから出土していることからもうかがえる。いずれにせよ、法成寺

第2節 出土遺物について

は藤原道長の私寺であるにもかかわらず、受領たちの奉仕によって建立された。そのことは、金堂などが緑釉瓦で葺かれていたことに象徴されており、平安時代中期から本格化する藤原一門による摂関政治の勢いを象徴するものでもあった。

以上、緑釉瓦の出土分布から、邸宅や子院との関連について考察した。法成寺に隣接している状況から、天喜6年(1058)法成寺が全焼した後の焼瓦、あるいは廃棄瓦とも考えたが、焼瓦が認められないこと、調査地の広域に分布することなどから、法成寺焼亡以降、子院などの再建時に緑釉瓦が意図的に再利用されたことを想定した。そのことは、仁和寺における天皇や皇親家による四円寺をはじめとする多数の子院の造営活動¹⁹⁾とも機を一にしており、今回の調査成果により藤原一門による法成寺を拠点とした子院の造営活動が指摘できたことの意義は大きいといえるだろう。

註

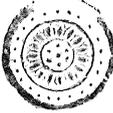
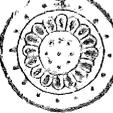
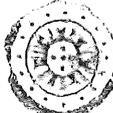
- 1) 『小右記』寛仁2年(1018)10月22日条によれば、土御門殿の泉が7月晦日より涸れたので清和院より水を引いたとある。清和院に園池があったことは、『水左記』応徳元年(1084)5月9日条にもみられる。中村修也「清和院せいわいん」(『平安時代史事典』財団法人古代学協会・古代学研究所編、角川書店、1994年)による。
- 2) その後の清和院は、賀茂斎院となった官子内親王の所有に帰し、内親王は母の頼子(源頼綱女)とともに居住した。頼子は院中堂宇を建て、長承元年(1132)3月6日に公伊法院を導師として供養を営んだ(『中右記』)。この後は不明となり、鎌倉時代には仏寺となったとされる。以上は、中村修也「清和院せいわいん」前掲1)による。地業G1937は池G2940(12世紀後半に埋没)上に造営されており、ここでいう鎌倉時代の仏寺の遺構である可能性がある。
- 3) 「索引年表」『京都の歴史』10、学芸書林、1976年。
御所の東で堀を開削した記事には以下がある。
文明16年(1484)6月4日「朝廷、幕府に命じて皇居東方に溝渠を掘らせる」(『御湯殿上日記』)
明応4年(1495)10月13日「朝廷、幕府に禁門外の池隍を掘らせる」(『御湯殿上日記』)
天文3年(1534)2月29日「朝廷、禁裏六丁町の市民に禁裏東南の濠を掘らせる」(『言継卿記』)
天文23年(1554)5月4日「朝廷、伊勢貞孝および長慶に、洛中に賦課して禁裏東南の堀を浚泄させる」(『言継卿記』)
永禄4年(1561)7月22日「禁裏六丁町衆に東堀を開鑿させる」(『御湯殿上日記』)
永禄7年(1564)10月10日「六町衆に禁裏東堀を掘らせる」(『言継卿記』)
- 4) 「土器と陶磁器」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994年。
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
- 6) 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」前掲4)。
- 7) 丸川義広他「平安宮内裏(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』、京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1988年。SK25とした土壇内から白色土器が大量に出土した。比率は、土師器89.6%、黒色土器0.7%、須恵器1.2%、灰釉陶器0.4%、緑釉陶器1.7%、白色土器6.3%、輸入陶磁器0.1%である。この土壇は、火災を受けた痕跡のある土器、壁土も含まれてお

り、天徳4年(960)9月におきた初の内裏火災の際の処理土壙と考えられる。

- 8) 「御倉町みくらまち」『平安時代史事典』前掲1)。
- 9) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』前掲5)。
P251に指摘するように、この土師器皿は旧紀伊郡、南山城、淀川流域北部地域において出土する。いくつかの地域型式が存在したと考えられるが、現状では特定できていないため、乙訓在地形と仮称した。
- 10) 本報告に先立ち、第10回京都府埋蔵文化財研究会(2002年9月21、22日於長岡京市)で加納・丸川が同様の内容を報告している。その際、乙訓在地形土師器皿については財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの原秀樹氏より御教示を得た。
- 11) 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」『寺院建築の研究 下』福山敏男著作集3、中央公論美術出版、1983年。この論考は『仏教美術』68号(同年8月)に掲載されたものであるが、ここでは若干の修正が加えられている。
- 12) 杉山信三「法成寺について」『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年。
- 13) 上原真人「平安京へ運ばれた丹波の瓦」『丹波国と平安京—都を支えた篠窯跡群—』第10回特別展展示図録、亀岡市文化資料館、1994年。
- 14) 杉山信三「法成寺について」前掲12)。
- 15) 「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1981—2)』京都府教育委員会、1981年。
- 16) 上原真人「11・12世紀の瓦当文様の源流(下)」『古代文化』第32巻第6号、1980年。
- 17) 「平安京土御門烏丸内裏跡—左京・一條三坊九町—」平安京跡研究調査報告第10輯、財団法人古代学協会、1983年。
- 18) 「東寺境内発掘調査概報」『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』近畿大学工学部建築参考文献学科杉山研究室、1983年。
- 19) 杉山信三「院の御所と御堂」前掲12)。

観察表1 軒瓦一覧表 (図版90~98・167~176)

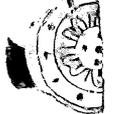
軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	90-1	重圈文	16.8	—	13.4	1.8	3.9	灰黄色	土壙 G2281			奈良	再利用瓦 難波宮 6011A 型式
	90-2	単弁八葉蓮華文	20.6	4.2	13.8	3.4	—	灰白色	土壙 F1780		山城	平安前	栗栖野瓦窯
	90-3	単弁十五葉蓮華文	17.7	4.6	10.3	3.4	3.4	暗灰色	土壙 G3573	4	山城	平安前	芝本瓦窯
	90-4	単弁十五葉蓮華文	17	4.6	10.6	3.2	3.4	灰色	P区 第3面	4	山城	平安前	芝本瓦窯
	90-5	「近」銘 単弁十六葉蓮華文	16.6	6.2	10.9	2.8	3.5	灰色	土壙 B1000		山城	平安前	西賀茂瓦窯
	90-6	単弁十六葉蓮華文	8.8 以上	3.6	9.4	2.8	3.6	灰黄色	溝 G524		山城	平安前	西賀茂瓦窯
	90-7	複弁蓮華文	7.4 以上	—	—	1.3	—	濃緑色	土壙 B1000		山城	平安前	緑釉瓦
	90-8	「大伴」銘 複弁八葉蓮華文	16.5	3.1	12.6	1.8	3.1	灰色	土壙 B1000		山城	平安前	東寺系 大伴氏は821年 に伴氏と改姓 東寺境内瓦窯
	90-9	単弁十五葉蓮華文	16.3	4.2	9.1	3.4	3	灰黄色	土壙 G2616	4	山城	平安前	西寺系 西賀茂・ 芝本瓦窯
	91-1	単弁八葉蓮華文	13.2	4.2	10.1	1.2	1.8	暗灰色	土壙 G2373	4	山城	平安中	大宮北山ノ前 瓦窯
	91-2	単弁八葉蓮華文	12.8	4.3	10.2	1.2	1.4	灰色	土壙 G2373		山城	平安中	大宮北山ノ前 瓦窯
	91-3	複弁六葉蓮華文	15.8	2.7	13.6	1.1	1.2	灰色	土壙 M28		山城	平安中	森ヶ東瓦窯

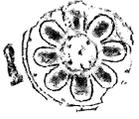
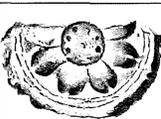
軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	91-4	単弁十二葉蓮華文	13.3	—	10	1.6	1.9	灰色	土壙 B1013		山城	平安中	森ヶ東瓦窯
	91-5	単弁十葉蓮華文	縦14.0 横15.8	縦11.3 横10.3	縦3.3 横2.8	縦1.5 横2.5	1.7	灰色	土壙 B1013			平安中	楕円形
	91-6	「栗」銘 複弁八葉蓮華文	17.4	4	10.4	3.6	2.7	暗灰色	F区 北壁		山城	平安中	栗栖野瓦窯
	91-7	複弁六葉蓮華文	8.8 以上	2.8	11	—	2.3	にぶい 黄色	土壙 M9			平安中	
	91-8	複弁八葉蓮華文	17.1	3.2	9.8	3.3	2.2	灰色	堀 G1940		山城	平安中	朝堂院跡 栗栖野瓦窯
	91-9	単弁八葉蓮華文	12.5	—	9	1.6	2.9	灰色	F区 第3面		山城	平安中	法成寺跡 栗栖野瓦窯
	91-10	複弁八葉蓮華文	12.7	—	8.2	1.9	—	灰色	土壙 K46		山城	平安中	栗栖野瓦窯
	91-11	複弁四葉蓮華文	10.7	2.3	6.1	2.2	2.1	灰色	土壙 G3065	7	山城	平安中	広隆寺, 朝堂院跡, 豊楽院跡, 内裏蘭林坊跡 栗栖野瓦窯
	91-12	複弁五葉蓮華文	10.9	2.1	6.3	2.5	1.7	灰色	井戸 F2505		山城	平安中	栗栖野瓦窯
	91-13	複弁四葉蓮華文	11.4	2.6	6.6	2.9	1.6	灰色	井戸 G3068	7	山城	平安中	広隆寺, 朝堂院跡, 豊楽院跡, 内裏蘭林坊跡 栗栖野瓦窯
	91-14	複弁四葉蓮華文	10.6	2.3	6	2.3	1.9	灰色	流路 F2550	2	山城	平安中	広隆寺 栗栖野瓦窯
	図 51-1	単弁六葉蓮華文	8.8 以上	4.5	9.6	1.9	—	橙色	土壙 G632	2	丹波	平安中	緑釉瓦

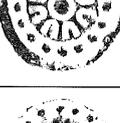
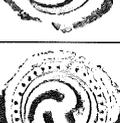
軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	図 51-2	単弁六葉蓮華文	6.8以上	5	14.7	1.1	—	浅黄橙色	池 G2940 (P区)	2	丹波	平安中	緑釉瓦 釉部分 オリーブ灰色
	92-1	複弁八葉蓮華文	11.8	6.1	11	0.7	1.6	にぶい黄橙色	土壌 G2510	2	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-2	複弁八葉蓮華文	12.5	5.4	11.1	0.7	1.7	灰白色	池 G2940 (P区)		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-3	複弁六葉蓮華文	縦11.5以上 横13.6	4.7	10.2	1.2	1.8	灰色	池 G2940	6	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-4	複弁五葉蓮華文	7.3以上	3.1	9	2.3	2.8	灰色	井戸 B1061	6	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-5	複弁六葉蓮華文	9.5以上	4.4	10	2.2	1.6	灰色	土壌 K41	6	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-6	複弁六葉蓮華文	7.9以上	4.2	9.6	—	—	灰白色	整地層 K85	6	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-7	複弁八葉蓮華文	13.1	4	8.8	1.9	2.1	浅黄色	土壌 K79		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-8	複弁八葉蓮華文	12.4	4.5	9.2	1.5	1.5	灰色	池 D529B		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-9	単弁八葉蓮華文	9.5以上	4.6	8.8	1.4	—	浅黄橙色	整地層 K85		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-10	複弁八葉蓮華文	12.9	5.6	9.9	1.6	1.6	暗灰色	土壌 B1000		大和	平安後	
	92-11	複弁八葉蓮華文	15.6	7	12.9	1.3	4.6	灰白色	土壌 F2414		大和	平安後	

軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	92-12	単弁十五葉蓮華文	14.2	5.6	10.8	1.8	3.3	灰色	土壙 G750	2	播磨	平安後	円勝寺跡
	92-13	単弁九葉蓮華文	14.4	4.2	9.6	2.4	3.1	灰色	溝 F2360		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-14	単弁八葉蓮華文	12.1以上	3.7	10.6	1.7	1.9	灰色	S区攪乱	6	山城	平安後	東京極～土御門殿付近栗栖野瓦窯
	92-15	単弁八葉蓮華文	12.5以上	3.8	10.0	1.5	1.3	灰にやや茶色がかった色	池 G2940 (P区)	6	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-16	複弁八葉蓮華文	12.8	3.9	9.6	1.7	1.7	暗青灰色	溝 G2456	2	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-17	単弁八葉蓮華文	縦10.0以上 横12.0	2.4	10.2	1.0	1.3	褐灰色	土壙 E808	2	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-18	単弁十三葉蓮華文	10.8	3.0	7.7	2.1	1.4	にぶい橙色	G区中央第1面	2	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	92-19	複弁八葉蓮華文	15.0	—	12.0	1.6	—	浅黄橙色	整地層 K85		讃岐	平安後	
	92-20	複弁八葉蓮華文	15.2	—	11.6	—	—	灰色	小穴 E627		播磨	平安後	
	92-21	単弁八葉蓮華文	16.6	4.6	13.5	1.5	3.8	褐灰色	土壙 E311			平安後	
	93-1	複弁六葉蓮華文・中房巴文	14.3	4.6	9.3	2.2	—	灰色	土壙 D451		河内	平安後	
	93-2	単弁八葉蓮華文	16.0	—	12.0	2.0	3.5	灰色	土壙 C551			平安後	

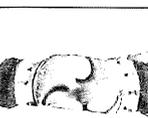
軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	93-3	単弁八葉蓮華文	13.1	4	9.6	0.9	—	にぶい 橙色	土壙 B1013			平安後	
	93-4	複弁八葉蓮華文	13.4	4.9	11.2	1.4	—	暗青灰色	土壙 G3373		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	93-5	単弁八葉蓮華文	15	5.6	12.2	1.5	2.5	灰白色	池 D529B	2	播磨	平安後	
	93-6	単弁蓮華文	14.2	—	9.8	2.9	—	灰色	池 D529B		丹波	平安後	
	93-7	単弁八葉蓮華文	13.8	2.2	8	2.8	2.6	灰白色	土壙 F2579	2		平安後	
	93-8	単弁十六葉蓮華文	10.6	2.3	6.8	1.7	2	灰白色	土壙 D427			平安後	
	93-9	単弁四葉蓮華文	13	—	7.1	2.7	2.3	橙色	土取穴 A270			平安後	
	93-10	巴文 右・三?	5.4 以上	—	5.8	3.5	1.7	浅黄橙色	土壙 B1037		山城	平安末 ~鎌倉	栗栖野瓦窯
	93-11	巴文 左・三	10.4	—	7.6	1.4	1.9	灰色	溝 F2410		讃岐?	平安後	
	93-12	巴文 左・三	9.3	—	6.6	1.3	2	灰色	路面 F2400		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	93-13	巴文 右・三	12.1	—	9.1	1.3	2.6	灰褐色	F区 第3面		南都系 (大和)	鎌倉	
	93-14	巴文 右・三	12.3	—	6.8	2.6	2	にぶい 黄橙色	土壙 F2567		山城	平安後	栗栖野瓦窯

軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	93-15	巴文 右・三	7.3 以上	—	6.2	2.6	—	黄灰色	土壙 B1037		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	93-16	複弁八葉蓮華文	10.1	2.1	7.2	1.3	1.5	灰色	土壙 B1000		播磨	鎌倉	
	93-17	複弁八葉蓮華文	10.8	2.1	7.6	1.6	1.5	灰色	土壙 E729	2	播磨	鎌倉	
	93-18	複弁四葉蓮華文	10.1 以上	2.1	5.6	2.1	—	灰色	土壙 C756B			鎌倉	
	93-19	複弁四葉蓮華文	10.2	2.2	6.7	1.7	1.6	褐灰色	土壙 E544			鎌倉	
	93-20	巴文 右・三	15.5	—	10.5	2.7	3	暗灰色	土壙 B1043		大和	鎌倉	
	93-21	巴文 右・三	15.6	—	12	1.8	2.9	灰色	土壙 B1000			鎌倉	
	93-22	複弁六葉蓮華文	9.8	2.8	6.7	1.6	1.7	灰白色	土壙 B1049		山城	鎌倉	仁和寺 栗栖野瓦窯
	94-1	巴文 右・三	縦 11.0 横 12.0	—	6	2.4	1.7	灰色	土壙 F2255		山城	鎌倉	栗栖野瓦窯
	94-2	巴文 右・三	11.3	—	6.2	2.5	2	灰白色	溝 F2500		山城	鎌倉	栗栖野瓦窯
	94-3	巴文 右・三	11.3	—	6.8	2.1	1.6	灰色	土壙 F2255		山城	鎌倉	栗栖野瓦窯
	94-4	巴文 左・三	14.5	—	7.3	3.5	2.8	灰色	土壙 F2476		大和	室町	

軒丸瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			瓦当直径	中房径	内区径	外区幅	瓦当厚						
	94-5	巴文 右・三	13.8	—	6.6	3.5	1.9	褐灰色	井戸 E452		大和	室町後	
	94-6	巴文 右・三	10.5 以上	—	8.4	2.4	3.0	灰黄色	土壙 O149			室町	
	94-7	巴文 右・三	14.0	—	7.2	3.4	2.3	灰色	地業 G1937		大和	鎌倉	
	94-8	巴文 右・三	13.4	—	8.0	2.7	2.4	灰白色	土壙 B1000		大和	室町後	
	94-9	巴文 右・三	10.9 以上	—	6.6	2.3	—	灰色	井戸 F1901		大和	室町	
	94-10	巴文 右・三	15.6	—	7.2	3.8	2.1	灰黄色	土壙 E807		大和	鎌倉 ~室町	
	94-11	巴文 右・三	17.5	—	8.8	4.3	2.6	灰色	土壙 B1015		大和	室町後	
	94-12	巴文 右・三	13.1	—	7.1	2.9	1.9	暗灰色	土壙 E544		大和	室町後	
	94-13	巴文 右・三	17.2	—	10.0	3.6	2.3	灰色	土壙 B925			室町中	
	94-14	巴文 右・三	14.2	—	8.4	3.0	3.0	灰色	土壙 O116			室町	
	94-15	巴文 右・三	12.3	—	6.3	3.0	5.2	灰色	土壙 E500			室町後	

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	95-1	均整唐草文	16.1以上	6.4	1.6	14.3以上	1.8	灰色	土壙 A140		山城	平安前	西寺系 芝本瓦窯
	95-2	重圈文	9.5以上	5.4	-	7.1以上	1.3	暗灰色	木の根攪乱 J89	2		奈良	難波宮 6574C型式 圈内に弧線有り
	95-3	均整唐草文	12.7以上	6.4	1.4	-	-	灰色	溝 G1983	5	山城	平安前	西寺系 芝本瓦窯
	95-4	均整唐草文	12.2以上	6.7	1.2	8.7以上	2.2	暗灰色	土壙 F1170	5	山城	平安前	芝本瓦窯
	95-5	「井」銘 均整唐草文	11.6以上	7.2	2.5	10.5以上	-	灰色	土壙 B730			平安前	「大井寺」 とみられる
	95-6	均整唐草文	15.5以上	6.5	-	-	-	灰色	井戸 G1146		山城	平安前	岸部瓦窯
	95-7	均整唐草文	12.5以上	6.4	3.1	11.2以上	1.8	暗灰色	土壙 B1000		山城	平安前	西賀茂(角社) 瓦窯
	95-8	均整唐草文	11.2以上	7.0	1.6	-	-	灰色	F区 第3面		山城	平安前	
	95-9	均整唐草文	15.2以上	7.0	2.6	13.0以上	1.8	灰色	土壙 F1835	4	山城	平安中	栗栖野瓦窯
	95-10	「栗」銘 均整唐草文	5.8以上	7.0	-	-	-	灰白色	土壙 B1000	4	山城	平安中	栗栖野瓦窯
	95-11	均整唐草文	14.0以上	5.6	2.0	12.3以上	1.4	灰色	土壙 B1000	5	山城	平安中	上庄田瓦窯
	95-12	均整唐草文	12.5以上	5.0	1.5	10.4以上	-	灰色	池 G1972		山城	平安中	

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	95-13	均整唐草文	8.6以上	5.9	2.4	-	-	灰色	土壙 B1000	3	山城	平安中	池田瓦窯
	95-14	「修」銘 均整唐草文	22.0以上	4.5	1.1	20.4以上	1.6	灰色	集石 F2224 井戸 F2510		山城	平安中	修理式瓦屋の製品
	95-15	均整唐草文	11.5以上	6.1	2.0	9.5	1.5	灰白色	井戸 G2530	3	山城	平安中	池田瓦窯
	95-16	均整唐草文	16.5以上	6.2	-	15.0以上	-	灰色	土壙 B1000	3	山城	平安中	池田瓦窯
	95-17	均整唐草文	12.2以上	5.8	1.7	-	-	灰色	土壙 E213		山城	平安中	池田瓦窯
	95-18	均整唐草文	14.4以上	6.2以上	-	12.0以上	-	灰色	井戸 F2510	2	山城	平安中	池田瓦窯
	95-19	均整唐草文	14.4	6.2	-	11.0	1.9	灰色	池 F1200			平安中	
	95-20	均整唐草文	18.0以上	7.0	2.5	15.3以上	2.3	灰色	土壙 E922	2	山城	平安中	池田瓦窯
	96-1	半截宝相華文	12.5以上	5.8	-	11.1以上	1.2	灰白色	土壙 C1233	4	丹波	平安中	法成寺創建瓦 王子瓦窯
	96-2	半截宝相華文	13.1以上	6.8	2.4	-	-	にぶい 橙色	土壙 B1008	3	丹波	平安中	法成寺創建瓦 王子瓦窯
	96-3	半截宝相華文	11.5以上	5.8	2.8	-	-	にぶい 橙色	F区 第3面 井戸 F2510		丹波	平安中	王子瓦窯 緑釉瓦
	図 51-3	半截宝相華文	8.5以上	6.2以上	-	-	-	灰白色	F区 第3面	4	丹波	平安中	法成寺創建瓦 緑釉瓦

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	図 51-4	半截宝相華文	15.9以上	5.2以上	-	14.0以上	2.0	浅黄橙色	土塋 G2270	3	丹波	平安中	法成寺創建瓦 釉部分 暗オリブ色 緑釉瓦
	96-4	偏行宝相華唐草文	12.1以上	4.1	2.9	-	-	灰白色	堀 G2630	2	大和	平安中	大和興福寺・ 薬師寺で出土 法成寺新堂 永承五年(1050) 供養
	96-5	華唐草文	18.4以上	5.2	-	17.2以上	1.4	灰白色	土塋 E531		大和	平安中	薬師寺で出土
	96-6	均整唐草文	12.8以上	6.8	-	-	-	橙色	土塋 G1249	3	丹波	平安中	王子瓦窯
	96-7	均整唐草文	8.7以上	6.7	2.4	-	-	灰色	石敷 F1695	3	丹波	平安中	王子瓦窯
	96-8	均整唐草文	8.0以上	7.4	-	-	-	灰色	F区 第3面	3	丹波	平安中	王子瓦窯
	96-9	均整唐草文	12.7以上	6.7以上	-	-	-	灰色	溝 E455		山城	平安中	河上瓦窯
	96-10	均整唐草文	10.6以上	4.6	2.2	-	-	灰色	溝 G2456		山城	平安中	森ヶ東瓦窯
	96-11	均整唐草文	14.0以上	4.6	1.8	-	-	灰白色	土塋 K41	2		平安中 ~後	
	96-12	均整唐草文	10.4以上	7.7	2.2	8.0以上	2.0	灰色	G区 第3面		山城	平安中	河上瓦窯
	96-13	均整唐草文	15.5以上	7.1	-	13.7以上	1.7	暗灰に やや茶色 がかった 色	池 D529B		大和	平安後	奈良市 薬師寺出土
	96-14	均整唐草文	8.8以上	5.0	1.7	7.3	1.2	灰色	土塋 G2736		山城	平安後	河上瓦窯

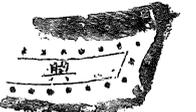
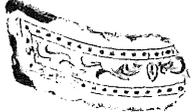
軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	96-15	均整唐草文	21.2以上	5.9	0.9	18.6	2.5	灰白色	溝 G488	9	山城	平安後	小野瓦窯
	96-16	均整唐草文	12.5以上	7.3	—	—	—	灰色	土壙 E753		山城	平安後	河上瓦窯
	96-17	均整唐草文	13.5以上	4.9	—	12.8以上	1.1	灰色	土壙 J97	9	山城	平安後	小野瓦窯
	96-18	均整唐草文	15.2	6.6	2.7	—	—	灰色	井戸 F2510		山城	平安後	森ヶ東瓦窯
	97-1	偏行唐草文	15.8以上	4.6	1.8	13.2以上	1.8	灰白色	整地層 K85	11	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	97-2	偏行唐草文	15.5以上	4.5	1.1	12.2以上	3.0	にぶい黄橙色	整地層 K85	11	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	97-3	偏行唐草文	19.8	3.9	1.1	—	—	青灰色	整地層 K85	11	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	97-4	均整唐草文	14.2以上	3.4	1.7	12.3以上	1.5	にぶい黄橙色	F区 第3面		河内	平安後	醍醐寺大智院出土と類似向山瓦窯
	97-5	均整唐草文	10.8以上	5.2	0.3	8.7以上	1.5	浅黄色	集石 B998	2	播磨	平安後	
	97-6	均整唐草文	12.3以上	3.9	0.6	—	0.6	灰白色	土壙 G1468		播磨	平安後	
	97-7	均整唐草文	15.2以上	5.5以上	1.7	13.5以上	—	灰色	土壙 E530			平安後	
	97-8	均整唐草文	12.0以上	4.6	1.4	—	—	灰色	土壙 F2322		播磨	平安後	

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	97-9	均整唐草文	8.4以上	3.5	1.1	7.0以上	1.2	褐灰色	土壙 B1035			平安後	
	97-10	均整唐草文	11.0以上	3.9	0.9	-	-	灰白色	池 G2940 (P区)		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	97-11	偏行唐草文	17.4以上	6.1	2.6	16.2以上	0.8	灰色	土壙 E165		讃岐	平安後	
	97-12	均整唐草文	9.2以上	5.2	1.8	-	-	青灰色	池 D529B	2	山城	平安後	栗栖野瓦窯
	97-13	華文重郭文	14.3以上	6.2	-	13.0以上	-	灰色	土壙 G2788	2	讃岐	平安後	
	97-14	連巴文	7.5以上	2.7	1.1	-	-	灰白色	土壙 B1000		讃岐	平安後	
	97-15	偏行唐草文	15.0	5.2	2.9	-	-	灰色	整地層 K85	3	讃岐	平安後	
	97-16	偏行唐草文	19.2以上	5.3	2.2	17.8以上	1.0	灰黄色	土壙 K41	3	讃岐	平安後	
	98-1	剣頭文	15.6	1.9	0.9	-	-	灰白色	井戸 F1709		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	98-2	剣頭文	16.0	2.5	1.7	-	-	灰色	土壙 B1000		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	98-3	剣頭文	14.5以上	3.2	1.2	-	-	黒色	F区 第3面		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	98-4	剣頭文	11.2以上	2.4	1.2	-	-	灰色	土壙 B1037		山城	平安後	栗栖野瓦窯

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	98-5	剣頭文	21.1	3.9	2.0	-	-	灰白色	土壙 E585		山城	平安後	栗栖野瓦窯
	98-6	蓮弁文	8.0以上	4.4	-	-	-	灰色	溝 E455		播磨	平安後	
	98-7	綾杉文	12.4以上	4.6以上	-	-	-	灰色	溝 F2410	2	山城	平安後	
	98-8	斜格子文	11.5以上	4.6	1.6	-	-	灰色	K区 第3面	2	山城	平安後	
	98-9	「戒壇院凡天福元年五〇〇」銘軒平瓦	24.5以上	6.6	4.5	20.5以上	2.2	灰色	土壙 G212		大和	鎌倉	天福元年(1233)鎌倉時代前期
	98-10	「〇仁寺」銘軒平瓦	14.3以上	6.7	3.0	13.6以上	-	灰色	土壙 G1468	2	大和	鎌倉	「建仁寺」銘と考えられる第二代東大寺大勸進・栄西建仁元年(1201)創建
	98-11	「興〇〇」銘軒平瓦	10.8以上	7.3	3.6	9.3	1.5	暗灰色	井戸 F1275		大和	鎌倉	興聖寺は天福元年(1233)に道元が宇治(深草)に建立(永平開山道元和尚行録)
	98-12	均整唐草文	19.3以上	8.5	3.2	17.8以上	1.6	灰色	土壙 G798	3	大和	鎌倉	東福寺出土と同文「東大寺瓦」→東大寺再建に使用された軒瓦(鎌倉時代)東福寺創建瓦
	98-13	均整唐草文	15.1以上	6.7	1.1	-	-	灰色	土壙 G2418			鎌倉	復古瓦
	98-14	均整唐草文	8.8以上	2.9	1.7	-	-	灰色	土壙 B1000		山城	室町	
	98-15	均整唐草文	12.7以上	4.4以上	-	-	-	暗灰色	土壙 F1286			室町	
	98-16	均整唐草文	14.0以上	4.2	1.7	-	-	灰色	土壙 F2476			室町	

軒平瓦

拓本	遺物番号	文様	計測値 単位(cm)					胎土の色調	出土地点	同文点数	産地	時代	備考
			横幅	高さ	瓦当厚	内区幅	外区幅						
	98-17	均整唐草文	11.5以上	4.2	2.0	-	-	灰色	土壙B1000			室町	
	98-18	均整唐草文	23.8	4.8	2.1	-	-	灰色	土壙O118			室町	

観察表2 緑釉瓦・埴・鴟尾・鬼瓦一覧表 (図版99・176・177)

遺物番号	遺構名	種類	遺構年代	遺物番号	遺構名	種類	遺構年代
-	A区第2層	緑釉丸瓦		99-19	蔵G110	緑釉熨斗瓦	19C
-	土取穴A296	緑釉丸瓦	15C~16C頃	-	土壙G1882	緑釉丸瓦	17C前半~18C初
-	B区掘下げ	緑釉丸瓦		99-5	土壙G2262	緑釉丸瓦	17C後~18C前
-	土壙B691	緑釉丸瓦	19C中頃	-	土壙G2262	緑釉熨斗瓦	17C後~18C前
-	土壙B732	緑釉丸瓦	18C中頃	-	土壙G2434	緑釉丸瓦	17C初
-	土壙B732	緑釉丸瓦	18C中頃	99-17	土壙G2456	緑釉丸瓦	15C中
-	井戸B963	緑釉丸瓦	15C	99-20	土壙G2615	緑釉熨斗瓦	15C後
-	土壙B992	緑釉丸瓦	15C末	-	土壙G2622	緑釉丸瓦	14C
-	土壙B1000	緑釉丸瓦	16C末~17C初	99-1	土壙G2736	緑釉面戸瓦?	15C末
-	土壙B1000	緑丸斗瓦	16C末~17C初	-	土壙G3224	緑釉熨斗瓦	
-	土壙B1000	緑丸斗瓦	16C末~17C初	99-2	柱穴K16	緑釉丸瓦	18C後~19C前
-	土壙B1000	緑釉丸瓦	16C末~17C初	-	池G2940(P区)	緑釉丸瓦	11C末~12C初
-	土壙B1000	緑釉丸瓦	16C末~17C初	99-4	R区攪乱一括	緑釉熨斗瓦	
-	土壙E188	緑釉丸瓦	18C中頃	99-18	R区第3面	緑釉丸瓦	17C後
-	土壙E225	緑釉丸瓦	18C~19C	-	U区第4面	緑釉丸瓦	16C
-	土壙E247	緑釉丸瓦	16C末~17C初	-	U区第4面	緑釉丸瓦	16C
-	土壙E363	緑釉丸瓦	15C~16C	-	U区第4面	緑釉丸瓦	16C
-	土壙E403	緑釉丸瓦	15C	-	U区第5面	緑釉丸瓦	平安?
-	土壙E500	緑釉丸瓦	15C後葉	-	U区第5面	緑釉丸瓦	平安?
-	土壙E531	緑釉丸瓦	16C末	-	U区第5面	緑釉熨斗瓦	平安?
-	溝E749	緑釉丸瓦	16C	-	土壙U14	緑釉丸瓦	19C後
99-14	F区検出中	緑釉熨斗瓦		-	土壙U14	緑釉丸瓦	19C後
-	F区検出中	緑釉丸瓦		99-11	土壙U14	緑釉丸瓦	19C後
99-15	F区第3面	緑釉熨斗瓦		99-12	土壙U14	緑釉丸瓦	19C後
-	F区第3面	緑釉埴		-	土壙U23	緑釉丸瓦	16C
-	土壙F1605	緑釉熨斗瓦	16C末~17C初	-	土壙U28	緑釉丸瓦	不明(平安以降)
-	石敷F1695	緑釉丸瓦	16C	-	溝U34	緑釉丸瓦	不明(中世?)
99-3	井戸F1709	緑釉熨斗瓦	16C	99-10	土壙U36	緑釉丸瓦	平安?
99-9	土壙F1727	緑釉丸瓦	16C末~17C初	99-16	V区第1面下	緑釉丸瓦	17C
-	土壙F1995	緑釉丸瓦	16C	-	V区第1面下	緑釉丸瓦	17C
-	土壙F2140	緑釉丸瓦	16C末~17C初	-	V区第1面下	緑釉丸瓦?	17C
-	土壙F2140	緑釉丸瓦	16C末~17C初	99-13	土壙V2	緑釉丸瓦	18C初
-	土壙F2148	緑釉丸瓦	16C末	-	溝V25	緑釉丸瓦	不明(江戸)
-	土壙F2320	緑釉丸瓦	16C末	-	土壙F1708	埴	16C末~17C初
99-7	土壙F2352	緑釉熨斗瓦	15C	-	井戸F1777	埴	16C中
99-6	溝F2360	緑釉熨斗瓦	15C~16C	-	土壙F2146	埴	10C+15C
-	溝F2360	緑釉熨斗瓦	15C~16C	-	溝F2360	埴	10C~16C
99-8	土壙F2370	緑釉熨斗瓦	15C~16C	99-21	堀G1940(H区)	埴	16C末~17C初
-	溝F2503	緑釉丸瓦	13C	99-22	柱穴G2802	鴟尾	
-	土壙F2567	緑釉埴	15C後葉	99-23	土壙E887	鴟尾	11C
-	土壙G835	緑釉丸瓦	18C前半	99-24	土壙B1015	鬼瓦	15C~16C末

観察表3 土製品一覧表 (図版100・178)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	種類	出土遺構・層	計測値		遺構年代	備考
			寸法	重量		
100-1	土錘	井戸F2206	長5.5、径3.8	57	17C初	孔径1.3cm
100-2	土錘	流路F2550(G区)	長5.1、径3.9	49	10C前葉	孔径1.1cm
100-3	土錘	流路F2550(G区)	長5.2、径3.4	37	10C前葉	孔径1.4cm
100-4	土錘	流路F2550(G区)	長4.8、径2.6	24	10C前葉	孔径0.8cm
100-5	土錘	土壙P242	長4.6、径3.4	40	12C前葉	孔径1.6cm
100-6	ミニチュア竈	井戸F2570	高(5.2)、幅(2.8)	17	9C中葉	右半分のみ残存
100-7	土馬	流路F2550(X区)	長(8.2)、高(7.2)	63	10C前葉	頭部と左前脚、後脚を欠く
100-8	土馬	井戸F2570	長7.3、高6.5	52	9C中葉	完存
—	土馬	土壙E702	長(5.0)、幅(2.8)	18	10C	頭部と左前脚の一部が残存

観察表4 硯(陶製)一覧表 (図版100・178)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
100-9	井戸F2510	(10.8)	13.0	2.05	506	須恵器	11C中～後	須恵器蓋を転用
100-10	土壙B1000	(6.05)	(5.3)	1.4	71	須恵質	9～16C末	
100-11	溝F1740内柱穴31	(5.3)	(7.0)	0.9	51	須恵質	16C末	仕切高1.8cm
100-12	土壙F1779	(7.35)	(4.55)	0.7	46	須恵質	16C末	脚高1.8cm

観察表5 砥石一覧表 (図版101・102・179)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
101-1	土壙B1025	6.05	3.95	0.95	52	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C	
101-2	土壙B1015	7.45	2.9	1.0	41	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末～17C初	
101-3	土壙B1000	(7.55)	3.4	0.65	27	珪質頁岩～珪質粘板岩	9～16C末	
101-4	土壙B992	(6.15)	3.0	0.95	34	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C末	
101-5	土壙B1000	(8.7)	3.7	1.25	63	珪質頁岩～珪質粘板岩	9～16C末	
101-6	井戸E448	(4.7)	3.35	0.7	21	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C	
101-7	土壙E731	(7.95)	2.9	0.65	30	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
101-8	溝E451	(4.3)	3.55	0.7	22	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C初	他に1点あり
101-9	土壙F2140	(5.15)	3.4	1.0	31	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
101-10	土壙F2323	(6.2)	3.4	0.6	21	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
101-11	土壙F2398	(6.6)	3.2	(0.95)	35	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C	
101-12	溝F2180	(10.0)	2.5	0.95	42	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C前葉	
101-13	溝F2180	(6.8)	3.1	1.1	33	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C前葉	
101-14	溝F2410	(6.55)	3.9	1.1	31	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
101-15	溝F2410	(7.0)	3.7	1.05	49	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
101-16	土壙F2484	7.3	3.2	0.7	30	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C	
101-17	土壙H644	6.35	3.7	1.0	38	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
101-18	地業H666	(6.4)	3.5	0.7	29	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C末	
101-19	溝E451	(9.15)	3.6	1.7	66	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C後葉	
101-20	土壙E582	(11.1)	3.4	0.6	48	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
101-21	土壙E694	9.6	3.85	2.65	206	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
101-22	堀G1940(H区)	(9.7)	4.6	0.6	51	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
101-23	地業H666	11.5	4.6	1.2	105	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C末	
101-24	溝E451	11.1	4.9	1.55	136	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C初	
101-25	土壙E582	(11.55)	7.0	1.55	215	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C末	
101-26	溝F2360	11.8	3.2	1.3	83	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
101-27	土壙F2140	(11.8)	3.3	1.8	120	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	

遺物番号	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
		長さ	幅	高さ	重量			
101-28	溝F2180	(13.0)	3.6	2.15	147	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C前葉	
102-1	土壙F2286	(7.7)	7.0	1.35	80	砂質ホルンフェルス	16C末	
102-2	土壙F1752	6.75	3.2	2.9	86	砂岩	16C後葉	
102-3	土壙F2600	(10.7)	8.0	3.25	421	砂質ホルンフェルス	13C後葉	
102-4	堀G965	(10.0)	6.8	6.0	636	泥質ホルンフェルス	16C前葉～中葉	
102-5	土壙E723	(7.35)	5.8	3.75	196	流紋岩?	15C	
102-6	土壙F2620	(4.9)	4.2	4.1	117	流紋岩?	10C+15C	
102-7	井戸H328	(8.6)	4.6	3.4	233	流紋岩?	16C前葉	
102-8	溝F2410	(6.65)	3.7	0.95	44	流紋岩?	16C末	
102-9	土壙F2233	(4.4)	(3.35)	1.05	24	流紋岩?	16C前葉	
102-10	井戸B917	(3.2)	3.0	1.6	31	流紋岩?	15C末	玉用砥石か?
102-11	土壙F2233	(4.0)	4.3	1.3	35	流紋岩?	16C前葉	玉用砥石か?
102-12	土壙B1000	(9.5)	4.4	2.55	200	滑石	9～16C末	砥石か?
—	土壙B992	(3.5)	3.7	1.25	25	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C末	
—	土壙B1000	(6.8)	(1.8)	0.9	19	珪質頁岩～珪質粘板岩	9～16C末	
—	土壙B1000	(9.3)	(6.5)	1.15	99	珪質頁岩～珪質粘板岩	9～16C末	
—	溝E451	(5.0)	(3.0)	(0.5)	26	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C初	
—	井戸E452	(3.6)	(3.8)	1.35	26	流紋岩?	16C末	
—	井戸E452	(3.6)	(4.85)	(0.8)	18	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
—	溝E451	(5.9)	(3.4)	0.6	17	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C初	他に1点あり
—	土壙E544	(8.15)	5.1	1.4	64	流紋岩?	16C末	
—	土壙E584	(4.8)	3.35	0.75	23	粘板岩	16C前葉	
—	土壙F2140	(7.9)	(3.4)	(1.65)	51	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
—	溝F2180	(5.9)	(3.1)	(0.6)	17	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C前葉	
—	土壙F2233	(3.5)	4.2	(0.7)	15	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C前葉	
—	溝F2360	(5.8)	3.9	1.3	40	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
—	柱穴F2372	(4.9)	3.4	1.25	31	珪質頁岩～珪質粘板岩	15～16C	
—	溝F2410	(12.0)	(3.2)	(2.1)	87	珪質頁岩～珪質粘板岩	15C後葉	
—	溝F2503	(5.0)	(4.9)	(0.7)	23	珪質頁岩～珪質粘板岩	13C	
—	F区第3面	(8.0)	(2.9)	(0.9)	36	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末～17C初	
—	F区第3面	(4.5)	3.5	0.75	16	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末?	
—	土壙H300	(6.6)	3.2	0.5	23	珪質頁岩～珪質粘板岩	17～18C	
—	井戸H670	(4.25)	3.7	0.8	17	珪質頁岩～珪質粘板岩	17C初	
—	堀G1940(H区)	(4.8)	3.95	0.7	17	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
—	堀G1940(H区)	6.35	3.65	0.95	36	珪質頁岩～珪質粘板岩	16C末	
—	土壙G2207	(8.1)	3.4	2.0	89	珪質頁岩～珪質粘板岩	13C後葉	

観察表6 硯(石製)一覧表(図版102・180)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	出土遺構・層	計測値						材質	遺構年代	備考
		長さ	幅	縁高	陸高	海深	重量			
102-13	溝F2410	(5.2)	(2.8)	1.3	1.1		30	頁岩~粘板岩	15C後葉	
102-14	堀G1940(H区)	(4.5)	(3.4)	1.75	1.05		25	頁岩~粘板岩	16C末	
102-15	土壌B1000	(8.0)	(4.3)	(1.65)	1.25		71	頁岩~粘板岩	9C~16C末	
102-16	溝E455	(8.75)	8.0	(1.35)	1.1		154	頁岩~粘板岩	16C前葉	
102-17	F区路面下	(6.75)	(6.4)	1.8	1.65		112	頁岩~粘板岩	11C+14C+15C	
102-18	溝F2180	(6.35)	6.9	1.7	1.4		117	頁岩~粘板岩	16C前葉	
102-19	堀G1940(H区)	(6.7)	7.5	(1.0)	1.1	0.5	50	頁岩~粘板岩	16C末	
102-20	溝E451	11.1	7.8	1.9	1.6	0.55	239	頁岩~粘板岩	16C初	
102-21	土壌F2398	(5.5)	4.7	1.05	1.0	0.25	31	頁岩~粘板岩	16C	
102-22	井戸H328	(5.55)	(3.25)	1.25	1.0	0.6	32	頁岩~粘板岩	16C前葉	掘形出土
—	土壌E488	(5.3)	(3.6)	1.5	1.1		36	頁岩~粘板岩	16C	

観察表7 温石一覧表(図版103・181)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
103-1	土壌B1035	(7.9)	7.9	1.3	175	滑石	15C末	滑石製石釜を転用
103-2	土壌B1066	(8.75)	8.25	1.35	171	滑石	15C	滑石製石釜を転用
103-3	土壌E584	(7.45)	9.0	1.9	245	滑石	16C前葉	滑石製石釜を転用
103-4	土壌E584	(7.65)	6.4	1.4	157	滑石	16C前葉	滑石製石釜を転用
103-5	溝E451	(5.3)	(4.8)	1.3	93	滑石	16C初	滑石製石釜を転用
103-6	F区第3面	14.0	(4.6)	1.35	165	滑石		滑石製石釜を転用
—	土壌H606	(6.55)	(6.6)	1.35	95	滑石	16C末	滑石製石釜を転用? 図版181のA
—	土壌B1035	(5.25)	(4.75)	1.55	44	凝灰岩	15C末	砥石に孔をあけたものか? 図版181のB

観察表8 滑石製石釜一覧表(図版103・181)

遺物番号	出土遺構・層	部位	重量(g)	遺構年代	備考
103-7	土壌E727 1	口縁部	113	13~14C前半	
103-8	井戸E448 1	口縁部から底部	385	15C	底部を研磨し再加工、図43-1
103-9	溝P124	口縁部	388	13C前葉	
103-10	F区第3面	口縁部	98		縦方向に鏝をもつ
103-11	F区第3面	口縁部	87		下端も平らに成形 温石か?
103-12	井戸E448 3	口縁部	145	15C	
103-13	土壌E500	口縁部	194	15C後葉	
103-14	土壌E792	体部から底部	195	12~13C	
103-15	土壌F2474	口縁部	342	15~16C	
103-16	土壌E544	底部	145	16C末	
103-17	土壌F2423	口縁部	418	13C	
—	整地層B705	口縁部	93	17C	
—	溝C1226	体部	22	12C中~13C初	
—	土壌C1233	底部	182	15C初	
—	井戸E448 2	体部	95	15~16C	
—	井戸E448 4	体部	22	15~16C	
—	井戸E448 5	底部	43	15~16C	
—	井戸E448 6	体部	34	15~16C	
—	溝E451	体部	42	16C初	
—	土壌E500	体部	23	15C後葉	
—	土壌E582	体部	167	15C末	図43-2
—	土壌E584 1	体部	73	16C前葉	
—	土壌E584 2	口縁部	67	16C前葉	
—	土壌E727 2	体部	20	12C末	
—	土壌E768	底部	64	12C前半	
—	土壌E901	口縁部	30	12C~13C	

遺物番号	出土遺構・層	部位	重量(g)	遺構年代	備考
—	土壙F2098	底部	103	16C前葉	
—	土壙F2233	口縁部	41	16C前	
—	土壙F2322	口縁部	69	13C	
—	溝F2410 1	口縁部	101	15C後葉	
—	溝F2410 2	体部	371	15C後葉	図43-3
—	土壙F2600	底部	78	13C後半	
—	F区第3面	口縁部	14	15C	
—	F区路面下	底部付近	30	15~16C	
—	井戸G2462	底部	160	11C末~12C初	
—	土壙H644	底部	43	15~16C	
—	柱穴H783	底部	75	17C?	
—	土壙L28	未製品	197	13C中葉	
—	溝P124	底部付近	167	13C前葉	

観察表9 石製品一覧表 (図版104・180)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	種類	出土遺構・層	計測値			材質	遺構年代	備考
			寸法	厚さ	重量			
104-1	基石	土壙B1013	径2.1	0.8	3	玉髓	10C末	完存
104-2	基石	土壙B1012	径2.4	0.6	4	泥質ホルンフェルス	15C	完存
104-3	石帯	土壙D447	(3.4)×2.8	0.6	12		16~17C	丸軋
104-4	石帯	溝B77	4.2×2.8	0.7	15		18C末	丸軋、黒色、完存
104-5	石帯	土壙B1000	3.5×(1.7)	0.6	6		9~16C末	丸軋、白色
104-6	石帯	土壙B1000	3.9×(1.4)	0.8	6		9~16C末	巡方、灰白色、上面に毛彫り
104-7	石帯	土壙B674	(2.9)×(2.4)	0.5	11		18C中頃	巡方、オリーブ黒色
104-8	石錘	土壙B1013	径6.1	4.1	45	流紋岩	10C末	1/4残存、中央に孔
104-9	紡錘車	土壙B1021	径5.8	1.5	49	蛇紋岩	15C	半分残存
104-10	火鉢部材	石組E704	(4.0)×	0.7	13	凝灰岩(笏谷石)	16C後半	円筒状の破片、口径5.3cm
104-11	火鉢部材	F区第3面	6.2×5.5	3	104	凝灰岩(笏谷石)	16C後半	孔が2つ以上あり
104-12	石臼	井戸E452	10×6.2	6.5	580	砂質ホルンフェルス	16C末	石臼の上の部材
104-13	五輪塔	溝E455	径13.8	9.6		花崗岩	16C前葉	
—	石材	溝F2180	6.9×3.8	3.6	72	凝灰岩	16C前葉	
—	石材	土壙H694	9.8×7.9	5.2	578	凝灰岩	14C	

観察表10 吹子羽口一覧表 (図版100・182)

()は残存値、単位はcm,g

遺物番号	出土遺構・層	計測値			遺構年代	備考
		長さ	直径	重量		
100-13	井戸G2665	(6.6)	5.5	189	13C	孔径2.0cm
100-14	井戸G2665	(6.8)	4.4	62	13C	孔径2.2cm
100-15	井戸G2665	(6.6)	4.6	86	13C	孔径2.5cm
100-16	土壙G2207	(6.4)	4.8	95	13C後葉	孔径2.3cm
—	井戸G2665	(6.1)		36	13C	図版182のD
—	井戸G2665	(4.7)		43	13C	図版182のF
—	井戸G2665	(6.1)		53	13C	図版182のA
—	井戸G2665	(5.7)	4.9	69	13C	図版182のB 孔径2.1cm
—	井戸G2665	(3.2)		29	13C	
—	井戸G2665	(4.7)		32	13C	
—	井戸G2665	(5.0)		31	13C	図版182のC
—	土壙B1000	(9.4)		164	9C~16C末	図版182のG
—	溝E845	(5.0)		48	10C前葉~中葉	図版182のE 高杯脚を転用

観察表11 スラグ・鉄滓・融解物一覧表 (図版182)

番号(写真)	種類	出土遺構・層	重量(g)	遺構年代	備考
A	スラグ	流路F2550	14.5	9C~10C前葉	2片
B	スラグ	土壙E651	83	11C	16片
C	スラグ	A区土取穴	287	16C末	
D	鉄滓	土壙E792	250	12~13C	
E	融解物	土壙E700	38	16C末	

観察表12 窯壁・壁土一覧表 (図版183)

番号(写真)	出土遺構・層	重量(g)	遺構年代	備考
1	集石B969	27	15C	
2	土壙B1000	38	9~16C末	3片
3	土壙B1000	62	9~16C末	2片
4	土壙B1000	35	9~16C末	2片
5	土壙B1022	71		遺構は時代幅あり
6	溝E455	56	16C前葉	
7	土壙E500	26	15C後葉	
8	土壙E500	8	15C後葉	
9	土壙E584	39	16C前葉	
10	土壙E584	96	16C前葉	
11	土壙E768 A	10	12C・15C	
12	土壙E840	23	15~16C	
13	小穴F1734	8		
14	井戸F2013	43	16C末~17C初	
15	F区礫敷面	24	中世	
16	井戸F1709	32	16C中葉	2片 掘形出土
17	溝F2107	55	15C	8片
18	土壙F2140	33	16C末	
19	土壙F2184	34	15C	
20	土壙F2199	19	16C末	
21	土壙F2324 C	55	15~16C	
22	柱穴F2338	11	15~16C?	
23	土壙F2340	24	16C	
24	溝F2410	11	15C後葉	
25	土壙F2457	12	15~16C	
26	土壙F2484	12	15~16C	
27	小穴F2532	41	12~13C?	3片
28	流路F2550上層	7	9C~10C前葉	
29	土壙F2574	12	15C	
30	F区第3面	30	17C初?	
31	土壙H714	16	13~14C?	
32	柱穴H813	47		2片
33	土壙L24	41	15C	2片
34	堀G1940(H区)	109	16C末	
35	柱穴M42	30	13C	

觀察表13 錢貨一覽表 (図版105~107・184~186)

()は残存値、単位はcm、g

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年号	遺構年代	備考
105-1	長年大寶	土壙F2631	848	1.96	0.60	1.455	日本、嘉祥元年	10C前葉	
105-2	貞觀永寶	土壙F2631	870	1.985	0.515	1.601	日本、貞觀12年	10C前葉	
105-3	開元通寶	A区整地層2	621	2.495	0.685	2.976	唐、武德4年	17~19C	
105-4	開元通寶	土壙E165	621	2.43	0.66	3.919	唐、武德4年	18C後半	
105-5	開元通寶	土壙F1605	621	2.475	0.685	2.481	唐、武德4年	16C末~17C初	炭混層上
105-6	開元通寶	井戸D535	621	2.505	0.68	3.393	唐、武德4年	18C前葉	井筒内上層
105-7	開元通寶	井戸D535	621	2.495	0.68	2.967	唐、武德4年	18C前葉	井筒内上層
105-8	乾元重寶	F区清掃中	759	2.485	0.685	3.475	唐、乾元2年		
105-9	宋通元寶	E区清掃中	960	2.49	0.59	2.989	北宋、建隆元年		
105-10	太平通寶	土壙E165	976	2.45	0.62	2.644	北宋、太平興國元年	17C前葉	第2層焼土
105-11	太平通寶	H区清掃中	976	2.39	0.64	2.311	北宋、太平興國元年		
105-12	太平通寶	H区清掃中	976	2.47	0.62	2.657	北宋、太平興國元年		
105-13	唐國通寶	溝C918	985	2.385	0.58	2.966	南唐、交泰元年	16C末	
105-14	唐國通寶	土壙C641	985	1.945	0.44	1.089	南唐、交泰元年	18C前葉	
105-15	淳化元寶	土壙A303	990	2.42	0.525	3.202	北宋、淳化元年	15C~16C	
105-16	淳化元寶	穴蔵F1475	990	2.41	0.67	3.095	北宋、淳化元年	17C中葉	
105-17	至道元寶	整地層B888	995	2.425	0.60	3.542	北宋、至道年間	15~18C	
105-18	至道元寶	土壙E76	995	2.445	0.625	2.341	北宋、至道年間	18C後半	
105-19	咸平元寶	P区清掃中	998	2.455	0.59	2.708	北宋、咸平元年	17C中葉	
105-20	景德元寶	土壙F1109	1004	2.46	0.64	2.578	北宋、景德元年	16C末	
105-21	祥符元寶	A区近世層3	1008	2.43	0.62	2.640	北宋、大中祥符元年	17C	
105-22	祥符元寶	F区清掃中	1008	2.48	0.62	2.738	北宋、大中祥符元年		
105-23	祥符元寶	土壙F1432	1008	2.49	0.65	2.779	北宋、大中祥符元年	17C中葉	
105-24	祥符元寶	D区清掃中	1008	2.50	0.555	3.029	北宋、大中祥符元年		
105-25	祥符通寶	土壙F1605	1009	2.47	0.63	2.761	北宋、大中祥符2年	16C末~17C初	
105-26	天禧通寶	井戸D535	1017~	2.44	0.615	2.916	北宋、天禧年間	18C前葉	井筒内上層
105-27	天聖元寶	B区清掃中	1023	2.495	0.715	3.127	北宋、天聖元年	15~16C	
105-28	天聖元寶	土壙E235	1023	2.48	0.685	2.754	北宋、天聖元年	17C後半以降	下層
105-29	天聖元寶	F区清掃中	1023	2.475	0.735	2.560	北宋、天聖元年		
105-30	天聖元寶	D区清掃中	1023	2.42	0.66	2.72	北宋、天聖元年		
105-31	天聖元寶	土壙C651	1023	2.455	0.71	2.437	北宋、天聖元年	18C前葉	
105-32	明道元寶	土壙F1721	1032	2.49	0.725	2.784	北宋、明道元年	16C末	
105-33	景祐元寶	土壙A421	1034	2.425	0.69	2.210	北宋、景祐元年	17C	炭層
105-34	景祐元寶	土壙B720	1034	2.49	0.70	3.165	北宋、景祐元年	18C末	下層B
105-35	景祐元寶	井戸D535	1034	2.495	0.56	2.554	北宋、景祐元年	18C前葉	井筒内上層
106-1	皇宋通寶	溝A7	1039	2.49	0.75	3.143	北宋、宋元2年	19C中葉頃	
106-2	皇宋通寶	F区第3面	1039	2.485	0.72	2.768	北宋、宋元2年	17C初?	石敷F1695下
106-3	皇宋通寶	土壙D178	1039	2.40	0.675	2.207	北宋、宋元2年	18C後~19C	
106-4	皇宋通寶	土壙C943	1039	2.375	0.665	2.294	北宋、宋元2年	16C後葉	
106-5	皇宋通寶	C区清掃中	1039	2.415	0.64	2.469	北宋、宋元2年		
106-6	至和元寶	土壙D446	1054	2.355	0.72	2.205	北宋、至和元年	18C前葉	
106-7	嘉祐元寶	土壙F2050	1056	2.315	0.62	3.061	北宋、嘉祐年間	17C初	最下層
106-8	嘉祐通寶	F区近世層3	1056	2.34	0.615	2.218	北宋、嘉祐年間	17C	
106-9	嘉祐通寶	F区清掃中	1056	2.45	0.71	3.272	北宋、嘉祐年間		
106-10	嘉祐通寶	土壙D11	1056	2.536	0.68	2.815	北宋、嘉祐年間	18C前葉	
106-11	治平元寶	A区近世層3	1064	2.34	0.615	2.346	北宋、治平年間	17C	
106-12	治平元寶	C区清掃中	1064	2.375	0.62	2.587	北宋、治平年間		
106-13	治平元寶	C区清掃中	1064	2.43	0.655	2.407	北宋、治平年間		
106-14	熙寧元寶	F区清掃中	1068	2.42	0.67	2.758	北宋、熙寧元年		
106-15	熙寧元寶	路面F2401	1068	2.39	0.65	2.110	北宋、熙寧元年	15~16C	

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年号	遺構年代	備考
106-16	熙寧元寶	溝H329	1068	2.375	0.665	2.665	北宋、熙寧元年	17C	
106-17	熙寧元寶	土壙H673	1068	2.33	0.61	2.985	北宋、熙寧元年	16C末	
106-18	熙寧元寶	井戸D535	1068	2.435	0.70	3.743	北宋、熙寧元年	18C前葉	井筒内上層
106-19	熙寧元寶	土壙D11	1068	2.415	0.70	3.059	北宋、熙寧元年	16C後葉	
106-20	熙寧元寶	井戸D535	1068	2.385	0.63	3.435	北宋、熙寧元年	18C前葉	井筒内上層
106-21	元豐通寶	B区清掃中	1078	2.43	0.67	3.136	北宋、元豐元年		
106-22	元豐通寶	E区清掃中	1078	2.38	0.57	2.916	北宋、元豐元年		7枚癒着
106-23	元豐通寶	井戸F950	1078	2.41	0.69	3.420	北宋、元豐元年	18C	上層
106-24	元豐通寶	F区清掃中	1078	2.42	0.625	2.817	北宋、元豐元年		
106-25	元豐通寶	D区清掃中	1078	2.371	0.66	2.496	北宋、元豐元年		
106-26	元豐通寶	土壙D11	1078	2.40	0.67	2.993	北宋、元豐元年	16C後葉	
106-27	元豐通寶	井戸D535	1078	2.325	0.55	2.359	北宋、元豐元年	18C前葉	井筒内上層
106-28	元豐通寶	井戸D535	1078	2.425	0.68	3.663	北宋、元豐元年	18C前葉	井筒内上層
106-29	元豐通寶	土壙D11	1078	2.359	0.64	3.05	北宋、元豐元年	16C後葉	
106-30	元豐通寶	D区清掃中	1078	2.415	0.655	2.548	北宋、元豐元年		
106-31	元豐通寶	土壙D142	1078	2.461	0.655	2.88	北宋、元豐元年	18C前葉	
106-32	元祐通寶	B区瓦溜	1086	2.445	0.615	3.039	北宋、元祐元年	17C	北壁
106-33	元祐通寶	土壙E76	1086	2.35	0.65	3.681	北宋、元祐元年	18C後葉	
106-34	元祐通寶	土壙C549	1086	2.455	0.635	3.228	北宋、元祐元年	19C中葉	下層
106-35	元祐通寶	井戸D535	1086	2.43	0.70	3.800	北宋、元祐元年	18C前葉	井筒内上層
107-1	元祐通寶	井戸D535	1086	2.455	0.685	3.477	北宋、元祐元年	18C前葉	井筒内上層
107-2	紹聖元寶	F区第2面	1094	2.415	0.65	2.777	北宋、紹聖元年		
107-3	紹聖元寶	F区清掃中	1094	2.38	0.67	2.857	北宋、紹聖元年		
107-4	紹聖元寶	H区清掃中	1094	2.40	0.69	2.560	北宋、紹聖元年		
107-5	紹聖元寶	井戸D535	1094	2.47	0.65	3.665	北宋、紹聖元年	18C前葉	井筒内上層
107-6	元符通寶	土壙F1605	1098	2.45	0.60	3.065	北宋、元符元年	16C末~17C初	
107-7	元符通寶	池D529B	1098	2.405	0.65	2.989	北宋、元符元年	16C中葉	
107-8	聖宋元寶	A区盛土	1101	2.405	0.66	3.925	北宋、建中靖国元年		
107-9	聖宋元寶	土壙N18	1101	2.435	0.62	1.932	北宋、建中靖国元年		第3層
107-10	聖宋元寶	井戸D535	1101	2.405	0.575	2.295	北宋、建中靖国元年	18C前葉	井筒内上層
107-11	聖宋元寶	井戸D535	1101	2.38	0.61	3.305	北宋、建中靖国元年	18C前葉	井筒内上層
107-12	聖宋元寶	井戸D535	1101	2.305	0.65	3.188	北宋、建中靖国元年	18C前葉	井筒内上層
107-13	聖宋元寶	土壙D283	1101	2.36	0.65	3.06	北宋、建中靖国元年	17C後葉	
107-14	大觀通寶	B区清掃中	1107	2.47	0.62	2.808	北宋、大觀元年	16C	
107-15	政和通寶	土壙B1000	1111	2.40	0.63	1.998	北宋、政和元年	9C~16C末	
107-16	政和通寶	土壙F1605	1111	2.475	0.60	2.630	北宋、政和元年	16C末~17C初	
107-17	政和通寶	土壙F2140	1111	2.45	0.695	2.893	北宋、政和元年	16C末	
107-18	政和通寶	土壙C1191	1111	2.425	0.68	2.661	北宋、政和元年	15C末~16C前葉	
107-19	淳熙元寶	G区清掃中	1174	2.975	0.80	6.231	南宋、淳熙元年		
107-20	大定通寶	土壙F1605	1178	2.33	0.59	2.089	金、大定18年	16C末~17C初	
107-21	慶元通寶	井戸D535	1195	2.395	0.685	2.434	南宋、慶元元年	18C前葉	井筒内上層
107-22	嘉定通寶	E区中世層	1208	2.44	0.61	2.979	南宋、嘉定元年		
107-23	紹定通寶	G区清掃中	1228	2.81	0.675	4.639	南宋、紹定元年		
107-24	景定元寶	土壙E270	1260	2.45	0.64	2.522	南宋、景定元年	18~19C	
107-25	至大通寶	土壙E170	1310	2.335	0.60	2.940	元、至大3年	18C後葉	東壁
107-26	洪武通寶	土壙F1078	1368	2.375	0.55	2.933	明、洪武元年	17C前葉	掘形
107-27	洪武通寶	土壙H372	1368	2.45	0.61	1.751	明、洪武元年	18C	
107-28	洪武通寶	D区清掃中	1368	2.465	0.62	2.539	明、洪武元年		
107-29	永樂通寶	F区第2面	1408	2.515	0.565	3.361	明、永樂6年		4孔あり
107-30	永樂通寶	F区清掃中	1408	2.505	0.56	3.125	明、永樂6年		
107-31	永樂通寶	溝F2180	1408	2.50	0.52	3.862	明、永樂6年	16C前葉	

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年号	遺構年代	備考
107-32	宣徳通寶	E区中世層	1433	2.585	0.495	3.475	明、宣徳8年		
107-33	朝鮮通寶	土壙C972	1394~	2.34	0.565	2.544	李、康獻王(応永年間)	16C末~17C前葉	
107-34	慶長通寶	穴蔵F1475	1606	2.375	0.54	2.090	慶長11年	17C	瓦層下
107-35	康熙通寶	土壙H523	1662	2.335	0.635	1.403	清、康熙元年	17C~18C	
—	開元通寶	B区清掃中	621	2.395	0.65	2.110	唐、武徳4年		
—	開元通寶	土壙B1000	621	2.27	0.66	1.384	唐、武徳4年	9~16C末	
—	開元通寶	土壙E270	621	2.375	0.63	1.811	唐、武徳4年	18~19C	
—	開元通寶	土壙F1605	621	2.445	0.72	2.738	唐、武徳4年	16C末~17C初	
—	開元通寶	土壙F1958	621	2.45	0.67	2.987	唐、武徳4年		
—	開元通寶	土壙G2418	621	2.475	0.70	2.421	唐、武徳4年	17C前葉	
—	開元通寶	土壙G2418	621	2.43	0.665	2.656	唐、武徳4年	17C前葉	
—	開元通寶	G区清掃中	621	2.40	0.71	2.397	唐、武徳4年		
—	開元通寶	G区清掃中	621	2.355	0.665	2.515	唐、武徳4年		
—	太平通寶	H区清掃中	976	2.41	0.625	6.856	北宋、太平興国元年		
—	太平通寶	H区清掃中	976	2.45	0.60	3.378	北宋、太平興国元年		
—	太平通寶	H区清掃中	976	2.43	0.605	2.762	北宋、太平興国元年		
—	太平通寶	H区清掃中	976	2.43	0.61	2.476	北宋、太平興国元年		
—	淳化元寶	土壙F1605	990	2.285	0.65	2.655	北宋、淳化元年	16C末~17C初	
—	淳化元寶	F区清掃中	990	2.37	0.60	2.619	北宋、淳化元年		
—	至道元寶	A区炭層	995	2.435	0.69	2.453	北宋、至道年間	19C中葉	
—	至道元寶	土壙F1109	995	2.47	0.625	2.237	北宋、至道年間	16C末	
—	至道元寶	柱穴G1677	995	2.475	0.61	2.778	北宋、至道年間	17C中葉	
—	至道元寶	H区清掃中	995	2.23	0.635	1.807	北宋、至道年間		
—	景德元寶	土壙F1432	1004	2.44	0.58	3.069	北宋、景德元年	17C中葉	
—	景德元寶	土壙G1447	1004	2.415	0.62	1.846	北宋、景德元年	17C中葉	
—	景德元寶	G区清掃中	1004	2.40	0.62	2.998	北宋、景德元年		
—	祥符元寶	土壙E165	1008	2.455	0.575	3.812	北宋、大中祥符元年	17C末	第2層焼土
—	祥符元寶	土壙E728	1008	2.50	0.55	3.007	北宋、大中祥符元年	16C前葉	
—	祥符元寶	土壙F1605	1008	2.525	0.63	1.959	北宋、大中祥符元年	16C末~17C初	
—	祥符通寶	集石A331	1008	2.29	0.625	1.672	北宋、大中祥符2年	17C	
—	祥符通寶	井戸D535	1008	2.545	0.575	3.730	北宋、大中祥符2年	18C前葉	井筒内上層
—	祥符通寶	溝E455	1008	2.495	0.645	2.562	北宋、大中祥符2年	15C末	砂層
—	天禧通寶	井戸D535	1017~	2.205	0.67	2.039	北宋、天禧年間	18C前葉	井筒肩
—	天禧通寶	土壙G870	1017~	2.44	0.625	3.475	北宋、天禧年間	19C	
—	天禧通寶	土壙G1096	1017~	2.51	0.67	2.550	北宋、天禧年間	17C中葉	
—	天禧通寶	土壙G1447	1017~	2.45	0.60	2.402	北宋、天禧年間	17C中葉	
—	天禧通寶	G区清掃中	1017~	2.39	0.61	2.456	北宋、天禧年間	17C中葉	
—	天禧通寶	P区焼土層	1017~	2.44	0.64	1.809	北宋、天禧年間	17C中葉	
—	天聖元寶	土壙A303	1023	2.495	0.75	2.487	北宋、天聖元年	15~16C	
—	天聖元寶	土壙A357	1023	2.70	0.785	7.713	北宋、天聖元年	16C末	2枚癒着
—	天聖元寶	土壙B302	1023	2.45	0.60	2.789	北宋、天聖元年	15C	底部
—	天聖元寶	土壙E310	1023	2.43	0.74	1.977	北宋、天聖元年	17~18C	
—	天聖元寶	溝E455	1023	2.47	0.61	2.719	北宋、天聖元年	15C末	西肩
—	天聖元寶	土壙F1432	1023	2.47	0.70	3.483	北宋、天聖元年	17C中葉?	下層
—	天聖元寶	F区第3面	1023	2.41	0.70	3.217	北宋、元聖元年	17C~	
—	天聖元寶	土壙G2120	1023	2.43	0.72	2.401	北宋、元聖元年	17C後葉	
—	天聖元寶	溝H270	1023	2.47	0.72	3.079	北宋、天聖元年	17C前葉	
—	天聖元寶	P区第3面	1023	2.305	0.555	1.779	北宋、元聖元年	17C初	
—	景祐元寶	土壙F1474	1034	2.50	0.73	2.726	北宋、景祐元年	17C初	
—	景祐元寶	G区清掃中	1034	2.435	0.71	3.152	北宋、景祐元年		
—	景祐元寶	L区清掃中	1034	2.44	0.59	3.035	北宋、景祐元年		

遺物番号	種 類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年 号	遺構年代	備 考
—	皇宋通寶	土壙A267	1039	2.485	0.68	2.622	北宋、宝元2年	15C～	
—	皇宋通寶	A区第2層	1039	2.415	0.73	2.220	北宋、宝元2年	15～18C	
—	皇宋通寶	A区近世層3	1039	2.45	0.725	3.482	北宋、宝元2年	17C	
—	皇宋通寶	土壙B824	1039	2.41	0.69	1.962	北宋、宝元2年	18C後葉	
—	皇宋通寶	土壙B954	1039	2.465	0.65	2.242	北宋、宝元2年	16C後葉	
—	皇宋通寶	土壙B992	1039	2.49	0.72	2.921	北宋、宝元2年	15C末	
—	皇宋通寶	土壙D291	1039	2.345	0.715	1.571	北宋、宝元2年	17C前葉	下層
—	皇宋通寶	溝E455	1039	2.48	0.72	2.623	北宋、宝元2年	15C末	西肩粗砂
—	皇宋通寶	土壙E463	1039	2.465	0.73	2.571	北宋、宝元2年	17C前葉	
—	皇宋通寶	E区中世層	1039	2.415	0.64	2.488	北宋、宝元2年		
—	皇宋通寶	土壙F1398	1039	2.465	0.70	2.700	北宋、宝元2年	19C代	底部
—	皇宋通寶	土壙F1432	1039	2.505	0.685	3.436	北宋、宝元2年	17C中葉	
—	皇宋通寶	土壙F1605	1039	2.365	0.67	2.665	北宋、宝元2年	16C末～17C初	
—	皇宋通寶	F区清掃中	1039	2.45	0.67	3.166	北宋、宝元2年		
—	皇宋通寶	F区清掃中	1039	2.49	0.665	2.786	北宋、宝元2年		
—	皇宋通寶	土壙G1164	1039	2.405	0.67	2.622	北宋、宝元2年	17C中葉	
—	皇宋通寶	土壙G1447	1039	2.41	0.765	2.474	北宋、宝元2年	17C中葉	
—	皇宋通寶	土壙G1936	1039	2.445	0.74	2.862	北宋、宝元2年	17C中葉	
—	皇宋通寶	G区清掃中	1039	2.365	0.71	2.195	北宋、宝元2年		
—	皇宋通寶	G区清掃中	1039	2.39	0.65	2.492	北宋、宝元2年		
—	皇宋通寶	G区清掃中	1039	2.44	0.62	3.192	北宋、宝元2年	18C前葉	
—	皇宋通寶	H区中世層	1039	2.44	0.65	2.727	北宋、宝元2年	16C	
—	皇宋通寶	土壙P193	1039	2.485	0.73	2.785	北宋、宝元2年	13C後葉	
—	嘉祐元寶	土壙B992	1056	2.375	0.58	6.524	北宋、嘉祐年間	15C末	3枚癒着
—	嘉祐通寶	土壙D130	1056	2.335	0.71	2.867	北宋、嘉祐年間	17C前葉	
—	嘉祐通寶	井戸D535	1056	2.555	0.69	3.051	北宋、嘉祐年間	18C前葉	井筒内上層
—	嘉祐通寶	F区清掃中	1056	2.49	0.805	1.855	北宋、嘉祐年間		
—	治平元寶	A区炭層	1064	2.38	0.69	2.419	北宋、治平年間	19C中葉	
—	治平元寶	整地層B888	1064	2.35	0.67	1.974	北宋、治平年間	15～18C	
—	治平元寶	土壙E165	1064	2.38	0.65	2.845	北宋、治平年間	17C前葉	第2層焼土
—	治平元寶	土壙G1120	1064	2.385	0.63	2.579	北宋、治平年間	17C中葉	
—	治平元寶	土壙G1164	1064	2.30	0.60	3.002	北宋、治平年間	17C中葉	
—	治平元寶	土壙G1447	1064	2.355	0.63	4.210	北宋、治平年間	17C中葉	
—	治平元寶	土壙G1447	1064	2.395	0.625	3.276	北宋、治平年間	17C中葉	
—	治平元寶	土壙G2148	1064	2.38	0.65	2.384	北宋、治平年間	17C後葉	
—	治平元寶	G区清掃中	1064	2.44	0.64	2.911	北宋、治平年間	16C後葉	
—	治平元寶	土壙J165	1064	2.37	0.64	2.398	北宋、治平年間	16C後葉	
—	熙寧元寶	A区近代溝	1068	2.33	0.655	2.263	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	土壙A291	1068	2.46	0.605	2.548	北宋、熙寧元年	16C末	
—	熙寧元寶	C区清掃中	1068	2.40	0.735	2.931	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	土壙D271	1068	2.38	0.65	3.137	北宋、熙寧元年	16C後葉	
—	熙寧元寶	石組土壙E22	1068	2.375	0.675	2.384	北宋、熙寧元年	19C初	上層 瓦溜
—	熙寧元寶	土壙E249	1068	2.43	0.69	3.073	北宋、熙寧元年	18C	
—	熙寧元寶	溝E455	1068	2.375	0.62	3.006	北宋、熙寧元年	15C末	底部砂層
—	熙寧元寶	E区中世層	1068	2.445	0.655	2.975	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	土壙F1605	1068	2.39	0.76	2.358	北宋、熙寧元年	16C末～17C初	炭混層上
—	熙寧元寶	石敷F1695	1068	2.385	0.665	3.195	北宋、熙寧元年	16C	
—	熙寧元寶	F区第2面	1068	2.41	0.685	3.527	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	F区清掃中	1068	2.365	0.64	3.378	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	土壙G1164	1068	2.31	0.705	2.557	北宋、熙寧元年	17C中葉	
—	熙寧元寶	溝G1195	1068	2.39	0.64	3.161	北宋、熙寧元年	17C後葉	

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年号	遺構年代	備考
—	熙寧元寶	土壙G1447	1068	2.37	0.645	3.189	北宋、熙寧元年	17C中葉	
—	熙寧元寶	土壙G1447	1068	2.355	0.725	2.812	北宋、熙寧元年	17C中葉	
—	熙寧元寶	G区第2面	1068	2.40	0.665	2.555	北宋、熙寧元年	17C中葉	
—	熙寧元寶	G区清掃中	1068	2.375	0.65	2.210	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	G区清掃中	1068	2.38	0.65	2.665	北宋、熙寧元年		
—	熙寧元寶	G区清掃中	1068	2.405	0.65	3.397	北宋、熙寧元年	17C中葉	
—	熙寧元寶	土壙M23	1068	2.36	0.74	2.290	北宋、熙寧元年	17C以降	
—	元豐通寶	土壙A420	1078	2.425	0.65	3.138	北宋、元豐元年	17C初	
—	元豐通寶	A区清掃中	1078	2.34	0.625	2.612	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	土壙B799	1078	2.465	0.68	3.704	北宋、元豐元年	17C前葉	
—	元豐通寶	土壙B1024	1078	2.40	0.645	2.873	北宋、元豐元年	15C~	
—	元豐通寶	土壙B1053	1078	2.45	0.585	2.729	北宋、元豐元年	10C末	上層
—	元豐通寶	土壙C916	1078	2.40	0.64	3.536	北宋、元豐元年	16C末	
—	元豐通寶	井戸D535	1078	2.415	0.63	3.750	北宋、元豐元年	18C前葉	井筒内上層
—	元豐通寶	土壙E165	1078	2.44	0.68	2.506	北宋、元豐元年	17C前葉	第2層焼土
—	元豐通寶	土壙E279	1078	2.435	0.60	4.458	北宋、元豐元年	18C初頭	
—	元豐通寶	溝E455	1078	2.46	0.675	2.907	北宋、元豐元年	15C末	砂層
—	元豐通寶	溝E455	1078	2.425	0.64	3.229	北宋、元豐元年	15C末	砂層
—	元豐通寶	溝E455	1078	2.37	0.69	1.786	北宋、元豐元年	15C末	砂層
—	元豐通寶	土壙E728	1078	2.425	0.68	3.398	北宋、元豐元年	16C前葉	
—	元豐通寶	土壙E730	1078	2.435	0.70	2.882	北宋、元豐元年	15~16C	
—	元豐元寶	E区近世層	1078	2.495	0.68	2.836	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	E区清掃中	1078	2.31	0.795	1.000	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	E区清掃中	1078	2.425	0.69	3.048	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	土壙F1455	1078	2.415	0.65	2.908	北宋、元豐元年	17C後葉	中葉層
—	元豐通寶	土壙F1605	1078	2.31	0.70	2.007	北宋、元豐元年	16C末~17C初	
—	元豐通寶	F区第2面	1078	2.40	0.655	3.091	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	F区第3面	1078	2.44	0.80	3.092	北宋、元豐元年	16C末~17C	
—	元豐通寶	F区清掃中	1078	2.475	0.65	3.504	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	土壙G1447	1078	2.39	0.66	2.840	北宋、元豐元年	17C中葉	
—	元豐通寶	土壙G1447	1078	2.455	0.685	2.834	北宋、元豐元年	17C中葉	
—	元豐通寶	土壙G1447	1078	2.46	0.66	4.014	北宋、元豐元年	17C中葉	
—	元豐通寶	土壙G1447	1078	2.335	0.60	2.943	北宋、元豐元年	17C中葉	
—	元豐通寶	土壙G2418	1078	2.415	0.73	1.536	北宋、元豐元年	17C前葉	
—	元豐通寶	G区焼土層	1078	2.365	0.70	2.785	北宋、元豐元年	17C後葉	
—	元豐通寶	土壙H319	1078	2.42	0.685	2.544	北宋、元豐元年	17C前葉	
—	元豐通寶	土壙H319	1078	2.43	0.69	3.229	北宋、元豐元年	17C前葉	
—	元豐通寶	土壙H532	1078	2.435	0.68	2.536	北宋、元豐元年	17C前葉	
—	元豐通寶	地業H666	1078	2.44	0.69	2.763	北宋、元豐元年	15C末	
—	元豐通寶	土壙I40	1078	2.42	0.66	2.108	北宋、元豐元年	18C後葉	
—	元豐通寶	土壙M11	1078	2.385	0.63	2.788	北宋、元豐元年	13C?	
—	元豐通寶	P区第3面	1078	2.465	0.71	2.891	北宋、元豐元年		
—	元豐通寶	P区焼土層	1078	2.44	0.62	3.663	北宋、元豐元年	17C中葉	
—	元豐通寶	P区清掃中	1078	2.37	0.705	2.499	北宋、元豐元年		
—	元祐通寶	A区整地層2	1086	2.42	0.68	2.866	北宋、元祐元年	17~19C	
—	元祐通寶	井戸B841	1086	2.375	0.665	2.881	北宋、元祐元年	16C前葉	
—	元祐通寶	B区清掃中	1086	2.40	0.63	2.422	北宋、元祐元年		
—	元祐通寶	D区西壁断面	1086	2.36	0.66	2.028	北宋、元祐元年		
—	元祐通寶	溝E455	1086	2.455	0.71	2.791	北宋、元祐元年	15C末	
—	元祐通寶	土壙E728	1086	2.53	0.65	2.957	北宋、元祐元年	16C前葉	4枚癒着
—	元祐通寶	井戸F1497	1086	2.45	0.67	2.252	北宋、元祐元年	17C初	

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径	穿孔径	重量	年号	遺構年代	備考
—	元祐通寶	土壙F1838	1086	2.48	0.61	3.183	北宋、元祐元年	17C初	
—	元祐通寶	土壙F1900	1086	2.475	0.61	3.291	北宋、元祐元年	17C前葉	
—	元祐通寶	溝F2180	1086	2.34	0.595	2.525	北宋、元祐元年	16C前葉	
—	元祐通寶	F区第3面	1086	2.43	0.65	3.637	北宋、元祐元年	17C初	
—	元祐通寶	F区第3面	1086	2.38	0.66	3.567	北宋、元祐元年	16C末~17C	
—	元祐通寶	F区第3面	1086	2.58	0.585	3.229	北宋、元祐元年	15~16C	
—	元祐通寶	F区清掃中	1086	2.45	0.71	2.466	北宋、元祐元年		
—	元祐通寶	F区清掃中	1086	2.39	0.72	2.314	北宋、元祐元年		
—	元祐通寶	F区清掃中	1086	2.445	0.665	2.463	北宋、元祐元年		
—	元祐通寶	土壙G870	1086	2.355	0.63	2.789	北宋、元祐元年	19C	
—	元祐通寶	溝G1195	1086	2.475	0.625	2.878	北宋、元祐元年	17C後葉	
—	元祐通寶	井戸G1239	1086	2.45	0.605	2.580	北宋、元祐元年	17C中葉	
—	元祐通寶	G区第2面	1086	2.38	0.615	3.240	北宋、元祐元年	18C前葉	
—	元祐通寶	土壙H450	1086	2.40	0.64	2.681	北宋、元祐元年	17C初	
—	元祐通寶	土壙H530	1086	2.435	0.70	2.983	北宋、元祐元年	16C末	上層
—	元祐通寶	堀G1940(H区)	1086	2.39	0.655	3.196	北宋、元祐元年	16C末	上層
—	紹聖元寶	砂層A193	1094	2.40	0.61	3.447	北宋、紹聖元年	17C前葉	
—	紹聖元寶	土壙E451	1094	2.40	0.61	3.783	北宋、紹聖元年	16C後葉	下層
—	紹聖元寶	溝E455	1094	2.38	0.70	12.625	北宋、紹聖元年	15C末	西肩粗砂
—	紹聖元寶	E区中世層	1094	2.45	0.66	2.634	北宋、紹聖元年		
—	紹聖元寶	土壙F1605	1094	2.38	0.62	2.470	北宋、紹聖元年	16C末~17C初	
—	紹聖元寶	土壙F1708	1094	2.40	0.665	2.908	北宋、紹聖元年	16C末	
—	紹聖元寶	土壙G1447	1094	2.355	0.615	3.000	北宋、紹聖元年	17C中葉	
—	紹聖元寶	H区清掃中	1094	2.38	0.715	2.274	北宋、紹聖元年	17C初	
—	紹聖元寶	J区第4面	1094	2.40	0.61	2.854	北宋、紹聖元年		
—	聖宋元寶	D区清掃中	1101	2.416	0.585	2.604	北宋、建中靖国元年		
—	聖宋元寶	E区中世層	1101	2.37	0.66	2.789	北宋、建中靖国元年		
—	聖宋元寶	F区清掃中	1101	2.45	0.63	2.432	北宋、建中靖国元年		
—	聖宋元寶	土壙H36	1101	2.50	0.605	3.234	北宋、建中靖国元年	19C	
—	大觀通寶	F区第2面	1107	2.43	0.60	2.775	北宋、大觀元年		
—	政和通寶	土壙G1164	1111	2.365	0.66	2.888	北宋、政和元年	17C中葉	
—	政和通寶	土壙G1447	1111	2.355	0.60	2.289	北宋、政和元年	17C中葉	
—	政和通寶	土壙G1703	1111	2.415	0.61	2.177	北宋、政和元年	16C前葉	
—	宣和通寶	C区拡張1断割	1119	2.445	0.62	3.243	北宋、宣和元年		下層
—	洪武通寶	井戸A107	1368	2.37	0.51	3.170	明、洪武元年	15~16C	掘形
—	洪武通寶	溝E455	1368	2.38	0.66	3.328	明、洪武元年	15C末	砂層
—	洪武通寶	E区中世層	1368	2.33	0.45	2.572	明、洪武元年		
—	永樂通寶	A区近世層3	1408	2.44	0.525	3.061	明、永樂6年	17C	
—	永樂通寶	A区炭層	1408	2.52	0.545	3.341	明、永樂6年	19C中葉	
—	永樂通寶	土壙E728	1408	2.47	0.51	3.237	明、永樂6年	16C前葉	
—	永樂通寶	E区近世層	1408	2.535	0.565	2.385	明、永樂6年		
—	永樂通寶	土壙G1164	1408	2.50	0.55	3.147	明、永樂6年	17C中葉	
—	永樂通寶	土壙G1447	1408	2.455	0.585	3.187	明、永樂6年	17C中葉	
—	永樂通寶	池G1972	1408	2.485	0.585	2.722	明、永樂6年	17C中葉	
—	永樂通寶	H区清掃中	1408	2.47	0.66	3.803	明、永樂6年	17C後半~	
—	朝鮮通寶	土壙E730	1394~	2.35	0.545	2.877	李、康獻王(応永年間)	15~16C	
—	朝鮮通寶	土壙G1447	1394~	2.37	0.53	3.408	李、康獻王(応永年間)	17C中葉	

図 版

凡 例

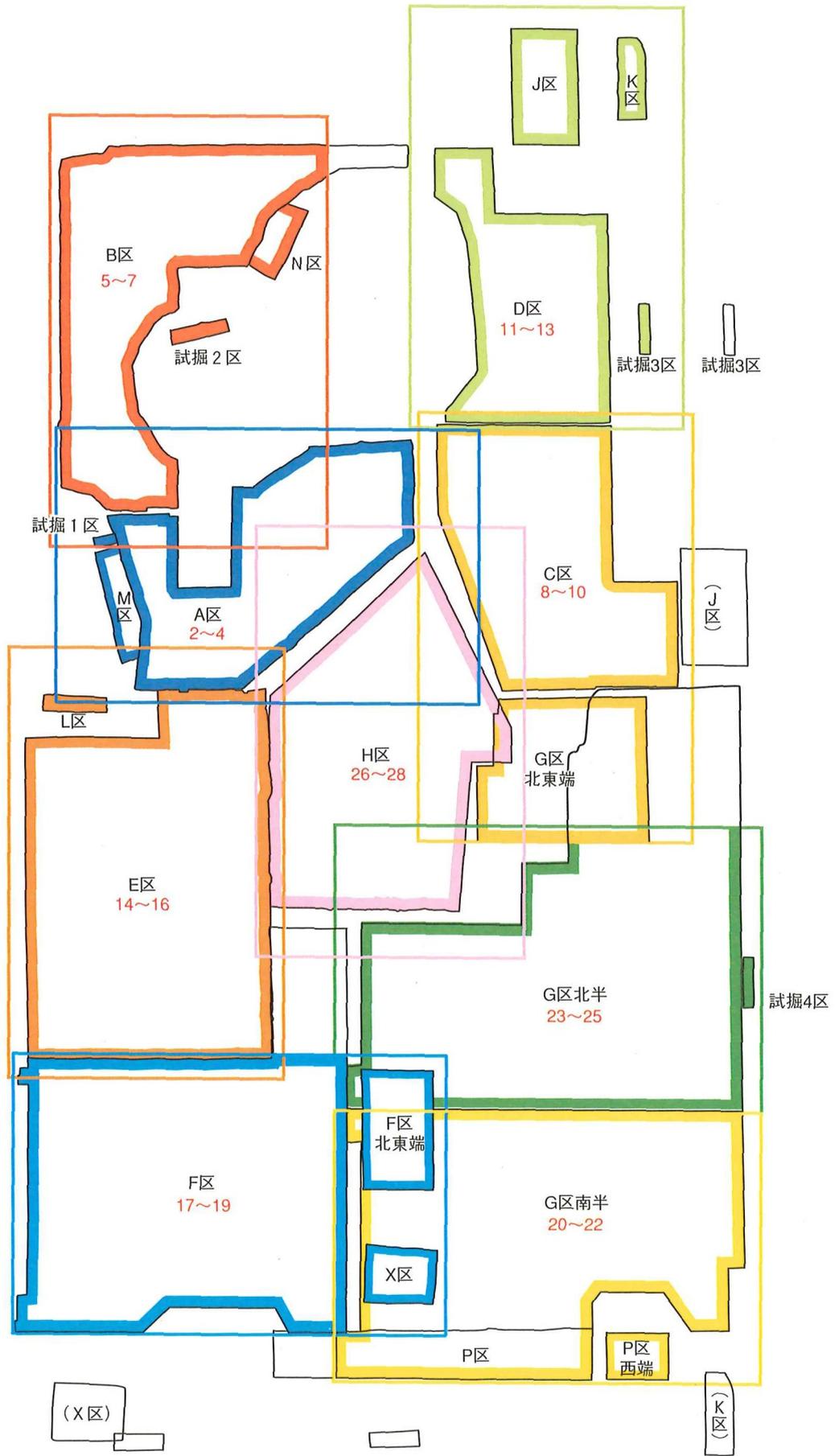
遺構図版

1. 各調査区を縮尺1/250で統一し、A区から順に示した。
2. 図幅の空白部分には小規模な調査区を配置し、周囲を破線で囲んだ。
例：F区北東端、G区北東端、J区、K区、L区、P区西端、X区
3. 遺構は、前段階のものをグレートーンの下地とし、その上に色分けで示した。
4. 遺構実測図や出土遺物が掲載されたものをゴチック体で、それ以外は明朝体で示した。
5. 土器型式と年代、配色の関係は以下とした。

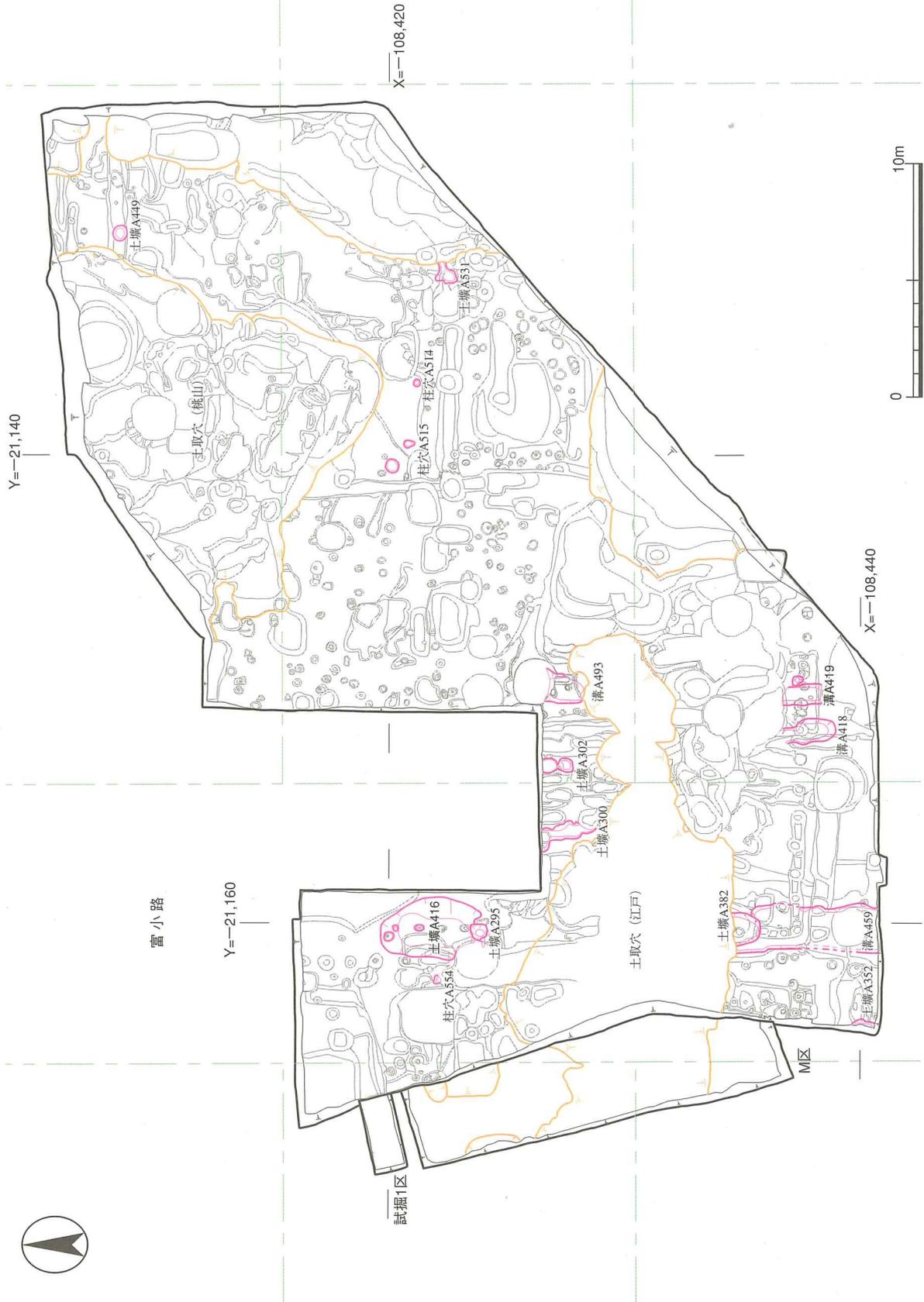
古墳時代前期（3・4C）～後期・飛鳥時代（6・7C）	=（緑）
京都Ⅰ期中～Ⅱ期古（8C末～9C中）平安時代前期の前半代	=（青）
京都Ⅱ期中～Ⅲ期古（9C後～10C中）平安時代前期の中頃から中期初め	=（黒）
京都Ⅲ期新～Ⅳ期中（10C末～11C中）平安時代中期の中頃から後半代	=（赤）
京都Ⅳ期新～Ⅴ期新（11C後～12C後）平安時代後期	=（黒）
京都Ⅵ期古～Ⅶ期新（12C末～14C前）鎌倉時代	=（赤）
京都Ⅶ期新～Ⅷ期新（14C中～15C前）室町時代の前半代	=（赤）
京都Ⅷ期古～Ⅸ期古（15C中～16C前）戦国期の前半代	=（黒）
京都Ⅸ期中～Ⅹ期新（16C中～16C後）戦国期の末期	=（青）

遺物図版

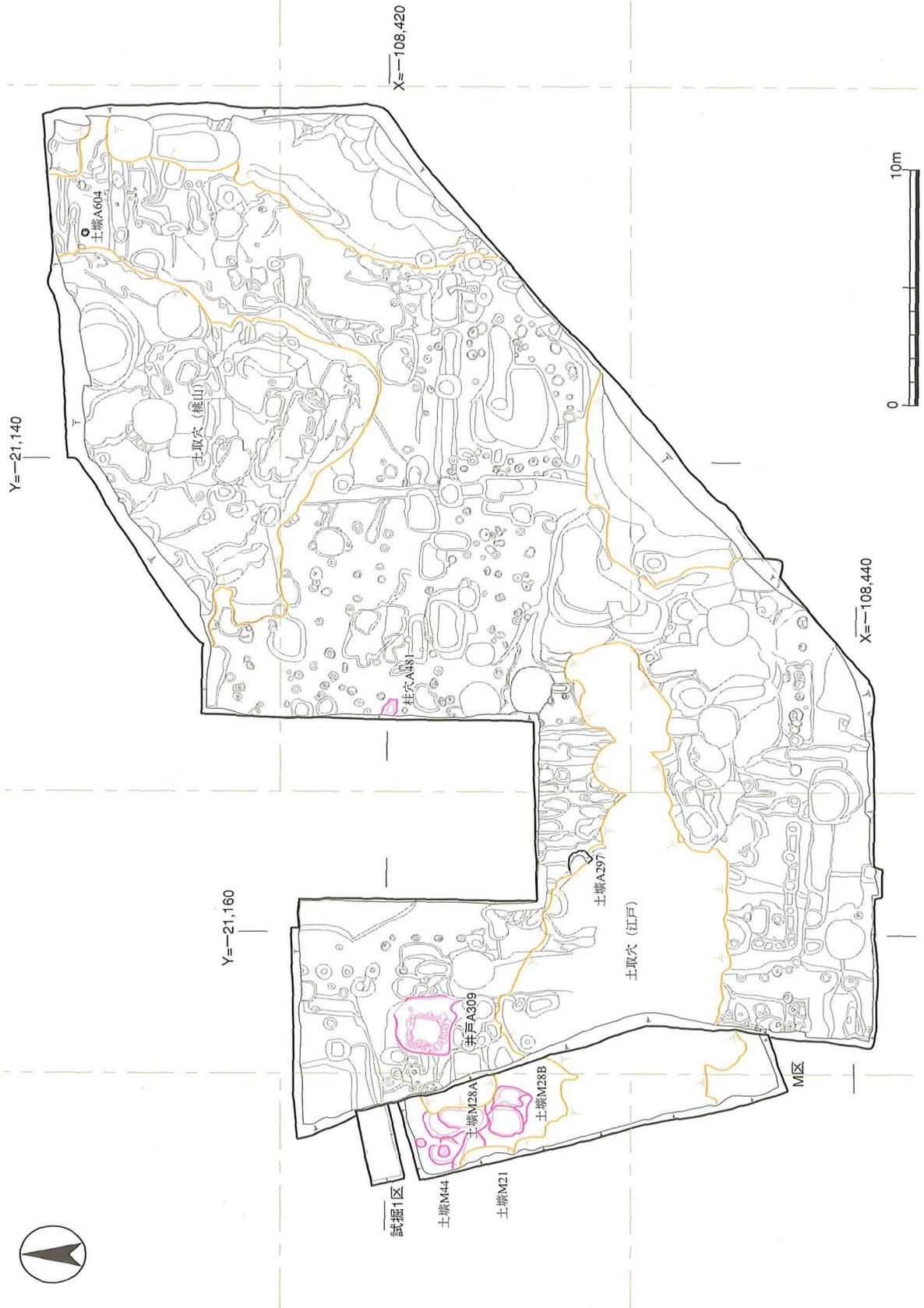
1. 遺物番号は図版ごとに1から付した。
2. 遺物番号に「ホ」のつくものは、井戸掘形からの出土を示す。
例：^ホ43-16
3. 遺物番号に「▲」のつくものは、その遺物群の中で古い特徴をもつことを示す。
例：[▲]65-29
4. 遺物番号に「■」のつくものは、その遺物群の中で新しい特徴をもつことを示す。
例：[■]87-21



調査区と図版の紙割図



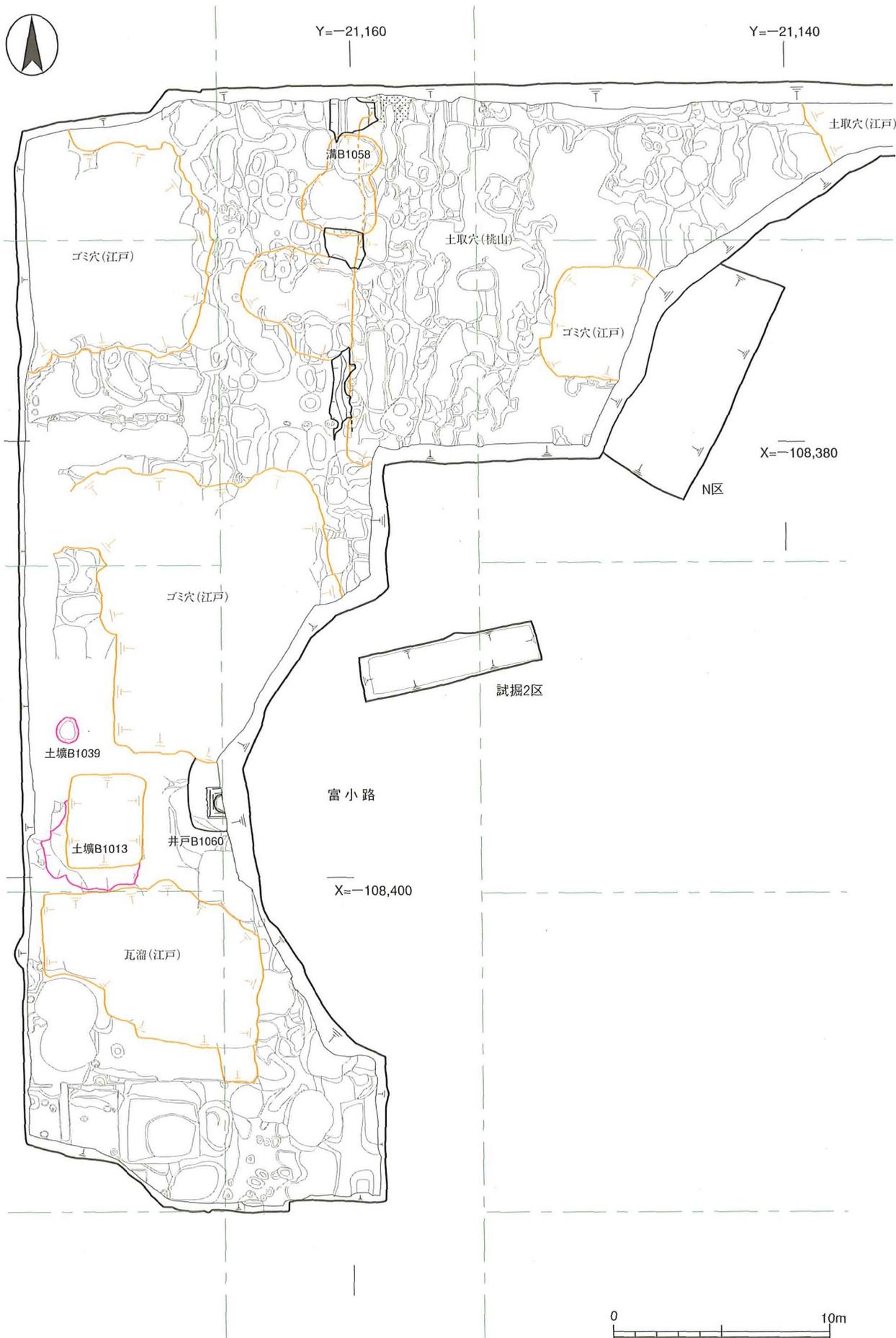
A区・M区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



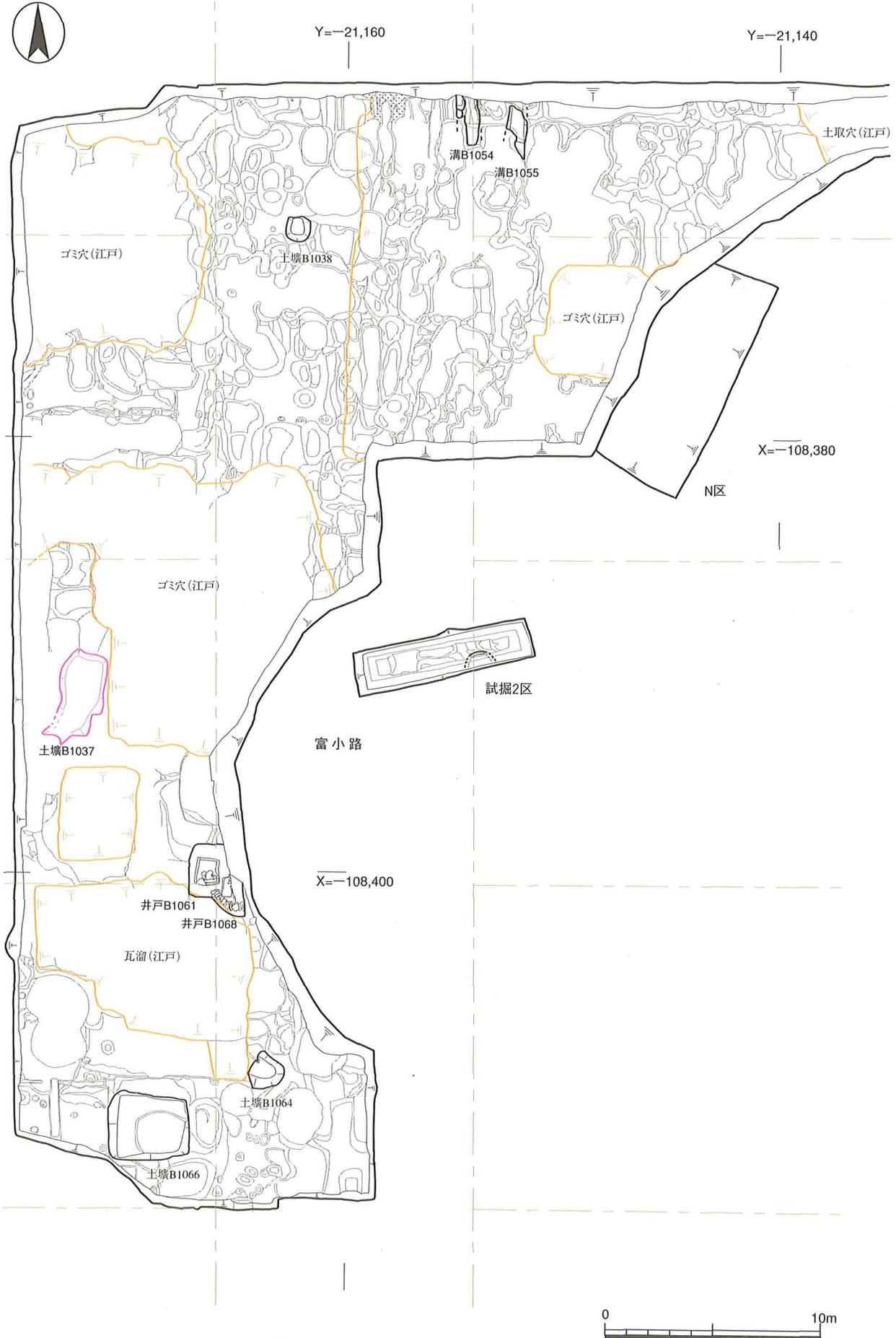
A区・M区 平安時代後期・鎌倉時代平面図



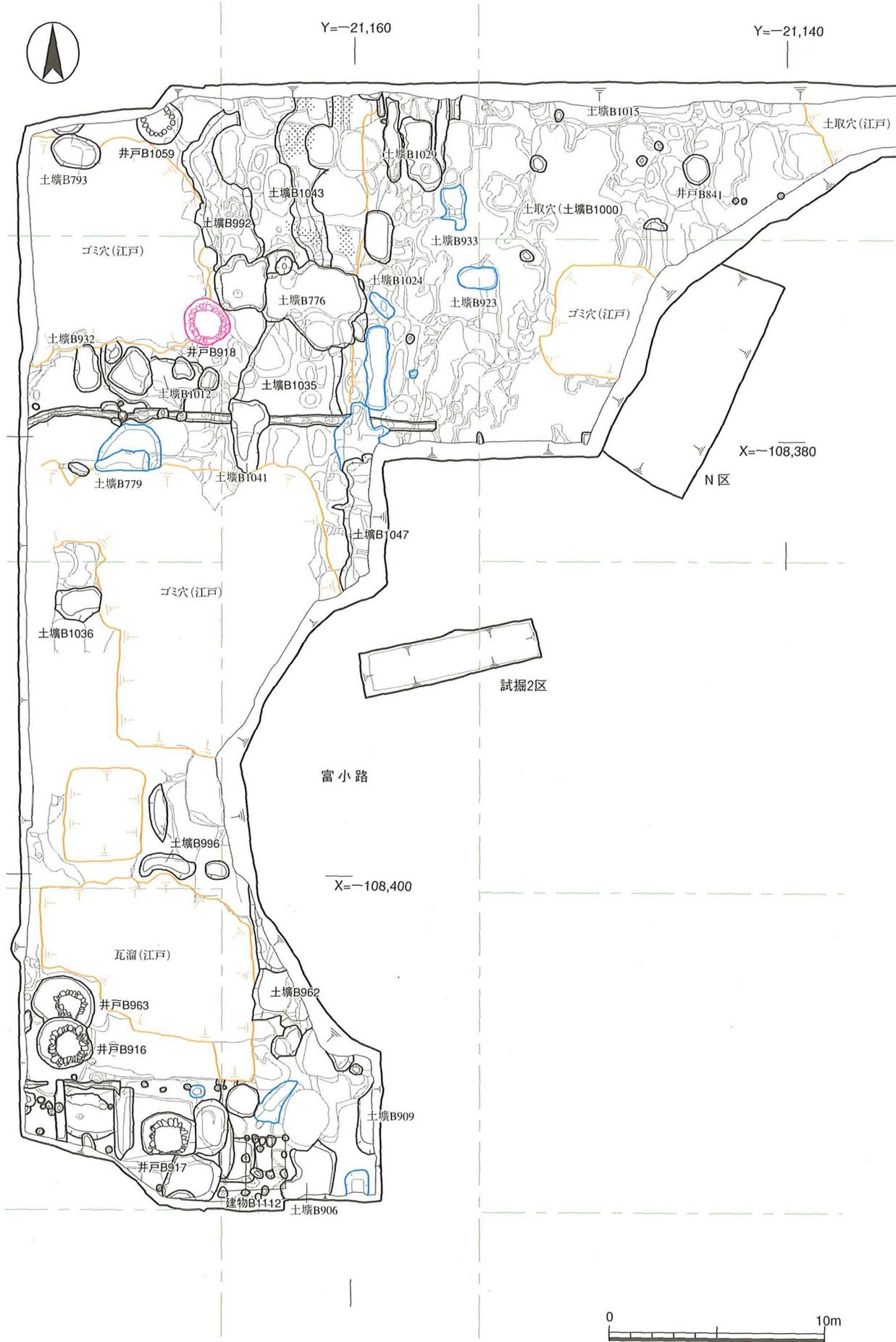
A区・M区 室町・戦国期平面図



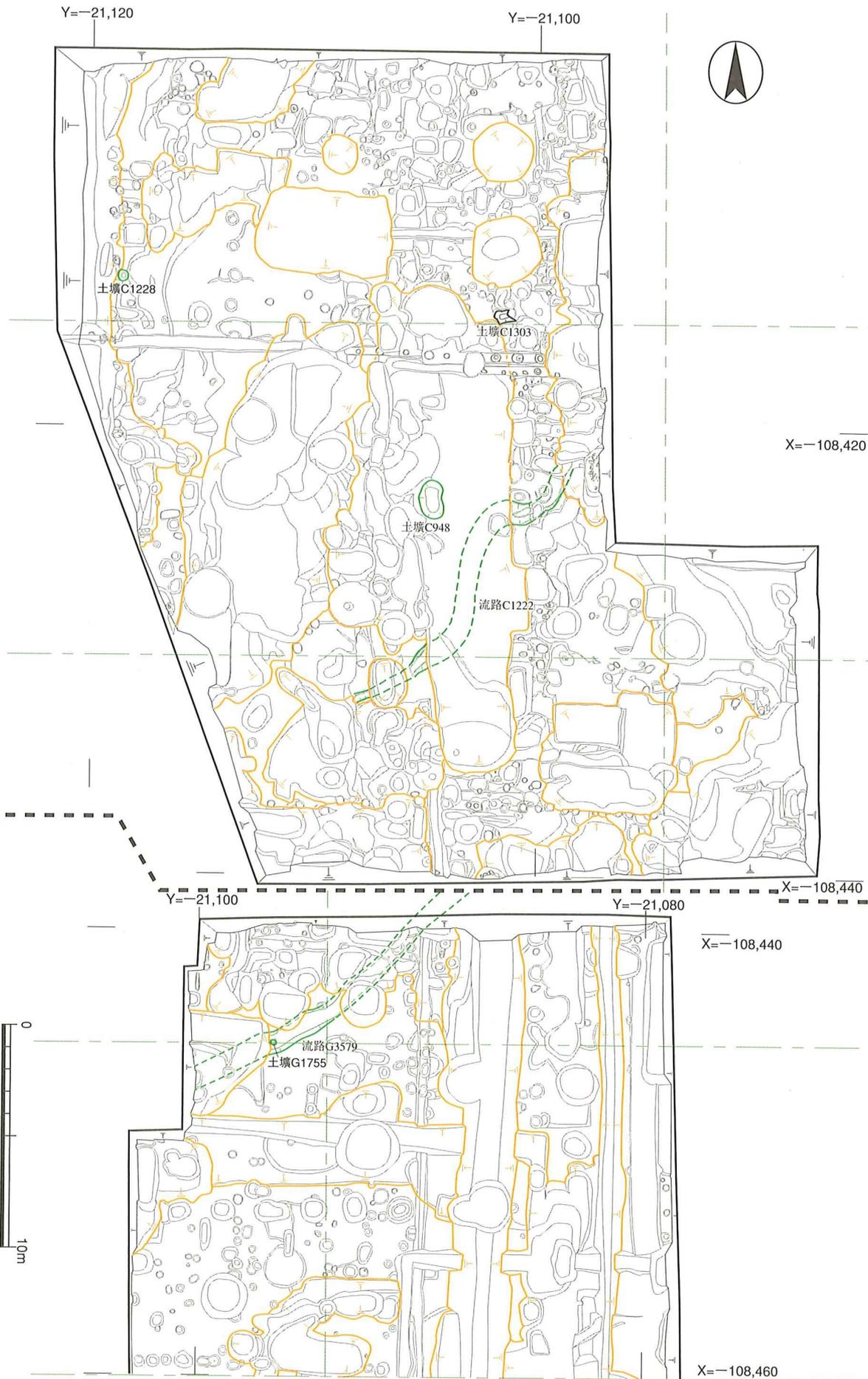
B区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



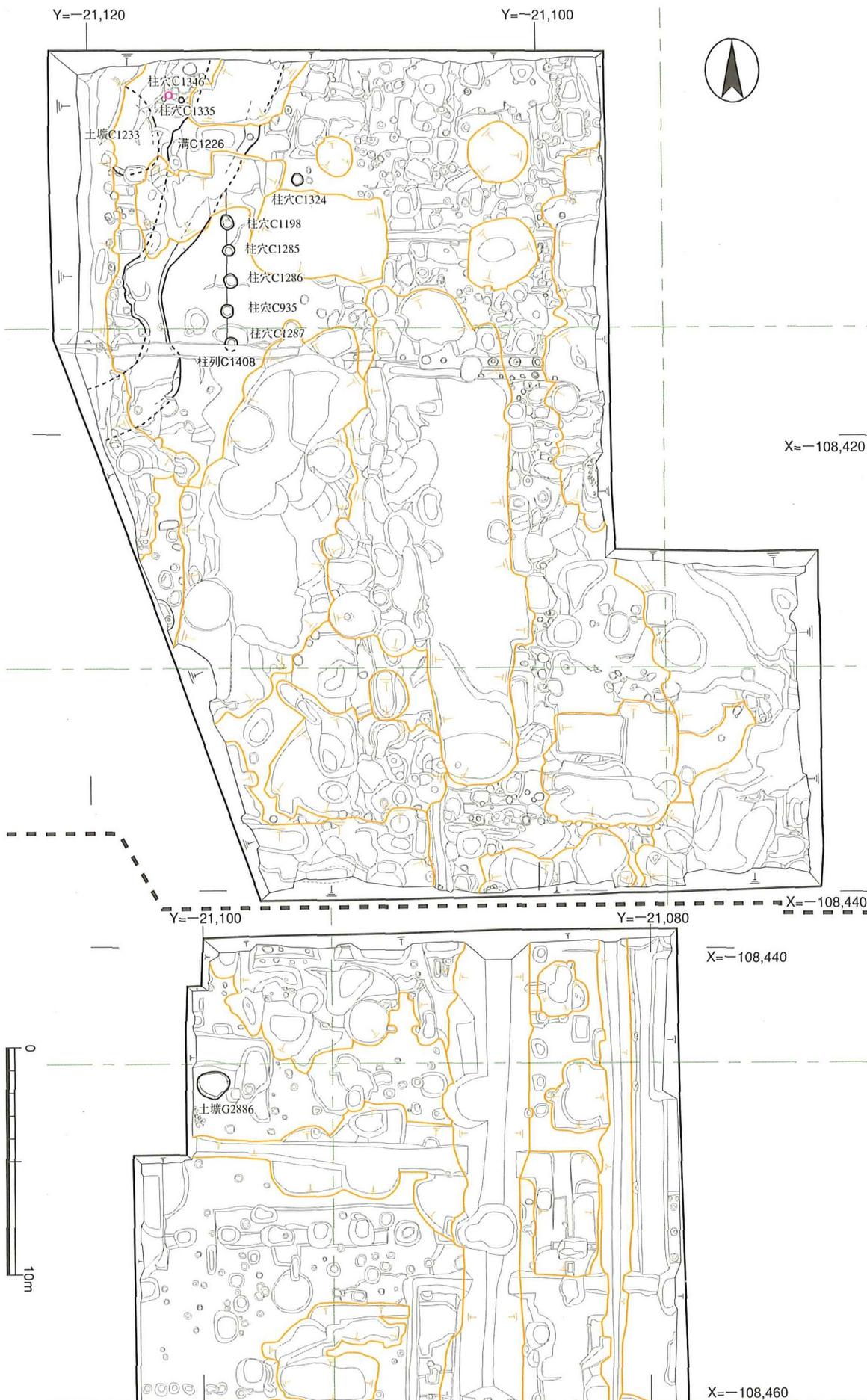
B区 平安時代後期・鎌倉時代平面図



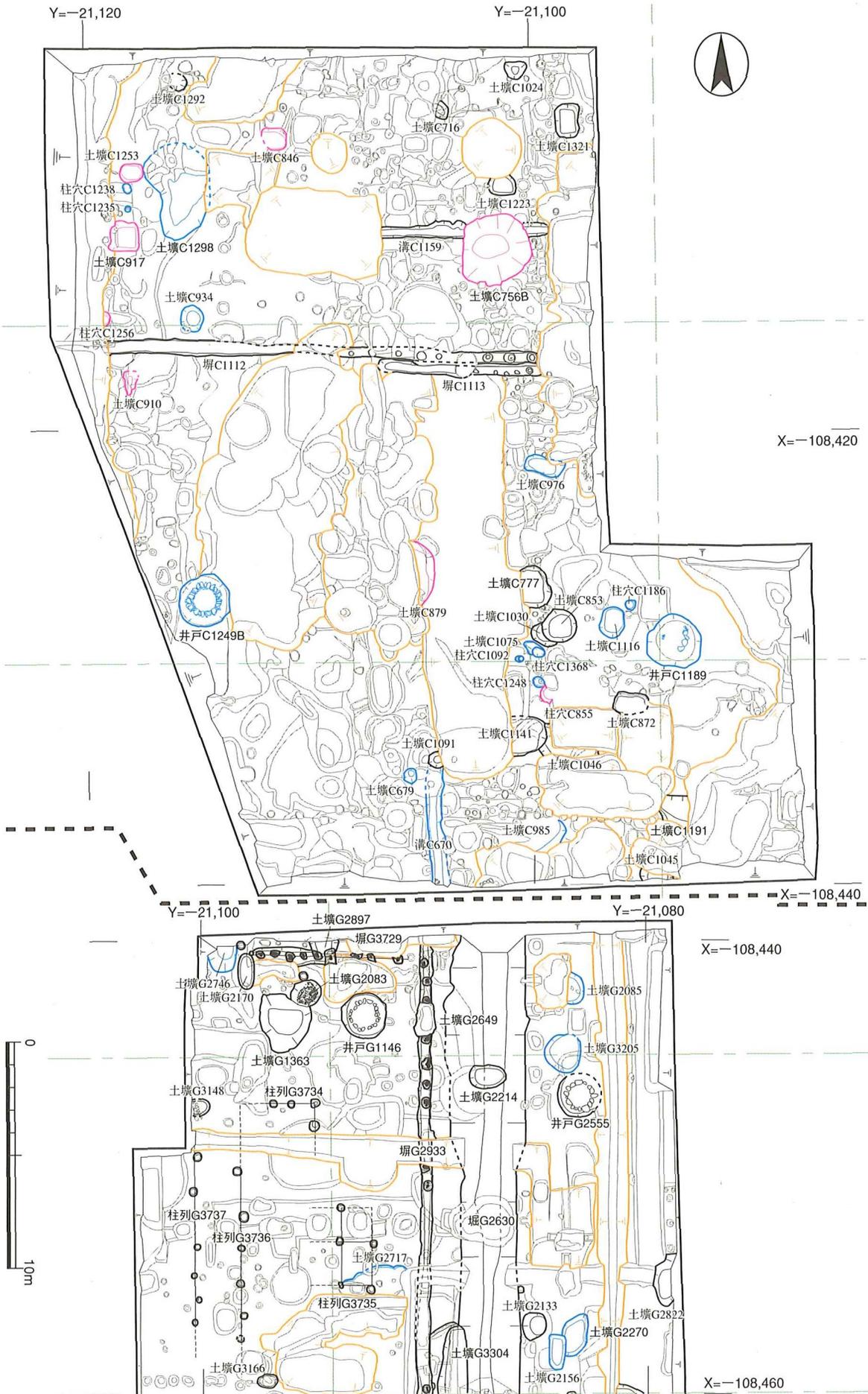
B区 室町・戦国期平面図



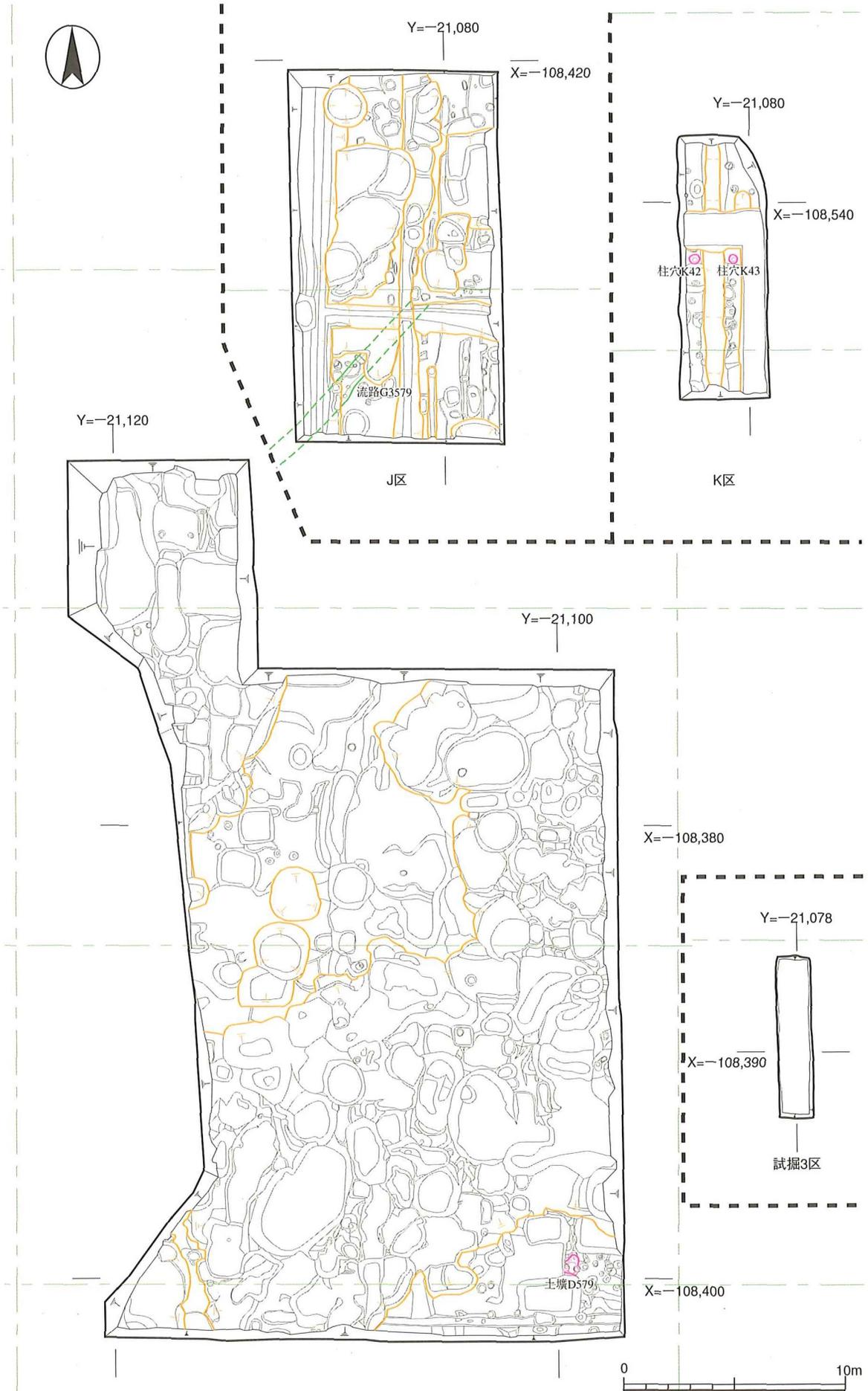
C区・G区北東端 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



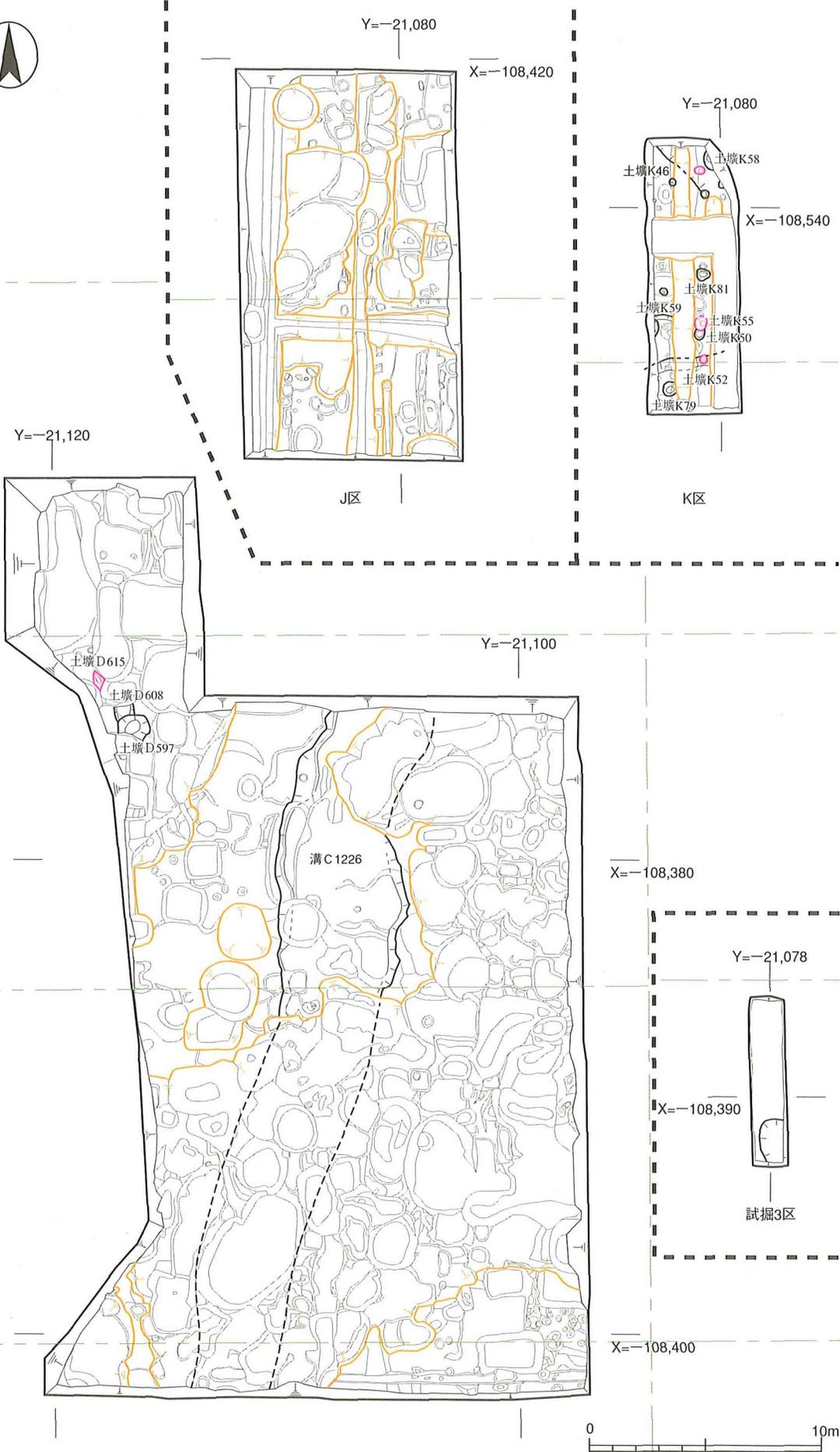
C区・G区北東端 平安時代後期・鎌倉時代平面図



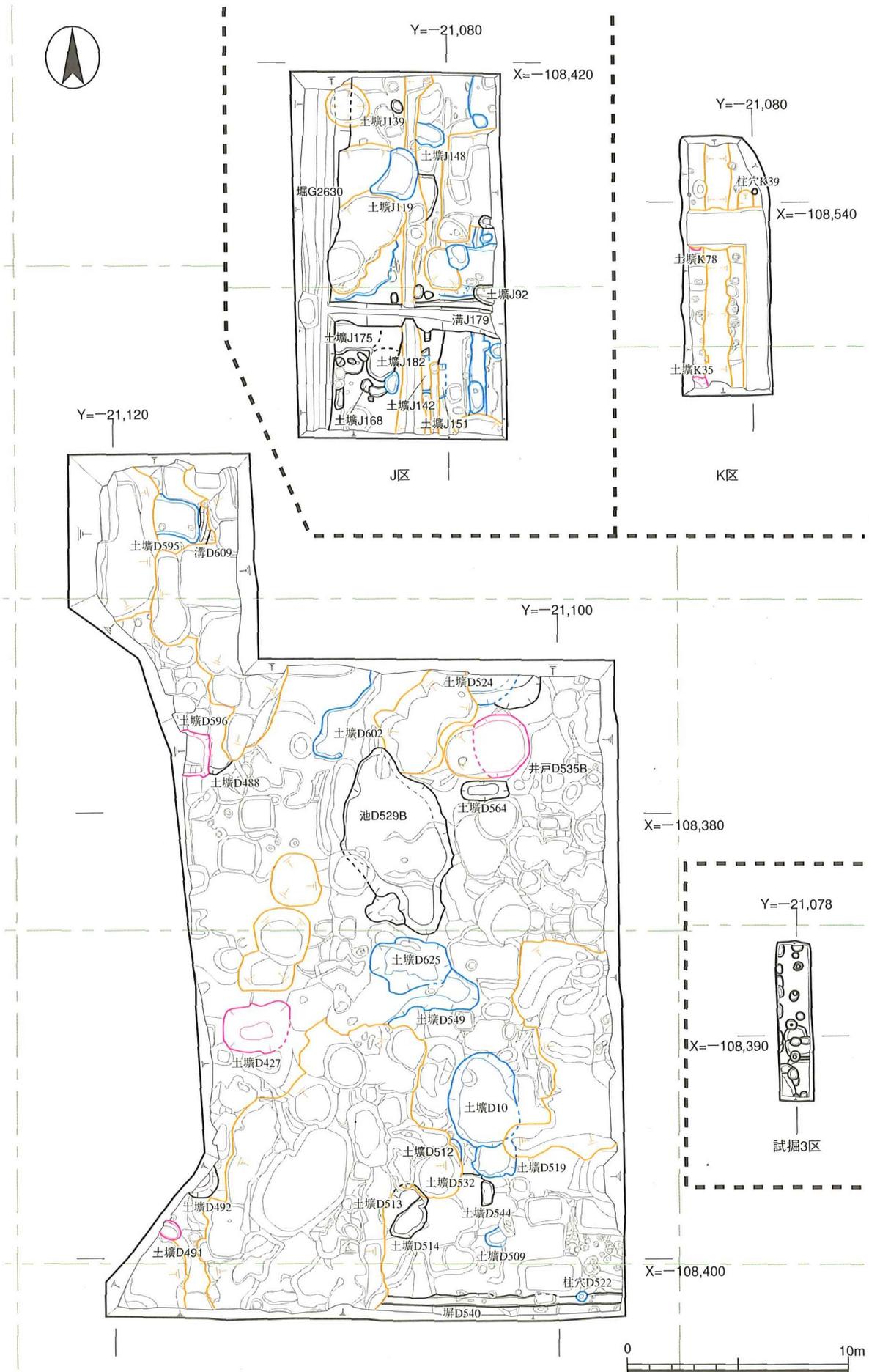
C区・G区北東端 室町・戦国期平面图



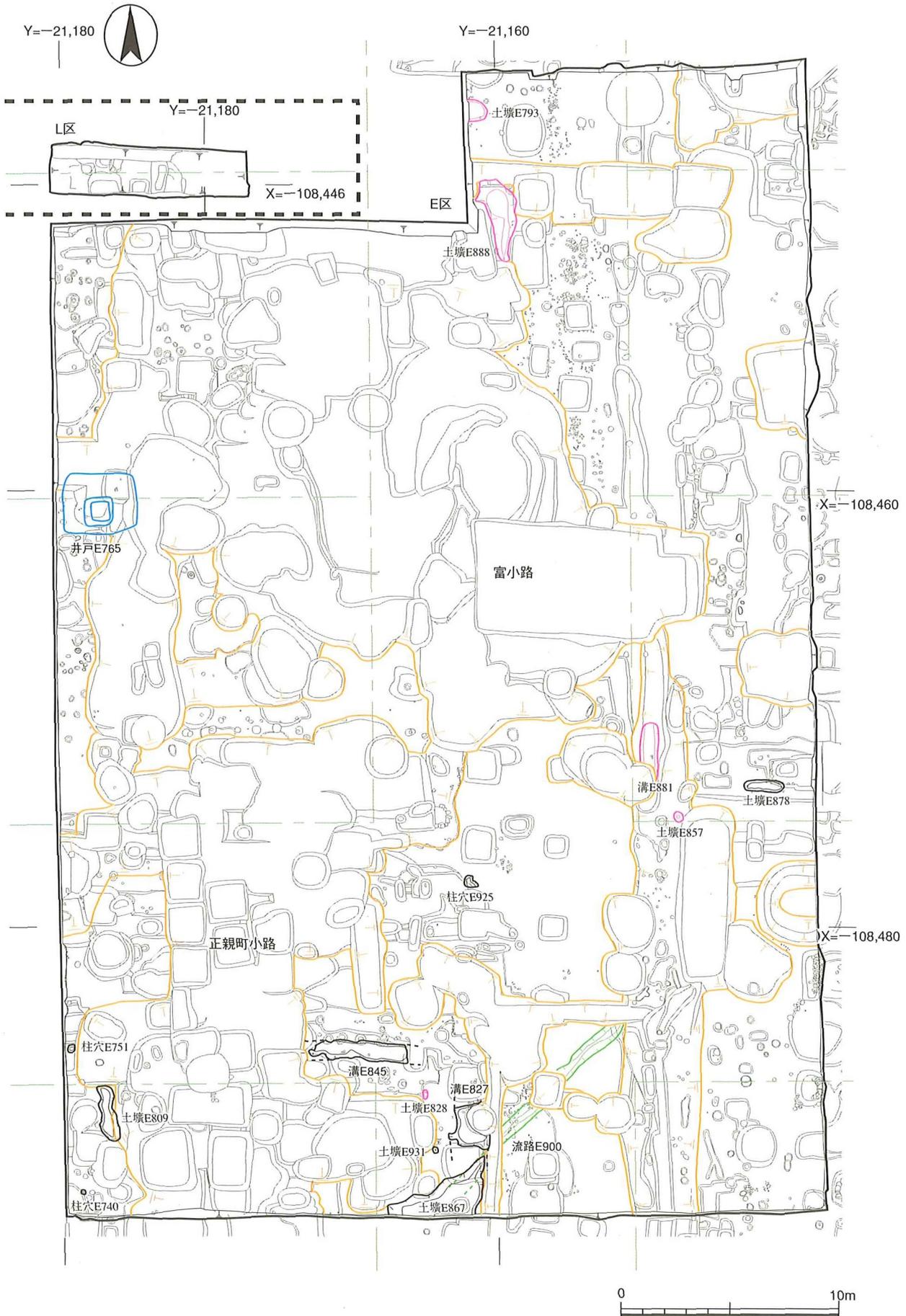
D区・J区・K区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



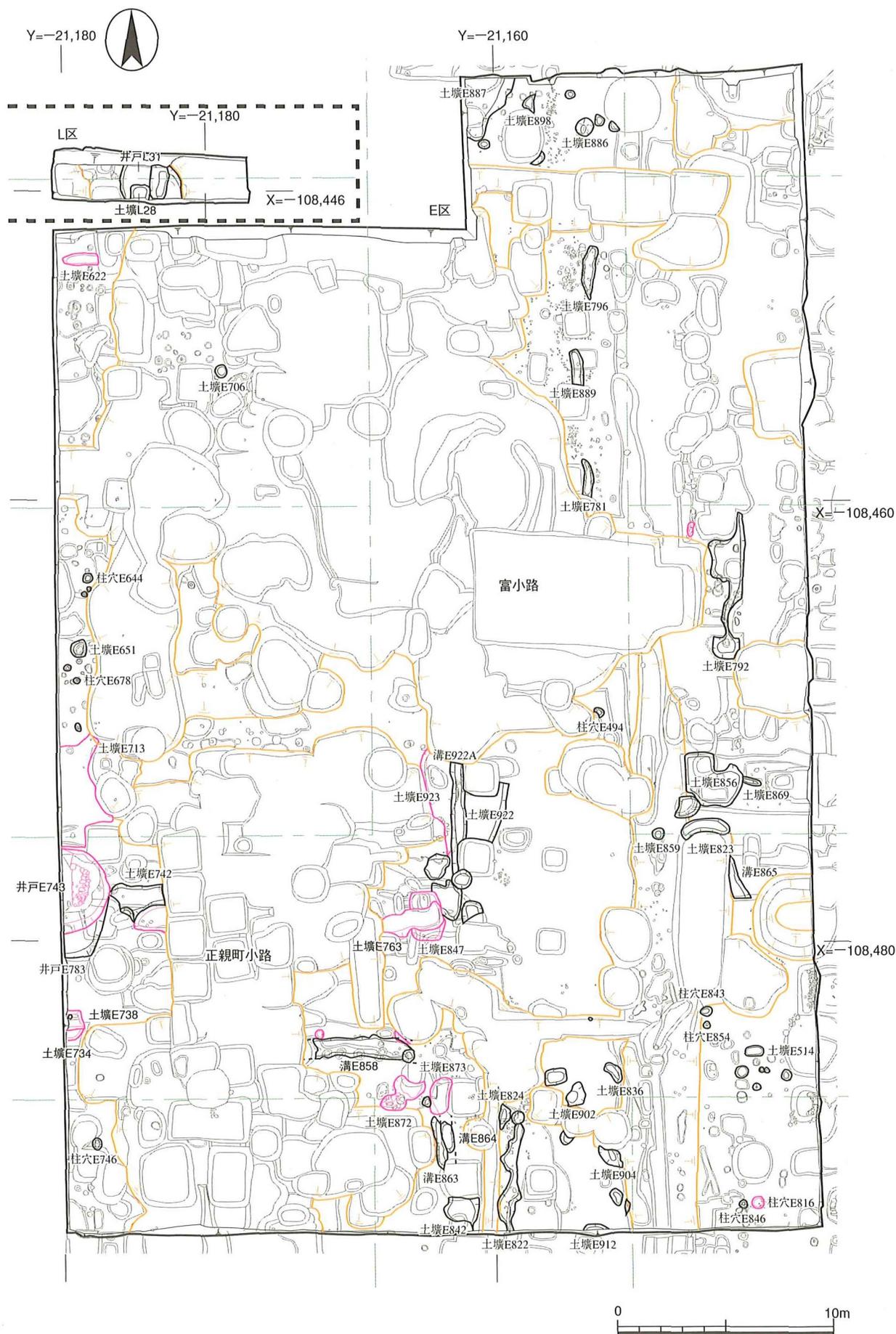
D区・J区・K区 平安時代後期・鎌倉時代平面図



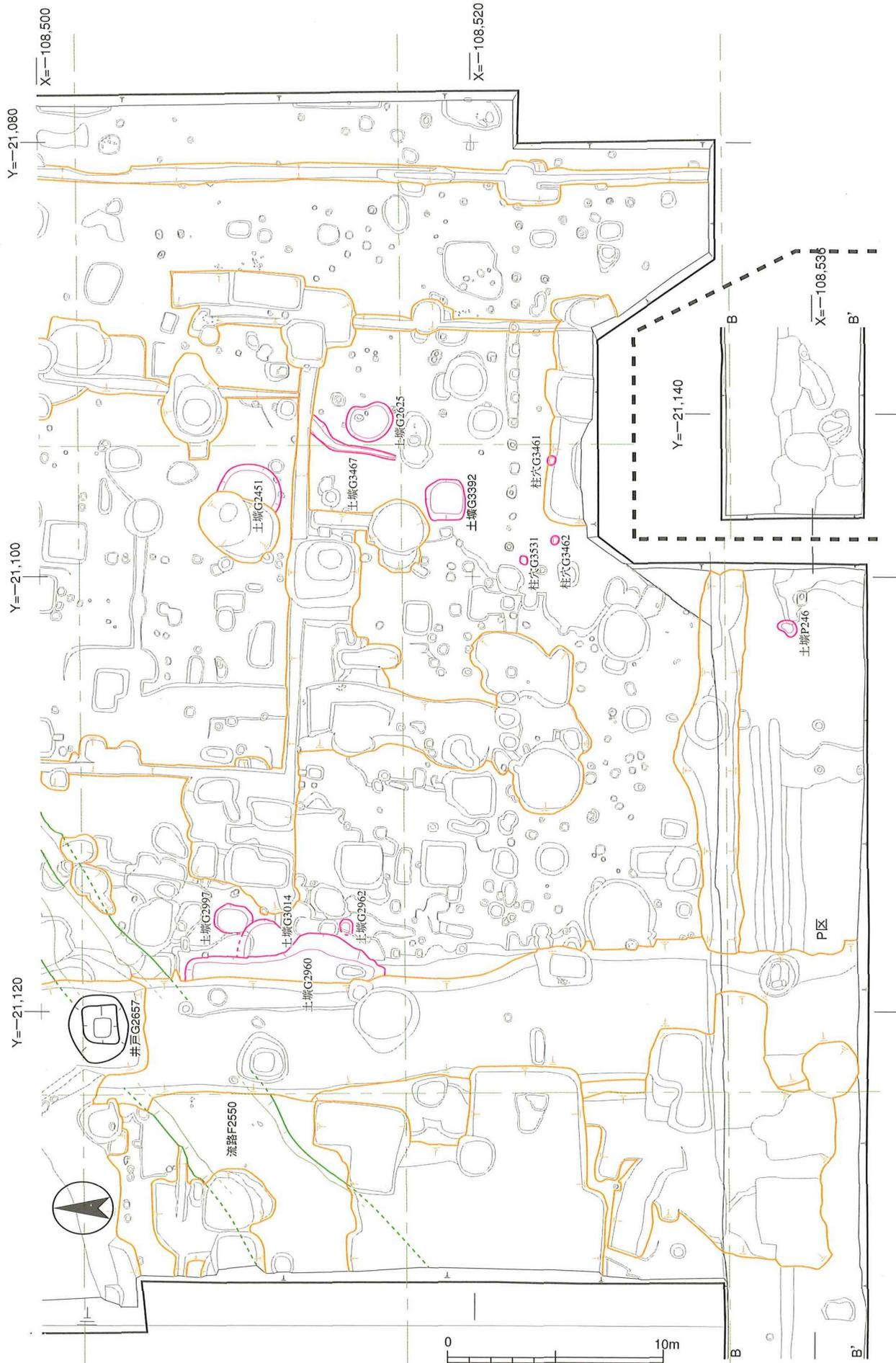
D区・J区・K区 室町・戦国期平面図



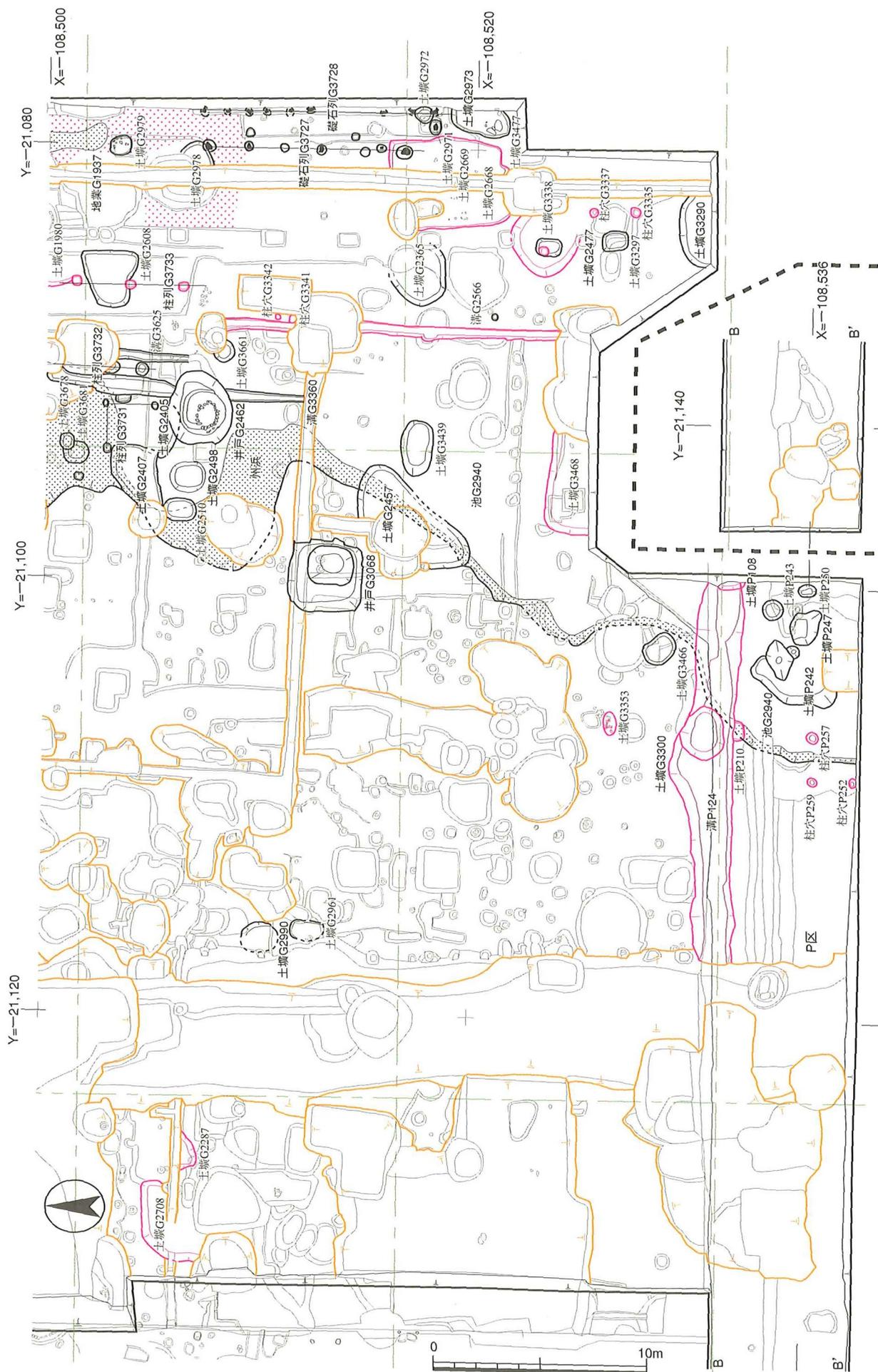
E区・L区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



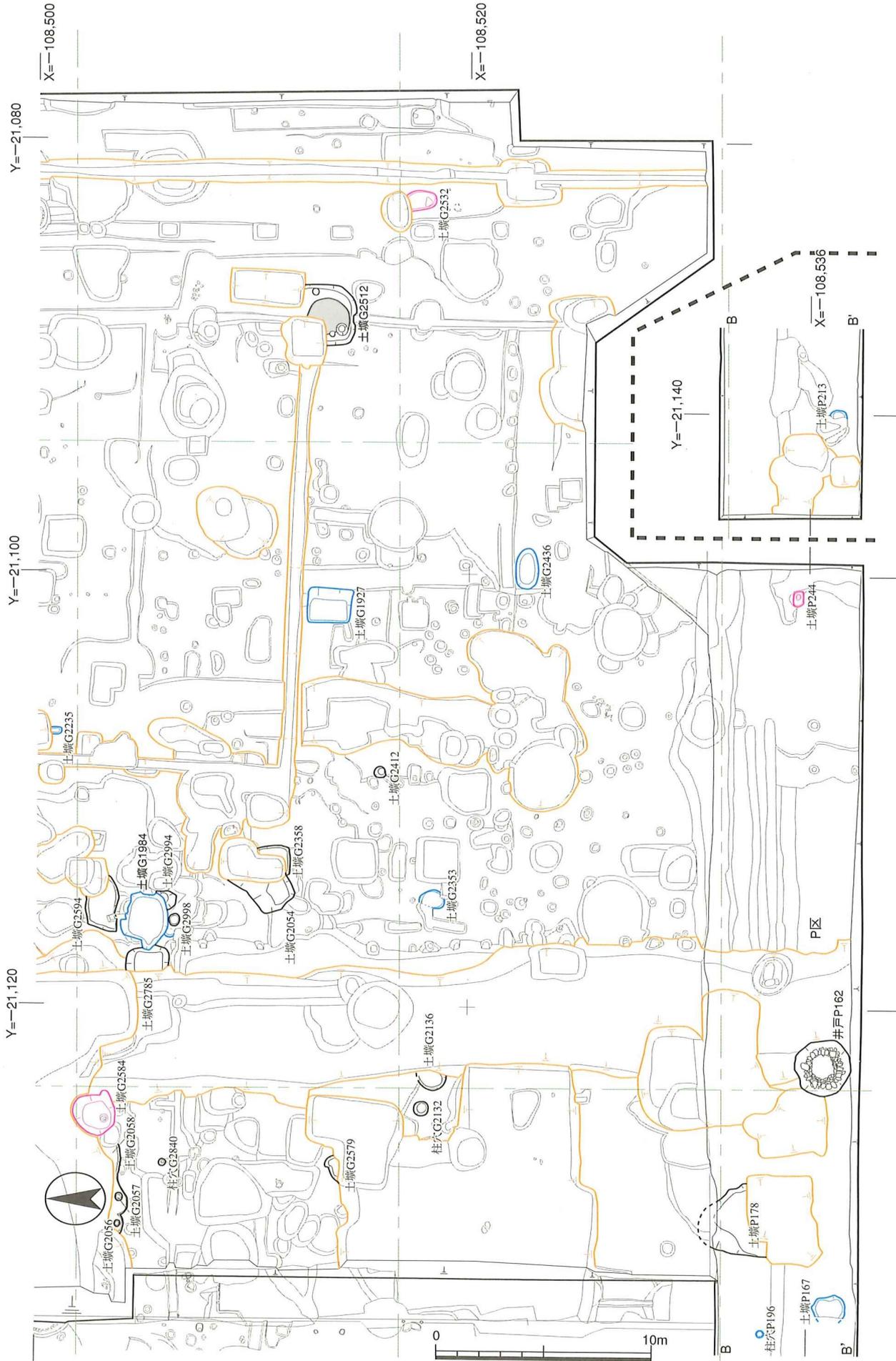
E区・L区 平安時代後期・鎌倉時代平面図



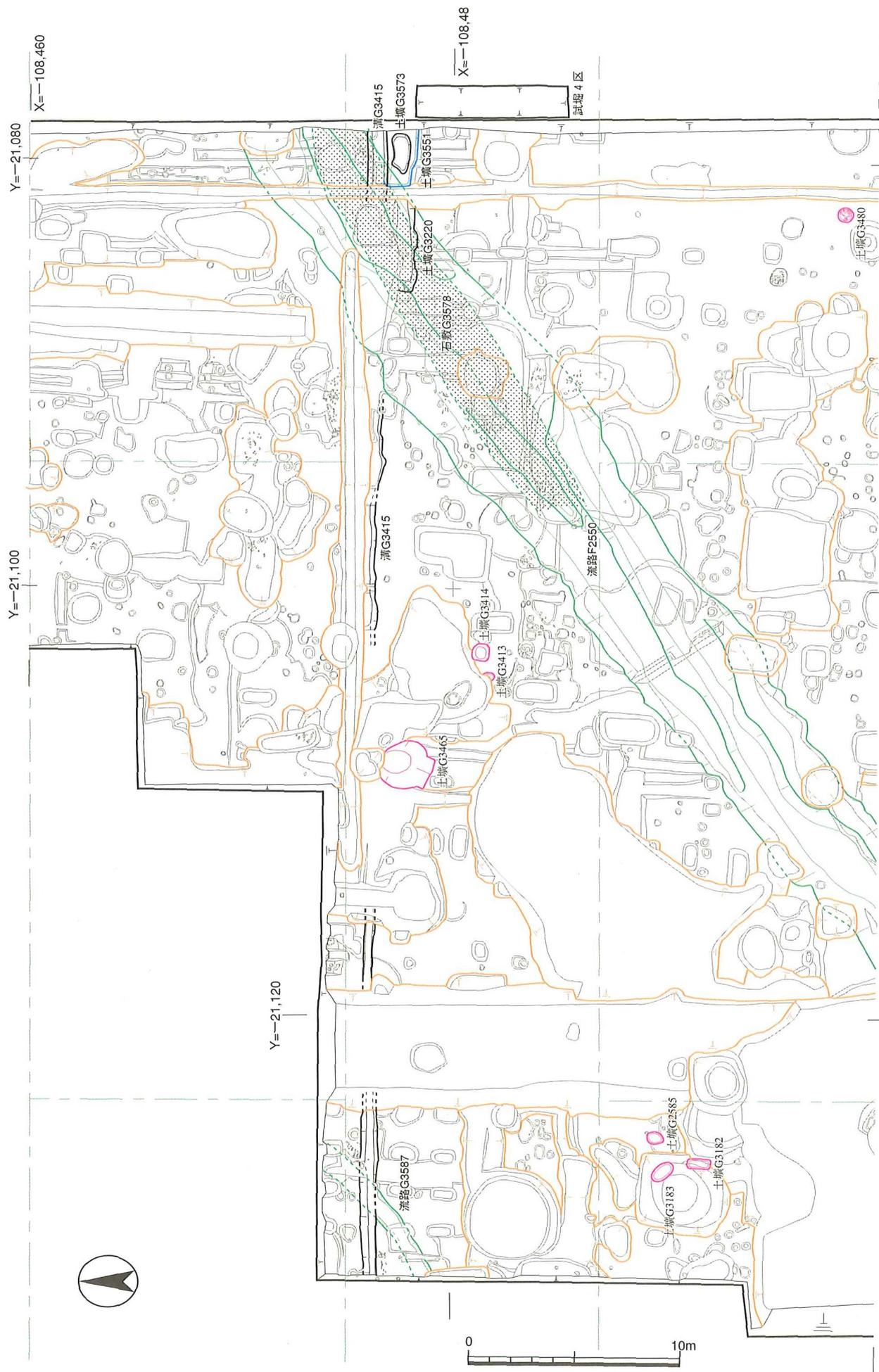
G区南半・P区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



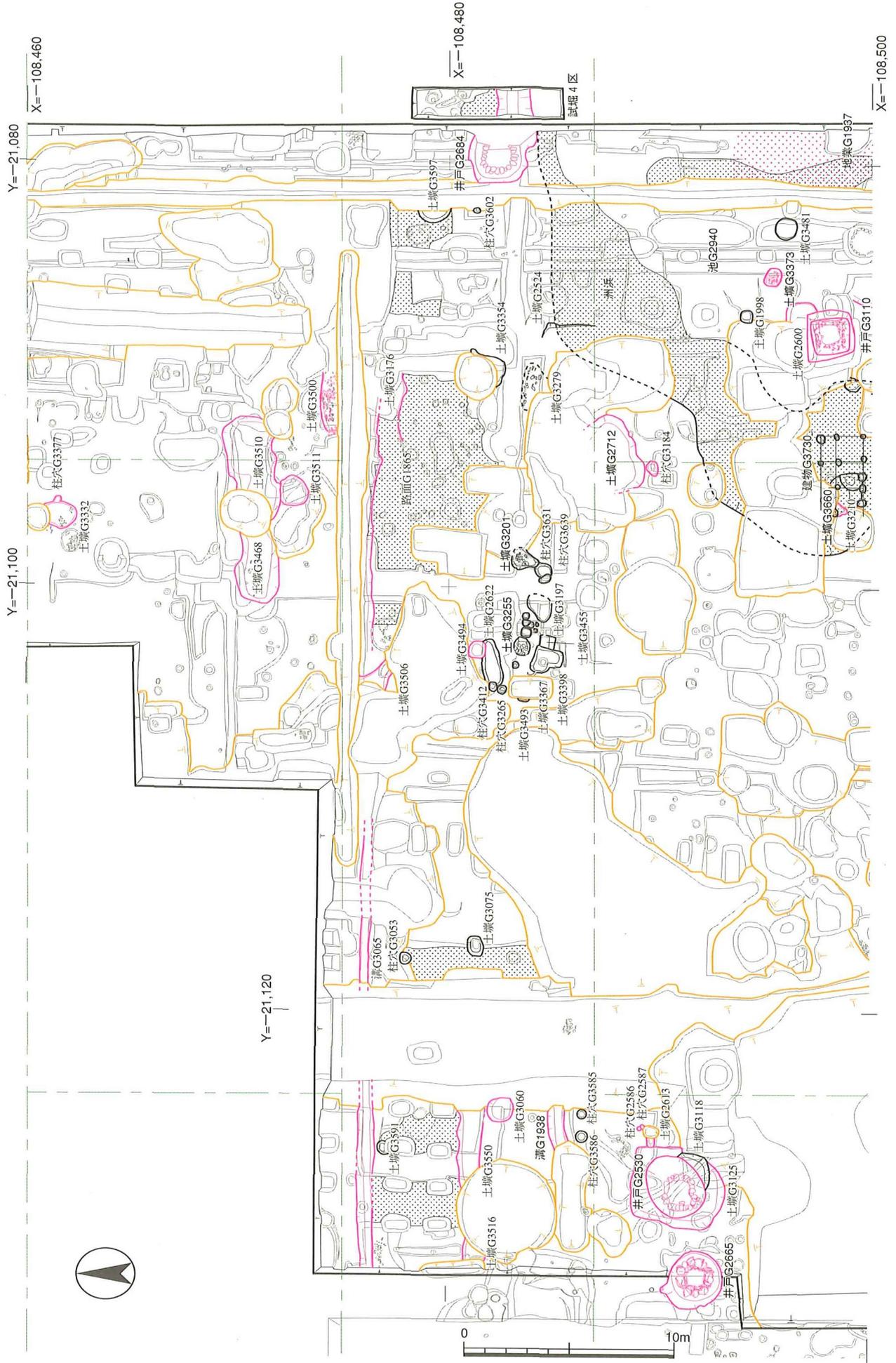
G区南半・P区 平安時代後期・鎌倉時代平面図



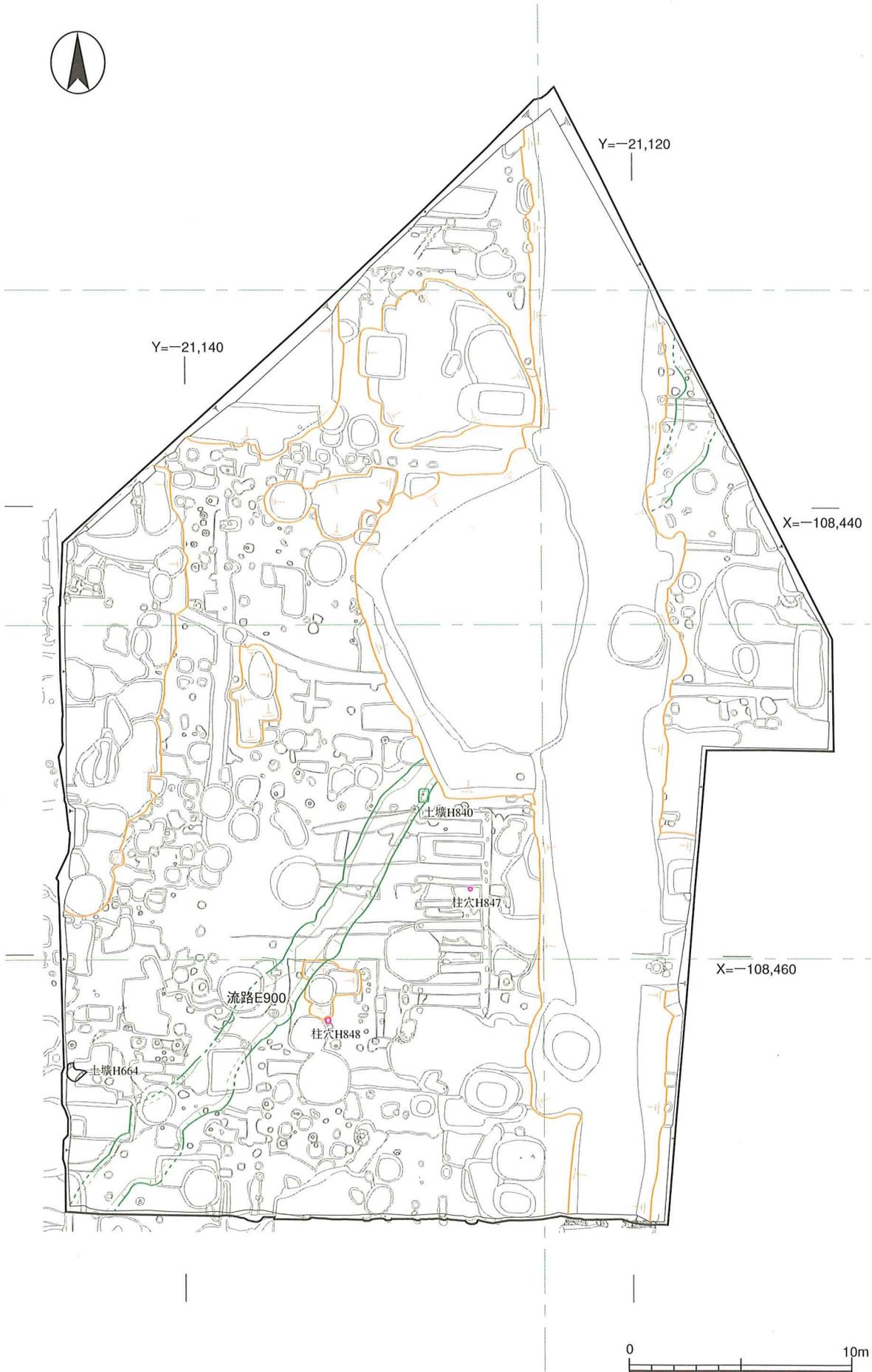
G区南半・P区 室町・戦国期平面图



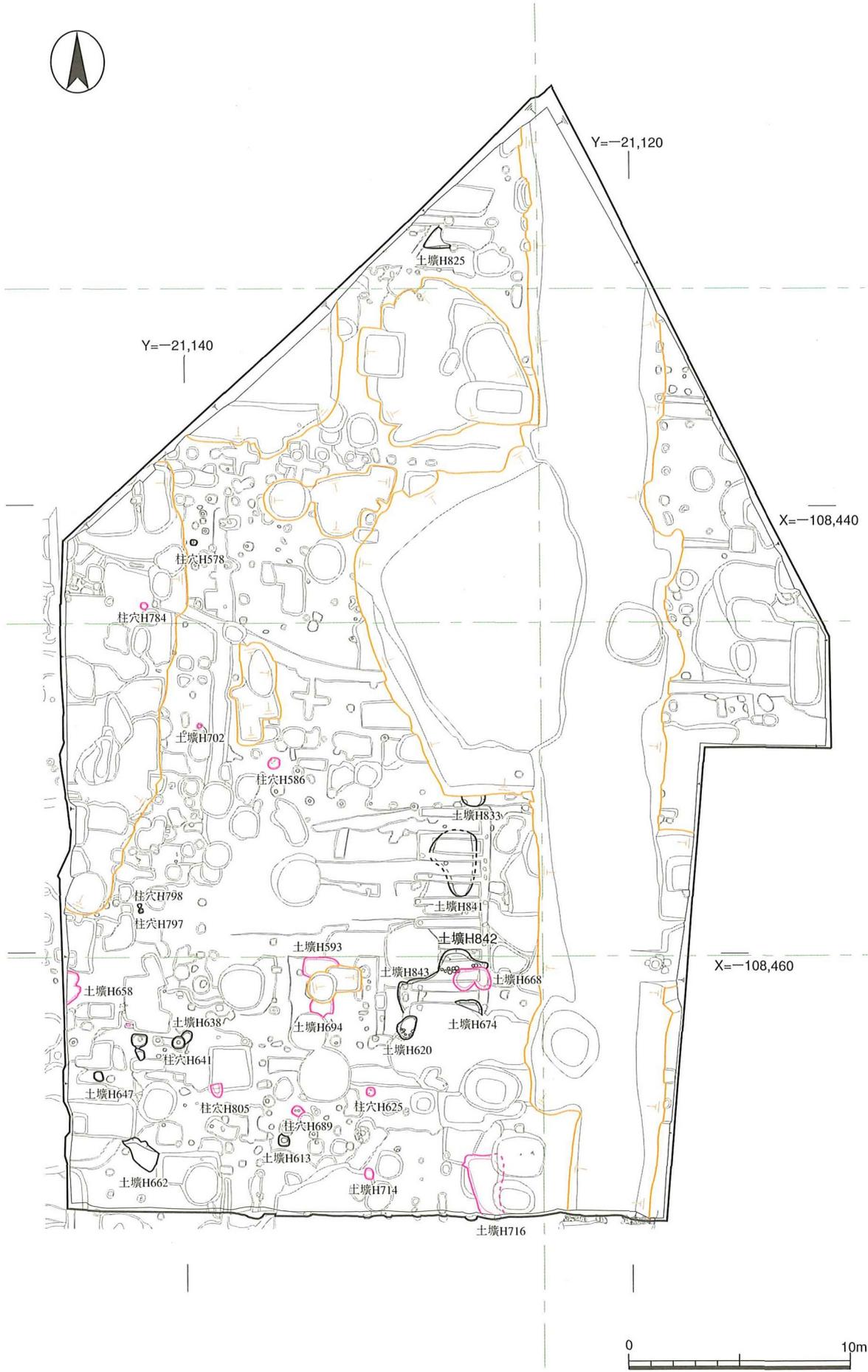
G区北半 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



G区北半 平安時代後期・鎌倉時代平面図

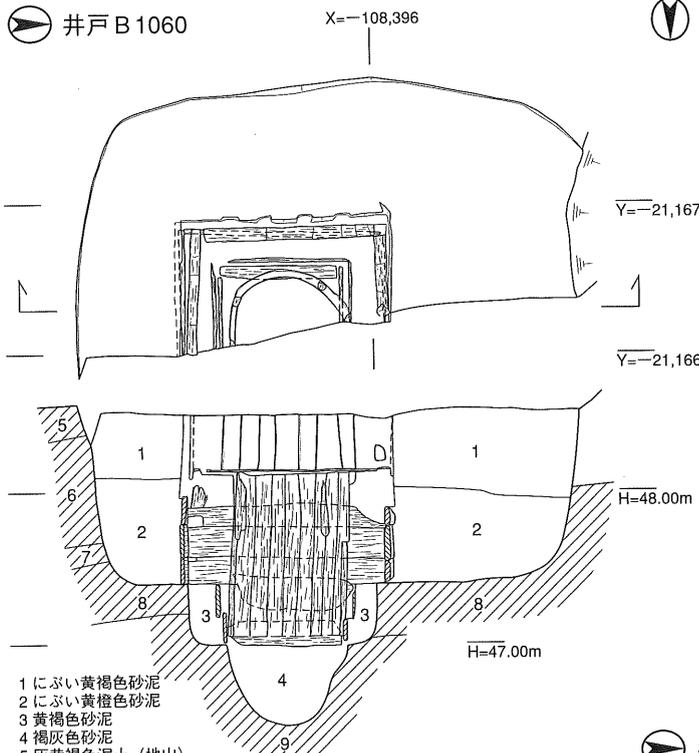


H区 古墳・飛鳥時代、平安時代前期・中期平面図



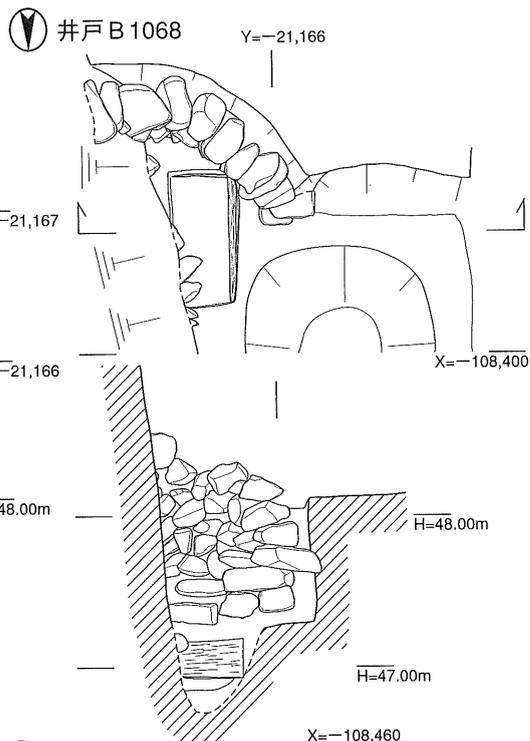
H区 平安時代後期・鎌倉時代平面図

井戸 B 1060

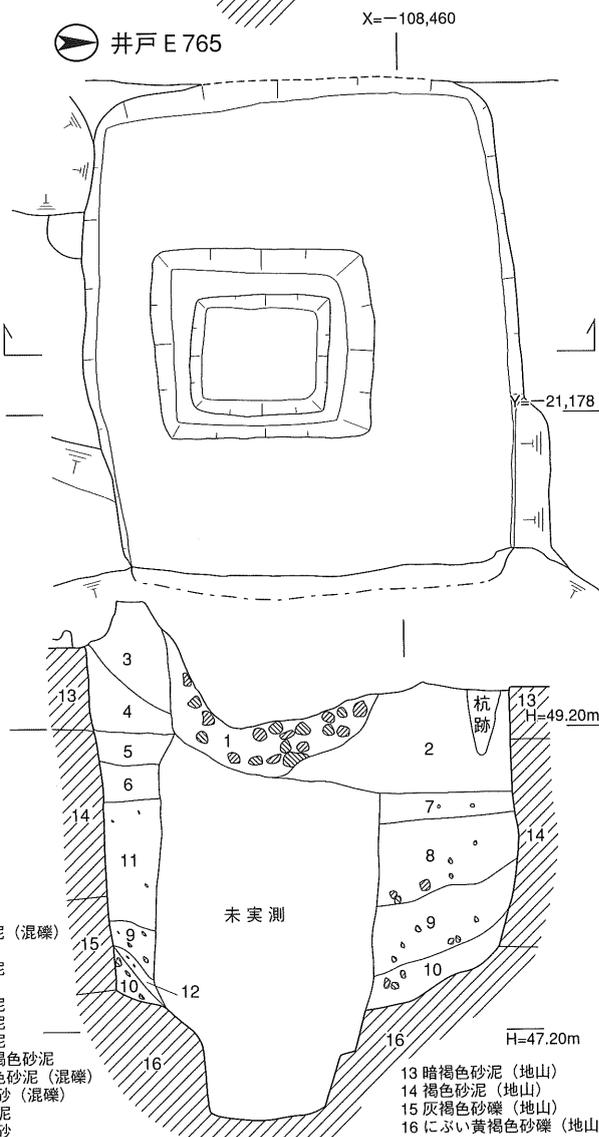


- 1 泥い黄褐色砂泥
- 2 泥い黄褐色砂泥
- 3 黄褐色砂泥
- 4 褐灰色砂泥
- 5 灰黄褐色泥土 (地山)
- 6 褐色砂泥 (地山)
- 7 泥い黄褐色砂泥 (地山)
- 8 黄褐色粗砂~砂礫 (地山)
- 9 暗褐色砂礫 (地山)

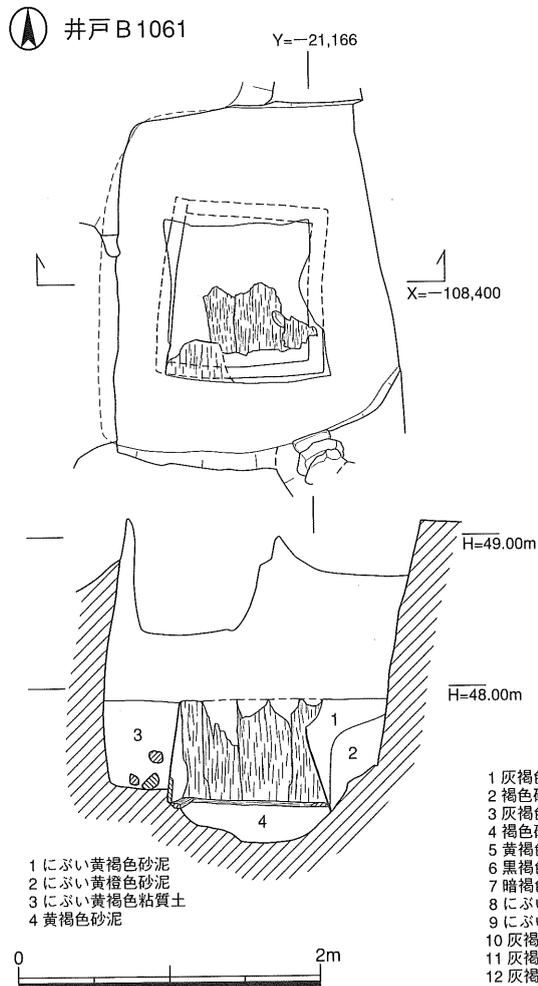
井戸 B 1068



井戸 E 765



井戸 B 1061

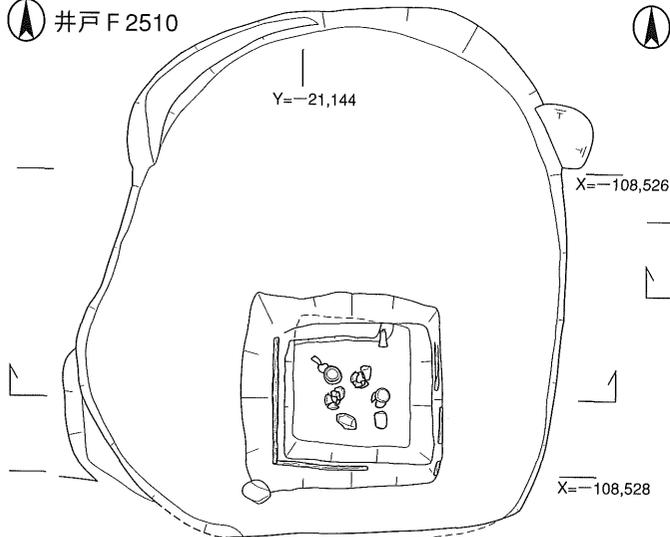


- 1 泥い黄褐色砂泥
- 2 泥い黄褐色砂泥
- 3 泥い黄褐色粘質土
- 4 黄褐色砂泥

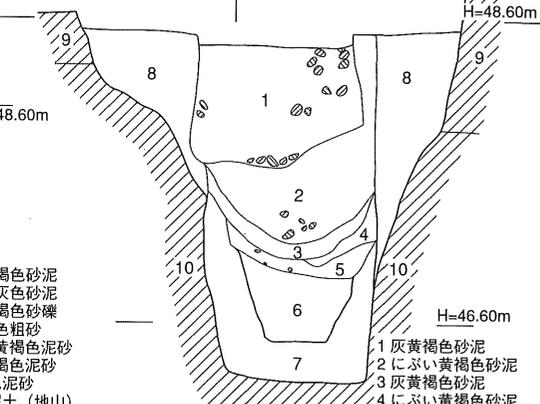
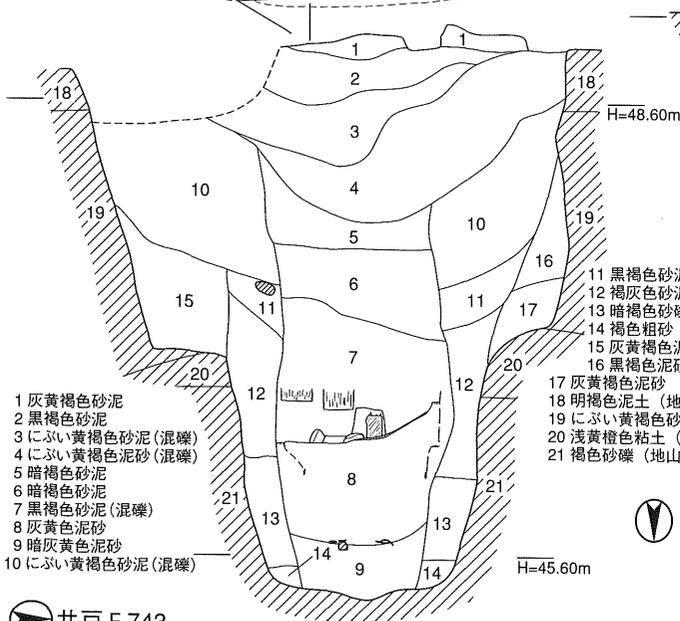
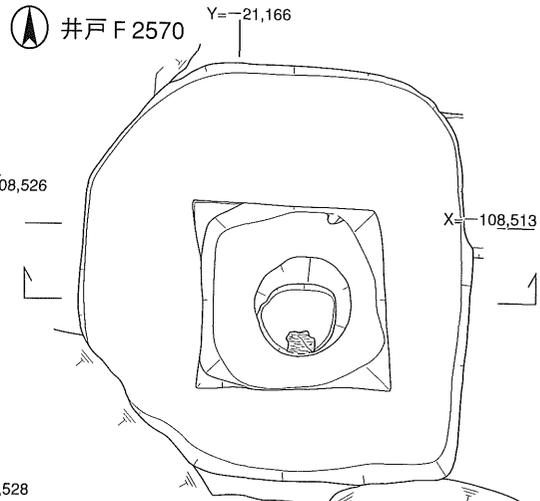


井戸 B 1060、井戸 B 1068、井戸 B 1061、井戸 E 765実測図

井戸 F 2510



井戸 F 2570

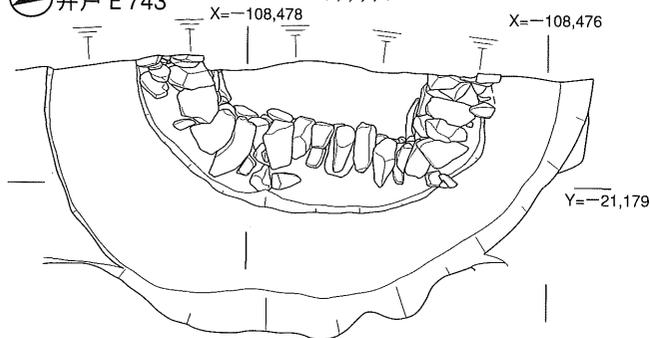


- 1 灰黄褐色砂泥
- 2 黒褐色砂泥
- 3 にぶい黄褐色砂泥(混礫)
- 4 にぶい黄褐色泥砂(混礫)
- 5 暗褐色砂泥
- 6 暗褐色砂泥
- 7 黒褐色砂泥(混礫)
- 8 灰黄色泥砂
- 9 暗灰黄色泥砂
- 10 にぶい黄褐色砂泥(混礫)

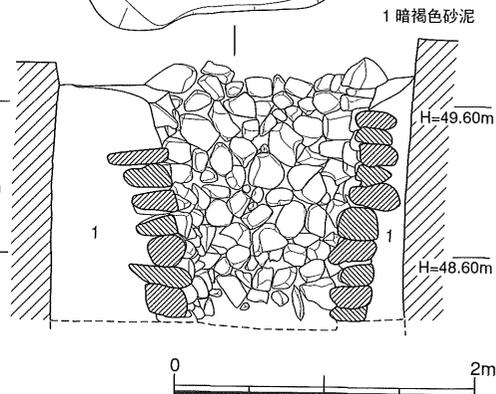
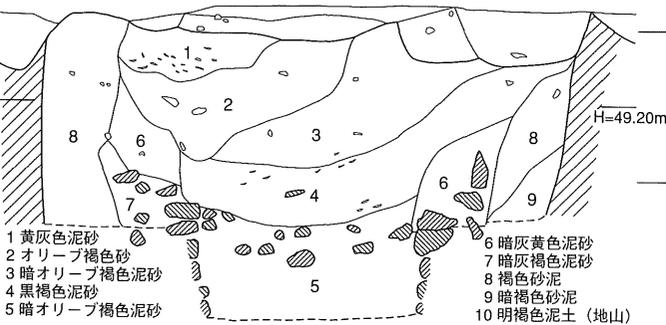
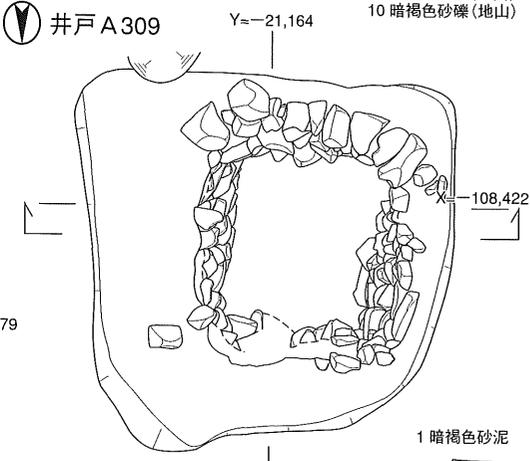
- 11 黒褐色砂泥
- 12 褐灰色砂泥
- 13 暗褐色砂礫
- 14 褐色粗砂
- 15 灰黄褐色泥砂
- 16 黒褐色泥砂
- 17 灰黄褐色泥砂
- 18 明褐色泥土(地山)
- 19 にぶい黄褐色砂礫(地山)
- 20 浅黄橙色粘土(地山)
- 21 褐色砂礫(地山)

- 1 灰黄褐色砂泥
- 2 にぶい黄褐色砂泥
- 3 灰黄褐色砂泥
- 4 にぶい黄褐色砂泥
- 5 褐灰色泥土
- 6 灰黄褐色粗砂
- 7 灰黄褐色砂泥(混礫)
- 8 褐色砂泥
- 9 明褐色泥土(地山)
- 10 暗褐色砂礫(地山)

井戸 E 743



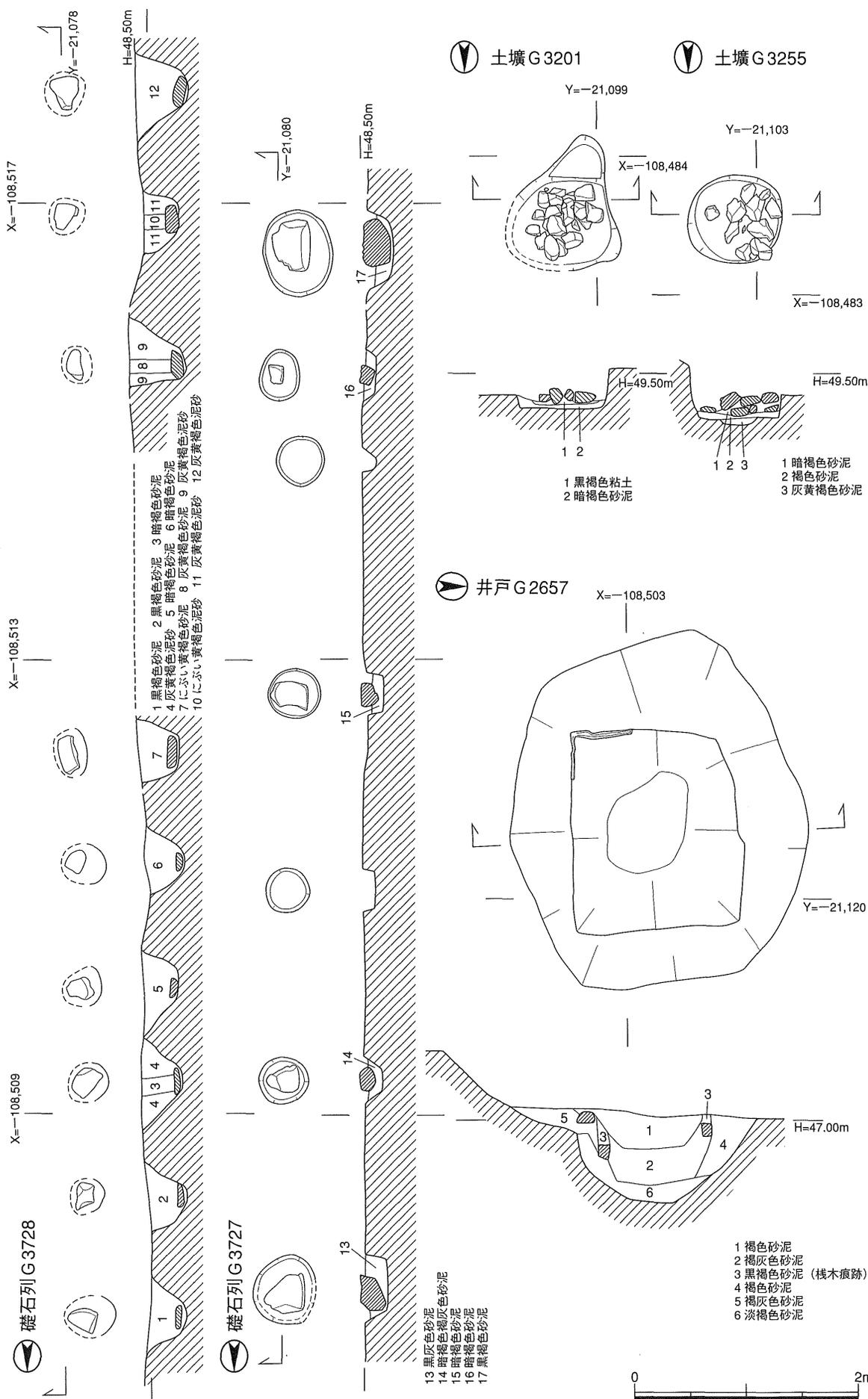
井戸 A 309



- 1 黄灰色泥砂
- 2 オリーブ褐色砂
- 3 暗オリーブ褐色泥砂
- 4 黒褐色泥砂
- 5 暗オリーブ褐色泥砂
- 6 暗灰黄色泥砂
- 7 暗灰褐色泥砂
- 8 褐色砂泥
- 9 暗褐色砂泥
- 10 明褐色泥土(地山)



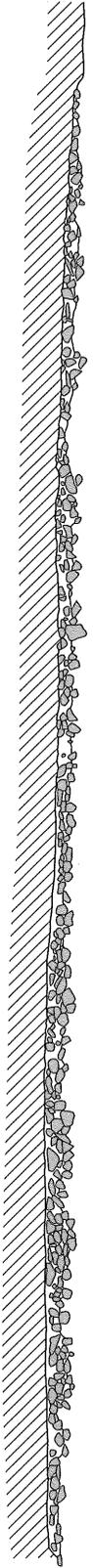
井戸 F 2510、井戸 F 2570、井戸 E 743、井戸 A 309実測図



礎石列 G3728、礎石列 G3727、土壙 G3201、土壙 G3255、井戸 G2657 実測図



地業G1937



H=49.50m



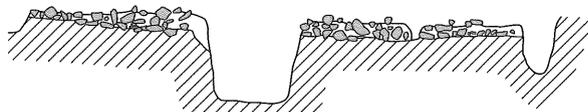
X=-108.496

X=-108.500

X=-108.504

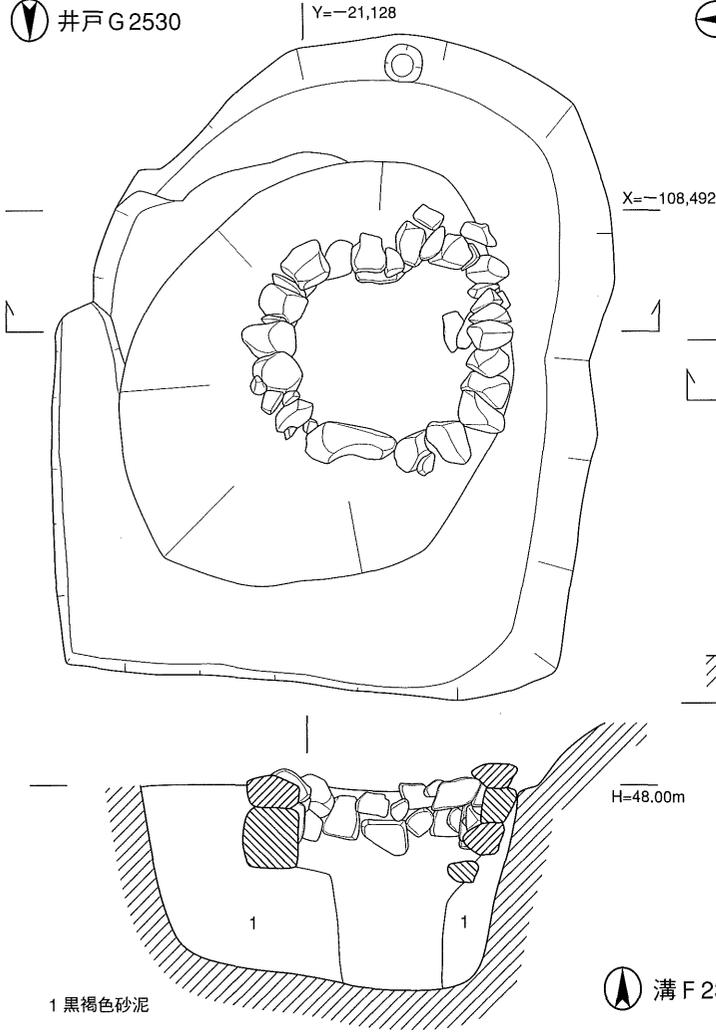
X=-108.508

H=49.50m

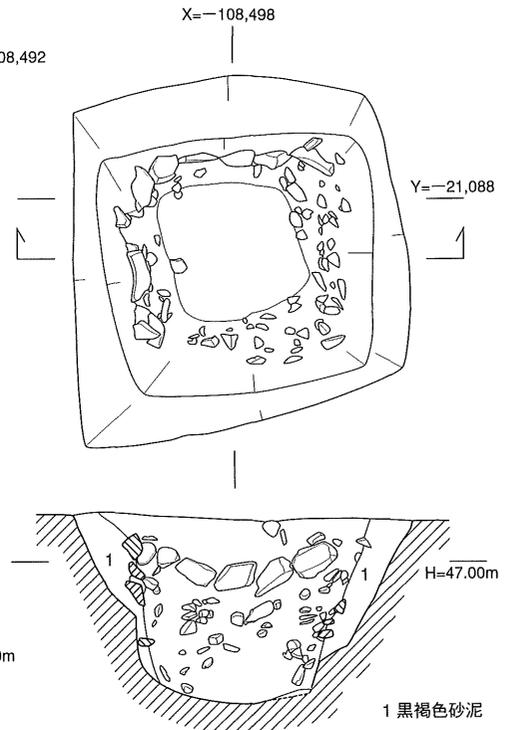


地業G1937実測図

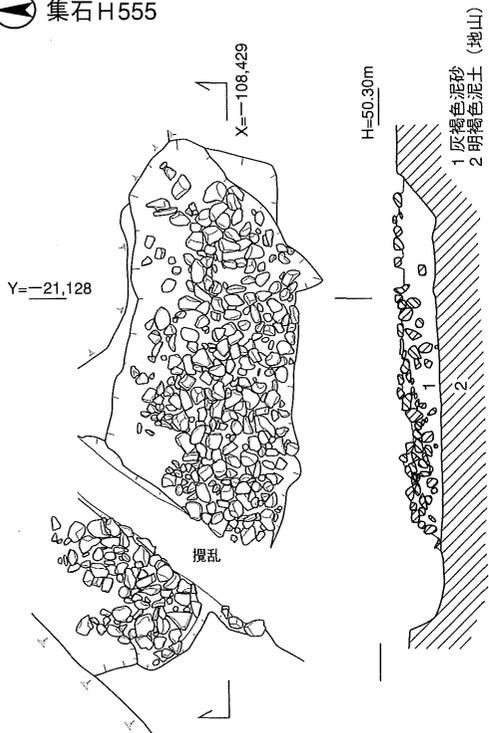
井戸 G2530



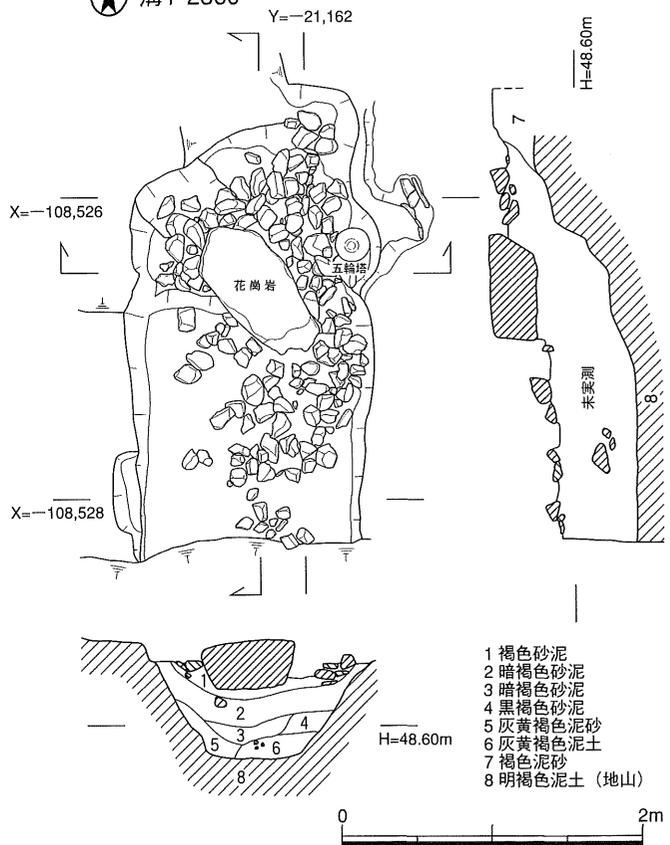
井戸 G3110



集石 H555



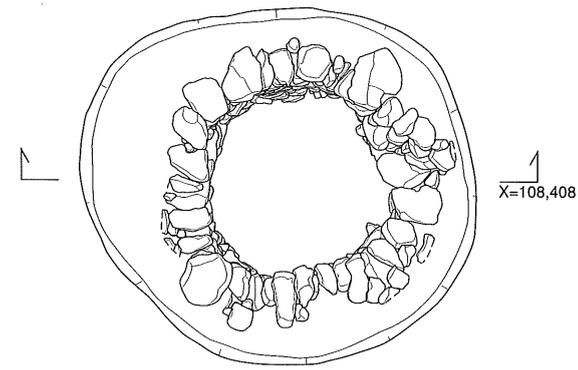
溝 F2360



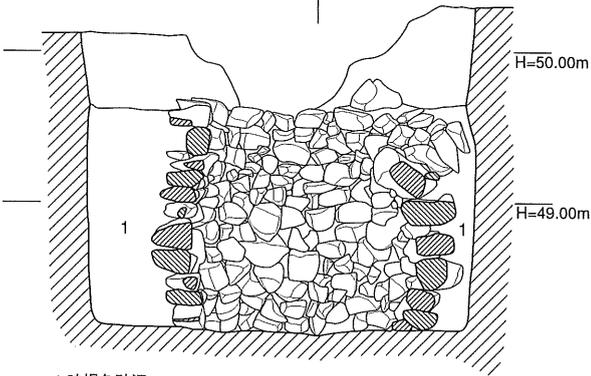
井戸 G2530、井戸 G3110、集石 H555、溝 F2360実測図

井戸 B916

Y=-21,173



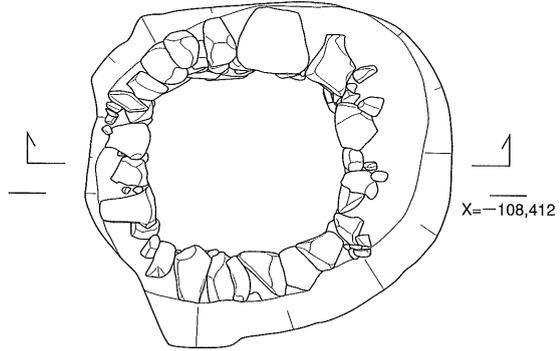
X=108,408



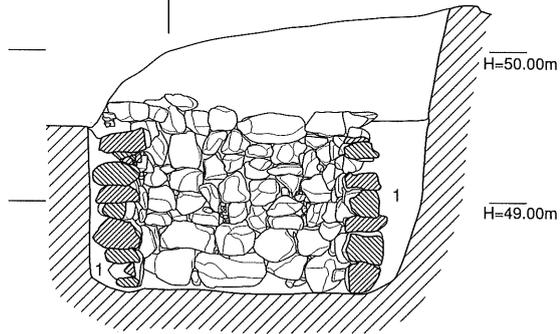
1 暗褐色砂泥

井戸 B917

Y=-21,168



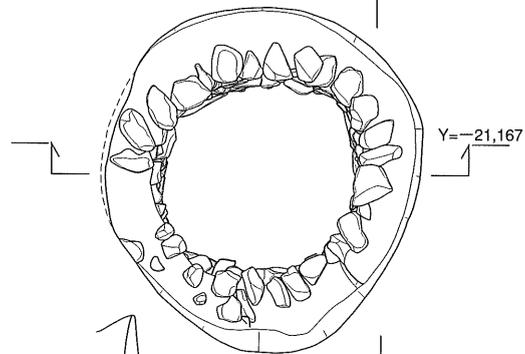
X=-108,412



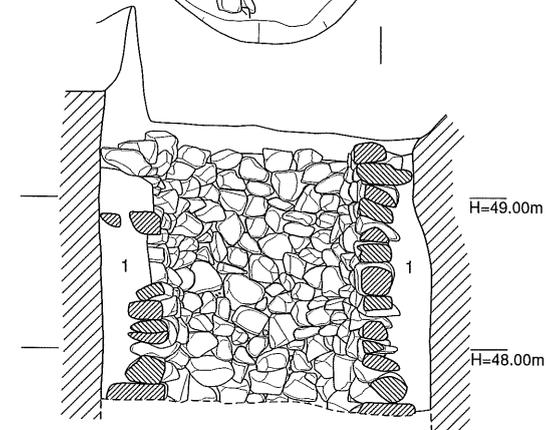
1 暗褐色砂泥

井戸 B918

X=-108,374



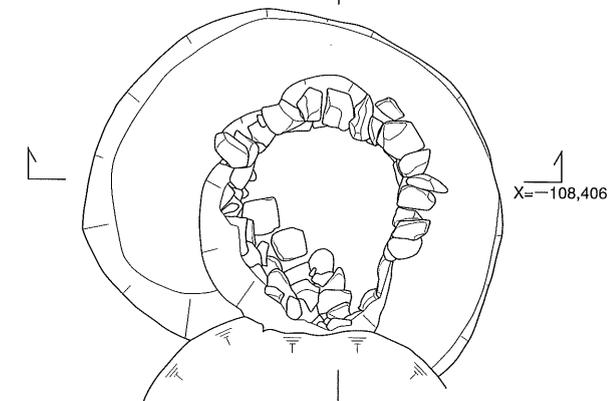
Y=-21,167



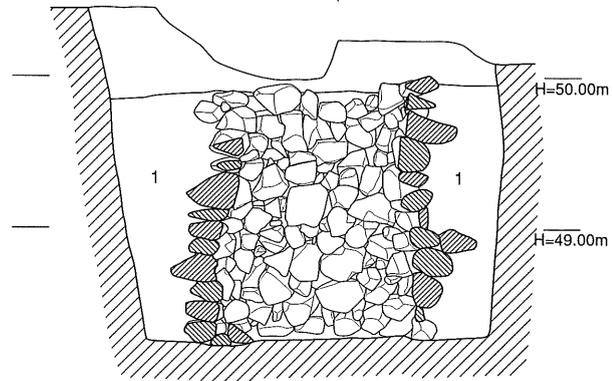
1 暗褐色砂泥

井戸 B963

Y=-21,173



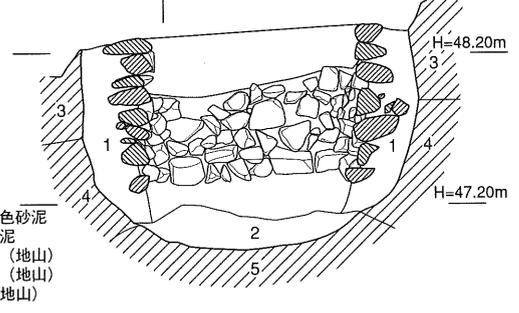
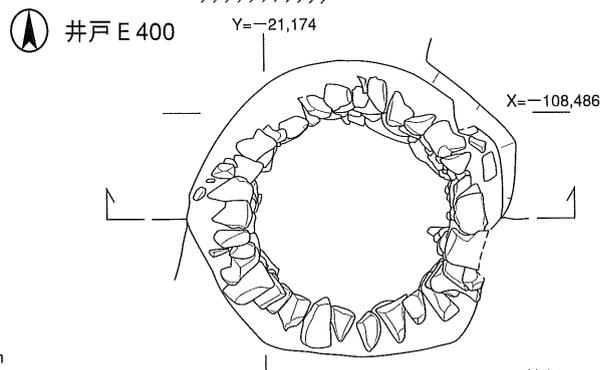
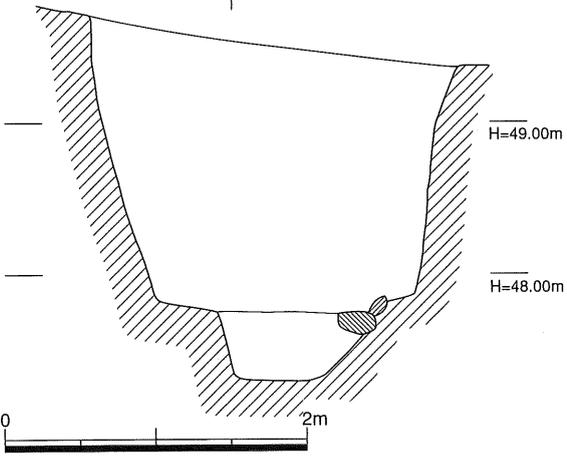
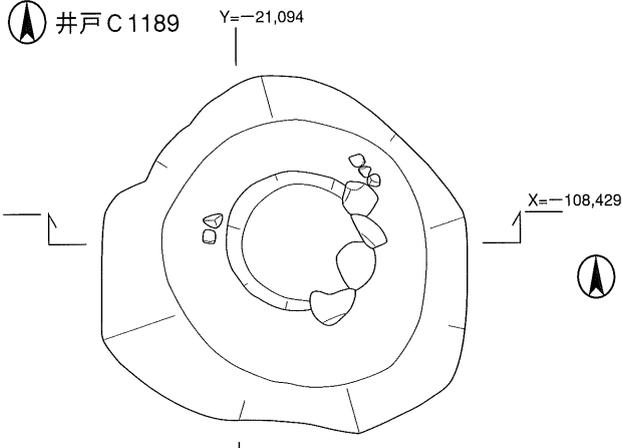
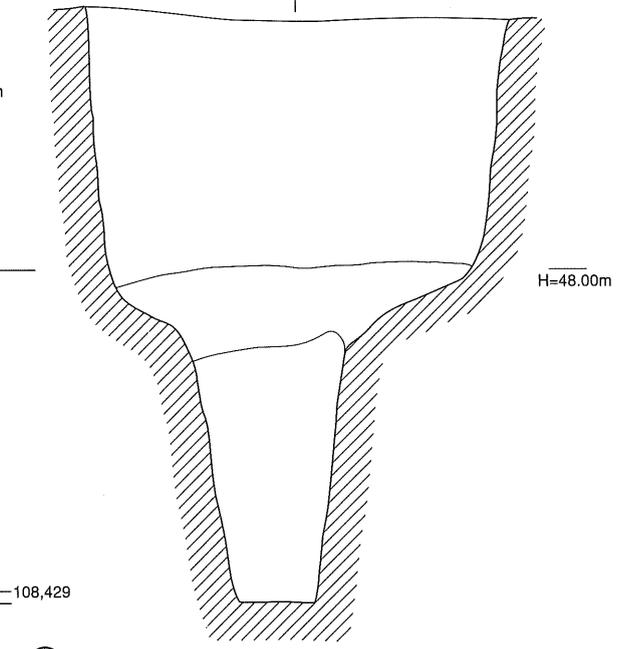
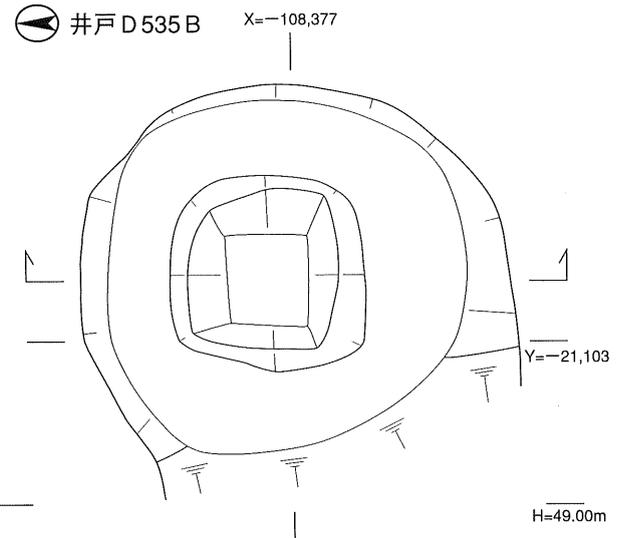
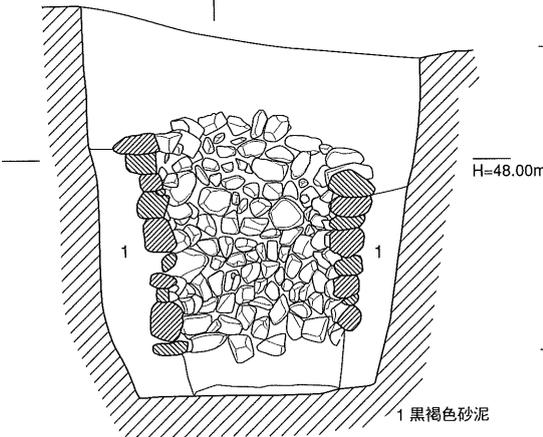
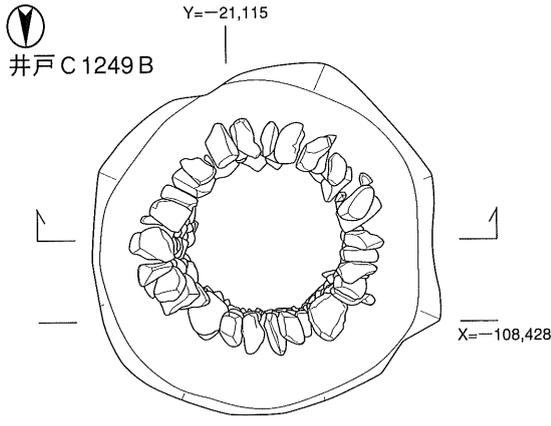
X=-108,406



1 暗褐色砂泥



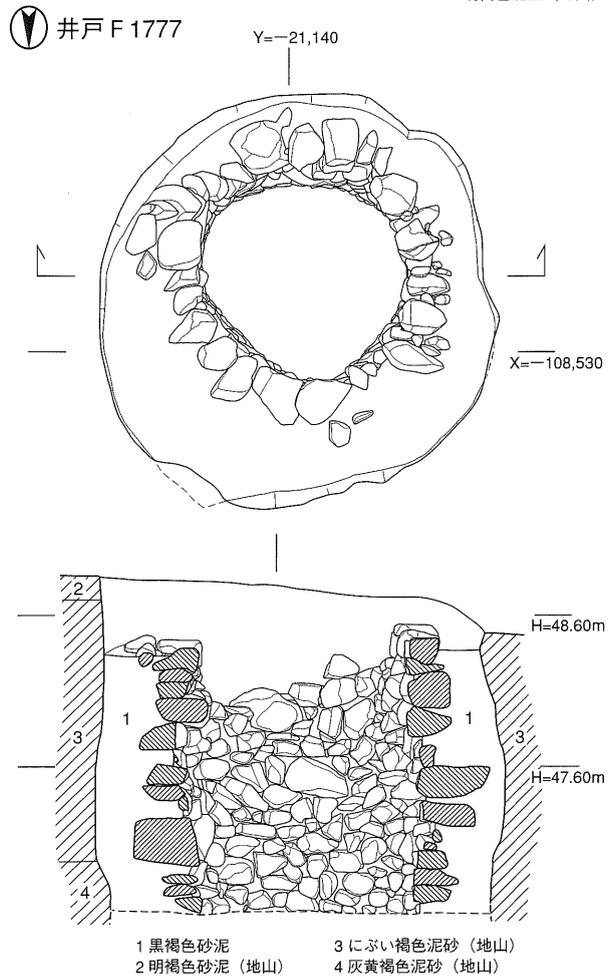
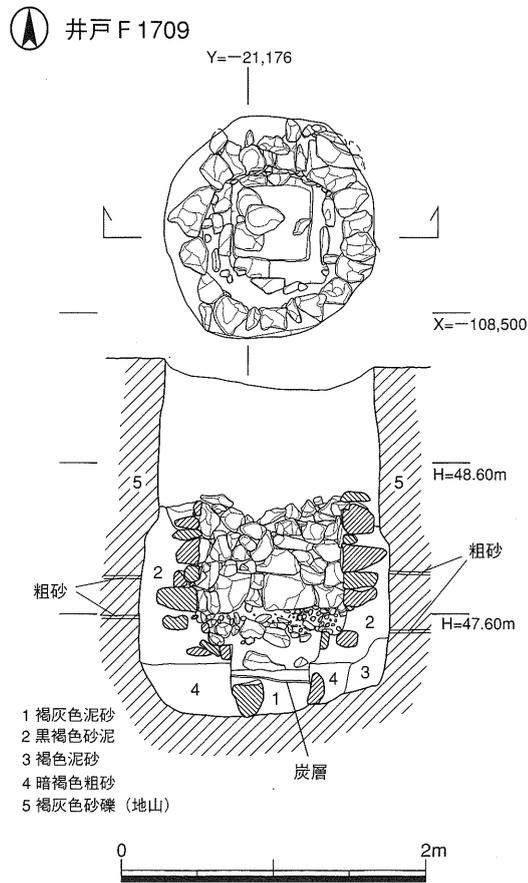
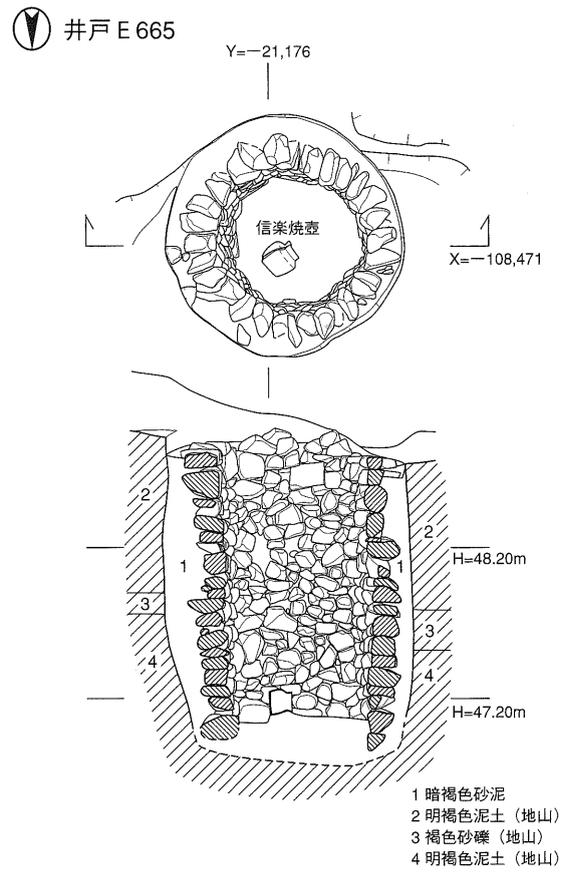
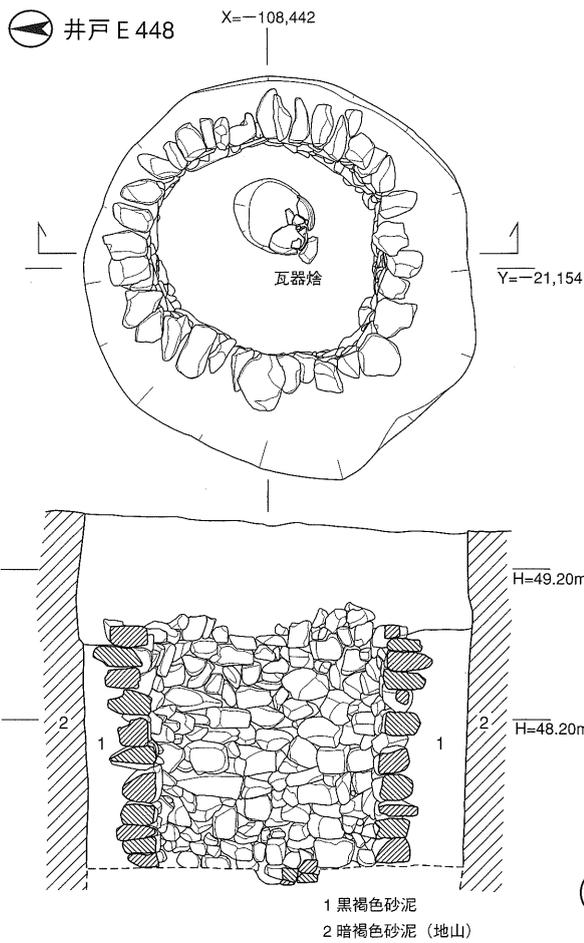
井戸 B916、井戸 B917、井戸 B918、井戸 B963実測図



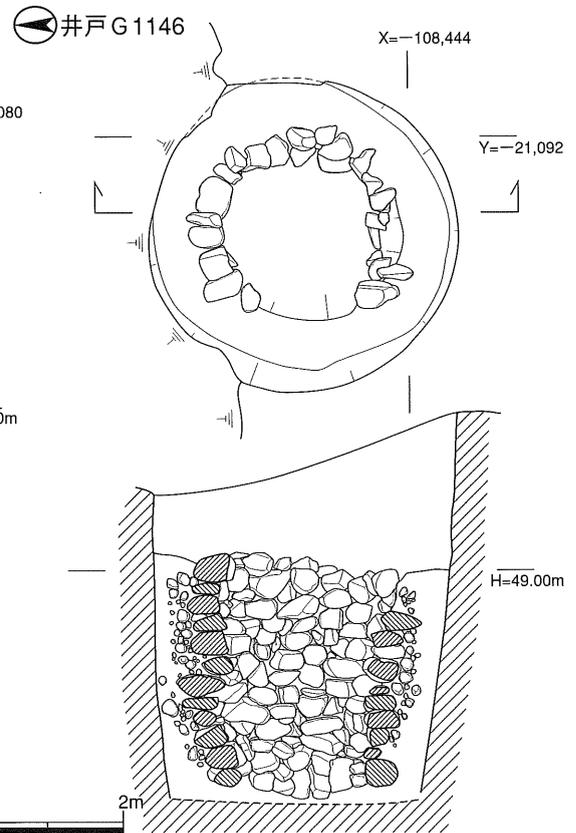
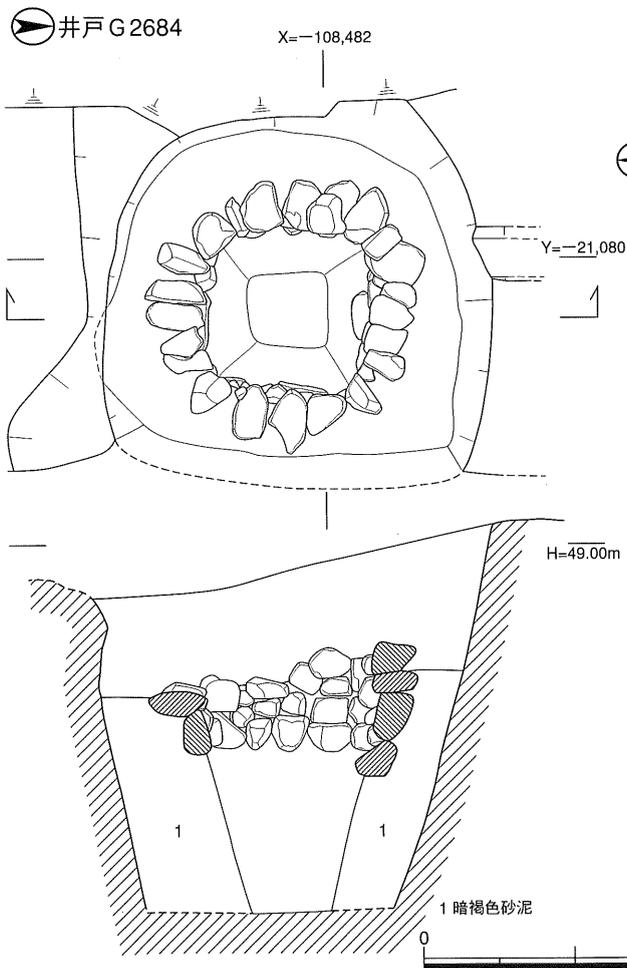
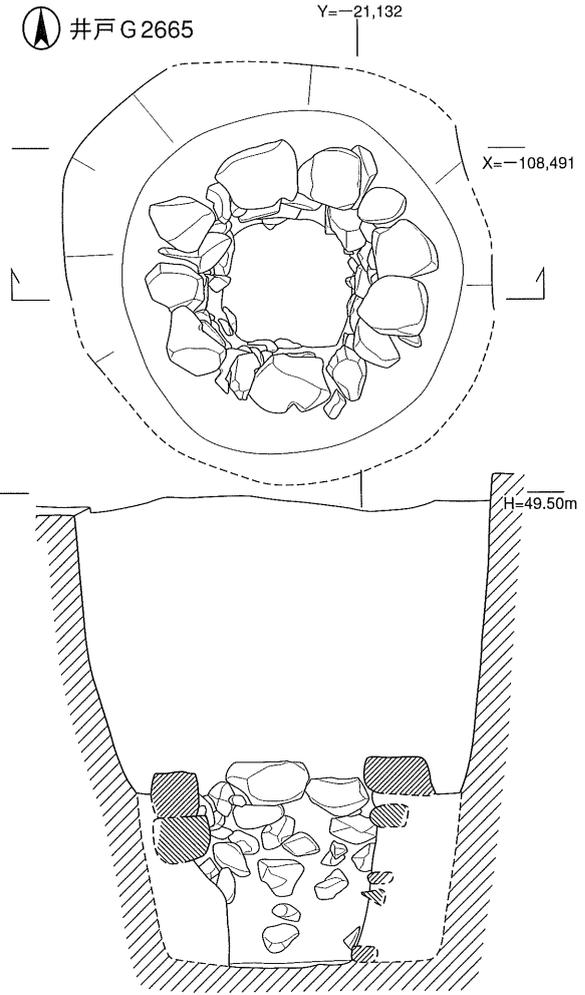
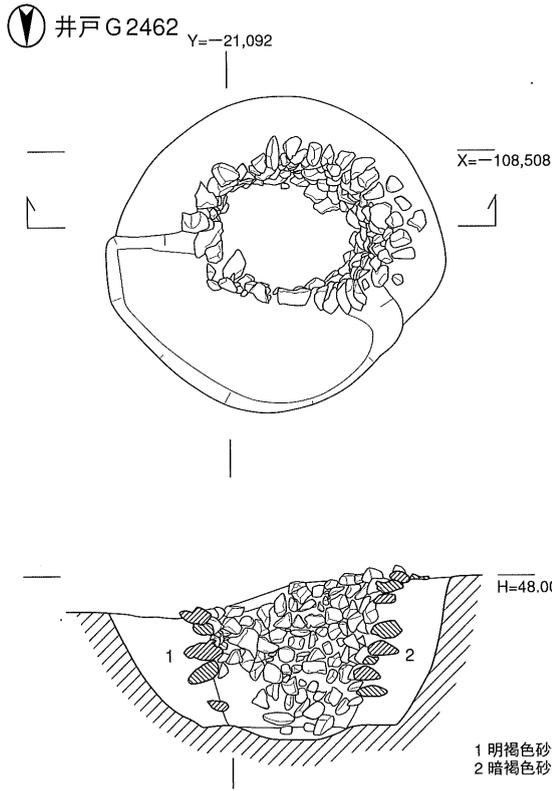
- 1 にぶい黄褐色砂泥
- 2 灰黄褐色砂泥
- 3 明褐色泥土 (地山)
- 4 暗褐色砂礫 (地山)
- 5 褐色砂泥 (地山)



井戸 C 1249 B、井戸 D 535 B、井戸 C 1189、井戸 E 400 実測図



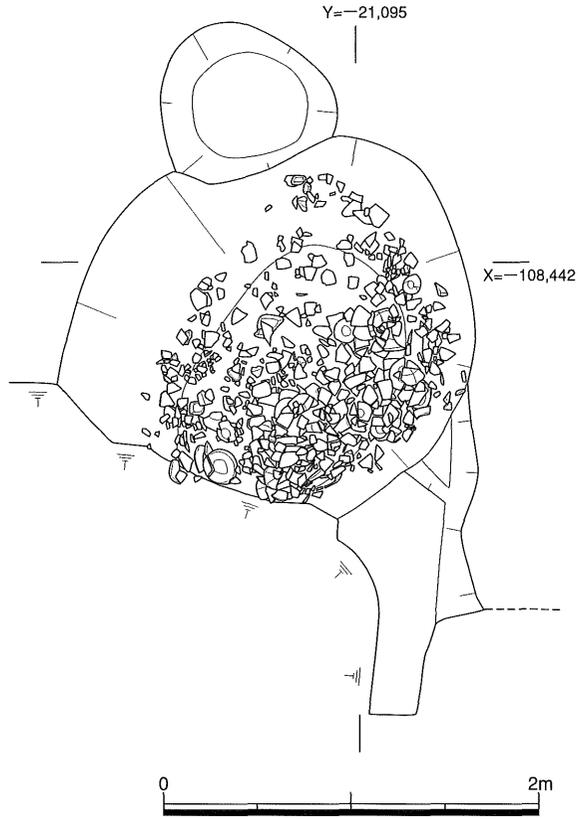
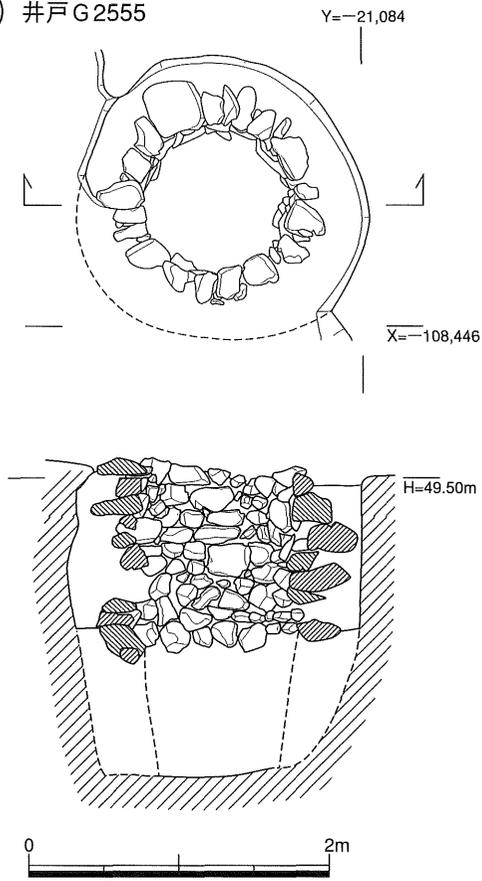
井戸 E 448、井戸 E 665、井戸 F 1709、井戸 F 1777実測図



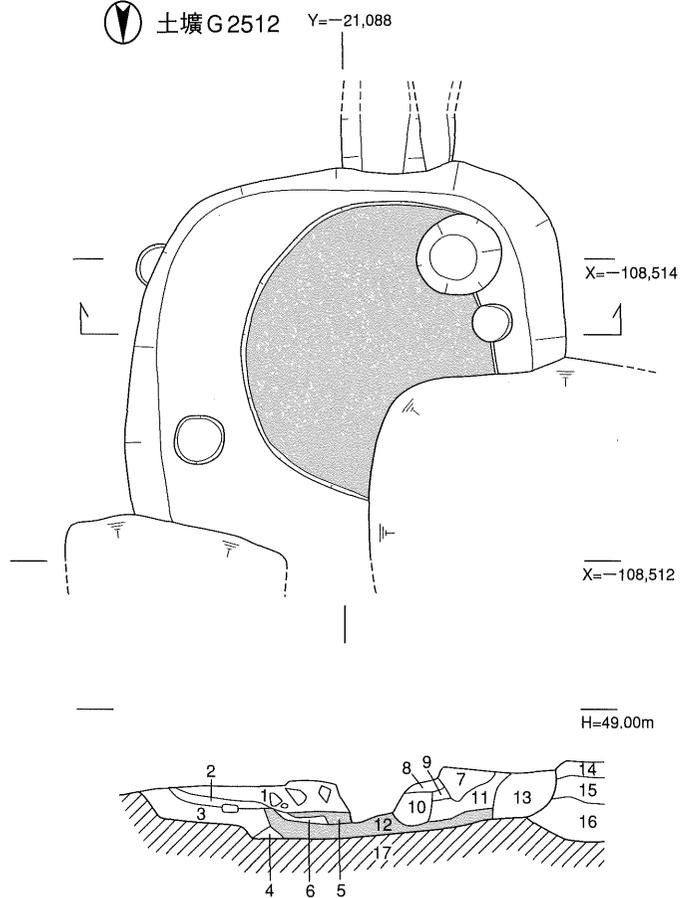
井戸 G 2462、井戸 G 2665、井戸 G 2684、井戸 G 1146実測図

▲ 土壙 G 2083

▼ 井戸 G 2555

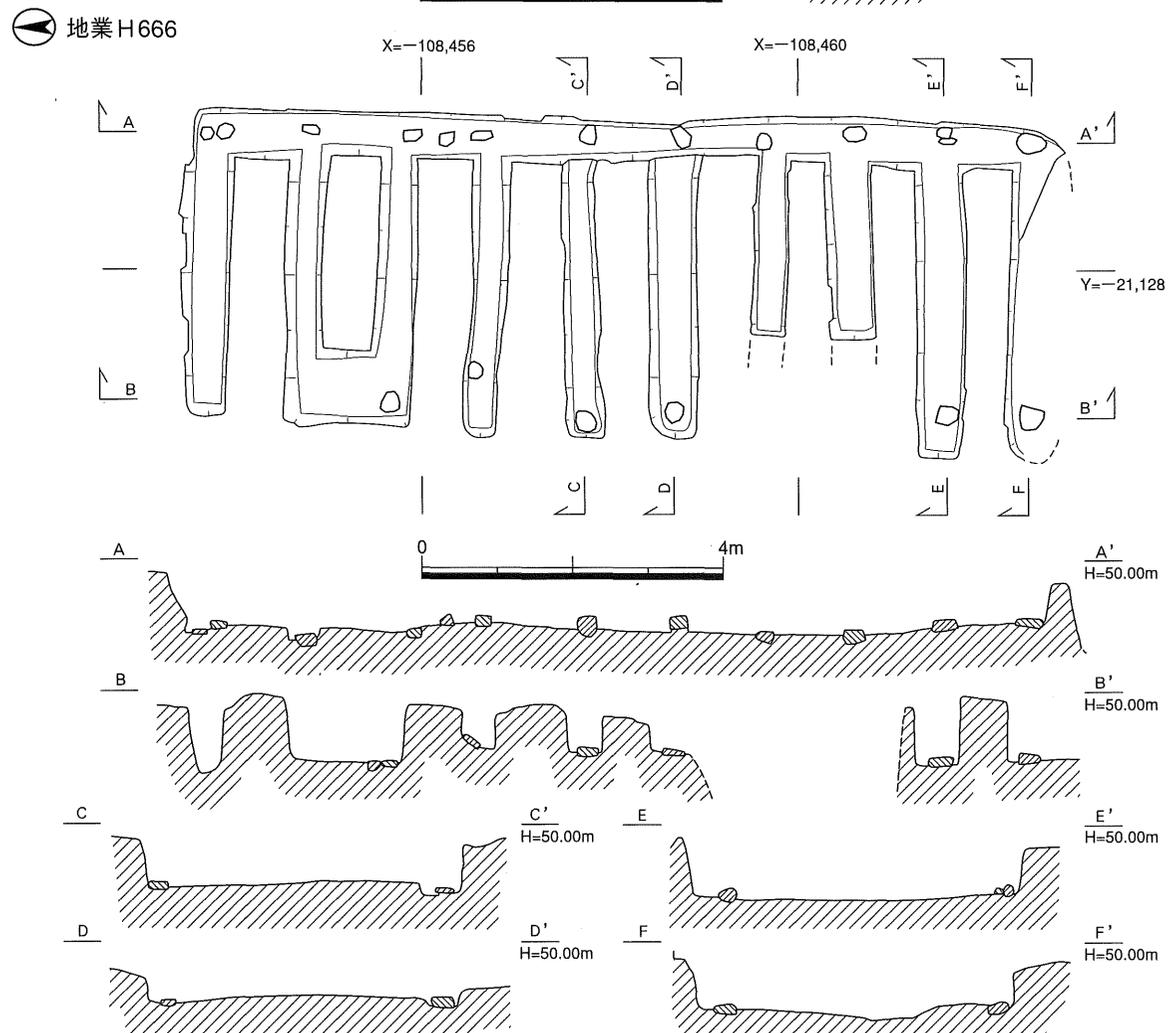
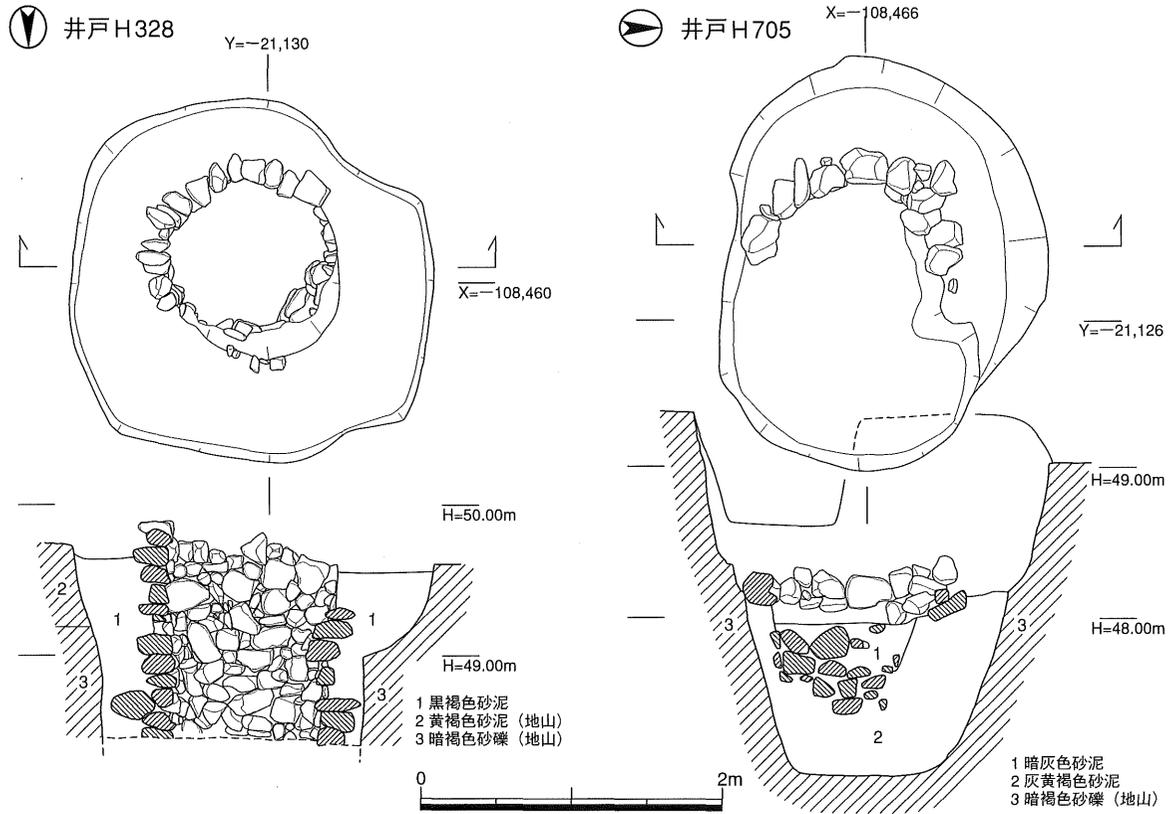


▼ 土壙 G 2512

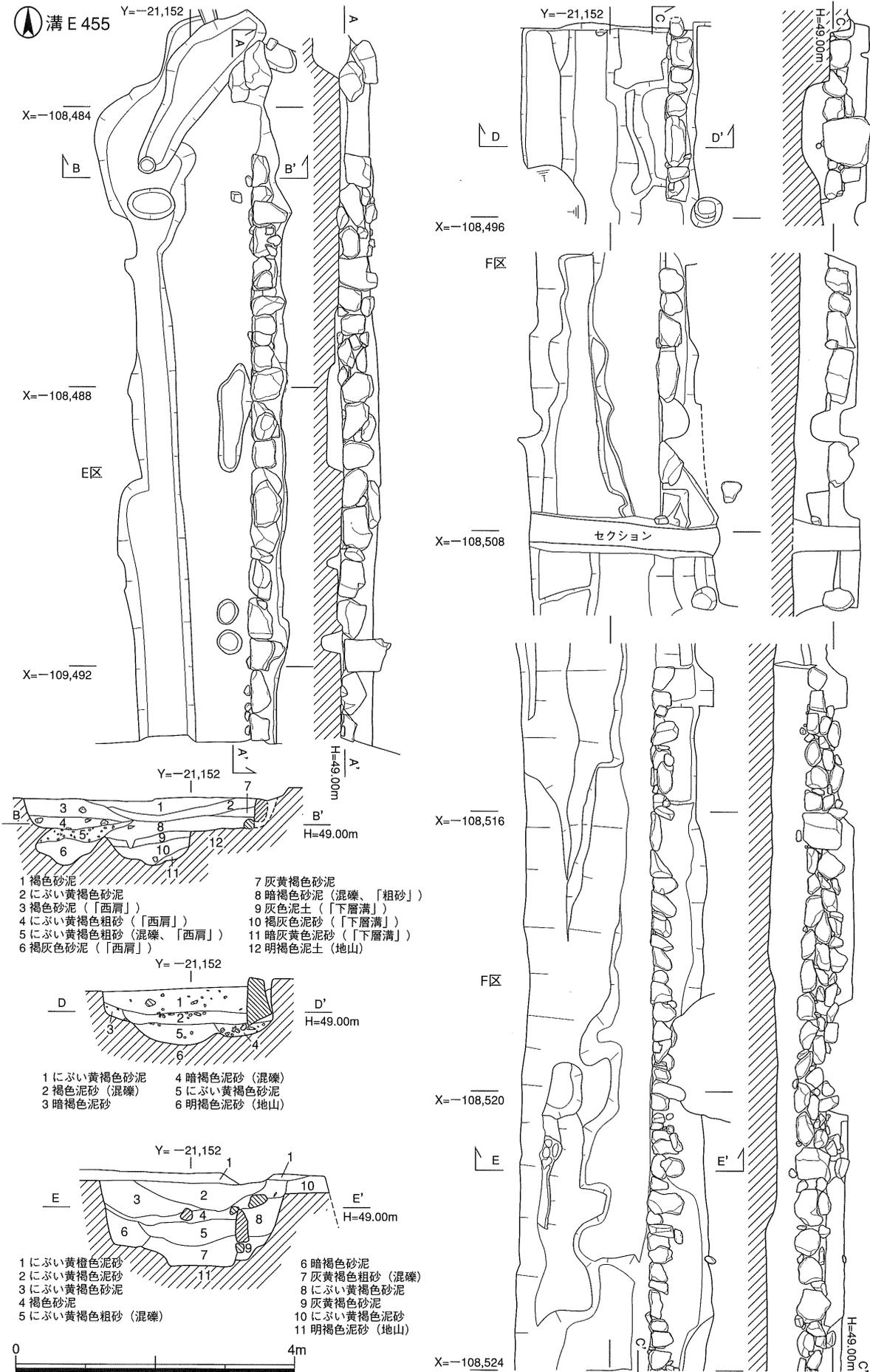


- 1 黄橙色砂泥
- 2 褐色砂泥
- 3 灰白色砂泥
- 4 暗灰黄褐色砂泥
- 5 黑色砂泥 (炭化層)
- 6 灰白色砂泥
- 7 灰白色・にぶい褐色・黒褐色砂泥
- 8 灰白色砂泥
- 9 にぶい褐色・灰白色・黒褐色砂泥
- 10 にぶい黄褐色砂泥
- 11 灰白色砂泥
- 12 暗褐色砂泥 (炭化層)
- 13 淡褐色砂泥
- 14 褐色砂泥
- 15 褐色粗砂
- 16 暗褐色粗砂
- 17 褐色砂泥

井戸 G 2555、土壙 G 2083、土壙 G 2512実測図

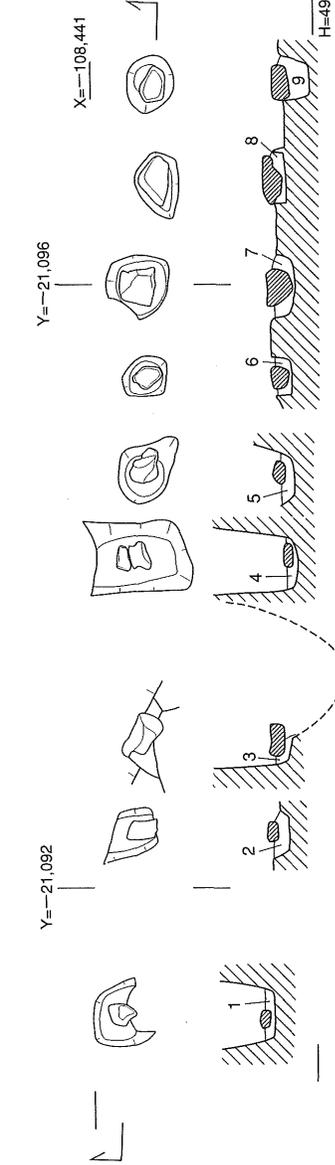


井戸 H328、井戸 H705、地業 H666 実測図



溝 E 455実測図

▲ 堀 G3729

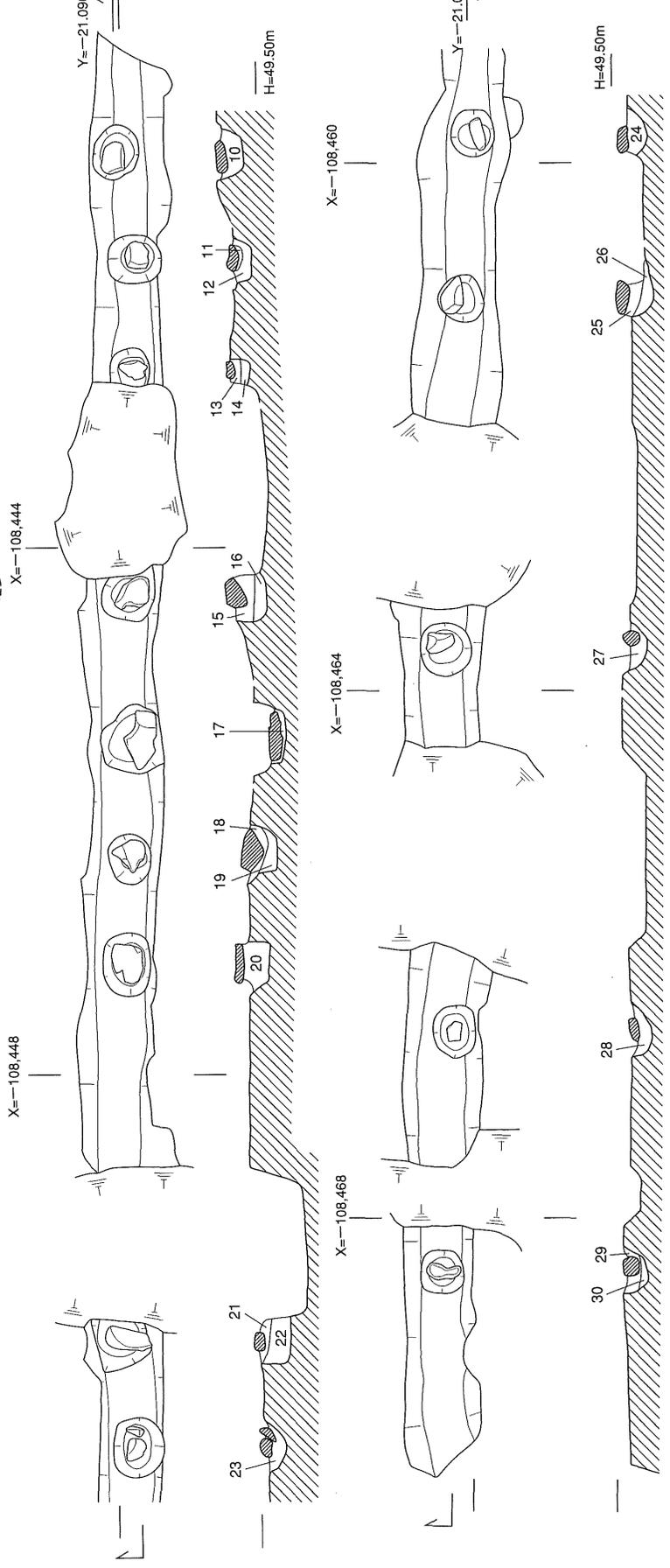


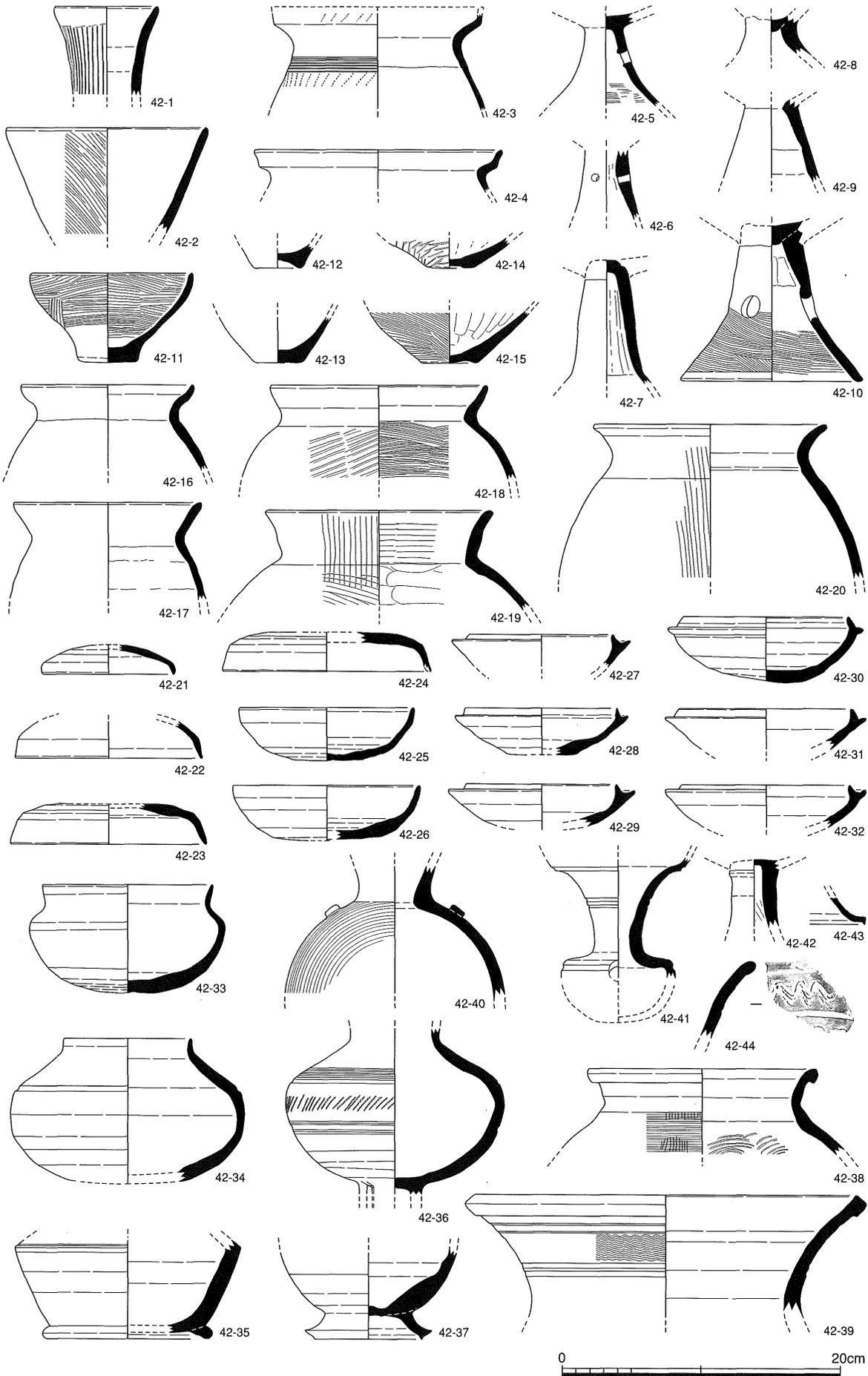
- 1 褐色砂泥
- 2 褐色砂泥
- 3 褐色砂泥
- 4 褐色砂泥
- 5 褐色砂泥
- 6 褐色砂泥
- 7 褐色砂泥
- 8 黄褐色砂泥
- 9 褐色砂泥
- 10 褐色砂泥
- 11 褐色砂泥
- 12 褐色砂泥
- 13 褐色砂泥
- 14 暗褐色砂泥
- 15 褐色砂泥
- 16 褐色砂泥
- 17 暗褐色砂泥
- 18 暗オリーブ褐色砂泥
- 19 黄褐色砂泥
- 20 褐色砂泥
- 21 褐色砂泥
- 22 暗褐色砂泥
- 23 黄褐色砂泥
- 24 黄褐色砂泥
- 25 褐色砂泥
- 26 にぶい黄褐色砂泥
- 27 褐色砂泥
- 28 褐色砂泥
- 29 褐色砂泥
- 30 褐色砂泥



堀 G3729、堀 G2933実測図

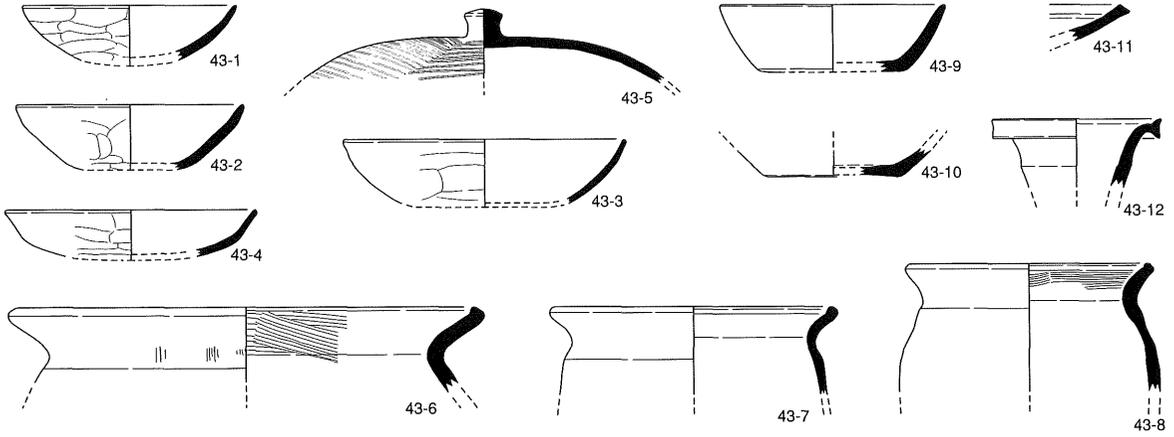
▲ 堀 G2933



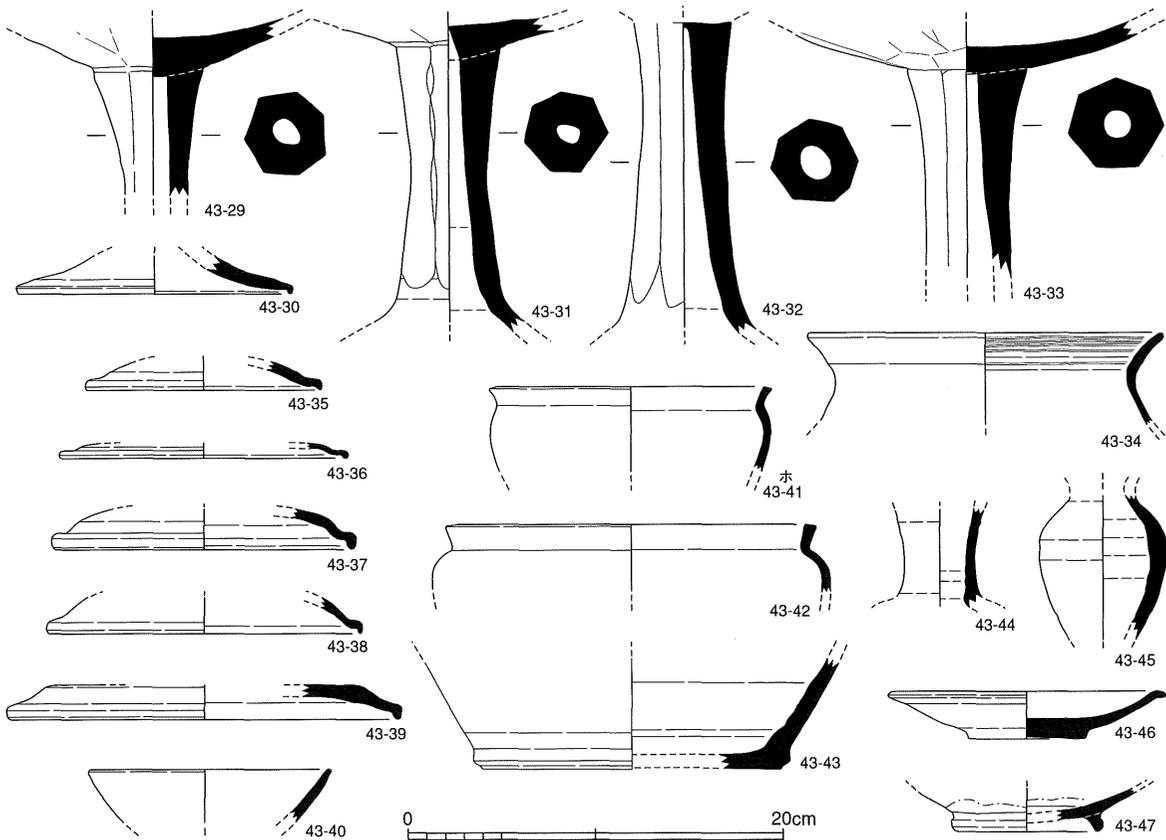
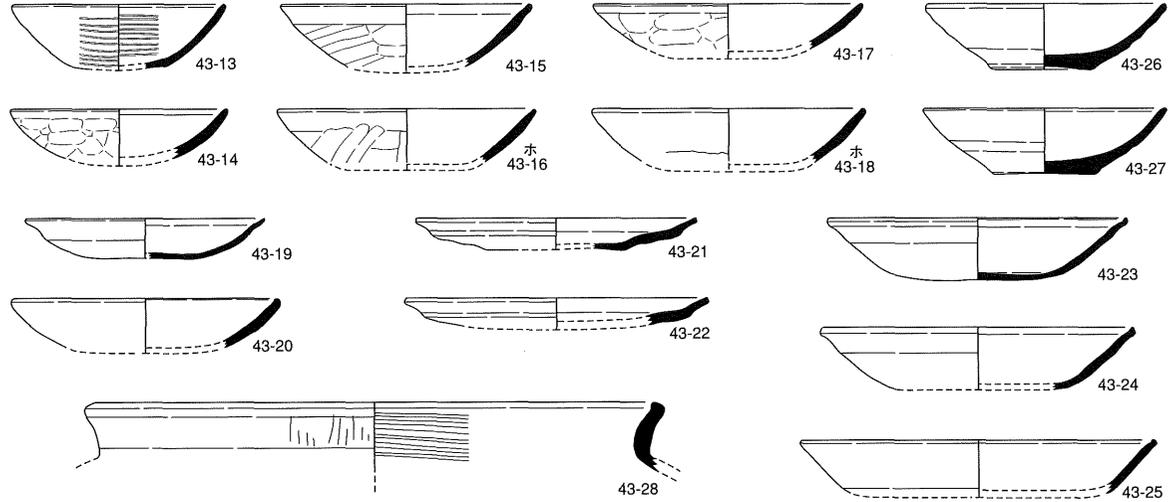


古墳・飛鳥時代土器実測図

土壙 F 2639

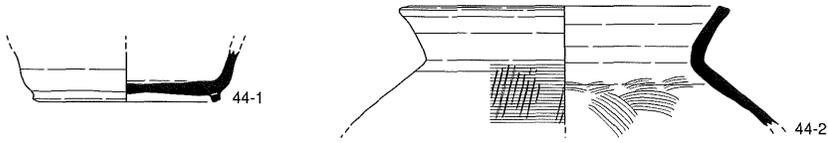


井戸 E 765

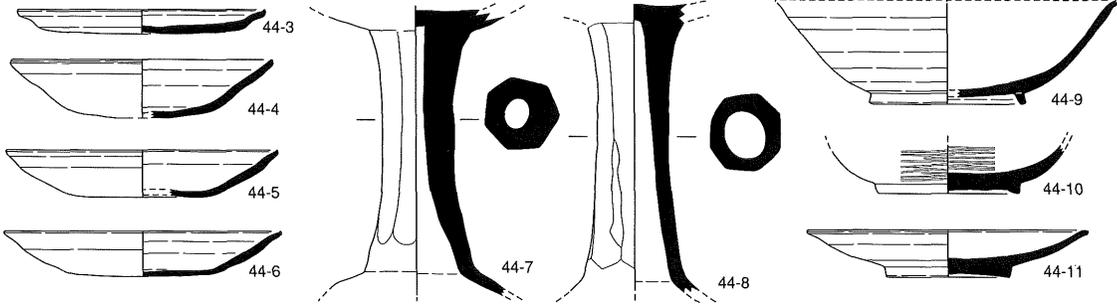


土壙 F 2639、井戸 E 765出土土器実測図

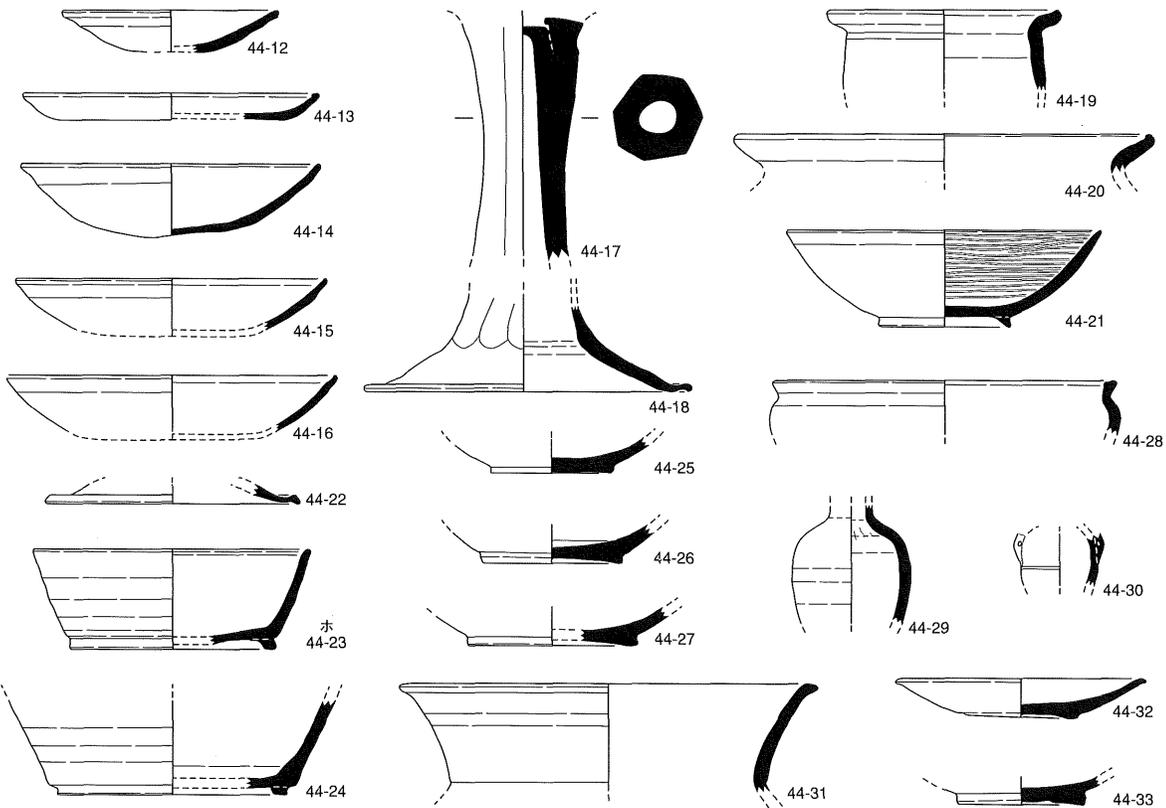
石敷 G3578



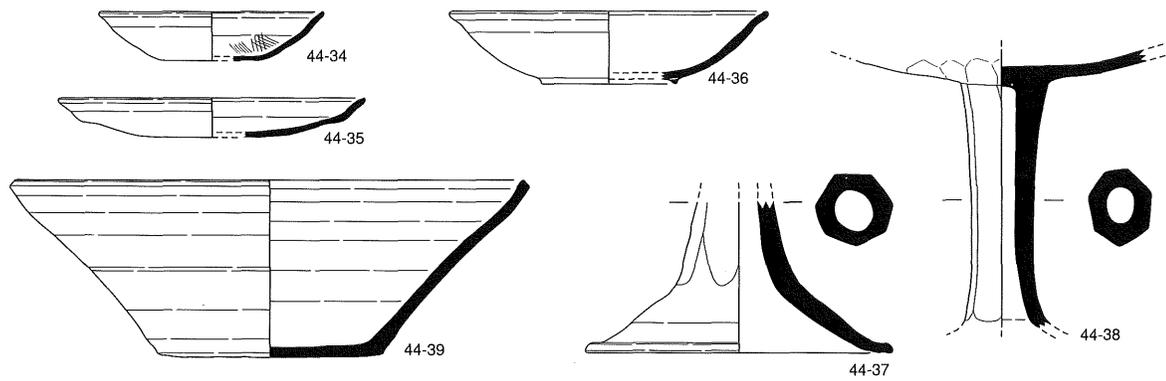
土壙 G3551



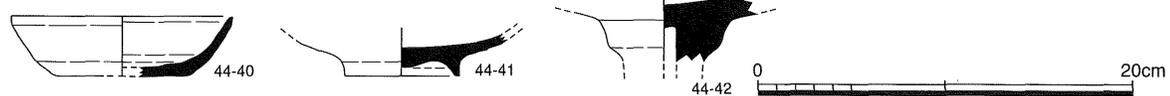
井戸 F2570



土壙 G3573

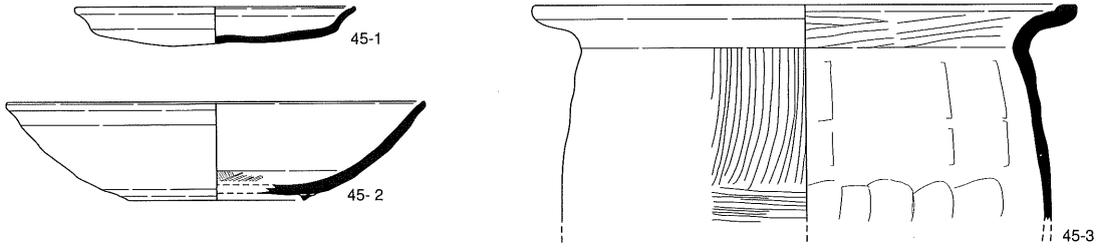


溝 B1058

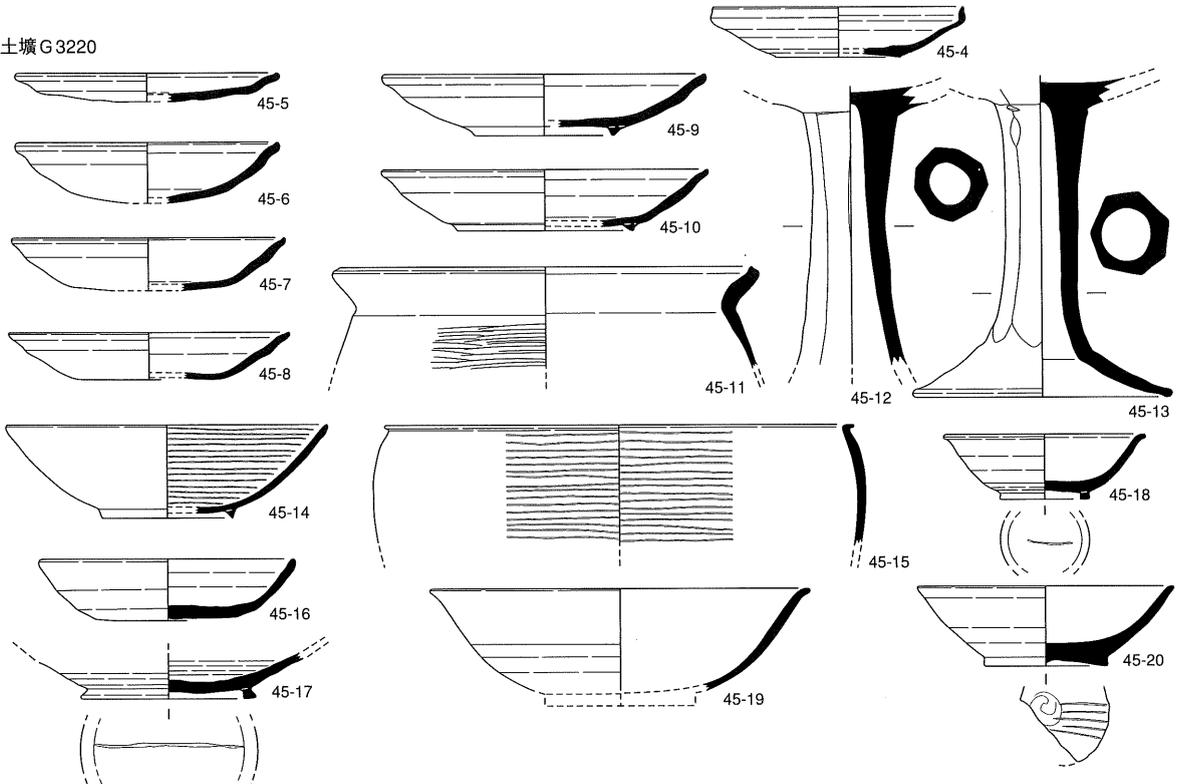


石敷 G3578、土壙 G3551、井戸 F2570、土壙 G3573、溝 B1058出土土器実測図

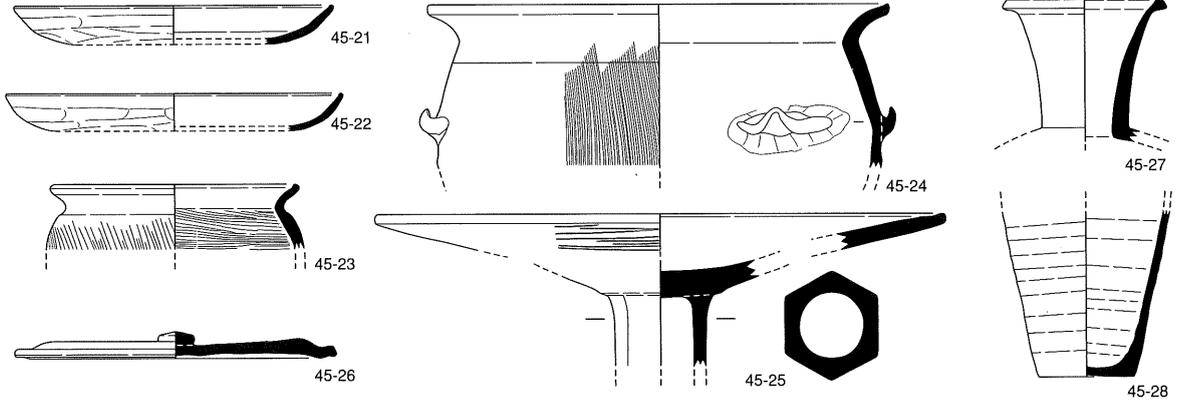
溝 G3415



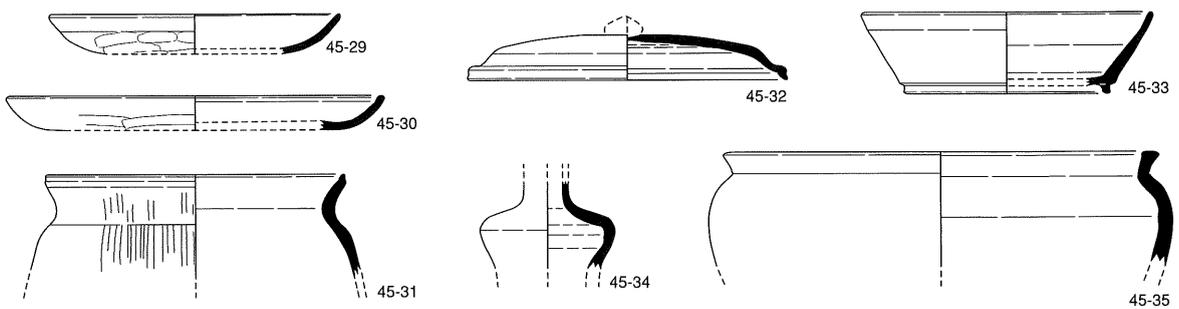
土壙 G3220



流路 F 2550上層 (G区)

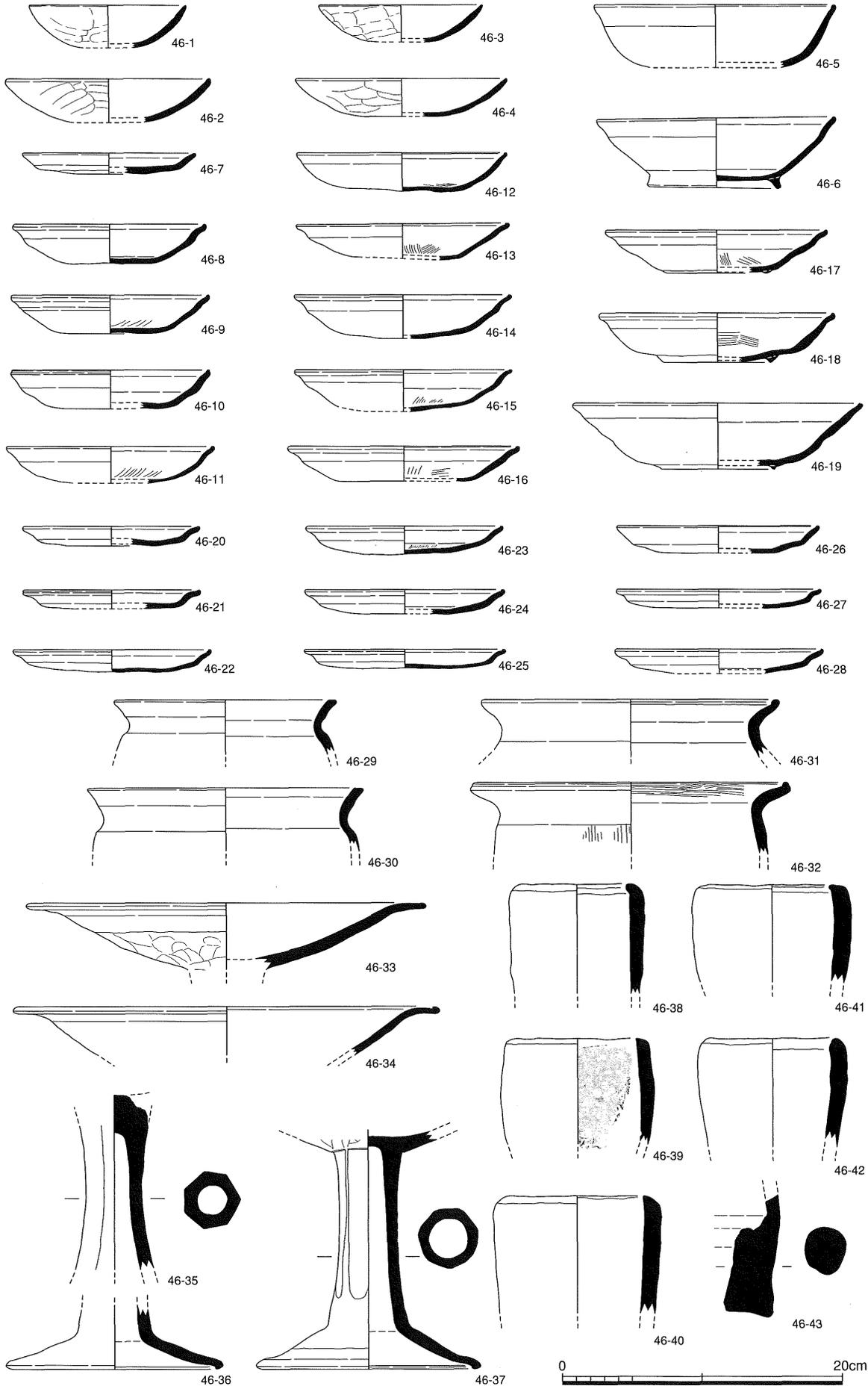


流路 F 2550上層 (X区)

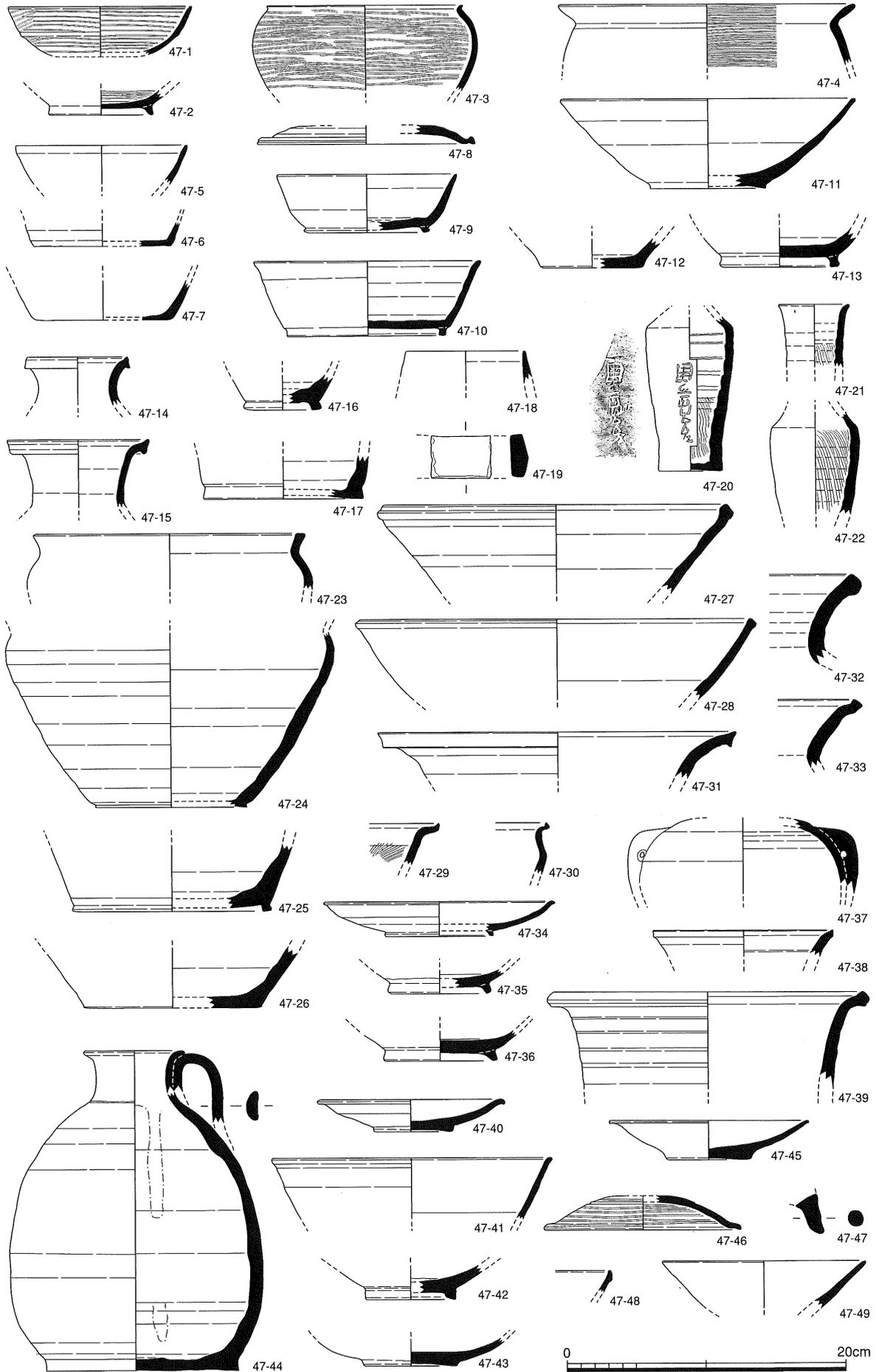


溝 G3415、土壙 G3220、流路 F 2550上層 (G区)、流路 F 2550上層 (X区) 出土土器実測図

流路 F 2550 上層

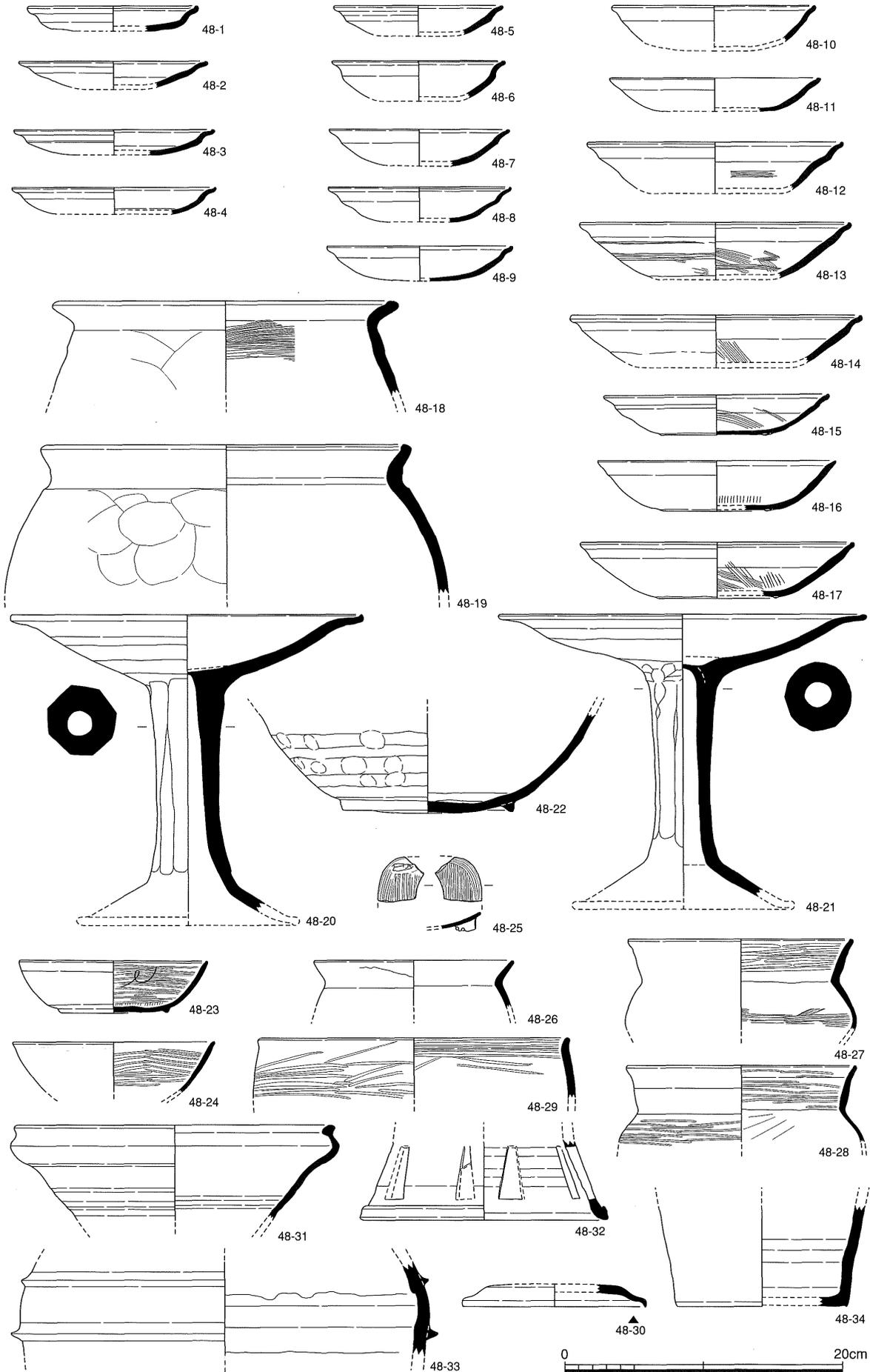


流路 F 2550 上層出土土器実測図 1



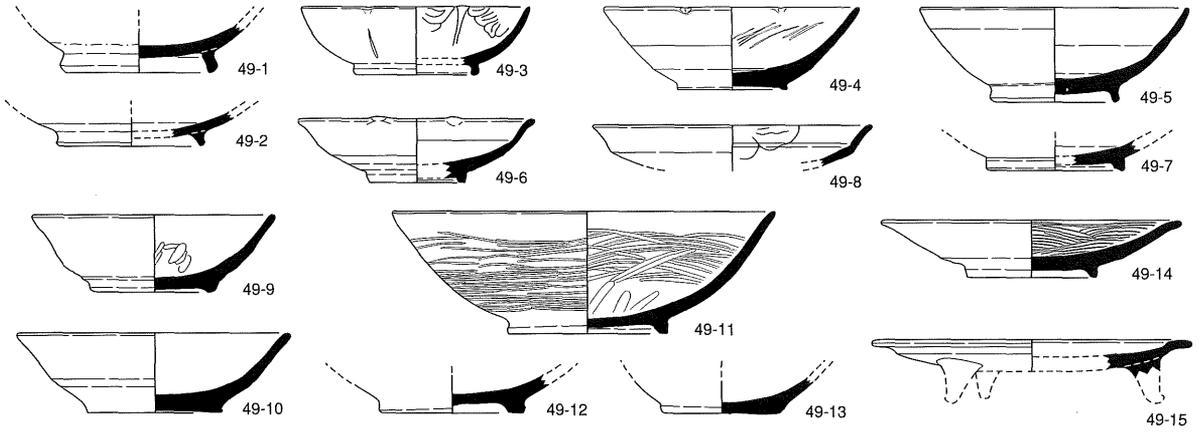
流路 F 2550 上層出土土器実測図 2

溝 E 845

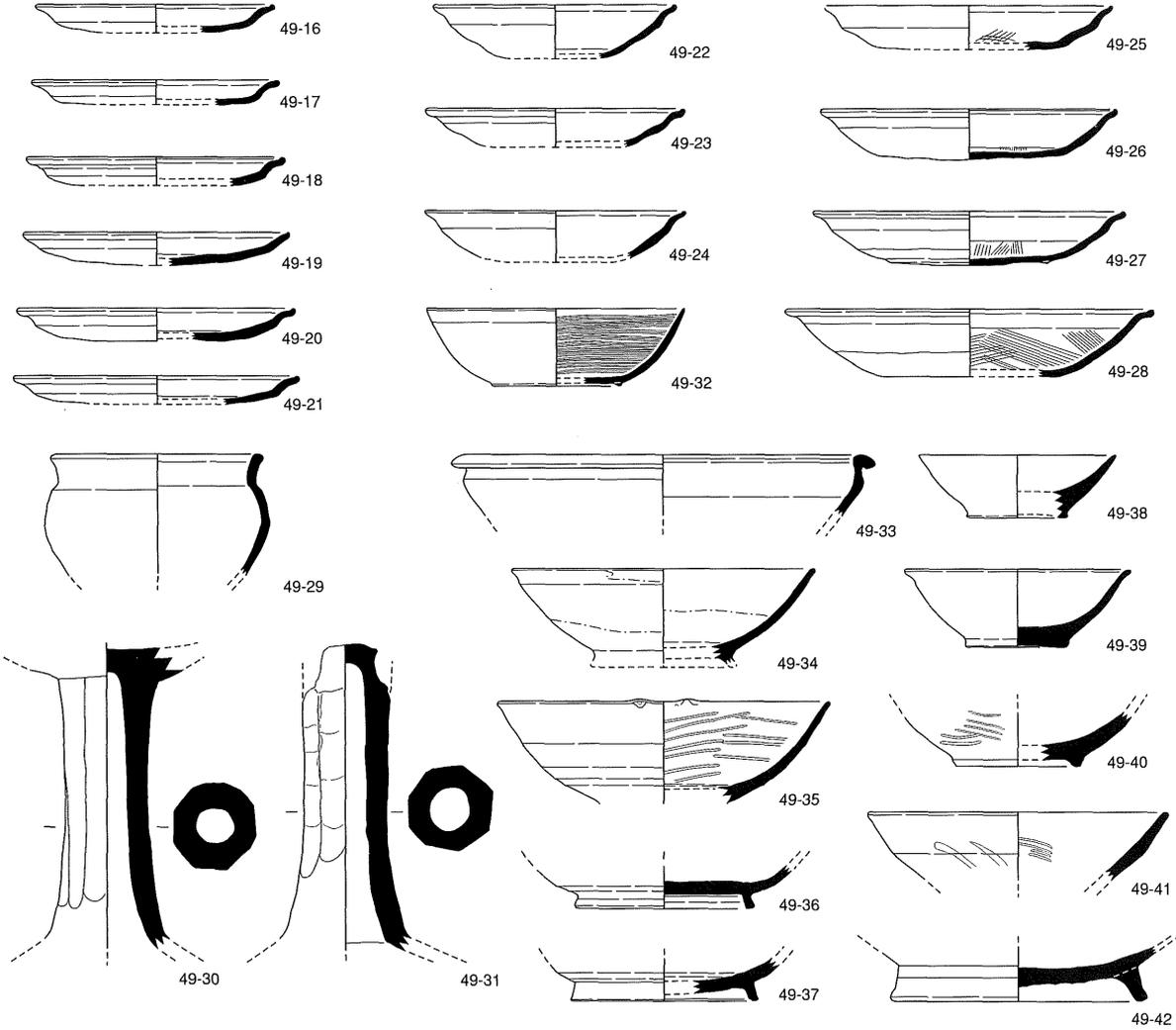


溝 E 845出土土器実測図

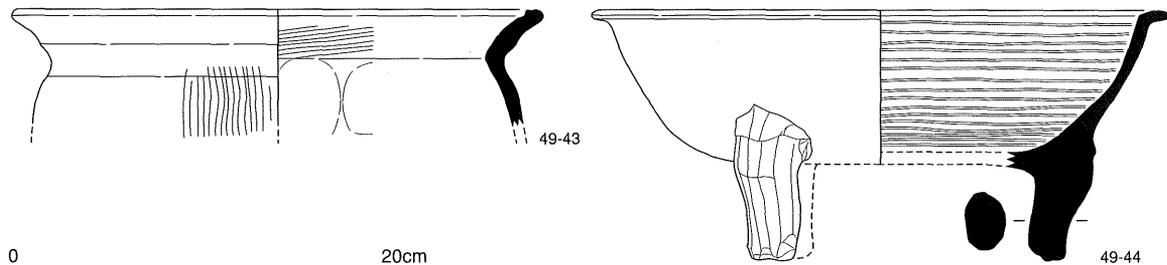
溝 E 845



溝 E 827

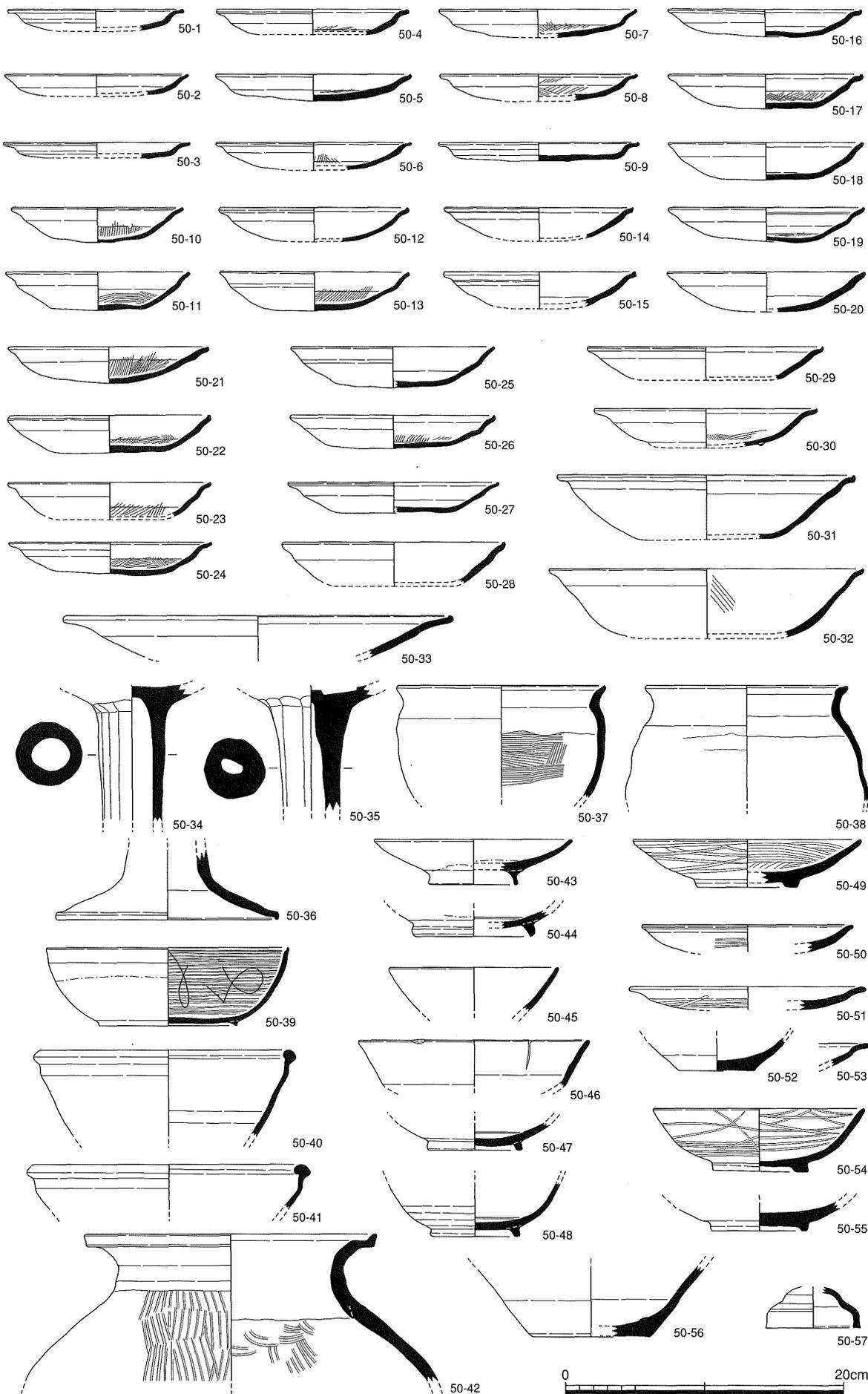


溝 A 419



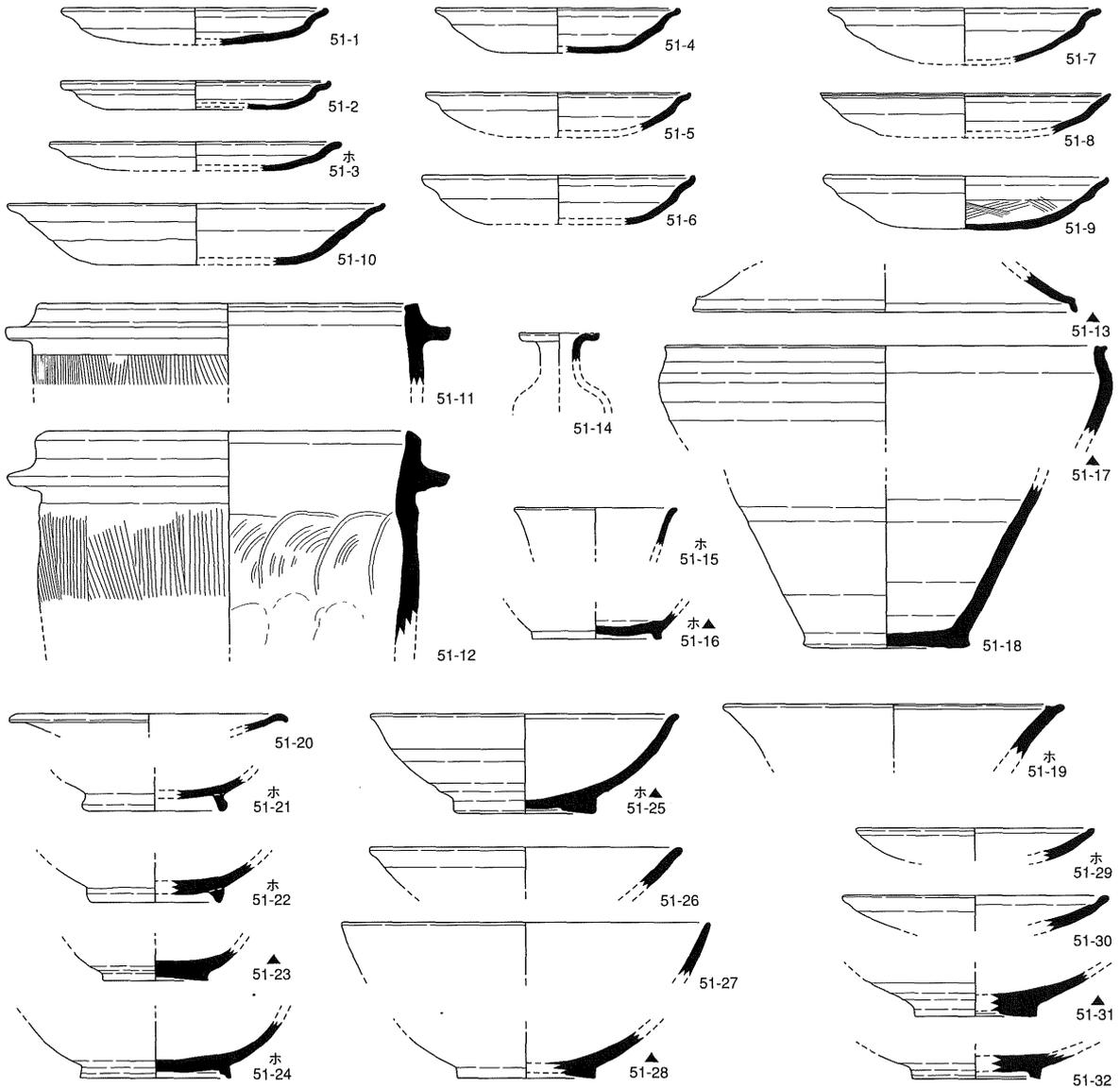
溝 E 845、溝 E 827、溝 A 419出土土器実測図

土壙 F 2631

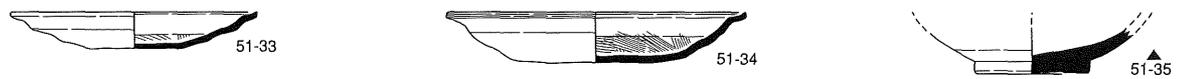


土壙 F 2631出土土器実測図

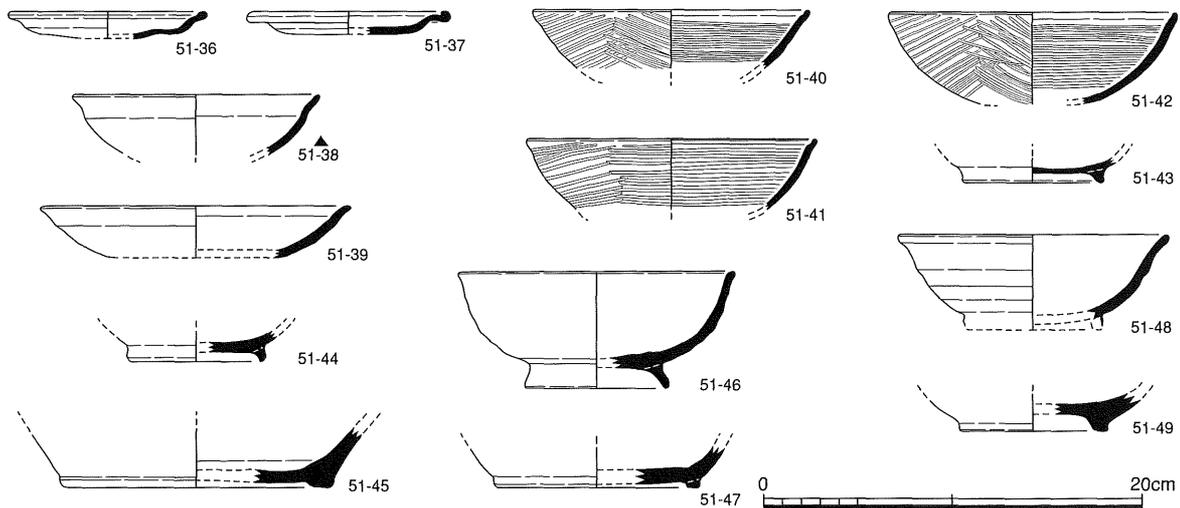
井戸B1060



井戸G2657

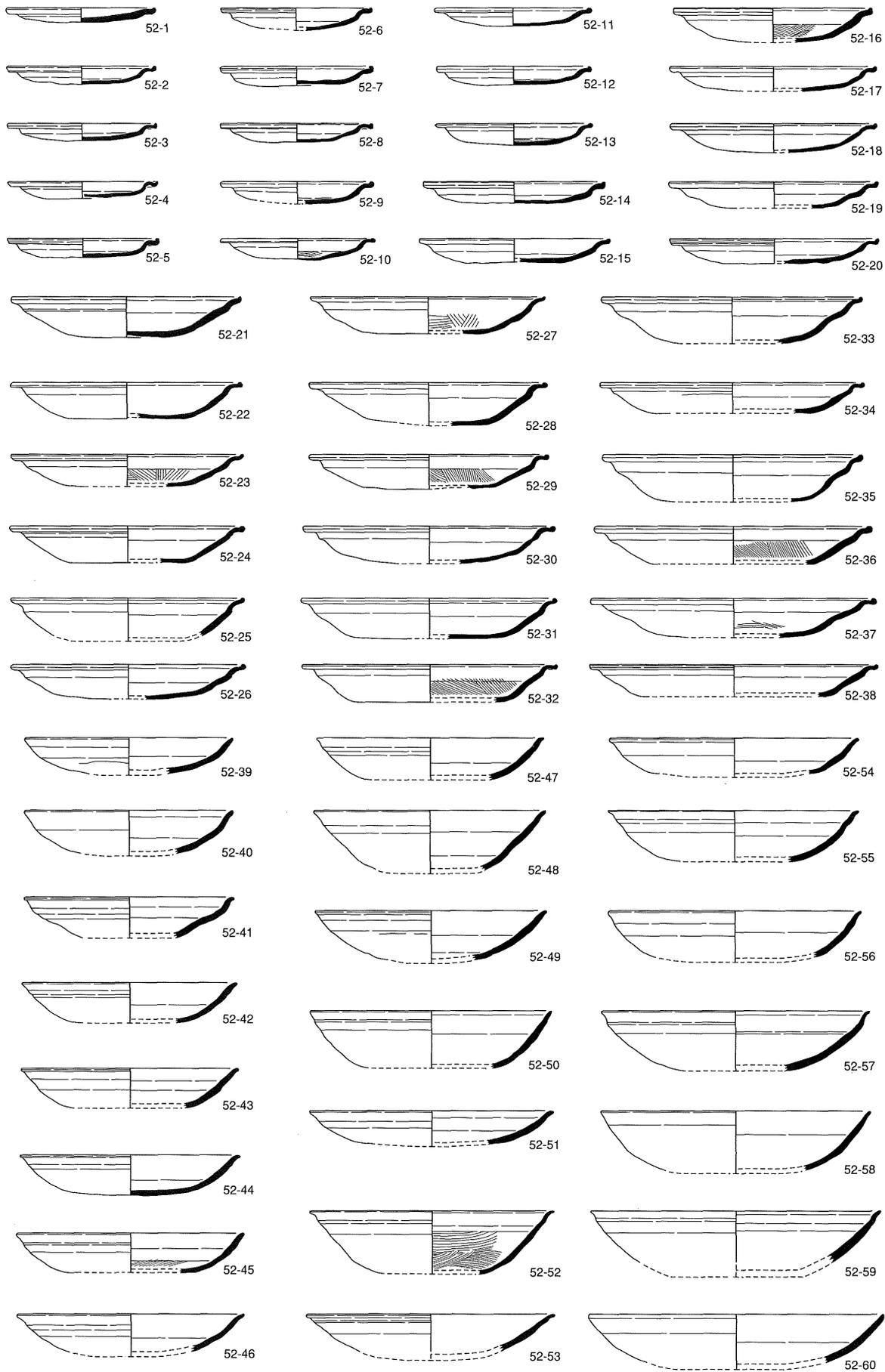


土壙A416



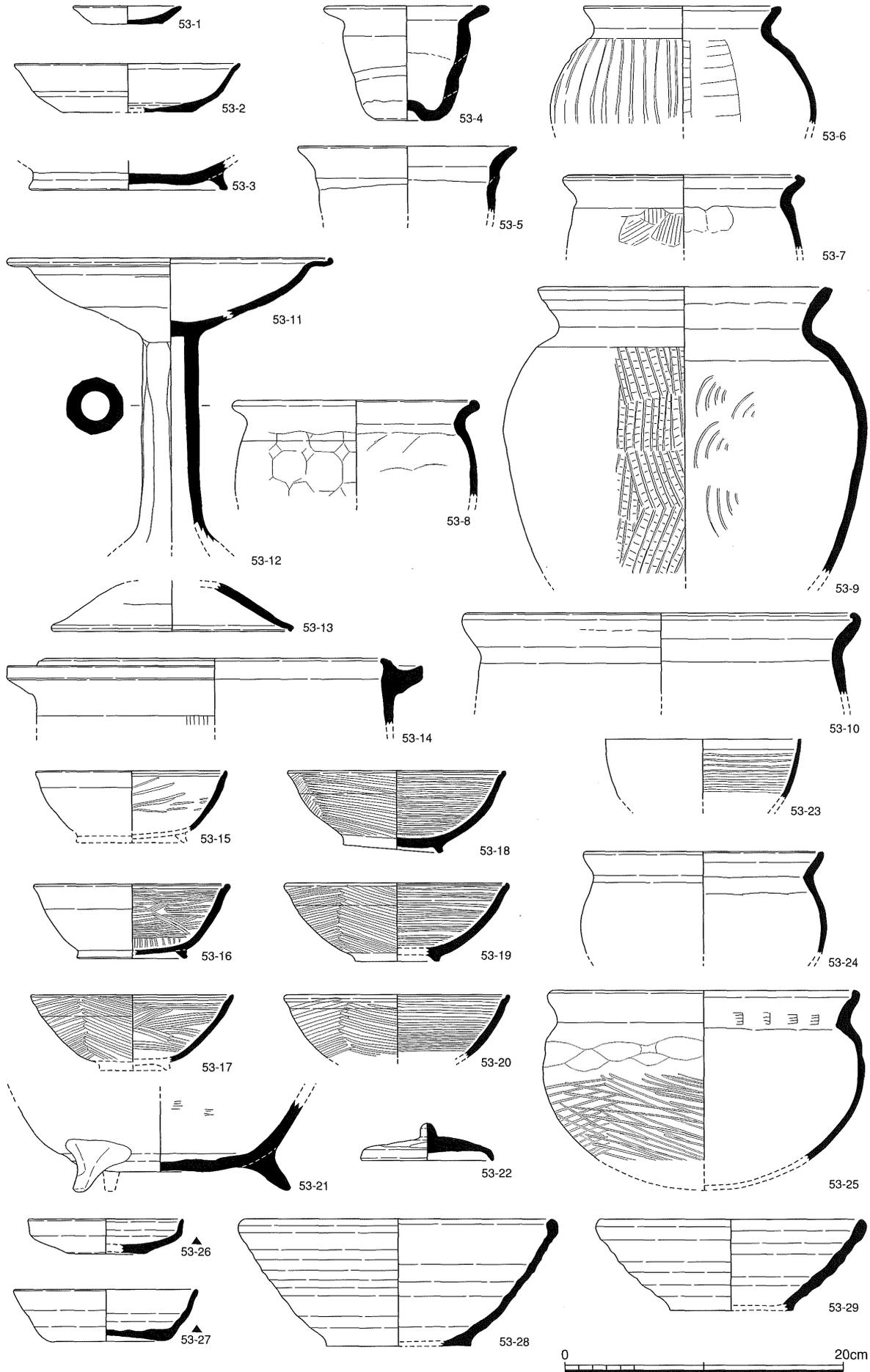
井戸B1060、井戸G2657、土壙A416出土土器実測図

土壙 B 1013



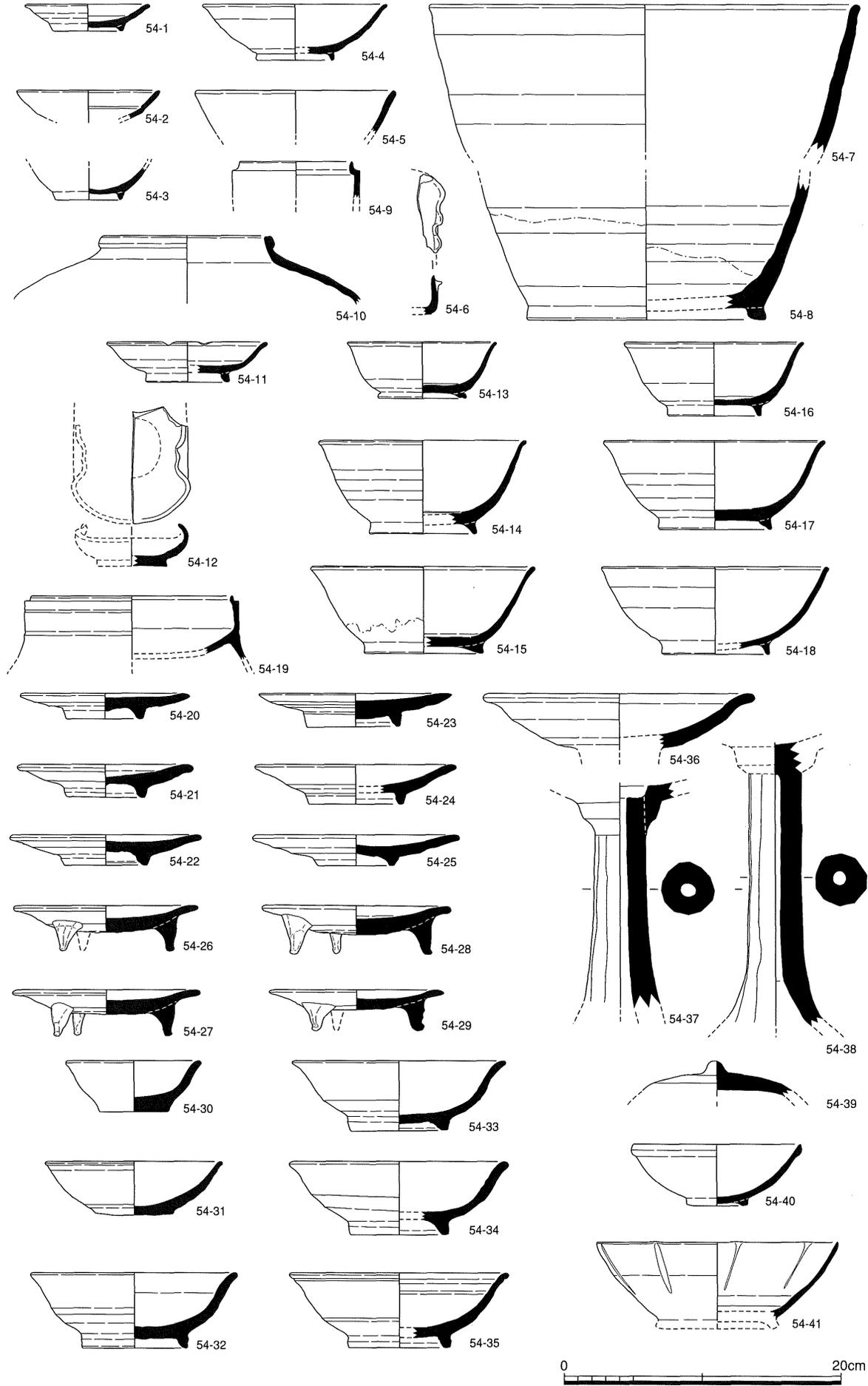
0 20cm

土壙 B 1013出土土器实测图 1



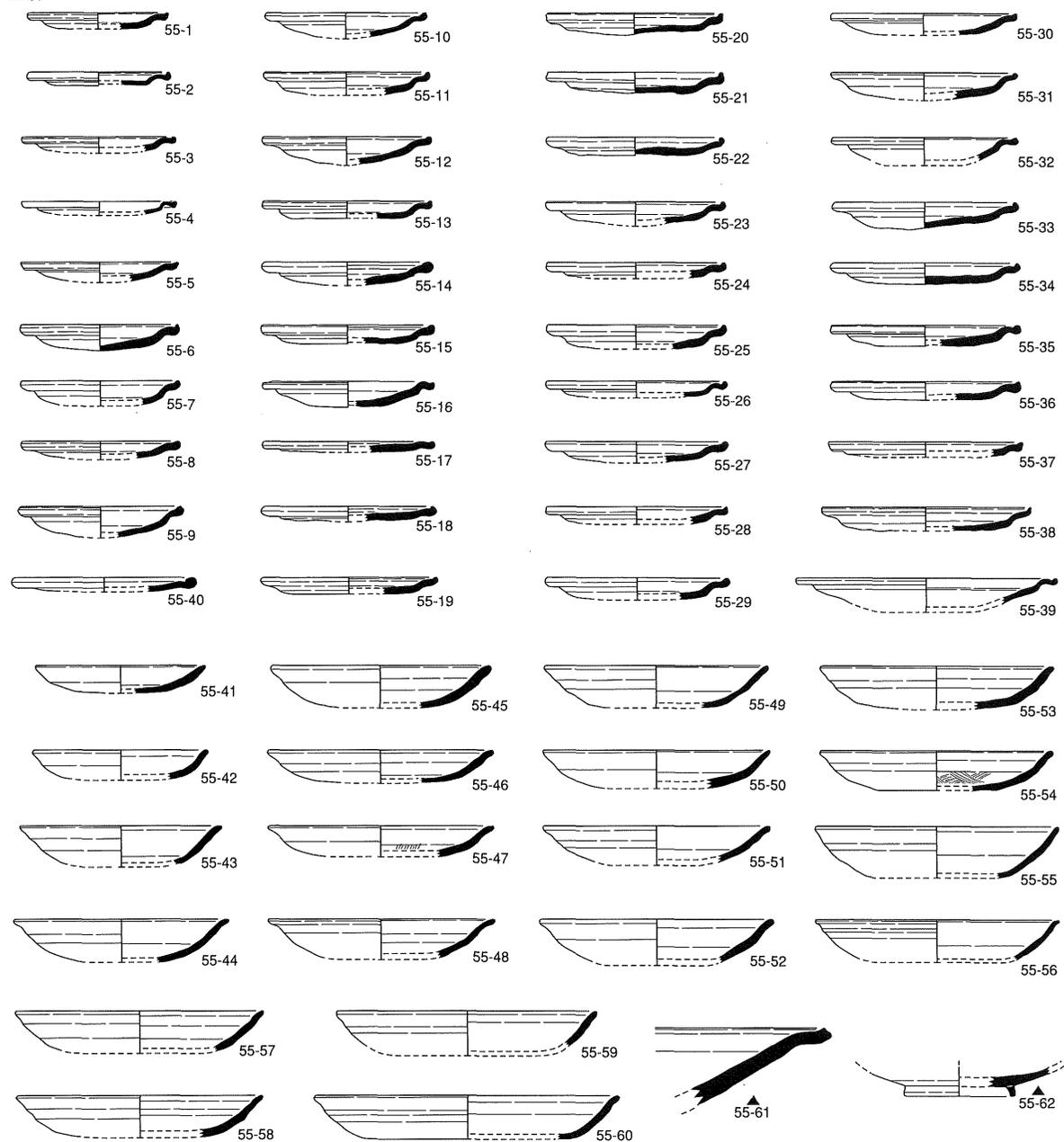
土壙B1013出土土器実測图2

土壙B1013

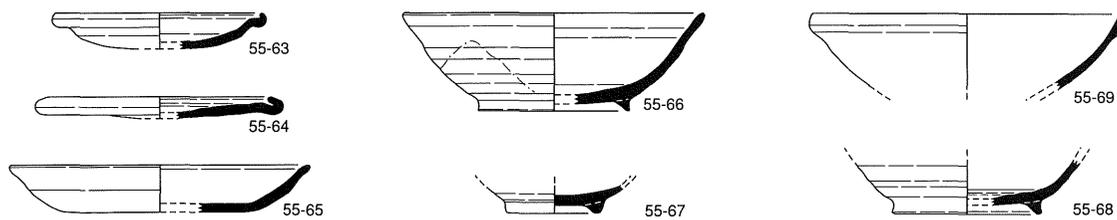


土壙B1013出土土器実測図3

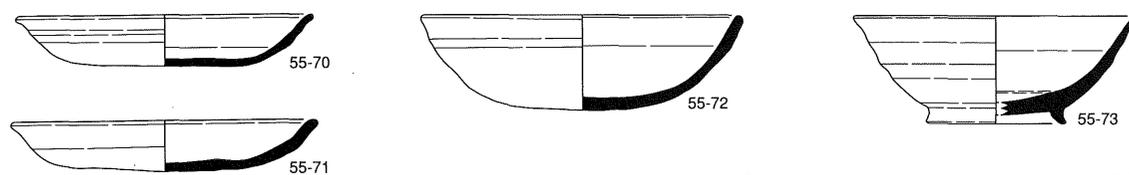
土壙 S71



土壙 G3392

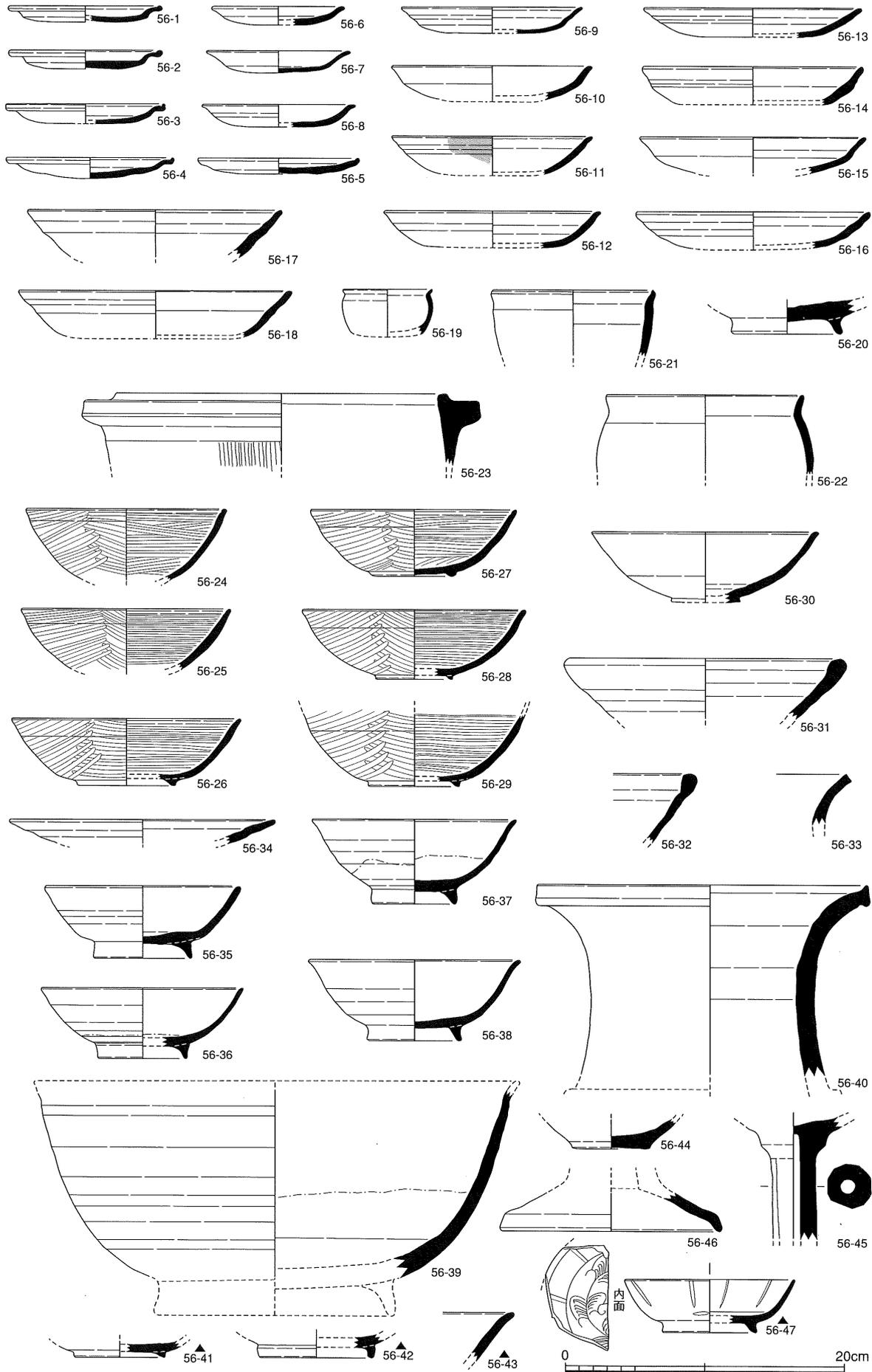


溝 E881



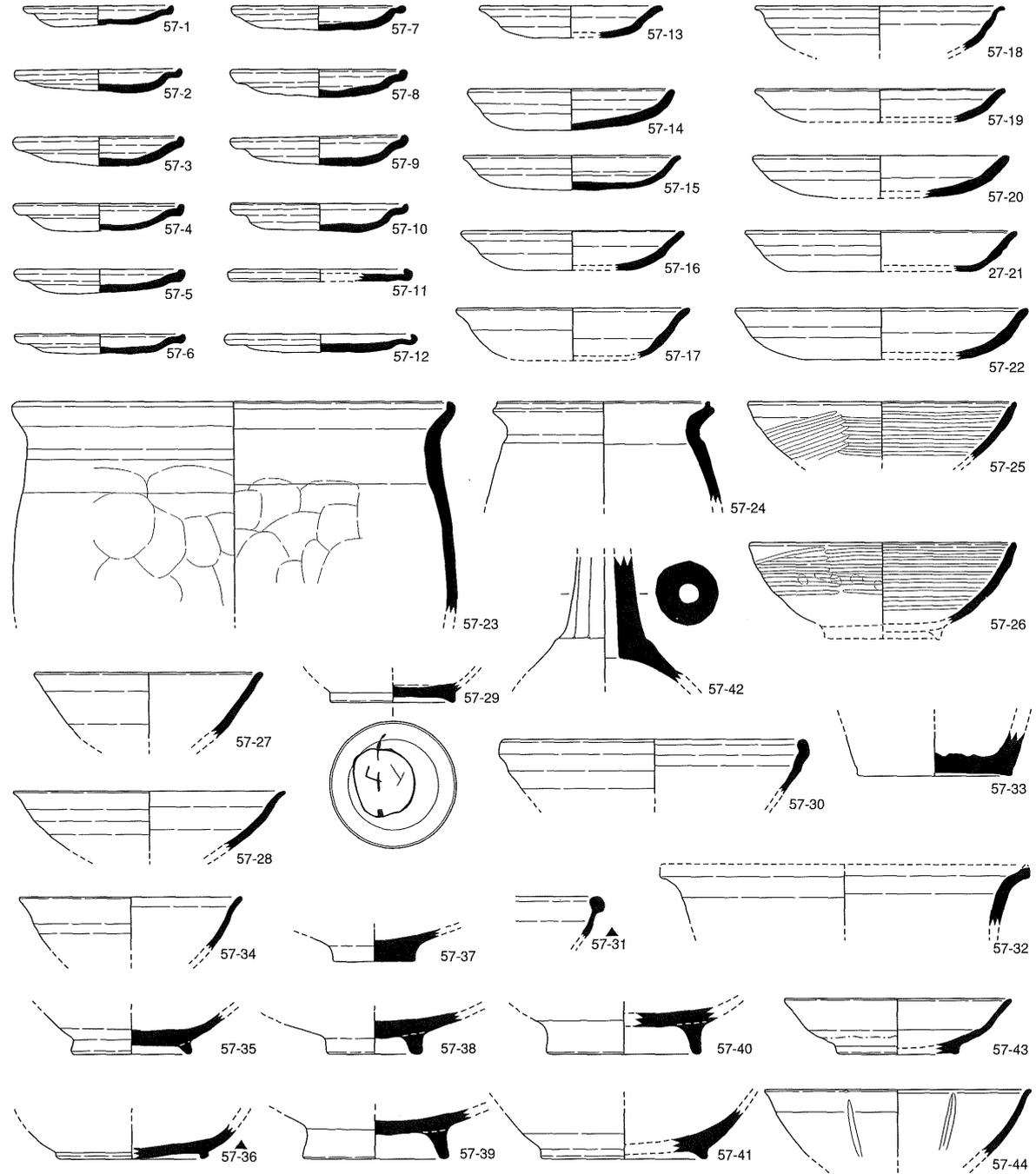
土壙 S71、土壙 G3392、溝 E881出土土器实测图

井戸 F 2510 堀形

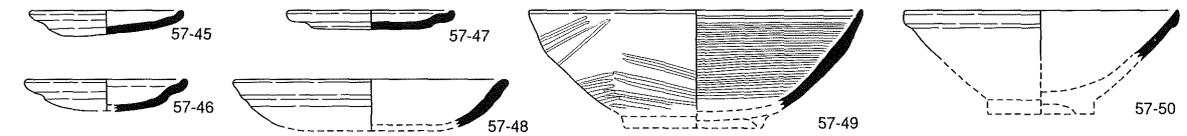


井戸 F 2510 堀形出土土器実測図

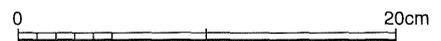
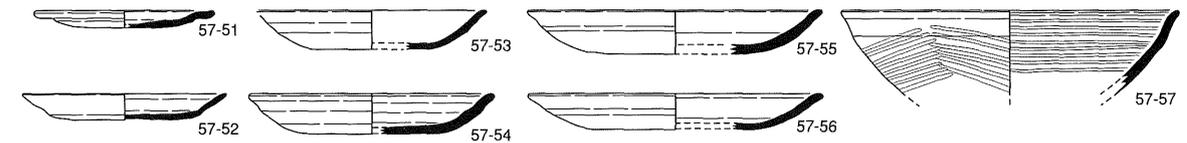
井戸 F 2510 粹内



井戸 F 2505

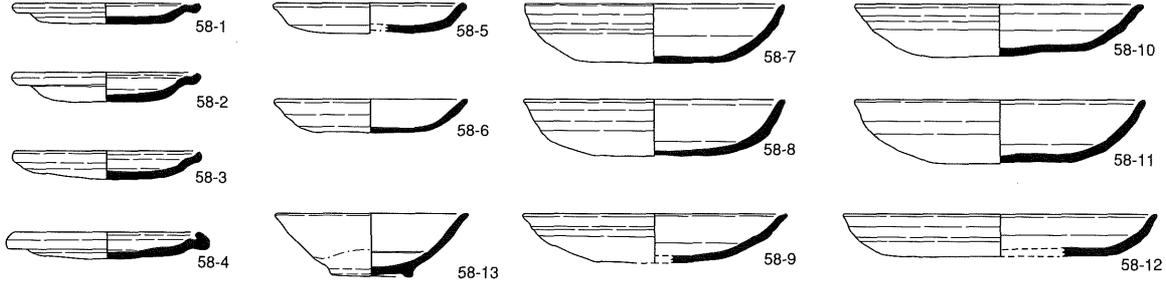


土壙 G 2990

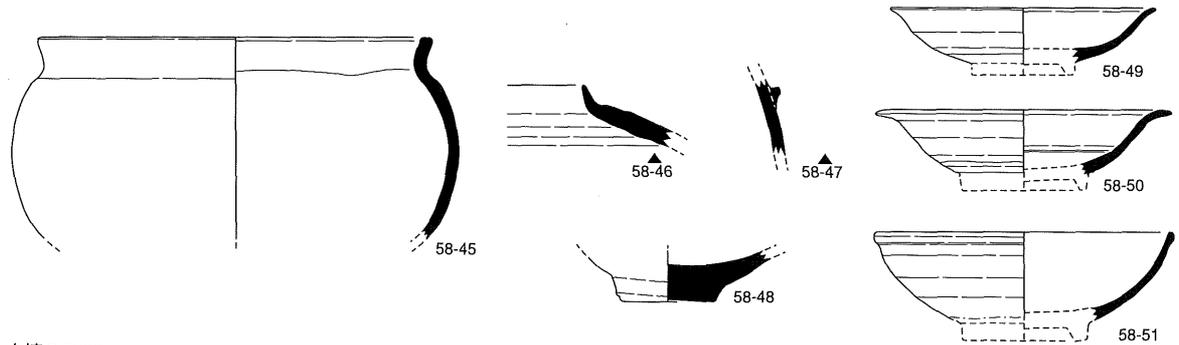
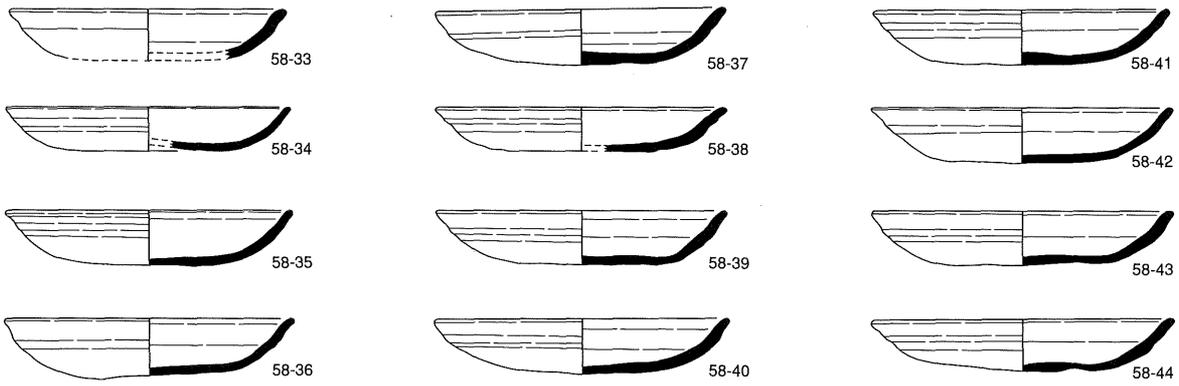
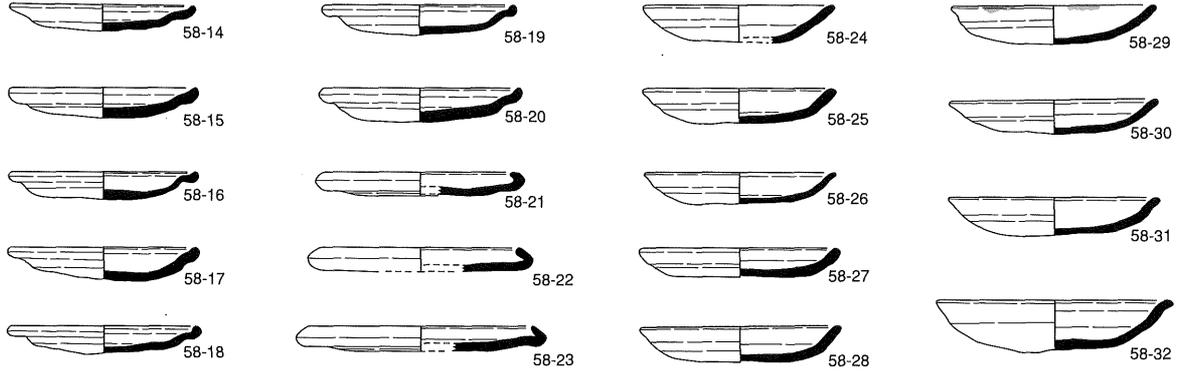


井戸 F 2510 粹内、井戸 F 2505、土壙 G 2990 出土土器実測図

井戸 G3068



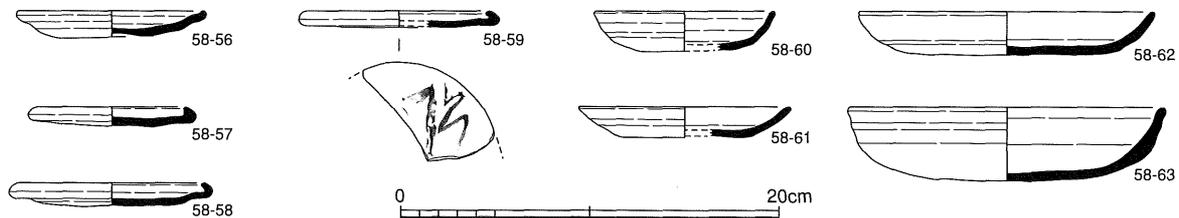
土壙 H842



土壙 G3660

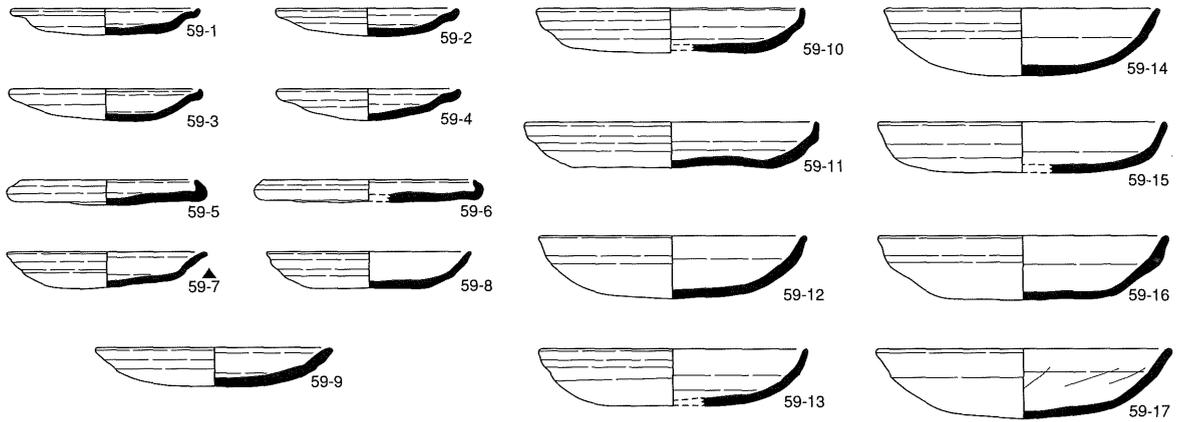


土壙 P247

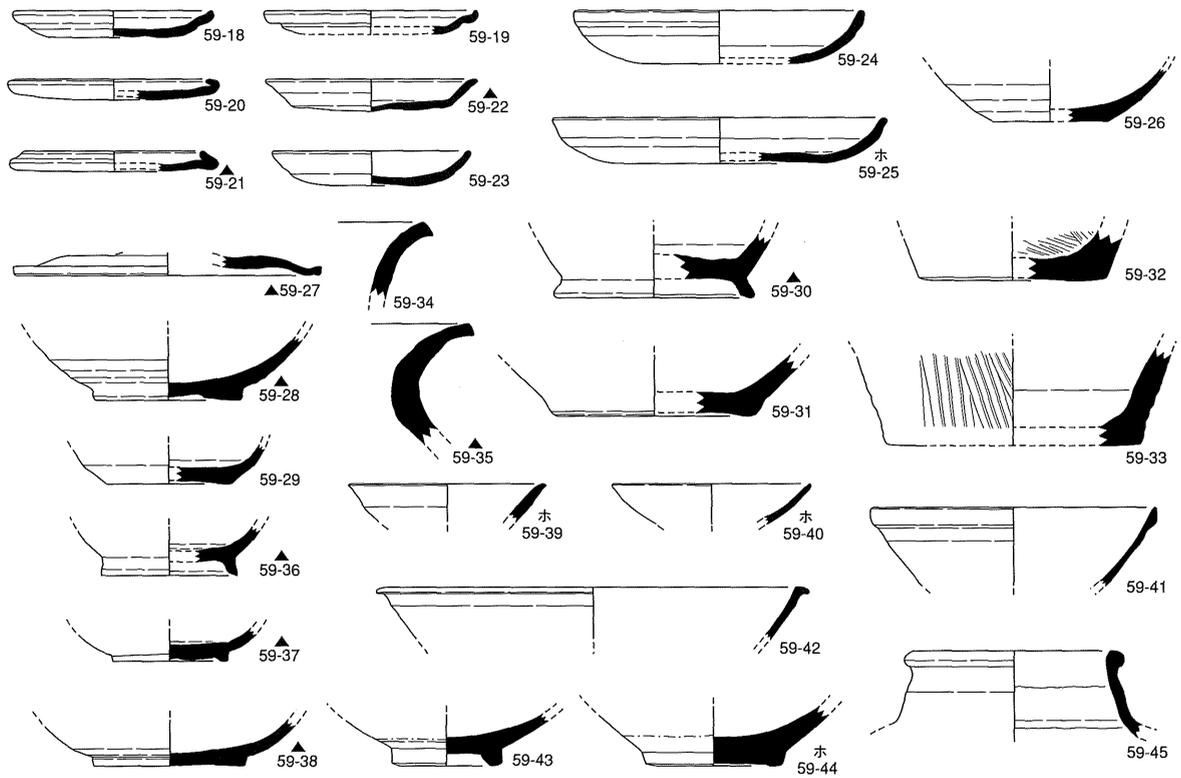


井戸 G3068、土壙 H842、土壙 G3660、土壙 P247出土土器実測図

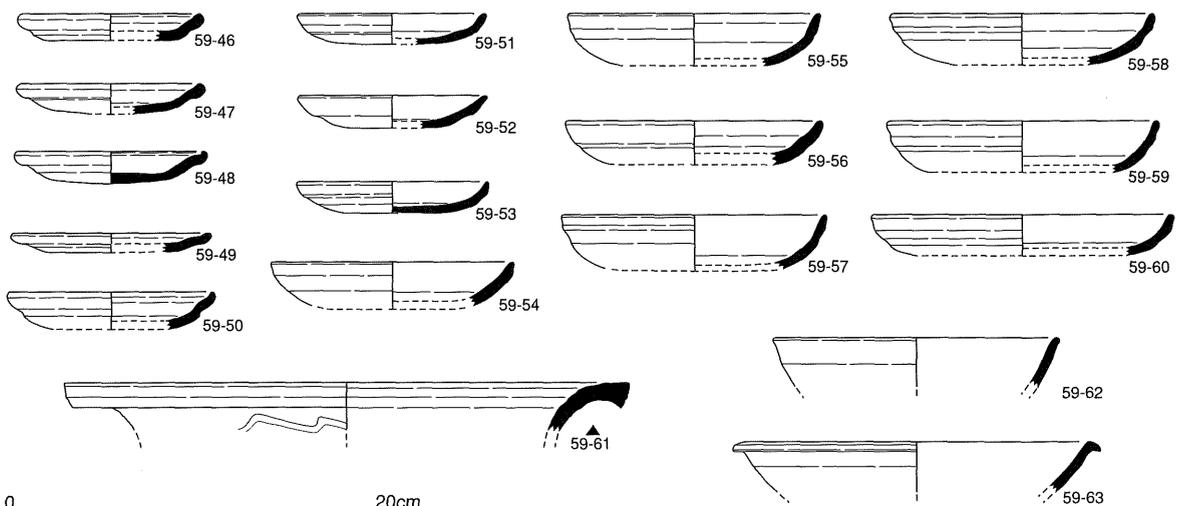
土壙 G 3290



井戸 B 1061



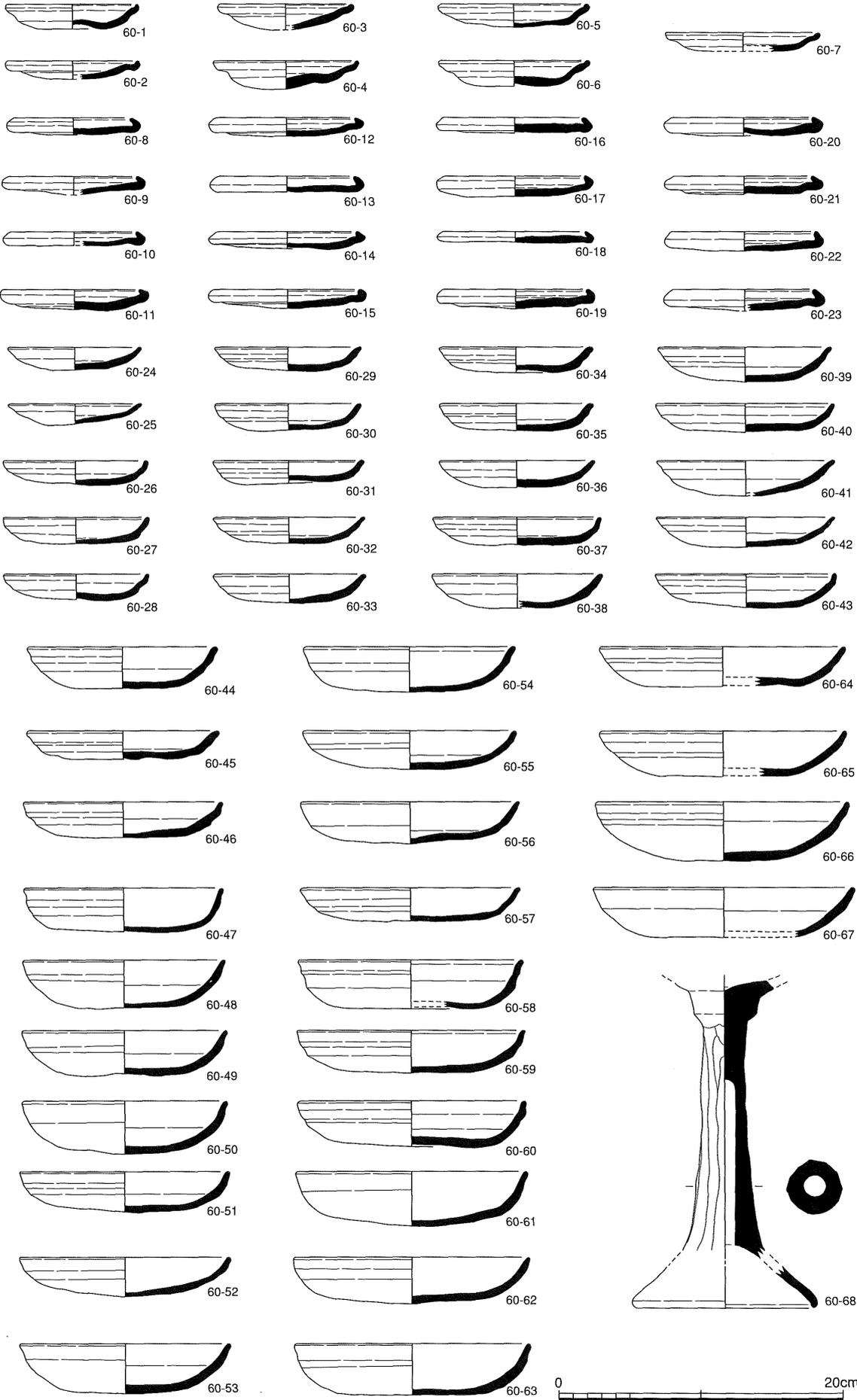
井戸 B 1068



0 20cm

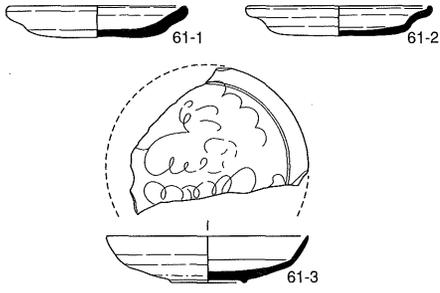
土壙 G 3290、井戸 B 1061、井戸 B 1068出土土器実測図

土壙 K 46



土壙 K 46出土土器実測図

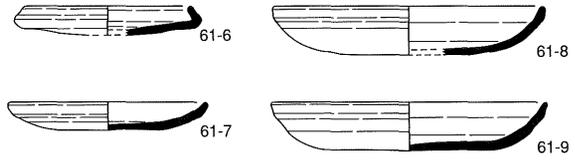
土壙 G 2407



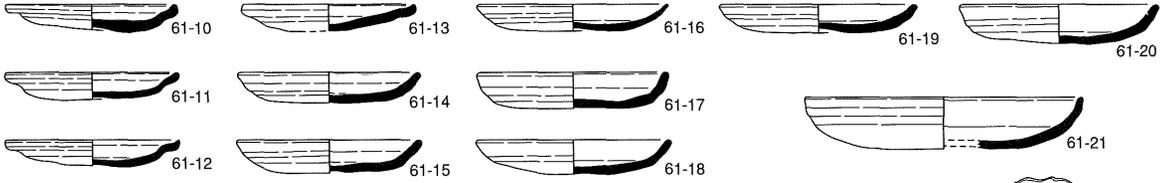
溝 E 864



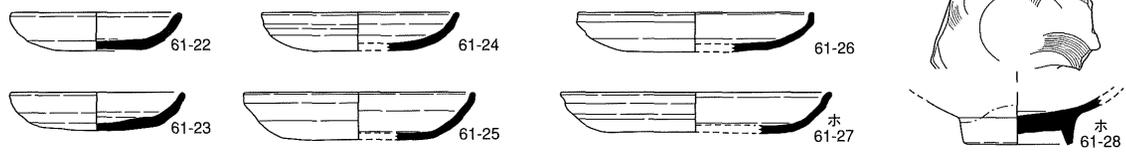
溝 G 3360



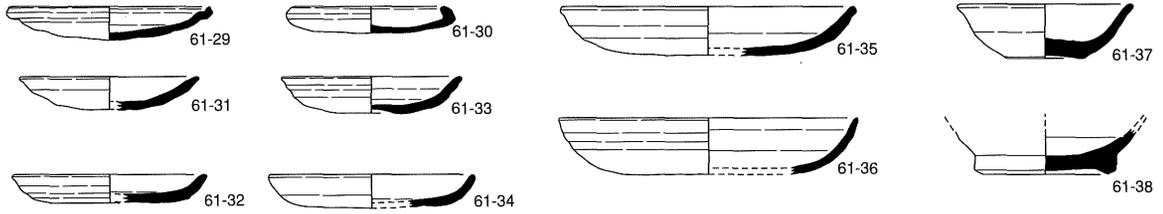
整地層 G 2500



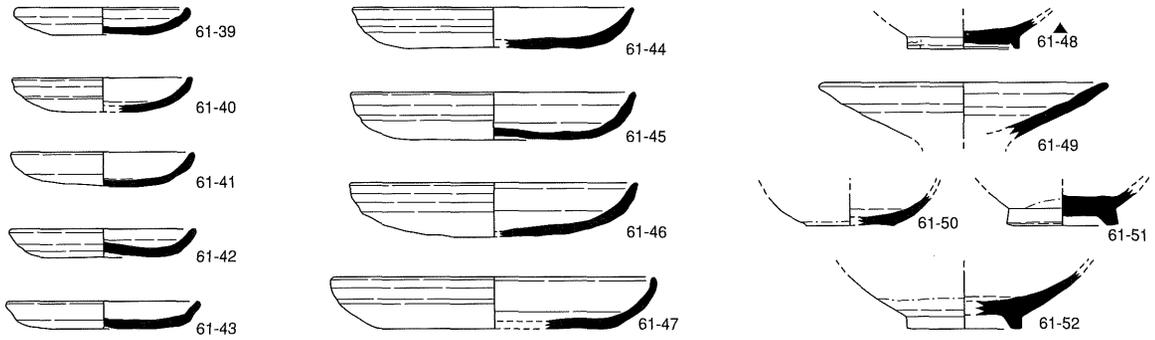
井戸 G 2462



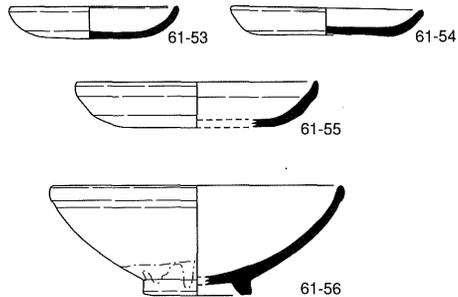
池 G 2940 下層



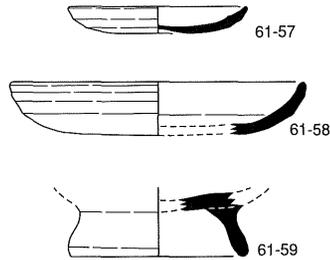
土壙 G 2405



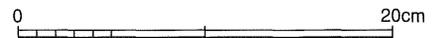
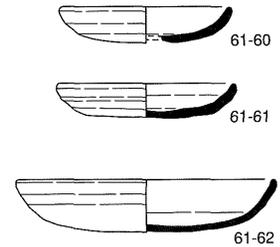
溝 E 858



土壙 G 2457

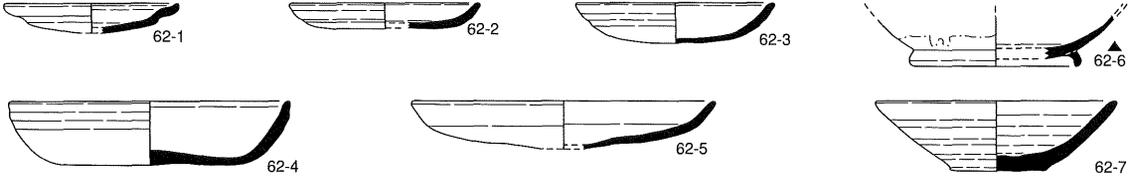


土壙 G 2973

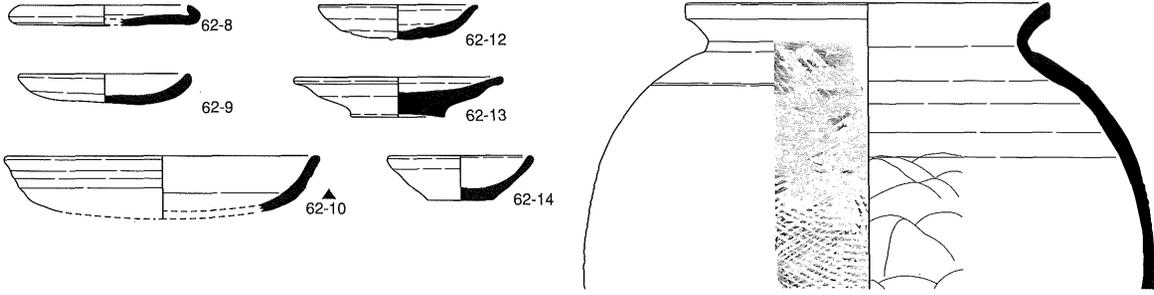


土壙 G 2407、溝 E 864、溝 G 3360、整地層 G 2500、井戸 G 2462、池 G 2940 下層、土壙 G 2405、溝 E 858、土壙 G 2457、土壙 G 2973 出土土器実測図

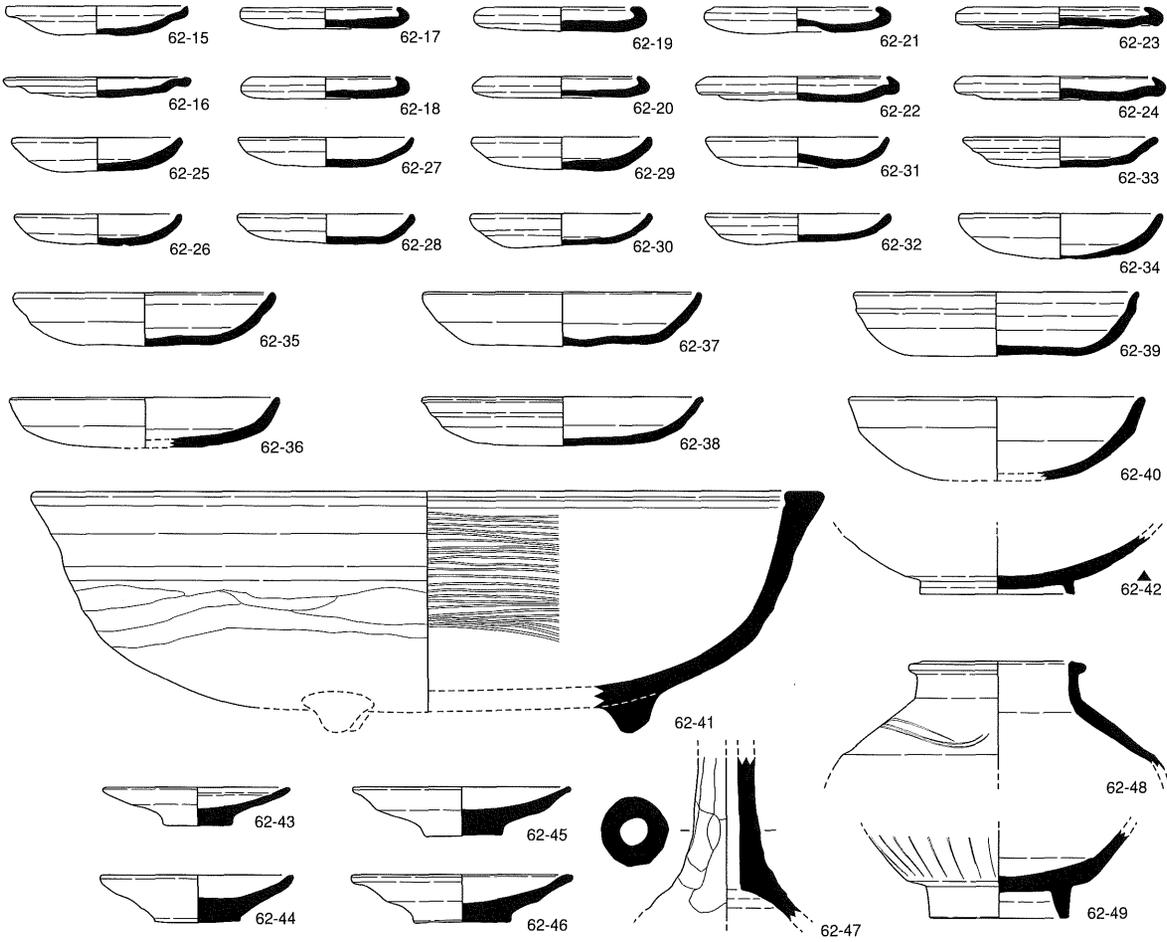
土壙 G 2498



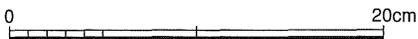
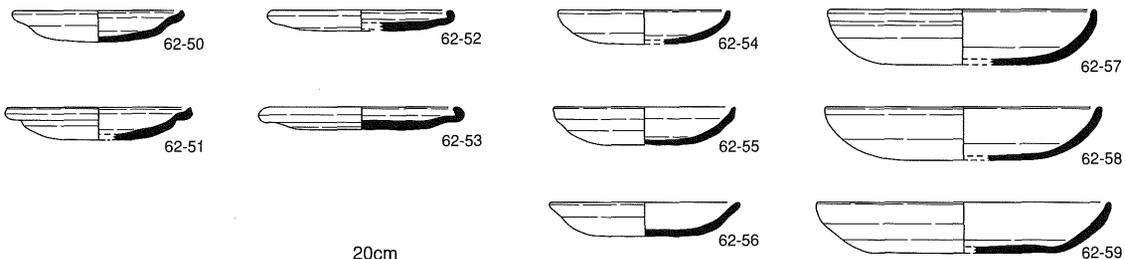
土壙 P 242



池 G 2940 (P区)

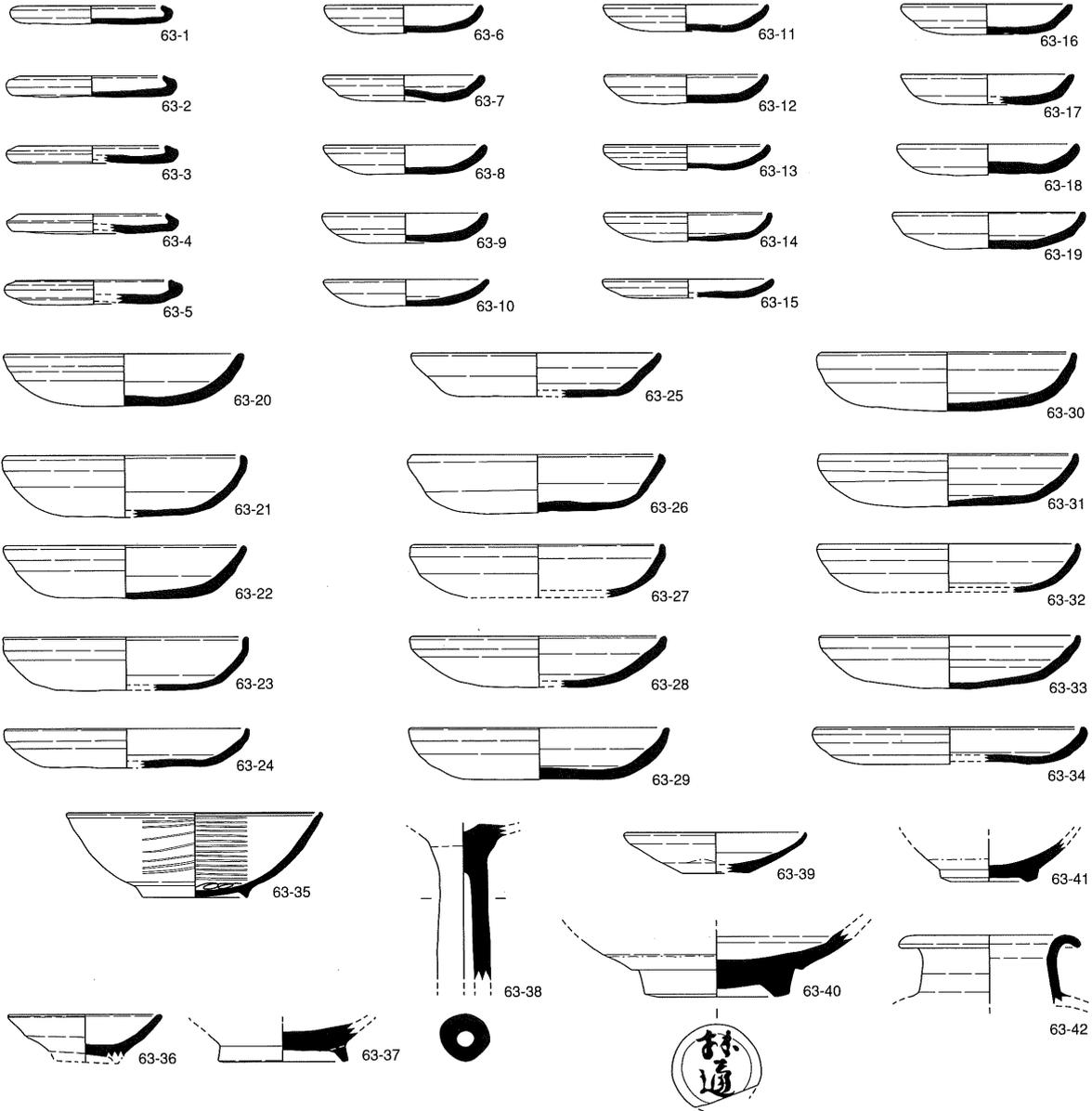


池 G 2940 上層

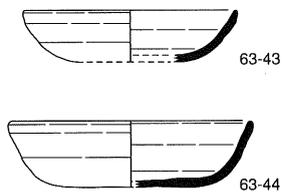


土壙 G 2498、土壙 P 242、池 G 2940 (P区)、池 G 2940上層出土土器実測図

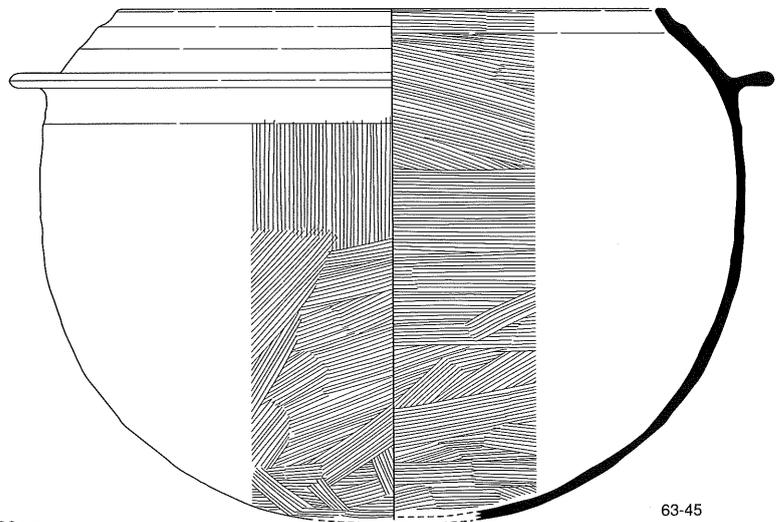
溝 C 1226



土壙 P 108

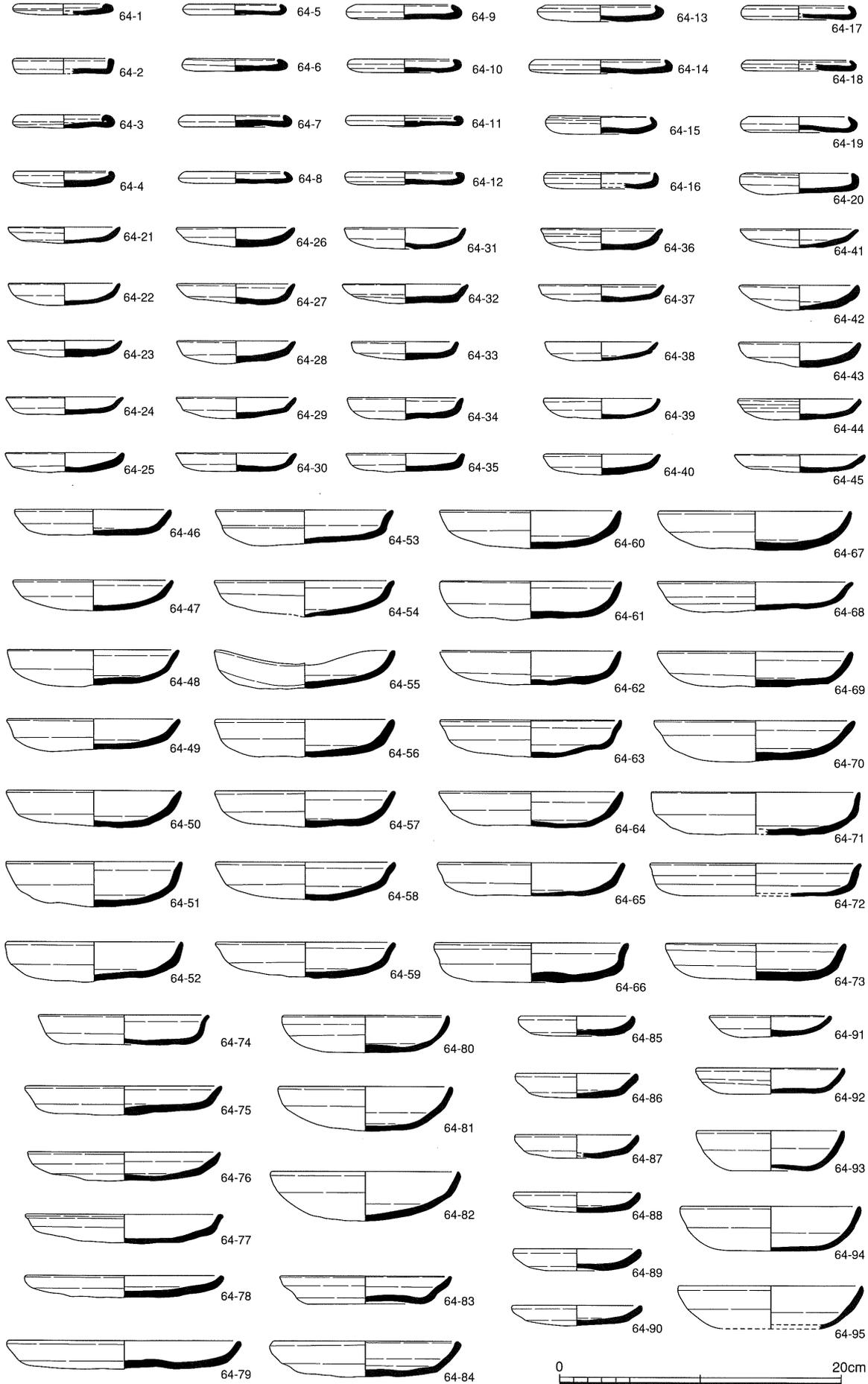


土壙 G 3373

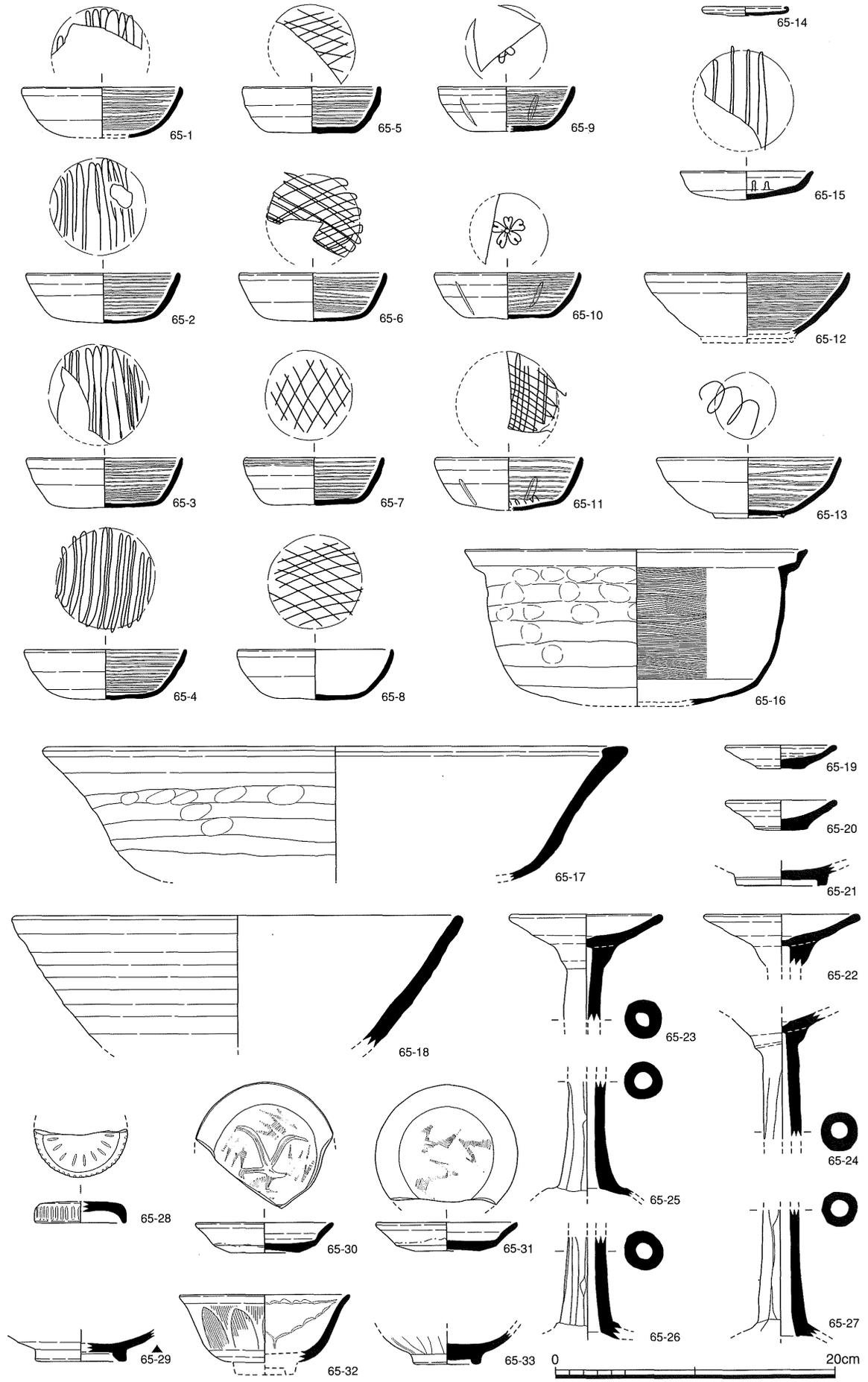


溝 C 1226、土壙 P 108、土壙 G 3373出土土器実測図

溝 P 124

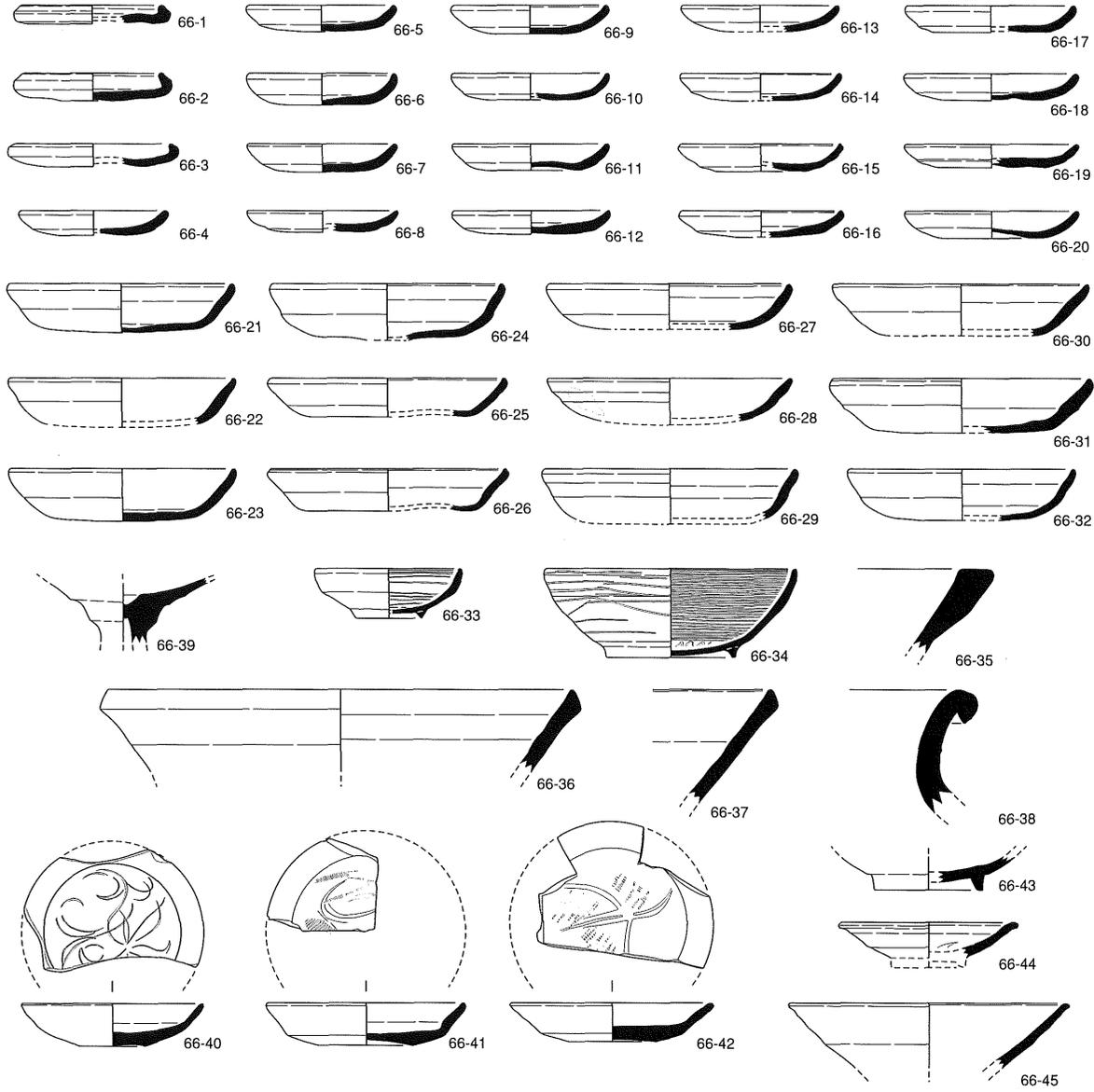


溝 P 124出土土器実測図 1

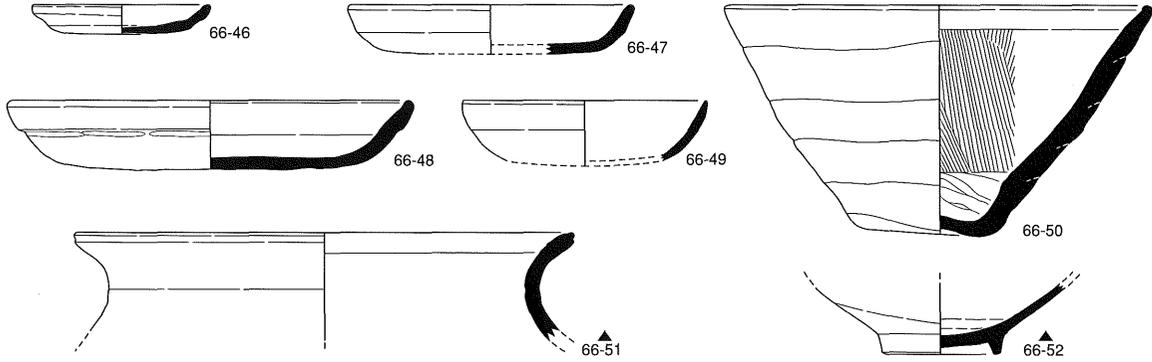


溝 P 124出土土器実測図 2

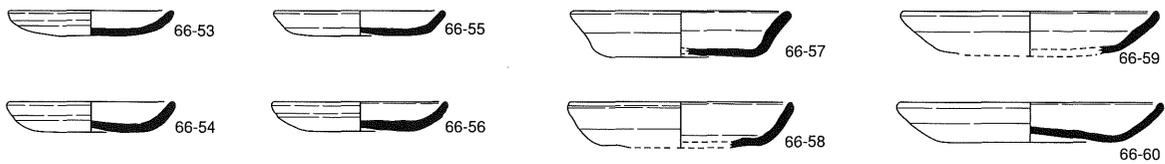
井戸 E 743



井戸 A 309

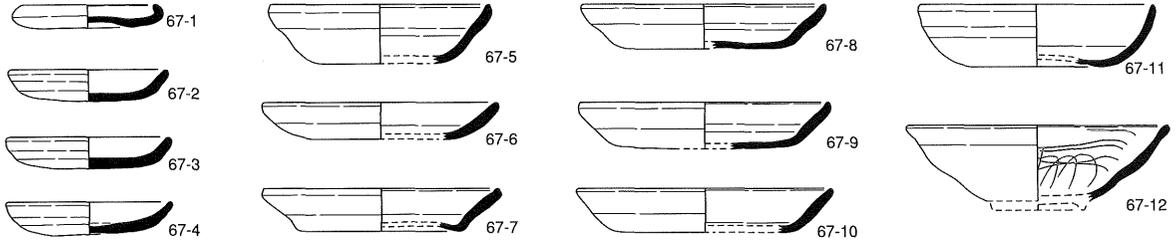


土壇 E 734

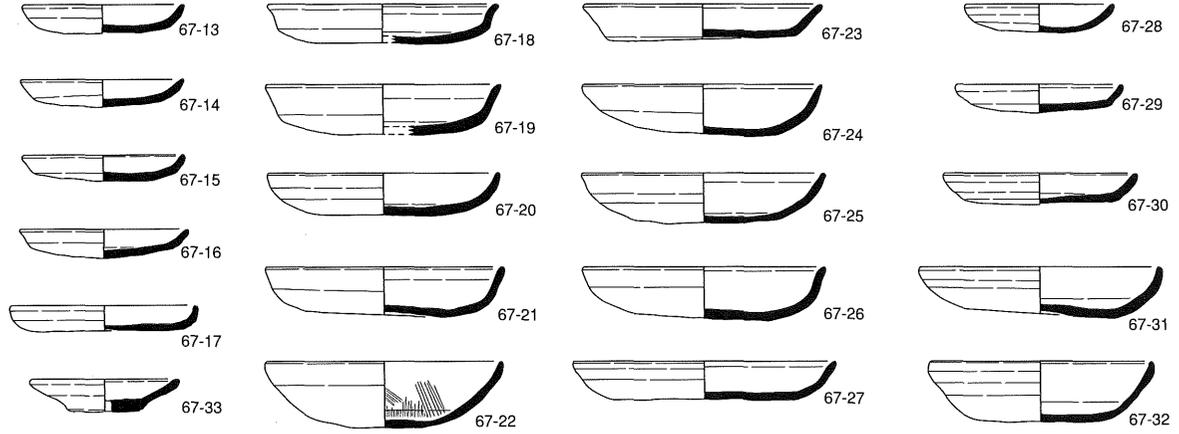


井戸 E 743、井戸 A 309、土壇 E 734出土土器実測図

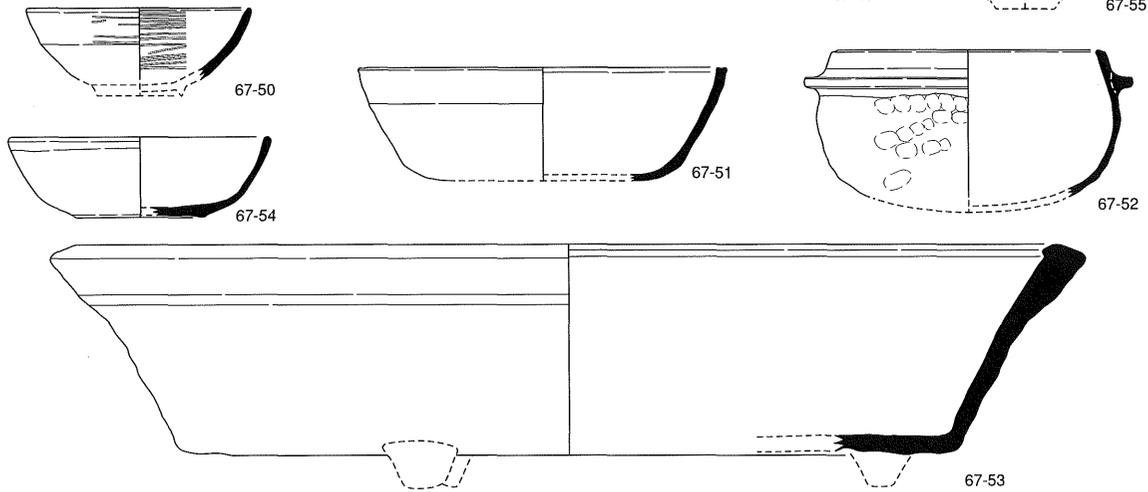
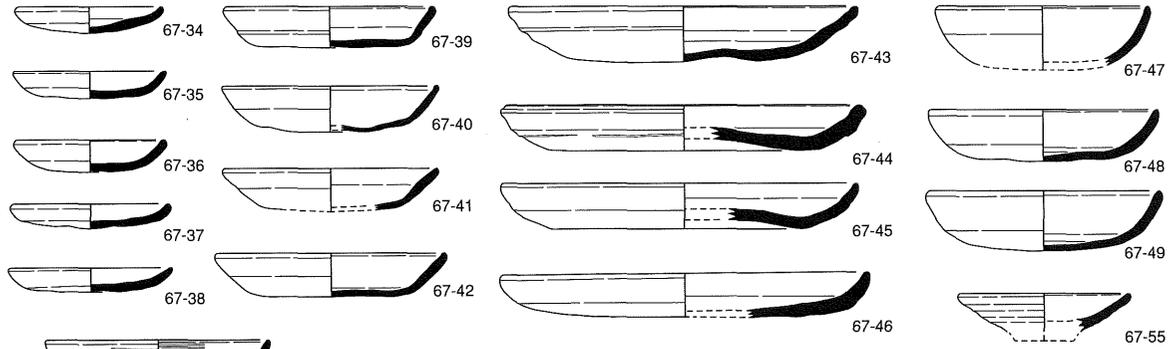
土壙 E 738



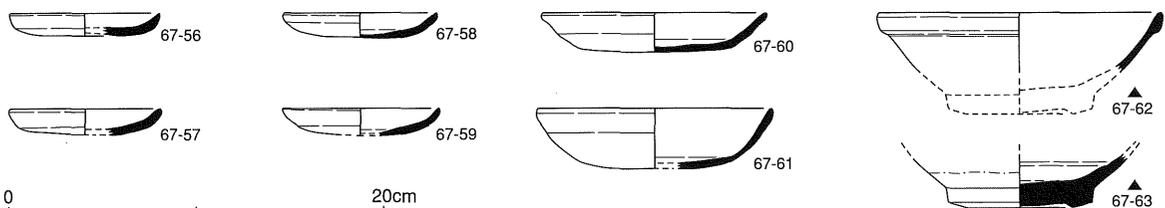
土壙 G 3300



井戸 L 31



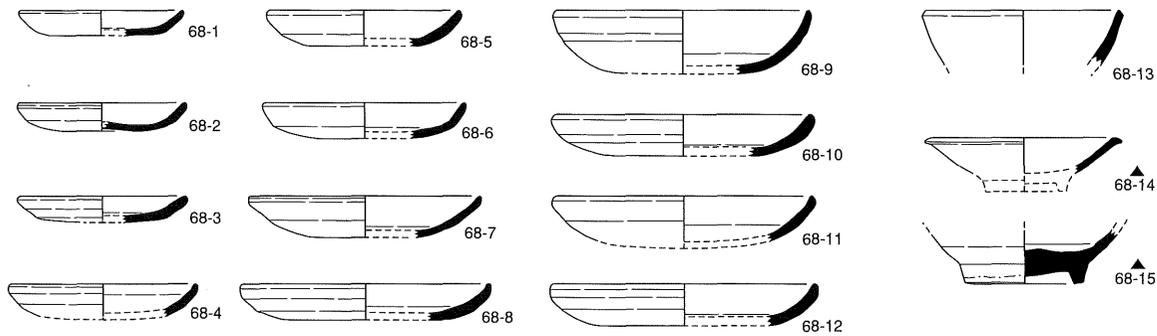
土壙 G 2477



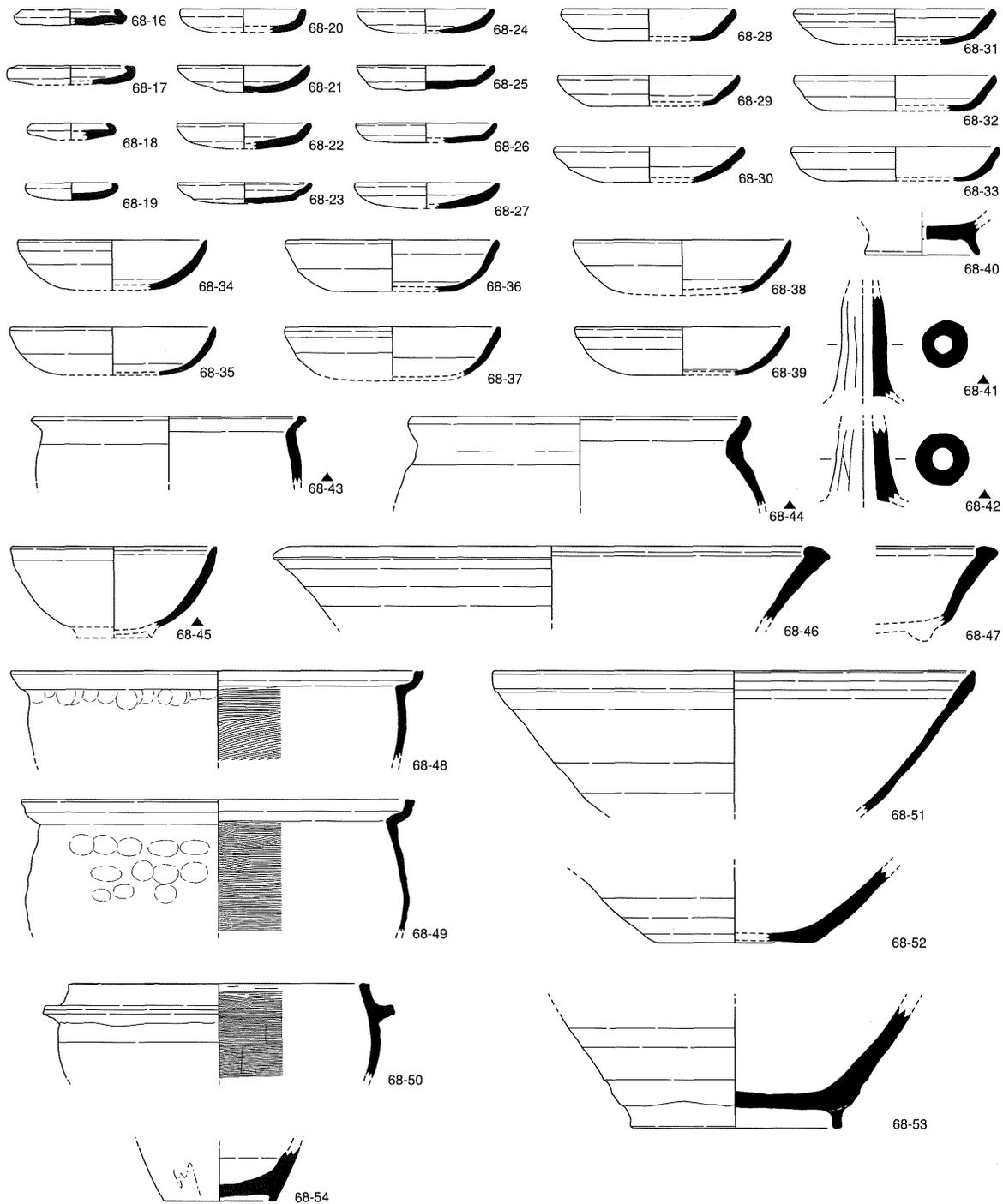
0 20cm

土壙 E 738、土壙 G 3300、井戸 L 31、土壙 G 2477出土土器実測図

溝 F 2503

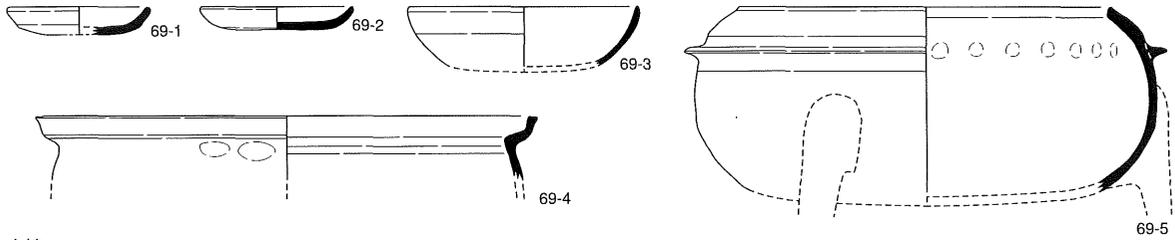


土壙 F 2600

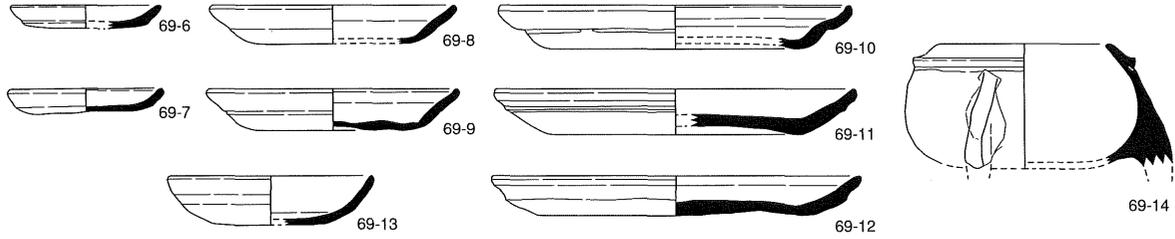


溝 F 2503、土壙 F 2600出土土器実測図

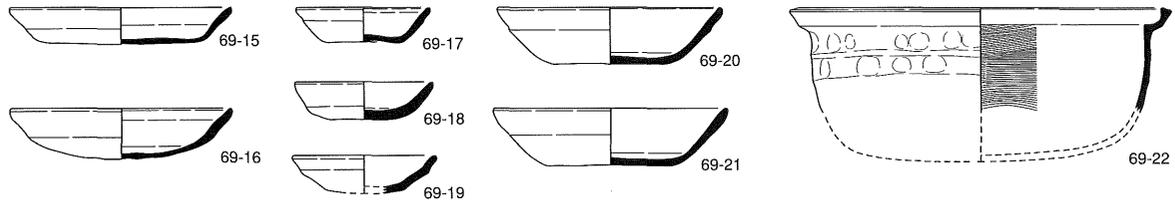
土壙 E 763



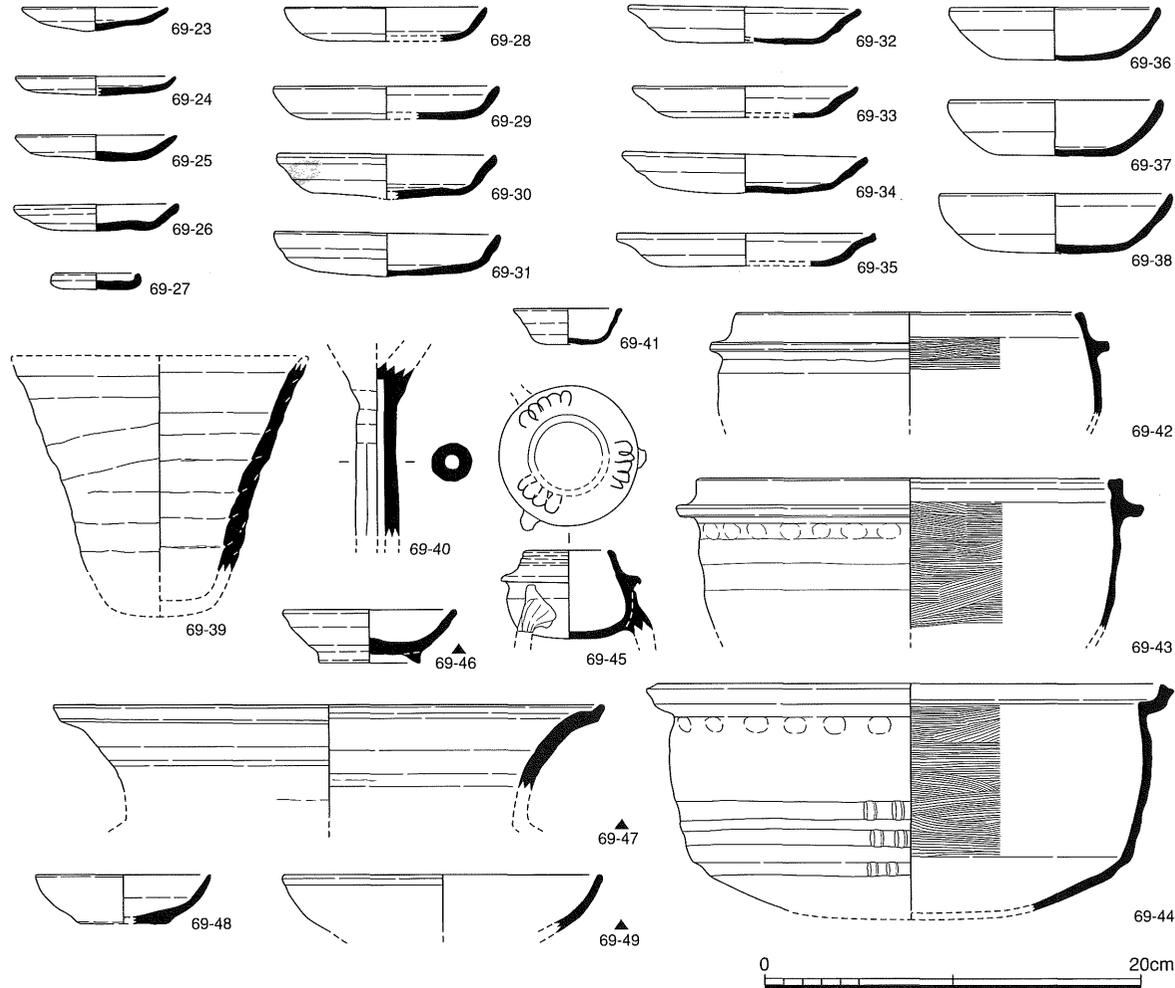
土壙 L 28



溝 G 1938

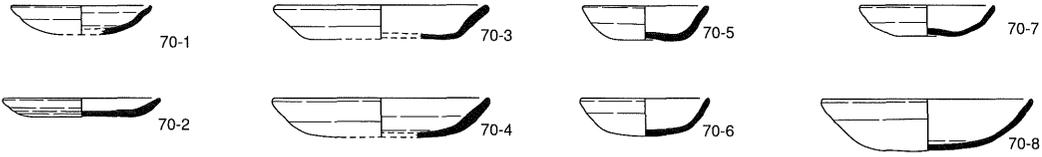


土壙 B 1037

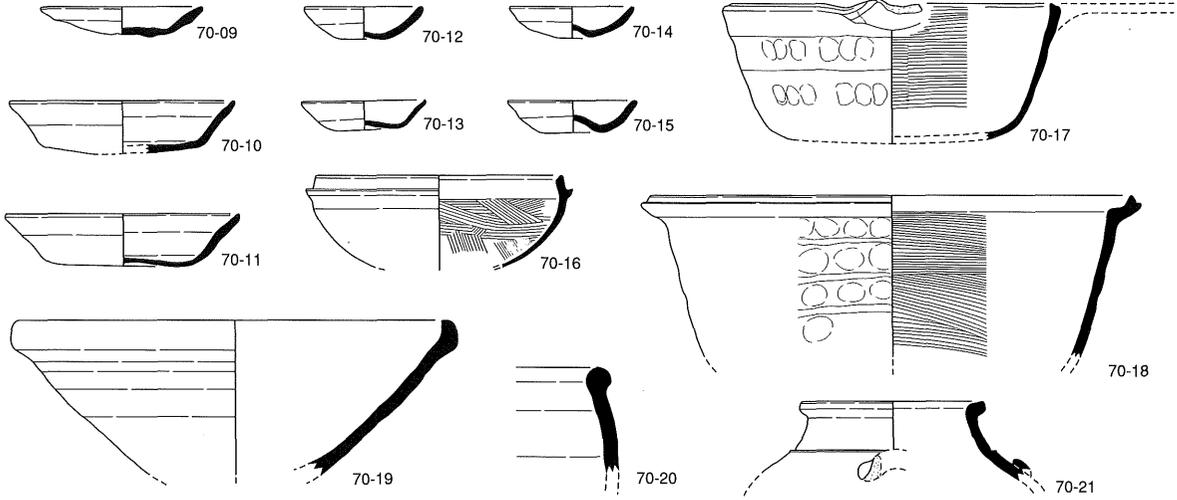


土壙 E 763、土壙 L 28、溝 G 1938、土壙 B 1037出土土器実測図

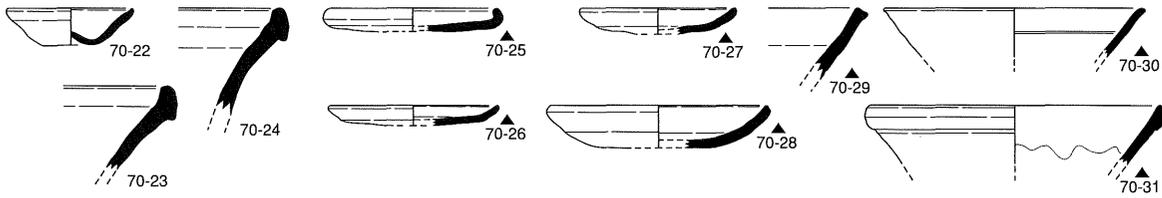
土壙 G2712



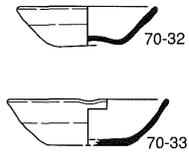
土壙 G2126



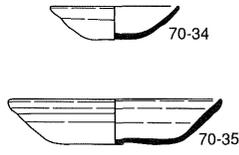
溝 E 785



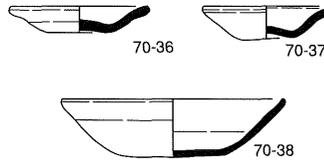
土壙 G2073



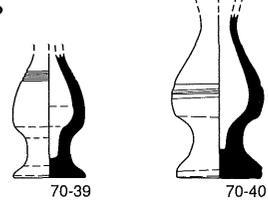
土壙 G1897



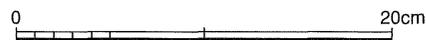
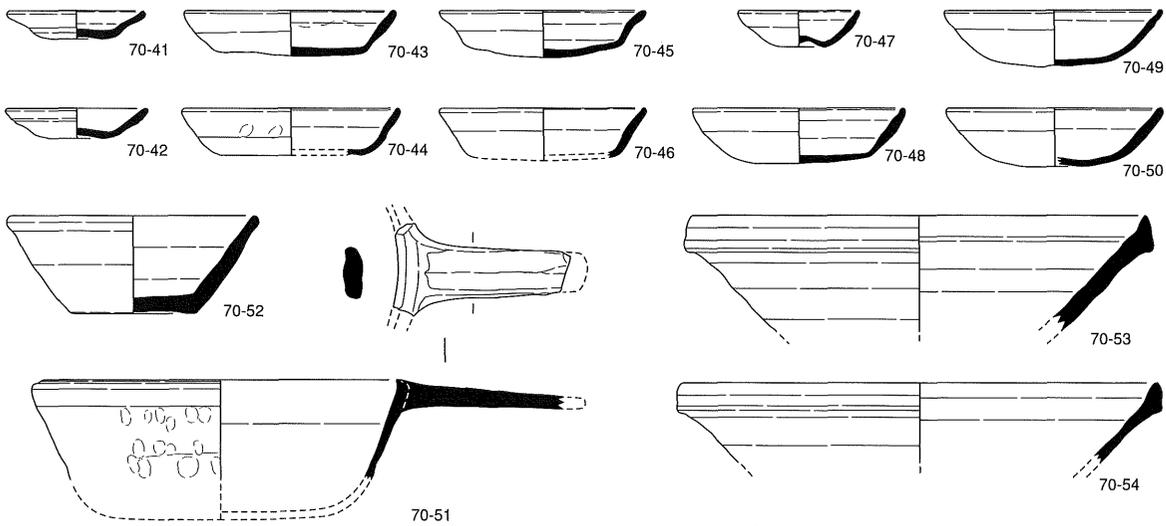
土壙 G2125



土壙 G2207

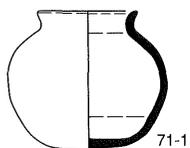


土壙 H723

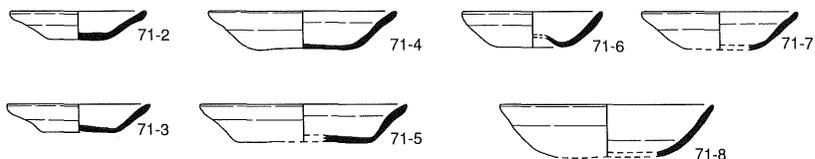


土壙 G2712、土壙 G2126、溝 E 785、土壙 G2073、土壙 G1897、土壙 G2125、土壙 G2207、土壙 H723 出土土器実測図

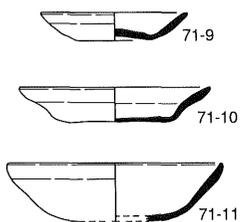
土壙G1874



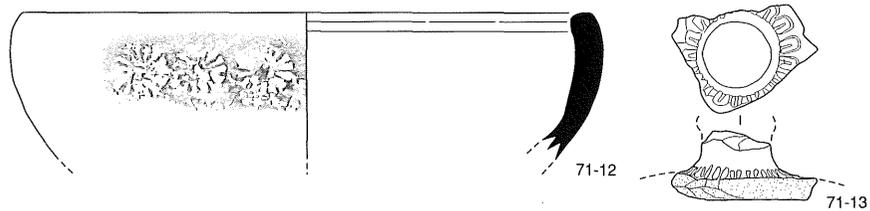
土壙D491



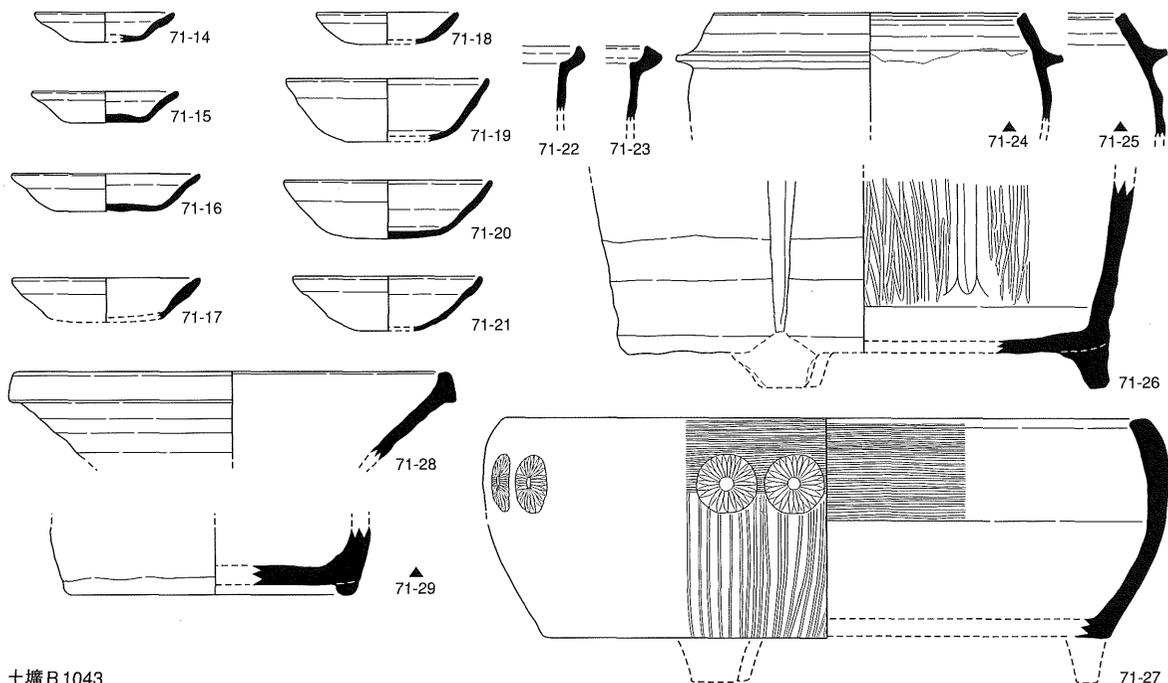
土壙C917



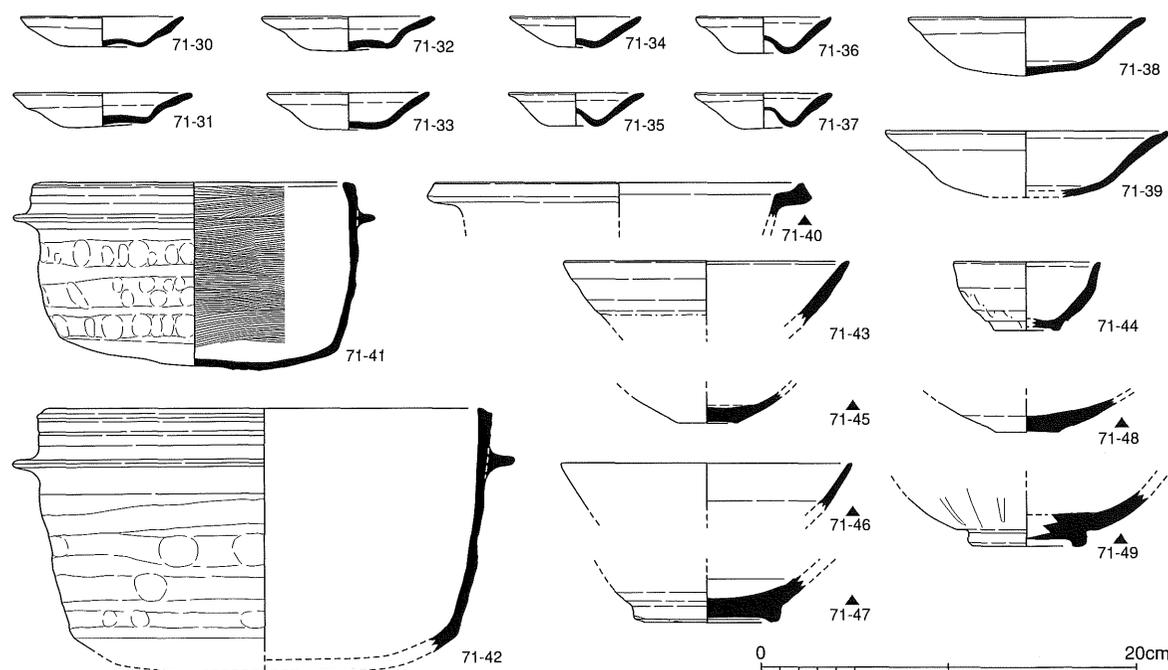
土壙C756B



井戸B918

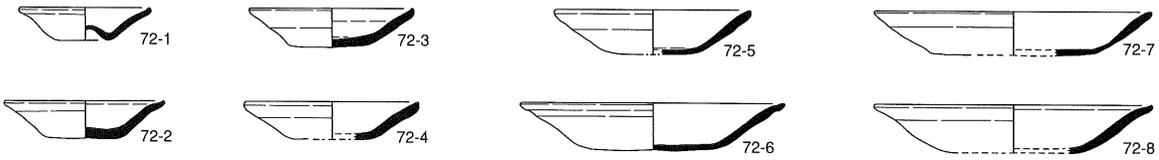


土壙B1043

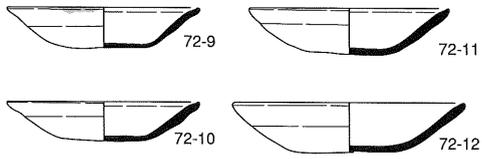


土壙G1874、土壙D491、土壙C917、土壙C756B、井戸B918、土壙B1043出土土器実測図

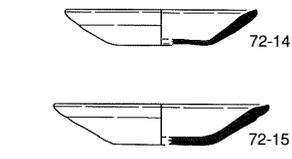
溝 J 179



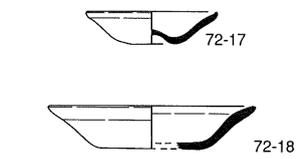
土壙 G 3097



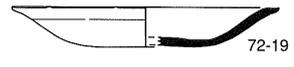
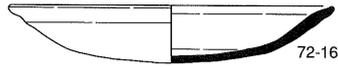
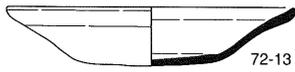
土壙 J 92



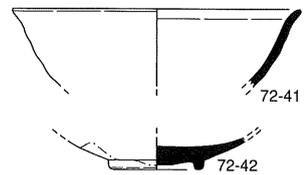
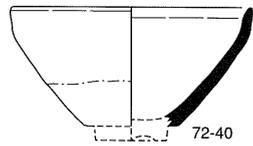
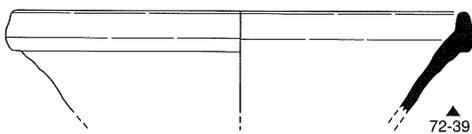
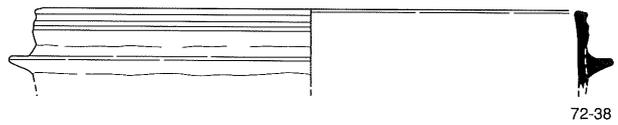
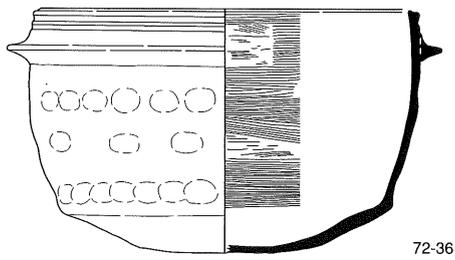
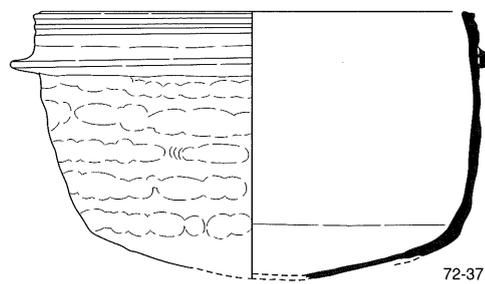
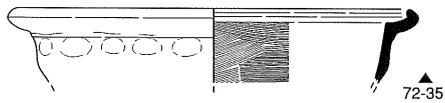
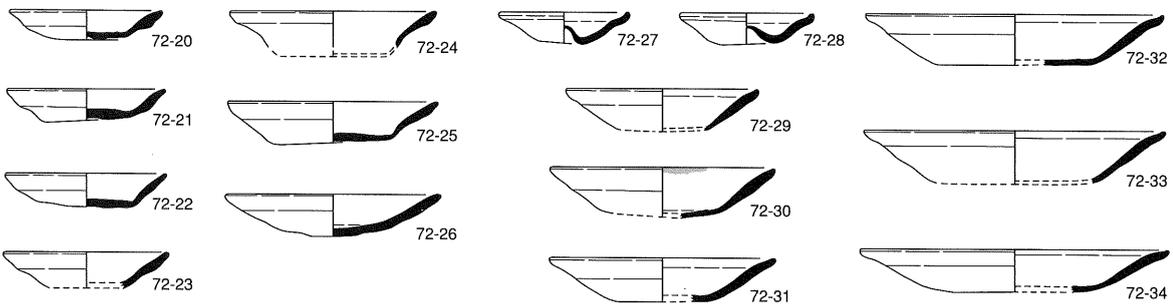
土壙 G 2234



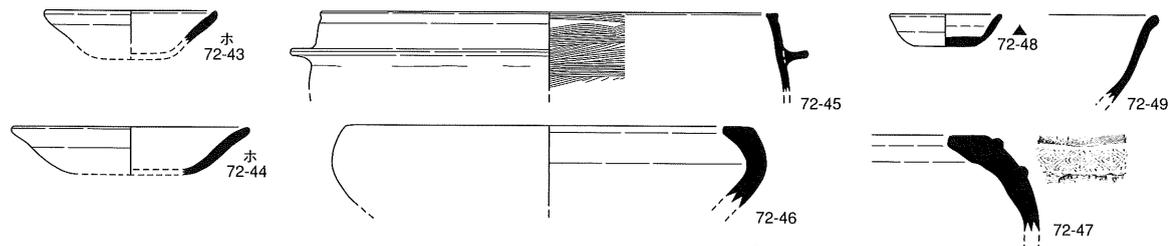
土壙 J 168



土壙 E 753

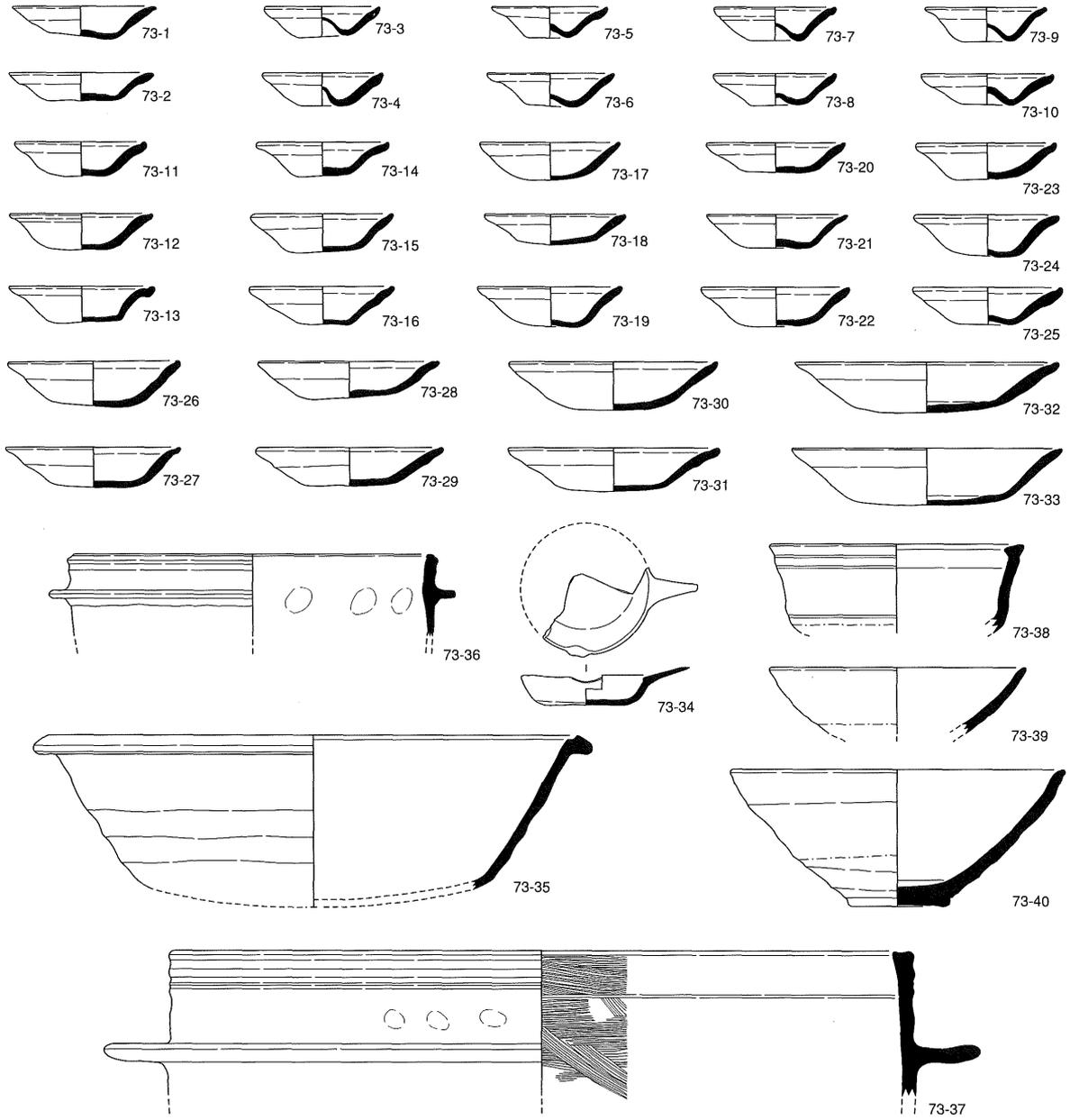


井戸 E 400

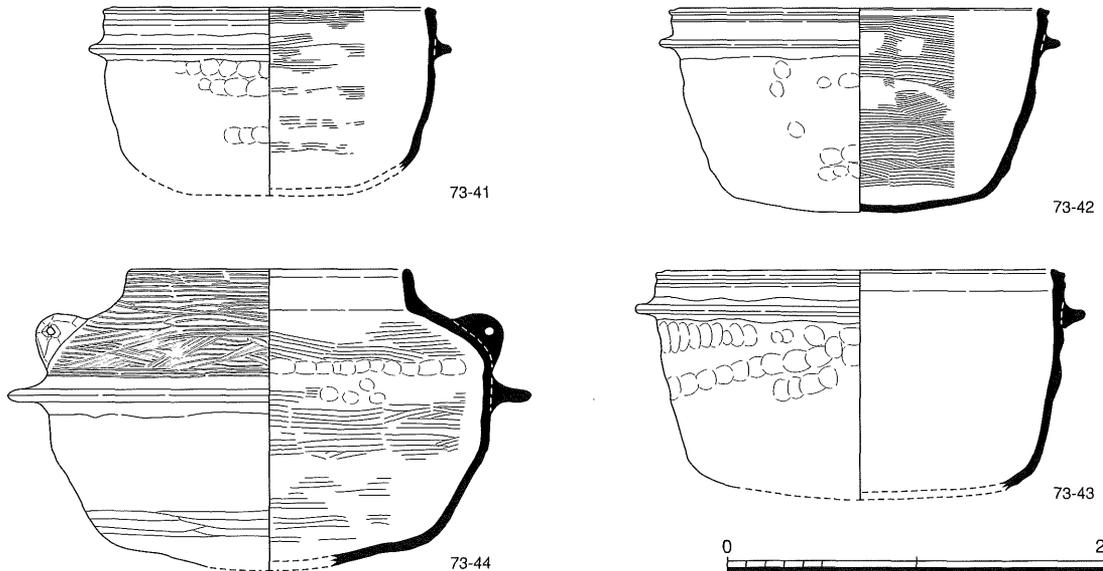


溝 J 179、土壙 G 3097、土壙 J 92、土壙 G 2234、土壙 J 168、土壙 E 753、井戸 E 400出土土器実測図

土壙 A359

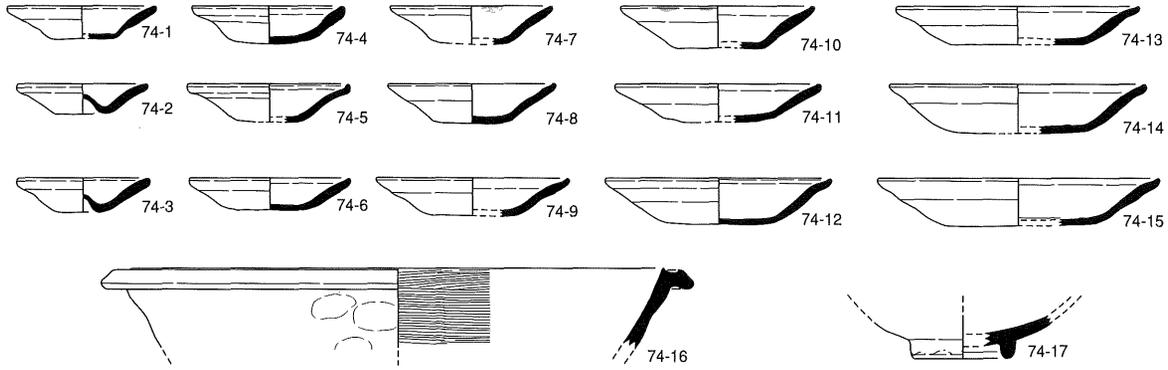


土壙 E 729

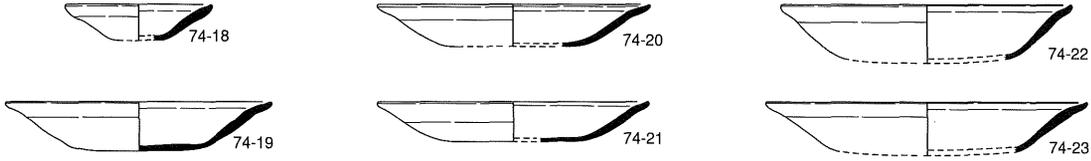


土壙 A359、土壙 E 729出土土器実測図

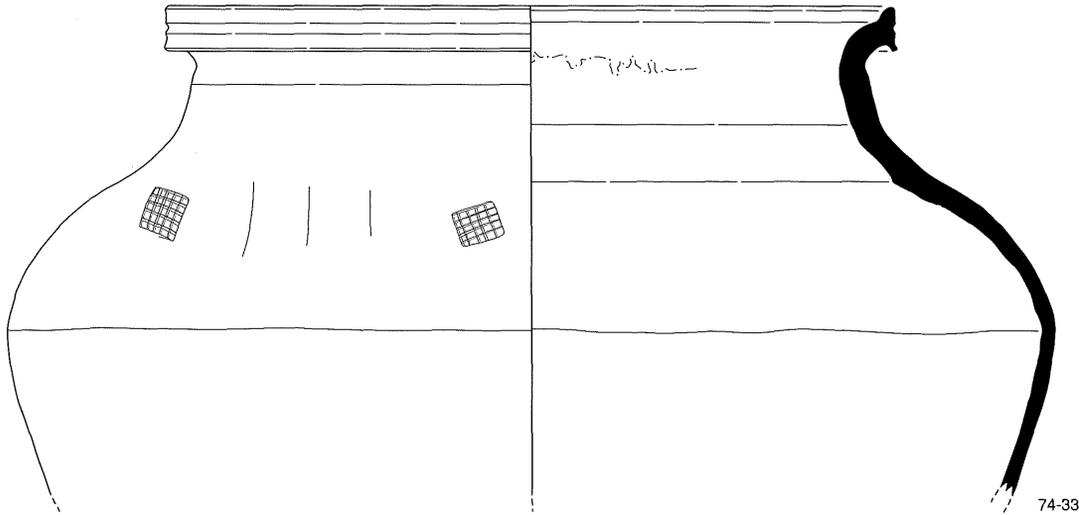
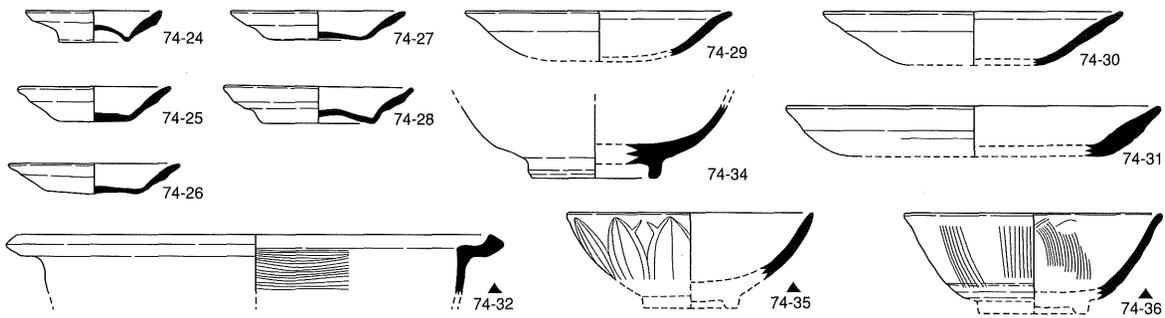
土壙 G 2897



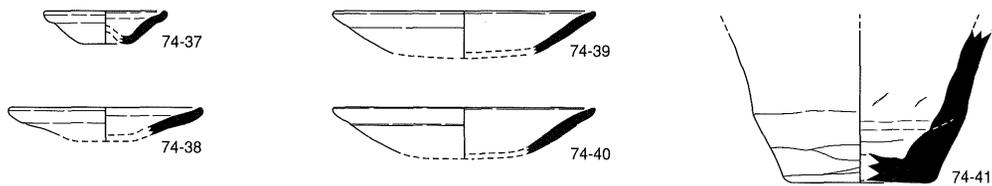
土壙 G 2631



土壙 B 992

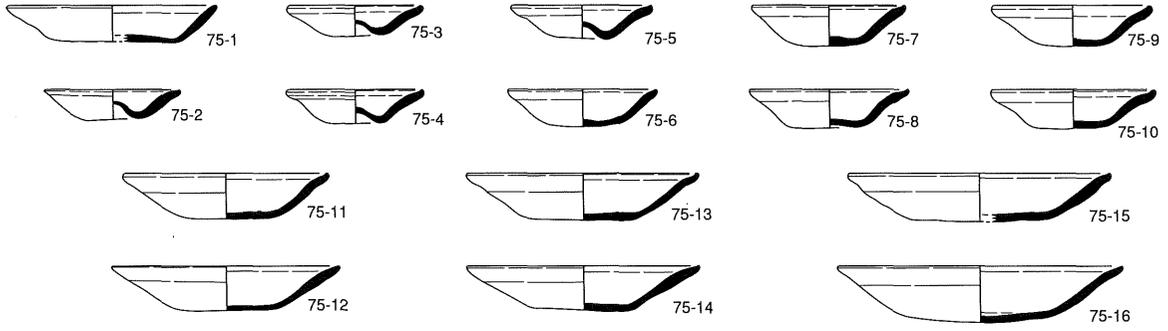


井戸 B 917

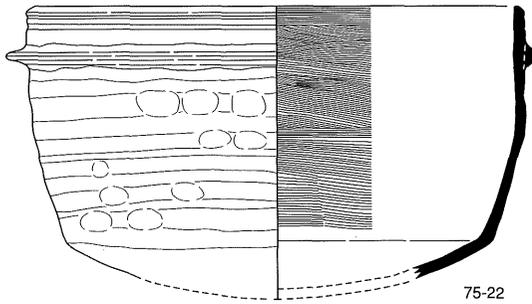
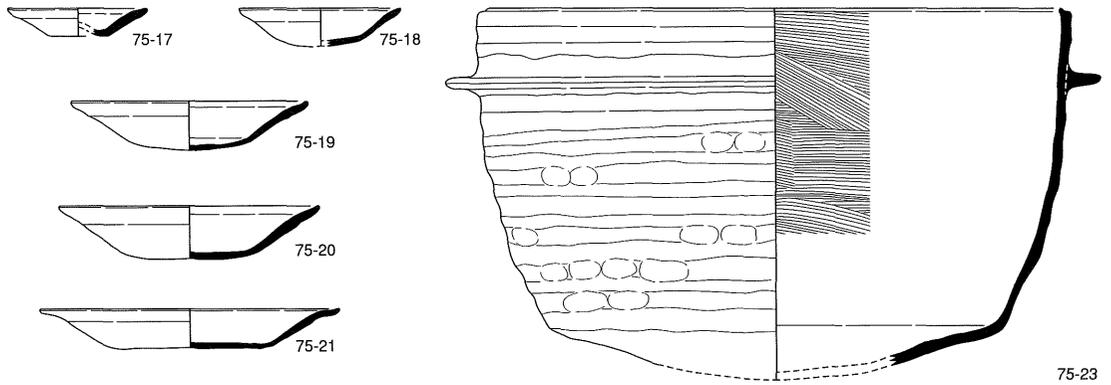


土壙 G 2897、土壙 G 2631、土壙 B 992、井戸 B 917出土土器実測図

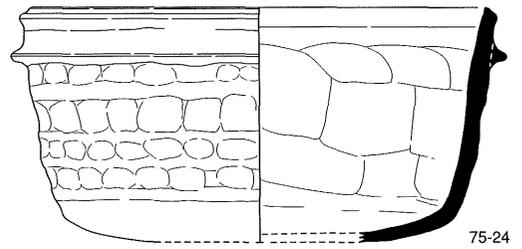
土壙 G2083



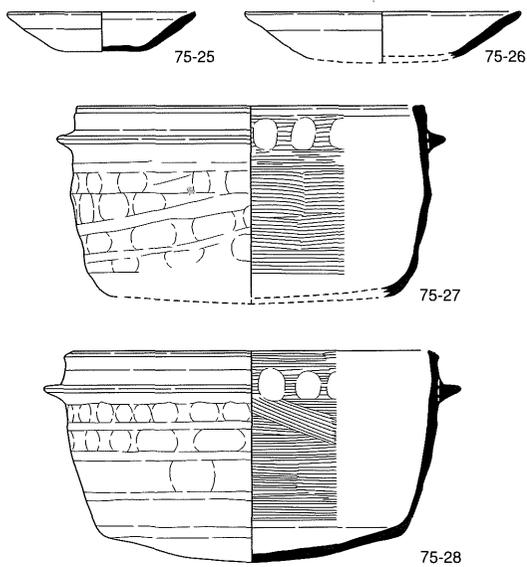
土壙 C777



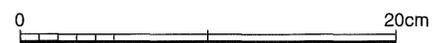
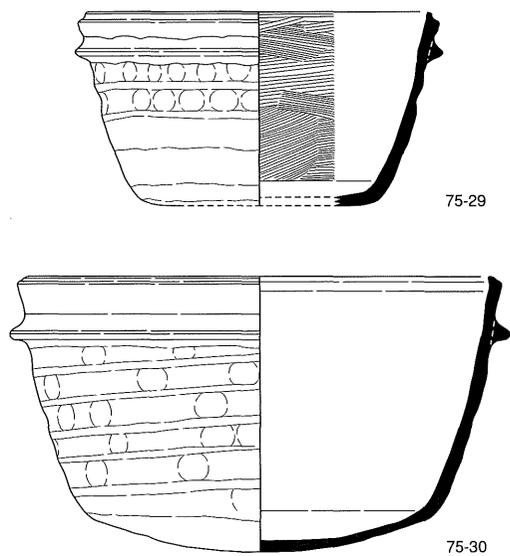
土壙 G2877



井戸 G2555

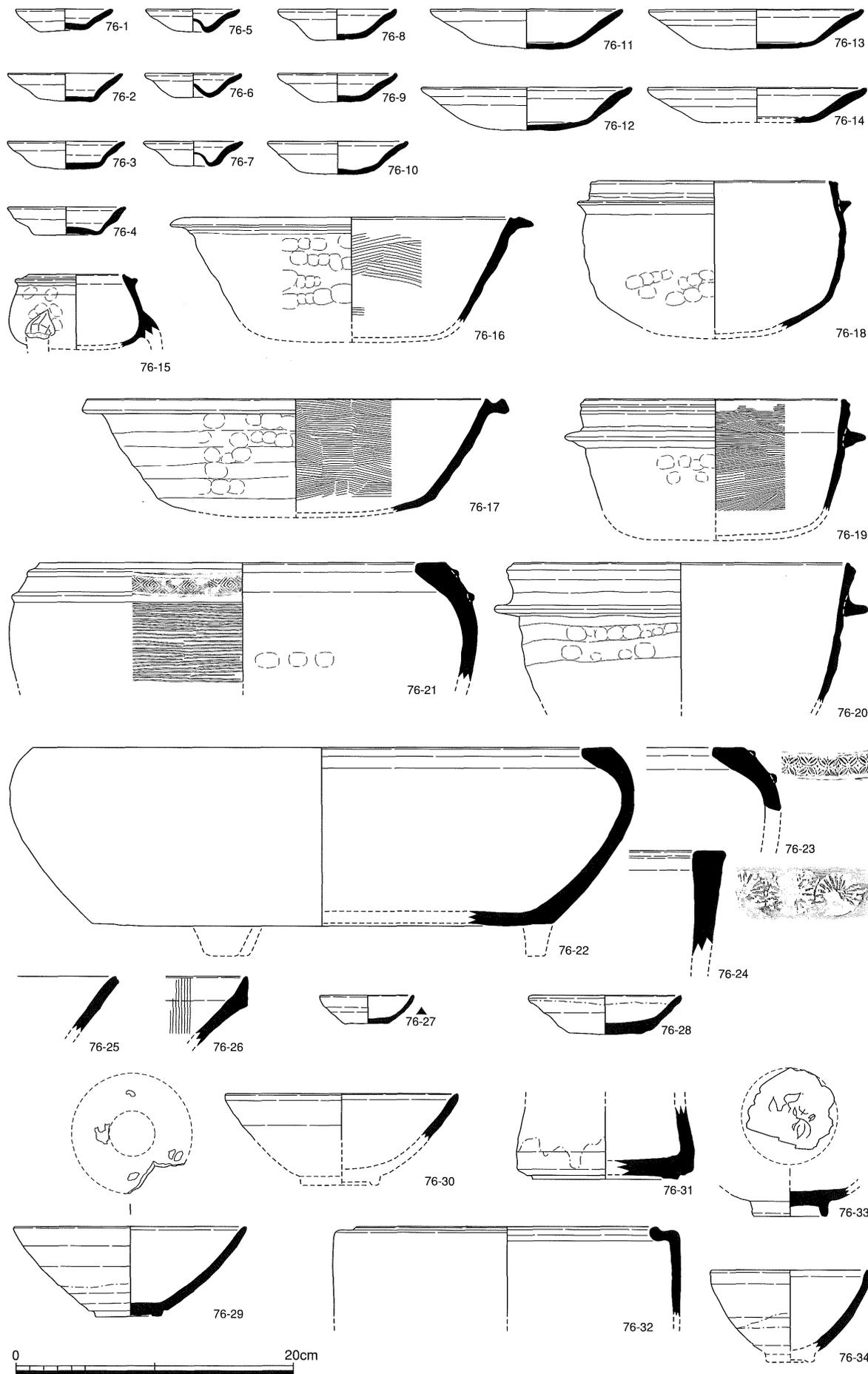


土壙 G2736



土壙 G2083、土壙 C777、土壙 G2877、井戸 G2555、土壙 G2736出土土器実測図

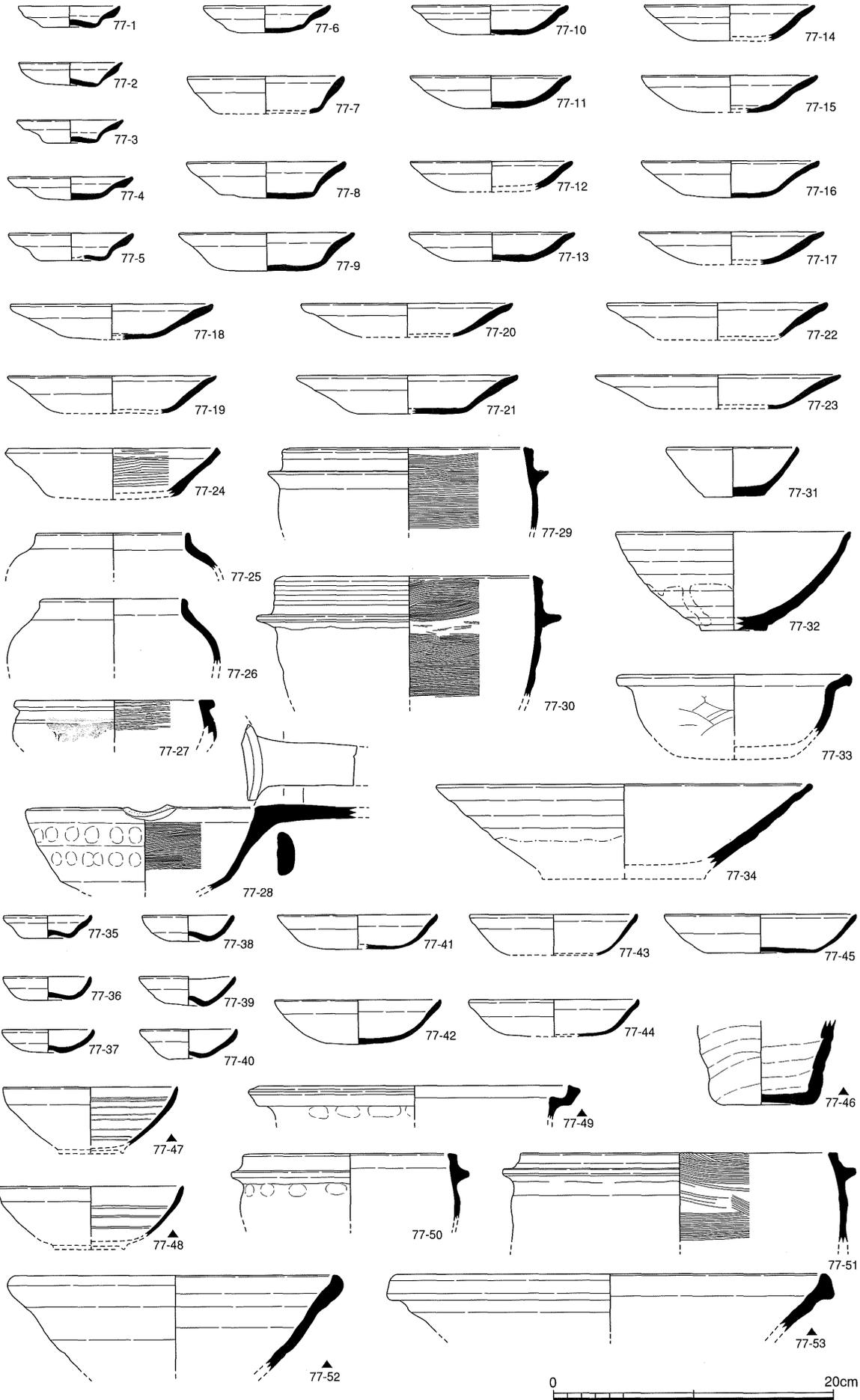
溝 F 2410



溝 F 2410出土土器実測図

土壙B1035

圖版七七
遺物

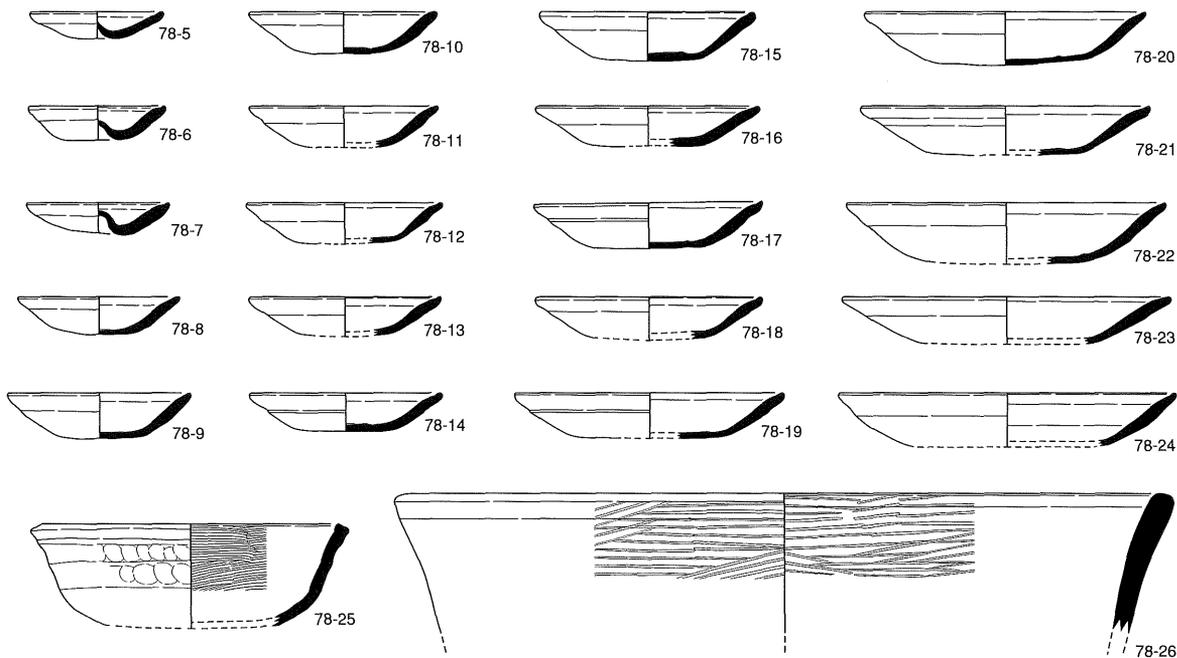


土壙B1035出土土器実測図

土壙 G2318



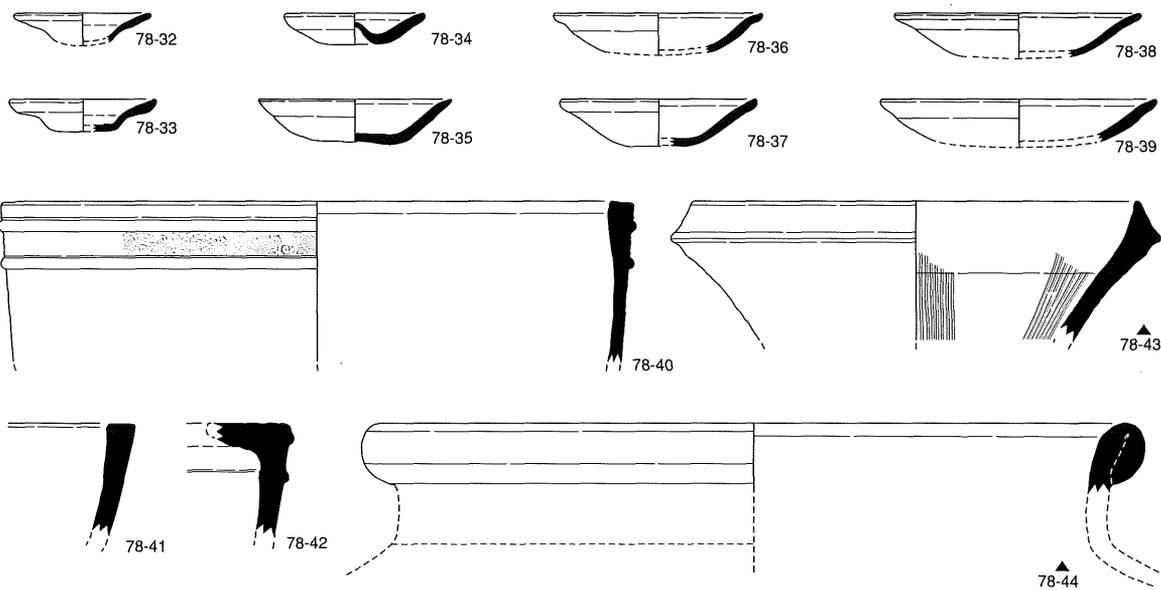
集石 H555



地業 H666



井戸 B916

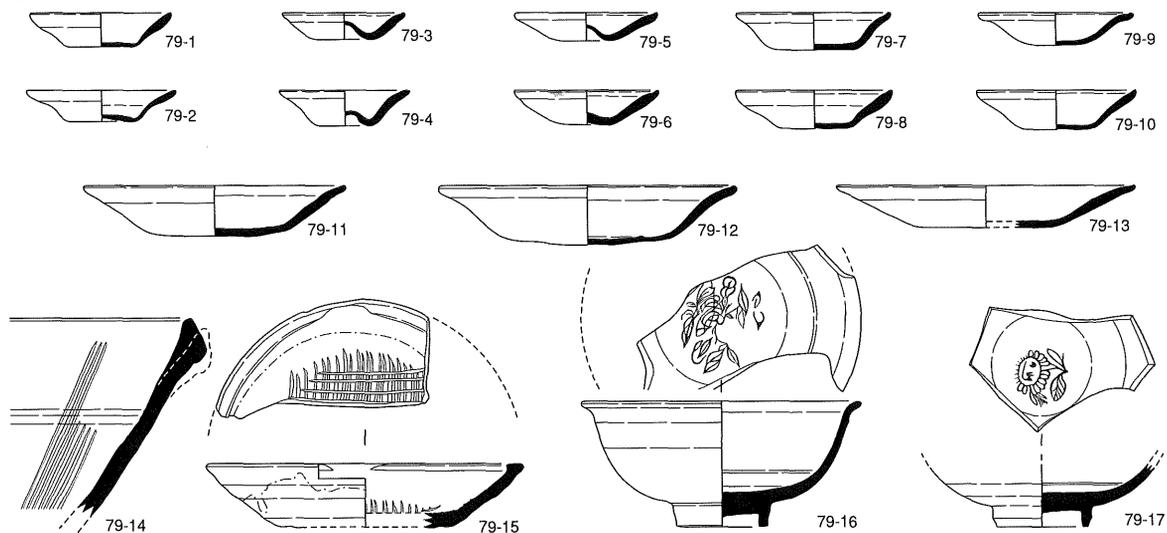


土壙 J175

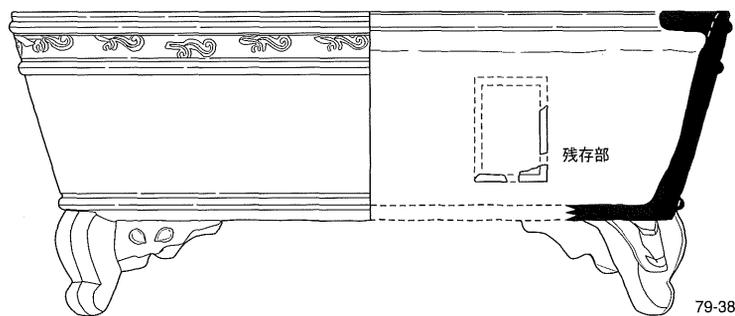
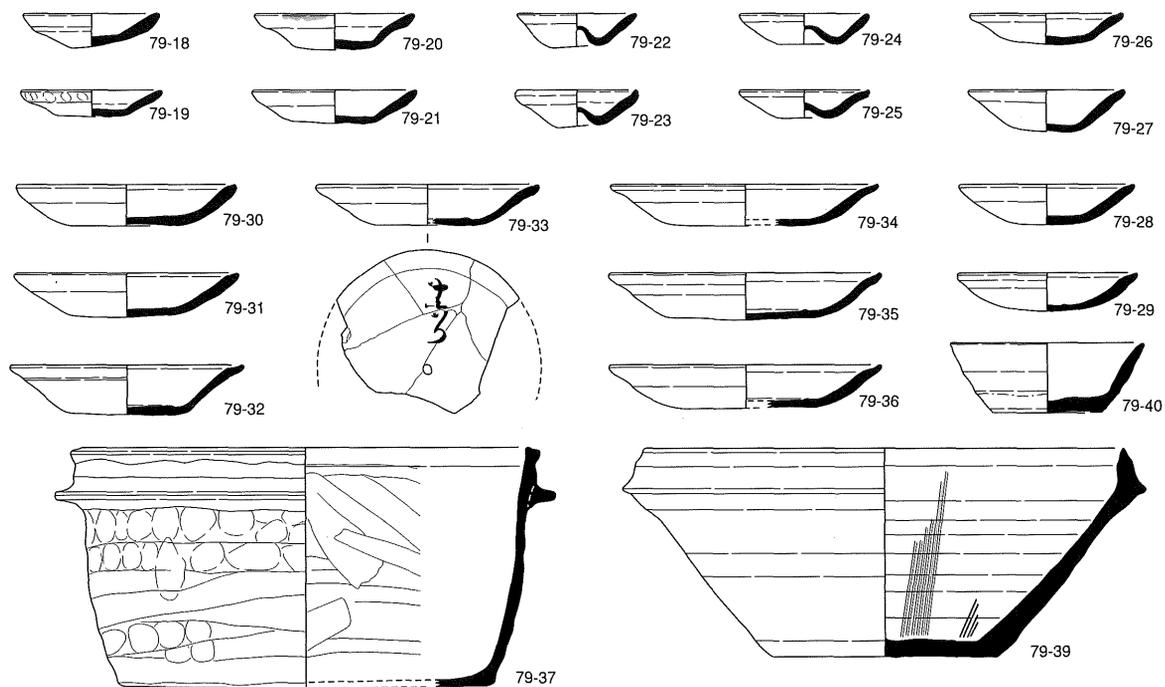


土壙 G2318、集石 H555、地業 H666、井戸 B916、土壙 J175出土土器実測図

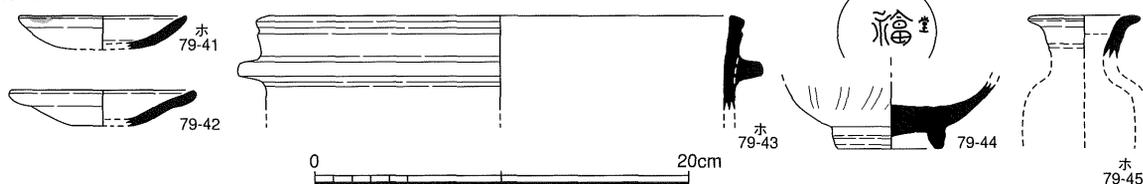
堀G2630 (J区)



堀G2630

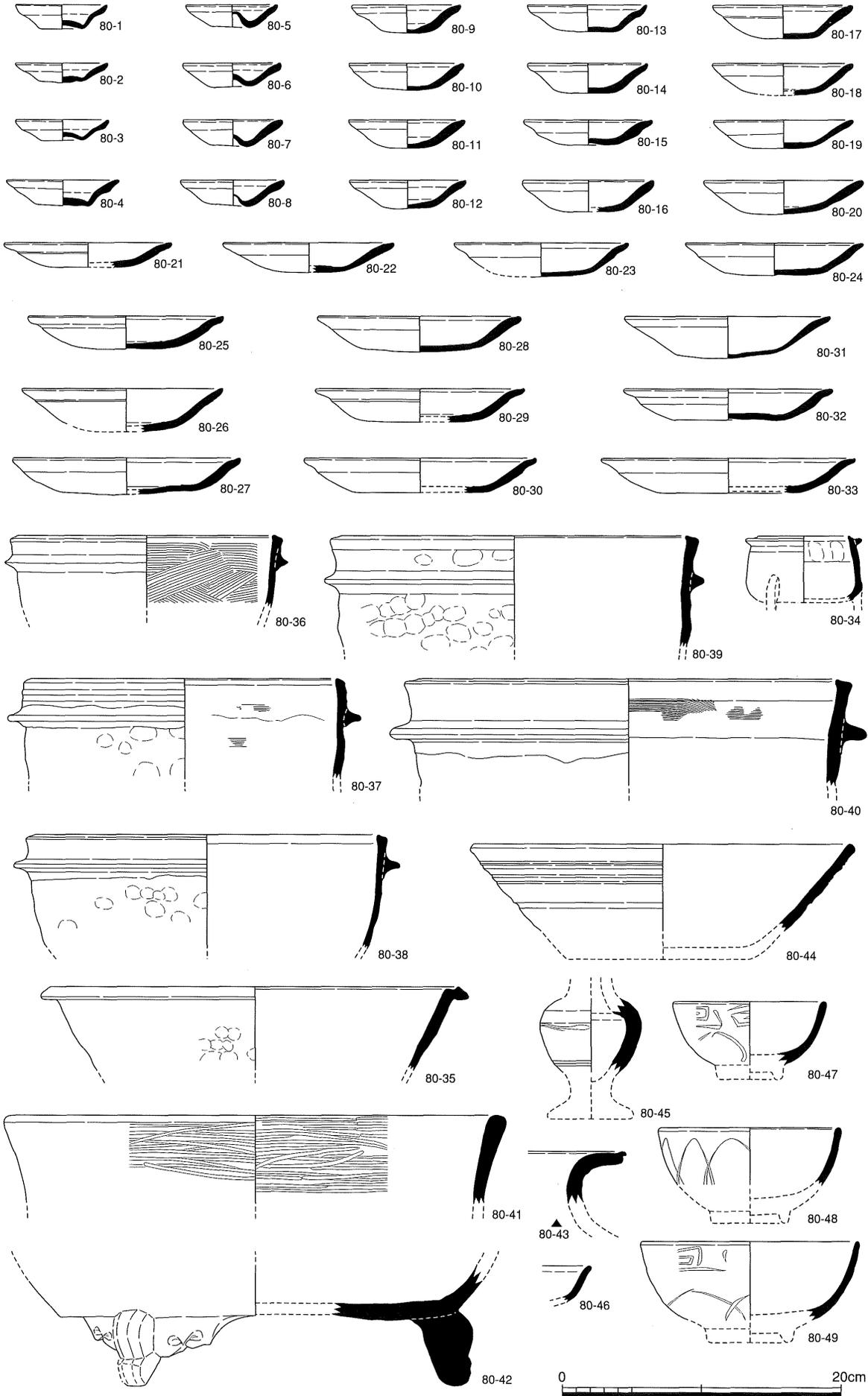


井戸B1059



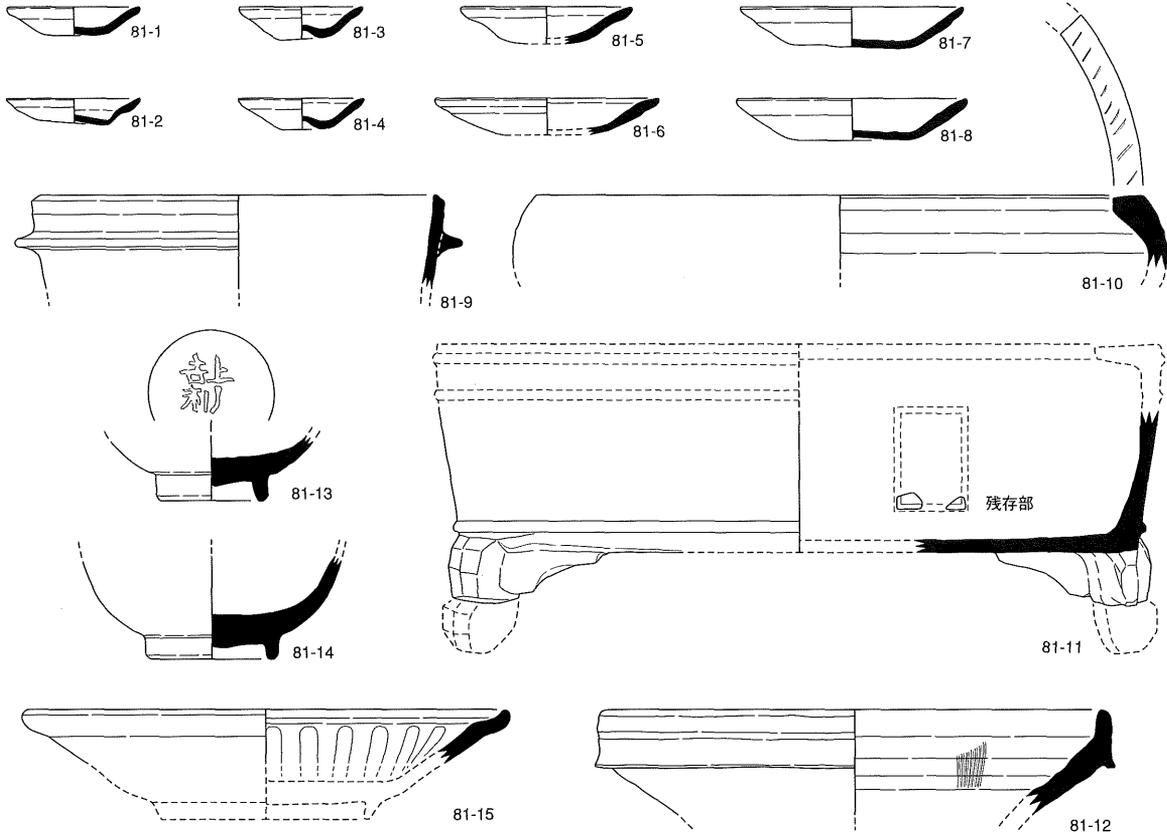
堀G2630 (J区)、堀G2630、井戸B1059出土土器実測図

溝 E 455 下層

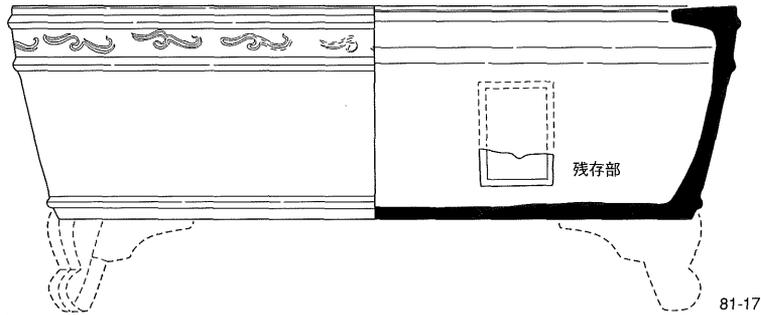


溝 E 455 下層出土土器実測図

溝 E 455西肩



土壙 G 2214



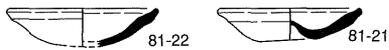
土壙 G 1363



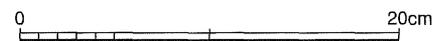
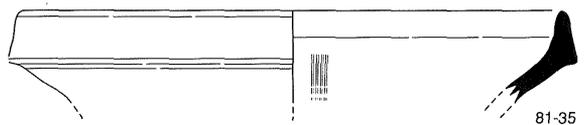
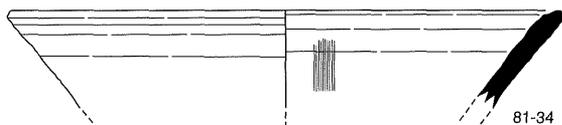
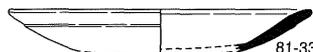
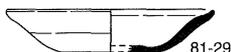
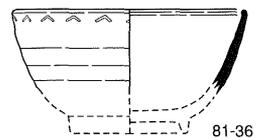
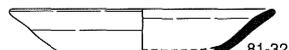
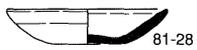
土壙 G 2821



土壙 J 182

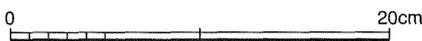
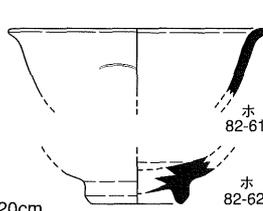
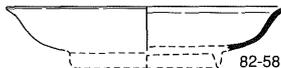
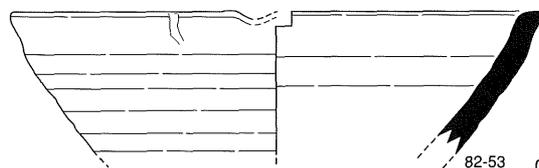
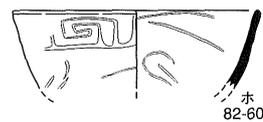
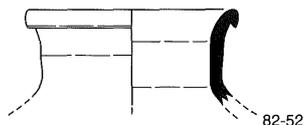
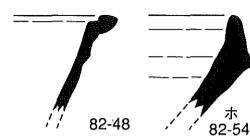
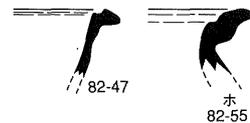
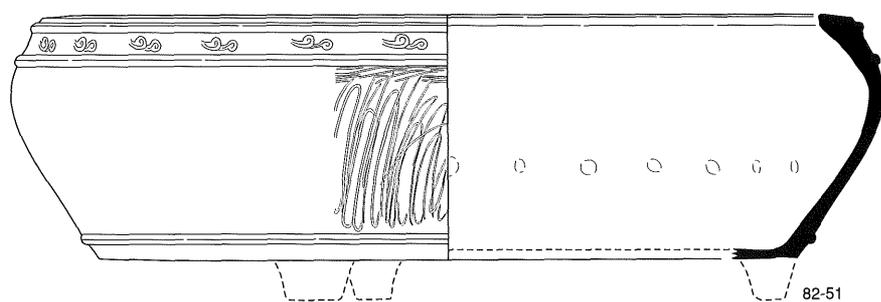
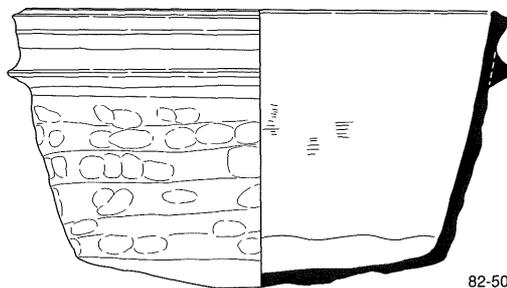
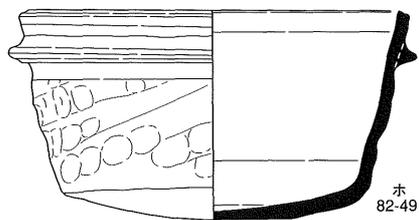
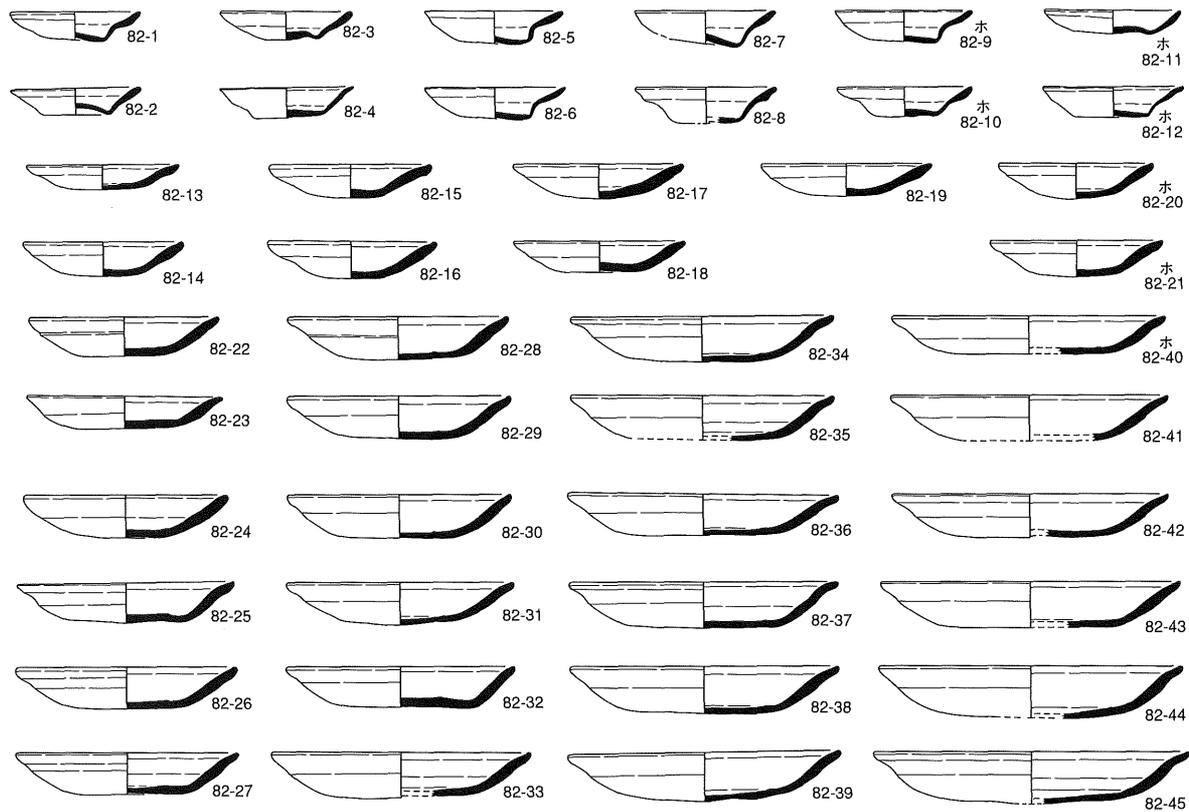


土壙 B 962



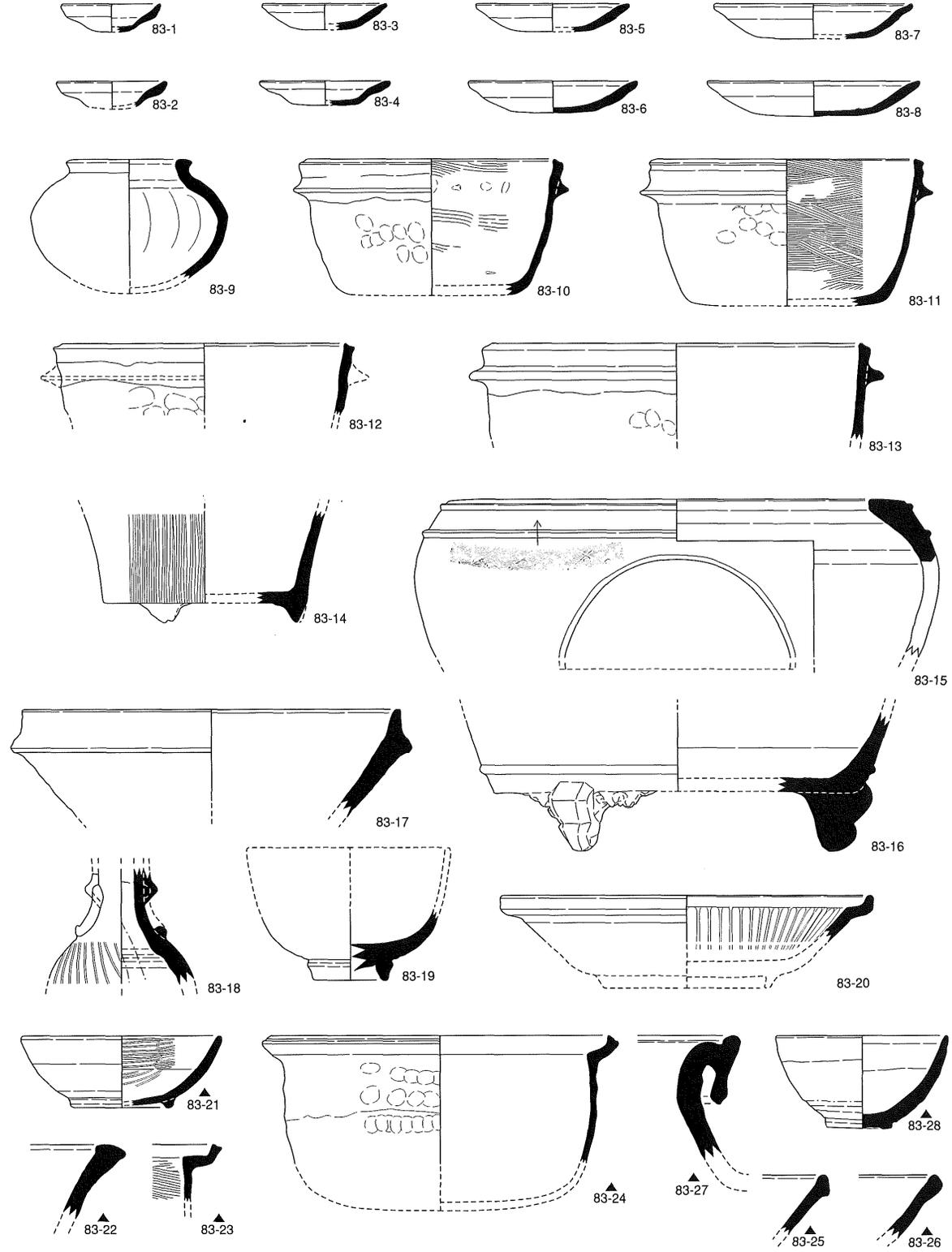
溝 E 455西肩、土壙 G 2214、土壙 G 1363、土壙 G 2821、土壙 J 182、土壙 B 962出土土器実測図

井戸 H328

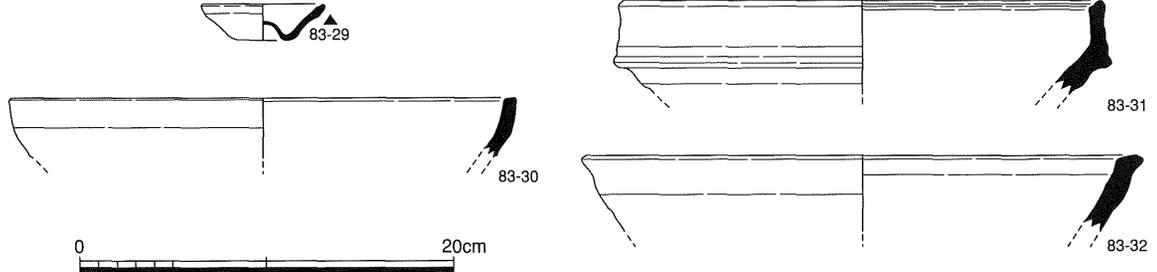


井戸 H328出土土器実測図

土壙 E 584

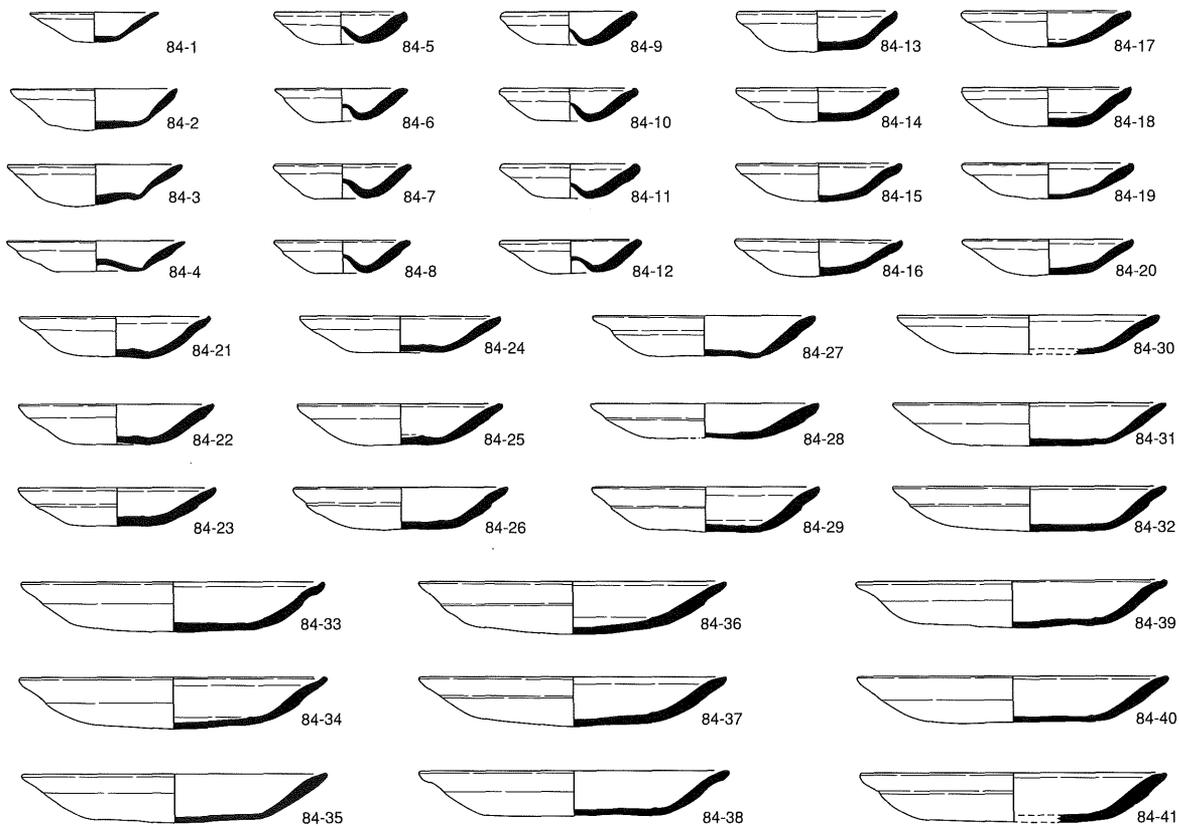


土壙 B 1047

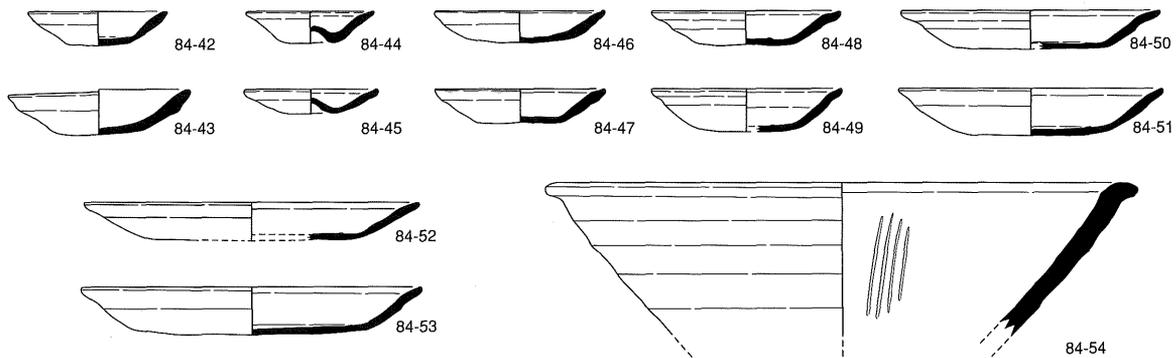


土壙 E 584、土壙 B 1047出土土器実測図

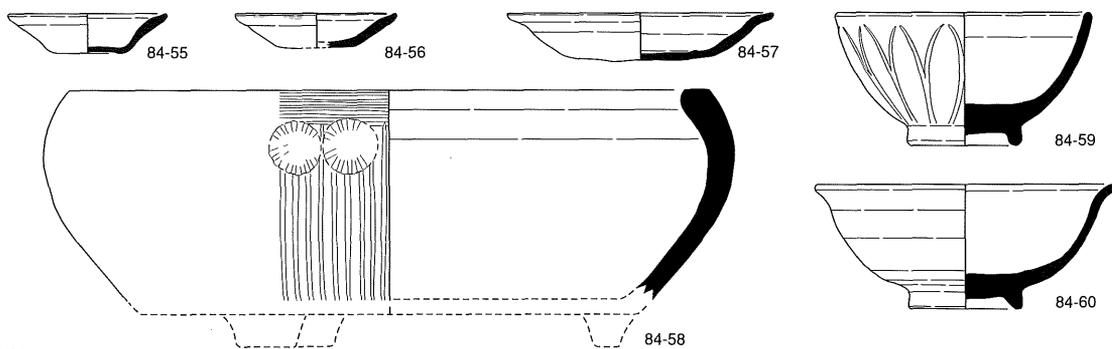
土壙 B 996



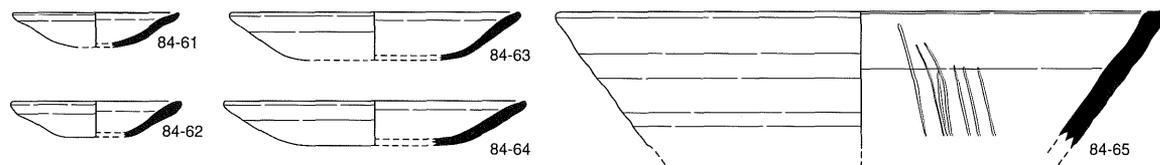
土壙 G 3304



池 D 529 B

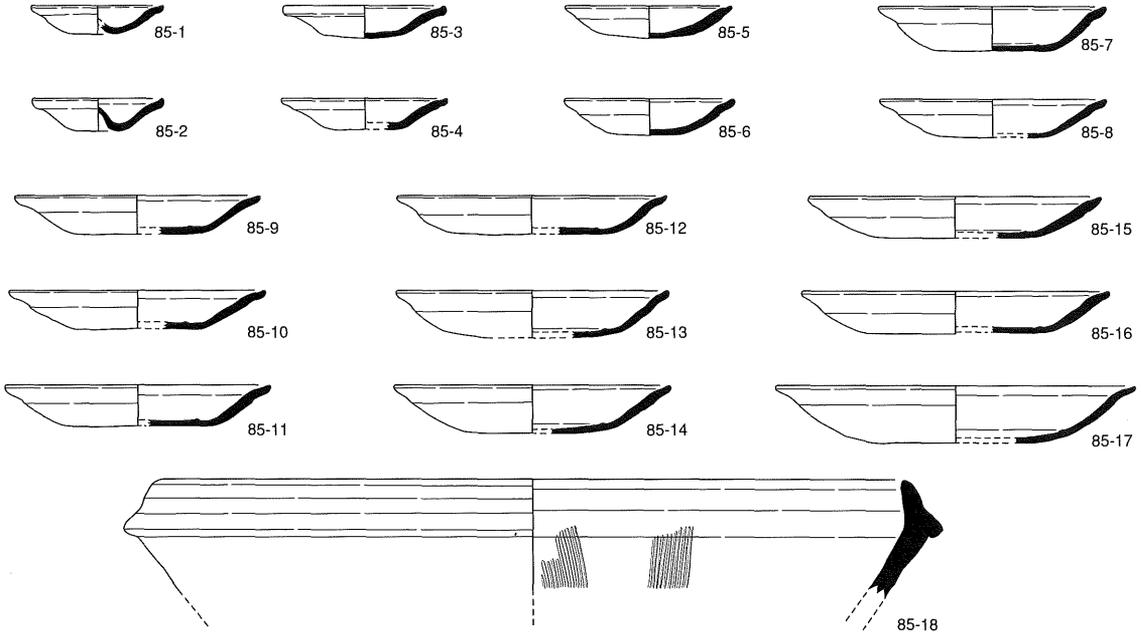


土壙 F 2588

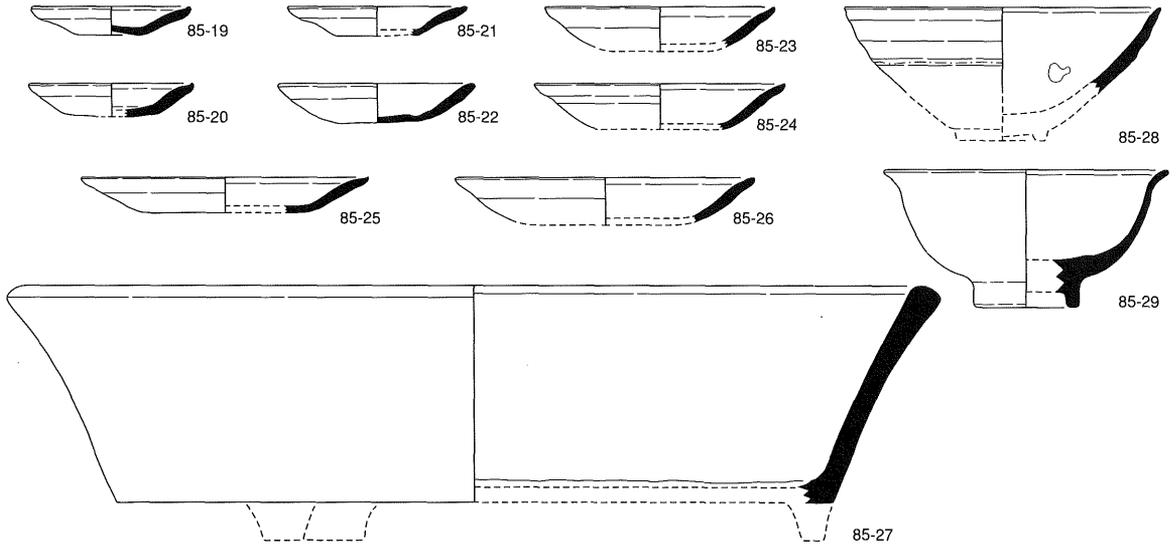


土壙 B 996、土壙 G 3304、池 D 529 B、土壙 F 2588出土土器実測図

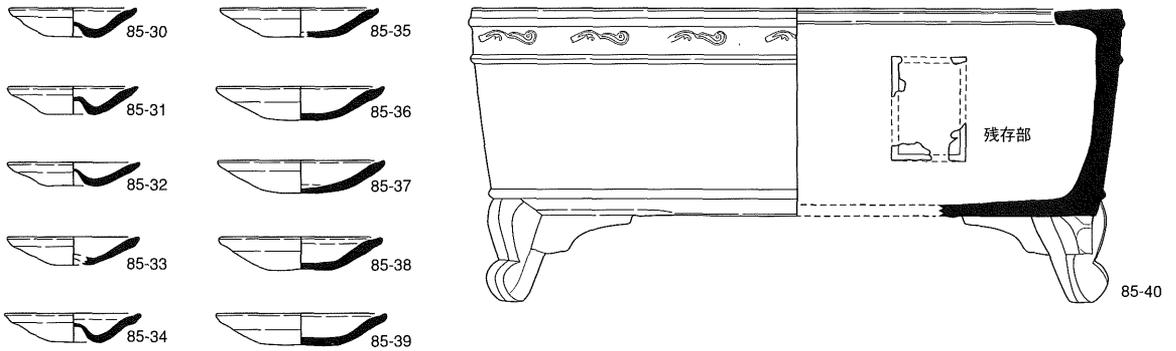
土壙 G 3226



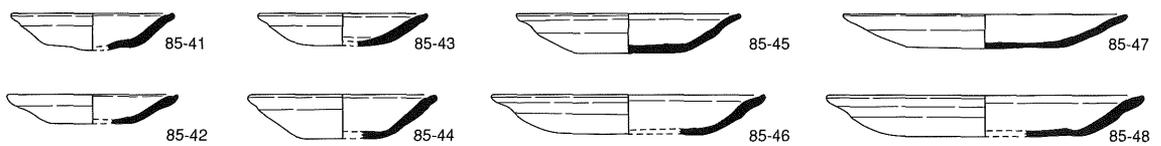
土壙 B 1036



堀 G 965

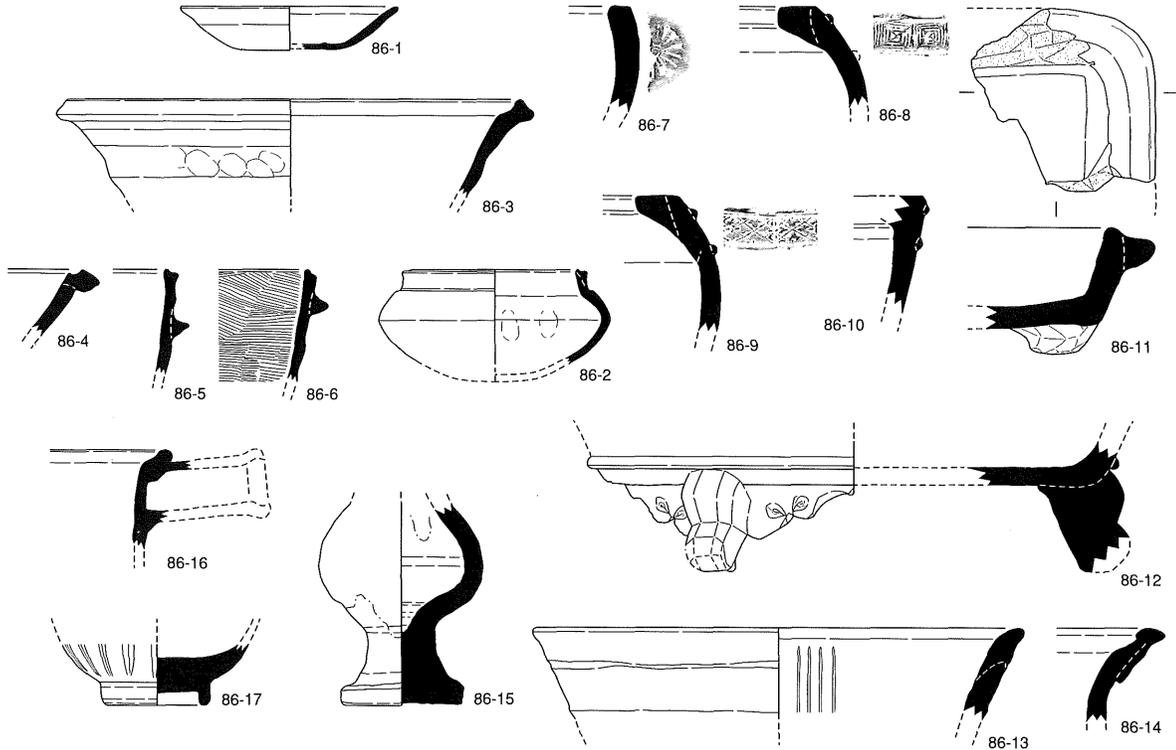


土壙 G 2649

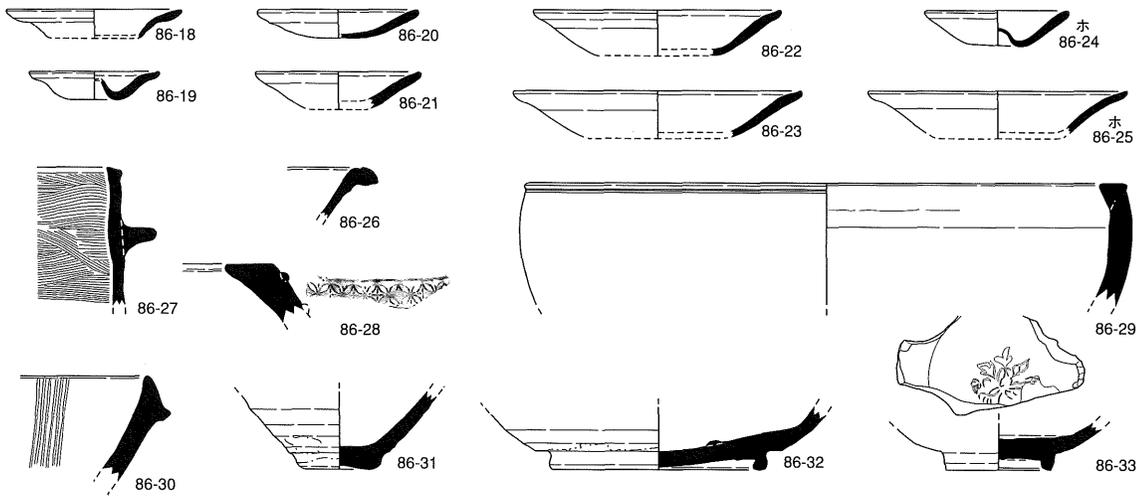


土壙 G 3226、土壙 B 1036、堀 G 965、土壙 G 2649出土土器実測図

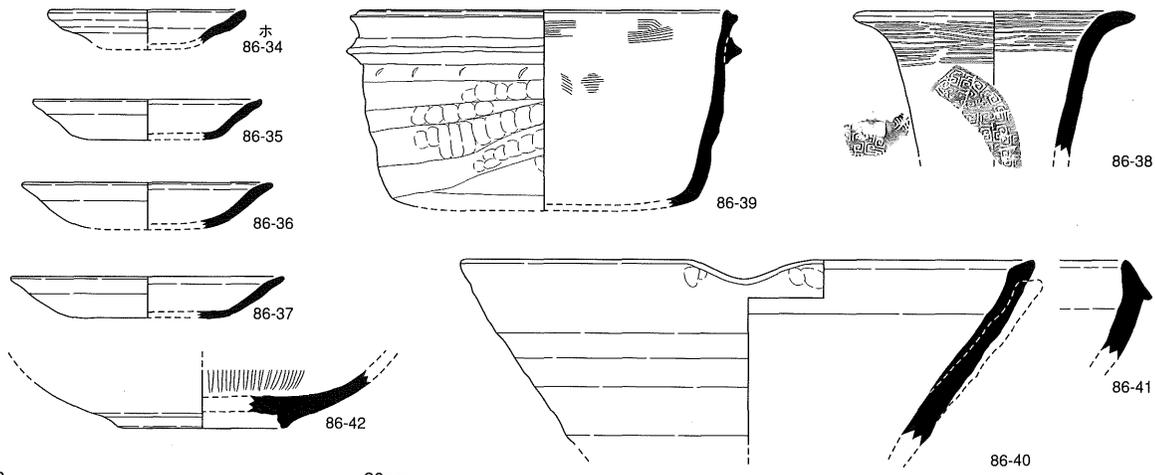
井戸 F 1901



井戸 F 1777

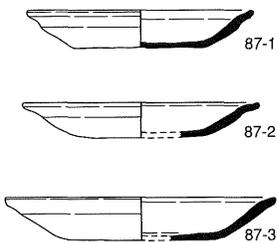


井戸 F 1709

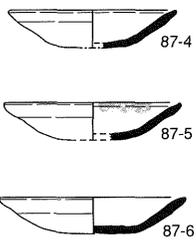


井戸 F 1901、井戸 F 1777、井戸 F 1709出土土器実測図

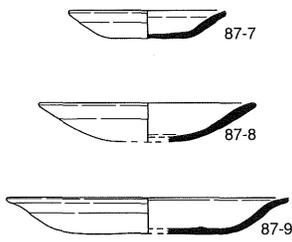
土壙 G1984



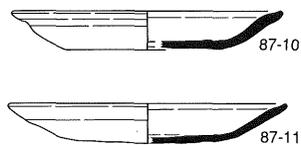
土壙 D512



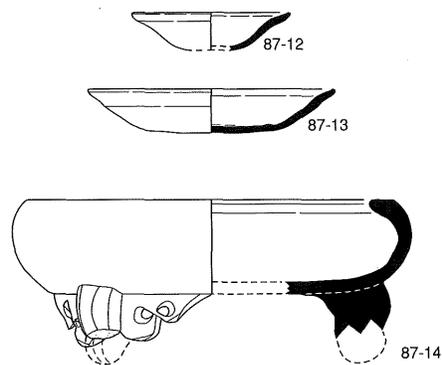
土壙 G2413



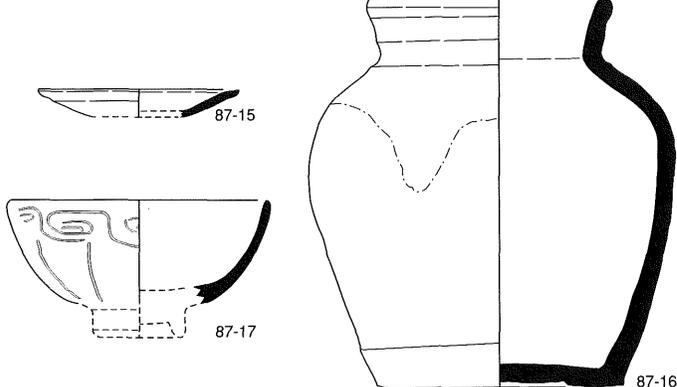
土壙 J142



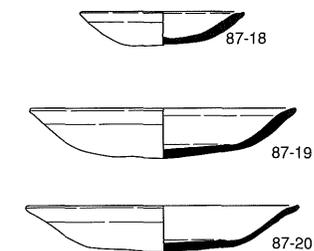
土壙 J151



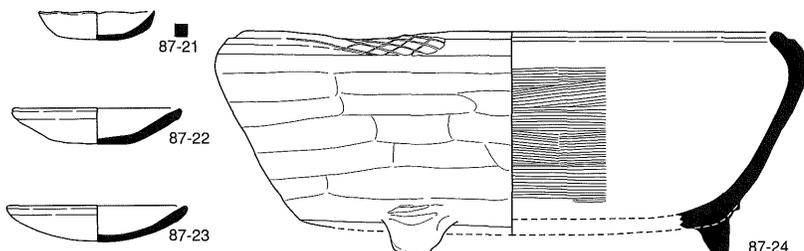
井戸 E665



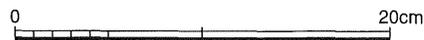
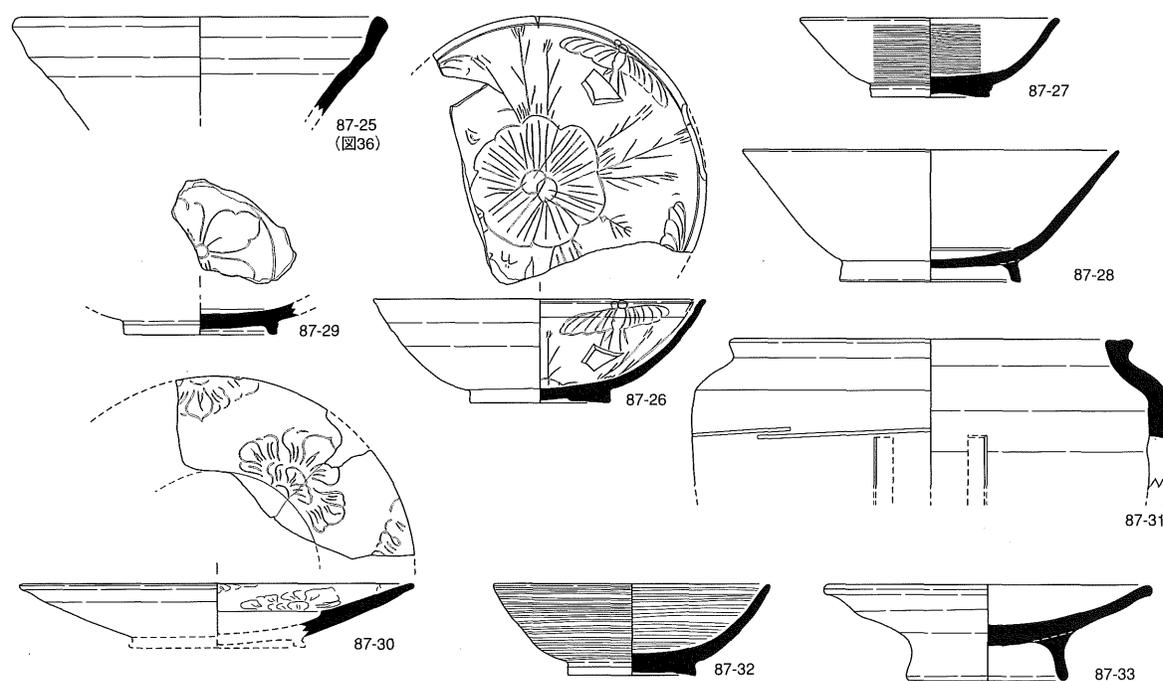
土壙 G2270



土壙 C1298

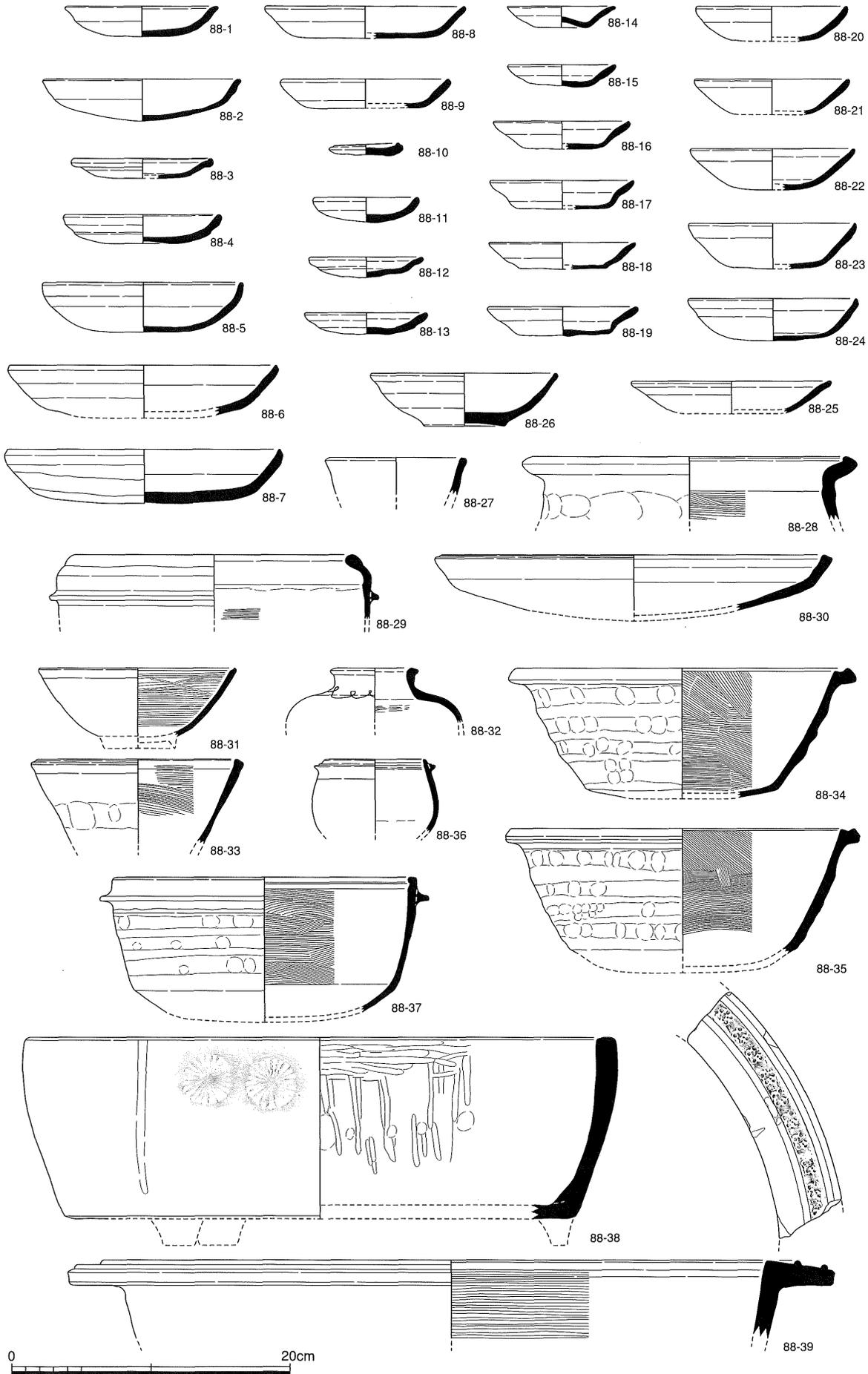


平安時代遺物 (各遺構)



土壙 G1984、土壙 D512、土壙 G2413、土壙 J142、土壙 J151、井戸 E665、土壙 G2270、土壙 C1298、
平安時代遺物 (各遺構) 出土土器実測図

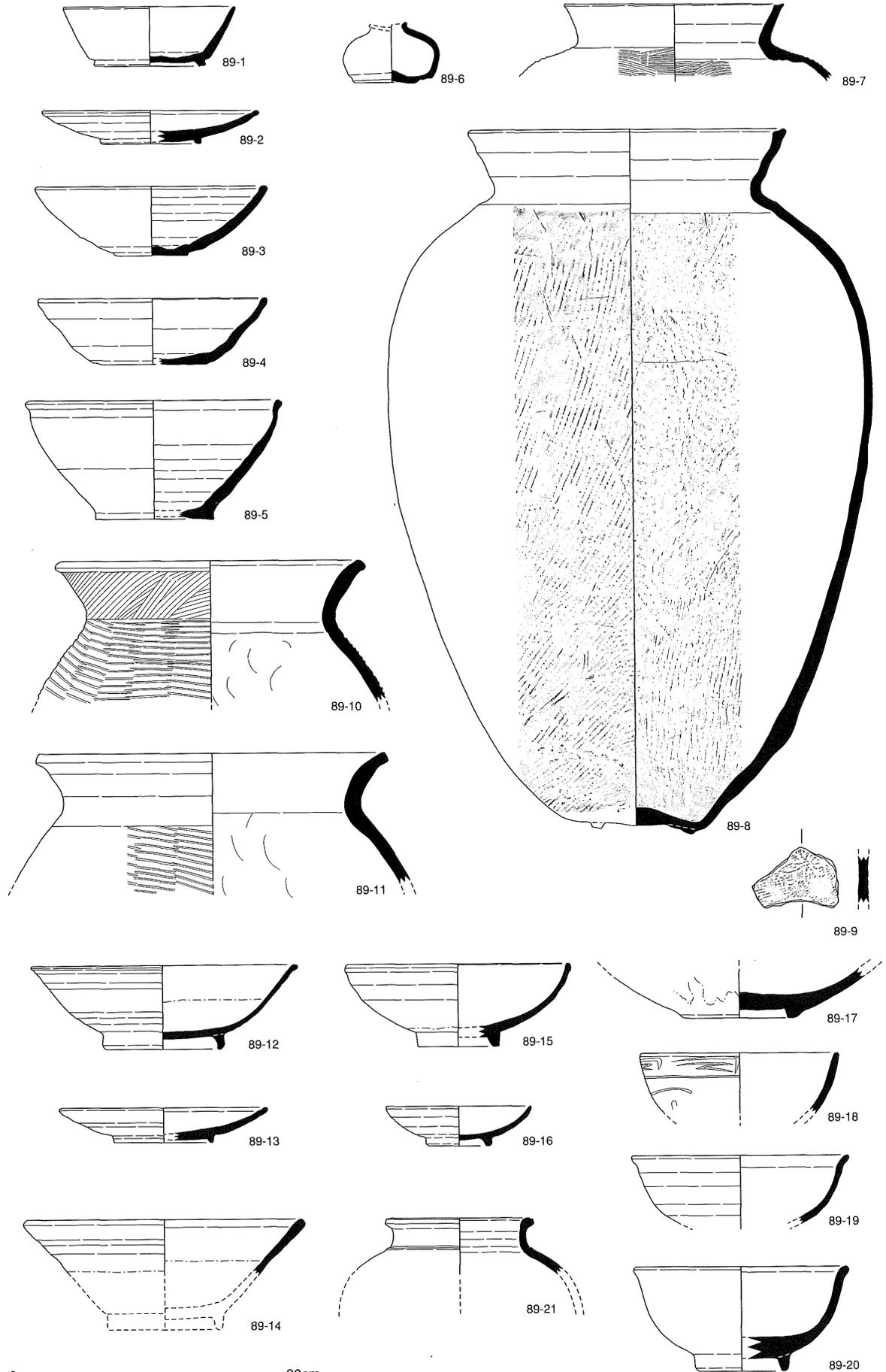
土壙B1000



土壙B1000出土土器実測図1

土壙B1000

図版八九
遺物

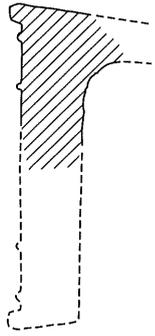


0 20cm

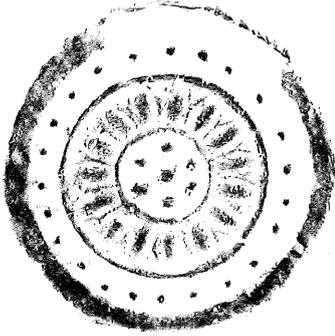
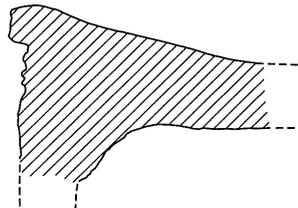
土壙B1000出土土器実測図2



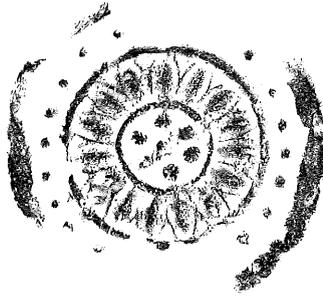
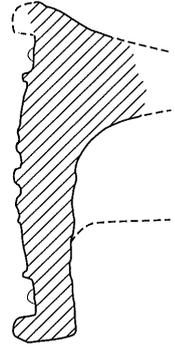
90-1



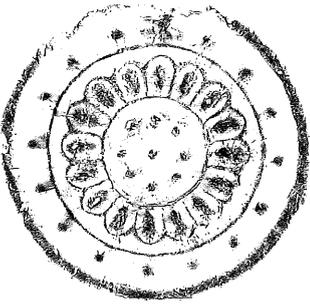
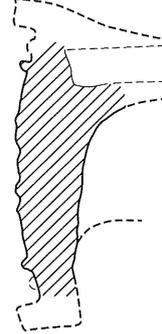
90-2



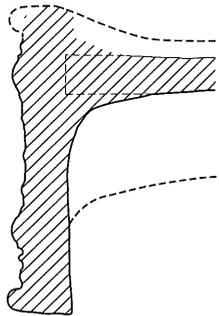
90-3



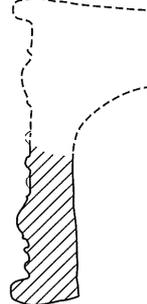
90-4



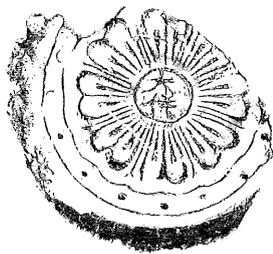
90-5



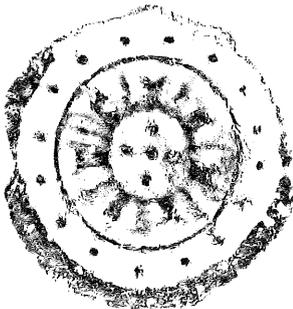
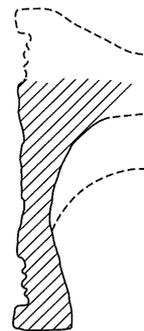
90-6



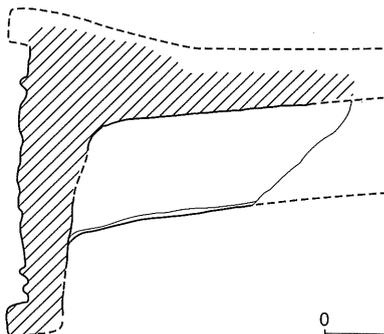
90-7

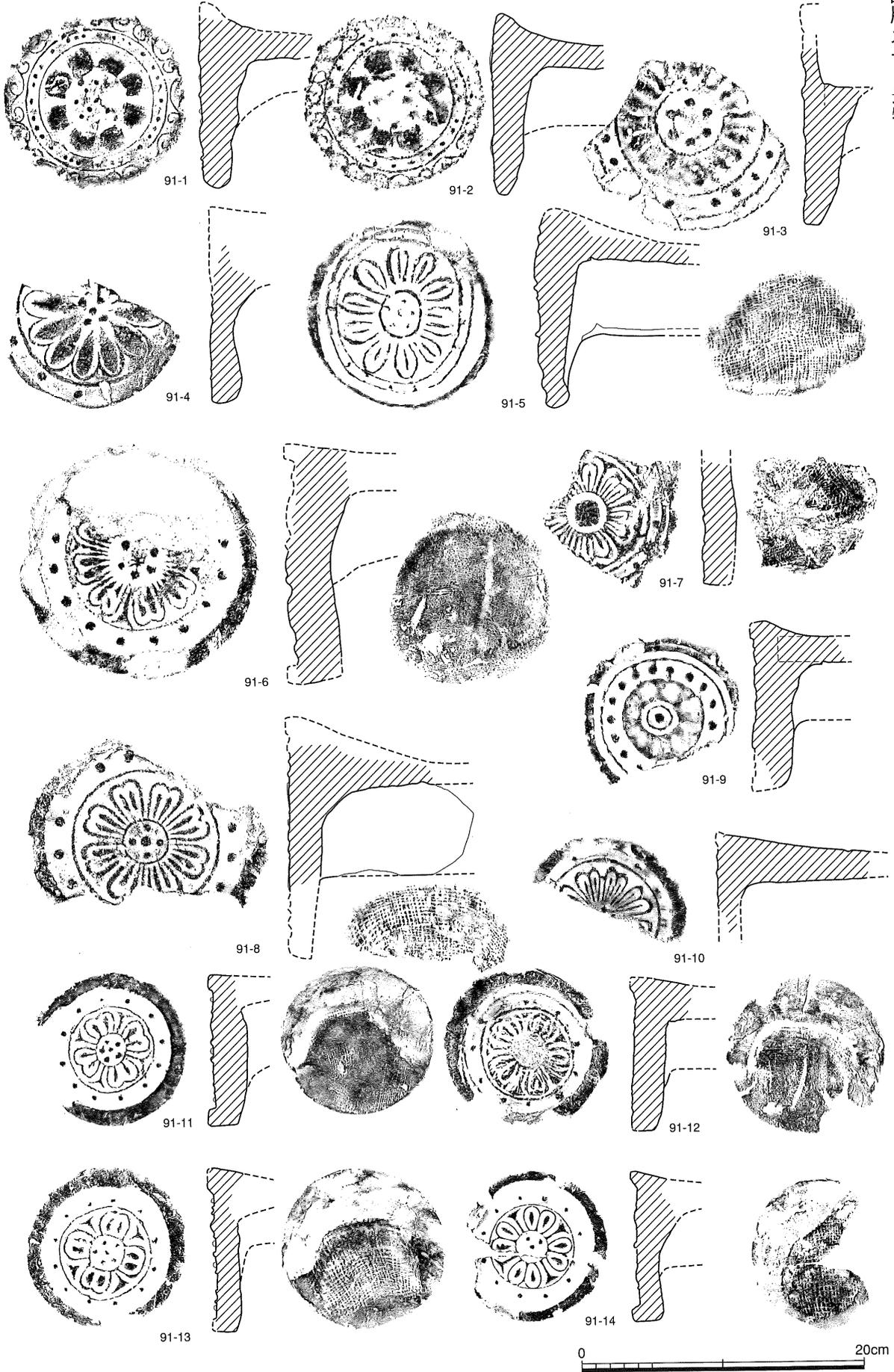


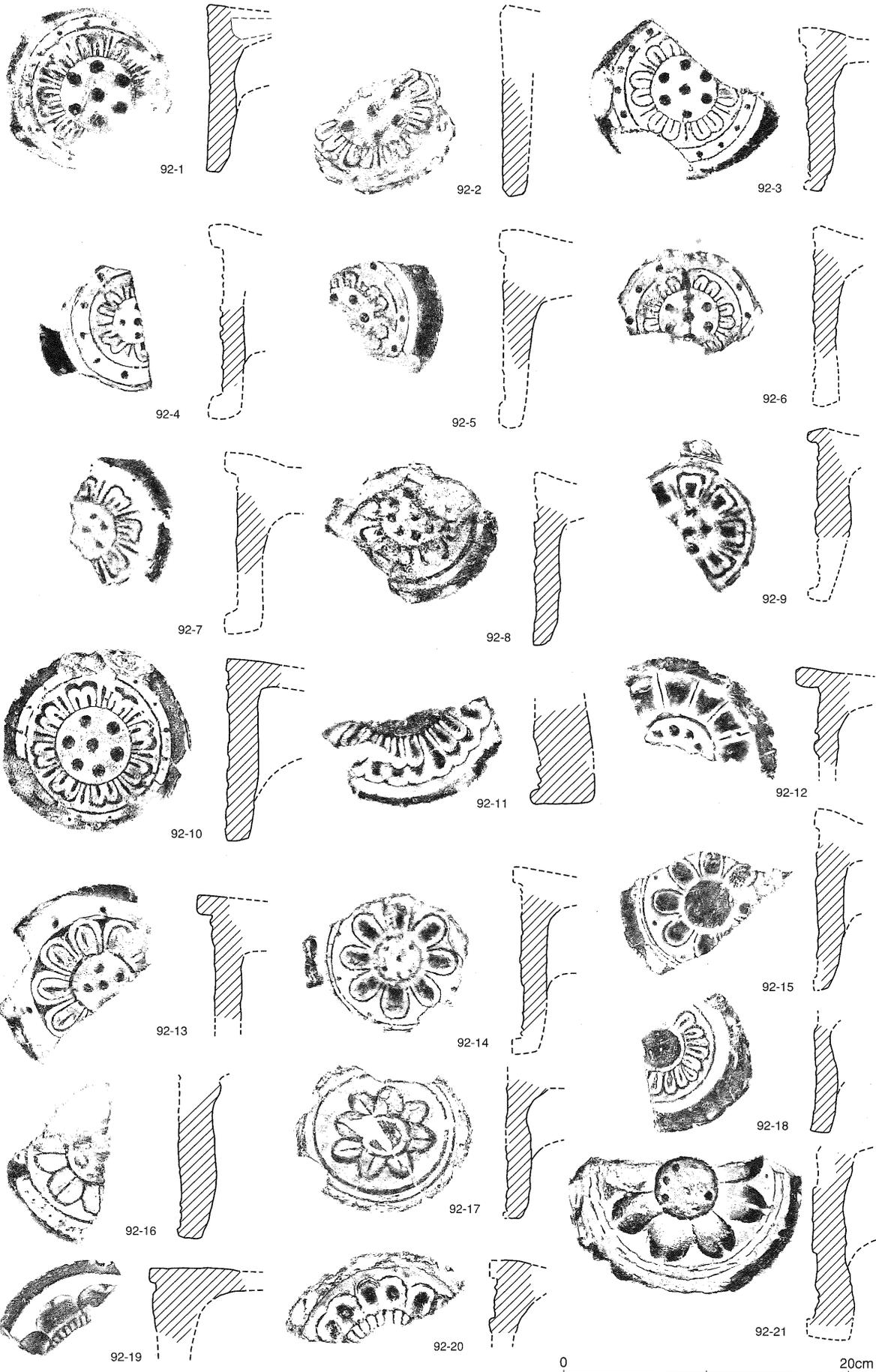
90-8

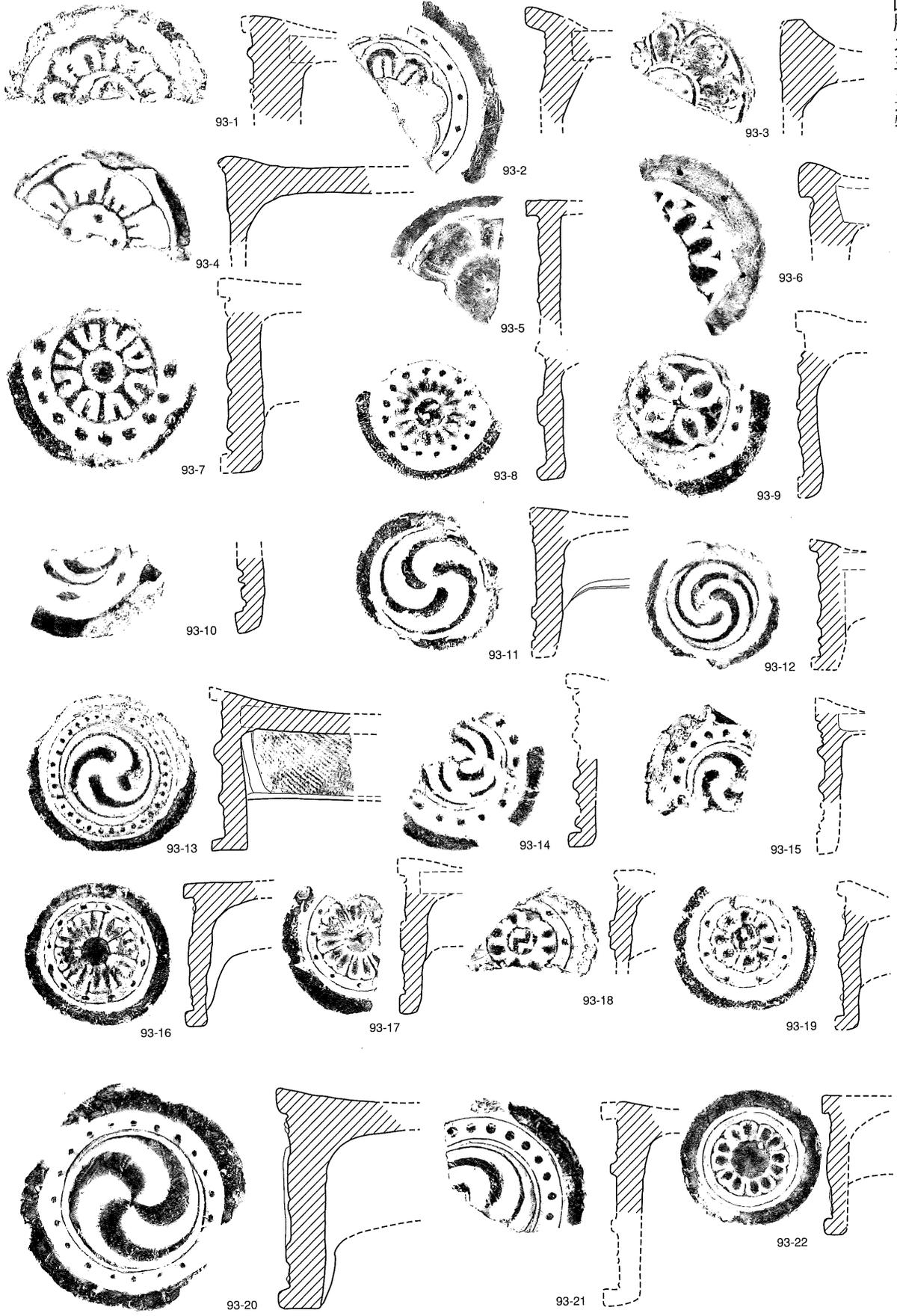


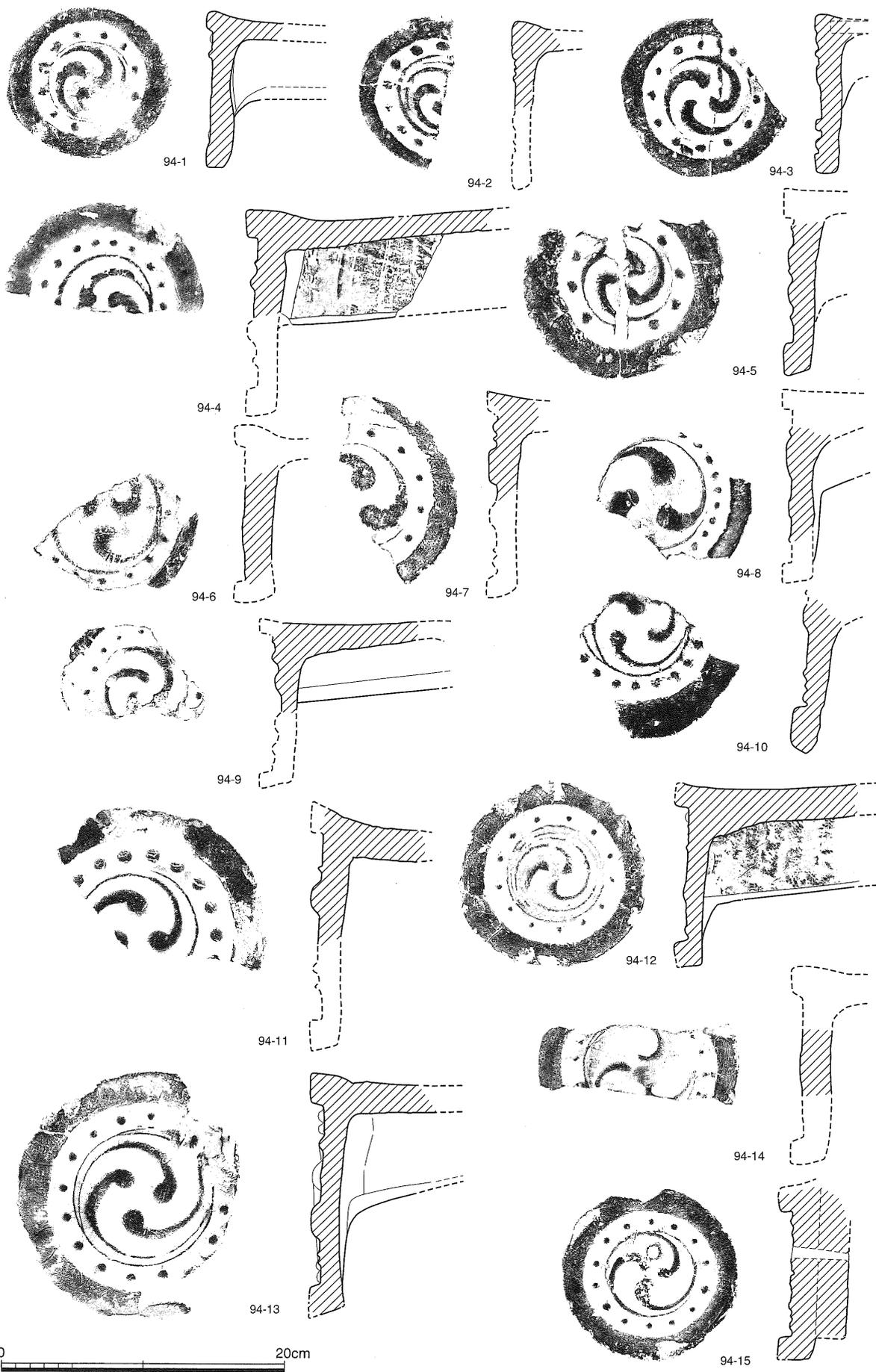
90-9

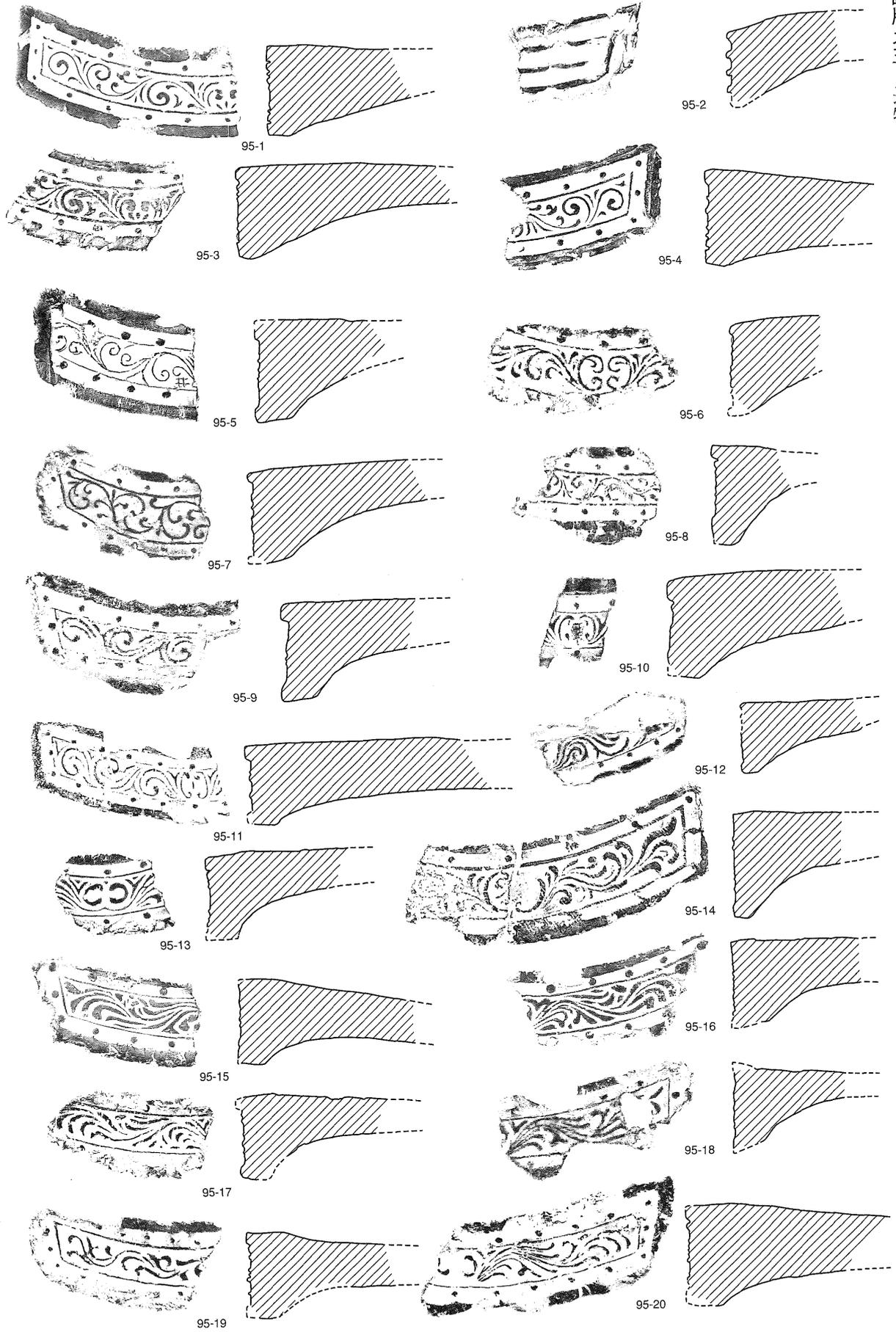






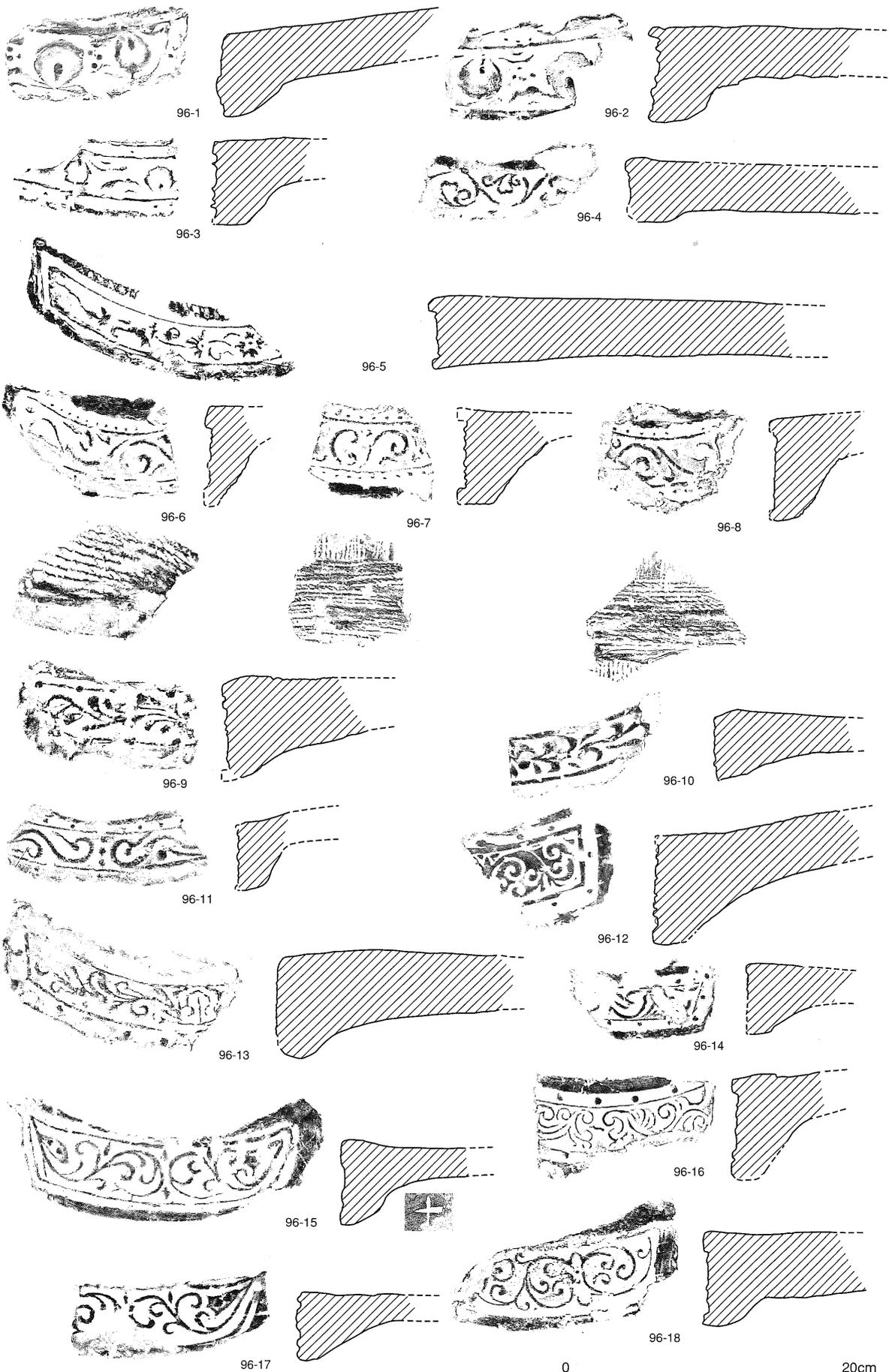


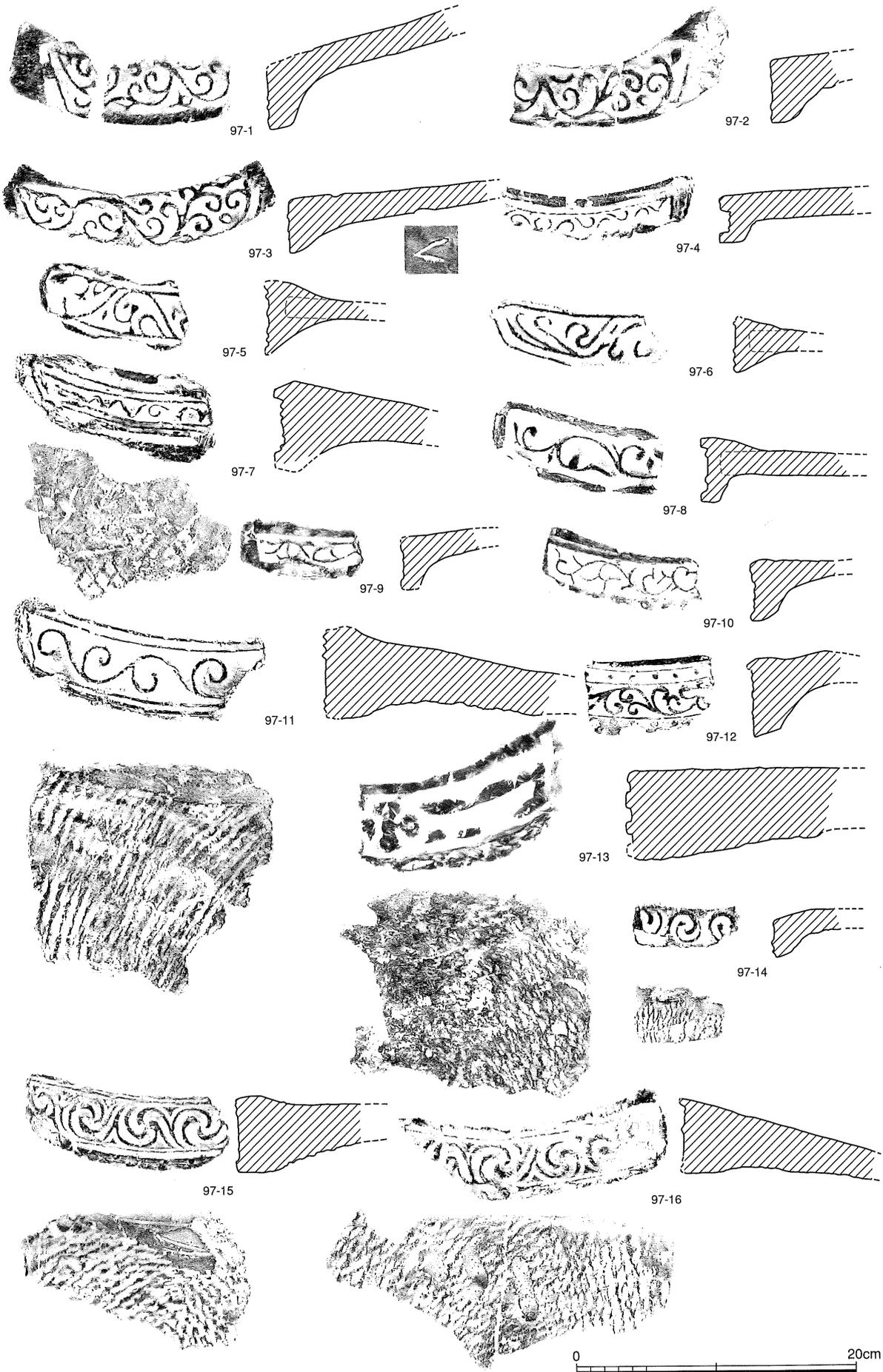




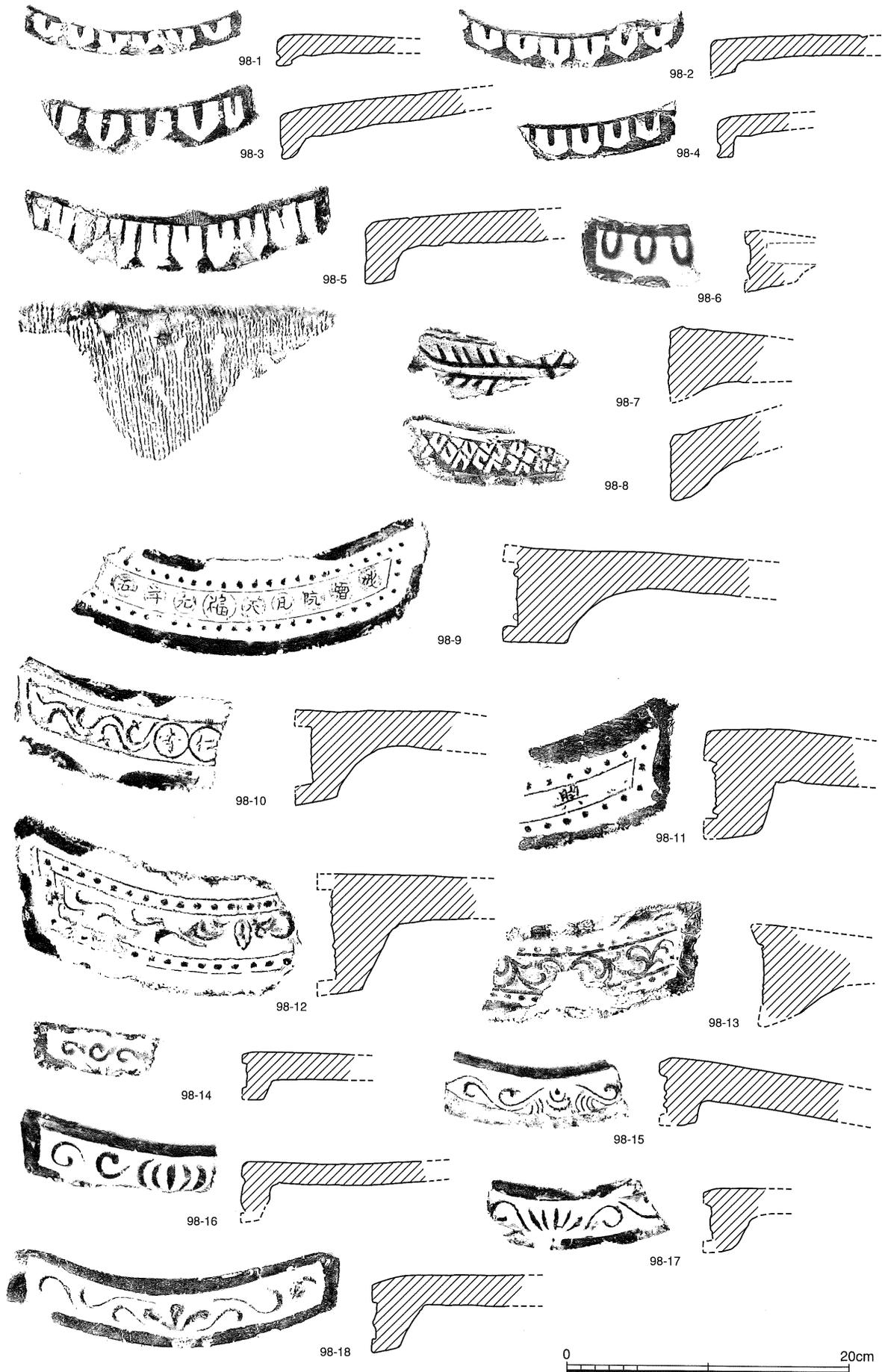
0 20cm

軒平瓦拓影・実測図1

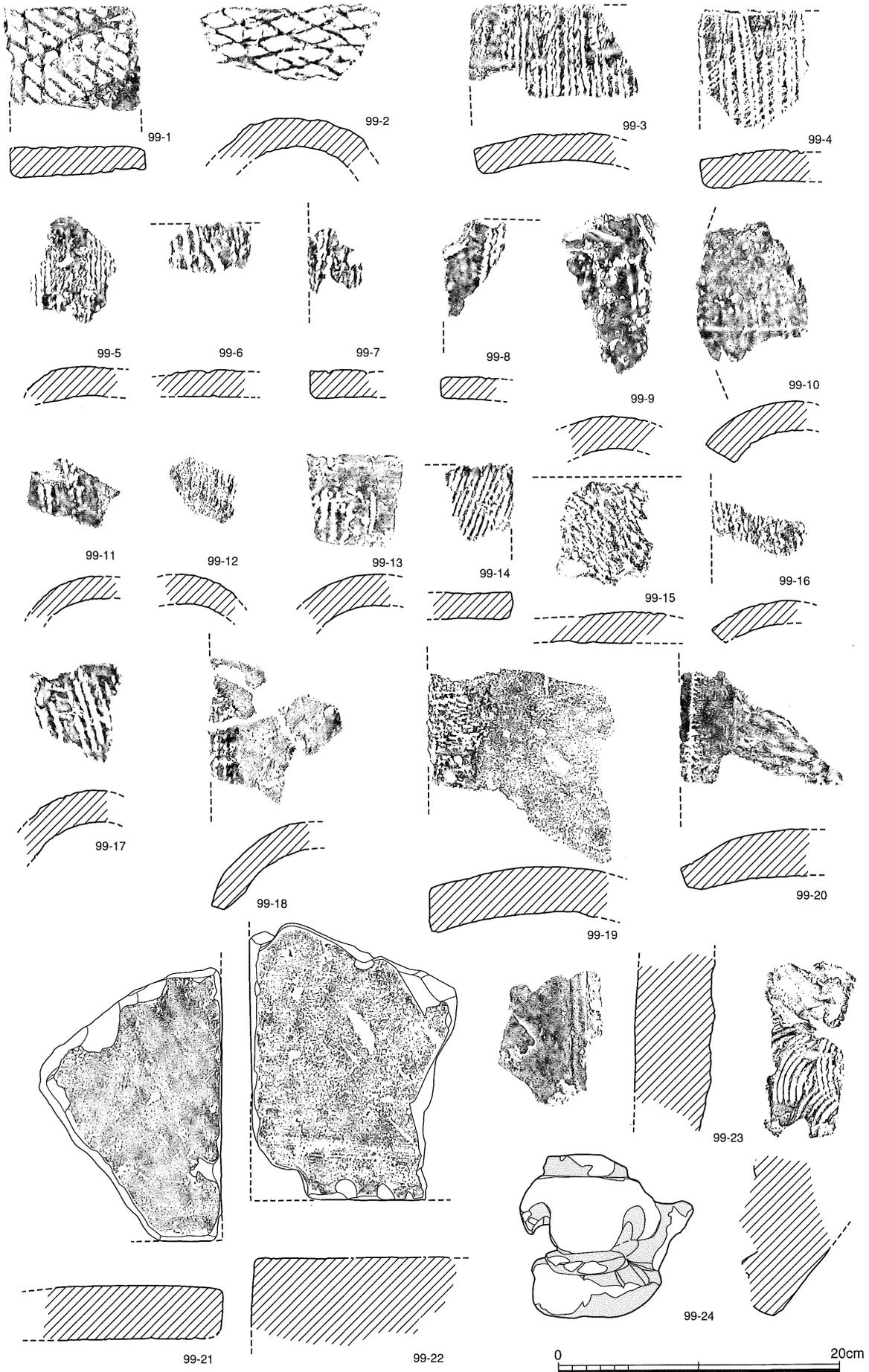




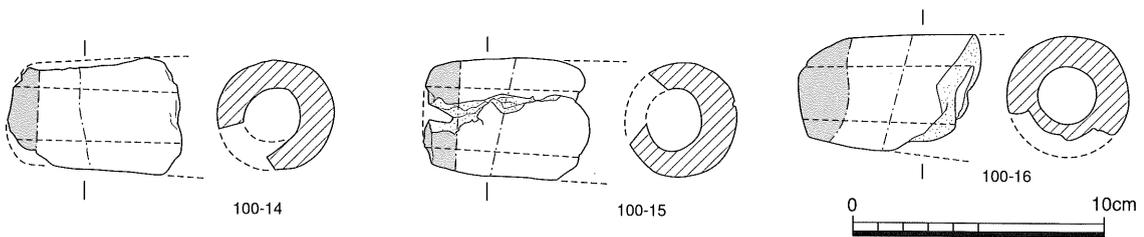
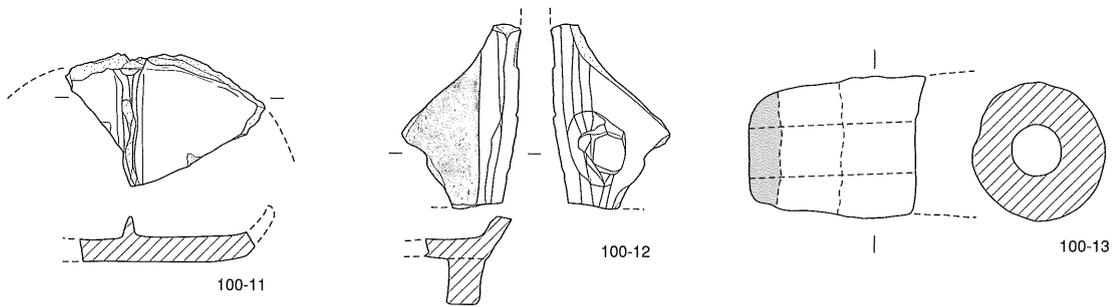
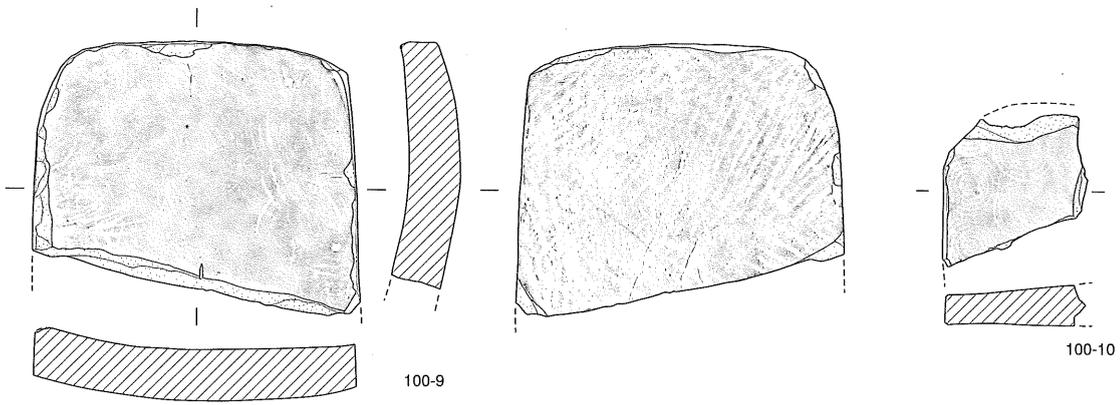
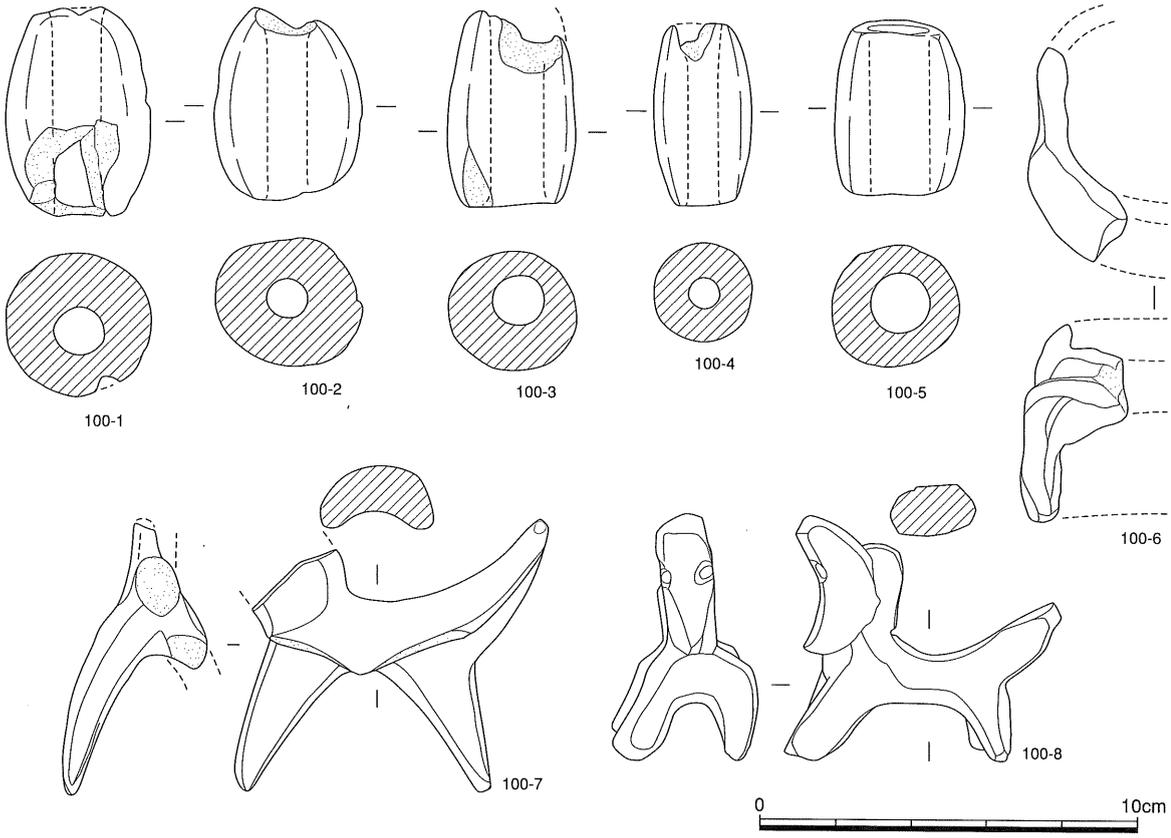
軒平瓦拓影·実測图 3

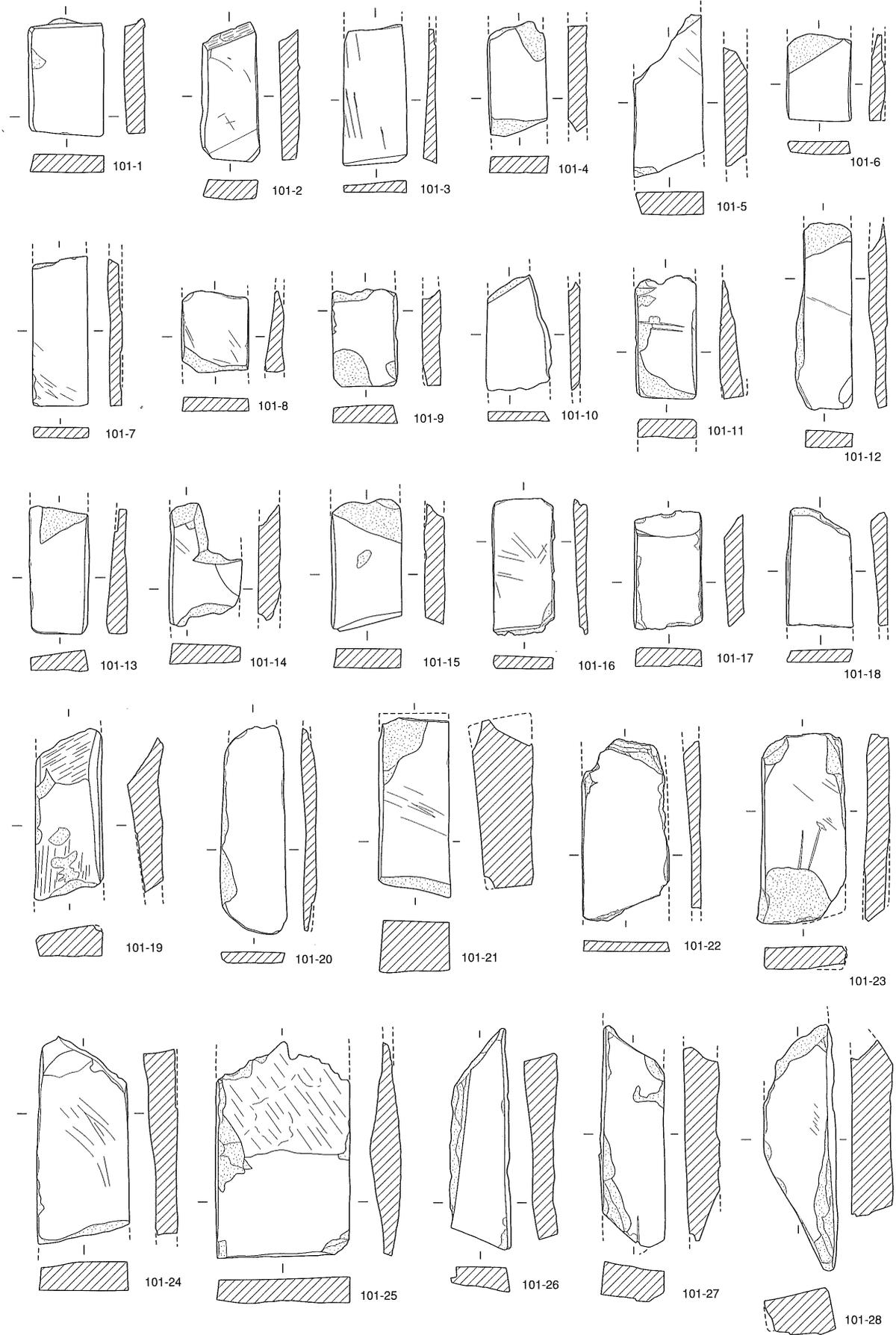


軒平瓦拓影·実測図4

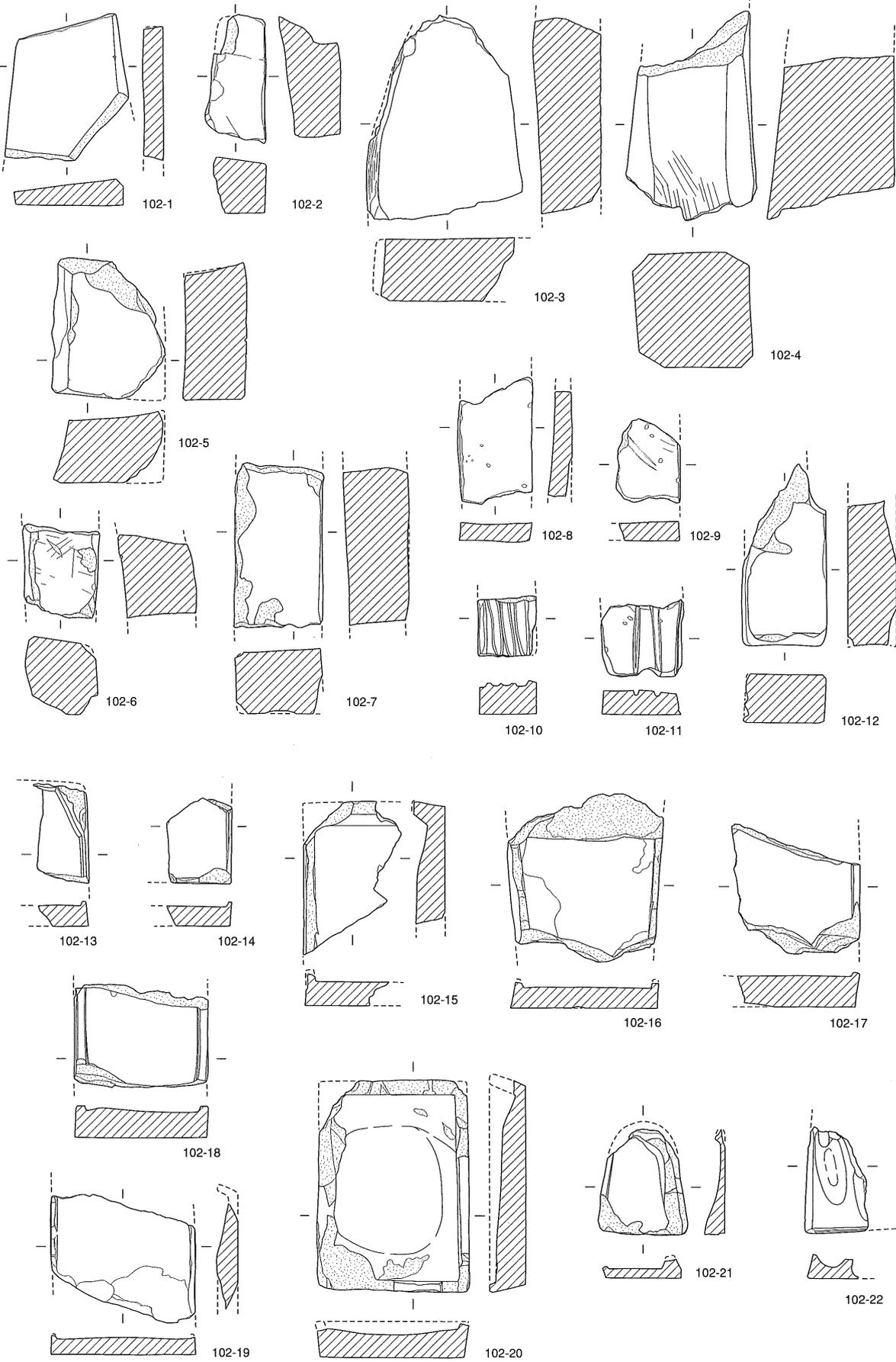


緑釉瓦、埴、鴟尾、鬼瓦拓影・実測図

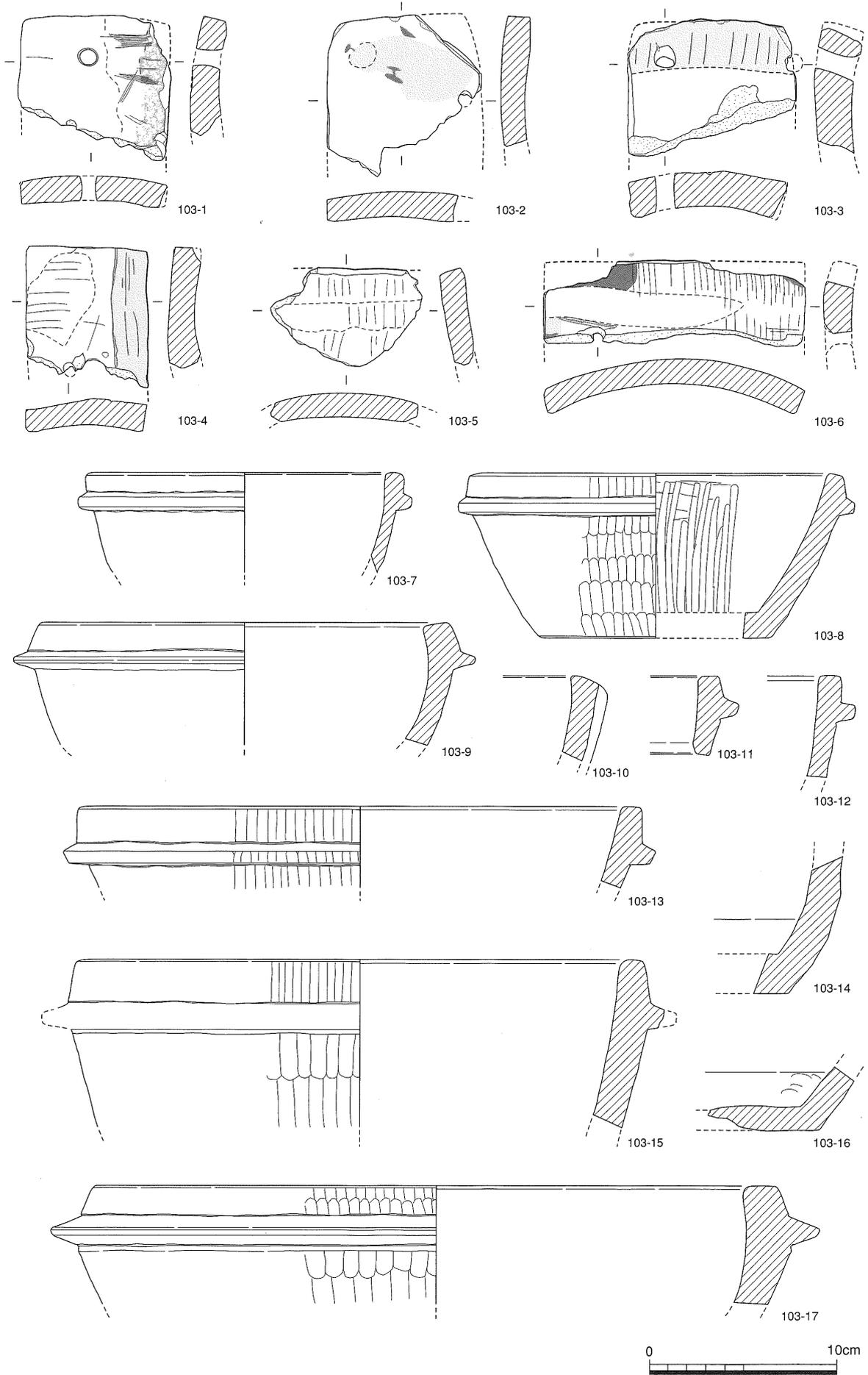




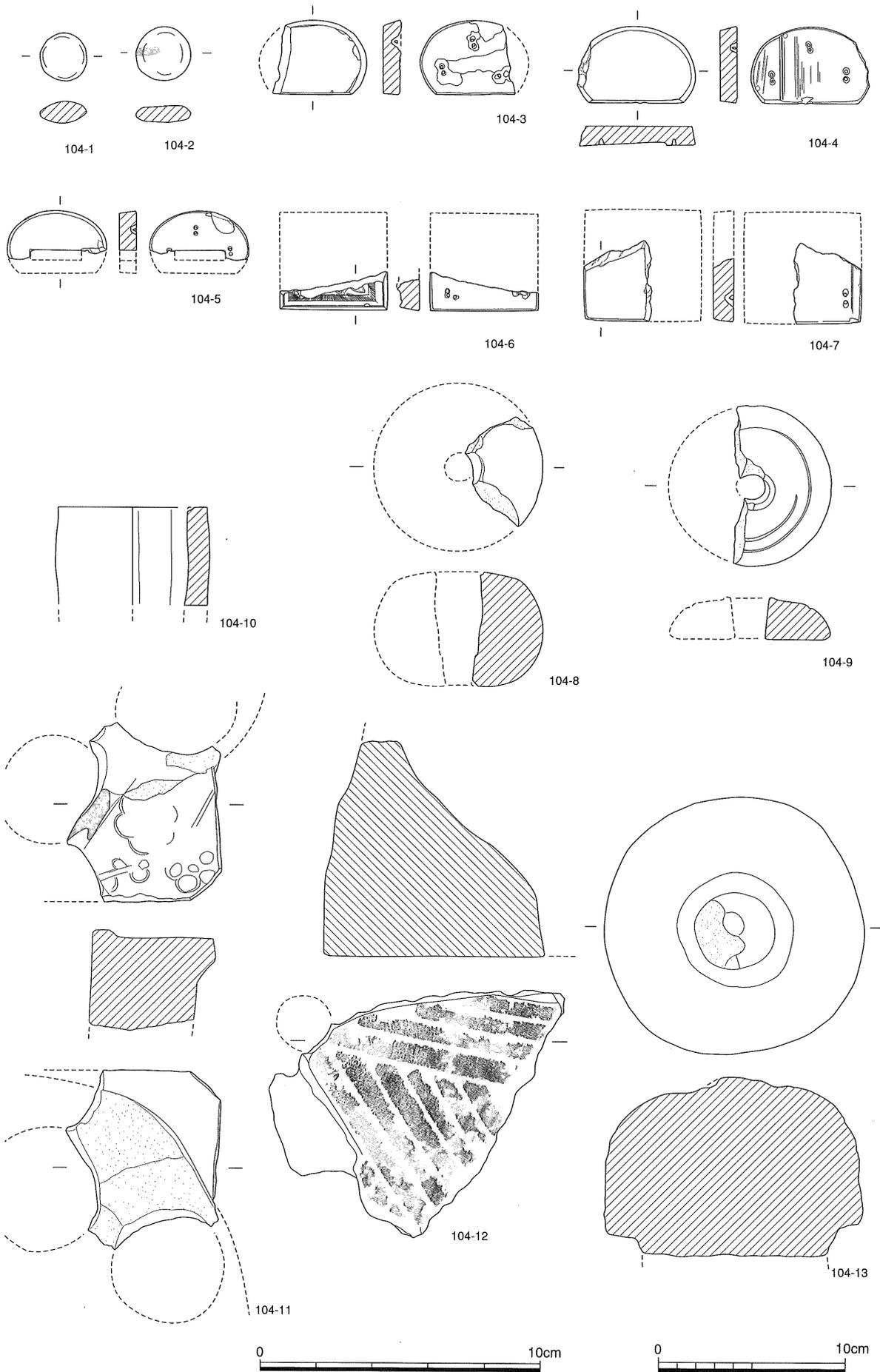
石製品実測図 1



石製品実測図 2



石製品実測図 3



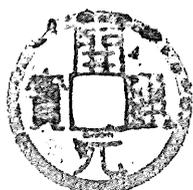
石製品実測図 4



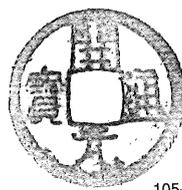
105-1



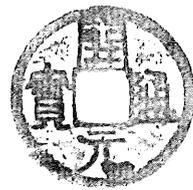
105-2



105-3



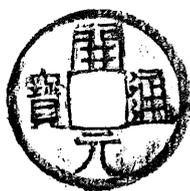
105-4



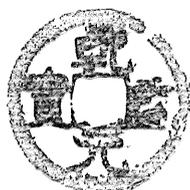
105-5



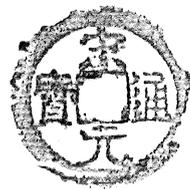
105-6



105-7



105-8



105-9



105-10



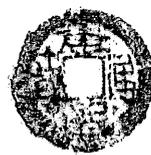
105-11



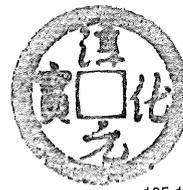
105-12



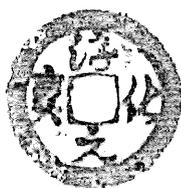
105-13



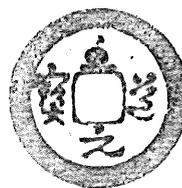
105-14



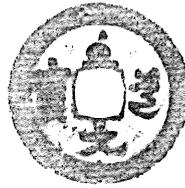
105-15



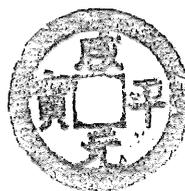
105-16



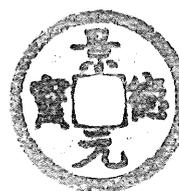
105-17



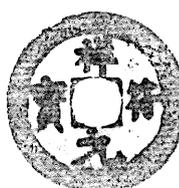
105-18



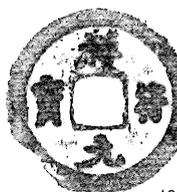
105-19



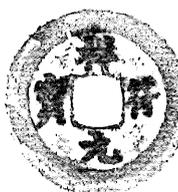
105-20



105-21



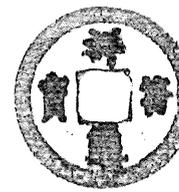
105-22



105-23



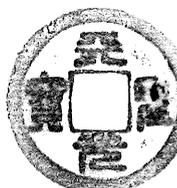
105-24



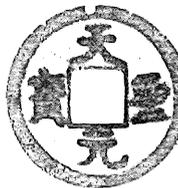
105-25



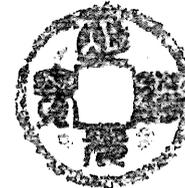
105-26



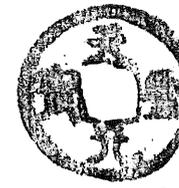
105-27



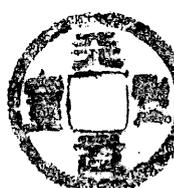
105-28



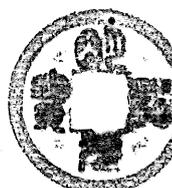
105-29



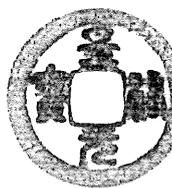
105-30



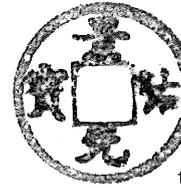
105-31



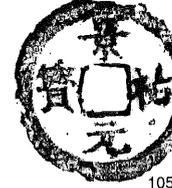
105-32



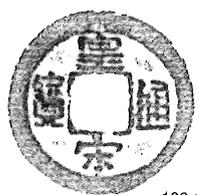
105-33



105-34



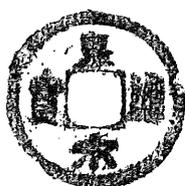
105-35



106-1



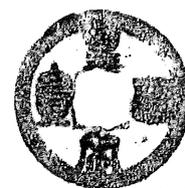
106-2



106-3



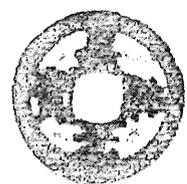
106-4



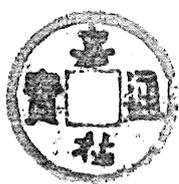
106-5



106-6



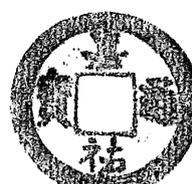
106-7



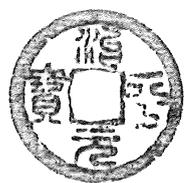
106-8



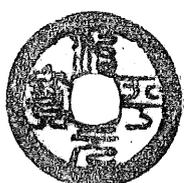
106-9



106-10



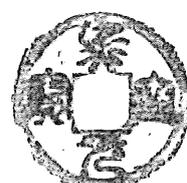
106-11



106-12



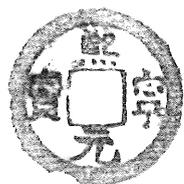
106-13



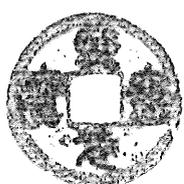
106-14



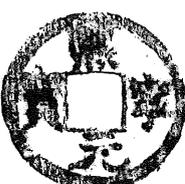
106-15



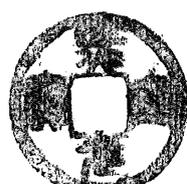
106-16



106-17



106-18



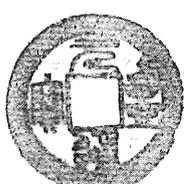
106-19



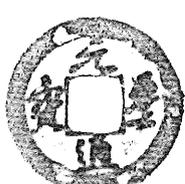
106-20



106-21



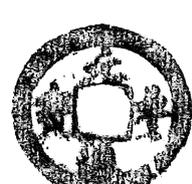
106-22



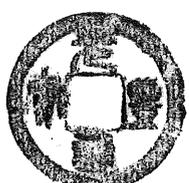
106-23



106-24



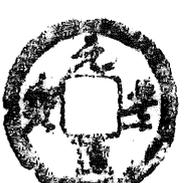
106-25



106-26



106-27



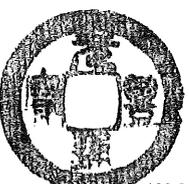
106-28



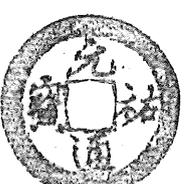
106-29



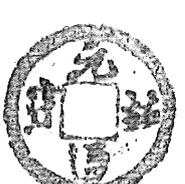
106-30



106-31



106-32



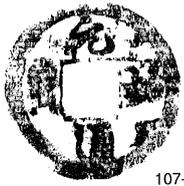
106-33



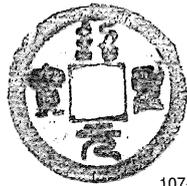
106-34



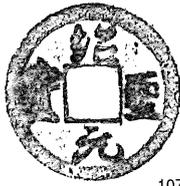
106-35



107-1



107-2



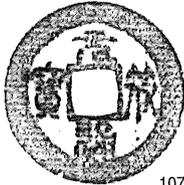
107-3



107-4



107-5



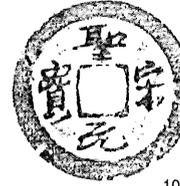
107-6



107-7



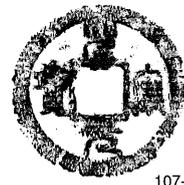
107-8



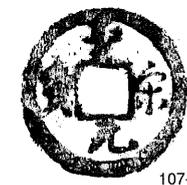
107-9



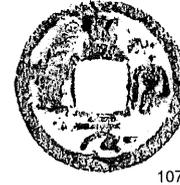
107-10



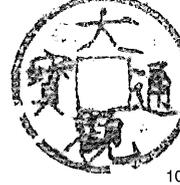
107-11



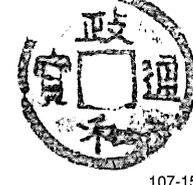
107-12



107-13



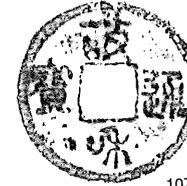
107-14



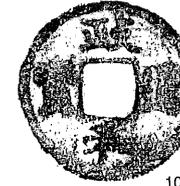
107-15



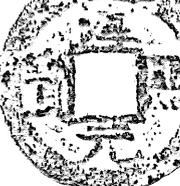
107-16



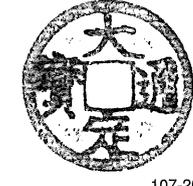
107-17



107-18



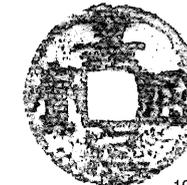
107-19



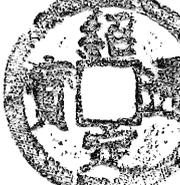
107-20



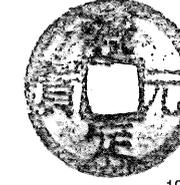
107-21



107-22



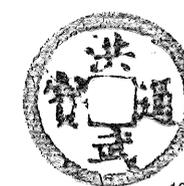
107-23



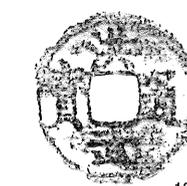
107-24



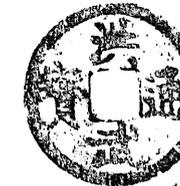
107-25



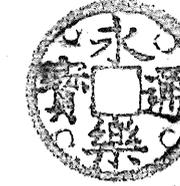
107-26



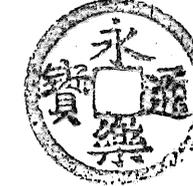
107-27



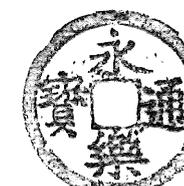
107-28



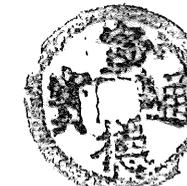
107-29



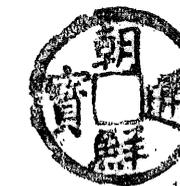
107-30



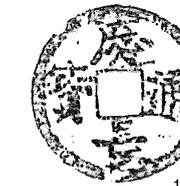
107-31



107-32



107-33



107-34



107-35